收容書目

田租考
平理策
破レ家ノツヾクリ話
田制泝源考
經地解義
醫稻性辨
經典穀名考
田園地方紀原
濟時七策
齋庭之穗

日本經濟叢書

卷二十一

日本經濟叢書刊行會

日本經濟叢書卷二十一目次

一田租考　栗原柳庵著　一頁
一平理策　丹羽昻著　四一
一破レ家ノツヾクリ話　新宮凉庭著　五一
一田制泝源考　日吉偉三著　一一五
一經地解義　下坂𨓁著　一九五
一譬稻性辨　山田文靜著　二四七
一經典穀名考　同著　二五七
一田園地方紀原　朝川善庵著　三三五
一濟時七策　同著　四三九

一齋庭之穂　　　　　　　　　　　　四六九

目次終

解題

田租考

本書は初めに大寶令及其他田令に依る、租調庸表及諸國より貢納する、物料の品目、量數表并に文祿の租法に關する表等を掲げ、本文には日本書紀及類聚國史其他諸書より、田租に關係の文句を抄出して、精細に之を考證したるものなり、德川時代の經濟書中、田租を考證したるもの頗る多く、現に本叢書に收容したるものゝ中にも、此の類の著作大多數を占め、往々稀本珍籍とするに足るものなきにあらざるも、其內容は大抵大同小異にして、特に注目に値ひするもの少きが如し、然るに本書は博識を以て有名なる栗原信充の筆に成れるものにして、其の考證の正確なるは他書の比すべきにあらず、又本書は著作の年月詳ならざれども、自序に文政八年とあるを見れば、蓋其頃の著作

なるべし

著者栗原信充、字は伯任、通稱は孫之丞、柳庵と號し、晩年薙髪して、又樂と稱す、幕府の家人なり、少くして屋代弘賢の門に入り和學を修め、博識該通、專ら意を本朝の古典に留め、遂に故實有職家を以て知らる、寛政六年江戸に生れ、明治三年京都一條大宮に歿す、著す所は官位令講義五卷・軍防令講義八卷・鎌倉制度考四卷・室町制度考六卷・古器圖編五卷・同圖式二卷・鞍鐙新書十卷・上野國誌稿七十二卷・同國產志四卷・法隆寺寶物考證二卷・武林法量叢書三十六卷・重修眞書太閤記三百六十卷・日本外史正誤四卷、其の他故實に關する著書隨筆等頗る多し

本書の原本は宮崎幸麿氏の珍藏せらるゝを借寫したるものなり、此に記して氏の厚意を謝す

平理策

本書は主として代官庄屋等の選任を、愼重にせざる可らざる事、及其の職務心得方等を、親切に說述したるものにして、書名に所謂平理とは、本書の冒頭に引用せる、漢の宣帝の語に、政平訟理云々の言あるに基きたるものならん、僅々數頁の小册子なれども、一讀の價値あるものあり、就中米價を人力にて上げ下げするむつかしき事を述べ、又細井平洲の政事のやり方の誠實ならざる事を、處々に香はしたるなど、一寸注目すべき談柄なり

著者丹羽勗、字は子勉、通稱嘉六、盤桓子と號す、尾張の人なり、平生字を善くするを以て名を知られ、遂に藩の奧右筆となりしが、其人となり、恭謙退讓にして、頗る君子の風あり、學術文章又大に時流に超絕したるも、區々たる書名の爲めに掩はれて、世上多く之を知る者なきは編者の遺憾とする所なり、天保十二年家に歿す、年六十九

破レ家ノツヾクリ話

本書の由來及題名の事は、著者の友人にして、校正出版者なる九方生の叙文と、著者の題言とに明かなるが、其の內容は經濟篇・政事篇、及吏術篇の三篇に分ち、上卷は經濟篇、中卷は政事篇、下卷は政事篇と吏術篇とを、論じたるものにして、其の大體は先づ上卷には、最初時弊論として、諸大名の財政困難の狀態を說き、當局執政の無能、君主の暗愚を指摘し、其れより勘定奉行の選方、勝手向の事に當る者の、堅實剛毅ならざる可らざる事、金銀の融通及銀主を選まざる可らざる事、幷に銀札米札及廻米の利害等を、最も痛切に論述し、中卷には、國事に任ずる重役は、人物の選擇を先務とし、無能若くは惡竦の人を登用するは、國君の耻辱なる事を說き、其れより節制簡易を以て、善政の奧義とし、賞罰を正し、節義を厲まし、農業及產業を奬厲するを勉めとし、固く賄賂を禁じて、國政の基本を確立すべきを論じ、下卷には上は諸侯より家老・側用人・目附役等に至る迄の心得方を詳述して、中卷に論ぜる政事篇の不備を補ひ、最後に吏術篇として、訴訟裁判上に關する心得方よ

り、郡奉行·町奉行の心得方、及收納米取扱方の心得等を詳細に論評したるものなり、著者が自ら其の題言に云へるが如く、所論稍〻矯激に渉るの嫌なきにあらざるも、兎に角當時の政治經濟論としては、頗る參考に資すべきものの一なるや、疑なかるべし

著者新宮凉庭は丹後の人なり、少きより京師に出でゝ、醫を學び、其の術大に進み、遠近治を請ふ者頗る多く、遂に之に依て巨萬の富を爲す、然れども凉庭は平生俗醫を以て自ら居らず、慨然として國を醫するの志を抱き、本職の暇、刻苦儒學を修めて、遂に大成する所あり、乃ち洛東南禪寺境內、幽寂の地をトして、順正書院なるものを造り、其の庭園には多く花卉藥草を植ゑ、其の文庫には儒籍と醫書とを收藏し、其の學堂に於ては、每月數回洛中の名儒大家を招聘して、經史を講演せしめ、門戶を開放して、廣く有志者に聽講を許し、以て無資の學生をして、其の業を成さしむるの便を與へたりと云ふ、篠崎小竹の記する所に依れば、凉庭は「以醫術成」名致」富、旣慨然而嘆曰、豪奢

佚樂、性所ㇾ不ㇾ好、然積而不ㇾ散、非ㇾ守錢奴ㇾ乎、於ㇾ是獻ㇾ醫國之策於諸侯、而時助ㇾ其國用ㇾ焉」云々とあり、又奇人なりと云ふべし、凉庭名は碩、驪堅齋、又鬼國山人と號す、嘉永七年一月歿す、歳六十八、著す所本書の外に、驪堅齋詩文集若干卷あり、大正四年正五位を贈らる

（注意）本書著作の年代は詳ならざれども、九方生の叙に弘化丁未（四年）とあれば、本書も亦天保の末年か、若くは又弘化の初年の著作なるべし、而して此に一の注目すべきは、本書は編者の知る所にては我邦に於て、政事と經濟とを、分別したる權輿なるが如し、其の分類の内容は、稍〻混同して、明晣を欠くの憾なきにあらざるも、先づ第一に政事と經濟との區別を立て、次に政事の中より、專ら吏務に關する實際上の事を吏術篇として分類したるが如きは、從來の著書に未だ曾て見ざる所なりとす、著者の卓見なる此の一事を以て徵すべし

田制泝源考

本書は提封・井里・溝洫・分田・賦稅・戶口・邦國・都鄙・田祿・嘉量・粟米・及尺度の十二項に分類して、井田の算法を詳にし、之に附するに圖解を以てして、通曉し易からしめたるものなり、著者の云ふ所に依れば、其の所論は專ら周禮に據りて、其の誤謬を訂正し、且孟子王制などを參考して、算數を明確ならしめたる由なれども、漢儒の通弊として、全書悉く漢文にて之を論述し、文章用語等、往々不明の點あることを免かれざるは、漢文に嫻れざる編者などの甚だ遺憾とする所なり

著者日吉倖三は、江戶の儒生なれども、其の傳詳ならず、和氣柳齋の序文に依て推察すれば、同人の門下生らしく思はるゝも、明ならず

經地解義

本書は周禮を始め、經史其の他の典藉より、軍賦田制等に關する諸說を引證して、周禮軍賦總論並王圻軍賦論・六鄉・廛里以下九等之田・六遂・都鄙四處公邑・餘夫圭田・溝洫之制・井田之制・授田三等・稅法輕重之等・軍制・車之卒伍・辨可任（以上上卷）軍將・調發臨敵不同制・邦國鄉遂之軍・邦國境內之軍・邦國鄉大夫家軍制・魯齊晋軍制・井田溝洫名義・古尺幷本朝田制及本朝軍制大略（以上下卷）の各項に分ちて詳論したるものなれども、漢儒の例の井田軍賦論と、大同小異なるが如し

著者下坂韙は、其傳詳ならず

譬稻性辨

本書は人性を稻性に譬へて、說明したるものにして、其の實經濟書にあらず、一種の倫理書なるが如くなるも、老農の稼穡談を本とし、專ら稻禾の耕作培養法を述べ、勸善の旁ら兼又勸農の意を寓したるものなり

著者山田文靜、通稱は莊左衞門、字は太古、松齋又寶善堂と號す、信濃の人なり、天保十二年、年七十二にて歿したる由なれども、其の傳詳ならず、著す所は、本書の外に、下記の經典穀名考あり

經典穀名考

本書は支那の經史に現はれたる穀名を解釋して、一々其の出處證據を示し、併せて諸書の誤謬を訂正したるものにして、本叢書第十九卷に收容せる龜田鵬齋の著黍稷稻粱辨と、略〻類似の書なれども、本書は更に一層詳密に之を解釋し、且附錄として、明の徐光啓の著したる農政全書中、穀部上下二卷を合刻したるは、注意到れりと云ふべし、賴山陽本書に序して「天下不レ可レ無二此之書一」なりと云へり、又以て本書の價値如何を、推知するに足らん

(注意) 本書及前記譬稻性辨は、曩に內田博士が公にせられたる「德川時代に於ける支那經濟史の研究に就きて」と題する論文中に詳く批評を試みられた

り、之を一讀すれば得る所、鮮なからざるべしと信ず
本書は內田博士の珍藏に係る板本を借寫したるものなり、此に附記して博士の厚意を謝す

田園地方紀原

本書は我國古今の諸書に徵して、田制租法の沿革を考證したるものにして、第一は代之考、第二は町段畝步之考（以上上卷）第三は貫幷貫高之考、第四は永幷永高之考、第五は村高之考、第六は石高之考（以上下卷）の各條に分類して、最も簡明に記述せり、而して其考證の精核にして、大體の要領を盡くせること、本書の右に出づるもの多からざるは　學者間に定論のあるあり、必ずしも編者の言を待ざるなり、然れども本書は流傳の寫本、頗る粗笨にして、現に日本文庫第十二編に收容しあるものも、誤謬脫漏、更僕に遑あらず、依て編者は著者の孫、片山修堂氏の門人林谷碩氏が珍藏せらるゝ著者自筆の原本

を借寫して、之を底本となし、更に嚴正に校正したるを以て、幸に原著の眞面目を完うし、玆に始めて善本の世上に現はるゝに至りたるは、編者の滿足する所なり

著者朝川善庵、名は鼎、字は五鼎、善庵は其の號、江戸の碩儒片山兼山の季子なり、兼山歿して四子皆幼なり、母氏依賴する所なし、乃ち之を携へて醫人朝川默翁に再嫁す、默翁四子を撫育すること、所生の如くし、最も其の季鼎を愛す、漸く長ずるに及び、親ら句讀を授け、訓督殊に嚴なり、年甫めて十二、山本北山の門に入れ、經史を修めしむ、年長じ學益〻進みて、其の名遠近に聞え、諸侯贄を執て、之を禮遇するもの頗る多し、文化十二年、淸國船漂流して、豆州下田港に來る、言語通ぜずして、其の狀を得ず、縣令江川氏善庵を招きて、筆談應對せしむ、善庵能く其の任を完うして、國體を辱めず、金帛若干を賞賜せらる、弘化三年幕府の召を辱うし、謁を賜はる、世之を物茂卿以來の殊遇となす、嘉永二年二月病んで歿す、年六十九、著す所は本書

及下記濟時七策の外、周易愚說二卷・易說家傳舊聞四卷・詩書困知說六卷・左傳諸注補考八卷・論語漢說發揮十卷・孝經證注・古文孝經考異・古文孝經私記・訂正孝經孔氏傳各二卷・荀子箋釋八卷・大學原本釋義一卷・仁義略說一卷・刪定紀効新書六卷・下田記事四卷・善庵隨筆二卷・善庵文鈔八卷・同詩鈔二卷・樂我堂集二十卷・其他十數種あり・諸家著述目錄其他に善庵の著作として、分田備考三卷を列擧しあり、又現に大家諸先生の著作中に、往々分田備考を引用しあるも、今編者が㭋谷氏珍藏、著者自筆の分田備考を、本書田園地方紀原に對比するに、多少字句の異同あるも、其の內容は、全く同一書にして、備考は地方紀原の草稿本なることを確めたり、依て注意の爲め玆に此事を附記す

濟時七策

本書は御仕置之事・白銀之事・運上之事・小普請御旗下方之事・御貸附金之事・荒地之事及人別之事の七問題に關し、幕府の執政に奉呈したる意見書なり、各

篇の主意は最も簡明にして、能く其の要領を盡くし、當時の學者の意見とし
ては、頗る眞面目の議論にして、實際に適切なるもの多し、先づ第一篇の仕
置を論じたる條にては、罪人を追放又は入墨にする事を非なりとし、大概の
罪は徒刑に處して、囚徒に城池の普請及び種々の工職を授くるの必要を述べ、
第二白銀の條に於ては、其時行はれたる白銀は、純銀の量目多くして、貨幣
として使用するより、鑄潰して地金とする方が利益なるより、自然奸商など
は、之を鑄潰すの弊あるに付、漸々之を引上げて、南鐐銀に吹替べきを論じ、
第三は運上の條にて、今日所謂消費税、即ち商品に運上を掛けて、其の代價
を高めしむるは、一般士民の爲めに不利益なりとて、之に反對し、第四の小
普請御旗下方の事に付きては、小普請旗本の小祿者、即ち千石以下の者など
に、祿を給はるに、知行高を以てするは、公儀の爲めにも、又當人の爲めに
も、兩損なれば、此等には以後御藏米を以て給與すべしと主張し、第五御貸
附金の條に於ては、元來御貸附金なるものは、諸士の貧困を救濟するの目的

に出でたるものなれども、今や全く其の主意を忘却し、二重にも三重にも、ヤタラに借入れ、甚だしきは段々後には、鐵面皮に借り入れを出願する事が出來ざるより、周旋人に依賴し、莫大の禮金を出して、役人と結托し、詰り多額の費用を掛けて借入るゝ事となり、其の結果宛も高利を借入るるが如き弊害ある事を喝破し、第六、荒地の條に於ては、代官等の惡弊として、彼等は百姓より、少しにても多額に取上ぐるを以て、御奉公と心得、定免の地には、年季切上げと稱して免を上げ、撿見の地には出來方、最上の場所を見立てゝ、取個を強くするなど、剖克收斂至らざるなく、遂に之が爲めに、百姓は誠實熱心に、農事を勉厲する事を爲さず、田地を持て居ても、面白からざる感をなし、次第に居村を離散して、少しく資力ある者は、江戶へ出でて、商店を開き、資力の乏しき者は、近邊の宿場などへ行つて、小商內か日雇稼に、成行く樣の傾向ありて、農村は年々歲々、荒蕪に歸する事を痛論し、第七、人別の條、卽ち最後の條に於ては、從來人別の調なるものは、年々に行はるゝ

も、皆甚だ粗漏を極め、唯々家々の申出に依て、其の家内の人數を書き上ぐる迄の事にして、少も當てになりたる事にあらず、之に加ふるに他へ移轉する者ありても、舊住名主家守より、受方の名主家守へ引續くなどの手續もなければ、是迄何處に、どうして居つたものやら、更に分らず、又彼の出家・虛無僧・穢多・乞食などは、夫れ〴〵支配人あつて取締居るも、儒者・醫者・書家・畫家・算術師・卜筮師の如き浪人、及普通の士人にても、武家屋敷地借りの者共は、總て悉く人別外として、何等の調査もなければ、取締りもなく、全然放任しあるを以て、彼等が社會の爲めに、種々の危害を生出するの根本なる事を詳述したるものにして、其の意見中、往々取るべきもの少なしと爲さゞるなり、大村某の撰みたる善庵の傳記中に、左の一節あり、以て本書の由來と、其の所論が如何に時事に適切なりしかを推知するに足らん

參政貝淵侯臣大野勘平、語先生欲有所建白、宜條列以進、先生雅以經義經濟自任、乃欣然獻其所畫濟世七策、貝淵侯上之堂老福山相公、編者案ずるに

阿部正精なるべし）相公欲レ署二支配勘定一固辭、侯乃封二還其書一且曰、所二條奏一當二施行一謹勿レ有二洩漏一云々

而して阿部正精は、文政六年を以て職を罷む、濟時七策當時に行はれずと雖も、幸に今日之を洩漏するものあつて、乃ち學界の好資料となる、又奇なる哉

桝谷碩氏は、本書及前記田園地方紀原を收容刊行するに當り、種々の資料を貸與せらる、玆に附記して、その厚志を謝す

齋庭之穗

本書の著者は判然明確ならざれども、其の論ずる所、多くは時事に適切にして、參考するに足るもの少なからず、初めには常平倉の事を述べ「大坂御治世の折（豐臣氏の時を指ならん）は大略米一石ノ相場、大坂ニテ銀六十目ナレバ、總國トモ安穩也、然ル處六十目ヨリ下リ候年ハ、御買被レ遊、上リ候年

ハ、御賣被」遊候由故、常々六十日ニテ、居リ候トカ申候」云々と云ふの事實より述べて、日本の總石高及收納米の高を掲げて、大坂の御藏入米の高に論及し、それより又堂島米相場の事を詳述し、續きて又諸國より大坂へ輸送し來る廻米高を計算して、其の得失を論じ、又次ぎには金銀の民間に必要の量數は、年々田畑に生産すべき五穀の高に比準せざる可らざる事を主張し、又武士と農民と商工との間に於ける金銀の額は、一定の割合無かるべからざる事を論斷したるなどは、チト迂遠に類するかと思惟すれども、兎に角此等の複雜したる問題を捉へて、縱横に論述したる中に、往々卓見として取るべきものなきにあらず、之を要するに、本書は其の體裁諸士の穀祿及米價相場等に關する、雜考の如くなるも、其の實は主として常平倉の仕方に依り、小民を救濟せんとするものにして、其の文體より之を察すれば、執政にでも奉呈したるものなるが如し、但し本書の題名「齋庭之穗」とは國史神代の古事に據り「清淨なる食料」と云ふの意味なる由、本書の末文に記せり

（注意）本書の底本は、博文館發行日本文庫本にして、同文庫第四編に著者不詳として收容する所なれども、今編者の推定に依れば、著者は京都上賀茂の社人、梅辻飛驒守なるべしと推定す、其の故は本書中に「當七月中支配御奉行所へ進達仕候愚作蟻の念ト申書中ニ相認メ候」云々の語あり、乃ち「蟻の念」なる書は、農務局纂訂の農事參考書解題に、梅辻飛驒守の建白書にして、印幡沼の事、市民救濟の事等を記したるものなりとあり、此の建白書「蟻の念」は、本書中御奉行へ進達したる愚作「蟻の念」と云へるものと、全く同一書なることは、疑を容れざるが如し、本書に當七月中とあるは、天保十四年七月の事にして、農事參考書解題には、單に天保年間とあるも、此の解題に所謂「蟻の念」は、天保十四年の著作なることは、是れ又他に明確の證據あり、それは他にあらず、編者が舊來收藏せる「蟻の念」なる一寫本は、農事參考書解題に記する通り、印幡沼の事、市民救濟の事等を論じたるものなるが、書中に、昨寅年云々の語あり、世に云ふ寅年とは、天保十三年を指したることな

れば「蟻の念」の著作が、其の翌年、即ち天保十四年なることは、疑ふの餘地なきなり、然るに此に一の疑點の存するは、此の「蟻の念」なるものが、農事參考書解題の記するが如く、果して梅辻飛驒守の建白書なるや否にあり、編者收藏の「蟻の念」は、著者の名を署せざるも、其の書中に「太平の船歌と題し、小本一册幷水揚仕方一册、印幡沼開發一件別記一册、都合三册、松平伊賀守殿寺社御奉行御勤役中、昨寅年五月進達仕候」云々の事あるに付、更に國書解題を調査したるに、同書印幡沼開發參考(一六一一頁)の條下解題中に「太平歌を掲げ、又同沼開發記、水揚仕方等、いづれも該沼開墾の急務を切論せり」となし、而して其の著者は立川小平と記せり、今此の解題の文に依れば、立川小平なる人が著はしたる印幡沼開發參考なるものは「蟻の念」の中にある記事と、如何にも符合し居つて、彼も此も同一なるが如くに思はれ、隨て此の「蟻の念」も亦、立川小平なる人の著作なるかとも推定せられざるにあらざるべし、要する所「蟻の念」の著者が、梅辻飛驒守か、立川小平なるかの問題

なれども、編者の想像にてに、「蟻の念」の著者は、矢張梅辻氏にして、隨て本書齋庭之穗も亦梅辻氏の著作なること、殆ど間違なかるべしと信ず、因て左に梅辻氏の略傳を記して、參考とすべし

梅辻飛驒守、名は規淸、對翁と號す、又齋守翁、三年翁等の別號あり、世々上賀茂の社人にして、文化十年從五位下に叙し、同十四年從五位上に進む、規淸平生心を神道・國學・天文・曆數の學に用ゐ、好んで諸國を遊歷して、万物の神祕を研究し、旁ら神道敎法の事に從事し、又常に勤王開國の志を抱き、曾て神祇官再興・國學復興・海防策沼池開發・河底浚・防火線・金融・貧民救助・無賴漢放逐・植物農業・米相場等の數目を擧げて、專ら經濟に關する事を論究細記して十册となし、之を時の執政に獻策する所ありと云ふ、本書及「蟻の念」の如きは、或は此の十册の一部分なるやも知る可らず、弘化年中、江戶に移つて、家を下谷池の端に定め、瑞鳥園と號して之を神道敎法の本社とし、又別に中橋及京橋に二個所の支社を置きて、講筵を開き、民庶を敎導せり、幾も

なくして教法大に廣り、門弟信徒、盛に集りて、其の數實に何千人を以て算し、百五十餘名の諸侯を始め、其他學者・神官・諸士・劍客・力士・農工商・落語家・俳優等到らざる者なく、會堂日夜、鐸聲絕えず、屨履常に戶外に溢る、於此遂に幕府の忌諱に觸れて、獄中に投ぜられ、糾問數月の後、八丈島に配流せらる、規淸配所に在て、益〻其志を固くし、島民を敎育するの旁ら、敎書一百卷を著す、居ること十四年、年六十四にして島中に歿せり、實に文久元年七月なりと云ふ

（附記）「蟻の念」は未だ校訂の暇あらず、追て後卷に收容すべし

大正五年二月　　　　　　　　　　瀧本誠一

解題終

田租考

栗原柳庵著

田租考叙

田租之法、初見二大化改新之詔一、爾後白雉・大寶・慶雲之際、增減損益、一因二田步廣狹不同一、然而是惟其口分田・位田・賜田・職田等之賦、而其大稅之法、固與レ是殊別、延曆十六年之勅、舊法收レ七免レ三云、其或謂大寶之時、以爲二舊法一乎、當時改爲二不二收八一、未レ幾復爲二舊法一、遂以及二乎延喜之時一也、然惟此際、田有二正稅租地子之三法一、通二計其所一レ獲、則農與レ官三二分之一、一歸二於官一、二入二乎農一、右大將賴朝、始置二郡國守護一、以處二捕逃一、從レ是稅租以下之法、國司祗承、而兵馬之權、落二乎守護一、以二便宜一收錢代レ穀、於レ是賦斂之名一變矣、爾後海寓煩擾、强暴之政、侵奪是務、然比二之前法一、大抵稅租之輸、寖而祗用二兵馬之賦一、其收斂之目頗輕、是蓋兵焚之際、不レ得レ止之法而已、文祿改レ制、則今用レ之、郡國之吏詳レ之、然不レ暗二其所一レ由、故就二古實一以正レ之、然是其梗概耳、他日有二思得一、則再草レ之云爾

文政八年十一月四日

古今要覽編修主事　栗原信充自書

大寶略私田

	口分賜田位田職田之類	同上未授之間	一戶一丁中男
一段	正稅 三十五束	租 二束二把	地子	調	庸
方尺	五五五不盡 米二勺七撮餘				
一步	一把三六八不盡 米六合九勺四撮餘				
十步	一束三把六八 米六升九合四勺餘				
百步	十三束六把八 米六斗九升四合				
三百六十	五十束 米二石五斗		隨鄕土法		

慶雲田租法

	正稅	租一束五把	地子	調	庸
方尺	米二勺七撮餘				
一步	米一升				
十步	米一斗				
百步	米一斛				
三百六十	米三斛六斗				

延喜田租法

	正稅						地子	一丁調	一丁庸
方尺	上田	中田		下々田			五分一		
一步							五分一		
十步							五分一		
百步							五分一		
左右京五畿內								輸錢時增減	同上
外國逃亡居畿								錢三百五十文	百卄五文

物直價

稻	一束五把	二束	二束五把	三束	四束	五束	六束	七束	七束五把
調布一段									
庸布一段									
絹一									
綿一屯				畿內					
絲一約							畿內		
鐵一廷					安藝、出雲、石見、隱岐	讃、伊與、但馬、備中、伊豆、近江、美濃、上野、下野	讃阿予以下十一口佳若越前加能越後	佐渡	越中
鍬一口	越中	出雲、石見、隱岐、越後、佐渡	上野下野	畿內					
馬									
	諸								

兩面	雜羅	三色綾	絹絁	廣絹	長絹	長幡部	綿紬	貲布	望陀貲布	細貲布	小堅貲布
五尺四寸五分四十一丁成疋	二丈三丁	一丈五尺四丁	一丈五尺四丁	一丈一尺四寸四丁	一丈五尺五丁	一丈二尺五丁	一丈三尺五寸	一丈五寸四丁端	二丈四丁	二丈一尺六寸	二丈六尺六寸

八束	九束	十束	十一束	十三束	十四束	十五束	十九束	廿束	三十束	四十束	五十束
						畿内			伊賀伊勢志摩相摸	太宰管内	陸奥出羽
	畿内							伊賀伊勢志摩相摸	太宰管内陸奥出羽		
									畿内		阿波
信濃上野下野				陸奥		出羽					
紀藝雲石隱但備中尾	安下常越後佐渡丹波丹後	伊與太宰管	備後			陸奥出羽					
紀伊					陸奥出羽						
				國							
薄貲布同上	望陀布一丈四尺	廣布	細布二丈一尺二寸	倭文調布一丈四尺三寸	狭布一丈二尺三寸三分	上絲四兩	中絲五兩	麁絲七兩	疊綿二帖三兩十分二朱帖	細屯綿二屯	銀一分
	布一丈四尺					上絲二兩	中絲二兩二分	麁絲三兩二分	綿五兩二分		

六十束	伊賀伊勢志摩相摸	調	鐵二廷十六兩斤		
七十束	越中越後佐渡		鍬三口	椽	四斗五升
八十束	太宰及管内遠江甲駿武總房常		燈盞二百口		
九十束	信濃上野下野		米六斗	米	三斗
百五十束	出羽		鹽三斗	鹽	一斗五升
百六十束	陸奥		海石榴油一升二合	藍	三斗三升三合三勺
五十五束	土佐伊與讃紀藝出	穀	米舂米 大炊式供御料稲粟並用官田其舂得米一束二把五升糯米亦同一人日舂三束トアルニヨリテ訓ル		
	雲石隱丹因伯播美	束	穀	米	舂
	作備前後周長淡但	一束二把	一斗二升	六升	五升
		一束	一斗	五升	四升一合六勺餘
		十束	一斛	五斗	四斗一升六合餘
		百束	十斛	五石	四石一斗六升六合餘

治部式

絹	調布	庸綿	商布
一疋	三端	十五斤	
二疋	六端	卅斤	
三疋	十端	五十斤	
	一端	五斤	
	二端	十斤	
		二斤	一端

獲稲五十束	正税公廨守護給地頭得分農民産
方尺	
一歩	
十歩	
百歩	
三百六十歩	七束八把有奇 今二斗六升一合有奇
	七束八把有奇 今二斗六升一合有奇
	三百文
	十六束六把有奇 今五斗二升二合有奇
	十六束六把有奇 今五斗二升二合有奇
一町	
二町	
三町	
四町	

五町	官駄一疋夫二人

文祿租法	方尺地所獲米	一步方六尺 尺積三十六	十步	百步	三百步	一段即一町之十
石盛二十	一勺八撮五有奇	六合六勺六撮不盡	六升六合六勺六撮不盡	六斗六升六合六勺不盡	二石	收一石
十九	一勺七撮五八六一	六合三勺三撮不盡	六升三合三勺三撮不盡	六斗三升三合三勺不盡	一石九斗	收九斗五升
十八	一勺六撮六不盡	六合	六升	六斗	一石八斗	收九斗
十七	一勺五撮七二二	五合六勺六不盡	五升六合六勺不盡	五斗六升六合六勺不盡	一石七斗	收八斗五升
十六	一勺四撮八	五合三勺三不盡	五升三合三勺不盡	五斗三升三合三勺不盡	一石六斗	收八斗
十五	一勺三撮八八	五合	五升	五斗	一石五斗	收七斗五升
十四	一勺撮九六一六六不盡	四合六勺六不盡	四升六合六勺六不盡	四斗六升六合六勺不盡	一石四斗	收七斗
十三	一勺撮一〇六六不盡	四合三勺三不盡	四升三合三勺不盡	四斗三升三合三勺不盡	一石三斗	收六斗五升
十二		四合	四升	四斗	一石二斗	收六斗
十一					一石一斗	收五斗五升
十					一石	收五斗
九		三合	三升	三斗	九斗	收四斗五升
八					八斗	收四斗
七					七斗	收三斗五升
六		二合	二升	二斗	六斗	收三斗
五					五斗	收二斗五升

四				四斗收二斗
三	一合	一升	一斗	三斗收一斗五升

金	一兩銀	三兩銅	九兩		
金	二銖六不盡銀	八銖銅	一兩錢	十文	
	銀錢	十文	和同開珍	四十文	
金錢	一文銀錢	十文		千文	萬年通寶百文

田租考標目

大化二年、改二新租法一五尺一步、三百六十歩一段
白雉三年租法六尺一步、三百六十歩一段
大寶田令租法五尺一步、三百六十歩一段
段地穫二稻五十束一
口分田晴作功料
慶雲三年租法同二百筆一
栢植郷解作料
延暦十六年、收レ八兎レ二法
又十九年、收レ七兎レ三法
貞觀四年、增二加租法一
延喜式地子法
延喜式租法

國司公廨處分法

一貫文、籾四斛

守護職兵粮米、段別五升法文治元年

淡路守護職文書

大番役段別三百文、五町官駄一疋、人夫二人文應□年

百貫文地頭

明德五年、年貢目錄

應永十七年、地檢目錄段別三百文ノ證

三河國明眼寺文書段別三百文ノ證

長曾我部元親百箇條田地六尺五寸ヲ用ヰザル事ヲ證ス

田租考

栗原信充　著

日本書紀曰、孝德天皇、大化二年、春正月、甲子朔、宣二改新之詔一、其三曰、凡田三十步、廣十二步爲レ段、十段爲レ町、段租稻二束二把、町租稻二十二束

信充案ニ、皇朝田賦ノ制度、初テ此詔ニ露見ス、是ヨリ前ノ制度、其如何ト云コト考ルニ據ナシ、抑大化二年ハ、唐貞觀二十年ニ當ル、唐ノ田制ヲ考ルニ、六典、戸部ニ、「凡天下之田、五尺爲レ步、二百有四十步爲レ畝、百畝爲レ頃」ト云、畝頃ノ名アリ、町段ノ法ナシ、然ラバ唐田制ニ據ラレシニモ非ズ、通雅ニ、「賓儀云、小畝步百、周之制也、中畝二百四十、漢之制也、大畝三百六十、齊之制也」ト見ユ、然レバ爰ニ三百六十ヲ用ラルヽモ、其大畝ノ法ニ原ヅカレシニヤ、然ラバ其尺度モ、亦高齊ノ尺ヲ用ヰラルベキニ、其尺ハ唐大尺ヲ用ヰラル、蓋高齊ノ尺度得難カリシ故ナラム、其唐ノ大尺ヲ用ヰラレシト云ハ、大寶令ニ載スル租稻モ、爰ニ載スル租稻モ全ク同ジキ時ハ、令ニ所謂ル「長三十步、廣十二步爲レ段」ト云モ亦同ジキコト知ベシ、令ノ一步ハ大尺方五尺ヲ用ヰルコト、雜令ニ見エタリ、然

レバ大化ノ時モ此ト同ジク、方五尺ヲ以テ一歩トセシナルベシ、其五尺ヲ以テ一歩トスルハ、即唐ノ制ニ因循セラレシガ如シ、此一歩方五尺ナレバ、十二歩ニテハ長六丈ナリ、三十歩ニテハ長十五丈ナリ、長十五丈ハ今ノ一歩頭、六尺ノ法ニテハ二十五歩ナリ、廣六丈ハ即十歩ナリ、是ニ依レバ、大化ノ時ノ一段ハ、今ノ二百五十歩ナリ。一町ハ二千五百歩ニ當ル

類聚國史（百五十九）云、白雉三年正月、凡田長卅歩爲レ段、十段爲レ町（段租稻一束半、町租稻十五束）

信充按ニ、是政事要畧ニ、「弘仁十三年十一月、勘ニ田租束積一事云々」、令前租法、「熟田五十代、租稻一束五把、以ニ大方六尺一爲レ歩、內得ニ米一升一（此大升也）二百五十歩爲ニ五十代一」トアル、是ナリ、然レバ大化ノ時ハ、五尺一歩ノ法ニヨラレ、白雉ノ時ハ、六尺一歩ノ法ヲ用ヰラレシ事ト聞ユ

田令云、凡田長三十歩、廣十二歩爲レ段、十段爲レ町、段租稻二束二把、町二十二束

信充按ニ田廣狹全ク孝德天皇ノ時ト同ジク、租法モ亦相同ジ、是ヲ義解ニ考フルニ、「謂、段地獲ニ稻五十束一、稻舂得米五升也、即於レ町者、須レ得ニ五百束一也」トアリ、大化ノ時モ、亦一段ノ地ニテ稻五十束ヲ得、米二斛五斗ヲ得ベシ、束二斛五斗ハ、穀五斛ニ當ル、五斛ヲ三百六十歩ニ分テバ、一歩ノ田ニ、一升三合ハ八勺八撮有奇ニ當ル、是ヲ二十五尺ニ分テバ、一尺ノ内ニ、五勺五撮有奇ニ當ル、即今田一歩三十六尺ノ内ニ、一升九合九勺有奇ニ及ブ、上上田ヲ獲ル處、如レ是ハ有難シ、如何ゾ上中下平進ヲ式トナシ、令ニ著シ、民ニ輸サシムベキ、是其量ニ古今ノ異アルコト疑ナシ、故ニ竊ニ唐

令ノ大升ヲ以テ、令ノ大升トナシ、五斛ノ穀ヲ校ルニ、今京升ノ二斛一斗七升七合三勺五撮有奇ニ當ル、即令ノ一尺地ニ、穀二勺四撮一有奇ヲ獲、一歩ニ六合零四撮有奇ヲ獲、是ヲ今ノ歩法ニ求ムレバ、一歩ニ八合七勺〇九四有奇ヲ得、一段ニ穀二斛六斗一升二合八勺二撮有奇ヲ獲、舂テ一斛三斗零六勺四撮有奇ヲ得ベシ、是所謂十三ノ盛ト云モノニシテ、今中田ノ法ナレバ、是ヲ平均ノ式トナストモ、公私ニ害ナカルベシ、是ヲ以テ考フレバ、大寶ノ時ノ大升ト云者、亦唐ノ大升ト云モノト同ジキコトト思ヘリ、唐ノ大升即チ今ノ四合三勺五撮四有奇ヲ以テ一升トスルト云フノ僞ナラザルヲ徴スベシ、然シテ租二束二把ノ穀二斗二升アリ、ツイテ米一斗一升ヲ得ベシ、即今ノ四升七合八勺九撮ニ當ル

又云、凡給ニ口分田ー者、男二段、女減三分之一 五年以下不レ給、其他有ニ寛狹ー者、從ニ郷土法ー、易レ田倍給、給訖、具錄ニ町段及四至ー

信充按ニ、口分田ハ有位無位ヲ云ハズ、貴賤尊卑ヲ論ゼズ、男女五歲以上ニ、法ノ如ク均シク班チ賜フ、其身亡スル時ハ、是ヲ公ニ還ス、既ニ是ヲ公ニ收ムル時ハ、是ヲ未授ノ口分田ト云、又公田ト云、是ヨリハ地子ヲ輸サシム、故ニ式ニハ、是ヲ穀地子田ト云、口分田ヨリハ租ヲ出サシム、故ニ輸租田ト云、男子口分二段ノ獲米五斛アリ、即今ノ二斛一斗七升七合三勺五撮有奇ニ當ル、是ノ田ヨリ二段ノ租二斗二升ヲ輸シ、全獲二斛零八升一合二勺一撮有奇アリ、是ヲ一年三百六十日ニ分

テバ、一日ノ食五合七勺八撮有奇ニ當ル、今五合ヲ一日トスルト幾シ、然ル時ハ二歩ノ獲米ヲ以テ一日ノ食ニ充テ、二段七百二十歩ヲ以テ一年ニ充テ、分タレシコト思フベシ、女子ハ三ノ一ヲ減ズ、即今ノ一斛四斗五升一合有奇ニ當ル、此内ヨリ租一斗四升六合有奇ヲ輸シ、全ク今ノ一斛二斗八升七合四勺有奇ヲ獲ル、是ヲ一年ニ分テバ一日ノ食三合八勺五撮有奇ニ當ル、是亦今ノ女口三合ト云ト、纔ニ圭撮ノ差ナリ、但易田ノ沒サヘアレバ、是ヨリ耗シキコトハ又有マジ、却テ其饒カナル時ハ、受タル人ノ得ニシテ、凶荒ナル時ハ租ヲ免ジ、又正税ヲ假貸セラルヽニ至ル、然レバ此際ノ祿產ヲ制スル寒儉ナルガ如シト雖ドモ、今ノ常秩アリテ口分ノ食ナキニ比スレバ、優ナルコトモ有ベシ、抑口分ノ法ハ、唐開元廿五年ノ令ニ、「丁男給二永業田一二十畝、口分田八十畝、其中男年十八以上亦依二丁男一給二老男篤疾癈疾一各給二口分田一四十畝、寡妻妾各給二口分田一三十畝」ト云ヲ取テ、別ニ法ヲ設ケラレシナルベシ

又云、凡位田一品八十町

信充按ニ、是亦口分ノ例ニシテ、八十町ノ地ヲ賜フナレドモ、一品ノ人自耕スコト能ハズ、便其位田ノ在處ノ百姓ニ是ヲ賃租ス、其賃租ハ鄕土ニ依テ高下アルベシト云ドモ、今大概ノ定ニ就テ料ニ、伊勢大神宮延曆儀式帳ニ、「神田合陸町九段、見佃御田二町四段、荒木田一町、申、治田一丁、並二町、御膳料四段、以二六把一爲レ束、所レ用稻一千六百八十束、作功料稻五百七十束町別二百四十束一トアリ、是作功料ト云ハ、百姓

ノ得分ヲ云、其法町別ニ二百四十束ト云ハ、五公五民ノ法ヨリ、少シ公糧多シト聞ユレドモ、大方此法ト思ベシ、然レバ八十町ノ見稲總テ四萬束アル、此ヲ一町二百四十束ノ法ニ率ヒ、一萬九千二百束ヲ功料トシテ、殘稲二萬零八百束ヲ收テ、粟二千零八十斛ヲ得ベシ、此二千八十石、舂テ千四十斛ヲ得ベシ、即今ノ四百五十二斛八斗一升二合有奇ニ當ル（三斗九升苞、千二百九十三俵二斗六升二合有奇ナリ）

二品六十町

信充案ニ、此見稲三萬束アリ、作功料一萬四千四百束ヲ除キ、一萬五千六百束ヲ收ム、此粟一千五百六十斛アリ、舂テ米七百八十斛ヲ得ベシ、即今ノ三百三十九斛六斗一升二合有奇ニ當ル（三斗五升苞、九百七十俵零一斗一升）

三品五十町

信充案ニ、此見稲二萬五千束アリ、作功料一萬二千束ヲ除キ、一萬三千束ヲ收ム、此粟一萬三千斛アリ、舂テ米六百五十斛ヲ得ベシ、即今ノ二百八十三斛零一升有奇ニ當ル（三斗五升苞、八百零八俵二斗一升有奇ニアタル）

四品卅町

信充案ニ、此見稲一萬五千束アリ、作功料七千二百束ヲ除キ、七千八百束ヲ收ム、此粟七百八十斛アリ、舂テ三百九十斛ヲ得ベシ、即今ノ百六十九斛八斗零六合有奇ニ當ル（五斗五升苞、四百八十五俵五升六合有奇ニ當ル）

正一位八十町

從一位七十四町

信充按ニ、七十四町、見稻三萬七千束アリ、作功料一萬七千七百六十束ヲ除キ、一萬九千二百四十束ヲ收ム、此粟一千九百二十四斛アリ、舂テ九百六十二斛ヲ得ベシ、即今ノ四百十八斛八斗五升四合八勺有奇ニ當ル（三斗五升苞、一千一百九十六俵二斗五升一合八勺ニ當ル）

正二位六十町

從二位五十五町

信充案ニ、五十四町、見稻二萬七千束アリ、作功料一萬二千九百六十束ヲ除キ、一萬四千零四十束ヲ收ム、此粟一千四百零四斛アリ、舂テ七百零二斛ヲ得ベシ、即今ノ三百零五斛六斗五升零八勺有奇ニ當ル（三斗五升苞、八百七十五俵一斗零零八勺ニアタル）

正三位四十町

信充案ニ、見稻二萬束アリ、作功料九千六百束ヲ除キ、一萬零四百束ヲ收ム、此粟一千零四十斛アリ、舂テ五百二十斛ヲ得ベシ、即今ノ二百二十六斛四斗零八合有奇ニ當ル（三斗五升苞、六百四十六俵三斗零八合ニ當ル）

從三位三十四町

信充案ニ、見稻一萬七千束アリ、作功料八千百六十束ヲ除キ、八千八百四十束ヲ收ム、此粟八百八十四斛アリ、舂テ四百四十二斛ヲ得ベシ、即今ノ百十二斛四斗四升六合八勺有奇ニ當ル（三斗五升苞、五百四十九俵

二斗五升六合八勺有奇ニ當ル

正四位廿四町

信充案ニ、見稲一萬二千束アリ、作功料五千七百六十束ヲ除キ、六千二百四十束ヲ收ム、此粟六百二十四斛アリ、舂テ三百十二斛ヲ得ベシ、即今ノ百三十三斛八斗四升四合八勺有奇ニ當ル三斗五升苞、三百八十八俵四升四合八勺ニアタル

從四位廿町

信充案ニ、見稲一萬束アリ、作功料四千八百束ヲ除キ、五千二百束ヲ收ム、此粟五百二十斛アリ、舂テ二百六十斛ヲ得ベシ、即今ノ百十三石二斗零四合ニ當ル三斗五升苞、三百二十五俵一斗五升四合有奇ニアタル

正五位十二町

信充案ニ、見稲六千束アリ、作功料二千八百八十束ヲ除キ、三千百二十束ヲ收ム、此粟三百十二斛アリ、舂テ百五十六斛ヲ得ベシ、即今ノ六十七斛九斗二升二合四勺ニ當ル三斗五升苞、百九十四俵二升二合四勺ニ當ル

從五位八町

信充案ニ、見稲四千束アリ、作功料千九百二十束ヲ除キ、二千八十束ヲ收ム、此粟二百八十斛アリ、舂テ百四十斛ヲ得ベシ、即今ノ六十斛零九斗五升六合ニ當ル三斗五升苞、百七十四俵九升六合ニ當ル

女減ニ三分之一ヲ

信充案ニ、女王ノ一品ハ五十二町二段八十歩、二品ハ四十町、三品ハ三十三町三段百二十歩、四品ハ二十町ヲ給スルナリ、正一位以下モ此例ナリ、或云、位田ハ田ヲ給スルニ非ズシテ、其田ノ見稲ヲ給スヘナラバ(本ノマヽ)如然ラバ一品ハ四萬束ヲ給シ、其粟四千斛、舂テ二千斛ヲ得、即今ノ八百七十斛八斗有奇アリ(三斗五升苞、二千四百八十八俵ニアタル)

従五位ノ祿四千束、其粟四百斛、舂テ二百斛ヲ得、即今ノ八十七斛八升有奇ニ當ルベシ、然レドモ位田ハ五位以下ニ給セズ、職分田ノ稲司主政主帳マデニ及ブト同ジカラズ、且田令ニ「當家之内、有ニ官位一及少ニ口分應受者一、並聽ニ廻給一」トアレバ、位田ハ田ヲ給スルコト疑ナシ、其收獲ノ多少ハ、百姓ニ賃租スルト、自耕耨スルトノ差別アルベシ、以上ニ云處ハ大概ノ定ナリ、此ニ泥ムコト無シ、職田ノ如キハ、其田ノ見稲ヲ給フナリ、其證ハ田令ノ外、「官新至任」者、比レ及ニ秋收一、依レ式給レ糧」トアリ、其義解ニ、「謂、秋前至レ任、年實未レ收、故比レ及ニ秋收一、量ニ給公糧一、假如乙中國守職田二町、准レ稲當ニ一千束一、新任守六月到レ任者、準下計年内所レ殘六月上、即給ニ稲五百束一之類甲也」トアルヲ以テ知ルベシ

續日本紀云、慶雲三年九月、遣ニ使五畿七道一、始定ニ田租法一、一町十五束、及點ニ役丁一

信充案ニ、大化・大寶ノ時ハ、租稲一町三十二束ナリ、然ルニ是ニ至テ、七束ヲ減ゼラレシ如ク聞ユレドモ、延喜式ニ、六尺一歩、五百六十歩ヲ一段トセシ時モ、亦一町十五束ナレバ、此慶雲ノ時モ六尺一歩ノ法ニテ、三百六十歩ヲ一段トセラレシナラン、其證ハ、令集解ニ、「古記云、和銅六年二月十

九日格、其度レ地、以二六尺一爲レ步者、未レ知三令格之趣并段積步改易之儀一トアリ、然レバ六尺ヲ步トスルコト、段々延喜式ニ先ダツコト二百年ナリ、但和銅六年ヨリ六尺一步ニナサシムニハ、慶雲ノ時此法有ベカラズ、抑田ノ廣、大化ノ時、白雉ノ時、全ク同ジクバ、其增減小數ニモ非レバ、民情ニ堪ベカラズ、白雉ヨリ以來十五束ヲ收メシ地ヨリ、廿二束ヲ賦サル、ト云ハ、是ヲ苛酷ナリト云ベシ、故ニ田步ニ大小ノ異ナルコト、疑可カラザルナリ、抑五尺一步、三百六十ノ租米一斗一升、是一尺地ノ租一撮二有奇ニ當ル、即是六尺一步ノ租四勺三撮有奇ニシテ、三百六十ノ租一斗五升八合三勺有奇ニ當ル、其八合三勺以下ハ、十數ナルヲ以テ是ヲ兔サレシナルベシ

又案ニ、政事要略ニ、弘仁十三年十一月、擱二田租束積一事云々、令前租法、熟田五十代、租稻一束五把、以二大方六尺一爲レ步、步內得二米一升一、（此大升也）二百五十步爲二五十代一、慶雲三年格云、准レ令、以二大方五尺一爲レ步、步內得二米一升一、（此升當二大升一）三百六十步爲レ段、段內得二米三百六十升一、實是大二百五十升也、置二二百五十升一、更置二一升二合一、加二二合四勺一、并得二一升四合四勺一乘ズ、如何ナレバ、大化ノ時ハ五尺ヲ一步トセラレ、僅ニ七年ニシテ六尺一步ニ改メラレ、又五十年ニシテ五尺一步トセラレ、其後五年ニシテ又六尺一步ヲ用ヰラル、ニヤ、恠シムベシ、只六尺一步ニテ獲ル處ヲ大升ト云、五尺一步ニテ獲ル處ヲ減大升ト云ハ、新奇ト云ベシ、試ニ令大升ハ五尺一步ノ法ナレバ、減大升トシテ六尺一步ノ大升ヲ料レバ、今ノ六合二勺六撮九七六ニ當ル（伊勢ニ十合升ト云フモノアリ、今ノ六合一勺一撮七三五有奇ニ當ル、安東郡專當沙汰文ニ見ユ、又）

春日神供升トテ、弘治年ノモノアリ、六合八勺有奇ヲ容ル、藥師寺ノ金伏升ト云モ、六合一勺二撮有奇ヲ容ル、恐クハ是政事要略ノ大升ナラムヤ然レドモ此說ノ如クバ、五尺步六尺步ノ差別ナク、一步一升ノ法ナレバ、三百六十步ニテ穀三斛六斗アリ、令ノ時ハ五斛ナリ、是減大升ナレバナリ、三斛六斗ヲ五十束ニ分テバ、一束ノ穀七升二合アリ、一束五把ニテ一斗一升アリ

柘植鄕長解　中當地賣買墾田　立券事

神田漆段上限東紀寺田　限西石部大萬呂田　限南京敢朝臣粳萬呂田　限物部廣萬呂田　部下

柘植鄕戶主　敢臣安萬呂之賣墾田者

付價錢捌貫天平勝寶三年、歲次辛卯年始當地作料一年直米四斛

下　略

信充案ニ、此解世人周ク知處ナルヲ以テ是ヲ略ス、但漆段ノ直米四斛ト云ハ、一段五斗七升一合四勺二撮有奇ニ當ル、是ヲ作料ト云ハ、見斛七段ニテ、八斛三斗三升三合三勺有奇アルベシ、一段一斛一斗九升零四勺有奇ヲ獲ベシ、即今ノ五斗一升八合一勺有奇ニ當ル、今ノ田法ニテ五ノ盛ト云モノニシテ、下々田ノ位ナリ

類聚國史八十三曰、延曆十六年六月庚申、詔曰、古者什一而稅、謂ニ之正中一、三代因循、頌聲作矣、國家薄ニ征利一レ農、勤ニ恤民隱一、是以制令之日、田一町、租定爲ニ廿二束一、其後有レ勅處分、減ニ一十五束一、以レ今況レ古、輕重相懸、而今民部勘租之例、通ニ計國中一、以ニ七分已上一爲レ定、所レ餘三分者、任ニ國司處分一、

如今諸國之司、偏執二此例一、雖レ遇二年豐穰一、全徵二其租一、而至下納レ官不上レ過二七分一、其所レ餘者、常事截留、農夫以レ之受レ弊、貪吏因レ玆擅レ利、興二言於此事一、乖二善政一、自今以後、收租之法、宜下計二人別所一レ營町段一、仍作二十分一、收レ八免レ二、其八分之內、計中損二四分一、若合門被レ害、產業全亡、如レ此之類上、具錄言上、然則人知二輸法一、獲レ免二枉徵之苦一、吏不レ私レ利、終杜二絕奸之途一、宜下班二告率土一知中朕意上焉

信充案ニ、制令之日、租定爲二廿二束一、後減爲二十五束一ト云ハ、數目ノ上ノミニテ是ヲ議セシガ故ナリ、五尺一步、六尺一步ノ別アルコトヲ勘辨セザルハ何ゾヤ、但大寶制令ノ日、田ヲ制スルニ神田・寺田・布薩戒本田・放生田・國司公廨田ハ不輸租田ト云、其獲稻悉ク本所ニ納ム、無主位田・闕郡司職田・闕國造・闕采女田・射田・公田・乘田ハ不輸租田ト云ハズ、地子田ト云、見任國造田・郡司職田・采女田・位田・口分田・墾田等ハ輸租田ト云、此外ノ田ヨリ收公スルヲ正稅ト云、令ニハ、正稅ノ免得ヲ詳ニセズ、又妄ニ收八ト云ハ、正稅田ノコトナリ、假令バ何國ニテモアレ、水田凡一百町アリ、其中十八町ヲ神田・寺田・布薩戒本田・放生田トシ、此獲稻ハ何束アリトモ、租稅ノ沙汰ニ及バズ、廿町ヲバ無主位田・賜田等トシ、此ヲバ地子田ト云、鄉士ニヨリテ沽賣一ナラズト雖ドモ、姑ク延喜式ノ法ニヨルニ、五分一ヲ收ムベシ、廿町上中下田平均シテ、八千束アルベシ、即チ六百束ヲ收公シ、六千四百束ヲ農夫ノ利トス、口分田・位田・職田廿町、町束十五束ノ租ヲ收公シ、凡テ三百束ナリ、此餘獲稻七千七百束ヲ、口分及ビ位職本人ノ給分トシ、此外殘田四十二町アリ、折テ廿一町ヲ正稅田トシ、

廿一町ヲ公廨田トス、此獲稻又上下平均シテ、一萬六千八百束アリ、是ヲ十分シテ八ハ、一萬三千四百四十束ナリ、是ヲ正稅公廨トス、公ニ收ムル處六千七百二十束ナリ、其餘ノ六千七百二十束ハ諸司ニ分ツ、此外ニ三千三百六十束ハ農夫ノ利トス、是ヲ合テ公ノ獲ル處、總テ八千六百二十束、農夫ノ利九千七百六十束アリ、其他猶口分及ビ作功料アレバ、農夫ノ利、百町ノ中ニテ一萬束ニ越ユ、然レバ今ノ五公五民ノ法ヨリ大ニ緩ナルナリ

類聚國史八十三曰、延暦十九年四月乙酉、公卿奏議曰、美濃國言、賀茂・可兒・土岐・惠奈四郡、居二山谷際一、土地磽确、雖下比二郡有上レ年、而損荒常多、通二計彼此一、僅爲レ得レ七、而余依二收八法一云云、伏請・賀茂・惠奈二郡同收レ六、土岐・可兒二郡得レ七、永爲二恒例一云々、賦稅之法、不レ可二一槩一、又依レ令、損田五分者免レ租、而今之所レ行、不レ勘二五分以下損一、計二人別所一レ營、一槩收レ八云云、伏望、改二新制一而收レ七、依二舊法一而免レ三、其不レ用二通計一、一依二新制一云云、五月癸丑、勅二天下一、田租改張、前例十分之內、免レ三收レ七云云

信充案ニ、是ヨリ前延暦十六年ニ、從前ノ法ヲ改メテ、免レ二收レ八ノ法ヲ設ケラレタリ、美濃國四郡、土地磽确ニシテ、收八ノ稅ニ堪ザルヲ以テ、改テ收六收七ノ二法ニ從ヒ、又其序ニ天下ヲ舊法ニ復セシメ、收七ノ定トナサルナリ、收七ノ定ニテハ、地子ト租稻トハ一束五把五分一ノ定ニシテ、正稅ノミ十分ノ七ヲ收ムルナレバ、收八ノ時、民ノ利九千七百六十束アレバ、爰ニハ一萬一千四百

四十束ニ及ブ、其餘猶口分ノ獲稲アリ、民ノ利蕃息ト云ベシ、此後又收八ヲ用ヰラレシコト有シト見ユ、「大同元年十一月己丑、天下諸國收租之法、復ニ不三得七之例一」トアリ

類聚國史云、貞觀四年三月廿六日甲午云云、今須下國内所レ有諸國、除ニ非賜田墾田一、其收租之法、皆增中於舊例上、京戸・士人・口分田、舊例段別一束五把、今增ニ加一束五把一、雜色田段別五把、因即京戸咸免ニ係分一、士人復係廿日

信充案ニ、是山城國内ノミ口分田以下租稲ヲ增加セラレン爲ナレドモ、亦以テ段別一束五把ノ法、慶雲ヨリ以來改メラレザルコトヲ思フベシ、其免三收七ノ法ハ、大同ノ後改易ラルヽコト無ク、安藝・周防等ノ國ノ如キ、或ハ四年ヲ限リ、或ハ三年ヲ限リ、免四得六ノ法ヲ設ケラレシコトハ有レドモ、諸國通計ノ定ニハ非ザルナリ、今爰ニ京戸ノ租ヲ增サレシハ、「弘仁十三年十二月甲寅、河内國諸家庄園往ニテ、在士人數少、京戸過多、伏望、不レ論ニ京戸士人一、營ニ田一町一者、出ニ擧正稅卅束一」トナルノ例ナリ、一町獲稲、上下平均シテ四百束アルベシ、收七ノ法ニテ二百八十束ヲ收公シ、百廿束ヲ免サレシヲ、卅束ヲ出擧シテ是ヲ借貸シテ其利稲十束ニ三束ヲ取テ、是ヲ積デ士人數少ノ闕ヲ補フ爲ニス、然レバ歪ク一町ニ九十束ヲ營人ニ容ルヽ處トス、今爰ニ租ヲ增加シテ三束トナサレシモ、山城國内ハ京戸ノ營田多クシテ、士人ノ營田少クナリシヨリ事起リシナルベシ

主稅式云、凡公田獲稲、上田五百束、中田四百束、下田三百束、下々田一百五十束、地子各依ニ田品一、令

レ輸二三分之一一

信充按ニ、田令義解ニ、「謂位田・賜田・及口分田・職田等類是爲二私田一、自餘者皆爲二公田一」トアリ、即是位田・賜田・口分田ノ闕替シテ、公ニ收シモノヲ云、其地子五分ノ一ヲ輸スヲ云、上田ニテ百束、中田ニテ八十束、下田ニテ六十束、下々田ニテ三十束ハ、一町ノ式ナリ

主稅式云、一町獲稻五百束、其租一段穀一斗五升、町別一石五斗、皆令二營人輸一レ之

信充按ニ、雜式ニ「度六尺爲レ步」トアリテ、以外如レ令トナレバ、廣十二步長三十步爲レ段コトハ相同ジキナリ、但令ノ一段ハ、方五尺ヲ以テ一步トシ、式ノ一段ハ、方六尺ヲ以テ一步トナス、故ニ令ノ一段ハ、式ノ二百五十步ニ當リ、式ノ一段ハ、令ノ一段百五十八步有奇ニ當ル、然ルニ其獲稻共ニ一段五十束ト云ハ、其束ニ大小アルナルベシ、其地ノ廣サニ據レバ、實獲稻令大升ノ七斛二斗ノ粟ヲ取ベシ、七斛二斗粟、舂テ三斛六斗ノ米ヲ得ベシ、三斛六斗ハ今ノ一斛五斗六升七合四勺四撮有奇ニ當ル、但式ノ一段ハ、今ノ一段ヨリ六十步多シ、是ヲ三百步ノ一段トスレバ、其收又十三ノ盛ナリ、租穀一斗五升ト云ハ穀ニ非ズ、米ナルベシ、凡一段ノ租一斗一升ト云ハ令ノ文ナルニ、是ニ一斗五升ト云ハ、四升ヲ增サレシニハ非ズ、地ノ廣狹同ジカラザレバナリ、但政事要略ノ說ニヨレバ、爰ニ一斗一升ト云ハルベキヲ、却テ彼減大升ノ定メニテ記サレタレバ、式ノ升ハ令ト同ジキコト疑ナシ、然シテ此一斗五升ヲ收ラルヽハ、輸租田ノ制ナリ、其他正稅ヲ收ラルヽハ、收

七ノ法ニ依準セシナルベシ、其證ハ「山城國正稅・公廨各十五萬束、國分寺料一萬五千束、嘉祥寺料一千七百卅六束四把、海印寺料三千束、元慶寺料一千束、圓覺寺料一千束、東光寺料一千束、文珠會料二千束、修理驛家料一千束、池溝料三萬束、救急料六萬束、交易繭直八千三百卅三束分三也」ト主稅式ニ見ユ、此稻合セテ四十二萬四千零六十九束七把アリ、上下平均シテ、一町四百束ノ法ニシテ、千零六十町六段二十七歩許ノ地ニ獲ベシ、如レ是ヲ一町十五束ノ法ト云ハヾ、二萬八千二百七十町餘ノ地アルニ非レバ出スコト能ハズ、倭名鈔ニヨルニ、「山城國田八千九百六十一町七段二百九十歩」トアリ、十五束ノ法ニテハ、僅ニ十三萬四千四百二十五束有奇ヲ收ムベシ、主稅式ノ見稻ト合ハズ、依テ八千九百六十一町七段二百九十歩ノ獲稻ヲ、上下中ノ法ニテ計ルニ、三百五十八萬四千六百九十一束有奇アルベシ、然ルニ四十二萬四千零六十九束七把ヲ收ヲ見レバ、民ノ獲ル田、及ビ位田・職田等諸家ノ領知凡三百十六萬零六百十一萬有奇アリ、是ヲ穀法ニ就テ計ルニ、四十五萬五千百二十九斛四斗二升四合有奇ニ當ル、舂テ米二十二萬七千五百六十四斛七斗一升二合ヲ獲ル、今ノ九萬九千零八十一斛六斗七升五合有奇ニ當ル、三斗五升苞・二十八萬三千九俵餘ニ當ル、此外ニ猶四十二萬四千零六十九束七把ノ穀、六萬千零六十六斛零三勝六合有奇アリ、今量米一萬三千二百九十四斛零七勝六合有奇ヲ獲ル、三斗五升苞・三萬七千九百八十三俵有奇ニ當ル、即是一國ノ獲米三十二萬千九百九十二石餘ニ當ル、但倭名鈔ニ、正稅・公廨各十五萬束、本稻五十萬四千七十九束三把、雜稻二十一

萬四千七十九束三把トアリ、然レバ出擧稻スベテ百零一萬八千百五十八束六把ニ及ビ、式ノ定メニ增加セシコト五十九萬四千零八十八束九把ナリ、然レバ總田獲稻五分ノ一ヲ收ムト云ベシ、抑延喜式ハ、延喜五年秋八月詔ニ起リ、十五年二月ノ勅ニ定マル、倭名鈔ハ、勤子內親王ノ敎ニ依テ作シ由其序ニ云リ、內親王ハ天慶元年ニ薨ズル由外記日記ニ見エタリ、然レバ此鈔ハ天慶ノ前ニ出タルナラム、延喜十二年ヨリ天慶元年マデ僅ニ廿七年、正稅・雜稻ノ異同如レ是ハ有ベカラズ、狩谷望之云、其假名ノ格ヲ思ニ、國郡ノ部ハ後人ノ補フ處ニシテ、能州ノ眞ニ非ズ、余今此租稻ノ式ヲ以テ思フニ、恐クハ長保ニ量ヲ改メラレシ時ニ、租稻モ亦倍セシニヤト思ハルヽナリ、其證ハ百零一萬八千百五十八束六把ノ穀、十四萬六千六百十四石八斗二升餘アリ、今量ニテ六萬三千八百三十六斛餘ニ當ル、式ノ「四十二萬四千零六十九束七把ノ穀、六萬千零六十六斛零三升六合有奇」ト云ト、大略同ジキニテ思ベシ

百錬抄云、嘉禎元年閏六月廿一日壬子、伊賀國大内庄（所當三百餘石）爲レ散ニ神人怨一、被レ寄ニ進八幡宮一畢

信充案ニ、從上地ヲ料ルニ町段ヲ以テス、故ニ神田若干町トノミ記サレタリ、是ニ初テ所當三百餘石ト記サル、是蓋伊賀國柘植鄕ノ古解ニ、「直米若干斛」ト書レタルト一例ナルベシ、然ルニ會計ノ便利ナルニ從テ、後世終ニ是法ヲ宗トスルニ至ル

神鳳抄云、相模國大庭御厨内宮上分籾四十石、白布十三段、長紙五百帖、百五十町、十三鄕、權五郎景

政寄進家田、船橋家知ニ行之、然上分計當十貫文沙汰堤鄕各別本神領也、出口室田知行門上令十貫沙汰

信充案ニ、百五十町、見稻七萬九千束アルベシ、租稻以下各別ニシテ、籾四十石ヲ內宮ニ上ルナルベシ、四十石ハ今升ノ何斛ト云コト詳カナラズト云ドモ、十貫文ト相當ト云ニヨレバ、一貫籾四十石ニ當ルト知ベシ

吾妻鏡云、文治元年十一月廿八日丙午補任、諸國平均守護地頭、不論權門勢家庄公、可宛課兵粮米段別五升之由、今夜北條殿謁申藤經房卿中納言云云、廿九日戊申、北條殿所被申之諸國守護地頭兵粮米事、早任申請、可有御沙汰之由、被仰下之間、帥中納言被傳勅於北條殿云々

信充按ニ、此國政武家ニ傳ハルノ濫觴ナレバ、學者是ニ於テ精思詳考スベシ、是ヨリ前壽永三年二月、武衞所存條々ノ中ニ、一諸國受領等尤可有計御沙汰候歟云々、來秋之頃、被任國司可宜トアルニコレバ、當時國司ヲ置レシコトハ論ナシ、其正稅・公廨ハ延喜式ノ定ヲ用ヰラレシナルベシ、然レバ一町十五束ノ租稻ハ前ト同ジキナリ、但長保・延久ノ挍升アリテ後、升ノ大小令式ト同ジカラズ、長保ノ升ト云モノハ、六十二寸半ヲ式トス（別ニ考アリ）即今ノ九合六勺八撮有奇ヲ受ク、延久ノ升ト云ハ、今ノ宣旨升也、今升七合五勺ヲ受テ、長保升ノ八合入ナリ、但穀ヲ挍ルニハ、長保升ヲ用ヰ、飯料ヲ挍ルニハ、宣旨升ヲ用ヰシコト、東鑑及安東郡專當沙汰文ナドニヲロ〳〵見エタレバ、姑ク證據トナスベシ、然レバ此段別五升モ、長保升ニテ籾五升ヲ充課セラレシナラム、但租稻ハ神

田・寺田。布薩戒本田。放生田・勅旨田。公廨田。御巫田。采女田・射田。健兒田・學校田・諸衞射田。左右馬寮田。飼戸田。賙急田。勸學田・典藥寮田・節婦田。易田。織寫戸田・膂力婦女田・惸獨田。船瀨功德田・造船瀨料田・位田・國造田・賜田等ヲバ免サル、由、式ニ見エタレドモ、守護地頭ノ兵糧米ハ權門勢家ノ庄公ヲ云ズト云ハ、位田。職田。賜田ヲ云ハズ、平均ノコトト聞エタリ、然レバ守護職ノ得分一段五升、一町ニテ五斗十町ニテ五石、百町ニテ五十斛、千町ニテ五百斛、一萬町ニテ五千斛ニ及ブ

淡路國、國領庄園田畠地頭注進

加茂鄉田廿五町六反廿步

除田三町六反百廿步

殘田廿一町九反二百六十步 三斗代六町二反廿步

山田保三十町六十步

除田四町六百十步

殘田廿五町三反百五十步 三斗代二町四斗代二丁

東神代保田廿六町五反四十步

除田五町七反

殘田廿町八反四十步 一斗五升代二町八反三百五十步、三斗代三町

貞應二年　月

散位藤原朝臣
散位凡宿禰
散位掃守宿禰
右馬允藤原朝臣

元無二注文一、此外若虛言注申者

王城鎮守諸大明神、當國鎮守十一箇所

大明神、神罰冥罰、在廳等身可ㇾ蒙候

者也、仍爲二御不審一起請文如ㇾ件

貞應二年四月卅日　　連署同前

信充按ニ、是ハ國領庄園田品ヲ臚列シテ、守護所藤原宗政ニ在廳ノ官人ヨリ附スル所ナリ、其三斗代・四斗代・一斗五升ト云ハ、其地品一段ニテ、三斗・四斗・一斗五升ト云コト成ベシ、凡守護ノ兵粮米ハ、段別五升ト定メラレタルト云トモ、地品磽瘠ニシテ一段ノ收、正稅及ビ農民ノ作料ニ充ツルニ足ズバ、是ヲ差略シ郷士ノ法アルベシ、又其膏腴ニシテ多ク是ヲ取テ猶餘リアレバ、必五升ニ限ルニモ有ベカラズ、其三斗代ト云ハ、一段三百六十歩ノ獲穀三斗ト云フコトナレバ、一歩ニ八勺三撮三有奇ヲ得ベシ、舂テ米四勺一撮有奇ニ當ル、是八勺三撮ハ長保升ヲ用キルナレバ、今ノ八勺零六有

奇ニ當ル、今步法ニシテ一段二斗四升有奇ニ當ル、四斗代ハ今三斗二升有奇ヲ獲ベシ、一斗五升ハ一斗二升有奇ニ當ル、如レ是下田ハ今ニ於テ盛ヲ付ルニ及バズ、當時モ亦然アルベシ、故ニ別ニ檢出ス、蓋是等ノ地ヨリハ此段別五升ヲ收ムルノ法、マタ容舍アルベキナリ

吾妻鏡云、文應元年十二月廿五日戊午、京上所役事有ニ其沙汰一、今日被レ定レ法云々

京上役事

諸國御家人恣レ之、錢貨之夫駄亥ニ巨多用途一於ニ貧民等一致ニ呵法一譴ニ責於諸庄之間一、百姓等及ニ佗際一不ニ安堵一由、遍有ニ其聞一、然則於ニ大番役一者、自今以後、改ニ段別錢三百文一此上五町別、官駄一疋人夫二人、可レ亥ニ催之一、於ニ此外一者、一向可レ令ニ停止一也、令定下ニ員數一以來、於ニ日來沙汰所之者一就ニ此員數一、不レ可ニ加增一也

信充案ニ、大番役ノ料一段錢三百文ヲ賦スレバ、一町ニテ三貫文也、却テ一貫ノ地ヲ案レバ、三段百二十步ニ當ル、此ニ依レバ、十貫ハ三町三段百二十步、百貫ハ三十三町三段百二十步ニ當ル、蓋是ハ平均ノ制ナルト知ベシ、猶上々田ニ至リテハ、七百・八百・九百文ニモ及ビ、下地ニテハ百文ニ至ル、下ノ正木文書載ル所、明德・應永ノ目錄ヲ案ズルニ、一段七百二十文・五百二十文・三百文・二百八十八文・二百七十文・二百五十文・二百文・百八十七文五分・百六十六文明德目錄三百四十六文・三百八十三文・三百六十二文・四百文・四百二十一文・七百六十九文・七百文・三百三十八文・四百七十文・三百

四十八文・二百五十六文（應永目錄）ノ差アリ、是地品ノ本ヅク所ニシテ、平均スレバ三百文ヲ通法ト云ベシ、青砥左衛門ニ萬貫ニ及ブ大庄ヲ賜ヒシト云ハ、譬喩ノコトナレドモ、凡三千町程ノ所ト知ベシ、

今ノ地三萬石ト思フモ害ナシ

安東郡專當沙汰文云、新加御田一段ニハ、御籾納定一石四斗一升半、御田ニハ納升定七升五合、大餅ハ一段ニハ三十枚、半ニハ大餅十五枚也、小餅ハ一段ニ三十枚、半ニハ十五枚也、但損亡之歲ハ、得分ヲ勘テ可レ納レ之也

一　本加御田一段御籾納升定一石三斗一升宛納レ之

一　新加御田損亡歲六十歩云、御籾二斗三升五合宛也、十歩ニハ籾三升九合二勺宛也

一　本加御田損亡歲六十歩、御籾二斗一升八合三勺、十歩、籾三升六合四勺宛也、籾代錢御田一段ニ五十文宛

信充案ニ、此沙汰文ハ元德元年ニ記スル所ナリ、納升ト云ハ、弘六寸深二寸五分ノ由、此書ニ云リ、其入收今ノ京升ニテ一升三合九勺四撮有奇ニ當レバ、一石四斗一升ハ、今ノ一石九斗六升五合五勺四撮有奇ニ當ル、今ノ三百歩一段ノ法ニテハ、八ノ盛ト云ベシ、如又取處今升ニテ一石九斗六升五合五勺四撮有奇ナリト云ハバ、試ニ是ヲ倍シテ三石九斗三升一合零八撮トシ、是ヲ三百六十歩ニ分テバ、一升零九勺一撮有奇ニシテ、舂テ米五合四勺有奇ヲ得、乃今十六ノ盛ト云ノ地ナリ

又云、一段籾代五十文ト云ハ、籾糠ノ直ナリ、百文ニ今升三石九斗三升一合奢八撮ニ當ルカ

正木文書明徳五年八月廿七日、新田庄内檢田鄕内得河方目錄云、四町五段分錢拾貫三百文　一町八段分錢拾貫三百文　三段半分錢一貫五十文　一町分錢二貫七百文

五段此内半不作　分錢一貫三百文　二段分錢六百文　二段六斗口不作　五段此内四段半不作、一段開分錢二百文

已上田數九町半、分錢二十一貫三百五十文

同所畑分

八段分錢一貫六百文、三段分錢六百文、八段分錢一貫五百文、一段分錢二百五十文

一段分錢二百文、六段分錢一貫文、四段分錢八百文、一段分錢二百文

已上畠數三町二段、分錢六貫百五十文定

合田畠十二町二段半、分錢都合二十七貫五百文定

信充按ニ、一町八段ニテ十貫三百ト云ハ、一段七百二十文ニ當リ、五段内半一貫三百ト云ハ、五百二十文ニ當リ、三段半一貫五十ト云ト、二段六百ト云ハ、共ニ三百文ヅツニ當リ、四町五段十貫三百ト云ハ、二百八十八文餘ニ當ル、一町二貫七百ト云ハ、二百七十文ニ當リ、此外ハ二百五十文・二百文・百八十七文五分・百六十六文ニ當ル、此錢下ノ應永ノ目錄ニヨレバ、是年貢定錢ナリ、依テ二十七貫五百文ヲ十二町二段半ヘ分テバ、一町ニ二貫二百八十二文許ニ當ル、即定一貫文ハ四

段四分半餘ニ當ル、百貫ヲ領スル家四十四町餘ノ田ヲ所務スベシ、但當時ノ四十四町ハ、今ノ五十二町七段許ニ當ル、五十二町七段ハ、永錢ノ法ニ從テ四拾三貫八百文許ニ當ル、今錢ノ二百八十九貫二百文許ナリ、金四十三兩餘ニ當ル、下ノ今居鄕ノ田畠ニ比スレバ、地位大ニ上ト見ユ

正木文書應永十七年卯月七日上、今居地検目錄云、畠三段六十歩壹貫六十文田畠二段半五百文畠三段一貫五百十文畠三段一貫百文畠二段一貫三百文

一宇畠九段半、分錢四貫文イサイケ源内太郎田一町五段半畠一町七段半分錢十貫文同人此外二貫五百文、兩在家御公事免

一宇田一町畠一町分錢七貫文二郎太郎入道

一宇畠一町八段、分錢六貫百文同人

右衛門三郎給分

一宇田八段畠一町半分錢五貫六百文

一宇田四段畠一町三段分錢八貫文

一宇田一町畠二町一反分錢十貫八百文

一宇田八段畠一町二反分錢五貫百五十文

一宇田三反不作畠一町一段三百歩分錢二貫九百文

一宇田七段半畠一町四段半分錢五貫六百文

一宇田九段内（五段半不作、四段見作）分錢二貫九百五十文

一宇田七段、分錢二貫三百文

一宇畠一町六段（九段不作、七段見作）作入分錢二貫百文

合田七町五段内（八段不作六町七段見作）

畠十七町八段三百歩内（九段不作十六町九段三百歩見作）

以上御年貢七十二貫五百文上ル

中略

總都合御年貢百三十八貫七百文内

（百十七貫五十文 上へ定マイル分）
（廿一貫六百五十文 諸給分御公事免共）
（此外佛神田合畠田十三町半）

信充案ニ、是上野國新田郡今井郷ノ檢地目錄、占田凡田十四町九段内（内三丁二段不作）畠三十町一段六歩（内一丁二段不作）合セテ四十五町六歩ノ地ノ年貢百三十八貫七百文ニ當ル時ハ、高下平均シテ一町三貫零八十文餘ヲ收ム、一段ノ分錢三百八文餘ニ當ル、今現ニ今井村上中下合三村高千二百五十六石二斗七升有奇アリ、是ヲ今田歩ニ求レバ、大概百七八十町ニ當ル、依テ此四十五町六歩ヲ、今ノ町段ニ改レバ五十四町餘ニ當ル、五十四町ノ永錢、當今上中下平均シテ四十四貫文餘ニ當ル、即金四十四兩餘ニ

相當ル、今錢ニテハ二百九十貫文餘ナリ、然レバ應永ノ頃百貫ノ地頭ト云ハ、上野國新田郡ニテ三十八町餘ヲ所務スルコトト知ラル、然ニ當時ノ百貫ハ、今ノ二百貫許ニ當ル、金トシテ三十兩餘ニ過ギズ、其寒儉思フベシ

三河國明眼寺所藏、永正元年十一月二日寄進狀云、合田三段五ッ（九百文目ヒロモ九百文目シメシ入道百卄ヒロ　文目ワフチ三百五十文目同畠百八十五文目モ）

又八年十一月廿一日賣渡狀云、合田一段者四百目（在所ミマ）云云、代四貫二百文ニ永代所賣渡進候云云

又同年十二月十五日寄進狀云、合田一段者（一段一四百代）

又十三年十二月賣渡狀云、合田一段者五百五十文目（在所ハタカマ、六ワリ）永代五貫五百文賣渡申候處實正也、此內ヨリ年貢五十文宛每年本名へ納所有ベク候云々

又十八年正月廿五日寄進狀云、合田一段（在所富永、前新道、後七百代）云云、七貫文買取寄進申處實也

又大永七年七月六日寄進狀云、田地二段云云、方年貢六十四文宛、每年可レ有ニ御沙汰一候云云

又十一月廿八日寄進狀云、合二反者（在所大岡、代一貫目）

又享祿二年賣渡狀云、合一段者（四百五十文目、在所ミマ）云々、四貫五百文、永代荒川小太郎殿へ賣渡申處實也

又三年十二月賣渡狀云、合代三貫五百文者（當作三百五十目サイ在所細田）云云、公方年貢五十文ヅッ

又天文四年十月賣渡狀云、合畠二段、年貢一貫八百文目云云、代八貫文ニ永代賣渡申處實也

又七年□月賣渡狀云、合田一段、石米八斗目云云、七貫文永代賣渡申候處實正也、云、每年色ナシ、年貢百文ノ外諸役不レ可レ有

又九年十二月賣渡狀云、合畠三段、年貢一貫八百目云々、代八貫文ニ永代賣渡申候、色濟之年貢、每年三反ニ二百文宛可レ有ニ御納一候云云

又十一年□月寄進狀云、合田一段六斗目畠一段八百目

又弘治二年八月寄進狀云、五年目一段、五百文目畠一反

信充案ニ、是等諸劵今猶現ニ岡崎妙源寺ニ藏弆ス、先年予親睹シテ鈔錄スルモノナリ、依テ此田地ノ價ヲ考フルニ、享保三年ノ狀ニ、合代三貫五百文ト云ハ、買賣價錢ニシテ、當作三百五十目ト云ハ、下ノ天文九年ノ狀ニ、年貢一貫八百目トアルト同ジク一年ノ年貢ナリ、中ニ公方年貢五十文ト云ハ、地頭所務ノ外ニ出ス所アルヲ云、即是文應ノ定ノ段別三百文ノ外、五町別官駄一疋人夫二人等ノ給分ナルベシ、是彼ヲ通計スルニ、一段三百文ト云ノ大法ハ、此際モ猶存スルヲ見ベシ、然シテ大方上ノ明德應永ノ目錄ト伯仲ス、但シ

一段九百文

八百十八文餘

八百文

七百文
六百文 天文九年六十六文餘
五百文 大永七年ノ狀ニ、二段一貫目トアリ
五百五十文 永正十三年、公方年貢五十文
四百文
三百五十文 享祿三年、公方年貢五十文

ノ九等アリ、其内九百文・八百十八文・八百文ト云ハ、上々田ノ賦ナルベシ、上ノ二通ノ目錄中ニ所見ナシ、然レドモ此際モ猶一段三百文、一町三貫文ト云ヲ通價トスル時ハ、當時百貫ノ地頭ハ、三十三町三段百二十歩ヲ通法ト云ベシ

大和國式下郡 小坂村、法貴寺村、西井上村 圖帳云、文祿四未年、長束次郎兵衛檢地
高市郡 小槻村、川西村、忌部村、曲川村 圖帳云、文祿四未年、御牧勘兵衛檢地 中曾司村、佐田村、寺崎村、雲梯村、五條野村、飛驒村 石田木工頭檢地 今井町
慶長十二未年、松村彌右衛門改
葛上郡 今住村、戸毛、栗埴、古瀬村、朝町、奉膳村、重坂村、南佐味村、內谷村、東佐味村、林村、五百家村 圖帳云、文祿四未年、新庄駿河守檢地
葛下郡 今里村、櫟原村 圖帳云、文祿四未年、中島總右衛門檢地
添上郡 櫟枝村 圖帳云、文祿四未年、增田右衛門尉檢地

平群郡龍田村岡帳云、文祿四未年、石田治部少輔檢地下垣内(カイト)若井村文祿四未年、川村五郎兵衛檢地
信充案ニ、上件ノ村落皆三十歩ヲ一畝ト云、十畝ヲ一段ト云、十段ヲ一町ト云、今ニ至ル時ハ、今ノ一町三十歩トナリシハ、文祿四年ニ起ルコトヲ知ベシ、但一歩一升穀ヲ獲、一段三斛穀ヲ獲、是ヲ舂テ一石五斗米ヲ得ルヲ十五ノ石盛ト云、此升ハ即天正十四年新製ヲ用キルナレバ、一石五斗ハ今寛文改制ノ京升ニテハ、一石四斗九升五合三勺三撮五有奇ニ當レバ、今ノ十五ノ盛ヨリハ四合六勺有奇輕シ、此一歩ハ一升穀ト云コトハ、上古ヨリノ通法ニシテ、是ヲ段町ノ獲地ノ法トシ、是ヨリ上下スルニ至ル、此一石五斗ヲ析シテ七斗五升ヲ收公ス、一石ハ一段三畝十歩ニ當ル、一段三畝十歩ハ文祿前ノ一段四十歩ニ當ル、一反四十歩ハ定法三百三十三文餘ニ當ル、故ニ從前一貫ノ地ハ今ノ四段ナリ、四段十五ノ盛ニテ三石也、然レバ上代一貫文ノ地今ノ三石、十貫三十石、百貫三百石ト云ベシ、然レドモ是地ノ高下アレバ、一定ノ說ニハ決シ難シ、俗說贅辨ニ、土佐國幡多郡中村鄕不破村八幡宮寶藏ニ、永祿二年三月一條家ノ寄進狀ヲ引テ、田千歩ヲ一貫トスト云リ、今其文ヲ見ルニ、一所一貫、一所一貫、一所七百五十分、一所二百五十分、合三貫分トアリ、此七百五十分ト云ハ、七百五十文分ノコトニシテ、七百五十歩ノコトニハ非ズ、然レバ此ヲ以テ千歩一貫ト云ノ證トスルハ未シキ說ナリ、且永祿ノ時ハ猶古法ニテ、三百六十歩ヲ一段トス、去バ千歩ハ二段二百八十歩ニシテ、定法八百三十三文餘ニ當ル、世諺辨略ニ、采地永樂錢、東國ハ一貫文九石、西國ハ八

石、十貫ハ十石也ト云モ誤ナリ、田地ニ貫高アルコトハ、永樂通用ノ前ニアリ、武家評林系圖ニ、北條高時領知廿八萬七千貫トアルハ何ニ依テ云コトニヤ未詳、是ヲ百四十三萬五千石ニ當ルト云ハ、五貫一石ト算セシテレドモ、是又古法ニ當ラズ

長曾我部元親百箇條云、尺杖之事、城普請其外何ニヨラズ、本間六尺五寸タルベキコト、付田地ハ可レ爲ニ各別ニ事

信充案ニ、田地ハ各別トアレバ、慶長ノ初ト云ドモ、六尺五寸ヲ以テ一歩トセシニハ非ルナリ

田租考終

平理策

丹羽昴著

平理策

丹羽勗 著

漢宣帝常稱して曰、「庶民所下以安二其田里一、而亡中歎息愁恨之心上者、政平訟理也、與レ我共レ此者、其惟良二千石乎」と云はれたりし、誠にさる事也けり、此帝民間に成長せられし故、深く下情に通達し、就レ中萬民の憂樂は、郡守の能否に係る事を熟知し、即位の後刺史太守を撰び命ずる毎に、其人を召出し、自身に一々其治め方の了簡を尋問れし由史に見へたり、さばかり政事に心を用ひられし故、後世までも前漢中興の主と云傳る也、されば民を治るの急務は政を平にすると、訴訟を明に裁斷するとの二ッに有なり、然れども訟を明斷するは、心の公平と精力を盡すとにあれば、委しく論じてもさのみ益あるまじとて、今は只其大略を擧るのみにて、ひたすら政教の方を主といへり、抑御國中を教育撫安し給ふ大政は、君と執政衆と日々朝廷にて相議り給ひて、聊も闕漏の事有べきにて非ざれ共、僻遠の地までは御政教細に行渡りがたき事も有也、さる故に周禮にも六鄕六遂などの名目種々ありて、邦國を分ち掌る趣見へたり、今の御代官職も其遺意なるべし、されば此職に居ん人は、かの漢宣の言をよく／＼味ひ、君の下民を憂恤ましますの御心を深く體し奉り、其上御代官と云名目の甚重き事にも心

をつけ、日夜心を用べき事也、然るに他國の代官職の樣子を傳へ聞くに、多くは眼を着る所違ひて、只簿書の表勘定の上にたゞに違ひなく、年貢を滯りなく取上ぬれば、其職分は盡せりと思へるさまにて、敎化等の事は露ばかりも思はず、風俗の薄惡になり行にも心付ず、或は下々の困究に至り、或は潰百姓の出來るなどをも、餘所に見過す人の多き由也、然れ共是は他國の事なれば、とてもかくても有べし、御國の御代官たらん人は、上に云る如く君より鄕村を分ち預け給へる御心に順ひ奉り、下々を困究させず、其上よく敎導して、一統に惡を去て善に移り、風俗淳厚に成行樣に敎諭すべし、是即國家治安千萬年の基也、其條目は次々に論列す

一　右に云る如く、御代官は至ての大任なれば、社稷の大計を熟知し、深く治體に通達したる人ならでは、此職に叶ひがたし、其人を得ざれば、此策の趣も行はれがたし

一　今日の形勢にては、何事よりか施し行ふべきと云に、先ヅ村々の庄屋たる者をば、皆々良善の人を撰用べし、是第一の急務也、但良善の人は至て少きものなれば、貧富を論ぜず、門地を云はず廣く撰みて、隨分正直なる者を用べし、抑御代官の支配下數々の村落なれば、いかに心力を竭すとも、御代官一人にては末々迄は政敎行屆ざるべし、さる故に良善の庄屋に村々を分ち託して手傳しむる也、此即御代官の君の御政を手傳し奉ると同じ理也、然るに久敷此意を失ひて、庄屋の風儀あしくなり、村中を敎導する事を夢にもしらず、只己が威權に誇り貧弱を侮り、愚民を欺き村入用の多くな

るをも憂へず、一統困究するをも顧ざる者多し、かゝる悪弊有ては、平理の道いかでか行はれんや、先此弊を改る事當今第一の急務なり、然るに治體に暗き人は、かゝる庄屋有て村中愁ひ憤る事を粗知りながら、上へかゝりたる事に非ずとて、よ所に見過す人あり、又は煩勞をいとひて捨置人も有、或は知てもしらぬ貌して居るを、寛大と心得て取上ぬ人も有也、されば村民憤りに堪かね、庄屋の不法を訴出ても、悠々としたる評議にて、數年を經ても裁判なく、終には何の訴がひもなき事に成果る也、抑下民の困究に成行は、此上もなく君の憂させ給ふ事にて、困究甚しければ國家動搖する基ともなる也、然るを只下々どちの入組事とのみ思ひ居るは、いかなる心ぞや、さればわづかの簿書を知り、官府の事體を見習たる計にては、君の御憂を分ち奉る職には居がたき也

或人云、政事は簡をたふとむ、然るに左様の訴を一々取上なば、其外様々の訴事を持出て事繁く成べく、又庄屋を無下におとしては、一統庄屋の權輕くなりて、小民彌庄屋の令を用ひぬ様にも成べし、されば訴訟は先大方取上ぬぞよかるべきといへり、是も一わたり理有様に聞ゆれど、實は大なる謬論也、是はかの「必也使無訟乎」の語をあしく心得たる故なるべし、又簡を尙ぶと云もかゝる事には非ず、此簡の事は下に論ずべし、又訴は何程多くなる共、何の憚る事かあらん、一々審に推問して曲直を決斷するまで也、然るに訴をさせぬ様に仕向なば、不良の庄屋彌志を得、或は强横の者寡弱を侵し欺く事多くなるべし、是漢宣の第一に憂られし所にて、いと憐むべき事也、然るにそれを何とも思はで餘

所に見過すは、餘り思ひやりなき事にて、忠恕の心薄きならずや、抑理を持ながら非理の者に侵し凌がれ、寃屈を告訴る所なくば、いか計悲くいか計腹立しからん、それを自己の身に引受て思ひやりなば、いかでか餘所に見過さるべけんや、其事を明に決斷せざる間は、晝夜忘れがたき程におもひてこそ、忠恕の道にも叶ふべけれ、古より政事に忠を尚ぶも此故なり、抑忠と云は君に對してのことのみにあらず、總て上下に拘らず、他人の上の事を踈略にせず、己が事の如く心力を竭すを云也、此忠恕の道は何事にも缺ては叶はぬ事ながら、訟を聞上には取わき第一緊要の事也、されば此忠恕を先とし、心を公平にし、少しも煩勞をいとはず、下に寃枉なき樣に心がけ、其上政教をよく施しなば、數年の後漸々に訴訟は少く成行べし、「必也使レ無レ訟乎」と云語もかゝる趣にこそあらめ、決して訟を等閑にして、下の懲る樣にする事には非るべし、又内濟と云事遍く行はるゝも、忠恕の心薄き故也

一　庄屋は一村を敎導する長なれば、良善なる上にも、治道の大意をしらでは有べからず、村方敎育の筋をかねて庄屋に示し置べし、又庄屋たる者も輕き任には非と知べし

一　庄屋の良善なるを撰ても、多くの中には撰み誤り有まじきにもあらず、又始はよかりしも、後に惡敷成事も有べければ、手寄に隨ひ豫め五六ヶ村を連ねて一組と定め置、互に横目と成て監察さすべし、若一組の内に不良の庄屋あらば、仲まより異見を加へ速に改めさすべし、用ひずば上へ訴べし、異見もせず訴もせざるに於ては、皆越度たるべし

一　村中質素を守り、市井の風をかたく見習はぬ様にすべし、また博奕・諸勝負・延商等は勿論、遊藝を學び又は農事に惰り、又は故もなく寄合酒盛する等堅く禁ずべし

一　村中に惰農の者ある、又不法の者ある、又潰百姓の出來る、また困究者の多くなる類、みな庄屋の行届ざる故也、其事情に隨ひ處治すべし（此一條過刻なるに似たれど、治體を知たらん人は、必點頭すべし）

一　村々產土神の祭日など様々遊興を催し、甚敷は歌舞妓狂言をする類有、此歌舞妓は言に不レ及、すべて費多き事は皆々禁ずべし、五月の馬のとうと云事ことに無益の事也、別して禁ずべし

一　孝弟の敎へ長幼の序、又老者を敬ひ貧弱を恤み、隣里輯睦の道など、凡て風俗に預る事共をヶ條書にし、村々の庄屋に授け置き、農隙を見合せ一年に兩度村中を呼集め、右のヶ條を讀聞すべし、尤庄屋組頭は上下、其外一統は羽織袴着用し、敬ひ愼て聽べし、隨分行儀を正敷し、假令(マヽ)にならぬ様に申付べし、座順は貧富を論ぜず、年齡の序を用べし

一　何事を行ふにも、孝弟の道長幼の序に叶ふ様に心がくべし、是迄さる敎の道闕居たれば、俄には行渡るまじ、心長く年月を追て敎導すべし、されど餘りに不孝不弟なる者あらば、嚴敷處治すべし、是亦其他への敎也

一　村中高懸りにする入用は、隨分多からぬ様に心がくる事、是また庄屋の要務也、たとひ私慾はせずとも、惣高にかゝる事なればとて費を顧みざるは、大なる心得違也

一　村中惣勘定の時、高持百姓不レ殘集りて帳面に連印すべし、但其次第も長幼の序を用べし、附村内吉凶慶弔の事に付て大勢寄集る事あらん時も、惣て長幼の序を用べし、追々ヶ樣の事に目馴ぬれば、思はず知らず老を敬ふ心も生ずべし、何事も中心より發りたる事ならでは末通らぬもの也、先年細井德民村々を廻りて教諭せられしにも、其本なかりし故にや、その益見へざりき

一　村內誰によらず金銀を借らん爲に、田地又は家屋敷等を質入にせんには、必庄屋の印をも乞ふ事也、さる時に共金の使ひ道をよく〳〵穿鑿すべし、よからぬ筋ならば、少の事にても堅く許すべからず、縱ひ尤なる筋にはあり共、身上不相應の金高ならば、是又許容すべからず、右の質物を失はず、追々返濟せらるべき程の金高のみを許すべし、とにもかくにも庄屋は人々に產業を失はせぬ樣に心がくる事專要也、凡て借財の自由になるは、却て產業を失ふ基にて、大なる害になる也、右の法を兼て庄屋より村中へ諭しおかば、借財の容易に成難き事を知り、人々業を勵み勤めて、自然と借財せずとも用足る樣に成べし、此法も儉約質素にする一助なるべし

一　近年豐作打續き米價甚賤くなれり、かゝる時に常平の意に倣ひて、鄕倉に粟米を蓄へ飢饉の備とすべし、其大略は先づ困究ならざる者共を諭して、その人々の力に叶ふ程づつ籾米を蓄させ、年々納め加へ行なり、尤一々帳面に詳に記置き、陣屋へも員數書付出さすべし、其中多く納めたる者をば褒賞し、又は殊に多き者は、或は名字を許し、又は帶刀を許しなどせば、下民一統に靡き競ひて、

年々多く納る樣に成べし、尤每歲不ㇾ殘新穀と取かへ置べし、左樣にして怠らずば、五七年の內には一年の蓄出來ぬべし、さて凶年にて米價高く成たる時、其主々の望次第賣拂ひて、其代銀を渡し與ふべし、其時は出舟を禁ずべし、但小凶年には少し賣出し、大凶年には多く賣出す也、萬一大飢饉にて上より御救米給らで叶はぬ時は、其時の相場にて其處々の米を買上て賜はる也、さすれば他所より運送する勞もなく、且速に辨じて早く間に合ふ故に、餓死の者の出來る患もなかるべし、右の如く賣出す事なれば、其米主も皆大に利を得る也、されば此積粟の策は畢竟上の御爲にはあらず、皆下の大利なる事を能々諭し聞すべし、但是等の事に付て少しも上へ利を求むべからず、「放ニ於利一而行多ㇾ怨」と見へたり、凡て何事によらず、上へ利を求めては少しの事にても、下の思はく惡くなりて上を怨み謗り、或は其事行はれざる樣に成もの也、又此積粟の事上の權威にて强て云付るも宜しかるまじ、只熟く教諭して下の心自然と此事に進むやうにすべし、此策をよく施し遂なば、豐凶ともに其益多かるべし、猶工夫すべき也

一　物價は國々にて違ひは有べけれど、其違ひ有も皆その故有事なれば、（譬ば木曾にて材木は下直に、魚鹽は高直なるが如し）先は大略平均なる物と見へたり、然るに米價を人力にて一國計、上げもし下げもせんとするは强ひ事にて、所詮行屆かぬ事也、然れども此蓄粟の政よく行はれたる上にて、入津舟を禁じなば、他國よりは少しは高直になるべく、又高直過たる時右の籾米を賣出し、且出舟を禁じなば、是又他所よりは少し

下直になるべし、されど上に云る如く物價は公平なる物なれば、强て格外に上ゲ下ゲは成がたし、此蓄粟の政は物價を自由にせん爲にはあらず、唯凶年飢饉の備へ第一にて、且蓄粟の爲に人々奢を去り、儉約を務る樣にならしめんが爲也

一　凡人情は萬事に華美を好むものにて、衣服には殊に甚しく人に勝らん事を欲し、人に劣る事を恥るが人情の常也、今時は村方にても中以上の困究せざる者共は、漸く華奢に移れるを、其以下の者共己が家產の及ばざる事は思はず、彼れに負じと競ふ故、次第に困究に至る也、然るに右の蓄粟の政行はれ人々競進みなば、富民も衣服の奢をやめ、其入用を蓄粟の方へ用る樣に成べし、さらば其以下の者も競爭の心なくなりて、自然と淳朴の風にも立かへるべき也

一　一村の治め方庄屋一人にては行屆がたき故、組頭と云者有て其組々を分ち掌る事也、されば組頭はその組々を能々心を付、不法の者あらば異見を加へ、行屆ざる者は敎導すべし、其心得方の善惡に隨ひ庄屋より進退すべし

一　五人組は諸方に散在しては其益なし、比隣にて組合すべし、此組合は相互に親しく交り、吉凶其他何事によらず、助け合て互に力になるべし、若組內に惰農の者、或は不身持の者あらば、餘の四人より異見して改さすべし、兩三度に至りても改めずば組頭へ告べし、組頭にて又其者を嚴敷敎戒すべし、改めずば庄屋へ訴べし、若四人の者異見もせず、打捨置に於ては越度たるべし、其品に隨ひ過料を

出さすべし

一　村中五人組の法能定りたる上は、亭主分の者病氣か、又止む事を得ぬ筋にて農時に後れなんとせば、村の休日に組合より助耕すべし、長病ならば他の組々よりも次第に助くべし、抑災難は誰が身の上にもある事なれば、此助耕も他人の爲計には非ず、假令自身に災難あらん時も、飢餓を免るべき爲也と思ふべし、此旨を能々諭し置べし、扨潰れ百姓の出來る源は樣々なるべけれ共、先は奢と長病死喪などに依る事なれば、よく〳〵心を用ひて防ぎ救ふべき事也

一　右の條々の法を立たる上にも、速功あらん事を求むべからず、心長く同じ筋を倦ず怠らず施行べし、只誠實に執行ひなば、土地風俗により少の遲速は有べけれど、終には志の如く行はるべし、但正しく共職に居て其事を施行はんに、此策の儘には行ひがたき事も有べく、又外によき法も考出ぬべし、されど眼を着る所は此策の外に出べからず、惣て浮華なる事は、一旦は流行しても末とげぬもの也、返す〳〵も誠實を務むべし、先年德民の建議にて有司より村々の庄屋に諷して御冥加普請と云事行はれし時、上には誠に庶民子來と思召つらんに、細民は庄屋共に驅立られて、爲ん方なく出る事なれば、內心愁恨せし者も有しとかや、是も浮華に近き故なるべし、然るに德民上杉の民は敎へ易く、御國の民は諭しがたしと云れつるは過ちと云べし、「言忠信、行篤敬、雖蠻貊之邦行矣」と云語をいかゞ見られたるにか、おぼつかなし

一 右の法を施行はんに、速に行はれざるに退屈して、折々法を改め易る事なかれ、凡て法の折々改まりたり、又はさしてもなき事共に號令の數多く出るを煩と云て、甚きらふ事也、抑ヶ條多くなれば下の者一々記憶しがたく、法折々改まれば人々取違も出來、又下より上を見すかして、輕しめ侮る心も生ずるもの也、さる故に政事に簡を尙ぶ也、さて右に論じたる法は新に施し行ふ事なれば、下々馴ざる間は定めて不便に思ひ、彼是批判し、樣々の流言巷說もいと多かるべし、是愚民の常情也、法を固く守りて少しも心を動す事なかれ

或人云、子が論ずる所の平理策は、下を治むる道に於ては誠に當世の要務と云べし、然れども餘り嚴に過て、下々究屈に堪かね、却て治らぬ樣にも成なんか、禮記にも「張而不ㇾ弛、文武不ㇾ能也」と云るにあらずや、答て曰、此語は只蜡祭の論にてこそあれ、平生の事に預るにあらず、又下の究屈に思はんも、只暫くの程なるべし、それも上へ利を求る爲ならばこそ、下々怨みて事行はれざる事もあらめ、是は皆下を救ふ策なれば、下民いかに愚なり共、終には信服すべし、されば「以二逸道一使ㇾ民、雖ㇾ勞而不ㇾ怨」と云り、又書經の康誥・酒誥などを見るべし、古の聖人の政治とてもさのみ寬縱なるものには非るをや

文政二年六月　日

平理策 終

破レ家ノツヾクリ話

新宮凉庭著

敍

予嘗評二山人此話一曰、是書家縮圖之用也、書家縮二古人名蹟於寸楮之間一、時或模楷臨レ之、至二其神化之日一、盈丈巨作、隨二我筆一而成、甚易易耳、嗚呼山人經綸之術、雖レ用二之天子之邦一可也、而特以二區區諸侯之言一爲二話柄一者、意蓋取二裁於聖賢之法一、而言必激二切於當時之事一、山人其亦有レ所レ深二慮於忌諱一也歟、山人爲二予忘年之友一、爲レ人長身巨口、偉貌魁梧、性忽略而簡易、家居解レ衣而踞、磅礴而坐、大人貴客、曾不レ改二其容一、然當二其談レ術論レ事之時一、風雨暴至、矢鋒四集、而細大粗密、不レ容二一髮一、其大略視二此話一、可二以概見一焉、頃日得二聚珍版數萬字一、因寫二五十本一贈二之同志之士一、且爲二之序一曰、算家有二立平相應之術一、苟得二其法一也、小大互用、而不レ失二其式樣一、予以爲讀二此話一者、亦得二彼術一而行レ之、則其大者固可也、其小者雖二十戸之邑。千指之家一、豈不可也哉

弘化丁未夏五月　　辱知　九方生肇元基識

題言

或人余ガコノ謾言ヲ難ジテ云フ、貴老惡口シテ人ヲ罵シルニ似タリ、恐クハ人ヲ服スル君子ノ言ニアラズト、余答曰ク、サレバ唐ノ魏徵ノ言ニ、上書ハ激切ナラザレバ、人主ノ意ヲ起スニタラズト、余モ亦是レニ倣フテ、人ヲ激シ勵マシテ、國政ヲ興シ民ヲ救フノ一助ニモナレカシトコヒ子ガフノミ、當世ノ士人恥ヲ恥トモ思ハズ、要路顯役ニ出デテモ、ウカ〳〵ト今日迭リニ暮シ、遂ニハ國政ヲ毀ヒ風俗ヲ傷リ、武威ヲ落スノ姿ニ至レバ、國ヲ醫スルノ心得ニテ、カクハ罵リ辱カシムルニ似タレドモ、上タル人ニ對シテハ芹ヲ獻ジ、朋友ニハ善ヲ責ルノ心ナリ、サテ人ノ穴ヲ言フテ、其弊レヲ補ハン趣向ニテ、破レ家ノツヾクリ話トハ名ヅケタリ

鬼國山人　自識

破レ家ノツヾクリ話巻之上目次

經濟篇

一 時弊ヲ論ズ
一 勘定奉行撰ミ方
一 評判ヨロシキ人ヲエラム論
一 重臣勝手ガヽリ心得方
一 勝手向不如意ノ根源ヲ論ズ
一 金銀融通ノ論
一 重臣文學ナケレバ其任ニ堪ザル論
一 銀主ヲエラム論
一 銀札米札ノ事
一 廻米ノ事

破レ家ノツヾクリ話卷之上

丹後逸民　鬼國山人　著
讃南處士　九方生筆　校

經濟篇

時弊ヲ論ズ

文政十一年ノ春、或諸侯ノ家老余ガ家ニ來リテ問曰ク、當時諸國一般ノ困窮ナレドモ、殊ニ我ガ國ハ年來主家雜費引續キ、必至難澁ニ迫リ、當時ニ至リテハ、公邊ノ勤向モ六カシキ場所ニ移レリ、貴老經濟ニ心ヲ用ヒラルヽ由ヲ聞傳ヘリ、願クハ傳授アレト頼ミケリ、余所縁モアリ、默止ガタクテ其問ニ答フル事、左ノ如シ

今時諸家ノ家中、上中下トモカヽル難レ有太平ノ御代ニアリテ、小身大身ニ論ナク、其身分ヨリハ自然ト奢侈ニ推シ移リ、ワヅカニ百石二百石ノ知行ヲ取ルモノモ、士列以上ナドト相心得テ、江府往來ニモ乘輿イタシ、絹布ヲ著シ、又家内ニテハ小者下女ヲ召シ仕ヒ、其妻女モ衣裳ヲ曳ズリ、鶯ヲ飼フ事

ハ勿論ナリ、自ラ織テキル事ヲモワキマヘズ、其娘ナドヲ嫁ラスルニモ、一年分ノ物成ヲ打コミ、タダ有德ノ町人ニ金銀ヲ借リ納レテ、其年月ヲ送ル事ニコヽロヘ、呉服屋・小間物屋・八百屋ナドノ拂ヒモ、節季ニハコトハリ、元ヨリ士タルノ本意ヲ失フ者アリ、サテ是等ノ族ヲ町奉行トカ郡奉行トカ、勘定奉行トカ、日附トカ、役付ヲ申シ付ケラレテモ、前ノ如ク町人ヲ仰ヒデ暮シ來ルユヘ、頭役要路（政事ガカ）リノ役ニ出テモ、其威光タヽズ、彼町人ハ利ニ走ルコト鋭キ者ナルガユヘ、元來世話イタシ來レバ、己ガ畜ヒ付ケノ如クニ存ジ、種々ノ事ヲ其役筋ニヨリテ頼ミコミ、其人モ兼テ世話ニナリ來レバ、人情止ムコトヲ得ズ、其役向ニテ返禮スルヤウノ沙汰ニ落チ行キ、其政事ムキ自然ト鈍リ、國内ノ風儀ヲ破リ傷フニ至ル、時勢トハ云ヒナガラ、歎クベキノ至リナリ、又右ノ如キ輩ラヲ勘定奉行ナドニ擧レバ、自分ノ少サキ百俵二百俵ノ身上サヘ、出入ヲハカリテ、治メカヌル事ユヘ、萬石十萬石ノ勝手ヲアヅカリテモ、腹中無算ニシテ、其得失利害ニ通ゼザレバ、敗亡ヲ取ルコトハ、言ハズシテ知ルベシ、且ツコノ役ハ多ク都會ニ出デテ、金銀ヲ借リ納ル事ガ、重立チタル役ノヤウニナリテ、己ガ刀劍ヲ飾リ、衣服ヲ美ニシ、又ハ音物ヲ重クシテ、銀主ノ手代マデニモ低頭平伏シテ、金銀ヲカリ納レ、歸レバ、其君ヲ始メ、重役人モ手柄ト稱シ、能アル士ノヤウニモテハヤサレ、田舍ニ暮シ付ケタル者ガ、出役ニヨリテ、俄ニ都會ニ出デテ、銀主付合ヒトカ唱ヘテ戲場（シバヰ）華街（アゲ屋）ニ遊ビ、管絃酒肉ニ飽クヲ結構ナル事ニ思ヒ、ソレニ付テモ銀主ノ手代ナドユヨシミヲ結ビ、己ガ顏ノキケル事ノミヲ

存ジ、主家ノ勝手向ハ次ニマハシ、都會ニ出デテ瑣細ノ音物ナドヲ持チ歸ルヲ、良キ株ニ取付キタルヤウニ思フ、是レ今日諸家役人ノ通弊ナリ

又當時諸家ノ家老ト申スモ、小兒ノ時ヨリ家中ノ族ラニ立テゴカシニサレ、御前様ノ御無理ハ、御尤トカ云フヤウノ目ニ遇フテ、成長シタルユヘ、生知ノ人ハ格別ナリ、多クハ下情ニ通ゼザルノミナラズ、諛辭ヲムカヘ、己ヲ譽ルヲヨロコビ、肩身ヲソビヤカシテ諂ヒ笑フモノヲ、己ニ歸服シ用立ツ者ト存ジテ、顯役要路ニヌキ擧ゲ、便嬖(キニイリ)詭譎(イツハリ者)ノ輩ラ出頭スルヤウニナリテ、腹中ニ物アル士ハ、馬鹿ナルコトヲ恥テ、得言ハズ得爲ザルユヘ、疎遠ニシテ役付モ自然トオクレ、生涯埋レ木トナリユクモノナリ、是第一ニ家老タルモノハ人ヲ目利シテ、君ニ推擧スルガ役前ナルニ、右ヤウ目クラニテハ、其政事ノニブルハ必然ノ理ナリ、其罪ハ全ク家老タルモノマヌカレ難キコトドモナリ、故ニ家老タルモノハ、不學無術ニテハマヒリガタシ

又後世ノ諸侯方深キ奥向ニソダチ、婦女子ノ手ニ人トナリ、仁義文武ノ道ハ勿論ナリ、世上一通リノ事ニモウトク、氣ズヒ我マヽナラザレバ、柔弱ニシテ女子ノ如ク、元ヨリ下ヲ御スルノ君德ナシ、是ヲ以テ家老・諸役人ヨリ國政賞罰ノ筋言上ニ及ベドモ、唯々點頭(ウナヅキスル)ノミ、敎ヘナキ孺子又何ヲカワキマヘンヤ、愚人ノ如ク生涯事ヲ解セズ、仕マヒニソダツルハ、畢竟ハ重臣ニ忠誠卓識ナク、仁義方正ノ訓導ナキヨリシテシカルモノナリ、誠ニ歎息スルニアマリアリ、殊ニ頑陋ノ族ラハ、大名ハ少

シオロカナルガヨシナドト、心得チガヒスルモノモマヽ又コレアリ、實ニ惡ムベキ不忠ノ至リトモ謂フベシ、如レ此上ハ暗柔ニシテ明斷ナク、下ハ陋劣ニシテ精忠ナラズ、コレヨリシテ賞罰アタラザルノミナラズ、私智身勝手ニ流テ、其國政亂ルヽノ勢ヒ、大水ノ砂ヲ崩スガ如ク、其家中ニ志アル士アリトイヘドモ、一杯ノ水一車薪ノ火ヲ救フベカラズシテ、友連レニ今日迄リニオシウツルハ、太平自然ノ勢ヒトモ謂ツベシ、右ノ如ク家老モ勘定奉行モ庸人凡才ナレバ、大體ニクラク、且ツ事ヲ解セザルガユヘニ、勝手六ケ敷ニシタガヒ、種々蠅ヲ拂フヤウノ工夫ヲ出シ、今日オクリニ無益ノ事ノミナシテ、行キ當（仕）リテモ雜費ヲ省キ、弊害ヲ除クニ暇ナク、元ヨリ儉約ノ二字ニテ、經濟ハ盡キタル事ニ心ツカズ、銀主ヲタヲシ、借リ口モフサガレバ、名目銀ヲ借リアツメ、領內ノ町人百姓ニシバ〳〵用金ヲ申シ付ケ、甚シキハ領分融通ノモノヘ、名字・帶刀・乘馬・紋服ナドヲ許シ、格式ヲヒサグヤウニ相成リ、武家ノ威光遂ニハ地ニ落ハテ、其終リハ領內ノ民ト君公トノ雜儀ニナリユクモノナリ、國ニヨリテハ、領分詭黠ノ町人ナド、金銀ヲカリ納ル添役ノヤウニ求テ相成リ、中ニ立チ勘定役ナドト黨ヲ結ビ、貨殖ヲイトナム者マヽ是アリ、士分以下ノ小役人小利ヲ貪ルハ深ク責ルニタラズ、ヤヽモスレバ士列ノ重役人モ姦譎ナル族ラハ、右ノヤク中ニ奢リヲキハメ、或ハ己ガ利ヲ得テ品ヨク役ヲコトハリ、生涯榮華ヲトグルモノアリ、畢竟重役人ノ事ヲ解セザルト、勘定奉行以下ノ小役人小利ヲ貪リテ、忠勤ノ心ナキヨリ來ルモノナゾ、ソノ證據ハカリ難キ金銀ヲカリ納ルヽ工夫ノミニテ、第一ニセ

ネバナラヌ嚴重ノ儉約ハ、何レノ國役人ニテモ、殊ノ外イヤガルモノナリ、定テ其御藩モ、大抵ココニ述ル次第ナルベシ

勘定奉行エラミ方

敢テ問フ、如何ニモ貴老ノ申サル丶如ク、我等愚昧ナルヨリ、右ノ如ク勝手ムキ難澁ノ場所ニ至レリ、サシムキ如何シテ可レ然哉

答曰、卓識忠良ナル一人ノ勘定奉行ヲエラミ用ルニアリ、勘定奉行ハ其國ノ勝手困窮ガラニヨリ、一筋ニハ申シガタケレドモ、先ヅ人トナリ、簡約ニシテ己ガ勝手ムキ、身ノマハリ質素ヲ好ミ、寡欲ニシテ遠略アリ、腹中有算ノ人ヲ用ユベシ、且ツ必至難澁ノ勝手ガラニオイテハ、タマ〱權變アル人モ入用ナレドモ、華美ヲコノミ不潔白ナル人ハ器量アルトモ敗亡ヲ取リテ、終ヲヨクセヌモノナリ、用ヒガタシ、大名ノ勝手ハ、タヾ雜費ヲハブキ儉約ヲ守ルニアレバ、格別六ケ敷コトニアラズ、何分ニモ眞ノケンヤクヲ守ル人ヲ第一トスルナリ

サテ眞ノケンヤクト云フハ、甚ダ味アルコトニテ、腹中有算ノ器材ニアラザレバ、コノ意味ワカリガタシ、腹中無ザンノ人ハ、コノ儉約ト吝嗇トヲワキマヘズ、唯小利ヲ見テ大利ニ心付ザルモノナリ、今世諸侯方ノ役人ヲ見ルニ、眞ノケンヤクヲ知ル人甚ダマレナリ、余ガ知ル人ニハ、龜山侯ノ家老ニ奥平與三左衞門、吾ガ藩ノ林六三郎、膳所ノ家老ニ村松伊右衞門、鯖江侯ノ家臣奥村銀馬ナド申スヤ

ウノ士ハ、實ニ得ガタキ人ナリ、兎角器量ノ有無ハ、其人ニヨルコトナレドモ、タヾ一向ニ主家ノ身上ヲ、自分ノ身上ト同ジヤウニ思フ心得ノ人ヲヨシトス、尤モ六ケ敷勝手ガラニテハ、一人ニ任スガヨロシ、近來末路ノ弊ニテ、心得違ヒノ人多ク、主家ノ勝手向キ立テ直スヤウノ器材ハ甚ダ得ガタシ、タヾ忠實ノ心アリテモ、腹中ニ算ナキ人アリ、又少々器量アリテモ、華美ヲ好デ危キ人アリ、又人ノソシリヲ恐レテ、嚴重ノ儉約ハ出來ヌ人アリ、是ヲ恐ルヽ人ハ嚴法ヲタテ得ズ、華美ヲ好ム人ハ清白ヲ失フナリ、無算ノ人ハ大利ヲ知ラズ、コヽヲ以テ重臣ノ心得ハ、本ヲ務ムルヲ肝要トス、本ヲツトムルトハ、家中ヘ質素ヲ示シ、文武ヲ勵マシ、聖教賢訓ヲ布テ、剛毅・忠實・腹中有サンノ俊傑ヲ多ク仕タテ、賞罰ヲ明ラカニシテ、輕薄佞諛ノ小人ヲ退ケ、一國ノ風儀ヲ善ニ移スガ、根本ナリト心得テ可レ然カ

評判ヨロシキ人ヲエラム論

又問、家中ニテ評判ヨロシキモノアリ、勝手向キ省略ニ付テ是ヲ用ユレバ、諸人ウケヨクシテ命令行レ易シ、是等ヲ用ヒテ可レ然哉

答曰、俗ニ評判ヨロシキ人ニ二樣アリ、器量達才アリテ、衆人如何ニモ感服スルモノハ本眞物ナレドモ、ソレハ尤モ得ガタシ、唯俗人ノヨシト申立ルモノハ、溫潤ニシテ人ニ逆ラハズ、付合ヒノヨキ人ナドヲ譽メタツルモノナリ、眼明カニシテ志アル人一同、ヨシト申シタテネバ本眞物ニアラズ、世上一同ニ評ヨキ人ニハ、格別俊傑ハナキモノナリ、其故ハ傑出卓識ノ士ハ、俗人トハ其見ルトコロ、志ザ

ストコロ違フユヘ、折リニ觸レテハ衆人トウラハラノ事アルユヘニ、一同ヨキトハ言ヌモノナリ、又少シ才氣アル人、世上ニ評ヨキ人ハ、所謂ル己ガ花ヲサカスト云フヤウノ氣味ニテ、凡俗ノソシリヲ嫌ヒ、又ハ小人ヲ悦コバシメント云フ卑劣ナル心アルユヘ、國家ノ爲筋ニナルベキ事ニテモ、人ウケノアシキ嚴法ノ事ハ出來ヌモノナリ、嚴法改政ノ節ハ、却テ邪魔ニナル事多シ、韓非ガ所謂ル姦人ノ丁穉、聖人ノ所謂ル鄕愿ハ德ノ賊也ト云フ類ヒ多シ、嚴法改政ノ節ニハ、剛毅方正ニシテ人ノ非謗スルヲ耳ニカケズ、唯一筋ニ國ノ大事ヲ思フ人ニアラザレバ用タチガタシ、コノ筋ノ人ハ始メ世評アシクトモ、年ヲ歷テ評ヨクナルモノナリ、古ノ所謂ル三年ニシテ民大ニ悅ブノ類ニテ、果敢有爲ノ士ナリ、明主賢臣ハ上ヨリニラミツメテ、是等ノ人ヲ能ク使フナリ、近世備前侯ノ改政ニ、高木右門ナドヲ能ク用ヒラレシトナリ

問フ、世ニ丁寧人ト云フ類アリ、是等ハ如何

答曰、曲謹ノ類多シテ、多クハ大略ナキモノナリ、タヾ細事ヲ勤テ大體ヲ知ラズ、事ニ臨ンデ迂遠ナルモノ多シ、却テ簡易卒忽ニ見ユル人々大略アルモノアリ、コレハ一寸目ニハソコツラシク見ユレドモ、迂遠ノ細事ヲ省クコトヲ知リテ、國家ノ大事ハスカサヌモノナリ、膳所ニ村松伊右衛門ト云フ家老アリ、余ガ知己ナリシガ、卒忽ラシク見ヘシ人ナレドモ、功ヲ立シ人ナリ、兎角重臣ハ眼ヲ明ラカニシテ、伯樂ノ馬ヲエラム如ク、諸士中ヨリ駿足ヲエラミ出シテ君ニスヽムルガ、眞ノ家老ト云フベ

シ

又折リニヨリテハ、人ヲ用ルニ反對ノ者ヲ並ベ用ヒテヨキコトアリ、サレバ本心ノ合ヌ人ハアシケレドモ、氣質所爲ウラハラニシテ、主意一致ニ歸スル人アリ、譬ヘバ一人ハ果決勇悍ニシテ、事ニ臨ンデ一歩モ退カザルモノ、又一人ハ溫順寛裕ニシテ、事ニ臨ンデ深ク守リ、詳密ニ心ヲ錬ルモノアリ、是等ヲ反對ト云フナリ

兎角改政中ニハ、勝手役ハ勘定奉行ニ限ラズ、果敢剛斷ノ者ニアラザレバ、四方ヨリ故障ヲ申立ルニ辟易シ、又人衆ノ多キハ、俗ニ云フモタレ合ヒニナリ、小田原評定ニ流レ、用便アシキモノナリ、如何ヤウノ大國ニテモ、兩人ニテ事足レリ、其下ハ小ザカシキ小手ノキク勘定元〆トカ名付テ、コレモ三四人ニテ、國・江戸トモ金銀出入ニカヽワル事ハ、ヒキスヘテカケ持チニ申シ付クベシ、左スレバ、決斷早クシテモノゴト多端ニナラズ、金銀借リ納レニ付キ出役シテモ、雜費省ケ甚ダ用便ナリ、都テ勘定ニカヽワル役人ハ、華美ヲ好ム人ハ銀主ウケモアシク、家中ノ歸服モアシヽ、如何ントナレバ、諸士ヨリハ勝手役ナドハ結搆ナルモノヽヤウニ、浦山シク心得ル者ナレバ、殊サラニ潔白ニナクテハ、其忌嫌モ遁レガタクシテ、命令行ハレガタシ

重臣勝手ガカリノ心得

問フ、然ラバ勝手向キハ、都テ勘定奉行ニマカセテ可レ然哉

答曰、治世ニオイテハ、勝手役人金銀出納ハ云フニ及バズ、公儀御役ヲ勤メ、士民ヲ撫育シ、此事ノ出ル根本ナレバ、中々重臣タル者人ニ任セテ知ラヌト云フテ、スムベキ筋ニアラズ、卽チ漢ノ蕭何ノ役目ナリ、亂世ニテモ尤モ重シトス、是以テ重臣ノ中卓識ニシテ腹中算アリ、質素儉約ヲコノム人一人、大元取リヲクヽリシメテ、上ヨリ勘定奉行ノ所爲ヲニラミツメテ居ルベシ、且又收納高ト、家中知行高ト、江戸雜費・國ノ雜費トハ、手控ニシテ記臆スベシ、常ニ國家ノ利害得失ニ眼ヲ配リ、金穀出納ノ大體ヲ記シテ、勝手役人ヨリウカヾヒ事ヲ、言下ニ一決シテ下知スベシ、サテ世ノ俗論ニ、大臣ハ細事ヲ知ルニ及バヌナドト中スハ、馬鹿ノ天上ナリ、細事ニ至ルマデ、明白ニシラベ居ラザレバ、下ノ者ヨリ侮リナレテ、色々國家不爲ノ事ヲ自然ト持チコムヤウニナリ、奸人志ヲ得テ、政道是ヨリ破ルヽモノナリ、兎角何レノ國モ政事鈍リテ勝手アシキハ、家老ノ甘キヨリ來ルモノナリ、上ニ一人嚴明ノモノアレバ、下ノモノハドノヤウニモ化シ移リ易キモノナリ、古語ニ上明カナレバ下直ナリトハ、至言ト云フベシ

問フ、改政中ハ勘定奉行一人ニテ事足ルベシ、其以下ノ役人ハ如何シテ可レ然哉

答曰、勘定奉行ノ下ニ兩人勘定吟味トカ、又ハ元〆トカヲ備フベシ、ソノ下役ニ算筆達者ニシテ、見通シアルモノ四五人ヲエラミテ、勘定所ノ記錄算用ナドスルモノニ備フベシ、サテコノ吟味役ヲ數年見習ハセ、其秀タルヲ追々ニ奉行ニアゲ用ルニヨロシ、コノ役ハ事ニナレズシテハ用便アシヽ、又臨

事アレバソレ〳〵カヽリ役ヲ配分シテ、ウケ持ヲ別ニスルガヨロシ、左ヤウナクテハモタレ合ヒノ患ヒアリテ、役向純一ナラズ

勝手向不如意ノ根元ヲ論ズ

又問フ、當時ハ我ガ國ニカギラズ、時風ノ勢ヒニテ、豪富ノ町人ノ鼻息ヲ仰イデ、金銀ヲ借リ納レネバナラヌ姿ニナリユキ、憐レナルアリサマナリ、其根元ヲ救フ術ハ、如何イタシテ可レ然哉

答曰、其御尋コソ尤ニ存ジサフラヘ、智者ハ本ヲ治メズシテハ、末ハ治ラズト云フ事ヲ會得スルナリ、其本ト云フハ、御治世永ク續キ、世上一同ニ前ニ述ル如ク、上下トモ諸事多端ニシテ華美ニ移リ、譬ヘバ士人百俵二百俵位ヒノ身代ヲ治ルニモ、金銀ヲカラデバ、スギワヘ成リガタキ習ヒナレバ、全ク平生ノ心得方分限ヲハヅシ、ソノ足ラザル前ハ、カリテシノグベキコトヲ頼ミニ存ジ、年々歳々ニ覺ヘズ付合ヒヲキバリ、婚禮葬式ノヤウナルコトモ、世上友達レニ重クナリ、世代古クナルニシタガヒ、代々ノ佛事マデモ彌增シ、親類モ年々多クナルノ道理ニテ、其上世ニツレテ諸色高直ニ相成リ、如何ヤウニシテモ物ゴト多端ニ廣ガリ易シ、忝ケナクモ故白川侯ノ思召ノ如ク、何分ニモ今ノ世ヲ救フ術ハ、聖人出ルトイヘドモ、質素儉約ヨリ外ノコトハ決シテナキコトニテ、殊サラ武家ハ大名小名ニカギラズ、世上一般ノ不如意ヨリ政事マデモ破レ、殊ニ陪臣ナドハ三割減或ハ半減、甚ダシキハ其餘ニモ減知セラレ、誠ニ憐レナルアリサマナリ、其上家ノ持チ方ハコレニ反シテ、分限ヲハヅシテ互

ニ顏ヲ張リ合ヒ、士ノ恥ベキコトヲ辱トモ思ハズ、タマニハ心アル者、身分ヲワキマヘ儉素ヲ守レバ、付合ヒノアシキナド言ヒナスヲウタテク思ヒ、止ムコトヲ得ズ、侍風ニ染ミテ友連レ難儀スルニ至ル、其上諸侯方ハ江府御膝下ノ事ナレバ、萬事古ヨリハ雜費イヤマシニカサナリ、今日ノ事ニ追レテ、第一ノ武備、公邊御役儀ノ事ハ、却テ手薄ニ相成リ、其上火災・吉凶・水旱ノ不時ヲクヒ、借金日增ニカサナリ、家中百姓マデモ今日ニ追レ、金銀ノ才覺ニ日月ヲ送リ、甚シキハ參勤交代、又ハ雜費ノカカル御役儀ナドモ、逃レ免ルヽヲ願ノヤウノ姿ニテ、武家ノ威光地ニ落チハテ、都會豪富ノ鼻息ヲ伺フニ至ル、憐レナルコトドモナリ、コノ根源ヲ防グノ術ハ、町人ニ金銀ヲカリ納ルヽコト、禁ズルニ及ブコトハナクトモ、重キ制度ヲ立ツベシ、ソノ證據ハワヅカ六七石ノ足輕ニテモ、六七石ノ心得ニテ暮セバ、大勢ノ子供アリテモ、乞食ニモナサズ養育シテ、タマ〳〵ハ少々ノ金銀ヲ貯ルモノアリ、畢竟ハソノ分限ノ心得ニテ暮スユヘ、金銀ヲ借リ納ルヽ、趣向モナケレバ、貸ス者モナシ、儉約シテ內職等ヲイトナミ、分限ヲハヅサヌユヘ、卻テ人ニ損失モカケズ、品ヨク世渡リヲ、重祿ノモノヨリハ潔白ニイタスモノナリ、兎角重祿ノモノハ町人ヲタヲシ、內心ニハ人ニ侮ラレテ、ソノ威光ナシ、又百石二百石ニカギラス、千石萬石十萬石百萬石ニテモ、今日ノ困窮ニ至ルワケハ、全ク金銀ヲカリ納ルヽコトヲ賴ミニスルヨリ來ルコトヽ思ハルナリ、殊サラ家柄ノ士人ハ、顯役要路ニ出頭スルワケガラヲ、町人ハ能ク承知イタシアルユヘ、小身タリトモ、其人ヲ目利シテ金ヲ貸スモノアレバ、ソレヲ

タノミニ分限ヲハヅシ、如何ヤウトモ相成ルベクナドト心得テ、今日ノ姿ニナリユクコト疑ヒナシ、左スレバ百石ハ百石ノ分限、萬石ハ萬石ノ了簡、十萬石ハ十萬石ノ暮シ方ニテ、用便タチユクヤウニ法ヲ立レバ、ワケナク眞ノ改政ナリ、又諸侯ノ家中ナレバ、金銀ノカリ納レガ、必ズ賄賂ノ行ルヽ橋カケトナルベキナリ、武威ニテ治リタル難レ有御代ナレバ、何卒シテ幾萬代モ武威ノオチヌヤウニイタシ度モノナリ、重臣ニ明決剛斷アレバ、コノ源ヲ防グニオイテ、格別六ケ敷コトハアル間敷トオモハルナリ

問フ、貴老ノ議論ノ通リ、士人金銀ヲカリ納ルヽ制度ヲ立ルコトハ、至テ易キコトニ候得共、士人トテモ江府勤番・臨事・非常・吉凶等ノ火急ニ入用ノ節ハ、如何取リ計ヒ可レ然哉

答曰、是レ則チ平生ニ臨事・非常ノ積金ヲナスベシ、積金ナケレバ士人相應ノ質物ヲ以テ用便スベシ、質ヲ納ルヽニオイテ、士人町人ヘ對シ義理モカヽラズ、世話ヲウケネバ政道ニ妨ゲナシ、兎角今ノ世ニハ町人利ヲ見ルニサトキユヘ、先ヅ世話ヲイタシ置キ、ソレヨリ身勝手ヲ持コミ、其俸ヲ使フテ、己ガ利分ヲ營ムコト多シ、一タビ此制度立レバ、一擧シテ兩善ヲ興スノ術也、又主侯餘財アレバ、藏奉行役所ニテ其分限ニ應ジ、年割リニ貸シツカハスモヨロシ、又主侯ノ臨事・非常ハ、都會豪富ノモノニ融通ヲタノムベシ、自國ノ町人ヨリ融通スレバ、國威オツルノミナラズ、勘定役トナレ合ヒ、米價ナドヲ引下ゲ、不正ノ利ヲ計ルコトアリ、心得アリテ然ルベシ

問フ、如何ニモ貴老ノ議論ノ如ク、六七石ノ足輕ニテモ品ヨク渡世イタシユクナレバ、五十俵百俵ノ士ハ急度スギハヘ出來ル道理ナレドモ、彼レ士列以上ナドト心得テ、鎗・挾箱ナドヲ持セ、若黨小者ヲ召シ連レル風儀ナレバ、是又名聞バカリデナク、足輕ノヤウニモマヒリガタキ場所アリ、是等ハ如何取リ計ヒ可レ申哉

答曰、士列以上ニテモ其祿ニ準ジ、諸ノ吉凶儀式事ノ供立モ、人數制度ヲ相成ル丈ケ減ジテ定ムベシ、國初以來制度ハ定リアレドモ、何分供立ハ三分一ノ減ジ方ヲ目當ニシテ然ルベシ、天正ノ頃本能寺ノ變ヨリ、天下一統ニ供ダテ多人數ニ相成ルコト、上古ニ十倍スト思ハルヽナリ、コレハ亂世ノコトニテ、太平ノ例トスルニ及バズ、且又參府出役ニモ乘輿ヲカタク禁ジ、葬式婚禮ニ至ルマデ、其知行分限ニ應ジテ裝ヒヲカザリタキコトナリ、法度ハ如何ヤウニシテモ、嚴重ナルヲ要トス、近來土州侯ノシマリ方ハ、殊ノ外嚴重ニシテ慕フベキ風ナリト聞傳ヘリ

金銀融通ノ論

問フ、兎角金銀ヲ借リ納ルヽガ、時弊ノ根本也ト申スコトハ、如何ニモ承知イタシタリ、然ルニ主侯ノ勝手ハ、家中ノ族ラトハ一ヤウノ筋ニモマキラズ、臨事。非常、公邊御役儀、或ハ水旱ノ節國ニ餘蓄ナキハ、如何取リ計ヒ可レ申哉

答曰、國ニ三年ノタクハヘナキハ、國其國ニアラズト傳ヘ聞ケリ、重臣元ヨリ遠路算數アレバ、年々

其非常ノ手當ヲ積金ニシテ備ヘ置クベキコトナリ、若シ其手當ニ暇マナキ時ハ、都會豪富ノモノニカリ納レテ政道ニ害ナシ、只其返濟ニ付テ違約ナキヤウニスルヲ第一トス、近來諸侯ノ家臣町人ヘ損失ヲカケテモ、主人ノ恥辱トモ存ゼズ、タマニハ僞リ奪フヤウノ筋ニ落ルモアリ、誠ニ苦々敷次第ナリ、眞ノ金銀融通ハ、返濟ニ違約ナク、タシカニスレバ、天下ノ財寶ハミナ自己ノ府庫ニヲサメ置クト同ジ、殊サラ浪華ノ豪富ドモハ、元來金銀ノ貸シツケヲ家業トイタシ來レバ、實ニ返濟ノアルベキ道ナレバ、アリガタク存ジテ五六朱ノ下歩ニテモ謹デ用達スベシ、近來風儀アシキ諸侯方ノ重役ヲ見ルニ、從者數十人召シ連レ、音物ヲ重クシ銀主ニ逢フヲ王侯貴人ノ如クニ存ジ、其手代ナドノ鼻息ヲ伺ヒテ、諛ヒ笑フノ醜態、實ニ悲ムベキニアマリアリ

右ノ如ク武威地ニ落チ果テ、下ノモノ上ヲアナドリ輕ンジテ、制シガタキノ弊ヘ、遂ニ國家ノ盛衰ニモカヽハルベキナリ、其上領分ノ町人百姓ニ度々用金ヲ申シ付レバ、下ノモノヨリ合力ヲウクルノ理ニテ、君ニ恥辱ヲ與ルト同ジコトナリ、假令ヒ彼レヨリ國恩冥加ヲオモヒテ、用金願ヒ出ルトモ、必ラズ薄利ヲ加ヘテ返濟スベシ、銀談ニカギラズ、治世ノ弊ハ兎角柔弱ニ流レ破ルヽモノナレバ、重役ハ恥ヲ重ンジ、嚴ヲ主トシテ命令ヲ下スベシ、命令ニ虚言ナケレバ、國威自ラ立ツモノナリ、殊サラ金銀ヲ借リ納ルヽ祕術ハ、貸シ付ルモノヽ心ヲ會得スベキ事ナリ、今時國政惡キフリ合ヲウカヾフニ、セドノ士ヲ門ヘハコブヤウノ手段ニ追レ、貧スレバ鈍スルト云フ譬ヘニテ、銀主ノ意味合ヒヲモ解サ

ズ、役人ツトメテ衣服刀劍ヲカザリ、音物盛饍ヲ厚クシ、或ハ華街戲場ナドニ盛宴ヲ張ルヤウノコトヲ主トス、今世ノ銀主ハ右樣ノ餌ニハカヽラズ、戒ムベシ、當時ノ町人ハ利不利ヲ見ルコト、サスガ家業トスレバ、諸侯方勝手ノ虛實ハ、屋敷ノ役人ノ衣服起チ振舞ヒヲ見テ知レルト、鴻池屋善右衞門ノ話ナリ

重臣學文ナケレバ、其任ニ堪ヘザル論

又問フ、耆老不學無術ノモノハ、重臣ノ任ナシト云ヘリ、必ラズ學者ヲ用ヒテ可ㇾ然哉

答曰ク、其學者ト云フ者ニ二樣アリ、タヾイタヅラニ書ヲ讀ムモノヲ學者トハ云ヒガタシ、眞ノ學者ト云フモノハ、聖人ノ所謂ル天理自然ノ道ヲ能々會得シテ、何卒其通ニ道筋ヲ踏デ、今日ノ事ヲ行ハント、晝夜一筋ニ心ガクルモノヲ、眞ノ學者ト稱スルナリ、世上ニタヾ書ヲ讀ムコトヲ好ンデ、其道ヲ會得シナガラ、其通リヲ行フコトノ出來ヌ者ハ學者ニアラズ、是ハ藝者トモ云フベシ、全ク詩人・文人・歌人ノ類ナリ、碁ヲ圍ミ茶ヲ點ズルト同ジ者ナリ、又書ヲヨマズトモ、天性忠信德行ノモノアリ、又智略變權アリテ、國家ノ大用ヲナスモノアリ、併シ右ヤウノ人コノ上ニモ學文スレバ、其所爲品等高キノミナラズ、其器幹モ大ニ勝レテ、調子ヲハヅスコトナシ、何レノ道ニモ學文ハ、人タルモノハセネバナラヌ事ト心得テ然ルベシ、又世間ニ讀書ノ人ヤヽモスレバ不行跡アレバ、學文ヲ好マヌ族ラハ、學者ハ兎角右ヤウノ事ヲ仕出スナドトアザケリテ、學文ヲ惡キコトニ申シナスハ僻言ニテ、畢竟

マケヲシミヨリ申シ立ル事ナリ、學文シテ悪行アル人ハ、其氣稟ノアシキ生レニシテ、學文ナケレバナホ其上ニ悪事ヲ仕出スノ筋ナリ、一概ニ論ジテ學文ノ罪トスルハ、所謂ル噎ニコリテ食ヲ廢シ、アラカジメ風濤ヲ恐レテ、舟楫ヲ廢スルノ類ナリ、性ニ上智下愚ノ差等アリ、質ニ善悪ノ分別アレバ、物事ハ委曲ニ論ジ盡サネバナラヌモノナリ、然レドモ學文ニ仕ヤウアリ、何分ニモ初學ハ宋儒ノ書ヲ讀ミテ其說ヲ會得シ、先ヅ誠意正心ヨリ致智格物ニ至ルマデ、其深意ヲ明ラカニシ、仁義禮智信ノ五常ハ、人タルモノハ身體ニ備リアレバ、コレ道ニ離ルヽコトハナラヌモノニシテ、離レテハ人ニアラズト云フヤウノ理ヲサトリ、見識ヲ定メ置テ、而後歷史ナドヲヨミテ、古人ノ嘉言懿行ヲ見ルニ付ケテモ、サテモカヤウニアリタキモノト云フヤウノ感慨企望ハ、自然ト起ルモノナリ、其外十子ノ書ナドヲ見テモ、大ニ智術ヲ輔ケテ益アリ、故ニ政ヲ執ルモノヽ學文ハ、義理ノ大體ヲ會得シテヨロシ、當世文人ナドノモテハヤス小說詩集ノ類ハ、必竟ハ書畫・詠歌・圍碁ノ類ト同ジモノニテ、心ヲ慰ムルタメノ道具ニシテ、學文ニハアラズト心得テ然ルベシ、儒生ノ如ク章句ノ義理ヲ深クサグルニ及バズ、兎角世上ニ宋儒ノ說ヲ奉ズル人卓識ナクシテ、學文ノ支流ニ縛リ付ラレタルゴトク、才幹舒暢セズ、細事ヲヤカマシク言ヒ立テ、袴ヲ著ルヲ篤實ト思フヤウノ意味ニ流レテ、何事ヲスルモチヾミコミテ、政道大事ニ臨ンデ、何ノ用ニモ立ガタキ姿ニテ、小兒ノ句讀ヲ授カルノ師ニスギザルヤウニナルモノアリ、ヤヽモスレバ僞君子ノ風ヲ免レザルモノアリ、又一種詩文章筆力達者ニシテ、輕薄放誕ナ

ルヲ豪傑ノヤウニ思フ筋ニ落チテ、世人ノアザケリヲ受ルモノアリ、其人ノ天性ニハヨルモノナレドモ、是ハ全ク初學ヨリ師導ノ行キ屆カヌナリ、併シ何レノ道ニモ學文シテ惡キ理ナシ、故ニ藩中ニハ傑出卓識ノ師ヲ厚ク聘シテ、諸士ノ俊傑ナルヲ仕立テサスルガヨロシ、スベテ國家ノ用ニタツベキモノハ、先ヅ大體ニ通達セ子バナラヌモノナリ、是ヲ導ク師匠トテモ、卓識ナケレバ、傑才ヲ門ヨリツクリ出スコトアタハズ、又大材ノ人細事マデモ行キ屆キ、大節ハモトヨリ動カサヌト云フヤウノ人ハ、世上ニオイテ得ガタシ、何レニテモ重臣タルモノハ、學術ナケレバナラヌコトト心得テ然ルベキコトナリ、張楊園コノ事ヲ歎息セラレテ、人或ハ王安石ヲ以テ罪ヲ學文ニ歸スレドモ、世上ニ安石ヨリアシキ人ハ幾許クゾヤト云ヘリ、眞ニ心得アリシ名言ナリ

銀主ヲ撰ム論

問フ、銀主ハ如何ナルヲエラミ頼ミテ可レ然哉

答曰、銀主ハ融通大キクシテ、質素ナルヲヨシトス、大勢ハ用便ヒマドリテ損失アリ、小キ銀主ハ友連レヲ好ミテヨロシカラズ、利息ハ卑キニ越タルコトハナケレドモ、用便スミヤカナレバ、八朱位ヒマデハ損失ハナカルベシ、タヾ貸シ方腹アリテ、雜費ノカヽラヌヤウニト心ガケテ早ク決許シ、用便スミヤカニ斷ジクレルヲヨシトス、利息ハ下歩ニテモ雜費ヲ顧ミズ、長談シテ呑コミアシキハ、用便ヒマドリテ損失アリ、又手代口入ノ輩ラ多クカヽリテ、不シマリノ家風ノ銀主ハ、役人其風儀ニ染ミ

テヨロシカラズ、又銀主ノ金銀ヲ諸侯方ヘ調達スルハ、タトヘバ大切ノ吾ガ娘ヲ嫁ラシムルト同ジ、故ニ風儀ヨキ家格ヲエラミヨメラスベシ、婿ノ家風アシク、取リシマリアシキ家ニ、不吟味ニテ嫁ラスレバ、破縁シテ取リ返スコトモナラズ、大切ノムスメヲワヤ〳〵ニシテ棄ルト同ジ、故ニ役人ノ取リシマリ方アシク、賄賂沙汰ノ行ハルヽ諸侯ヘハヨメラシガタシ、右様ノ家ニハ、中言ヲ云フ小舅姑ノ多キ所ヘ嫁ラスルト同ジ、其ムスメ相續六ケシヽ、併シ誤テヨメラシタレバ、何分ニモ其ムスメ不愍ト思ハヾ、如何ヤウニモ骨折テ、ムコノ家ノ風儀立テ直リ、取リシマリノ改革シテ、年々其娘ノ里歸リヲナルヤウニ、實情ヲ以テ世話スルガ、眞ノ利幹ノ銀主トモ申ベシ、タヾ大切ノムスメヲ遣シ置、逃ゲ尻ヲカマヘテ無性ニコハガリ、向フノ相續ニ付イテ骨ヲ折ラヌハ、吾ガ大切ノムスメヲ見殺シニスルト同ジ道理ナリ、且又婿ノ家モ實意ノ銀主ノ申ス事ハ相用ヒテ、其心ニ觸レザルヤウニ、實意ノ世話ヲ受ルガ用便スミヤカニシテ利益アリ、左ヤウナクテハ差向キ非常ノミギリ、主用便ゼズシテ、敗亡ヲ取ルコトアリ、是又雙方ニ聞セ度コトドモナリ

銀札米札ノ事

問曰、近來諸國トモ銀札米札追々出來シ、遂ニハ其弊アレドモ、領分ノ者モ便利ニ任セ、鄰國ノ札ヲ頻リニ取リアツカヒ、國中自然ト金銀拂底ニ相成リ、ヤヽモスレバ引替ヘ滯リテ、損失自國ニ及ブコトアリ、領分ヘハ他國ノ銀札取リアツカヒ停止可レ申哉

答曰、其銀札コソ國益ヲ得ルタメニハ作リガタシ、如何ントナレバ、利益ヲ見テ作レバ、譬ヘバ千貫目ヲ作リ出セバ、必ラズ千貫目ノカヘ金ヲ貯ヘ置ネバナラヌナリ、コレヲ貯ヘ置テハ、利益ヲ得ルコトナシ、其貯ヘナクテ遣ヒ出セバ、其遣ヒ出ス札丈ケハ、利益ノヤウナレドモ、其札收納ナドニ廻リ返リ、或ハ米拂ヒ抔ノ代銀ニ返リ來リ、實ニ我ガ拔タル刀ヲ人ニ奪ヒトラレテ、我ガ切ラルヽト同ジ道理ナリ、又國ニヨリテハ役人無術ニテ、ヤヽモスレバ其札ヲ潰ブシテ、引替所ヲ引拂ヒ、他國ノ人民マデニモ損失ヲカクルコトアリ、其毒遂ニハ領分ノ小民マデ流レテ、大害ヲ引出スコト少ナカラズ、併シ隣國ノ札ヲ取リアツカヒ、右ヤウナル毒ヲ領分ノモノヘ受ルヲ救フタメナレバ、札ニテ利益ヲ思ハズ、出札丈ケノタクハヘヲ以テ、領分ノ融通ノタメニ出セバ、其害ハナカルベシ、併シ必至困窮ノ勝手ガラニハ、當座ノシノギニ、取リアツカヒノ法ヲ知リテ作リ出セバ、大ニ利益ヲ得ルノ法アレドモ、容易ニハ述ベガタシ、大約國產多キ國ニテ作リ出セバ、相應ニ利分ヲ得ルコトモアリ、是ニ付テモ余別ニ論アリ

廻米ノ事

問曰、諸侯悉ク浪華ノ借金返納引當ノタメニ、廻米スル事多シ、其利害如何

答曰、コレハ十年見積リテ、其得失ヲ論ジ廻米スレバ、格別ニ損ナカルベシ、但シ中國筋又ハ九州邊ノ米多キ國ハ、是非ニ浪華ニ廻ワサネバ、今時ニテハ賣捌キガタシ、殊サラ西國ハ冬分ニ米廻リ、運賃

モ少ナク、升數モ減ゼズ、切手ニテ金銀ノ融通モツキ、マタ其國ノ直段モ引上ゲレバ、年ニヨリテハ餘程ノ利潤モアルベシ、又奥羽トテモ米多キ國ハ、江府ヘ廻シテ然ルベシ、コノ得失ハ國ガラニヨリテ、一概ニ論ジガタシ、北國遠國ハ春廻シニ相成リ、其上ニ運賃過分ニカヽレバ、大約失算ニモ及ブコトアルベシ、殊ニ米少ナキ國ハ、浪華廻シハ失算少ナカラズ、併シ廻米ナケレバ、其國ノ商人直段ヲ甚ダ引下ゲ見タホスユヘニ、拂ヒ米ノ法ハ甚ダ六ケシヽ、忠實融通ノ町人カ、又ハ忠實錬熟ノ役人カ、上ノタメ筋ノミヲ思フモノ、取リアツカフニアラザレバ、損失スクナカラズ、兎角コノ拂米ニ付テ、何レノ國ニテモ、領分有德ノ町人ニハ、油斷ノナラヌモノト心得テ然ルベシ、仙臺侯ノ廻米ヲ、先年江戸ニテ升屋平右衛門ノ取リアツカヒショリ、利益アリテ損失少キヤウニ聞及ベリ、又藝・備兩侯ノ米ヲ、鴻池屋善右衛門取リアツカフテ、拂フ次第ヲツブサニ語ラレシガ、コレ等ハ米價ノ筋ニ委クシテ、實意ノ銀主ナレバ、相應ニ行キ屆キテ、損ナキ樣子ニ聞及ベリ

破レ家ノツヾクリ話卷之上終

破レ家ノツヾクリ話卷之中目次

政事篇

一　重役ハ人ヲ目利スルガ先務タル論
一　良カラザル家老ニ政事ヲ任ズレバ、其君恥辱ヲ受ル論
一　制度ヲ固ク立ルハ、善政ナル事ヲ論ズ
一　事ヲ省クガ、善政ナル事ヲ論ズ
一　政事ハ寛ヨリ猛ガヨロシキ論
一　賞罰正シキハ、眞ノ仁政ナル論
一　賞ノ濫レハ、私恩ヨリ來ル論
一　愛憎甚キハ、賞罰濫ルヽ論
一　人ヲ使フハ、義ヲ勵マスニアル事ヲ論ズ
一　君上諫ヲ納ル心得、臣下諫ヲ奉ル心得方
一　酒ヲ戒ルハ、國益ヲ興シ惡風ヲ除ク兩全ナルヲ論ズ

一　國益ハ農業産業ヲ勸ルニアルヲ論ズ

一　賄賂ヲ固ク禁ズルガ、國政ノ基本タルヲ論ズ

一　淫祠ヲ絕ツハ、人ノ惑ヲ解キ費ヲ除クノ善政ナルヲ論ズ

破レ家ノツヾクリ話 卷之中

政事篇

重役ハ人ヲ目利スルガ先務タル論

君上ハ勿論ナリ、家老重臣ナドノ政事ニアヅカル人ハ、人ヲ目利スルヲ、已ガ役前ト心得テ然ルベキ程ノ大切ノ事ガラナリ、コノ目利出來ヌ人ハ其任ニアラズ、目利サヘ出來レバ、賞罰ハ自ラミダレズ、勝手取リ直シニ付テモ、能アル人ヲ用ルニアリトコソ思ハレケリ、又君タル者ハ器量アルモノニ任セオケバ何ヲセズトモ拱手シテ國家ハ治ルユヘ、第一ノ仕合ナリ、我邦ノ如キ世祿ニテモ、其國ノ大小ニヨリ、其國相應ニ人ハアルベキ筈ナリ、他國ヨリ求メズトモ、目利サヘスレバ事ヲカクコトハナカルベシ、サテ人ノ生レツキハ大ナル品等アルモノニテ、譬ヘバ金ノ位ニ生レツキタルモノアリ、銀ノ位ニ生レツキタルモノアリ、銅ノ位ニ生レツキタルモノアリ、鐵ノ位ヰ鉛ノ位ヰニ生レツキタルモノアリ、學文ニテ磨キサヘスレバ、其生レツキノ光リ丈ケハ、必ズ出ルモノナリ、是ニヨリテ其所作トテモ、其位丈ケノ事ニテ、其餘分ハ用タチガタキモノト云フコトヲ、能々ワキマヘテエラミ使フベシ、鐵ヲ使フ場所ヘハ、ナマリハ用立チガタキ理ナリ、又鉛ハ如何ヤウニミガキテモ、銀ノ光リニハナラ子

ドモ、時アリテハ鉛デナケレバナラヌ場所モアリ、其ノ人ノ得手不得手ヲ目利シテ、用立チサスルモ是ト同ジ道理ナリ、何分ニモ人ハ根氣強ノシテ物ニアカズ、果敢忠誠ニシテ道理ヲ見ルコト早キモノニアラザレバ、用立チガタシト知ルベキナリ

サテ家老重臣タルノ六ヶ敷ハ、器量用立チサスル人ヲ目利スル計リデナク、小人奸人ヲモ能々目利シテ退ケ子バナラヌナリ、宋ノ王安石宰相ニナリシヲリカラ、天下ノ人ミナ能キ宰相ヲ得タリト悦コビシニ、呂獻可一人カタギリテ、國事ヲ敗リ民ヲ害スルモノハ、必ズ此ノ人ナリト云ハレシガ、果シテ宋ノ天下ヲ弱メタリ、是ヲ以テ人ノ善悪ヲ目利スルガ、上タル人ノ第一ノ事ト知ルベシ

九方生曰、聖人ノ御詞ニ、其人アレバ其マツリゴト擧グ、其人ナケレバ其マツリゴト熄ムトアレバ、如何ヤウノ善キ政事仕方アリテモ、其人ヲ得ザレバ、其政事ヲ取アツカフコトハナラヌナリ、殊サラ改革ノ節ナドニハ、其人ガ第一入用ナリ、コレヲ圍碁ニ譬レバ、政事ハ棋盤・棋石ナリ、其政事ヲトリアツカフハ碁ノ手ナリ、盤石ハ備リアレドモ、妙手ヲウツ人ニアラザレバ、棋ヲウツトハ云ガタシ、下手ナルモノヽ棋ヲ圍ムヲバ、側ニ見居テサヘ、片腹痛キモノナリ、別シテ國家ノ事ハ庶民ノ死生・苦樂ニモカヽワルモノナレバ、コノ妙手ヲウツ人ガ肝心ト思ハルナリ、余故ニ此條及ビ次條ヲ拔テ、是ヲ此篇ノ第一第二ニ置クモノ然リ、（原本ハ人ヲ使フハ、義ヲ聞スノ條ノ下ニアリ）

良カラザル家老ニ國事ヲ任ズレバ、其君恥辱ヲ受ル論

サテ事ヲ解サズ、人ノ目利モ出來ズ、智略ナキ家老ニ國事ヲ任ズレバ、亂世ナレバ、其國ヲウシナヒ、治世ナレバ、國政衰ヘ勝手向キワヤ〳〵ニナリテ、其君恥ヲ受クルノミナラズ、武威地ニオチハテ、一家中ハ勿論ナリ、其國ノ百姓町人ニテモ、甚ダ難儀ニ及ブモノナリ、サテアシキ家老ト云フハ、己レ器量ナキノミナラズ、負ケ惜ミ强ク、己レニ勝レルモノヲバ、忌ミ嫌フモノナリ。スデニ前ニモ述シ如ク、重臣胸狹クシテ妬心深キハ大疵ナリ、殊ニ下ニアル人器量アレバ、人情ニシテ小ヅラ惡シト思フ氣味アルモノナリ、胸狹クシテハ、人材ヲエラミテ用ルコトアタワズ

世祿ノ家格ニテハ、家老ノ下ニ政事ヲトリ行フノ要役ヲ立テ、平士中ヨリ明達ノモノ、足高ニテ引出シ用ユベシ、肥後藩ニイヘル大奉行是ナリ、何分廣ク能アルモノヲエラバザレバ、何事ニ付ケテモ下手ヲウツコト多クシテ、國ノ大損ナリ、タトヘバ下手醫師ニ任セテ、其身ヲソコナフト同ジコトニテ、安スモノ、錢ウシナヒナリ

且又上ニ立ツモノノ忠誠ナレバ、下ノモノハコレニセリタテラレテ、用立ツモノモ追々出來ルナリ、又能ナキ輩モ能アルヤウニナリユクベシ、譬ヘバ藤樹先生ノ德化近邊ノ村々ニ及ビテ、路ニ落シタル金ヲヒロハザルニ至ル類ナリ、又一鄕ニ碁ノ强キモノ一人アレバ、其近鄕ニモ相應ニ碁ヲウツモノ出來ルト同ジ、兎角國ノマツリゴトハ其人ヲ用ルニアリ、三國ノ劉玄德、襄陽ノ司馬徽ヲ訪フテ、天下ヲ平ルノコトヲ尋子ラレケレバ、其答ニ、儒生俗士何ゾ時務ヲ知ランヤ、時務ヲ知ル者ハ俊傑ニアリト

云ヘリ、コノ一語深ク味フベキ名言ニテ、時務トハ、時ノツトメト讀テ、サシ當リセ子バナラヌコト云フ義ナリ、俊傑トハ、千人萬人ニモスグレタル卓識ノ人ト云フコトナリ、古今ノ書ヲ讀ミチンプンカンヲ云フ儒者、又小賢シキ才アリ、又武勇アル人ニテモ、卓識ナキ俗物ハ役ニ立ツモノニアラズ、タヾ役ニ立ツベキモノハ、俊傑ノ人ニコソカギル、コノ俊傑ノ人コソ、當時サシ當リテ天下ヲ平グル先務ヲシリタルゾト云フコトナリ、實ニ玄德ト云フ人、曹操トクラブレバ、手ツツノ上身上モ小サク、中々操ト敵對ハ出來マジキ人ナリ、タヾ徽ノ言レシ諸葛孔明一人ヲ得テコレニ任ゼシユヘ、遂ニ三國鼎足ノ大業ヲ開カレタリ、關羽・張飛トテモ孔明ナカリセバ、タヾ戰陣ニ臨ンデ五十騎カ六十騎カノ働キヲナスニ過ギズシテ、玄德ニ大業ヲ成サシムルコト能ハズ、是以テ人君ハ器量アル臣下ヲエラミモチユルガ一大事ナリ、恐レ多クモ故白川侯ヲ御加判御輔佐ニ御用ヒアリシ折カラ、世ノ風儀正クナリ、備前芳烈公熊澤次郎八ヲ重ク用ヒラレ、肥後靈威公堀平太左衛門ト云フ平士ヲ重臣ニ擧ゲモチヒシヨリ、肥・備ノ二藩文武ノ士風トナルハ、實ニ人ヲ目利スル器量アリト云フベク、是皆一轍ノ美談トゾ聞ヘケリ

制度ヲ固ク立ルハ、善政ナルヲ論ズ

余幼キ時ヨリ諸葛武侯ノ人ガラ、幷ニ其所作ノ行屆キテ、指ノ先マデキヽテ遺漏ナキニ心醉シ、及バヌコトナガラ、吾モ人ナリ、事ニ當ラバコノ人ヲ手本トナサバヤト心中ニ思ヒ侍レドモ、人ニ語ラバ

狂人ト言レント存ジテ、遂ニ人ニハカタラザルナリ、先儒或ハコノ公ヲ申韓學ナドトサミシ、兵ヲ用ルハ所長ニアラズナドト論ズルモノアリ、實ニ心ナキ鼠輩ナリ、扨公ノ國ヲ治メ師ヲ出スニ付テモ、法度ヲ嚴クシ、賞罰ヲコマカニ論ジツメテ、誰レアリテ怨言ヲ出スモノナク、罰セラレタル輩ヲモ、公ノ死ヲ聞テ涕泣スルニ至ルハ、實ニ大德トモ仰ギ奉ルベシ、國家ヲ治ムルモノハ、必ラズ此ノ公ヲ模範トシタキモノナリ、サテ近來諸侯方ノ制度嚴ク立タル家ハ、困窮ニ至レドモ格別大崩レニ至ラズシテ、覺ベキノ政事存シアリテ、國民上ヲ侮ラザルナリ、腐儒輩事ヲ解サズ、法度ヲ固ク立ツルハ、申韓ノ流ナドト胡椒丸呑ニ賤シメドモ、コレハ時勢ヲ知ラザルノ愚論ナリ、サレバ王道ヲ迂ト云フニハアラズ、矢張リ制度正シケレバ則チ王道ニシテ、差別ナキモノナリ、諸事ノ裁判宜キヲ得ルコソ、眞ノ政道トモ云フベシ、殊サラ唐土三千年以前ノ人情ト、本朝今日ノ人情トハ大相違ニテ、太古ヨリ唐ト我邦トハ、國ノ建方モ振合ヒ違フテ、唐ハ國境ヒ三夷ニ接ハリ、明主ニアラズシテハ治メガタキユヘ、堯ノ大聖早クモ其意ヲサトリ、士民ノ舜ニ天下ヲ讓リシナリ、我ガ皇國ハ大海中ニ特立シテ、難有神國ナレバ、百王一姓ニテ、千古以來相代ラズ治リアルナリ、何レニモ神ト聖トノ御心ハ同ジケレバ、天理ニ合フ道理ハ一致ナリ、是ニ准ジテ我ガ國ハ世祿ヲ以テ門地ヲ貴ビ、門地ナキモノヲ卑ムモ、異國ニナキ一美事ナリ、是以テ制度ハ其國ノ模樣ニヨリテ立ルヲヨシトス、和漢トモニ事ハ違フテ理ハ同ジコトナリ、タダ其根本ハ誠意正心ノ四字ヨリシテ、天理自然ニ隨フテ設ケザレバ行レガタ

シ、上ニ立ツノ方々ヘハ、コノヤウノ道理モ御承知アラセ度モノナリ

九方生曰、國ノ制度ハ碁盤ノ目ノ如シ、如何ヤウノ妙手ニテモ、目ナキ碁盤ニテハ手ハウタレヌナリ、余故ニ又此條ヲ抜テ、第三篇ニ置クモノ然リ（原本ハ淫祠ノ條ノ上ニアリ）

事ヲ省クガ善政ナル事ヲ論ズ

凡ソ治世永ク續ケバ、諸事繁雜ニナリテ、其内ニ無益ナル事ノミフヘテ、雜費多キノミナラズ、人手間モ大勢ニナルモノナリ、ソレ故ニ相成ルダケ事ヲハブキ減ジテ、人手間ノカヽラヌヤウニスルヲ、眞ノ儉約トモ云フベシ、金銀ノ費ハ勿論ナリ、人力ヲ省クモ儉ノ根本ナリト心得テ然ルベシ、當時諸家ノ役人ノ所作ヲ見ルニ、本ヲステヽ末ニ走リ、兒戲ニ類スルコト多シ、無用ノ事ハ是非ニ一切省ブキ除クニヨロシ、痛クハブキ除キテモ、上代ニ比ブレバ、相應ニ諸事繁多ニナルモノナリ、諸役所向ノ帳面、世代ノ佛事マデモ、年々ニ増スト同ジコトナリ、元ノ憲宗其臣耶律楚材ニ、天下ヲ治ル要メナル事ヲ問ヒ玉ヒシカバ楚材ノ答ニ、一事ヲ生ズルハ、一事ヲ減ズルニシカズ、一利ヲ興スハ、一害ヲ除クニシカズト云ヘリ、蓋シコノ趣意ハ、一ツノ善事ヲクハダツルヨリハ、一ツノ惡事ヲ除キ去ルガヨロシ、一ツノ利分ヲ興シクハダツルヨリハ、一ツノ無益ノ費ヲハブキ去ルガヨロシト云フコトニテ、何事ニヨラズ仕來リノコトニテモ、不用ノ事、無益ノ事ヲ停止スルガヨロシク、又善人ヲ擧ゲ用ルヨリ、如何ヤウノ人ニテモ、國家ノタメニナラザル小人ハ、ノゾキ退クルガヨロシト云フ事ガコ

モリアルナリ、コノ手本ハ堯舜ノゴトキ大聖スラ、四凶ヲ放チ鯀ヲ殛シ、孔子ノ至聖スラ少正卯ヲ誅ス、コノヤウノ事ハ誰モ知リタルコトナレドモ別シテ當時一番ニ入用ノコトガラユヘ、コヽニ論ズル也

政事ハ寛ヨリ猛ガヨロシキ論

金主雍ト云フ王ハ、小堯舜トモ呼レタル仁君ナリ、其志シモトヨリ慈仁ノ生レツキニテ、眞ノ治國安民ニ骨ヲ折ラレシ君ト見ヘケルガ、其群臣ニ語ラレシ言ニ、政事ニオイテ寛慈ヲ本トスルハ、コノ上モナキ美事ナレドモ、コノ術ハ實ニカタシ、我ラ如キ者ニテハ、賞罰ヲ濫レザルヤウニスルガ眞ノ寛政カト言レシ、コノ一言味ヒアリテ、唐モ日本モ末世ニナリテハ、寛慈ト云フコトガ、柔弱ト混ジ易クシテ辨ジガタシ、當時諸侯方ノ役人寛政ト心得テスルコトガ、何レモ寛政ニアラズシテ、柔弱ニ流レタリ、又仁恵ト姑息ト多クハ混ジヤスシ、又鄭ノ子産終リニ臨ンデ、子大叔ニ遺言シテ、格別ノ盛德ニアラザレバ、寛ヲ以テ國ヲ治ルハカタシ、汝鄭ノ政事ニアヅカラバ、猛デナケ子バユカヌト云ヘリ、又寛猛二ツヲ水火ニ譬喩セラレタリ、サテモ世事ニ心ヲ用ル賢人ハ、後世ノ手本トモナルベキ善言ヲ述ベラレタリ、コレ等ノコトハサシ向キ政事ノミナラズ、諸侯方ノ勝手ムキ改革ナドニハ、尤モ肝要ノ一言也、僻邑山陬ハイザ知ラズ、今ノ都會ノ人氣ニテハ、孝行ノ人ヲ賞スルヨリハ、不孝ノ人ヲ罰スルガ、キケアンバヒ宜シトオモハルヽナリ、余ガ家塾ワヅカニ二十四五人バカリノ書生ナレド

モ、餘リ嚴ニスギテハ、凡ベテ病氣ノ恐レモアリテ、少シ法ヲ弛ベタレバ、忽チ學術進マザルノミナラズ、放蕩無賴ノモノニナリテ、止メガタキ勢ヒアルヲ見テモ、法ノ嚴ナルハ却テ善政ナリト知ラレタリ、且又嚴ヲ以テ虐ト混ズベカラズ、虐嚴相似テ大ニ相違ナリ、余ガ思フニハ、心ハ慈愛ヲ主トシ、行ハ清白ヲ務メ、法ハ嚴ヲ用ユルニヨロシ、上古ノ事ハイザシラズ、中々今ノ文政年中ニテハ、寛仁ヲ以テ民ヲ服シ、人ヲヒキユルト云フハ、盛德ノ人ニアラザレバマキリガタシ、當時下手ニ書ヲ讀ム輩、ヤヽモスレバ仁ヲ語リ、弱ト混ジテ辨ジ得ズ、抑又愚ノ至リナリ、法ヲ斥ケテ申韓ノ學トスルハ、事ヲ辨セザルナリ、多人數ハ法ヲ用ヒズシテハ、治マルベキモノニアラズ

賞罰正シキハ、眞ノ仁政ナル論

サテ前ニ述シ金主ノ賞罰濫レザルガ、眞ノ寛仁ナリト云フコトニ付テ、淺ク味フテ見レバ、甚ダ難キコトニテ、委曲ニ論ジ盡セバ、多クハミナミダレテ的中セズ、難レ有モ近來故白川侯ノ御政事ノ意味ヲ考ルニ、淺ク有ヤウノ筋ニ御心ヲ苦シメ玉フト見ヘタリ、サテ一國ノ政事ナレバ一國、一城ノ政事ナレバ一域、其賞罰山陬マデユキトヾキテ平均セ子、眞ノ賞罰トハ云ヒガタシ、タトヘバ罰セラルヽモノハ、俗ニヒトミ御供ト云フ類ニテ、雷ニウタレタルガ如ク、アシキ劍先キニムキタルヤウナルコトマヽアルナリ、又賞モ同樣ニテ、其人ノ樞機ヨク、或ハ俗ニ云フ耳タブノヨキナドヽ申スヤウニオチイリ易シ、ミナ私恩ヒイキヨリ出來ルコ　多シ　賞ヲ求メス人ハ賞ヲ得ルコト少ナシ　兩方共ニ平均

シテ甲乙ナク、幸不幸ナキヤウニスルハ、明主賢臣ニアラデ　六ケ敷コトヽ見ヘタリ、恐レナガラ有徳廟ノ大岡越州ヲ大名ニ御取リ立テアリシハ、アリガタクモ眞ノ賞ト存ジ奉ルナリ　自己ノ寵愛ニテ功ナキモノヲトリ立ルハ、賞ヲ失フノ次第ナリ、今ノ諸侯方コノ弊ヘ多シ

賞ノ濫レハ、私恩ヨリ來ル論

私恩ヲ布クト云フコトハ、卑劣ナル人情ニテ、十人ガ十人、百人ガ百人、ミナ免レガタキコトナリ、併シ政事ヲ執ル人ハコノ心ヲ絶ツベシ、殊サラ遠境ヘ出役スル人ナド、自分ノ役中ノミヲ思フテ後ヲカマハズ、又自分ノ轉役前ニハ、メツタニ己ガ氣ニ入リタル下役ナドヲ、要路ニ拔擢シテ、小人ヲヨロコバシメント私恩ヲ施スコトアリ、又右ヤウノ人ハ罰スベキコトモ罰セズ、後役ニ讓リテ退クモノナリ、老蘇ガ韓魏公ニ奉ル書中ニモ、當世重臣ノ患ヒハ、人ノ我ヲソシルヲ恐ルヽニアリトハ右ノ意味ニテ、同ク私恩ヒイキノ沙汰ニシテ、賞罰トモニミダルヽ甚ヒナリ、賞罰ハ政事第一ノコトナルニ、右ヤウノ筋マヽ見當ルコトアリ、卑劣ナル心得方ナリ

又俗ニ睨ミト云フコトアリテ、上ニ立ツ人下ノ者ノ所作ヲ、始ニ不圖アシク思フガ自分ノ氣ニ觸ルヽコトアリテ、始終其心サラズ、何ニ付ケテモソノ者ノナスコトハアシク思フコトアリ、是全ク愛憎ノ私心ヨリ出ルコトナレドモ、胸中狹キ人ニマヽ多シ、矢張リソノ者ヲバ格別ニアシクナクテモ、罰スルヤウノコトヲ見聞セリ、上ニ立ツ人ノ大疵ナリ、コノヤウナル人ヘハ、奸人付ケコミテ讒ヲイルヽコ

トアリ、賞罰ノ大ミダレトナルモノナリ、君上重臣ノ尤モ戒メトスベキコトナリ

愛憎甚ダシキハ、賞罰濫ルヽ論

サテ愛憎ト云フコトハ、俗ニ云フ馬ノ合フ合ワヌト云フノ類ニシテ、人々ニ必ラズコノ心アルモノナリ、別シテ人君又ハ重臣、又ハ器量アル人ニハナヲ多シ、コノ心ハ人情ニテ除キサルコトハ出來ガタシ、併シ政事ヲナス人ハ、必ラズコノ愛憎ヲ以テ下ノ士人ヲ褒貶スベカラズ、コノ心ヲ振リマハセバ、人ヲ見損ズルコトアリ、宋ノ寇準ノ如キ名臣スラ、丁謂ヲ李文靖ニ重ク用ヒヨトスヽメタレバ、文靖ノ答ニ、コノ人器量ハアレドモ、人ノ上ニ立シメガタキ人物ナリト謂レシヲ、甚ダアシク憤リテ、其後丁謂ヲ重ク用ヒラレテ其悪キヲ知リ、果シテ後悔セラレシ例モアリ、兎角己ガ馬ノ合フ人ヲバヨシト思フコトナリ、且又才智アル小人ハ、己ガ情ヲ枉ゲテ氣ニ合フヤウノ振ル舞ヒヲスルナリ、賞罰コレヨリ濫レテ、嬖人ト云フモノ頭ヲモタゲ、害ヲナスコト多シ、併シ善人ヲ愛シ、悪人ヲ憎ムモ愛憎ナレドモ、コレハ明君ニアラザレバ、其正キヲ得ガタシ、管仲ノ言ニ、鮑叔ハ悪人ヲ憎ミ、善人ヲ愛スルコト深キユヘ、宰相ニハアシヽト謂ヘリ、世上ノ事ハカヤウナルワケガラ多キモノナリ

人ヲ使フハ義ヲ勵マスニアル事ヲ論ズ

上ニ立テ下ヲ使フハ、量ヲ寛クシテ下ノ者ノ材幹ノ舒ルヤウニ使フベシ、併シ能々眼ヲ明ラカニシテ、其者ノ穴ヲニラミツメテ居ルベシ、初ヨリ任セスギテハ下手ヲ打ツコトアリ、ソレト云フモ、萬

能ノキク人ハ甚ダ得ガタシ、何レニモ穴ハアルモノナリ、數年使ヒ試ミテ任スベシ、タヾ細事ヲコセコセトヤカマシク云フテハ、ソノ者ノ神氣チヾマリテ用ヲナスコト小サシ、聖人ノ御言ニ惠ナレバ人ヲ使フニ足ルトアレドモ、コレ等ハ人情ニヨリテ仰セノ言ナリ、能アル者ヲ使フニハ、詞ノ采配トテ、物ヲ餘計ニツカハサズトモ、キジメ〳〵ヲ見テ、義言ヲ以テ譽メ遣スベシ、義勇ヲ勵マスガ人ヲ使フノ道ナリ、俗ニ云フソヤシ使フコトニハアラズ、恐レ多クモ神君樣ハ織田・豐臣ノ二公ヨリモ、御德遙ニ勝レサセ給フニヤ、義勇ヲ以テ能コソ人ヲ御使ヒアリシト存ジ奉ルナリ、又唐土壯士ノ言ニ、士ハ己ヲ知ル者ノタメニ死ストハ、コノ場所ト知ラレケリ

君上諫ヲ納ルヽ心得、臣下諫ヲ奉ル心得方

量ト申スモノハ、君タル者、又重臣タル者ノ盛德ナリ、古ヨリ大業ヲナス君ハ、ミナコノ德ヲ備ヘ玉ヘリ、胸中ニ人ノ言ヒ上ルコトヲ納メ容ルヽノ餘地アルコトナリ、コノ量ナキ君ニハ、直言ノ臣下ナシ、唐ノ太宗ナドハサスガ後世人君ノ鑑トモアガメツベキ人ナレバ、魏徵ノ如ク惡口罵ルヤウナル諫ヲコラヘ納ラレタリ、人情ニテ己ヲソシルヲ心中ニヨロコブ者ハナシ、則チ納ルヽト云ガ、畢竟ハ心中ニ怒リテモ、ジット堪忍シテ胸中ニ納メ置キ、寛々ト思案スレバ、自分ノ惡キ事ヲ自然ト心ヅキテ其諫ヲ用ルナリ、明君トテモ左ヤウナルベシ、殊サラ器量アル人ニハ負ケ惜ミツヨシ、是ヲ以テ下タル者ハ、上ノ氣ニ合ハヌコトヲ言フハ、危キバカリデナク、人情ニ嫌フコトニテ、忠憤義烈ノ士カ、又

ハ律義一偏ニシテ上ヲ大切ニ思フモノデナクテハ、諫ヲ奉ルコトナカルベシ、俗情多キ庸人ハ小智アリテモ、君ノ威ニ觸ルヽコトハ申シ出ルコトスマジキナリ、故ニ人君勉メテ其事ノ善惡ニ論ナク、其座ハ納レテ遣ハサルベキコトナリ、聖人ノ御戒メニ、邦道アレバ言ヲ危クストアリテ、聰明ノ君上ニアラザレバ、直言シテ徒ラニ身ノ害ヲ招クコトナカレトノ事ナリ、サスレバ直言シテ上ヲ諫ルモ甚ダカタク、又堪忍シテ其諫ヲ納ルヽモカタキコトナリ、君臣共ニ心得ベキノ大事ナリ、併シ臣タルモノ其君道ニソムキ、國家ニカヽハルコトアリテ、ステ置キガタキ時ハ、其身ノ利害ニカヽハラズ、命ヲステヽ諫ムベシ、君臣ノ間ニハ自己ノ利害ヲ顧ルコトナシ、一死決斷ハ天理ヲ貫ク精忠ヨリ出ル人臣ノ貞節ナレバ、其君聞入レタマハザルコトハアルマジキナリ

サテ又臣タル者ノ心得ベキハ、君ヲ諫ルニハ、必ラズ其君御用ヒアルヤウニ諫ルヲ忠良ノ筋トモ申スベシ、下手ニ諫メテ、其身ニ害ヲ受ケ。其君ニモ惡名ヲトラスルハ、其心ハ忠ニ似タレドモ、良臣トハ云ヒガタシ、如何ヤウニモ方便シテ、其君用ヒアルヤウニ諫メベキコトドモナリ、魏徴太宗ニ奏シテ云ク、臣ヲシテ良臣タラシメテ、臣ヲシテ忠臣タラシムルコトナカレトハ、面白キ味ヒアル言ニテ、忠臣トハ比干。伍子胥ノ類ニシテ、良臣トハ伊•呂•蕭•曹ノ類ナリ　比干ハ殷ノ紂王ノ臣、伍子胥ハ呉王夫差ノ臣、此二人ハ皆君ヲ諫テ死スルモノ、伊ハ伊尹、商ノ湯王ノ臣、呂ハ太公望、周ノ武王ノ臣、蕭ハ蕭何、曹ハ曹参、漢ノ高祖ノ臣、コノ四人ハ皆君ヲ諫テ帝王タラシムル人ナリ　神君ノ御言ニ、家來ニ異見ヲ加ルハ、人ノ聞ヌヤウニ呼ビ出シ、其者ノ平生ノ善事ヲ擧メテ、然ルニコノ度ノコトハ、其善事ニ不似合ノ事ナドト云フガ、異

見ノ仕ヤウナリト仰セ玉ヘリ、コレ等ハ誠ニアリガタキ金言ニテ、上ヨリ下ノモノニ向フテスラ、右ヤウニ云フガハマリヨキ理ナレバ、殊サラ上ヘ向テハ工夫シテ如何ヤウニモ上手ニ申シ諫メネバナラヌナリ、サテコノ御言ハ、上ヨリ下ヘ異見ノ手本ノミナラズ、下ヨリ上ヘ諫メノ手本トモアガメ奉ルベシ、臣タルモノ胸中ニ銘ジ置クベキコトナリ、眞ノ聰明ノ君ヘハ諫メ方烈クテモ、随分ハマルコトアルベケレドモ、一通リノ庸君ヘハ随分和ラカニ、人ノ聞ヌ所ニテ諫メ奉ルベシ、太宗ノ如キ英主ニテモ、朝廷百官ノ前ニテ諫ムレバ、己ヲ辱カシムルヤウニ思ヒ違ヒモアルモノナレバ、人情負ケ惜ミノ病ヒアレバ、其座ノ顏ノ立ツヤウニ諫メ奉ルベキ事ドモナリ

サテ諸侯方ニヨリテ、重臣ト君ト甚ダ嚴重ニシテ、疎遠ナルノ家格アレドモ、甚ダヨロシカラズ、君臣ニ親ミナケレバ、諫メ奉ルニモ廉タチテアシヽ、故白川侯ノ御記錄ニ、不意ニ御家老ノ宅ヘ御入アリテ、其家内マデモ殘ラズ御目通リニ呼ビ出シ、親ク御話シアリテ、其家ニコシラヘ合セノ團子ナド召シ上ラレ、御歸ノ事見ヘタリ、サスガニ明君ノナサレ方ハ、庸君ノ心得トハ大相違ナリ、角アリテコソ眞ノ君臣トモ云フベケレ、宋ノ太祖雪夜ニ宰相趙普ノ宅ニ、近習兩三人ニテ幸シ玉ヒ、趙普ノ妻嫂々ト呼ビ、雉ノ炙リモノヲ召シ上ラレ、江南ヲ平グルノ大計ヲ相談シタルモ、英雄ノ所作ハホヾ一致ニシテ、唐モ日本モ手本トスベキコト共ナリ

酒ヲ戒ムルハ、國益ヲ興シ惡風ヲ除クノ兩全ナルヲ論ズ

近來酒ヲ飲ムコト、都會ハ勿論ナリ、田舍ノ山奥マデモ大流行ニテ、世界ノ甚ダ困窮スル基ヒナリ、殊サラ身ヲ働クベキ族ラハ、ナヲ以テコノ酒ニテ嘉穀ヲ費スノミナラズ、其所業ヲ懈ルニ至ルモノナリ、如何ニト云フニ、酒ハ人ヲ醉シムル德アリテ、酒ノ氣ヲカレバ、ワレ知ラズ、陽氣沸キアガリテ、神氣盛ンニ相成リ、平生ニ出來ガタキ事モ、自然トスラ〱出來ル心持ニナリ、都會ナレバ其座ヨリ遊所ナドヘ行クヤウニナリ、金銀ノ算用モ忘レ、田舍ナレバ遊ビ睡リテ其所業ヲ懈リ、博奕淫行種々善カラザル事ヲ思ヒ付キ、ツヾマル所ハ國ノ風俗ヲ傷フニ至ル、殊サラ若輩ノ妻子マデモアヒヨ・スケヨナドト申スワケニテ、友ヲコシラヘ酒ヲ好ムモノ日増ニ多クナリ、世間一流ノ損失トナリ、近年ノ如キ饑殍アルニ至ルナリ、是ヲ以テ漢ノ世ナドニハ、數人打寄リ酒ヲ飲ムコトヲ禁ズルノ例アリ、殊ニ昭烈帝蜀ヲ治メシ砌リ、別シテ心ヲ用ヒ、酒ヲ釀スル事ヲ固ク禁ズルノ命ヲ下サレシトナリ、實ニコレ等ハ世ヲ救フノ仁心ヨリ出タル筋ニテ世ノ手本トモ云フベキ善政ナリ、既ニ中年以來ノ飢饉ニハ、吿ルコトモナキ良民モウヱ死シタル事ニテ、君子ノ目モアテガタキ次第ナレバ、差當リ世ノ中ノアリサマヲ見ルニ、世間ノ困窮三四分通リハ、飲酒ノ流行ニヨルコトヽ存ズルナリ、サレバトテ右ヤウニ流行シタルヲ禁ズルコトモナルマジケレバ、嚴令ヲ下シテ永ク釀酒ノ分量ヲ減ジ度コトナリ、又淺キ考ヘモアレドモ、コヽニハ略シテ論ゼズ、近來ハ世上一同ニ、葬式佛事ニモ事ヲ解セザル族ラハ、狂醉ニ至ルヤウノフリニテ聖教ヲ破リ、吉事ニ於テハ客ヲ醉倒サスルヲ禮ノ如クニ覺ヘ、遂ニハ

人ヲ毒シテ病ヒヅカシムルヤウナル儀モ、マヽ見當ルコトアリ、馬鹿ノ天上トモ云フベシ、カクノ如キ事ハ近世ノ弊風ニテ、古ハ決シテナキコトナリ、タヾ酒ハ各杯ニテ、獻酬度々ニ及バズ、客ニモ思フダケ飮シメ、ホドヨク互ニ喜悅スルヲ、酒ノ德トモ云フベシ、又俗ニ寢酒ト云フテ、妻子ト一杯酒ヲ用ユルガ、眞ノ飮酒トモ云フベク、又賤夫ナレバ草臥レ休メト云フテ、茶碗酒ヲ飮ムガ、實ニ百樂ノ長トモ云フベキワケニシテ、人生ニ益アリテ、酒ノ妙用トモ稱スベシ、聖人ノ敎ニ、酒ハ量リナシ、亂ニ及バズトアレバ、今日ノ酒宴ハ禮ヲ失フテ、中頃ヨリ末ハ皆已ニ亂ニ及ビアルナリ、如何ヤウトモ制度ノアリタキモノナリ

國益ハ農業產業ヲ勸ムルニアルヲ論ズ

眞ノ國益ト申スハ、一言ニ盡キタルコトニテ、農業ヲ勸メ產業ヲ勵マシテ、國中ニ懷手シテ食フ者ノナキヤウニスルナリ、都テ國民游惰ナルハ、衰微ノ基ヒ也、サテ近來何レノ國ノ人民モ、百姓家ニソダチヌル輩ラ、町人ノ榮華ヲウラヤンデ、ヤヽモスレバ商人ニナルモノ多シ、百姓減ジテ商人フヘルハ、日本國中ノ損失ニテ、自國バカリノ損失ニアラザルナリ、江州ノ民ハ他國ニアキナヒシテ、他國ヨリ金銀ヲ集メ歸リテ、其國ノ益ニナルヤウナレドモ、天下ノタメニハ損ナリ、如何ントナレバ、何レノ國モ田地砂入リ、山崩レナド多ケレドモ、村々雜費ヲ厭ヒ、引合ヒアシキヲ嫌フテ、其マヽニ打ステ置キ、撿見ヲ受ケテ永ク荒野トナリ、領主ノ物成リ自ラヘリ、開發ノ田面モオビタヾシケレドモ、

年々荒ニツクノ田地モ少ナカラズ、何レノ國モ百年前ニ比スレバ、領主ノ物成リ減ズルコト聞及ベリ、惜ムベキコトナリ、郡奉行代官ノ輩ラ、コノ所ニ目ヲ配リ、百姓ヲ實意ニトリアツカヒ、荒レタル田面ヲ世話スルガ、眞ノ興利トモ謂ベシ

サテ家中小祿ノモノ妻女ナドヘハ、必ラズ産業ヲ教ユベシ、心得チガヒノ士人、ヤヽモスレバ士タル者産業ヲ營ムハ、庶民ト同樣ナドト云ヒナシ、恥トオモフ族モアレドモ、産業ハ人タルノ道ト、孟子ニモ述ベラレタリ、唐ニカギラズ、本朝ニテハ、ソノ昔シ天子ノ御后御手ヅカラ蠶ヲ御飼ヒアリシ例モアリ、士人ハサテ置キ、高貴ノ御方モアソバサレタル事ト見ヘタリ、サテ産業ヲ營メバ、儉約ノ道ハナラハズシテ知ルモノナリ、其ワケト云フハ、終日ノ働キワヅカ五十文カ、百文トカニスギザルユヘ、金銀ノ得ガタキ冥加ヲ知リ、一匹ノ魚モ買フテ食フヤウノ筋ハ思ヒ付カズ、儉ノ道己レトサトリ得ルニ至レリ、コレハ自己ノ骨折リ、容易ナラザルユヘ、金銀ノ尊キヲ知リテ、ミダリニ使フコトノ出來ヌヤウニナルナリ、當時諸侯方ノ家中、ソヅカニ五十俵百俵ヲ取ルモノヽ妻女、其分限ヲシラズシテ、衣裳ヲ曳ズリ下女ヲ使ヒ、其心入レハカヘツテ賤シク、町人ニ金銀ヲ借リ納レテ、世渡リスベキ事ニコヽロヘ、小人閑居シテ不善ヲナスト云フヤウノ場ニウツリ、善キ事ハ思ヒ付カズ、人倫ヲ傷ルノ醜聲聞ユルニ至ル、是皆産業ヲイトナムコトヲ知ラズシテ、閑暇多キヨリ來ル事ニテ、苦々敷アリサマナリ

又諸家トモニ士大夫ノ家宅、其祿不相應ニ廣ク、庭前栽ナドヲ設ケ、殊サラ大祿ノ屋敷ニハ、馬場矢場マデモアリテ、無益ニ膏腴ノ地ヲツブシアレバ、孟子ノ教ノ如ク、右等不益ノ地面ニハ、桑麻野菜ヲウヘツケ國益ヲ興セバ、上ハ天理ニカナヒ、下ハ人ミナ澤潤ヲ得テ、士人今日ノ困窮ニハ至ルマジ、スベテ乘馬ナドハ門外ニテ事足ルベシ、孟子ヲ素讀セシ人ハ、早クモ右ヤウノ心付ハアルベキハヅノコトナルニ、何レノ國モ心付ヌカ、用ヒヌト見ヘタリ、サテ〳〵書物ヲ死物トナシテ、聖賢ノ人ヲ憐ミアリテ、渡世ノ仕方マデモ教ヘ施シ玉ヒシニ、用ルモノ一人モコレナキハ、悔シキ事ニアラズヤ、且又士人ノ家作リ分限不相應ニ廣ケレバ、コレモ令ヲ下シテ半減位ヒニイタシ、其明キ地ヘハ種ヘ物シテ、一擧ニ興利ト除害トヲ得ルナリ、スベテ家ノ廣キハ、雜費カヽリテ損失少ナカラズ、余常ニ謂フ、儉ヲ教ユルヨリ産業ヲ勵マスガ近ミチニシテ、儉利二ツヲ悟ルトハ、右ノ道理ナレバナリ、重臣ハ勿論ナリ、郡奉行、代官ノ役筋ハ、右ノ心得アリタキ事ナリ

賄賂ヲ堅ク禁ズルガ國政ノ基本タルヲ論ズ

古ヘヨリ賄賂ト申沙汰、唐モ日本モ之アル事ニテ、國政鈍リ人氣卑ク成ノ基ヒ也、創業ノ明王ハ右樣ノ事堅ク禁ジアレドモ、治世永ク續ケバ自然ト弛ミ撓ミテ、イツトナク行ルヽノ姿ニ成ユキ、殊更諸侯ノ家中抔ハ其毒早ク廻リテ、要役ニ居ルモノハ奢侈ニ流レ、其志卑劣ニ落テ士氣ヲ損ジ、富タル町人頭ヲモタゲテ上ヲ輕ンジ士ヲ侮リ、政事崩ルヽノミナラズ、正キ者ハ退キ、奸黠ノ小人出頭スルニ

至ル、誠ニ忽セニナシガタキ事也、禮ハ玉帛ノミナラズト聖人モ仰アリ、堅ク嚴制ヲ立テ、吉凶スベテノ禮儀音信ハ、何文目トカ、何分トカ定ルガ宜シトコソハ思ハルヽ也、音信付届ヲ互ニ重ク張合フテハ、終ニ賄賂ノ行ル端トモ成ベシ、都テノ惡弊ハ右樣ノ事ガ根源トナリテ起ル也、根ヲサヘ絶テハ自ラ止ムベシ、智者ノ所作ハ末ヲステ本ヲ務ル也、上ニ明主ナク、下ニ賢大夫ナキ國ハ、賄賂沙汰尤モ多シ、宋ノ世ニ或人岳飛ニ、天下何レノ時カ定マラント問ヒシカバ、文臣錢ヲ貪ズ、武臣命ヲ惜マズンバ、則治ルベシト答ヘタリ、皆末世ニハ此通ノコト也、故白川侯ナドハ、專ラ右等ノ事ガ風俗ヲ破ト云事ニ御目ヲ付ラレテ、御心ヲ用ヒ有シト傳ヘ聞ケリ、眞ニ政ヲ執ル者ノ鑑トモ崇メ奉ルベキ御方也サテ公事訴訟斷獄ノ役人ハ、尤モ志ヲ正クシテ金鐵ノゴトクニ守ルベシ、人情ニテ思ハズ知ラズ、曲直邪正ヲ亂ルヽコト有テ、天理ヲ傷フニ至ルベシ、是ヲ以テ上ニ明君イマシ、次ニ剛正ノ重臣アレバ、其以下ノ者ハ畏服シテ、賄賂沙汰決シテ行ハルヽ事有ベカラズ、重臣卑劣ナレバ、右樣邪正曲直亂レテ、人民害ヲ受ル事少ナカラズ

淫祠ヲ絶ツハ、人ノ惑ヲ解キ費ヲ除クノ善政ナルヲ論ズ

淫祠ヲ絶ツトハ、ワケモナキ神社ヲ毀ツノ事計リデナク、祭ルマジキ神佛ヲ絶テ、祈念祈禱スルヲ堅ク禁ズル也、扨世上ニ心ニカヽル不當ヲ致スノ輩カ、又ハ愚陋ニシテ己ガ思案ニモ能ハヌ大望ナドヲ企ル族ラ、又ハ姦吏己ノ罪ヲ竊ニ恐ナドスル輩ハ、必ズワケモナキ神佛ニ祈念祈禱ヲスルモノ也、扨

婦人女子、又ハ賤キ者ノ福ヲ求メ病ヲ祈ルハ、深ク責ルニ足ズ、ヤヽモスレバ政事斷獄ニモ預ルベキ程ノ人ニモ、譯モナキ神佛ニ祈念ナドヲ致ス者アリ、是誠ニ聖人ノ書ヲ讀ズシテ、只物事ニ疑惑ヲスルヨリ、右樣淺マシキ思案出ルモノ也、笑フベキニ餘リアリ、近來正シカラザル神佛堂社新ニ出來シテ、人ヲ惑シ國費ヲ益シ、政道ニ害ヲナスコト少カラズ、都會ニテハ奸徒不正ノ利ヲ得ルタメニ、詐計ヲ廻シテ企ルコト多シ、有司右等ノコトヲ解シテ禁ズレバ、一擧シテ兩全ヲ得ルノ道ナリ、忝ケナクモ水府義公・唐ノ狄仁傑抔ハ、早クモ御心付アリテ此令ヲ下シ、善政ヲ布テ人ノ惑ヲ救シ方々也

九方生曰、聖人ノ法ニ、鬼神・時日・卜筮ニカリテ、人ヲ惑ハス者ハ殺シテ免ス事ナシトアリ、上古ヨリモ祈念祈禱卜筮ナドニ事ヨセ、惡計ヲ生ズル奸僧惡徒少ナカラズ、聖人ノ法ニテハ、決シテユルシ玉ハヌ罪人ナリ

破レ家ノツヾクリ話卷之中終

破レ家ノツヾクリ話卷之下目次

政事篇

一　諸侯方及ビ人ニ上タル方ノ心得
一　家老重臣ノ心得方
一　側用人心得方
一　番頭心得方
一　傅役心得方
一　目附心得方

吏術篇

一　訴訟犯科裁判ノ心得方
一　郡奉行心得方
一　町奉行心得方
一　收納米取方ノ心得方

破レ家ノツヾクリ話卷之下

政事篇

諸侯方及ビ人ニ上タル方ノ心得

人ニ上中下ノ差別アルヲ以テ、諸侯方幷ニ上ニ立チ玉フ方々ハ、ソレ丈ケノ德ハ勿論ナリ、其心得トテモ是非ニ差別ナケ子バナラヌ事ナリ、其德ト云フハ、上ニ立テ下ノ者ヲ威服セシメ、國家ヲ治ムルノ德ヲ云フナリ、故ニ古ノ賢主明君ノ行跡ヲ慕ヒ學ビ、其通リニアリ度モノト日夜心ヲ配リ、油斷アルマジキ御事ナリ、コノ德ヲ脩ルニハ、聖人ノ書ヲ讀テ、誠意正心ノ義理ヲ能々會得シ、政事ノ筋ハ勿論ナリ、其學文ヨリ何事モ定規ヲ取リテ沙汰ニ及ビ、次ニ兵學采配ヲトルノ法ヲ學ビテ、餘力アラバ弓馬鎗劍ノ藝術マデモ習ヒ得ルヲ順道トス、都テ人ノ上ニ立ツベキ身ハ、下ノモノヨリ何事ニヨラズ、アトヨリセヌヤウニ心得ヲ持ツベシ、左ナクシテ下ノモノニ劣リカナハデハ、上ニ立ツベキノ德ナクシテ、自身ノ分限ヲ知ラヌト同ジカルベシ、都テ當時ノ諸侯方ハ、近ク故白川侯ノ思召シ方ヲ仰ギ學ビテヨロシ、師ト目當ニスル人ハ、如何ニモ高キガヨロシキ事ナレバ、隨分大德ノ御方ヲ慕フニシカズ、仁義五常ノ道ハ謂フマデモナシ、政術ハ勿論ナリ、采配ヲ取ルノ手ダテハ、武門第一ノ事ナレバ、

平生ニ心得テ、非常ノ節狼狽セザルヤウニスベシ、近世諸侯方柔弱ニシテ、女子ノゴトク、其重臣トテモ卓識ナク、其君大切ノ學文兵法ナドノ事ハ、迂遠ノコトニ思フテ勸メズ、タヾ武藝一夫ノ業ヲ重立タル事ノヤウニオモフハ、分限ヲ知ラザルノ間違ヒナリ、尤モ甚キハ女子ノ手ニ委ネテ育ツルヲ、大名風ト心得ルハ、不忠ノ至トモ言ハン方ナシ、諸侯ニ限ラズ、上ニ立ツベキ身ノ文武ノ道ノ心得方、下ノ者ニ及バザルハ、恥辱ノ至リトモ云フベシ

又上タル人ハ算數ノワケヲモ會得スベシ、算數トテ、ソロ盤ニテ數ヲ乘除スル事ニハアラズ、胸中ニテ事ノ大小輕重ヲ目算シ、又物事ノ見通シヲツケルノ繩墨ヲ云フナリ、コノ算數ヲ持タザル人ハ、理速カニ分リ難クシテ、事ノ大小利害モ目算仕得ザル者ナリ、尤モ六藝ノ一ニテ肝要ノ條目ナリ、又人ニ君タルモノハ一言ニシテ盡メリ、器量アルモノヲ愛シ好ミスルコト、御氣ニ入ノ美人ヲ愛スルガ如クスベシ、上ヲ見ナラフ下ナレバ、上學文ヲ好メバ、下亦コレヲ好ミ、上猿樂ヲ好メバ、下亦コレヲ好ムノルイニテ、上ニ立ツ人ハ一己ノナグサミニテモ、容易ニ好ミガタシ、又常ニ貞觀政要ナドヲ座右ニオキテ、御讀マセタキコトナリ

家老重臣ノ心得方

諸侯ノ家老ハ全ク一國ノ宰相ナレバ、其心得ハ天下ノ宰相ト異ナルコトナシ、都テ其國ニ大小アレ共、吾身ノ上ニ一國ノ事ヲカツキアレバ、何事ニモ行キ渡ラデバナラヌナリ、君ヲ賢明ナラシムルヨリシ

テ、人ヲ見出ス事モ、人ヲ使フ事モ、賞罰トモニアヅカラザルコトナシ、家老タルモノハ諸葛武侯ナドノ畫像ヲ毎日拜シテヨロシ、何事ニモ行屆キタル宰相ナリ、又宋ノ韓魏公ナドモ、賢良ニシテ胸中ヒロク、常ニ人ニ語ラレケルハ、清濁精粗共ニ納メ置子バ、宰相ノ器ニアラズト云ヘリ、司馬溫公ヲ評シテ云ク、識狹クシテ規模小ナリト謂レシモ、アシザマニ云フニアラズ、又唐ノ裴度ノ如キハ、眞ノ宰相ノ規模アリト云ヘリ、人或ハ公ヲ謗リテ、溫公ノ如キ文章ナシト云ヘバ、公ノ答ニ、我宰相ニナリテヨリ、歐陽修ヲ翰林學士ニ擧ゲタレバ、是則吾文章ナリ、誰カ我ニ文章ナシト云フヤ、コレヨリ上ノ文章ハアルマジト云ヘリ、誠ニ大ナル所ニ心ヲ付テ居ラレシ人ト見ヘタリ、家老タルモノハ、カヤウノ心得ナクテハカナハヌナリ、又善キ宰相ハ善人ヲ知ルノミナラズ、小人ヲ知リテ用ヒズ、宋ノ眞宗李文靖ニ、今天下ノ治道何ヲカ先キニセントト問ヒ玉ヒシカバ、梅詢・曾致堯ノ如キモノヲ用ヒズト奏シタリ、カクノ如クニ君子小人ヲ見分ケ子バナラヌナリ、眼明カナレバ、奸惡ノ人アリテモ惡ヲナスコト能ハズ、蜀ニ董允アリシ内ハ、黃皓モ權ヲ盜ムコト能ハズ、齊ニ管仲アリシ内ハ、易牙モ奸ヲナスコト能ハズ、故ニ宰相タルモノハ、精ニ入リ、粗ニ入リ、黑白モ速カニ分タズト云フ場合モナケネバナラヌモノナリト、韓魏公ノ言レシモコトワリナリ、都テ英雄一時ノ機變ハ測リガタキコトニテ、諸葛公ノ方正ガホシヒマヽナルヲステオキタルヤウノ事モ、韓魏公ノ黑白速カニ分タズト云フモ一致ニシテ、皆定規ニハヅレタルニ似テ、道理ニハカナフナリ、然レドモ智惠ナシ坊ヲ、居ナガラ黑白ヲ

分タズ、胸ヲ廣クモツト云フ事ニハアラズ、又チダラクニシテ、人ノ氣マヽヲステ置ト云フコトニモアラズ、人情嫉妬ノ心アルヲ以テ、胸ヲ廣クモツト云フハ、人ノ能ヲ知リテソレ〳〵ニアゲ用ヒヨト云フコトナリ、胸狹キ人ハ所謂ル負惜ミ强クシテ、人材ヲ用ルコト能ハズ、宰相タルモノハ、右ヤウノ場所モ心得アルベキ事ト申サルヽナリ、諸葛公方正ノ氣マヽヲステ置テ咎メヌハ、士氣ヲ引立ルナリ、是等ハ賢者一時ノ機變ニテ、タヾ是ヲ手本ニセヨト云フニハアラズ、韓公ノ如ク賢愚邪正ヲ明カニ知ル人デナケレバ、黑白ヲ速カニ分タズシテ、棄オクコトハ出來ヌナリ、又諸葛公ノ如ク賞罰ヲ明白ニ裁判スル人デナケネバ、人ノ氣マヽヲステ置クコトハ出來ヌナリ、都テ重臣タル者ハ、古ノ賢臣ヲエランデ手本ニセネバナラズ、名臣言行錄、幷ニ李綱ノ忠義編ナドヲ座右ニ備ヘテ、熟讀スルニヨロシ、几上ニテ古人ヲ友トスルワケニテ、儒生ノヤウニ書籍ニフケリ、深ク章句ヲ吟味セヨト云フニハアラズ、只其大體ヲ會得シテヨロシ、當世ノ諸侯方ノ重臣ニ、尤モ戒ムベキコト多シ、兎角ニ權威爭ヒナドシテ、主家ノ大事ヲ忘レ、互ニ黨ヲ立テ、陰險相傾ケ合フコト、マヽコレアルナリ、是等ハ尤モイヤシムベキノ人ガラニテ、論ズルニハ足ラズ、如何ニト云フニ、銘々心ニ少シノ身勝手利益ヲ思フコリ、國家ノ大事ヲ忘ルヽニ至ルハ、譬ヘバ町内ニ同ジ飼付ケノ犬ガ、一塊ノ魚骨ヲクハヘ來レバ、他ノ犬來リテ互ニ嚙合ヒ奪合フト同ジコトナリ、カヤウナル事ハ無學ノ人ニ多クシテ、人ノ所作トハ申シガタキコトヾモナリ

側用人コヽロヘ方

側用人ハ聖賢ノ實學ヲ會得シ、己ノ見識ヲ定メテ、主侯ヲ善道ニ誘フ事ハ勿論ナリ、主君ノ柔弱ナラザルヤウニスベシ、兎角近來諸侯方ノ風儀ヲ見ルニ、柔弱ニシテ事ヲ解サズ、只姑息ヲ仁ト心得テ、形ヲ尊重ニスルヲ大名ノ風ト思フヤウナルコト多シ、コノ柔弱ト云フコトガ治世ノ弊ニテ、家來ノ氣マヽヲ制スルコトモ出來ズ、又下ノ賢愚ヲ察スルコトモ出來ズ、殿様育チニテ、何事モ家來任セニテ、事足ルベキコトニ心得テ國主ノ德ナク、庸人ニ任セ賢者ヲ用ルコトヲ知ラズ、又門地アレバ、愚ナル人ニテモコレニ委ネテ、其政事鈍ルノミナラズ、士風アシクナリテ、下ノモノ上ヲ侮ルヤウニ流ルヽナリ、側役ノモノハ得テ主君ノ溫順ニシテ、自由ニナリ易キヲ悅ビ、譽メソヤスコト多シ、誠ニ愚ノ至リト云フベシ、又心得違ヒノ族ハ、金銀ナドハ手ニ觸レシメザルノミナラズ、口ニ語リテモ汚レルヤウニ存ジツメルモノアリ、大ナル間違ヒナリ、數ハ六藝ノ一ナルニ、右ヤウボンサン育チニスルハ、不忠トモ云フベシ、人腹中ニ算數ナクテハ、事ノ輕重大小ハ勿論ナリ、見通シモ付ザレバ、金銀出入ノ事モ辨ヘナクテハ、勝手向キワヤ〳〵ニナリテモ、取直シ出來ザルナリ、腹中ノ算ハ國主第一ノ入用ナリ、然ルニ鐵砲弓鎗劍柔術ナド、一匹夫ノ藝術ヲバ敎ヘネバナラヌヤウニ心得テ、采配ヲ取ル者、心得ナクテナラヌ算數ノ學ハ、卻テ汚ラハシキヤウニ存ジツメルモノマヽアリ、誠ニ事ヲ辨ヘザルノ至リトモ云フベシ、諸侯バカリデナク、重祿ノ家老モ算ヲ知ラザルヲ、大臣ノ風ト心得テ、主公ッ勝手ワ

ヤ〱ニナリテモ、立直スコトモ知ラズ、勘定奉行以下ノ者ニモタレテ、悪弊ノ出テ來ル所ニ心付ザルハ、皆右ノコヽロヘ違ヒヨリ來ルモノナリ、側用人タル者心得アリテ然ルベシ

番頭コヽロヘ方

番頭ハ平士ノ頭ナレバ、士ノ鑑トモナルベキ人ニアラザレバ、勤メガタキ役儀ナリ、武藝ハ勿論ナリ、兵學ハ必ズ自分ノ役前ト心得ベシ、尤モ組子ノ風儀モ武門ニ適フヤウニ導クベシ、手前ノ組子不行跡アリテ、目附役ナドヨリ批判打ルヽハ、己ガ罪ト心得ベシ、且又間日ニハ組子ヲ自宅ニ集メ、兵書ノ講釋ヲ聞シメ、何時ニ出馬シテモ、ウロタヘザルヤウニ會得セシメ置ベシ、平生ヨリ組子ニ威服セラレズシテハ命令行ハレズ、マサカノ時ノ役ニタヽズ、固ヨリ武道ニウトクシテ番頭ヲ務ムルハ、心ニオイテ恥ベキノ事ドモナリ、又此役ハ古今ノ名將、本朝ニテハ楠公ナドノ行跡ヲ會得シ、唐ニテハ岳飛・韓世忠ナドノ傳ヲ熟讀シオキ度モノナリ、諸家方ノ役人ヲ見ルニ、兎角才智アル人ニテモ、無學ナル人ハ腹中ニ定規ナキユヘ、大體ニ暗クシテ調子ハヅレノ事アルヤウニ思ハル、古賢ヲ定規ニ取ルニシカズ

傅役コヽロヘ方

傅役ハ庸人凡才ノ當ルベキ役ニアラズ、人トナリ質直方正ニシテ、大體ニ明カナル人ヲ撰ムベシ、神君樣ノ思召ノ如ク、幼稚ノ人ヲ育ツルハ、植木ヲ育ツルガ如ク撓メ易ク、直ニモ曲ニモナルベキノ理

アレバ、氣隨ナラザルヤウニ育ツベシトノ御言ナリ、今ノ諸侯方ハ氣隨我マヽナラザレバ、柔弱ニシテ女子ノ如ク、イトケナキヨリ婦人ノ手ニ人トナリ、下情ニウトク、人主ノ德ナシ、故ニ傅役ハ卓識アリテ、大體ニ明カナラザレバ、幼君ヲシテ人主ノ德ヲ備ルヤウニソダテ得ズ、縱令ヒ正直ニテモ、大體ニ暗キモノハ、君ヲシテ明主ナラシムルコト能ハズ、何分ニモ聖學ヲ學バズ、卓識ナキ人ハ、傅役ノ任ナシ、人主生質氣隨短慮ナレバ、傅役方正剛直ヲ以テ其氣隨ヲタメナホシ、柔弱溫順ニ過レバ、卓識武斷ヲ以テソノ柔弱ヲタメ直シ、君ヲシテ重ヲ負フニ堪ユベキヤウニソダツベシ、成長シテ後ハ撓ナホシガタシ、コレ又傅役第一ノ事共ナリ。唐ノ魏徵ノ如キモノハ姑ク置テ論ゼズ、肥後銀臺侯ノ側役ニ、竹原勘十郞ト申ス人ヲ傅ヘ聞ケリ、傅役ノ手本トシテヨロシ、心得違ヒノ士、動モスレバ幼穉ノ君ヲ譽メソヤスコトアリ、愚ノ至リナリ

目附役心得方

貴賤親疎ヲ分タズ、罪アルモノハ罰シテ免ルヽコトナク、功アルモノハ親疎ニ拘ハラズ、賞シテ漏ルコトナシトハ、諸葛武侯ノ仕置ナリ、サテ當時目附役ヲ勤ルモノ、妄リニ穩便トノミ云フテ、士風ノ崩ルヽヤウナル事ヲモ閒流シニナシ、或ハ諸事瑣細ナル事ヲヤカマシク中立テ、制當スルヤウノコト多シ、細事ヲヤカマシク中立テヽハ、下ノ者狎レ侮リテ懲ルコトナキユヘニ、細事ハ忽セニスベシ、併シ風俗ヲ崩シ、人倫ニアヅカルベキコト、幷ニ國政ニ拘ハルコトハ、細事トイヘドモ必ズ罰シテユル

スコトナカレ、尤モ士分以上ハ其内情ト志トヲ淺ク責テ、賞罰ヲイタスベシ、町人百姓ヲ罰ストハ事違フナリ

又其志武門ニ適フ事、或ハ忠孝ノ者ヘハ、小事ニテモ賞スベシ、又コレニ反シテ忠孝士道ニソムケル振舞アレバ、小事ニテモ罰スベシ、武門ヲ勵マシ、風俗ヲアツクスルハ、目附タル者ノ役前ト心得テ然ルベキナリ、姦惡ヲ搜リ盗賊奕徒ヲ捕ルハ、下目付捕方下役ナドノ役ナリ、當時ノ目付役ハ得テハ心得違フテ、發奸摘伏ヲ主意ト思フ者アリ、忠孝ヲ勸メ武道ヲ勵スハ國政ノ本ニシテ、奸惡盗賊ナドヲ搜リ出スハ枝葉ナレバ、其本ヲ務ルガ大體ノ表ナリ、吏術ノ上等ハ「擧レ直錯二諸枉一」トアレドモ末世ニテハ中々コノ所作ハ、有徳ノ人ニナケレバ、程ヨク參リガタシ、兎角時弊ヲ除キ去ルガ、當時ノ急務ト思ハルヽナリ

吏術篇

訴訟犯科裁判ノ心得方

近來ノ人情ヤヽ詐術ヲ旨トシテ、人氣モ惇カラズ、淫祠・陰陽・家相・賣卜者ノ説ニ迷フテ、甚キハコレガタメニ破産スル者アリ、都テ人ヲ惑ハス怪キ祈禱ナドハ、速ニ停止スベキコトナリ、其害妖邪ヨリモ甚シ

訟訴ハ大抵下ノ者義理ヲ心得違フテ、互ニ利欲ニ走リ、動モスレバ兄弟親族、親ノ讓リノ田地、カケ屋敷ナドヲ爭フテ、公事ニ及ブコト少カラズ、是等ハ唯忠孝信義ヲ說キ聞セ、雙方感心セシメ、裁判スルヲ循吏トス、北齊ノ蘇瓊淸河大守タリシ時、兄弟田ヲ爭フテ、其公事年積リノ〳〵テ片付ザル者ニ、義ヲ示シテ感動セシメ、雙方恥ヲ重ンジテ和睦シタルガ如シ、又一方ノ合手無理ヲ申立テ、一方止ムコトヲ得ズ、公事ニスルコトアリ、是等ハ合手ノ詐術ヲ搆ユルノ實事ヲサグリ求ムレバ斷ジ易シ、又愚民山林田面ナドヲ界論シテ、兩方共ニ承知セザルモノハ、卽座ニハ斷ジ難シ、併シ義ヲ勵マシ理解スルヨリ外ハナシ、タヾ裁判延引スレバ、雙方ニ無益ノ雜費ヲカケ、農時ヲ妨ルユヘ、甚ダ國家ノ損失ナレバ、務テ速ニ裁判致シ遣スガ、大ナル慈悲ナルベシ、聖語ノ通リ「必也使〻無〻訟乎」トアルハ、眞ノ吏術ナレドモ、時勢ニテ人情制シガタシ、且又板倉侯ノ仰セノ如ク、其訴訟人ノ顏色ノ樣子、又ハ辯不辯ノアヤニテ、聽者大ニヒイキノツクコトアリト、左モアルベキコトニテ、吏人ノ心得テ然ルベキナリ、白砂ニテ申立ル事怪シケレバ、必ズ穩密ニテ其實ヲサグリ求メ、又ハ其人柄ヲモ吟味スベキコトナリ、總ジテ公事罪人ヲ律ニテ取リ捌クハ、勿論ノコトナレドモ、其常例ニハヅレ、人ノ死生存亡ニ預カルコトハ隨分念ヲ入レテ、其內心ヲモサグラスベシ、律ノミヲ便リニシテ、其用心ヲサグラザレバ、御法ヲ承知シタル者ハ、惡シキ事ヲシテモ其罪ハ免レ、御法ヲ知ラザル者ハ、其內心格別ノ罪ナクテモ、罪ヲ受ルヤウ落行キ、大方子トカ云フ者、頭ヲモタゲルニ至ル、左レバトテ律ハ、古ヨリ明主賢

臣ノ立テレシ斷獄ノ繩墨ニシテ、是ニヨラネバナラヌモノナレドモ、内情ヲ探ラザレバ、其律ハ死物ニナリテ、役人ガ律ニ使ハルヽヤウニ流ルヽナリ、律ハ役人ノ裁判スル道具ニシテ、役人タル者ノ能ク用ヒ使フテコソ、眞ノ律トモ云フベシ、譬ヘバ無方ノ者アリテ、吾ヨリ長タル人ヲ無ヤミニ刀ヲ拔テ斬殺ス氣ニテカヽル處ヲ、傍ニ人アリテコレヲ押留タレバ、其刀鞘ヲ出離レネバ、其座ノ罪ハサヤバシリト云フテ事スム法ナレバ、内心ニ斬殺サント思フ罪ハ免ルベキナリ、又茲ニ一人アリ、其内心ニ曾以テ斬殺ス氣ハナクシテ、只刀ヲ拔テ其人ヲ逃スルヤウニト心得テ、刀ヲ拔キハナシタレバ、ソレ丈ケノ罪ハ罰セラルヽ筈ノ法ナリ、サラバ其心ノ罪ヲ論ズレバ、前ノ者ハ無ヤミニ長タル者ヲ斬殺サント存ジツキシ事ナレバ、後ノ者ヨリ其罪ハ惡ムベシ、唯傍人ノ押留タルガ、其人ノ幸トナルノ道理ナリ、又金銀出入ノ訴訟ニテモ、一方ノ者本ヨリ彼者ヲタバカル積リニテ、品物ヲ多ク求メ、少シノ内金ヲ渡シ置ケバ、訴訟セラレテモ、取リコミト云フニハナラズシテ、應對借用ノ金子ト同樣ノ律ナレバ、其内心ノ罪ハ免ルヽナリ、然ルニ其内心ニ本ヨリ詐リヲ搆ユルノ罪ハ、重クシテ惡ムベキモノナレドモ、律ノミニテ斷ズレバ、其詐巧ノ罪ハ免ルヽ類ナリ、併シ律ハ本朝異國ニテモ、元來天下ヲ治ルニ用ユベキ法ナレバ、公儀ノ御法ハ勿論ナリ、唐宋明律マデモ記臆シ置ベキナリ、尤モ前哲ノ立ラレシ法ユヘ、其内ニ内情ヲモ罰スルノ義ヲ論ジテ建立シアレバ、其役人ノ器量ニテ、淺ク會得シ用ユレバ天理ニ背ケル事ハ出來マジキナリ、サテ律ノ用ヒヤウノ義理ニ付テ平塚操軒ニ論ジタレ

バ、操軒余ニ語ルニハ、サテコソ律ヲ吏人ノ使フハ、足下ナド藥方ヲ使フト同ジモノナリ、本ヨリ斷獄日用ノ道具ナリ、譬ヘバ柴胡湯・承氣湯ノ如ク、古ノ良醫此病ニハ此方、此邪氣ニハ此藥ト設ケアレドモ、病人ニ對シ用ヒテモ、其通リニハ齟齬シテ、符節ヲ合セタルガ如クニ參ラヌ事アルベシ、然ル時ハ其人ノ工夫ニテ色々ト勘辨シ、病人ニ合フヤウニ、古人ノ方モ打崩シテ、加減セネバナラヌ場所モアルベシ、良醫加減シテ用ヒ、古人ノ方ヨリ功能スグレタレバ、其方ガ又後ノ手本トナルコトアルベシ、併シ偏窟ニ心得違テ、其病ニ合ズシテモ、無理ニ其方ニ縛リ付ラレ、加減シテ用ル事ヲ知ヌハ、良醫トハ稱シガタカルベシ、眞ノ良醫ナレバ、其病ニ應ジテ的中スルヤウノ方ヲ新ニクミ立テ、其病苦ヲ救フコソ、能ク方ヲ使フトモ稱スベシ、余謂今日律ニテ公事犯科ノ裁判スルモ、コレト同ジ道理ナリ、律通リニナキ訴訟モアレバ、其實事ニ符合スルヤウニ律ヲ加減シテ用ヒ、又善吏ナレバ新規ニ律ヲ設ケテ、時宜ニ合フヤウニ斷ズレバ、則ソレガ役所ノ手本トナリ、後世ニハ遂ニ律トモ相成ルト同ジ事ナリト、サスガ操軒實事ヲ驗ミシ程アリテ、能コソ其理ヲ悟リ、面白ク藥方ニ喩ヘタリ

サテ死罪ニモナラヌ輕キ罪ヲ犯セシモノ、或ハ罪ナキモノマヽニハ連坐ニテ吟味中ニ牢死スルコト多シト聞ケリ、コレ等ハ殘忍ノ至リニテ、上ノ仁德ヲ傷フト云フベシ、吏人心ヲ用テ、無レ罪ヲ殺サヌヤウニ早ク裁判シ遣スベキコトドモナリ、近來獄ニ囚ルヽ者、二三十日ニシテ牢死スルコト多シ、獄ハ大氣ヲ疏通スルヤウニ設クベシ、是又大ナル慈悲ナリ、大氣ヲ通ゼズシテ、室中ニ人衆多ク集レバ、獄

屋ニナクトモ疫病ヲ生ズル者ナリ、是等ハ奉行タル者ニ知セ度コトナリ

郡奉行心得方

郡奉行ハ百姓ノ風儀ヲ淳朴質素ニスルヲ要務トスベシ、左スレバ自然ト農業ヲ勵ミテ、遊惰ノ源絶ユベシ、且又休日ニハ、手島學者ナドヲ以テ教導スベシ、サテ百姓ハ小兒ノヤウナルモノユヘ、其人氣ニハマルヤウニハ、方便ナクテハ參ラズ、其故ハ風儀アシキヲ直スタメニハ、實意ヲ致シ遣シテモ、ソノヤウニハ思ハズ、爲ニヨキ事ヲ致シツカハシテモ、其事終ルマデハ却テアシク思フ者ナリ、サレバトテ方便ノミヲ主トシテハ、朝四暮三ノ術ニ落テ實意タヽズ、下ノ惡弊ヲ除クハ、譬ヘバ小兒ノ月代ヲイタシツカハスト同ジコトニテ、其月代中ニハコトノ外イヤガリテ、ナキサケブモノナリ、月代終レバ、心持サツパリトシテヨキコトヲ知レドモ、兎角ヤカマシク言ヒ立テ、イヤガルナリ、郡奉行ハ百姓ヲ自分ノ小兒ノヤウニ、イタシツカハスベキモノナレバ、カマハズ撓マズ、此月代ヲイタシツカハスベキナリ、ヤカマシク言ヒタツルニ辟易シテハナラズ、一途ニ右ノ月代ヲ遂グベシ、遂ニ實意通リテ威令行ハルヽナリ、今世ハ奢侈百姓ニマデ移リ、惡風少ナカラズ、サテ無學小才アル士人、新ニ郡奉行役ヲ蒙リ、愚民ヲ悦バシメント輕薄ノ工夫ヲ出シ、始終ノ利害ヲ見ズ、目前ノ事ヲイタシツカハシ、己レノ花ヲサカスヤウナルコトアリ、其終リハ百姓ノ難儀トナリ行クモノナリ、何分ニモ耕作功者ノ輩ヲ撰ミ、其土地ニ合フヤウノモノヲ植付サセテ、寸地モアマサヌヤウニ國益ヲ營マスベシ、

サテ眞ノ國益ハ地ヨリ物ヲ產スルニアリ、然ルニ百姓ヲ遊惰ナラシムルハ、郡奉行代官ノ罪ナリ、兎角百姓ニハ市中ノ風儀ノ移ラヌヤウニ心ヲ用ユベシ

京師ノ山阪ニ、八瀨。小原ト云フ所アリ、古來ヨリ賢キ老人アリト見ヘテ、良工夫ヲ出シ、一寸ノ絹モ身ニ著ルコトヲ、村ノオキテトシテ固ク禁ジ、女房ハ日々京師ノ町ヘ柴薪ノ類ヲアキナヒ、夫ハ日々山カセギイタシ、小兒出來テモ奉公ニ出サズ、少シモ都風ウツラズ、今ニ至ルマデ官禁ヲ犯ス者ナシト云ヘリ、如レ此風儀ハ田舍ノ村々ニモ法ヲ立度モノナリ

近來ノ百姓ハ　商人ヲ羨ミテ、農作ニ力ヲ盡サズ、アキナヒヲ致ス者多ク、甚シキ害アリ、アキナヒ致スモノニ制度ヲ立テ、市中ヘ出スヤウニスベシ、村民ニ商人風ウツレバ、耕作ノ苦ミヲ嫌ヒ、百姓ハ引合ヌモノナドト存ジ違ヒヲイタシ、尤モ甚シキハ、足袋ヲハキ草履ヲ蹋テ、田畑ヲ耕ヘスニ至ル、此等ハ小事ニアラズ、忽セニシガタシ、且又博奕酒食ハ勿論ナリ、婚禮。葬式。衣服等ノ制度マデモ、都テ奢侈ニ傾キシ事ハ、嚴重ニ申付度コトナリ、近來天下ノ大患、物價ノ飛ビ騰リシハ、取モ直サズ百姓減ジテ商人多キガ根源ニ紛レナキコトニ思ハルヽナリ、政ヲ執ル者ハ早クモ心得アリ度コトナリ

町奉行心得方

町奉行モ郡奉行ト同ク、淳朴質素ノ風儀ヲ敎ヘ、衣服。飲食諸ノ吉凶儀式事ニ至ルマデ制度ヲ固ク立

テ、オゴリノ源ヲ防グベシ、人ノ奢侈ニウツリ易キ事、水ノ卑キニツクガ如シ、市中ノ衰微スルハ奢侈ナリ、オゴリニウツレバ物價ヲ貪ルノ基ヒタルベシ、兎角俗ニ云フヨヒ衆ト申ヤウナルガアシヽ、市中豪富ノ者ニ格式ナドヲ遣スハ、武威落ルノミナラズ、町人ノ爲ニモアシク、身分ヲ忘レ破産ニ至ルベシ

又町人百姓ハ士人ニ對シ、無禮セザルヤウ嚴重ノ禮節ヲ申付ベシ、又士人町人百姓ニ對シ、士タルノ本意ヲ失フコトアラバ、目附ヨリ嚴シク制シ戒ムベシ、町人・百姓・士人ニ對シ無禮スマジキ儀ハ、公儀ノ御規定アリ、無禮アラバ町奉行ヨリ重ク罰スベシ、是上下亂レズ、武威ヲ落サヾルノ道ナリ、近來ハ士人元ヨリ武門ノ本意ニ適ハザルノ所行アルカ、又ハ金銀ヲ借リ納レテ、約束ヲ違ヒ、町人ニ侮ラレ、動モスレバ無禮咎メナドヲイタシ、甚キハ打擲ナドスルモノアリ、是等ハ町人アシキトモ云ヒガタキ筋合少ナカラズ

サテ近來ハ諸藩トモニ士ノ本意ヲ失ヒ、動モスレバ取リ留メガタキ無禮咎メナドヲ申立、町奉行ト爭フヤウノコトアリ、皆平生ノ申付方忽セナルヨリ來ルナリ、町奉行ハ市中ノ利不利ニ目ヲ付ケ、町人平生ノ人柄善惡マデモ吟味イタシ置テ、公事訴訟アラバ速ニ斷ジテ、幸不幸ナキヤウニ致シ遣ハシ、町人ヲ常ニ畏服セシムベシ、左スレバ武威行レテ、下ノ者上ヲ侮ラズ、自然ト淳樸ノ風儀行ハルヽ也、眞僞ハ知ラネドモ板倉防州公所司代御著ノ砌リニ、大津ニテ車牛無禮イタシタリトテ、其地ノ役人ヘ御

預ケノ事アリ。俗間ニ言ヒ傳フ、定メテ京師ノ町人ニ威ヲ示サル丶ノ心ニヤ、甚ダ味ヒアルコトナラン

又罪人吟味ニ慥ナル證據ナクシテ、徒ラニ嚴敷拷問打擲ナドシテ鞫問スルハ善吏ニアラズ、大抵證據顯レバ辭ニテ鞫問シ、其者罪ニ伏スルヤウニ、矢張リ義ヲ以テ詰リ問フヲ循吏トス、殊サラ事馴レヌ婦女子、田舍ノ百姓ナドヲ謾リニ叱リ威シテハ、ウロタヘテ申狀モ亂ルベシ、一歩押ニ證據ヨリ證據ヲ傳フテ尋子詰レバ、逃レガタキ理ナリ、拷問ノ嚴敷キハ、天理ヲ傷フコトアルベシ、併シ弛クシテ其罪ヲ免レシムルハ、慈悲ト云フベカラズ、何分其情狀ヲ細密ニ論ジテ、卒忽アルベカラザル事ナリ、兎角町奉行ノ下役ハ事ニ馴レテ利口ニ立振舞ヒ、賄賂ヲ受ルヤウナル事多シ、奉行嚴敷吟味ヲ遂ゲテ防グベシ、曲直邪正ヲ亂ルハ小事ニアラズ、兎角金銀ハ如何ナル人ニテモ、ウツムカスモノト、大岡越州殿申サレシ由、奉行タルモノ心得ベキ事ナリ

收納米取方ノ心得

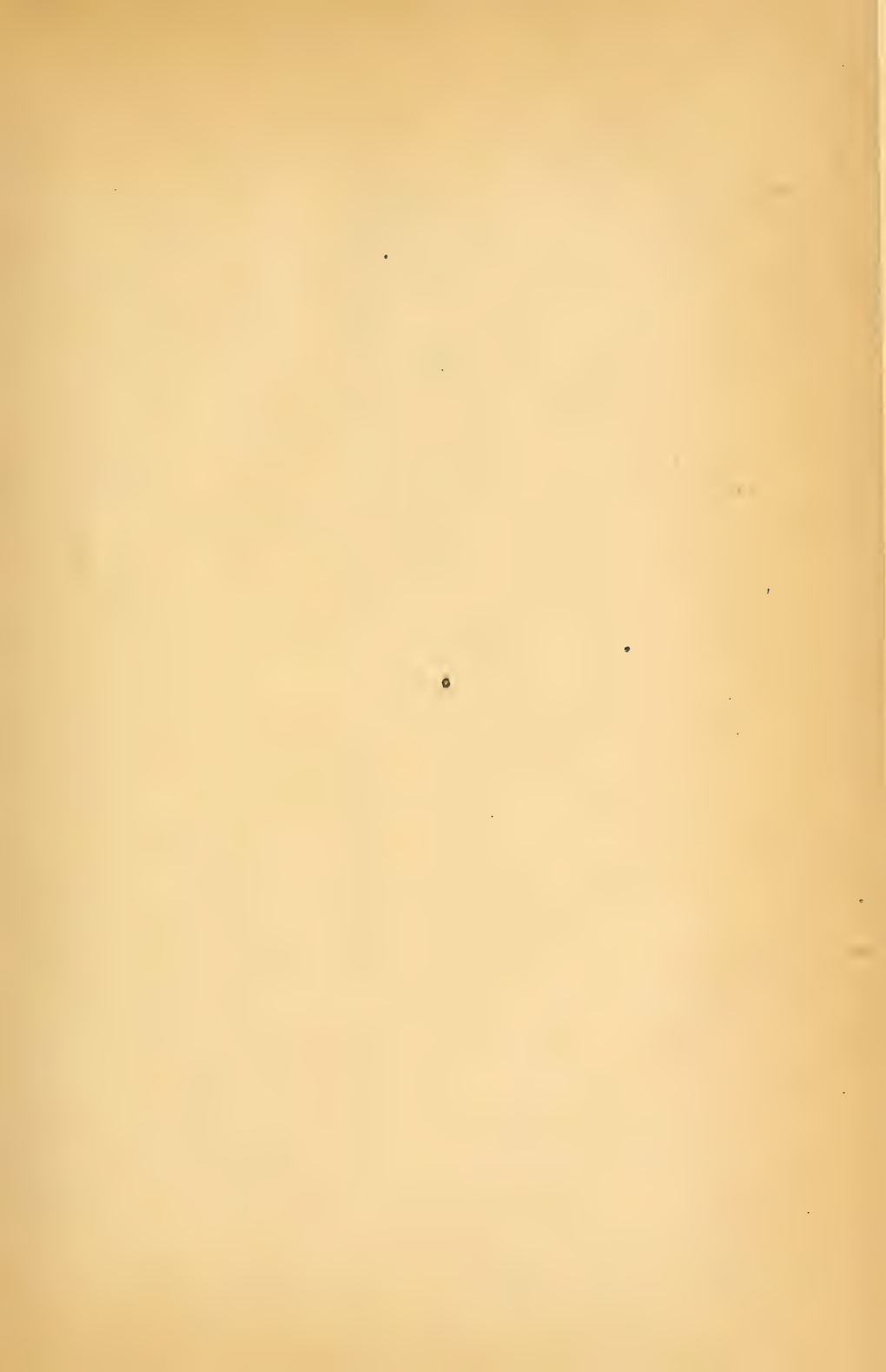
收納ハ嚴重ニ申付ベシ、近來ハ農業ヲ懈タリ、荒ニツク田面ヲ其ノマ丶ニ捨置テ世話致サズ、矢張リ懷手シテ食フヤウノ了簡ニ走リ、何レノ國モ古ニ比スレバ、收納高減ジタル由、其上代官手代ノ族檢見ナドニ出レバ、少々ノ德分アルヲ以テ、中ニ立テ百姓ニ贔方ヲ取持イタシ、譬ヘバ百俵ノ憐憫アレバ、二割三割モ檢見ノ雜費ヲカケテ、百姓ノ手ニ入ルコト少ナク、中ニ消テ領主ノ損失ト成行モノナ

リ、是等ハ嚴重ニ法ヲタテ取立ベシ、司農ノ役人甘クテハ、年々收納方減ズルニ至ルナリ、重役ノ者農事ニ心ヲ懸ケ置度モノナリ、制度アシキ國ハ、收納米ヲ役人ト、子ギリコギリスルヤウナルコトアリ、領主ノ恥辱タルベシ、天災不作ニナクテハ、是非ニ收納イタサ子バナラヌ事ニ心得サスベシ、百姓ハ馬ト同ジコトニテ一度アシキ癖ヲ付レバ、其癖除キガタクシテ、甚ダ六ツカ敷相成モノナリ、當世ハ動モスレバ代官手代ナドノ取持ニテ、上ニタツ人甚ダ甘ク、一度救米ヲ得レバ、年々歎願シテ得ル事ノヤウニ相心得テ、憐愍卻テ毒トナリ、付上リテ制シガタキニ至ルベシ、郡奉行ハ勿論ナリ、重役トテモ農事幷ニ取高ノワケガラヲモ、委曲ニ心得ズシテハ、下ヨリノ歎願相分リガタク、下ニ付コマレ、領主ノ知行ヲ減ズルニ至ルナリ、備前芳烈公ノ熊澤次郎八ヲ用ヒテ、田面ヲ甲乙ナキヤウニ平均セラレシハ、萬代不易ノ興利トモ云フベシ、又ハ大ナル慈悲トモ云フベシ、近來ノ百姓上ヲアナドリ、米價高直ニ託シ、市中ノ無頼惡黨、又ハ村々ノ不善破産ノ輩ラ、己ガ田畑ナドヲ銀方ニトラレシ者ドモ、鬱憤ヲ霽サンガタメニ、愚民ヲ誘ヒ富家ヲ打潰スノ弊アリ、役人キビシク吟味ヲ遂ゲ其源ヲ塞グベシ、此時ニ付コマレ、役人タル者ビクツキ恐レテ、百姓歎願ノ收納ナドヲ多分ニ免スコトアリ、右ヤウナルコトハ、決シテ慈悲ニアラデ柔弱ナリ、俗ニ云フグズリトラレト申スモノナリ、一度癖シ付レバ、役人オドシニ、動モスレバ徒黨ヲ企ツルナリ、武威何レノ處ニカアルヤ、後手ノ廻ラヌヤウニ平生心ヲ用ヒテ嚴ク沙汰スベキ事ドモナリ

今世天下ノ大患ハ人情侈リニ長ジ、皆々骨折ヲ厭フテ農業ニ力ヲ盡サヾルニアリ、農ハ國ノ根本ナレバ、國々勸農ノ役人ヲ置テ、農事ニ骨ヲ折スベシ、左樣ナケレバツヾマルトコロ、織ラズ耕サズシテ、衣食スル者年々ニ增シテ、物價年々ニ飛ビ騰リ、世界一統ニ財貨不足ニナリユキ、人情只管ニ利欲ニ走リ恥ヲ知ラズ、懷手シテ安逸ヲ思フヤウノ時風ニナリユクベシ、凶年饑歲ニ逢テハ、瓦ノ如クニ人心崩レ解クベシ、政ニアヅカルモノハ、本ヲ務メテ豫メ其源ヲ防グベシ、一言ニシテイヘバ、質素ヲ本トシ、人民暑寒ノ苦ミニ堪ヘ忍テ、農ニ力ヲ盡サスベキコト肝要ナリ、近來百姓マデモ奢侈ニウツリ、足袋ヲハキ草履ヲハイテ田畑ヲ耕スニ至レリ、何トモ世上六ツカ敷次第ナリ、上タルモノ飽クマデモコノ身ノ病ヲナホサント一途ニ思ヒコンデ、農業ヲ勵シ勸タキ事ナリ、サテ時弊ヲ防グニハ、大下劑ヲ二三年モ續ケテ用ヒザレバ、參リガタキ姿ナリ、積年浸淫ノ病ナレバ、只觸書ヲ出スノミニテハ、カヘルノ面ニ水トヤラニテ、上ニ立者果敢ノ志ナクテハ、如何ヤウニ命令ヲ出ストモ、惡弊ハ名消テ實殘リ、善事ハ名ノミアリテ、實消失ヒ、誠ニ歎息スルニ餘リアリ、病毒內攻スルト同ジコトニテ、其害言ン方ナシ、何卒役人眼ヲ張リ膽ヲ嘗メ、其實ヲ責テ惡弊ヲ施ス場所ナキヤウニイタシ方アリ度事ナリ

サテ人欲ト云フモノアリテ、目ニハ美色ヲ見ント欲シ、耳ニハ淫聲ヲ聞ント欲シ、口ニハ美味ヲ食ント欲シ、鼻ニハ芳香ヲカヾント欲スト云フヤウニ、人ニハ必ラズアル筈ノモノナリ、然レドモ十分以

上ハ學文ニテ制シ方モアレドモ、町人百姓ハ學文トテハセズトモ、上ヨリ教ヲ施サズシテハ、治メ難キ道理ナリ、併シ教モサルコトナレドモ、先ヅ人欲ヲ起スノ道ヲ塞ギ止ルガ捷徑カト思ハルヽナリ、都會ハ格別、諸侯方ノ國々ニハ、必ズ先ヅ遊所・料理屋・芝居ナドノ人欲ヲ起ス道具ヲ除キサルガヨロシ、其證據ハ蝦夷人ナドハ教ヘハナケレドモ、人欲ヲ起ス道具モナキユヘ、盗賊モナク、惡計詐巧モ思ヒ付ザルナリ、是則太古ノ民ト同樣ナリ、サレバトテ人民ヲ蝦夷人ノ如ク愚ニセヨト云フニハアラズ、人欲ヲ起ス道具ヲ除キ、善心ヲ導ク道具バカリニスレバ、淳樸質素ノ風ニ移シ易ヘルニハ、鞭ハ入ルマジキト思ハルヽナリ、俗儒生ノ輩世ノ勢ヲ辨ヘ知ラザルユヘ、太古堯舜ノ治ヲ比シテ口ズサミニ語ルハ、今ノ時勢ヲ知ラズト云フベシ

破レ家ノツヾクリ話卷之下

大尾

田制溯源考

日吉偉三著

田制沜源考叙

井田孔子之時、業已不レ行、迨レ至三商鞅開二阡陌一、其法終拂レ地、故其詳不レ可二得聞一也、雖レ然、井田仁政之本、仁政聖學之大者、不レ可レ不二考窮一焉、故偉三考二諸事一、窮二諸數一、而其法始瞭然、蓋授田之說、遂人則因レ地爲二之多少一、少司徒則多少因レ口、如二孟子王制一、夫有二定數一、故說者往往疑二其不一レ一焉、偉三考二窮諸事數一、而後知下其疑不レ壹者、因中有レ遺二於算一之所上レ致也、則固非二虛學空言之比一也、嗚、偉三之算之精也、能讀者知レ之、雖レ然、凡著作之不レ行二于世一、因乙能讀者始レ之如レ遺、與下不二能讀一者、不甲及レ知レ之、舍レ之不甲問レ之也、況井田之廢、殆二千餘年、今或有下開二闢無人寂莫之島一、而君レ之者上乎、又或有下一國之主、盡買二其民之田宅一、而使甲其民盡受二田乎我一、而輸乙其賦一乎、井田初可レ行也、是今之世無レ之事也、雖レ然、知二其不可一而爲レ之者孔子也、今之諸侯裁レ之而行レ之乎、則仁政之本可レ立也、偉三固志二于聖學一者、豈知レ不レ行而已歟、昔者物茂題二服元之集一云、寓二爲レ宰之意一、今我於二斯編一亦云

天保九年戊戌六月朔

江都　柳齋和氣道行藏序

田制泝源考例言五則

自周禮受殘敗於僣國、田祿之制、蓋無所可考、孟子且猶不得擧其詳、而況二千年下、今幸可窺其一隅者、二書之外、獨有王制而已、惜乎其文辭、間有爲漢人所攙改、且論田畝者、字頗謬脫、算數不合、多識若鄭君、亦佚焉未究其所窮、而至訓解古書、又多引爲證、以故其解頗有乖戾、是乃田法所以爲千古之疑滯也、雖然、文帝去古不遠、猶可爲證也、故余忘其不肖、竊據周禮所云、以訂其誤脫、更以此校二書所載者、則諸數穩當、左右逢其原、於是剿取其所校若干章及他關田制者數事、附之圖解、以授來叩之徒、夫人世之用、莫急乎田畝、莫明晣乎數、然不求諸其術、猶衆瞽之摸象也、終日思之何益、況初學盲於數與事者、是圖解所以設也

田畝量斛之變、在秦漢之際、古器遺老、猶有存者、法在耳目、甚易事已、是以學者、不屑言之、世遠人亡、制度浸替、人人尚虛華、而忘實用、才俊之士、唾棄而不上齒牙、是以或有古言及於茲者、亦字句脫錯、殆致不可解也、雖然、其事率歸除積算、苟能得其綱挈之、則衆目皆張、而後脫者謬者、的然可表證、不勞指諭、條理著明、猶辨烏鷺於白日、是雖淺事、涉于世用不小、尚覽者少加意

歷朝諸賢、識見非三皆不二高明一、明獨於二田制一、未二能詳悉一者、乃由下不レ考二之事實一、與中考未上レ深、余末學固陋、豈敢好二異義一、意諸說是非二錯、實有下不レ能二默止一者上、是以不二自計一、竊爲二之考證一、出レ不レ得レ已也、庶幾覽者、宥二其僭越一以補二其闕漏一、

此篇、欲二隨讀輙融會一、故不三敢問二書新古一、專以二事類一相次、勿レ咎二前後倒置一、篇內、分數或用二母子一、或用二分釐一、[illegible]名稱、亦不三必別二古今一、要取レ易二記載一、不レ厭レ不レ純、讀者恕レ之

田制泝源考目次

提封　井里
溝洫　分田
賦稅　戶口
邦國　都部
田祿　嘉量
粟米　尺度

田制泝源考

江戸　日吉偉三　著

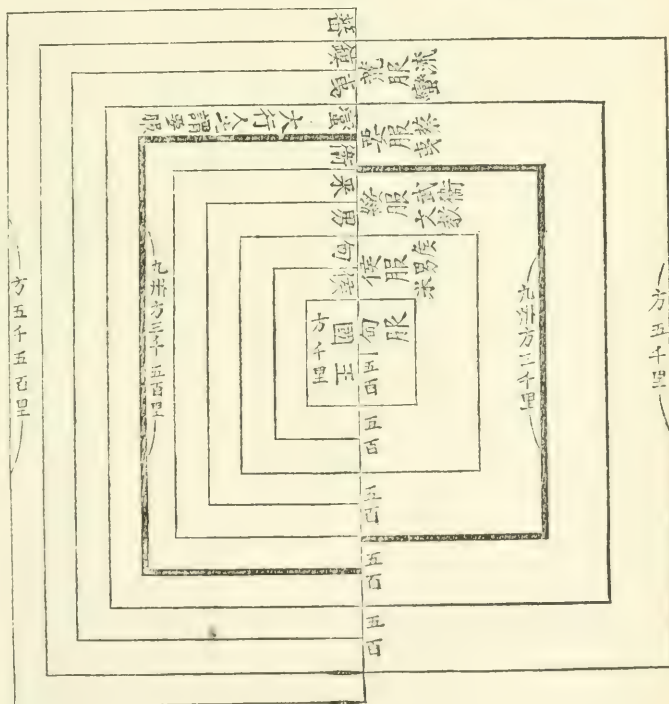
提封

夏官大司馬曰、乃以二九畿之藉一、施二邦國之政一、職方千里曰二國畿一、其外方五百里曰二侯畿一、又其外方五百里曰二甸畿一、又其外方五百里曰二男畿一、又其外方五百里曰二采畿一、又其外方五百里曰二衞畿一、又其外方五百里曰二蠻畿一、又其外方五百里曰二夷畿一、又其外方五百里曰二鎭畿一、又其外方五百里曰二蕃畿一

鄭樵曰、禹貢五服、周官九服、制雖レ不レ同、詳攷レ之無レ不レ合、蓋禹之五服、各五百里、自二其一面一而數レ之、職方九服、各五百里、自二其兩面一而數レ之也、周之王畿、卽禹之甸服、周之侯甸、卽禹之侯服、周之男采、卽禹之綏服、周之衞蠻、卽禹之要服、周之夷鎭、卽禹之荒服、大率、二畿當二一服一、而周人鎭服之外、又有二蕃服一、去二王城一二千五百里、乃九州之外、地增二於禹五百里一也、益稷篇曰、弼二成五服一、至二于五千一、州十有二師、外薄二四海一、咸建二五長一、謂四海之外、各建二諸侯一爲二之長一、豈非二周之蕃服一乎、先儒有二禹加弼萬里、周斥二封疆一之說、後人又爲レ圖以實レ之、皆攷レ古未レ精耳

【考】鄭氏五服九服、無二不レ合之說一、極是矣、但以二要荒一爲二九州之內一、未二極考一也、其名曰二蠻夷一、豈

可レ在ニ華夏之區中一乎、孟子曰、海內之地、方千里者九、王制曰、四海之內、斷レ長補レ短、方三千里、九州之域、不レ逮ニ要荒一、至ニ戰國一尙然、故周書誥命、皆止ニ衞服一、唯大行人周官、言及ニ蠻服一、蓋如ニ蠻服一、來則進レ之、去則退レ之、是謂ニ朝貢之禮一、則進ニ其來者一耳、漢地域、東西九千三百二里、南北一萬三千三百六十八里、提封田、一萬萬四千五百一十三萬六千四百五頃、開方五千六百八十里有奇、乃要荒至レ漢、始入ニ版圖一也

禹貢曰、百里采、二百里男邦、三百里諸侯、三百里揆文教、二百里奮武衛、三百里夷、二百里蔡、三百里蠻、二百里流、以レ此考レ之、雖レ夏亦九服也、唯有二千程一不レ同耳

夏五服　周九服

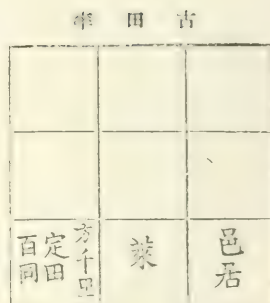
王制曰、方一里者、爲二田九百畝一、方十里者、爲二方一里者百一、爲二田九萬畝一、方百里者、爲二方十里者百一、爲二田九十億畝一、鄭注、億今十萬、方千里者、爲二方百里者百一、爲二田九萬億畝一、鄭注、萬億今萬々也、凡四海之內、斷レ長

補レ短、方三千里、爲ニ田八十萬億一萬億畝一、方百里者、爲ニ田九十億畝一、山陵林麓川澤溝瀆城郭宮室塗巷、三分去レ一、其餘六十億畝

【考】 萬億之萬、皆當レ作レ千、古十萬爲レ億、方百里爲ニ九十億一、則方千里爲ニ九千億一、昭昭也、鄭君於ニ萬億下一、唯曰今萬々、而不レ辨ニ其誤一者、此段誤脫最多、而未レ能レ盡ニ詳明一也、不レ欲下措ニ其難者一、而先辨中其易上、故只謹記ニ其實數一耳、竊按、漢志曰、提封田、一萬々四千五百一十三萬六千四百五頃、其一萬々二百五十二萬八千八百八十九頃、不レ可レ墾、其三千二百二十九萬九百四十七頃、可墾不可墾、定墾田八百二十七萬五百三十六頃、然則定田劣比ニ總疆十七分之一一、以比ニ所レ云三分去レ一者一、得レ田甚少、雖三以其可墾不可墾、悉爲ニ定田一、猶未レ足レ當ニ其半一、其所謂萊者、於ニ何地一求レ之乎、由レ此考レ之、三分去レ一者、其實就ニ可居可墾之中一定レ率也、此合ニ山谿沙磧一槩ニ言之一見ニ大略一耳、若其戶口衆寡、穀土實數、則司空之籍、記而藏ニ天府一、非下禮書之與ニ天下一共レ之比上、周制、公侯實封、凡十二同、而孟子曰、皆方百里、此以レ緣故、畢ニ定田一也、孟子又曰、文王以ニ百里一、文王之囿方七十里、假令ニ方百里實封一、囿何得ニ方七十里一乎、竊就ニ周禮孟子一審レ之、蓋殷人以ニ提封三分之一一爲ニ總田一、總田百畝、以ニ六十六畝六分强一、爲ニ可墾一、以ニ三十三畝三分强一、爲ニ邑居道路不可墾一、周人以ニ提封四分之一一爲ニ總田一、總田百井、以ニ六十四井一爲ニ可墾一、以ニ三十六井一爲ニ不可墾一、王制、乃於ニ三分一去レ一爲ニ總田一、略而不レ言已、周以ニ提封二十五分之二一爲ニ定田一、比ニ漢志一、定墾多ニ十三四一、意是由ニ後世易由廢墜、下地頗荒蕪一耶、先輩皆信ニ鄭君

二千三百四井治洫、三千六百井治澮之說、以爲秦見阡陌、費地廣大、乃剗消其地、悉以爲田、若果然、秦漢田反不及於古、何也、就經熟考之、溝涂之在田間、地僅十一、且古人用民力、歲不過三日、何以爲此廣大溝涂、後世務功利之臣、代無不之有、何以措此良田、附獸蹄乎、斷知五千九百四井、非溝澮之費、三分去一、非括四海言之者、說見下

春秋左傳、楚蔿掩、書土田、度山林、鳩藪澤、辨京陵、表淳鹵、數疆潦、規偃豬、町原防、牧隰皐、井衍沃、賈逵注、山林之地、九夫爲度、九度而當一井、藪澤之地、九夫爲鳩、八鳩而當一井、京陵之地、九夫爲辨、七辨而當一井、淳鹵之地、九夫爲表、六表而當一井、疆潦之地、九夫爲數、五數而當一井、偃豬之地、九夫爲規、四規而當一井、原防之地、九夫爲町、三町而當一井、隰皐之地、九夫爲牧、二牧而當一井、衍沃之地、九夫爲井

【考】　此楚國、物地事之法、大司徒所云、辨五土之名物之事也、賈氏之說、亦必有所受焉、偃豬以上、非穀土、原防以下、則可墾辟、故曰町、曰牧、曰井、按、職方氏曰、荊州其穀宜稻、稻水田爲美、故以衍沃爲上地、雍州其穀宜黍稷、黍稷白田爲美、故詩云、畇畇原隰、度其原隰、皆謂墾田也、偃豬以上、若九度而當一井、四規而當一井、皆雜物之征、然則提封四十五井、以六井爲墾田也、依前率、加之邑居道路二分之一、此爲總田、即提封五分之一也

古田率

方三千里

邑居 萊 定田 百同 方千里

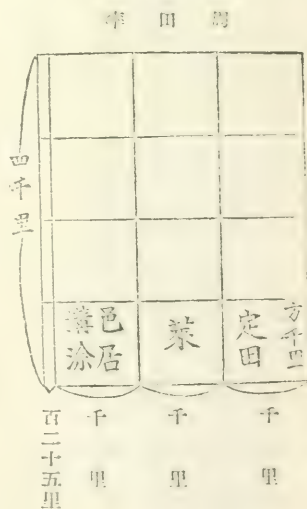
王制曰、九州方三千里、又曰、天子之田方千里、然則提封田九百同、三分去レ二、其餘三百同爲二總田一、總田三百同、邑居道路之不可墾、三分去レ一、其餘二百同爲二墾田一、又通田・不易・一易・再易、去二其半一、餘百同爲二定墾一、是則夏商求二墾田一定率也、王制則略二提封一、直因二總田一建說、後人不レ之察、所三以爲二紛糾一也

周田率

積千一百二十五同開方三千五百三十五里有奇

四千里

定田 方千里 萊 邑居 溝涂

千里 千里 千里 百二十五里

周禮、五服方三千五百里、孟子曰、天子之制、地方千里、周制、二十五分總田、以二其十六分一爲二墾田一、以二其九分一爲二不可墾一、然則定田百同、加二之通上中下萊百同一、得二二百同一、爲二墾田一、又加二之不可墾者、墾田十六分之九百十二同半一、得二三百十二同半一、爲二總田一也、三百十二同半、即提封田四分之一也

楚田率

九井

九井

九井

九井

邑居　原防　原防　原防　濕皐　濕皐　衍沃

九等之地、四十五井、其六井原防濕皐衍沃之可棃者、乃據二古田之率一、加二之邑居道涂三井一、爲二總田積九井一、卽提封五分之一也、然則古田以二九分之一一爲二定田一、周制以三二十五分之二一爲二定田一、楚以二十五分之一一爲二定田一、至二漢志一、以二十七分之一一爲二定田一、蓋穀土古今之異、允非レ如レ是、是古率詳二棃田一、而略二提封一、後世與地之數、逐代顯著故也

井里

考工記曰、車人爲レ耒、庇長尺有二寸、中直者三尺有二寸、上句者二尺有二寸、自二其庇緣一外以至二於首一、以弦二其內一、六尺有六寸、與レ步相中也

司馬法曰、六尺爲レ步、步百爲レ畝、畝百爲レ夫、夫三爲レ屋、屋三爲レ井

【考】周制、六尺六寸爲レ步、此云二六尺一者、蓋言二佃田之實土一、一耦之伐、廣尺深尺、謂二之畎一、一步之內三畎三壟、都六尺、其餘六寸、則爲二遂徑廬舍疆場一寬レ之也、凡田野之形、不レ能二必齊整如一レ度、故身外加二一分一、以爲二定制一、凡方面加二一分一爲レ積、大率增二十二一也、車人爲レ耒、逐レ曲量レ之、則六尺有六寸、可三以外量二井里一、望レ直量レ之則六尺、可三以內量二畎壟一、此爲二軍制一言レ之、故略擧二整數一耳

王制曰、古者以二周尺八尺一爲レ步、今以二周尺六尺四[四當レ作レ六]寸一爲レ步、古者百畝、當二今東田百四十六畝三

(三當作九)十步、古者百里、當今百二十一里六十(十下疑脫三字)步四尺二寸[三](二當作四)分

【考】此蓋秦人所記也、前章所云畝里非周制、故謂古今步里之變、以明其差、曰、周尺者、對古之辭、猶云今尺也、其實三代之度、非有所異也、曰、東田者、指中國之古田、何以言之、以秦既開阡陌也、孟子曰、方里而井、井九百畝、此曰古者百畝、當今百四十六畝九十步、古者百里、當今百二十一里六十三步四尺二寸四分、可知雖古今異步法、三代同以三百步爲里、蓋古人計田以道程、道程必有上下迂曲、故百里、積九百萬畝、其迂曲之容積、三分去一、餘六百萬畝、爲井萬、八萬家耕之、其佃田併公私、家七十五畝、即所謂七十而助也、曰、七十舉成數已、周以實積計田、故以股之一井、改易爲方一里、積九百畝、則其一步開方六尺五寸三分有奇、其定爲六尺六寸者、亦取于成數也、且考工記、明言六尺有六寸、與步相中、此爲四寸即六寸之訛、復奚疑、又九訛爲三、四訛爲二、十下脫三字、亦審然傳寫之誤矣、先儒不正諸周禮之明文、決然附于錯雜、弗深考而已、因此考之周於步法、雖不沿古制、其實無所變革、路程復宜當然、乃古步一里、當周三百六十步有奇、然則路程用三百六十步、蓋亦周人之遺法耶、故孟子曰、海內之地方千里者九、荀子曰、古行五十里、奔喪百里、又曰、魏氏武卒、衣三屬之甲、操十二石之努、負矢五十个、置戈其上、冠冑、日中而趍百里、若以田里度之、則四海之域、周反陵於夏商、而日中趍百里、不足以爲健夫、紀效新書曰通緊、慢行數、晝夜定限、二百零八里有餘、是又以百里爲行程之率、可見路程古今之制一矣、

唐李習之平賦書曰、三百有六十步謂之里、歐陽永叔唐書亦然、物茂卿以永叔爲誤者、又誤也、夫王者革命之際、改正朔易服色、於其勞費不甚異、故聖人或爲之、換塗移溝、勞費最大、宜哉田制、異名同實、路程亦因循不改也、漢志曰、秦孝公、用商鞅制轅田、開阡陌、轅田解頗不明、竊按考工記曰、凡爲轅、三其輪崇、參分其長、二在前、一在後、鬲長六尺、疏曰、鬲長六尺者、以其兩轅一牛在轅內、故狹、此其形與二夫之田相似、轅田之名、蓋本乎此、春秋以降至戰國、歸授之法墜、農民世田、易田浸廢、悉爲歲種、鞅乃觀其一家之力、能任二百畝、而受上地之民、限力於百畝、則消勑其畔界、上中下、皆盼以二夫田、是所謂開阡陌也、秦以六尺爲步、其二百四十步有奇、即當周二百步、然則二百四十步爲畝、自孝公始、信哉、杜氏曰、秦漢以來、即二百四十步爲畝、非獨始於國家、食貨志曰、漢興因秦制度、又曰、率十二夫、爲田一井一屋、故畝五頃、此周秦步法相似類、故云爾、夏后氏五十、殷人七十、周人百畝、秦漢以降一頃、皆一家耕芸之定率也、上世敦朴多農人、故一家之任、五十而足、殷周浸文、君子食於德、小人食於力、商賈工藝雜作之民競、故農夫之任、三分益一、降至秦漢、農兵爲二、故農夫之任、三倍於上古、漸浸之理、非一日之故也

圖八七十

按、七十者二成數一、其積七十有五畝、共六十六畝六分 私田、共八畝三分 公田

宅積百畝	宅積百畝	宅積百畝
夫	夫	夫
夫	公田	夫
夫	夫	夫

方八百尺　古歩三百歩　方一里

（各夫田：六十六畝六分六）

路程方一里、爲二見在田通率六百畝一、此爲二一井一

周人百畝

周以三百六十步一爲路程一里一、則以二六十步一爲迂曲之虛長一、與下股以二三百畝一爲上空積一無異

股以二八尺一爲步、六十六畝有奇爲夫、周以二六尺六寸一爲步、百步爲夫、其實全同

周一夫通受田

六百六十尺

百畝

爲積萬步

百畝

千三百二十尺

秦一頃

横六百尺

四千步

萬步

萬步

縱四百四十尺

縱橫相乘、以二周步積一歸レ之、得二二百一步無奇一、卽周中地之率也

溝洫

地官遂人曰、凡治野、夫間有レ遂、遂上有レ徑、十夫有レ溝、溝上有レ畛、百夫有レ洫、洫上有レ涂、千夫有レ澮、澮

上有ㇾ道、萬夫有ㇾ川、川上有ㇾ路、以達ニ于畿一

【考】兩遂之間、相距百步、即一夫之方面也、凡曰ニ某間有ニ某者一、謂ニ兩地間別夾ニ此物一也、又曰十夫有ㇾ溝者、謂ニ十夫之內有ニ一溝一、其九則墾田、其一則通ニ諸溝涂之占地一也、匠人曰、井間謂ニ之溝一、溝受ㇾ遂者、因知遂流必三夫、 溝澮亦皆準ㇾ之、一同九萬夫、得ㇾ田八萬一千夫、其餘九千夫爲ニ諸溝涂之占地一、諸家注釋皆鹵莽、惟陳及之、三里四溝、十里洫之說、爲ㇾ可ㇾ從矣、見ニ圖解一

夫間有遂

夫	夫
夫	夫
夫	夫

遂　遂　遂

十夫有溝

夫	夫	夫
夫	夫	夫
夫	夫	夫
十夫		
十夫		

溝

百夫有洫

所謂三里四溝

三里三分里之一

溝閒一里

洫深十里

百夫

變形累十而設一洫。其墾田二百七十夫。

百夫

洫溝溝占地三十夫

洫

十夫變形三井一溝

千夫有澮

三十

三	百	夫
三	百	夫
三	百	夫

所謂十里曰洫

百　夫

澮流三十三里三分里之一

洫間三里三分里之一

千夫

千夫

變形累百而設一澮。共二千七百夫經田。

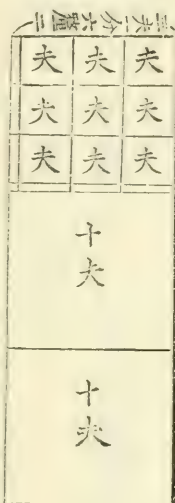
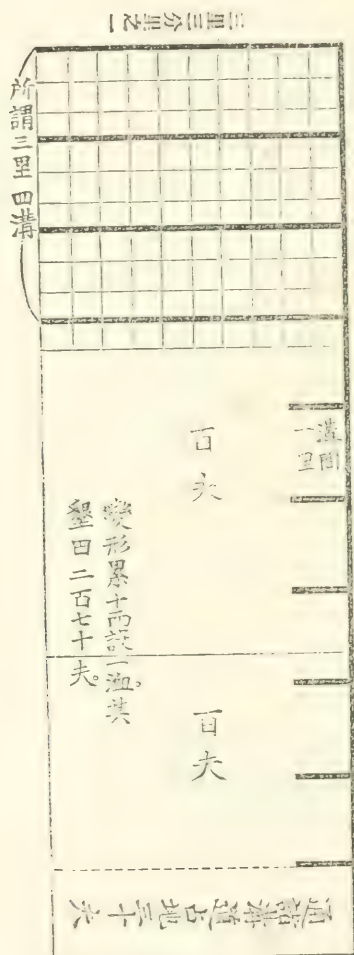
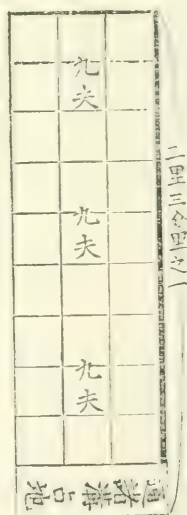
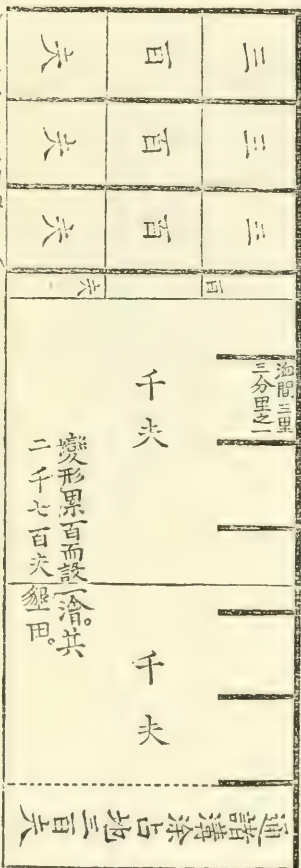
通諸溝余占地三百夫

澮

凡田法、三三相比、夫三爲屋、屋三爲井、井三而設二一溝一、百夫得二一通一、通三而設二一洫一、千夫得二一成一、成三而設二一澮一、萬夫得二一終一、終三而設二一川一、川三爲同、同方百里

一同九萬夫、墾田八萬一千夫、溝畛洫涂澮道川路之占地、九千夫也

方百里

考工記曰、匠人爲溝洫、耜廣五寸、二耜爲耦、一耦之伐、廣尺深尺、謂之甽、田首倍之、廣二尺深二尺、謂之遂、九夫爲井、井間廣四尺深四尺、謂之溝、方十里爲成、成間廣八尺、深八尺、謂之洫、方百里爲同、同間廣二尋深二仞、謂之澮

【考】 廣二尋深二仞、謂之澮、是決言終間之溝也、凡溝洫之制、一縱一横、各異其名、以俾知東南、若以終間溝、置之同間、位置廣深悉乖舛、况方百里之水、廣深二仞、非所能容乎、遂人曰、萬夫有川、川上有路、以達于畿、可見溝洫之法、備具乎萬夫、非待一同而定制者、由此推之、此云同間者、謂終間之流長百里也、同間水大、其法不復待累三、必決之大江巨浸、是故百里以上之水、總謂之同耳、不爾、記文必有錯誤矣、詩云、駿發爾私、終三十里、亦服爾耕、十千維耦、十千耦、三千三百三十三夫、即一終之定田也、蓋田法略備于一終、故世言田事者、動以此爲言也、此亦田法之備、不俟一同一證

專達於川、各載其名

【考】 治野、必因地勢、形小者、或止於溝、或止於洫、大者累積、而至於澮川、謂名稱次第如是、其實皆隨地勢、直洩之大川、不必拘拘於溝入洫、洫入澮、而后歸乎川也、乃與小宰之職、云大事則從其長、小事則專達、同義

凡天下之地勢、兩山之間、必有川焉、大川之上、必有涂焉、凡溝逆地防、謂之不行、梢溝三十里而廣倍、

鄭注、梢謂水漱齧之溝

【考】 遂人溝法、總疆爲皆可開溝也、匠人則三萬夫之地、邑居・道路・溝澮、二十五分去九、餘一萬九千二百夫、通田上中下、其九千六百夫爲萊、其九千六百夫、爲合設溝、大率此三夫、比遂人一夫、

又若邑居形體、界域必殊田里、其溝法亦應有別在、而今不可考也、此溝澮之流、皆二倍遂人、廣深亦宜可倣而大、故曰、三十里而廣倍、不言深者、承上文略之也、廣深各倍、則受水四倍、且溝能隨地勢大其末則注洩利、而水行駛、故能旁受容菜田之水、致必無壞塞也、大抵治田野、遂溝全出於人造、自洫以上、必循天成、而少加人功已、遂之與溝、在田間、要使水畜泄均平、是以本末同廣、洫之與澮、所以注泄于遂溝、勢必當侈其末、故楷法於三十里以上言之、洫首廣八尺、尾倍之、正與澮首合、相承而漸次大、卒達乎川、蓋遂人則謂溝洫之定則、匠人則謂其法臨時有詳略矣、按職方氏、九州穀土、宜稻者十二三、然則古之設溝、多爲降水潦漲、以匠人之溝、比今水田、溝數甚疎、比白田、溝數頗密、意適當時穀土、取其中耳

凡行奠水、磬折以參伍、欲爲淵則句於矩

【考】　凡田畝布置、不必得方正如棋枰、其形必斜稜萬狀也、遂人匠人、共依開方積算、記其法、而此曰磬折而參伍、則見治野不以方正爲主、專因地形與水勢、學者多謂必制地若棋局、而後井田可講、或謂遂人貢法之溝、匠人助法之溝、亦甚矣、貢助收斂之異、豈別在於溝法乎、義疏周氏曰、商制、八家同井、皆私有畝、而同養公田、故曰藉、言借民力以耕之、周制、九夫爲井、悉以授民、而與貢異者、貢者校歲以爲常、周隨年之凶豊、使民納十畝之入、年豊則通其有、年凶則通其無、故爲徹、言君民上下相通也、商之公田、在私田外、周之公田、則在私田中、故孟子云、惟助爲

レ有二公田一、言二惟助有一、則徹無一、以明二制之異一、云二雖レ周亦助一、見二助凶豐相通一、徹亦凶豐相通、明二其意之同一、蓋自二商初一至レ周、歷二六百年一、則生齒必日繁、無二田可一レ給、不レ得レ不下變レ法、幷以二公田一授上レ民、故曰二九夫爲下井、又曰二夫三爲レ屋、屋三爲下井、此周一井九夫、徹與レ助異之明證也、若徹原是助法、周又七百歲、則人人共曉、孟子何用二辭費一哉、自二春秋一至二戰國一、兵爭死亡、生齒日耗、反不レ免二地廣人稀一、故孟子欲レ行二助法一、所レ謂與レ時宜レ之也、是可レ謂下能熟二玩孟子一者上、地官司稼曰、巡レ野觀レ稼、以二年之上下一出二斂法一、是乃通二凶豐一之事也、孟子云、其實皆什一、以二百畝定率一故也、（詳二賦稅考一）云井九百畝、其中爲二公田一、文王之治レ岐也、耕者九一、所三以辨二明助與一レ徹之異一耶

井十為通
井
井
井
井
井
井
井
井
井
井
通
通十為成
方十里
通通通通通通通通通通

成十為終
成
成
成
成
成
成
成
成
成
成
終
終十為同
方百里
終終終終終終終終終終

一步三畎

	○	畎	○	畎	○	畎
		周六尺六寸爲步。	三畎三壟各一尺。	其餘六寸。爲遂徑	廬舍瓜場寛之。	
壟	○	壟	○	壟	○	

九夫爲井

夫	夫	夫	
夫	夫	夫	遂
夫	夫	夫	遂
			遂

井間謂之溝

一溝、提封百夫、其六十四夫、墾田、其二十六夫、邑居道路、其十夫、通二諸溝涂一占レ地也

一溝通二諸溝涂一占地十夫、一洫則三百夫、一澮則三千夫、若戴二溝洫澮一各別レ之、則其千夫溝畛、其千夫洫涂、其千夫澮道也

成間謂之洫

稍溝流三十里
諸溝涂
十里
方十里為成
積九百夫
總田三千夫而設一
田九百六十夫萊七
積九百夫
洫其九百六十夫定
百八十夫邑居道路
三百夫
溝涂三百夫

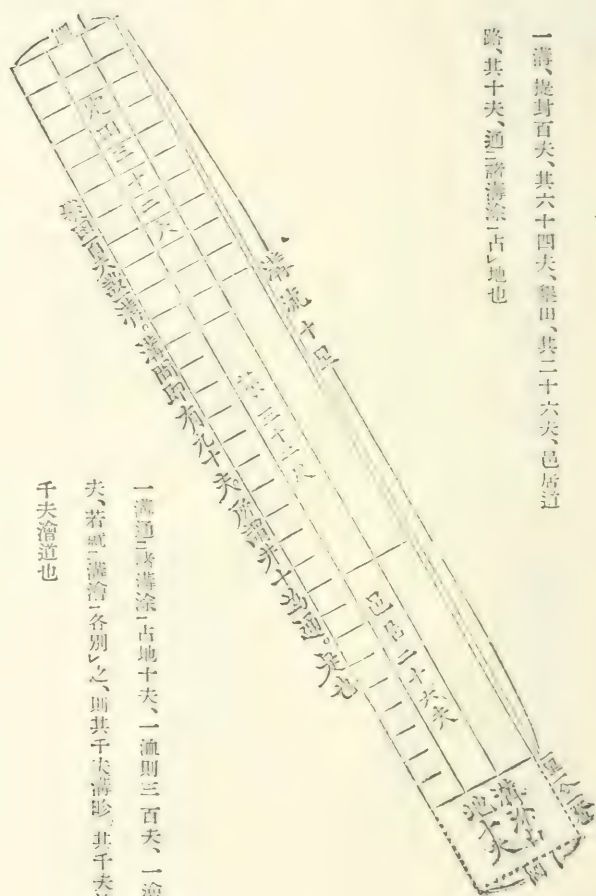
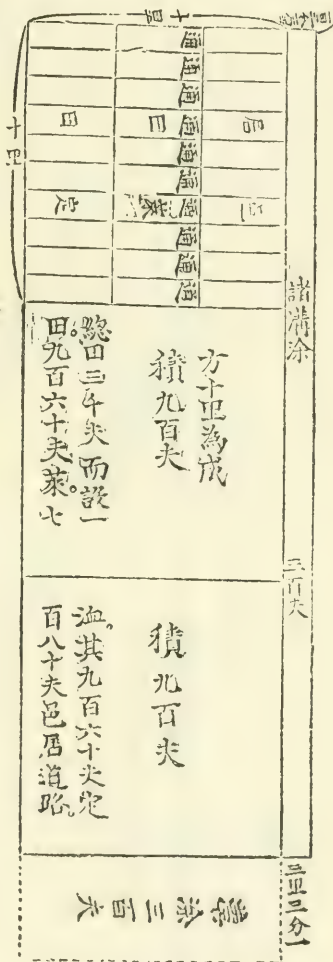
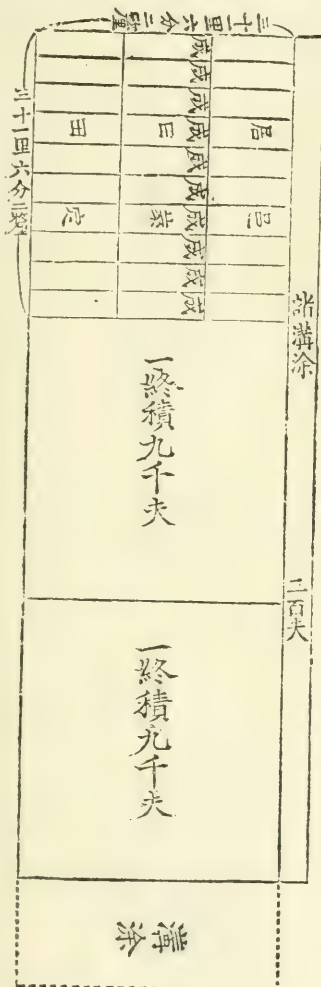
終間之澮

澮流九十四里八分六釐有奇
三十一里六分三釐
諸溝涂
一終積九千夫
一終積九千夫
二百夫
溝涂

終間之澮變形所謂同間謂之澮是也

澮溝百里　道路溝涂占地三千夫	積九千夫 縱三十三里三分之一	積九千夫 總田三萬夫、其田、七千八百夫邑	積九千夫 一萬九千二百夫墾居、三千夫溝涂

三十三里三分之一
廣三十三
方百里

經文終間之澮、獨就二其流一言レ之者、因二於終間一論レ之、則尾數不レ盡、於二變形一論レ之、則得二整數一也、是不下與二井間成間之例一同上矣

總田九萬夫、諸溝間之地、實有二八萬一千夫一、其五萬七千六百夫爲二墾田一、卽六千四百井、其賦革車百乘、若提封一同、爲二出車二十五乘一

休田無二溝涂一乎、曰、經文所レ云、不易・一易、萊五十畝、萊百畝之類、皆總計一歲之收獲之法、其實上中下皆是歲種、但有二良田一步一、而三畎三壟、或二畎二壟一、惡田一畎一壟、而一步或二步之異耳、然惡田未下必一畎、而整二一步一整中二步上、故其溝涂之費、皆各取二於其中一、趙過作二代田一、卽其遺意、假令二休作實如一經文所レ云、定田變爲二萊畬一、何能在レ養二其地力一乎　上文云三易田悉爲二歲種一者、其實亦如二此所レ云、而直因二經文一者、從三其易二閱會一耳

分　田

地官大司徒曰、凡造ニ都鄙一、制ニ其地域一、而封ニ樹之一、以ニ其室一制レ之、不易之地、家百晦、一易之地、家二百晦、再易之地、家三百晦

【考】此言ニ諸侯都鄙制一、諸侯之都鄙、猶ニ王國之四郊一也、故知ニ六鄕分田一、亦如レ之

遂人曰、凡治レ野、以ニ下剤一致レ甿、以ニ田里一安レ甿、辨ニ其野之土一、上地中地下地、以頒ニ田里一、上地夫一廛・田百晦・萊五十晦、餘夫亦如レ之、中地夫一廛・田百晦・萊百晦・餘夫亦如レ之、下地夫一廛・田百晦・萊二百晦、餘夫亦如レ之

【考】聖王數レ口授レ地、量レ力頒レ田、若曰下餘夫受レ田、與ニ正夫一同上、則其不均爲ニ最甚一、且百畝之田、非下孤身之可ニ能耕勑一者上、孟子曰、餘夫二十五畝、是乃周人通法也、云ニ餘夫亦如レ之者、言ニ加レ萊之率無一レ所レ異耳、春官典命曰、公之孤四命、其卿三命、其大夫再命、其士一命、侯伯之國、卿大夫士亦如レ之、大國三卿、皆命ニ於天子一、次國二卿、命ニ於天子一、而是云ニ亦如レ之者、謂ニ命數之同一、非レ謂ニ人數之同一、然則頒田之數、亦非ニ餘夫同受ニ百畝一也、决矣

賦　稅

地官小司徒曰、乃會ニ萬民之卒伍一而用レ之、五人爲レ伍、五伍爲レ兩、四兩爲レ卒、五卒爲レ旅、五旅爲レ師、五師爲レ軍、以起ニ軍旅一、以作ニ田役一、以比ニ追胥一、以令ニ貢賦一、乃均ニ土地一、以稽ニ其人民一、而周知ニ其數一、上地家七

人、可レ任也者、家三人、中地家六人、可レ任也者、二家五人、下地家五人、可レ任也者、家二人、凡起ニ徒役一、毋レ過ニ家一人一、以ニ其餘一爲レ羨、唯田與ニ追胥一竭作

【考】 有レ夫有レ婦、而後爲レ家、上中下各三家、凡九等、所レ謂以ニ土均之法一、辨ニ五物九等一是也、七六五即其中數也、此非下必一家男女七人、則授レ之以ニ上地一、五人授レ之以中下地上、即雖ニ七口八口者一、婦女老幼少、而丁男多者、授レ之以ニ下地一、亦可也、借使ニ五口六口家、婦女老幼多、而丁男少、則非三必授レ之以ニ上地一、卒不レ能レ糊ニ一家口一也、至ニ其得ニ頒與之宜一、冋在ニ宰者一割之間一、百畝之田、雖ニ下下一必足レ食ニ五人一、故其口雖ニ至少一、有家者必役ニ一人一、又八口九口家、其羨餘必別有ニ口田一、然則百畝之所レ食、雖ニ上地一亦唯五人耳、有レ田必有レ稅、故雖ニ餘夫一莫レ不レ有レ稅、無レ家者無ニ里布力征一、唯田與ニ追胥一役レ之、遂人分田之率、一家通受ニ田二夫六分夫之一一、以減ニ一屋之地一、餘ニ六分夫之五一也、以ニ四餘一當ニ一正之法一、算レ之、田六分夫之五、卽餘夫一人有半之通受田也、通ニ上中下三家一、可レ任者七人半、共三人正夫、共四人半、卽三屋之餘夫也、若然一家正夫及丁男、通ニ地上中下一、受レ田三夫也、所レ謂夫三爲レ屋之義則是乎、然其實四家或占ニ一井一、五家或占ニ二井一、必不レ得ニ整如下率也、故曰、辨ニ其夫家人民田萊之數一、夫家、言ニ民宅一、（夫家即所レ云夫一廛也、鄭氏曰、司下男女之無ニ夫家一者上而會レ之、蓋周制、有レ夫有レ婦而後授ニ一廛一、無レ廛者、必無ニ匹配一、故云爾）人民、言ニ男女一、田萊、言ニ辨田之上下一、平日役レ民、以ニ家數一起レ之、唯田獵追胥、則悉征ニ其正餘一、稅及ニ車馬戈楯一、出ニ於田數一、正夫餘夫、皆宜レ受ニ其責一、故曰、辨ニ其可レ任者一、國中自ニ七尺一以及ニ六十一、野自ニ六尺一以及ニ六十有五一皆征レ之、而貢賦之多

寡、必本於田數、因知四餘夫、而當一正夫、是正餘征稅之別也、孟子曰、百畝之田、勿奪其時、八口之家、可以無飢矣、此卽上上地言也、又曰、數口之家、可以無飢矣、此卽下下地言也、定制一夫一婦、佃田百畝、然上地不勞而多獲、故一夫之力、可以保全五人、八口之家、其二則當戶夫妻、其三則老幼、其三則餘夫可任者、一家受田、總計百七十五畝、而四男耕之、若是則人力有餘、耕耨恒至、素餐者雖多、所以無飢寒也、中地勞稍多、獲稍劣、故二夫之力、可以保全九口、下地勞愈多、獲愈少、一夫之力、可以纔保全四口、五口之家、可用者二人、其一則當戶之夫、一則餘夫、一家受田、總計百二十五畝、而二男耕之、比諸八口者、功力半之、四口之家、可用者一人、受田百畝、而一夫耕之、是所以其功愈不及、穫尤不多也、百畝之收、以除租稅口食餘、供終歲凡百之用、卽令餘夫無受口田、何用給其生、餘夫雖別有口田、其口多者、用費亦夥、故口衆授上地、口少授下地、此之謂土均

田賦九等

按、田賦九等、仁政之大本、爲吏民者、所宜注意者

等	人數	內譯
上地三等		
上下	八人	婦女老幼四、可用者四
上中	七人	婦女老幼四、可用者三
上上	六人	婦女老幼四、可用者二
右通三家可用者家三人		
中地三等		
中下	七人	婦女老幼三人半、可用者三人半
中中	六人	婦女老幼三人半、可用者二人半
中上	五人	婦女老幼三人半、可用者一人半
右通三家可用者家二人半		
下地三等		
下下	六人	婦女老幼三、可用者三
下中	五人	婦女老幼三、可用者二
下上	四人	婦女老幼三、可用者一
右通三家可用者家二人		

孟子曰、百畝之糞、上農夫食二九人一、上次食二八人一、中食二七人一、中次食二六人一、下食二五人一

【考】地官所レ云、則謂下據二地之肥瘠・口之衆寡一、授レ地有中差等上、孟子則謂下三等中、據二培養之巧拙一、收獲有中增減上、上地之率、八人爲レ多、而農巧良者、必至レ食二九人一、農拙鈍者、止應レ食二七人一、增者爲二上農一、損者爲二中農一、七人爲レ中、而農巧良者、必至レ食二八人一、反レ之者止應レ食二六人一、增者爲レ上、次損者爲レ中、次六人爲レ少、而農巧良者、必至レ食二七人一、反レ之者止應レ食二五人一、增者爲二中農一、損者爲二下農一、蓋制祿以二上地一爲レ準、故孟子謂レ此、中地下地、推而可レ知也、凡嫁娶者、必受二百畝一、故一家之口、率不レ過二七八一也、嫁娶則必有二慈息一、故少口以レ三爲レ極、而授レ地之率、不レ減二於四口一者、蓋所下以優中恤始爲レ家者、與上二疲拙一者上也

農夫五等

食	等	增損
九人	上農夫	
八人	上次	增者爲上農 損者爲中農
七人	中	增者爲上次 損者爲中次
六人	中次	增者爲中農 損者爲下農
五人	下農夫	

食	等	增損
八人	上農夫	
七人	上次	增者爲上農 損者爲中農
六人	中	增者爲上次 損者爲中次
五人	中次	增者爲中農 損者爲下農
四人	下農夫	

食	等	增損
七人	上農夫	
六人	上次	增者爲上農 損者爲中農
五人	中	增者爲上次 損者爲中次
四人	中次	增者爲中農 損者爲下農
三人	下農夫	

小司徒曰、乃經土地、而井牧其田野、九夫爲井、四井爲邑、四邑爲丘、四丘爲甸、四甸爲縣、四縣爲都、以任地事、而令貢賦、凡稅斂之事、鄭注曰、隰皐之地、九夫爲牧、二牧而當一井、今造都鄙授民田、有不易、有一易、有再易、通率二而當一、是之謂井牧云云、四都方八十里、旁加十里、乃得方百里、爲一同也、積萬井九萬夫、其四千九十六井出田稅、二千三百四井治洫、三千六百井治澮

【考】井・邑・丘・甸・縣・都、皆田數名、此法乃爲辨田數、令貢賦設之、周制以六十四井出乘馬、起徒役、故其田界亦四四相比、便於括算也、蓋造都鄙界域之率、亦若國中截分之率、四分其疆、以一爲都、受地視伯者、其都積大率四甸、而其田在縣、受地視侯者、其都積大率四縣、而其田在都、故四甸以縣爲名、四縣以都爲名耳、鄭君以爲、造都鄙治溝洫事誤也、若誠萬井之地、其四千九十六井出田稅、五千九百四井治洫澮、則海內之賦稅、以六分治澮道、四分給于國用、豈有此理乎、沈氏祿田考、破此以爲加田、巧則巧、然經文本不曰四都、竝是蛇足耳

孟子曰、請野九一而助、國中什一使自賦、卿以下必有圭田、圭田五十畝・餘夫二十五畝、方里而井、井九百畝、其中有公田、八家皆私百畝、同養公田

【考】國中什一使自賦、則一井九夫、以授九人、民各耕百畝、而納十畝之收、是十中稅一也、野九一而助、則一井九夫、以授八人、民各耕百十二畝有半、而納十二畝有半之收、是九而稅一也、都城之下、地狹人衆、故欲悉以授民、郊外地稍廣、故欲助法以授之、即卿大夫職云、國中自七尺以及六

十一、野自二六尺一以及二六十有五一、皆征レ之、復亦此意、國中田少民衆、故後授而先歸而已、近者受レ田少、故稅亦輕、遠者受レ田多、故稅亦稍重、上下通二其利一也、圭田俸祿之外、人受二之田一、其稅亦如レ之、蓋二餘夫、耕二一圭田一、以致二租其卿大夫一、故相言及レ之乎

春秋公羊傳曰、多二乎什一一、大桀小桀、寡二乎什一一、大貉小貉、什一者天下之中正也、什一行、而頌聲作矣、何休曰、一夫一婦、受二田百畝一、五口爲二一家一、公田十畝、即所レ謂什一而稅也、廬舍二畝半、凡爲レ田一頃十二畝半、八家而九頃、共爲二一井一、故曰二井田一、廬舍在レ內、貴人也（倖三按、田中有二廬舍一、蓋備下春借二耕具一、秋納中穫稼一、及風雨憩息之用上、若住在二三百步中一、應レ會二食於其所一、饁二彼南畝一、饋映レ耨、其妻饁レ之之類、果何事）井田以爲レ市、故俗語曰二市井一（按、商賈長二於市一、農父長二於井一、所レ謂市井小人、謂二農商一）

【考】　楚語觀射父云、天子之田九畡、（十經曰レ畡、今萬萬）以食二兆（十億曰レ兆）民一、王取二經（十兆曰レ經、今千萬）入一焉、以食二萬官一、此亦以二四海之內一、爲三定田方千里・積九萬萬畝一、（王制說、以二此語一直爲二王國之法一、故定田大過耳、萬官乃謂下自二公侯伯子男一至中府史胥徒上）萬中取レ千、則是中正之稅、故夏之貢法、殷之助法、其實皆什一也、而周以二貢法一授レ田、以二助之意一斂レ稅、漢儒則以爲、助法以授レ之、貢法以斂レ之、因設レ說云、公田十二畝半、以二二畝半一爲二廬舍一、韓詩外傳・班氏食貨志・何氏公羊春秋注、皆因レ此、然則什外稅レ一也、與下所レ謂其實皆什一、什一者天下之中正、五畝之宅、樹レ之以上桑不レ合、魏晉以來、流俗忽二略制度一、儒士亦多疎二於此一、至二清人經解、周氏・焦氏之輩一、始能論二辨其非一、然審二其所一レ終、亦只闇中摸索、得二之左一、或失二之右一、得二之前一、或失二之後一、未レ有三區分嚼然、無レ疑二于古今一也、今竊校二之周禮・孟子・及春秋左傳等一、以三頗得レ統二一其說一、乃辨二各條下一、什一之說、亦詳二于左一（焦氏孟子正）

義、引二倪氏讀書記一云、其實皆什一也、聖賢之言、文無二虛設一、假令二貢助果皆什一一則其實一語、爲二贅文一矣、唯立レ法、九一什一不レ同、而論二其實一則於二中正之準一初無レ不レ合

什而税一

百畝	公田	百畝	公田	百畝	公田
百畝	公田	百畝	公田	百畝	公田
百畝	公田	百畝	公田	百畝	公田

殷人、合二公田一爲レ一、周人每家公田十夫、私田九十夫、後世於二其私田一又取レ一、故曰二二而不レ足

九百畝變形

私田 九十	公田 九十
私田 九十	私田 九十
私田 九十	私田 九十
私田 九十	私田 九十
私田 九十	私田 九十

九而稅一

百畝	百畝	百畝
百畝	[illegible]	百畝
百畝	百畝	百畝

變形

公田	公田
私田 百畝	私田 百畝
公田	公田
私田 百畝	私田 百畝
公田	公田
私田 百畝	私田 百畝
公田	公田
私田 百畝	私田 百畝

文王紂之三公、猶未ㇾ聖、改二易殷制一、故曰、文王之治ㇾ岐也、耕者九一、一家百畝、以二其半一供二口食一、其實乃五十畝而納二十畝一也、公田借二其力一而治ㇾ之、乃無二口食之耗一、故十二畝半而納二一、是雖ㇾ無二其名一、實皆什一、就二私田之率一言也

孟子曰、市廛而不レ征、法而不レ廛、則天下之商、皆悅而願レ藏ニ於其市一矣、關譏而不レ征、則天下之旅、皆悅而願レ出ニ於其路一矣、耕者助而不レ稅、則天下之農、皆悅而願レ耕ニ於其野一矣、廛無ニ夫里之布一、則天下之民、皆悅而願レ爲ニ之氓一矣

【考】關市之征、有レ所レ爲、而或爲レ之、而後世一切用レ之、田稅之法、周雖ニ悉以授一レ民、隨ニ凶豐一而取レ之、是亦助法也、而後世什一之外、又履ニ其私畝一而取レ之、此徹法之弊也、不レ如ニ助法之公私分明一、故孟子務言ニ助法之善一、有レ宅則有ニ布縷之常貢一、雖ニ不毛者一必取レ之、所三以警ニ懶惰一也、而後世有レ貢者亦取レ之、皆非ニ先王立制之意一

大司徒曰、以ニ土宜之法一、辨ニ十有二土之名物一、以相ニ民宅一、而知ニ其利害一、以阜ニ人民一、以蕃ニ鳥獸一、以毓ニ草木一、以任ニ土事一、小司徒曰、載師、掌ニ任土之法一、以物ニ地事一、授ニ地職一、而行ニ其政令一、以ニ廛里一任ニ國中之地一、以ニ場圃一任ニ園地一、以ニ宅田・士田・賈田一、任ニ近郊之地一、以ニ官田・牛田・賞田・牧田一、任ニ遠郊之地一、以ニ公邑之田一、任ニ甸地一、以ニ家邑之田一、任ニ稍地一、以ニ小都之田一任ニ縣地一、以ニ大都之田一任ニ畺地一、鄭注曰、凡王畿內方千里・積百同、九百萬夫之地也、有ニ山川城邑一、三分去レ一、餘ニ六百萬夫一、又以ニ田不易・一易・再易一、上中下相通、定ニ受田者一、三百萬家也、遠郊之內、地居ニ四同一、三十六萬夫之地也、六鄉之民、七萬五千家、通受ニ二夫一、其餘廛里也、場圃也、宅田也、士田也、賈田也、官田也、牛田也、賞田也、牧田也、九者亦通受ニ一夫一焉、定受田十二萬家也、甸・稍・縣・都、合居ニ九十六同一、八百六十四萬夫之地、定受田二百八十八萬家也、其在レ甸、

七萬五千家爲二六遂一、餘則公邑

【考】任レ土者、因二國家取用之便・采地之大小一序レ之也、鄭若謂、王畿千里、容レ民三百萬家、此據二王制總田之率一算レ之、且截分失レ考、故六鄕之地甚狹小、六遂之地甚疎廣、假令二方千里、容レ民二百萬一、則九服積三千同、共戸九千萬、此地居二漢唐十之九一、戸數反八二倍之一、不レ待二辨駁一、是非較然、司馬法云、王國百里曰レ郊、二百里曰レ州、三百里曰レ野、四百里曰レ縣、五百里曰レ都、此周制之所レ自本一、而非二即周制一、故其名稱亦有二不同一也、今據二地官所レ載家口之率、（戸口數見二本章一）及官祿封邑之多寡等一、詳攷レ之、則其每周截分之大小、名稱之沿革、足然可レ推、而禹貢作雒篇、大府職所レ云皆合、是乃辨二征役一制二官祿一、造二都鄙一之根由、不レ明二於此一、而徒欲三其說二徹上徹下一、所レ謂西レ轅到二筑紫一者也、細義皆讓二圖解一

鄕遂比隣圖

鄕	遂	萬二千五百家
軍		萬二千五百人
州	縣	二千五百家
師		二千五百人
黨	鄙	五百家
旅		五百人
族	酇	百家
卒		百人
閭	里	二十五家
兩		二十五人
比	隣	五家
伍		五人

鄕・遂・州・縣之制、即截二分名稱之所レ自、故併以具二于比較一

沈冠雲云、漢志曰、初雒邑與宗周通封畿、東西長而南北短、短長相覆爲千里、則分郊・甸・稍・縣・畺、爲大小五周、雖算法歸於整齊、要亦隨地勢短長相覆也

大府職云、四郊之賦、以待稍秣、即禹貢百里納總、百里納銍之地也、又逸周書作雒篇、謂郊甸方六百里、因知周制四郊方四百里、而甸地則方六百里、以校司馬法所云、名義皆符、以算邦國之都鄙、祿數皆合

周王畿截分　司馬法截分

畺地方千里
縣地方八百里
甸地方六百里
四郊方四百里
國中方二百里

或謂、大司徒經、皆計二其室數一、以爲二都邑一、而都邑之大小、初不レ係二其地一、不レ係二其里一、言レ不レ係二提封之大小一、若總田其數、與二室數一相表裏、即雖レ有二易不易之贏縮一、通二之州縣一、大較必無レ不レ合、經所レ云方五百里、方三百里之等、亦取二通率一求二諸總田一者、然下國雖レ大必少レ民、上國雖レ小必多レ民、然則云レ不三專係二地數一者、近二於是一、乃嘗論レ之曰、畿内五十萬家、其十萬家爲二國中四郊一、其外十萬家爲二公邑一、又其外十萬家爲二家削一、又其外十萬家爲二小都一、又其外十萬家爲二大都一、如レ此則亦易レ知、而理亦得、然推二之提封一則毎周多有二奇零一、難三以爲二法則一、故經文不下以二室數一言上、此說於二田法一、雖レ爲二贅疣一、附以便二于實用一

以室數制圖

王畿半周

方千里
方八百六十四里
方七百七十四里半
方六百三十二里半
方四百四十七里
畺
縣
稍
甸
遠郊
近郊
國
廛
園
宅

凡任地、國宅無レ征、園廛二十而一、近郊十一、遠郊二十而三、甸・稍・縣・都皆無レ過二十二一、惟漆林之征、二十而五

【考】蓋九職之賦、唯出二於穀土一、謂二之税一、它皆謂二之征一、乃自二六尺一及二六十有五一、皆征レ之、布縷之征、粟米之征、關幾而不レ征之類、是也、故載師之征、穀土固不レ與、力征亦別有二其法一、然則閭師所レ掌、任レ圃以二樹事一、任レ工以飭二材事一、任レ商以二市事一、任レ牧以二畜事一、任レ嬪以二女事一、任レ衡以二山事一、任レ虞以二澤事一、各貢二其物一是也、若二嬪婦・虞衡・臣妾・閒民一、撒二布遠近一、其征輕近而重遠、以二近地狹隘、勞而少一レ利也、

又園圃・工牧・商賈之等、雖ニ地有ニ定所一、其勞逸亦自稱ニ其征一、頒田儉ニ於近一、而寬ニ於遠一征賦輕ニ於近一而重ニ於遠一、皆隨レ事制レ宜也、唯泰林特重ニ其征一、蓋抑レ末之術已、云甸・稍・縣・都無レ過ニ十二一、乃公邑之在ニ其地一之法、若ニ其采地都鄙一、其輕重次第、亦猶ニ王之四郊一乎、征正也、所ニ以正ニ不均一、故隨レ時隨レ事有ニ軒輊一、故曰、毋レ過ニ家一人一、無レ過ニ十二一、非下穀土定爲ニ什一一之比上也、誠若レ是、而始爲ニ本末均平一矣、後世一面納、則爲ニ一歲定額一、一歲求、則爲ニ一代之通制一、故征稅相用不レ分、耆儒碩生、亦狃而不レ疑、

顧於ニ載師一論ニ難之一、遂以爲ニ莽歆之增竄一、不ニ亦寃一乎

凡宅不毛者、有ニ里布一、凡田不レ耕者、出ニ屋粟一、凡民無ニ職事一者、出ニ夫家之征一、以レ時徵ニ其賦一

【考】 此旅師、聚野之耡粟・屋粟・閒粟之事也、宅郎五畝之宅、屋合ニ正餘一言レ之、田不レ耕者、言ニ受而不ト耕也、無ニ職事一者、言下閒民不レ受レ田、唯有レ廛者上、有レ廛者、雖レ無ニ常職一必有ニ一家之征一、此郎孟子所レ云布縷・粟米・力役之征也、然孟子就ニ勤業民一言レ之、此言ニ懈惰無レ職者、亦必取ト之、蓋古法雖レ寬必有レ制、故野無ニ唸吚之民一、國無ニ逋法之家一、是古昔所ニ以俗美而財裕一也、司關曰、國凶札則無ニ關門之征一、猶幾、孟子則謂ニ關譏而不ト征、此曰ニ園廛二十而一一、孟子則謂ニ市廛而不レ征、法而不ト廛、其意大抵雖レ祖ニ述周禮一、皆擇ニ就其輕一、蓋時政隆峻、故務矯ニ揉之一、且創業之術、亦自不レ得レ不レ爾也

司馬法曰、六尺爲レ步、步百爲レ畝、畝百爲レ夫、夫三爲レ屋、屋三爲レ井、四井爲レ邑、四邑爲レ丘、丘有ニ戎馬一匹・牛三頭一、是曰ニ匹馬丘牛一、四丘爲レ甸、甸六十四井、出ニ長轂一乘・馬四匹・牛十二頭、甲士三人・步卒七十

二人・戈楯具、爲二之乘馬一、孔頴達曰、大司馬所レ云、謂二鄕遂出車、及臨時對敵、布陳用兵之法一、此甲士三人・步卒七十二人、謂レ徵二課邦國一出兵之時、長轂・馬牛・甲兵・戈楯、皆一甸之民、同共二此物一、以二一鄕一出二一軍一、則是家出二一人一、其物不レ可二私備一故也、甸卽乘也、六十四井、出二車一乘一、是故以レ甸爲レ名

【考】司徒令貢賦・司馬令賦、皆因二此制一、且豈法不法、莫レ不レ據二于此一、是則周一代之通制也、先輩謂三唯用二之邦國一、非也

夏官司馬曰、凡制軍、萬有二千五百人爲レ軍、王六軍・大國三軍・次國二軍・小國一軍

【考】天子曰二萬乘一諸侯曰二千乘一、皆以二提封一言也、悉實封爲レ田、則天子有二萬乘一、諸侯有二千乘一也、王六軍・大國三軍、則墾田丘乘之實數也、王畿積百同、以二定田率八釐一乘レ之、得二定田八同一、倍レ之爲二墾田十六同一、以二丘乘法六十四一歸レ之、則得二革車二千五百乘一、士徒十五軍、是畿內乘馬竭作之數也、又以二一家通受田百三十七畝有半一、（通二上中下可レ任者一、家二人半、其一人正夫、受田百畝、其一人半餘夫、受田三十七畝有半）除二八同之積七十二萬夫一、得二五十二萬三千六百家有奇一、以乘二家二人半一、得二百三十萬零九千人一、是畿內可レ任者、竭作也、其家數半レ之、二十六萬千八百爲二公邑一、其十五萬家、六鄕六遂也、其餘十一萬一千八百家、廛・場・宅・士・賈・官・牛・牧・賞九者、及公邑之在二六遂外一者也、又以二其半二十六萬千八百家一、爲二三公・六卿・大夫・元士之采地、及方伯朝宿之邑一、則是天子之地、大抵五十同、七軍有半、而其一軍有半、卽諸田之無レ征者・老者・疾者之等、故曰二王六軍一也、以レ此推レ之、大國方五百里、積二十五同、當レ出二三軍一、次國方四百里、積十六同、當レ出二

二軍一、小國方三百里、積九同、當レ出二一軍一、文王之田方百里、而有二革車三百兩一、則出車之率、與レ此全同、唯附庸間田之賦、不レ在二其中一耳、蓋殷制爲レ爾、尉繚子曰、武王以二二萬二千五百人一、擊二紂之億萬一、此以二一車七十五人之率一言レ之、不レ知當時果用二此制一否、春秋大國之封疆、蓋率二折、子產云、今大國多二數圻一故謂晉十家九縣。長轂九百•遺守四千、明堂位曰、封二周公於曲阜地一、方七百里。革車千乘、皆以二封疆蝸作一言、又春秋傳云、夏少康、有二田一成一、有二衆一旅一、夏田制未レ詳、然是周人語、亦以二周制一言、田一成則言二定田一。積九百夫、以二家率百三十七畝半一歸レ之、得二六百五十四家一、諸無レ征者•老者•疾者五分去レ一、其餘五百二十三人、曰二一旅一者擧二成整一也

畿內方千里

王六軍

鄉遂及公邑五十同

七軍有半

稍縣都　七軍有半

此圖宜與田祿考併觀

公封疆

大國三軍

積二十五同

侯封疆

次國二軍

積十六同

伯封疆

小國一軍

積九同

司馬法曰、井十爲ㇾ通、通爲二匹馬三十・家士一人・徒二人一、通十爲ㇾ成、成百井三百家・革車一乘・士十人・徒二十人、十成爲ㇾ終、終千井三千家、革車十乘・士百人・徒二百人、十終爲ㇾ同、同方百里・萬井三萬家、革車百乘・士千人・徒二千人

【考】武成曰、歸二馬于華山之陽一、放二牛于桃林之野一、周初既兼二用牛馬一、此制唯曰二匹馬一、且一成三百家、亦不下與二周制一合上、是所ㇾ謂夏后氏其兵不ㇾ雜者乎、書曰、唐虞稽ㇾ古、建ㇾ官惟百、夏商官倍、周又增至二於三百六十一、士庶之分漸明、役使多事、是所下以周減二野士一增中徒卒上歟、至ㇾ如二公羊傳注云、十井共、出二車一乘一、其苛酷、闔代之所二嘗無一、訛謬尤甚者、按十井出二車一乘一、周禮・司馬法、並無二此法一、何氏何由得二此言一乎、竊意、他據二公侯百里一、稱爲二千乘一、臆二撰此說一、方百里、積萬井、以出二千乘一、則十井當ㇾ出二一乘一、然則是唯合二於諸侯一耳、若王畿方千里、則當ㇾ出二十萬一、與二萬乘之稱一不ㇾ合也、且十井之田、雖三悉以爲二上地一、戶數必不ㇾ過二四十有奇一、卽雖ㇾ因二何氏八十戶之說一、使二其出車一乘・馬牛士徒若干一、何堪二其重斂一、後人未二之察一、或云車馬兵器、皆國家所ㇾ給、展轉附理、名實俘馳、皆由二田法不一ㇾ明、可ㇾ歎哉

一井三家

六十六畝強	六十六畝強	六十六畝強
三之	三之	三之
一邑	一乘	一乘
居	田	田

夏后氏五十而貢、依二周制可レ任家二人半一推レ之、則一家受田六十八畝有奇、然則夏制、餘夫在二六十六畝有奇中一、故百井三百家、而出二革車一乘一也、然鄭君所レ引、司馬法文。以二周步法一記レ之、蓋周人記レ之歟、不書今不レ可レ見、姑存レ疑可也

一井二家

三之	田公	田公
一邑	三	四十四畝
居	之一	六十六畝
	萊	六十六畝

助法、總田一井、以二三百畝一爲二定田一、其二十二畝有奇公田、其百七十七畝有奇私田

殷制、比二夏制一三分益レ一、民受二六十六畝有奇一、依二周制可レ任者家二人半一推レ之、一家受田九十一畝有奇、是二家大率占二一井一也、文王殷之大國、定田方百里、有二革車三百兩・士三千人一、然則殷之田制、雖レ異二於前代一、於二軍制一尙因循也

一井二家有奇

六鄉分田率

邑居	萊	定田
	田十八畝	田十八畝
百八畝	七十二畝	七十二畝
百八畝	百八畝	百八畝
百八畝	百八畝	百八畝

六遂分田率

邑居	萊	定田
田十八畝	田十八畝	
六十畝	七十二畝	七十二畝
百八畝	百八畝	百八畝
百八畝	百八畝	百八畝

殷人以二私田十六分之九一爲二邑居溝涂一、周人六鄉之制、亦以二私田十六分之九一爲二邑居溝涂一、乃定田積二百八十八畝、以二家率百三

十七畝半ヲ除レ之、得ニ二家一分無奇ニ、以レ此求ニ之於[illegible]田百井ニ、得ニ其田率六十四井ニ、然則出車之率、周亦因循、六遂之制、定田二十四分、益レ四爲レ案、二十四分、損レ一爲ニ邑居溝涂ニ、以ニ鄕外城邑差少、涂巷又狹ニ故也

戶口

小司徒曰、乃均ニ土地ニ、以稽ニ其人民ニ、而周知ニ其數ニ、上地家七人。中地家六人。下地家五人

【考】通典謂、周武王時、九州人口、千三百七十萬四千九百二十三、未レ詳ニ其所レ據、蓋以ニ漢唐戶口ニ推レ之耳、今依ニ周禮所レ云算レ之、則得ニ口三千八百萬四千ニ也、其法九州方三千五百里、自ニ乘之ニ得ニ千二百二十五同ニ、以乘ニ定田率八釐ニ、（定田率、則提封二十五分之二）爲ニ九十八同ニ、又以ニ屋率六五ニ乘レ之、（定田九百畝、以ニ家率一三七五ニ歸レ之、得ニ六家有半ニ、是爲ニ屋率ニ）戶六百三十三萬四千、又乘ニ口率六ニ、（通ニ地上中下ニ家六人）三千八百萬零零四千人、九畿方五千五百里、提封三千零二十五同、其定田二百四十一同、以ニ六五ニ乘レ之、得ニ戶千五百七十三萬ニ、又乘ニ口率六ニ、得ニ九千四百三十八萬人ニ、按ニ漢志ニ、戶千二百二十三萬三千六十二、口五千九百五十九萬四千九百七十八、蓋周禮以ニ中州生齒繁息之地ニ定レ率、漢志則合ニ四裔ニ錄ニ其實數ニ、故其口致ニ甚不レ同、（唐天寶十四年、管戶八百九十一萬四千七百九、口五千二百九十萬九千三百九、應レ受ニ田一千四百三十萬三千八百六十二頃十三畝、東西九千五百十里・南北萬六千九百十八里ニ）杜氏反據レ此、推ニ盛周中土之人口ニ、可レ謂ニ粗漏ニ也

邦國

大司徒曰、乃建ニ王國ニ焉、制ニ其畿方千里ニ、而封ニ樹之ニ、凡建ニ邦國ニ、以ニ土圭ニ土ニ其地ニ、而制ニ其域ニ、諸公之地、封疆方五百里、其食者半、諸侯之地、封疆方四百里、其食者參之一、諸伯之地、封疆方三百里、其食者參之

一、諸子之地、封疆方二百里、其食者四之一、諸男之地、封疆方百里、其食者四之一

孟子曰、天子之制、地方千里・公侯皆方百里・伯七十里・子男五十里、凡四等、不ㇾ能二五十里一、不ㇾ達二於天子一、附二諸侯一曰二附庸一

【考】 凡經傳、言二土地一者、有二實封一、有二管轄一、有二定田一、天子之制、地方千里、公侯皆方百里、是以二定田一言ㇾ之、凡四海之內、方千里者、十有二、其定田方千里也、天子以二四海一爲二一家一、則公侯伯子男、皆在二其中一、公侯實封、方三百五十里、積十二同、其定田大率方百里也、天子曰二萬乘一、諸侯曰二千乘一、是以二實封一言ㇾ之、方千里悉以爲ㇾ田、（田言二總田一、下同）則當ㇾ出二革車萬乘一、方三百五十里、悉以爲ㇾ田、則當ㇾ出二革車千乘一、是非二丘甸之實數一矣、九服方五千五百里、公封疆方五百里、是以二管轄一言、此類諸家皆混淆無ㇾ別、以二一律一解ㇾ之、故彼此支吾耳、所ㇾ云食者半、參之一之等、皆言二天子所ㇾ食附庸一（論語云、夫顓臾、昔者先王以爲二東蒙主一、且在二邦域之中一矣）閒田・名山・（泰山在二魯地一）大澤之隷二諸侯之封內一者、以二周公勳勞許多一故、以二王之所ㇾ食、悉予二魯侯一、詩曰、錫二之山川土田附庸一、是也、於ㇾ是更加二王之食一者、如二實封之數一、故明堂位曰、封二周公於曲阜地方七百里一、春秋傳云、大蒐二于紅一、革車千乘、而孟子曰、周公之封二於魯一也、爲二方百里一也、今魯方百里者五、此以二諸公之定制一言ㇾ之、然因二此語一味ㇾ之、方百里者五、則伯禽之初封而已、何則春秋以來、見二魯日衰弱一、未ㇾ聞ㇾ有二侵伐併呑之功一、然而多田若ㇾ是者、蓋以下濫二取天子所ㇾ食山川・土田・附庸小國一、咸爲中其有上也、方七百里之定田、爲二方百里者四一、孟子惡二驕僭無一ㇾ厭、故其言過當耳、費誓曰、魯人三郊三遂、三

郊三遂、即地方五百里、而其誓命之語、不似勅他邦人者、皆實封故也、詩云、公車千乘、謂大總計地出車也、公徒三萬、謂郷遂兵數也、然則三郊三遂、成王優侍周公之制、獨魯得有此、然不言郷遂、而言郊遂、所以別於王國耶、漢儒見春秋以來、諸國吞併之後、以魯爲次國、乃諸說所以有乖謬也、子曰、三軍可奪帥也、匹夫不可奪志也、孟子曰、秦楚之王、悦於仁義、而罷三軍之師、可見三軍非次國之所能出也、又悉作千乘、則六軍、而詩曰、公徒三萬、亦別於王國也如他公國、其實封必不能二郷二遂、先輩謂爲公國之通制謬也、又晏子春秋謂、太公受地五百里、焦孝廉孟子正義、引閻氏釋地又續云、管仲曰、昔賜我先君履、南至於穆陵、北至於無棣、穆陵山名、今在沂水縣、無棣溝名、今爲海豐・慶雲兩縣、南北相距七百里、是乃齊之初封、其封疆絕長補短、方五百里之明證也、王制曰、九州、州建百里之國三十。七十里之國六十。五十里之國百有二十、此以提封言、然則大國定田、不過一終、意者、此算家假設之語、非建國之實、孟子曰、湯以七十里、文王以百里、其語相聯對無別、可見雖湯田祿、即言定田、由是觀之、夏商大國、亦必有方二三百里者、夫王者用師、耕市猶不變、況無辜之君、界域或大或小、使各得其所而已、何必用整齊如王制乎、詳于下

一、諸子之地、封疆方二百里、其食者四之一、諸男之地、封疆方百里、其食者四之一
孟子曰、天子之制、地方千里・公侯皆方百里・伯七十里・子男五十里、凡四等、不レ能二五十里一、不レ達二於天子一、附二諸侯一曰二附庸一

【考】凡經傳、言二土地一者、有二實封一、有二管轄一、有二定田一、天子之制、地方千里、公侯皆方百里、是以二定田一言レ之、凡四海之內、方千里者、十有二、其定田方千里也、天子以二四海一爲二一家一、則公侯伯子男、皆在二其中一、公侯實封、方三百五十里、積十二同、其定田大率方百里也、天子曰二萬乘一、諸侯曰二千乘一、是以二實封一言レ之、方千里悉以爲レ田、（田言二總田一、下同）則當レ出二革車萬乘一、方三百五十里、悉以爲レ田、則當レ出二革車千乘一、是非二丘甸之實數一矣、九服方五千五百里、公封疆方五百里、是以二管轄一言、此類諸家皆混淆無レ別、以二一律一解レ之、故彼此支吾耳、所レ云食者半、參之一之等、皆言二天子所レ食附庸一（論語云、夫顓臾、昔者先王以爲二東蒙主一、且在二邦域之中一矣）間田・名山・（泰山在二魯地一）大澤之隷二諸侯之封內一者、以二周公勳勞許多一故、以二王之所一レ食、悉予二魯侯一、詩曰、錫二之山川土田附庸一、是也、於レ是更加二王之食一者、如二實封之數一、故明堂位曰、封二周公於曲阜地方七百里一、春秋傳云、大蒐二于紅一、革車千乘、而孟子曰、周公之封二於魯一也、爲二方百里一也、今魯方百里者五、此以二諸公之定制一言レ之、然因二此語一味レ之、方百里者五、則伯禽之初封而已、何則春秋以來、見二魯日衰弱一、未レ聞レ有二侵伐併呑之功一、然而多田若レ是者、蓋以下濫二取天子所レ食山川・土田・附庸小國一、咸爲上レ其有上也、方七百里之定田、爲二方百里者四一、孟子惡二驕僭無一レ厭、故其言過當耳、費誓曰、魯人三郊三遂、三

郊三遂、即地方五百里、而其誓命之語、不似勅他邦人者、皆實封故也、（詩云、公車千乘、謂大總計地出車也、公徒三萬、謂鄉遂兵數也）然則三郊三遂、成王優侍周公之制、獨魯得有此、然不言鄉遂、而言郊遂、所以別於王國耶、（漢儒見春秋以來、諸國呑併之後、以魯爲次國、乃諸說所以有乖謬也、子曰、三軍可奪師也、匹夫不可奪志也、孟子曰、秦楚之王、悦於仁義、而罷三軍之師、可見三軍非次國之所能出也、又悉作千乘、則六軍、而詩曰、公徒三萬、亦別於王國也）如他公國、其實封必不能二鄉二遂、先輩謂爲公國之通制謬也、又晏子春秋謂、太公受地五百里、焦孝廉孟子正義、引閻氏釋地又續云、管仲曰、昔賜我先君履、南至於穆陵、北至於無棣、穆陵山名、今在沂水縣、無棣溝名、今爲海豐・慶雲兩縣、南北相距七百里、是乃齊之初封、其封疆絕長補短、方五百里之明證也、王制曰、九州、州建百里之國三十。七十里之國六十。五十里之國百有二十、此以提封言、然則大國定田、不過一終、意者、此算家假設之語、非建國之實、孟子曰、湯以七十里、文王以百里、其語相聯對無別、可見雖湯田祿、即言定田、由是觀之、夏商大國、亦必有方二三百里者、夫王者用師、耕市猶不變、況無辜之君、界域或大或小、使各得其所而已、何必用整齊如王制乎、詳于下

九州二十五分之二、積方百里者九十有八、云二千里一者、記二成數一也、定田積當二九州積之八殺一、此曰二定田率一、五等諸侯之田、皆準レ之

九服方五千五百里

五服方三千五百里

方十同

定田

四服積千八百同。猶三諸侯之封内有二附庸閒田一。

魯國三郊三遂

方七百里

提封四同

出車百乘

實封積二十四同

天子食者。名山大澤附庸閒田。凡二十四同。

諸公之地

方五百里

實封積十二同有半

其食者半

（方百里）

定田

所謂公侯皆百里

實封積十二同半、開方三百五十里有奇

諸侯之地

方四百里

實封十同六分六釐

其食者參之一

（方九十里）

定田

實封積十同三分同之二、開方三百二十六里有半

諸伯之地

方三百里

實封積六同

其食者三之一

所謂伯七十里

（方七十里）

定田

實封積六同、開方二百四十四里有半

諸子之地

方二百里

實封積三

同

其食者四之一

所謂子男五十里

（方五十里）

定田

實封積三同、開方百七十里有奇

偉三按、封建之實、大國極少、次國亦無ㇾ多、小國及附庸極多、適ニ此率一、乃九服之内、當ニ封千有餘國一、然則所ㇾ謂千八百國者、蓋夏商時、封國未ㇾ大之數歟、又知ㇾ云ニ萬邦萬國一、共是大衆總合之稱、後世天下墾田之多、唐天寶爲ㇾ最、其數埒與ニ大司徒所ㇾ云之率一略同。以ㇾ萬歸ㇾ之。則一國之所ㇾ得、僅二百四十井有奇。安得ㇾ爲ㇾ國乎

春秋左傳云、子産曰、昔天子之地一圻、列國一同、自レ是以衰、今大國多數圻矣、又薳啓彊曰、昔人云々、因二其十家九縣一、長轂九百、其餘四十縣、遺守四千

【考】天子一圻、（天子一圻、對二九州一則是定田、對二天子之實食一則是提封）列國一同、與二孟子一全同、邦畿千里、其定田方二百八十里有奇、大國定田方百里、其實封三百五十里有奇、乃天子言二封疆一、諸侯言二定田一、皆取二整數一便二言談一也、蓋當時通言、故云二列國一同一、今多數圻、開七十里、爲二政於天下一者、未レ聞下以二千里一畏レ人者上、皆交互雜擧言レ之、而人隨解レ之耳、一縣百乘、即比二諸子之國、及畿内大都之制一也、蓋晉之變制、慊二於天下一、故冒以二小都名一

大國數圻

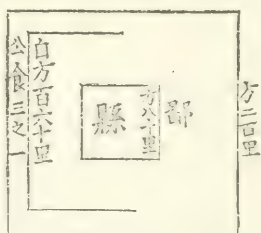
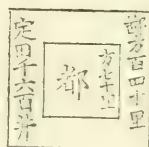
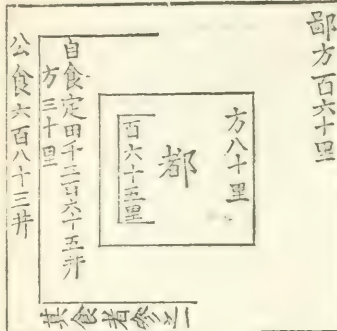
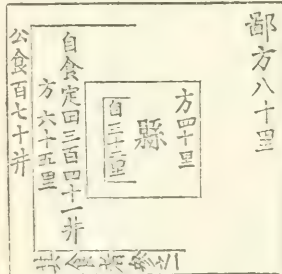
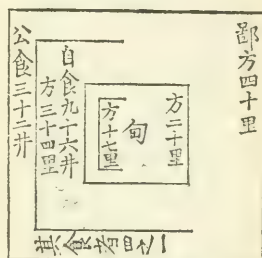
方千里 長轂二千五百乘	方千里者二、則出二車五千乘一、晉人長轂九百、遺守四千、則其地倍二於天子一也

一縣百乘

方二百里
自方百六十里
公食三之一
郡
方八十里
縣

按此制、截分今倣畿外一、其貢則從二畿内之車一、又車數合公自言レ之、與二司馬之制一無レ異

都鄙

大司徒曰、凡造二都鄙一、制二其地域一、而封二溝之一、以二其室數一制レ之、鄭注曰、其界曰レ都、鄙所レ居也

【考】義疏駁曰、春秋使伐及二邊境一、則書曰レ鄙、傳曰二都城過二百雉一、又曰、邑有二先君廟一曰レ都、蓋都所レ居、鄙則界也、邦國之都鄙、猶二王國四郊一、故各以二其實封二十五分之四一造焉、又王臣受レ地、視二諸侯之君一者、其封疆、亦皆比二所レ視之都鄙一、故畿內之采地、通呼二之都鄙一諸侯之都、即王之國中、鄙即野也、而野之所レ指不レ一、或對二國中一指二四郊一、或對二四郊一指二六遂及稍・縣・疆一

天子之卿
鄙方百六十里
方八十里
都
百六十五里
自食定田千三百六十五井
方三十里
公食六百八十三井
天子之大夫
鄙方八十里
方四十里
縣
自三十二里
自食定田三百四十一井
方六十五里
公食百七十井
天子之卿受地視侯者
定田二千五十八井
公六百八十三井
自千三百六十五井
其大夫受地視伯者
定田五百十二井
公百七十一井
自三百四十一井
其元士受地視子男者
定田百二十八井
公三十二井
自九十六井
視二其隷一者、俟與レ卿、元士與二大夫一全同、唯伯不レ合、説見二田禄考一
男
提封四分
方八十六里
方三十四里
都
同之三
子
提封三同
方百七十里
方六十八里
都
伯
提封六同
方七十八里
都

天子之元士

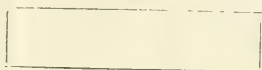
按、大國之臣之采地亦曰レ都、傳云、凡邑有二先君之主一曰レ都、無曰レ邑、邑曰レ築、都曰レ城、是以下邑爲レ都也、然其制必小二於王畿之都城一、故云三邑無二百雉城一、但以二宗廟所在一、故尊二大之一、準二附庸一耳

提封方二十里、其田萊即六十四井、故方二十里亦爲レ甸、都居二鄙四之一一、故知二元士之地、方四十里、大夫之地、方八十里、卿之地、方百六十里、又侯伯之地、天子食者參之一、子男之地、天子食者四之一一、故知二卿大夫之地、亦食者參之一、元士之地、亦食者四之一一、然卿大夫之地、封疆不レ過二子男一、而公食之率、却從二侯伯一、是乃春秋傳云、卑而貢レ重者歟

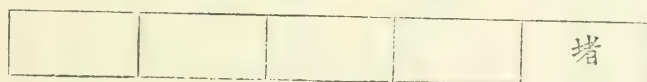
春秋左傳、祭仲曰、都城過二百雉一、國之害也、（都城是天子之卿、視レ侯者之城、即與二附庸之城制一同）先王之制、大都（公侯之城）不レ過二參國（國即匠人營國之國）之一一、中（諸伯之城）五之一、小（子男之城）九之一、今京城不レ度也、禮坊記云、子曰、制レ國不レ過二千乘一、（千乘以二提封一言、即公侯之實封）都城不レ過二百雉一、家富不レ過二百乘一、（百乘亦以二提封一言、即王之大夫、公之孤卿之所レ受）春秋公羊傳云、邑無二百雉之城一、（百雉小國之城制、家臣雖レ大、必不レ得二百雉一）雉者何、五板而堵、五堵而雉、百雉而城、（按、雉長二百五十尺、高一丈、度レ高以レ高、度レ長以レ長、如二韓詩說、八尺爲レ板、五板爲レ堵、五堵爲レ雉、雉長四丈、何休以爲、堵四十尺、雉二百尺、左傳說、一丈爲レ板、板廣二尺、五板爲レ堵、一堵之廣長丈高丈、三堵爲レ雉、一雉之牆、長三丈、高一丈、皆非、詳辨レ下）考工記云、匠人營國方九里、旁三門、國中九經九緯、王宮門阿之制五雉、宮隅之制七雉、城隅之制九雉、經涂九軌、（軌八尺）環涂七軌、野涂五軌、門阿之制、以爲二都城之制一、宮隅之制、以爲二諸侯之城制一、（諸侯言二公侯伯一）環涂以爲二諸侯經涂一、野涂以爲二都經涂一

【考】都城不レ過ニ百雉一、即司徒制國之擧、諸侯邑城之制、亦宜ニ以レ此爲下準、故參伸引以規レ之、非ニ即邑城之制一、故曰、邑無ニ百雉之城一、魯且猶無、鄭何得レ有レ此、左氏・公羊氏在ニ當時一、親聞ニ見其制一、必當レ無レ謬、且較ニ之考工記一亦合、則城雉之制、本無レ容レ疑也、然諸家泥ニ於典命一、其國家以レ九爲ニ節等之語一、乃謂王城十二里・公九里・侯伯七里・子男五里、或據ニ匠人所下云、以意爲ニ降殺一、謂王九里・公七里・侯伯五里・子男三里、以求ニ其說一、而不レ得、抑私竄ニ改於堵雉之長一、強ニ會其數一、而愈益不レ妥、雖博如ニ鄭君一、亦兩解無レ所レ決、何則左氏所レ云、即因ニ乘之數一、而諸家皆以ニ旁面一爲レ說、故諸數柄鑿、致ニ此聚訟一耳、典命所レ云、則禮之儀節、即車制、王玉路錫樊纓十有再就、公金路鉤樊纓九就、又王城十二門、公城蓋九門、故云、若ニ城制一、應レ因ニ食地之大小一、而從ニ古說一、則天子之地積百同、而其城積八十一里、公之地積僅十二同半、而其城積四十九里、侯之地積十同有奇、伯之地積六同、而其城積皆二十五里、其聖人之制、不均豈若レ此乎、此等之淺事、紛錯二千年、論者數十家、無レ所ニ敢一定一何也、無レ他、不レ因ニ算數一耳、嗚呼握算雖ニ微技一、爲ニ六藝之末一、凡爲レ士者、不レ可三必不ニ考窮一也、鄭君別傳云、玄精曆數緯圖、兼ニ精算術一、其然、豈其然、今以ニ左氏・公羊、及考工記所下載推レ之、皆與ニ實封之降殺一相應、說列ニ于左一

禮器云、天子諸侯臺門、疏云、兩邊築レ闍爲レ基、基上起ニ重屋一、曰ニ臺門一、板則築土之具、故城牆之屬、以レ板度レ之、乃與ニ宮中度以レ尋、野度以下步同レ意、周弓車之制、以レ步爲レ法、宮中及門涂、便出ニ入此物一、故以レ尋爲レ法、蓋寬ニ二分一以爲ニ檻閑之地一、甚受ニ宮門之屬一、故以ニ十尺一爲レ法、蓋亦寬兩邊二分、營造之法、

不レ得レ不レ爾、故今截然以二板長一丈一爲レ正、五板爲レ堵、五堵爲レ雉、傳有二明文一、且累加之數、何氏說爲レ近

板

廣二尺

長十尺

五板而堵

一丈

長五十尺

五堵而雉

高一丈

堵

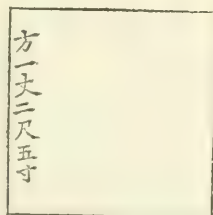
長二百五十尺

凡築レ土、高不レ過二數丈一、

故雉不レ增レ高

環堵之室

原憲環堵之室、都城有雉、

皆以レ周言レ之、蓋當時通言

周五十尺

方一丈二尺五寸

方一丈二尺五寸、當二今九尺四寸一、

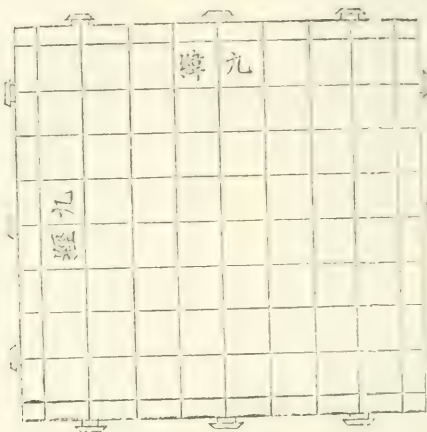
可レ謂二貧居之極一也

營國方九里

作雒篇、城方千七百二十丈、當二千七百八十二丈、篠田考、破レ七作レ六、非也

周二百八十八雉

九經

九緯

方七十二雉
方九里

公侯之城

大都參國之一

周百六十雉

方五里、則三百二十四分之一百、言三之一者、記成數也

方四十雉
方五里

伯之城

中五之一

周百二十八雉

方四里、則五萬六百二十五分之一萬、言五之一者、記成數也

方三十二雉
方四里

子男之城

小九之一

周九十六雉

王臣都城之制、附庸之子男、皆不レ過レ此、言ニ百雉ー者、亦記ニ成數ー也

方二十四雉
方三里

周六尺六寸爲レ步、三百步爲レ里、一里即二千尺、雉二百五十尺、八雉即二千尺、二十四雉即六千尺、此方三里之城、即方二十四雉、周九十六雉也、孟子曰、三里之城、環而攻レ之、蓋小城易レ降、故云、又造ニ城雉ー、必應レ據ニ平廣之地ー、故里法用ニ田法ー、而不レ以ニ路程・上下・迂曲之率ー

	九雉 九軌	七雉 七軌	五雉 五軌	三雉 三軌
王	城隅 經涂	宮隅 環涂	門阿 野涂	
公侯伯		城隅 經涂	宮隅 門阿 環涂	野涂
子男			城隅 經涂	宮隅 門阿 環涂 野涂

王卿雖レ貴、受レ其與ニ諸子ー仝同、故城亦用ニ其制ー

九雉七雉三雉、皆言レ高也、即度レ高以レ高、則九丈七丈三丈

天子諸侯、門阿之降殺、若不レ以ニ高卑ー、而以ニ多少ー

過ニ五十里ー準レ伯、不レ能ニ五十里ー者、附ニ諸侯ー、又賈公彦曰、王卿不レ入ニ諸侯ー、然則附庸都城、皆不ニ臺門ー、故高ニ丈

田祿

孟子曰、天子一位、公一位、侯一位、伯一位、子男同一位、凡五等也、君一位、卿一位、大夫一位、上士一位、中士一位、下士一位、凡六等、天子之卿、受地視侯、大夫受地視伯、元士受地視子男、大國地方百里、君十卿祿、卿祿四大夫、大夫倍上士、上士倍中士、中士倍下士、下士與庶人、在官者同祿、祿足以代其耕也、次國地方七十里、君十卿祿、卿祿三大夫、大夫倍上士、上士倍中士、中士倍下士、下士與庶人、在官者同祿、祿足以代其耕也、小國地方五十里、君十卿祿、卿祿二大夫、大夫倍上士、上士倍中士、中士倍下士、下士與庶人、在官者同祿、祿足以代其耕也、耕者之所獲、一夫百畝、百畝之糞、上農夫食九人、上次食八人、中食七人、中次食六人、下食五人、庶人在官者、其祿以是爲差

春官大宗伯曰、以九儀之命、正邦國之位、壹命受職、再命受服、三命受位、四命受器、五命賜則、六命賜官、七命賜國、八命作牧、九命作伯

典命曰、掌諸侯之五儀、諸臣之五等之命、上公九命爲伯、侯伯七命、子男五命、王之三公八命、其卿六命、其大夫四命、及其出封、皆加一等、公之孤四命、眡小國之君、其卿三命、其大夫再命、其士一命

【考】周制、建國造都鄙、及出軍之數、莫皆不以王國爲法式者、孟子所以天子爲一位也、據周禮諸侯諸臣命數之差、制軍大小之等、證以孟子之言、則周人田祿之制、粗可備也、然獨唯與王制

不レ合、蓋意者秦漢以降、君臣霄壤、天子特異、故錄二王制一者、竊點二易古語一、以阿二媚於時君一而已、翟氏考異云、王制乃漢文帝、敕令下博士諸生、採二集傳記一、斟酌損益、以成中其篇上、制祿爵節、明屬レ採レ自二孟子一、時周禮未レ顯二於世一、諸博士猶不レ及レ見レ之、故惟以二孟子一書一爲レ本、其所二以微有二異同一、正二博士之所二斟酌損益一、何可下轉二據之一議中孟子上乎（見二皇清經解孟子正義一）

九命作伯	上公九命	
八命作牧		王之三公八命
七命賜國	侯伯七命	
六命賜官		其卿六命
五命賜則	子男五命	
四命受器		其大夫四命
三命受位		王元士三命
	子男之國、有二五命一、有二四命一、故曰、公之孤四命、視二小國之君一、王大夫亦有二五命一、有二四命一、故曰、大夫視レ伯、而子男唯曰二五命一、大夫唯曰二四命一、更迭言レ之、公侯伯皆準レ之	王之卿、受レ地視レ侯、大夫受レ地視レ伯、元士受レ地視二子男一、即及下出封加二一等一之意上

天子之制地方千里	王六軍	千里
公侯皆方百里　大國	大國三軍	百里
	次國二軍	九十里
		八十里
伯七十里　次國	小國一軍	七十里
		六十里
子男五十里　小國	附庸	五十里
		四十里
		三十里
	司馬、所レ云小國、則謂二五十里以上一者、一軍即率方七十里、二軍率方九十里、三軍率方百里、皆就二其極一言也、五十里以下、不レ言者、以三附在二三軍二軍一軍之中一也	

論語云、方六七十、如二五六十一、乃知下建國固不上レ能二整齊一也、此云二千里・百里・七十里・五十里一者、皆言二其槪數一也、然則知二子男之國一、過二五十里一爲レ伯、不レ及二五十里一爲二附庸一、其達二於天子一者無レ幾、是有レ制無レ實、此所三以孟子曰二子男同一位一、尙書曰、分レ土惟三也、王大夫四命、宜レ視二五命子男一、然無レ有也、故視二諸伯之小者一

王制、謂三二等諸侯之下士、皆食二九人一、亦非二孟子之意一也、周禮五等之命、君卿之祿、皆據二地之大小一、各有二差降一、士之祿獨無レ差乎、庶人在レ官者之祿、固應レ有レ差、然此專論二六等之祿一、擧二庶人之差一、所三以審二士之差一也、故謂二其祿以レ是爲一レ差、不レ謂レ視二上農夫一矣、上農夫、蓋應レ比二史記所レ謂畝鍾之田一、畝鍾則百畝之收、粟六百四十斛、爲二米三百三十三斛一、人日食二五升一、日食二五升一、則通二少壯一言、若二軍食一則異レ此 一歲卽十八斛、九人共食二百六十二斛一、其餘百七十一斛、以爲二終歲之用費一、大國之下士視レ此、下農夫、蓋應レ比下李悝云三百畝爲二粟百五十石一者上、粟重百五十石、卽二百八十八斛也、爲二米百五十斛一、人日食二五升一、一歲卽十八斛、五人共食二九十斛一、其餘六十斛、以爲二終歲之用費一、小國之下士視レ此、中則通二二田一知レ之、春秋左傳、公與二免餘邑六十一、曰唯卿備二百邑一。臣六十矣、下有二上祿一亂也 坊記疏云、免餘辭邑之言、當レ據二古法一、誤 杜氏謂二一乘之邑一、則據二當時僭擬說一也 以爲二少師一、公使レ爲レ卿、辭、衛臣弗二敢聞一、公固與レ之、受二其半一、易訟九二、不レ克レ訟、歸而逋、其邑人三百戸无レ眚、三十邑、其戸大率三百戸、卽大國卿祿之至薄者 侯爵也、其卿食二百邑一、可レ見二大國之卿。采地之極。凡四百井一也、司徒分田之率、四井大率十三家、四百井卽千三百家、所レ謂十室。千室之邑是乎、又所レ謂百乘之家、卽王之大夫、公之孤受レ之、諸侯有二孤卿一、猶二周之有一レ魯、故其食或當二卿之常祿一、而采地必有二公食一、然則其封疆當二九十里一、故稱爲二百乘一、采三必參二百乘一 春秋僭亂、千乘非二大國一、所三以列國有二百乘之臣一也、以二免餘一證レ

之、六等之祿、乃就二小極一言レ之、是與二五等之田一相反、蓋互文示二祿階遞迤一也、士而比二一農夫一、可レ觀二祿之最少者一、至二其多一、必有下殆及二中士一者上、中士・上士・大夫・卿、皆然、故四大夫卿祿之最少、而至レ多必有二又四レ之、是則百邑六十三十、所二以皆可レ爲レ卿二於衛一耶、以レ此推レ之、則其食天子大率萬三千井、大國之君大率千六百井、次國之君大率七百井、小國之君大率二百井、略與二其都鄙之入一合、然此班祿之大較、至二其實食一、皆量レ入以爲レ出、要在二宰臣之潤澤一也　祿田考云、公羊傳、古者上士・下士、彤謂惟子男不レ當レ有二中士一耳、謂三公侯伯而亦無二中士一、傳之誤也、偉三按、無二中士一蓋

附庸子男之制、若下將二五十里一者上、亦如二孟子所レ云也

大國之君、合二千七百井一、其什一、當二今糴十二萬三百包一、其下士之食十一夫有奇、當二今八十八包一、餘可二推知一

公侯	公	侯
君	千七百井	千四百六十四井
卿	百六十九井	百四十六井
卿	三十九井七	三十六井六
大夫	九井九分二	九井一分五
上士	四十四夫六分	四十一夫二分
中士	二十二夫三分	二十夫〇六
下士	十一夫一七	十夫〇三

通二農夫上中下一、則百畝之收、家食二七人一、然其實以レ除二稅一一分餘一食二七人一也、然則公田百畝、即當レ食二七人七分有奇一、食二九人一則百十一畝七十步之所レ入、食二八人一則百畝三步之所レ入也、是下士祿、公其田公私共千百十七畝、侯其田公私共千三十畝

伯	
君	七百二十井
卿	七十二井
卿	二十四井
大夫	七十九井九
上士	三十六夫
中士	十八夫
下士	九夫

次國之下士、視二中農夫一、食二七人一、則九十畝之所レ入、其祿九百畝之田稅也

子男	子		男
君		二百五十一井	
卿	四十一井	三十五井一分	十一井四
卿	十三井六	十二井五六	五井一七
大夫	六井八四	六井二八	二十五夫七
上士	三十夫八	二十八夫二	十二夫八
中士	十五夫四	十四夫一四	〇
下士	七夫七分	七夫〇七	六夫四分

小國之下士、視二中次一、食二六人一、則七十七畝之所レ入、附庸之下士視二下農夫一、食二五人一、則六十四畝之所レ入、其祿七百七十畝、與二六百四十畝之田稅一也

按、子男祿數、孟子則通其全言之、公羊所云、則偏言之、今試以侯伯之例、及公羊傳所云推之、其數略與孟子合、然其食公侯子男、皆寓於都鄙、唯伯籍於都鄙、[illegible]此制祿之粗法也、至頒食之實、其奉君以都鄙、下士以農夫、而卿大夫士爲諸子其中也

天子之卿、受地視侯、大夫受地視伯、元士受地視子男、乃周禮六官之屬、凡二萬有奇、例而推之、雖給以天下、必有所不足、然以事理考之、王之公卿、佐佑天子、指揮羣公、其祿非若是、則職與食不相稱也、又據序官所云之爵等、與其職掌之小大詳之、六職唯宜當此祿、其餘曰中大夫、曰下大夫、曰上士者、其位階雖宜爾、其功勞固無足以當此食者、然則六職、三公・六卿・三十六大夫・四十八上士、冬官以例推補之 凡九十三人、是所謂天子縣內、按、六遂之餘地、自何地至畿畺、皆以縣計之、而王臣皆食於此、故曰縣內之國 九十三國耶、按、孟子雖有闕、觀其議、必不雜正而妄言、王制雖雜、多是古言、其論古不據此、假令合必妄、又欲[illegible]必合、[illegible]、要在詳考事理、斟酌人情、以求大較 若其鄉遂之官、王臣與陪臣、其勞全同、故命數雖有異、受祿蓋不甚遠也、因此考之、所謂視侯伯子男者、其實蓋添一卿於上公孤卿上耳、乃證諸四郊及縣都、求畿內之定田、揮與數皆亢、可以觀其近乎事實也、祿數詳左

王臣祿等

天子	視侯卿	視伯大夫	視子男士	中大夫	下大夫	上士	中士	下士
一同[illegible]千井	千三百六十五至同	三百十一井至同	九十六井至八十五井	三十一井	十井	四十八夫	二十四夫	十二夫

上公祿等

孤	卿	大夫	上士	中士	下士
同至三百三十八井	百至六十九井 三十八井	九井九分	四十四夫	二十二夫	十一夫

按、諸侯之祿等、合二中下大夫一爲レ一、猶三諸男無二中士一、王臣之祿、視二侯伯子男一、猶三諸侯之卿有二上中下一、又其加倍之率、與二上公一不レ同者、猶二大國・次國・小國漸次有一レ差、據レ例依レ理、不レ得レ不レ然也、乃以レ此求レ之、王食一萬三千井、封邑二萬九千井、禀食四萬六千井

祿田通計七萬五千井

視侯卿	視伯大夫		視子男士				
(三公六卿)九人	中大夫十二人下大夫廿四人		上士四十八人				
	中大夫	下大夫	上士	中士	下士	府史胥徒	去常役者
	六官凡三十人 婦官卿十一人	六官凡百人	六官凡三百人	六官凡九百人	六官凡千九百人	凡二萬四千人	
	(卿老)三人 鄉大夫六人 遂大夫六人	州長縣正六十人 鄉遂餘地四十四人	黨正鄙師三百人 同上二百人	族師鄼長千五百人 同上一千一百人	閭胥里宰六千人 同上四千四百人		比長鄰長三萬人 同上二萬人
凡萬二千二百井	凡千二百井	凡二千井	凡四千三百井	凡九千三百井	凡三萬井		
	視伯凡萬二千二百井		元士凡四千六百井				

夫食祿所三以酬二レ功也、鄕遂之吏、雖二爵等不一レ同、如二其祿一必當レ因二所レ掌之小大一、故小司徒位中大夫、而其職掌レ領二法於老鄕大夫一、又閭胥位二中士一、而冒二胥名一、鄕大夫位レ卿、而冒二大夫名一、明二其實一也、六鄕之卿之祿、不レ過二中大夫一、則知下封官之卿、亦不上レ過二中大夫一、又云、庶人在レ官者、與レ士同レ祿、蓋言二府史之屬一、若胥徒一必有二復所レ殺者一、至二其比降之長一、蓋免二常役一耳、其他六官之屬、亦皆因レ職爲二差降一、猶下漢祿法謂二中比一者上乎、賈公彥云、按、顧命太保領冢宰、畢公領司馬、毛公領司空、別有二芮伯爲二司徒一、彤伯爲二宗伯一、衞侯爲二司寇一、則周時三公、各兼二一卿之職一、又司士云、以レ能詔レ事、以レ久奠レ食、是則大夫以上有二攝官一、士以下亦有二試官一、且公卿未三必采二諸畿內之臣一、唯其祿之等、取二法則於此一耳、今所レ推祿數、則農民兼二賦稅百几之費之率一、而若二王之班祿一、云有二粟錢布帛一、是故用穀不レ過二畿內歲入之半一、而其食必給矣、且外有二邦國九貢之貨一、閒田山澤之賦、則三年耕而餘二一年食一、亦應レ非二難事一

沈冠雲祿田考、以レ爵定レ祿、以レ祿較レ田、條列頗者、可レ謂二巧且辨一也、然沈氏未三精二覈經田之實數一、徒就二紙上一逞二言論一、專務二涉獵一、未三嘗留二意於事實一、乃說之所レ不レ得、輙爲二牽合之解一以斷レ之、此當レ爲二一場之奇譚一、未レ可レ謂レ盡二制度之原一也、夫老樵雖レ大、良工不レ采者、以レ無レ所レ用レ之也、況經レ國制レ用之術、然世之雷同耳食之士、或服二其通博一、珍玩以爲二至寶一、吾恐因レ是愈益加二此道之晦蝕一、故敢指二摘其可レ議者一二一、以當二闇夜之燎燈一

沈說

爵	田	六官		婦官
公	方六十四里	三公三人		
卿	方三十二里	孤卿九人		婦官十一人
中大夫	方十六里	六官三十	八人	十二人
下大夫		六官一百	三人	二十四人
上士	方八里	六官三百	人	十二人
中士	方四里	六官八百九十	六人	四十八人
下士	方二里	六官千八百十	一人	十二人
庶人在官者	方一里	六官二萬一千	七百三人	千百三十七人

祿田數

				一萬二千二百八十八井	
其見於	卿大夫六人			二萬六千六百二十四井	
經而不可周	州長三十人 遂大夫六人				二萬二千十六井
知其數者	黨正百五十人 縣正三十人	六鄉之餘地			七萬八千六百井
六人	族師七百五十人 鄙師百五十人	縣正十一人	六遂之餘地		七萬八千六百井
廿四人	閭胥三十人 酇長七百五十人	鄙師五十五人	縣正九百五十三人		九萬一千六百井
百十八人	比長萬五十人 里宰三千人	酇長二百七十四人	鄙師四千七百六十五人		九萬九千九百井
千四百五十四人					二萬四千三百井

通計四十三萬三千九百二十八井　通田上中下定田二十一萬六千九百六十四井

余嘗較三之歷朝史志所レ載之定墾田、及戶口一、考二之周禮分田之率、制軍之法一、乃方千里之定田、實不レ過二八九萬井一、而沈氏所レ考祿田數、凡二十萬井、是非三唯同二其法用一、既不レ給二於其食祿一、此不レ揣二其本一、而齊二其末一也、辨折雖レ詳、將二何爲一、又所レ云郊野之官、野之鄙師、與二鄉之比長一同レ食、設外內有二其肦之不一レ同、猶至下五百家師、與二五家長一同上レ等、從二沈氏說一、使鄉之吏、優遊飽二過當之食一、野之吏裸跣以奉レ職也、夫田官聽二於上一、遑二於下一、人情不レ獲二於上一、必漁二於下一、設レ法若レ是、而民不レ蒙二其毒一者、未二之有一也、沈氏又謂爵與レ命之等常相因、爵同則食同、是亦曲說、典命云、侯伯七命、子男五命、一則百里與二七十里一、一則五十里與二二十五里一也、以二大夫一爲二一等一、參二諸侯之制、如王臣、則序レ官明別二中下一、何得三盡若二沈氏所一レ云乎

六鄉諸吏祿

一鄉之定田千五百六十二井、其公田百七十三井有奇

官	實食
卿一人	實食百十四井
州長五人	百四十二井
黨正二十五人	七百十一井
族師百三十五人	八百八十井
閭胥五百人	八百八十井
比長二千五百人	五百五十井

諸吏實食、總計三千二百七十七井、通二田上中下一、定田千六百三十八井

天子使二吏治一レ國、其食必不レ過二半公田之入一、若二沈氏六鄉諸吏之祿、十二倍於公田一、其食本無レ可レ給之理一、是以割二郊野之祿一、以補二其乏一、甚無レ謂也、是涉二于古今治亂一、決不レ可レ行之法也、方千里、當二六ツ方百四十里一、定田八萬井、當二今三千八百萬斛一、截二之今田率一、亦不レ爲レ不レ多、安有レ使二外吏苦一レ窮勤、以無饑待一乎、是周二改レ之本一精耳、顧沈氏經生而略知二算數一、復不レ易レ得者、議以二其二其事一散上、尊二恩於無用之學一、可レ惜哉

嘉量

考工記㮚氏曰、量レ之以爲レ鬴、深尺、內方尺而圜二其外一、其實一鬴、其臀一寸、其實一豆、其耳三寸、其實一升、春秋左傳、晏子曰、齊舊四量、豆區釜鐘、四升爲レ豆、各自二其四一、以登二於釜一、釜十則鐘、漢書律歷志曰、量者、龠・合・升・斗・斛也、其法、用二銅方尺一而圜二其外一、旁有レ庣焉、其上爲レ斛、其下爲レ斗、左耳爲レ升、右耳爲二合龠一

【考】周量之制、方尺深尺、定爲二米六斗四升一者、蓋本二田制四四相比令二貢賦一、田法總田一成、以二六十四井一爲二墾田一、三十六井、爲二不可墾一、粟則如二總田一、米則如二墾田一、筭則如二不可墾一、止二於鐘一者、做二田

法一備二于十成一、然則周量起二原於一釜積一、累而爲レ鐘、割而爲レ區、爲レ豆、爲レ升、淵源與二漢志一全不レ同、
物茂卿曰、祇味二周禮之文一、內方尺而圜二其外一、自當レ具二方圜一、一量具二方圓一、而方米圓粟、庣爲二之限一、庣
雖レ出二漢志一、其字它無レ所レ用、必是古來相傳之說、非二劉歆所一レ剏、鄭注脣字、恐即庣字誤、不レ爾圜二其外一
者、卒爲レ無レ謂、故今定謂下㮚氏量具二方圜一、以爲中米粟法上也、米粟法乃量法大關係、漢斛去レ庣、直以二
周粟斛法一、爲二其米法一、於レ是不レ得レ不三別設二粟斛一、斛遂有二二種一、後世量法、變者、自レ此始、（以上解二周量一）又曰、
此班固述二劉歆說一、乃至莽制、而其斛積與二漢制一全同、故班固述レ之、比二周禮㮚氏量一、大同小異、周以二升・
豆・區・釜・庾・鐘・秉一爲二量名一、漢盡廢不レ用、以二合・升・斗・斛一爲二量名一、劉歆又加レ龠、以爲二五量一、故其
制變レ方爲レ圓、以容二一斛一、變レ豆爲レ斗、周禮兩耳、皆實二一升一、劉歆則左耳一爲レ升、右耳二爲レ龠、爲レ合、
其形詭異、是王莽劉歆所レ剏、而漢斛無二臀耳一、何以言レ之、常用者、必無二此詭異之制一、只取二便於用一、旁
有レ庣、解頗難レ明、盖言二算圓之法、必內容レ方、從レ方起レ算、故方一尺而圓二其外一、則圓之所レ受爲二一斛一、
然其一尺者、必旁各加二九釐五毫一、而後其圓者成二一斛一、是漢斛積所三以侈二於周量積一也、周量一釜之積、
一千寸、十斗之積、一千五百六十二寸有半寸、漢斛之積、一千六百二十寸、其法圓容二方尺一、旁各加二九
釐五毫一、則爲二圓經一尺四寸三分三釐二毫有奇一、以二周率一乘レ之、以二徑率一除レ之、得二圓周四尺五寸二分
二釐五毫有奇一、半徑半周相乘、得二圓積一六二有奇一、以二深尺一乘レ之、得二一斛積一、以漢歸レ周、則知二周十
斗、爲二漢九斗六升四合五勺有奇一、是周漢之異也、然所三以旁加二九釐五毫一之故、未レ詳、竊以粟米之法、

自レ古有レ之、量法具二粟米一、圓者爲レ斛、方者爲レ釜、一斛之粟、得二一釜之米一、故周禮料二人之食一、必以レ釜言者、米故也、斛釜之際、以二銅板一隔レ之、其形如二方箱無一レ底、隅徑九釐五毫、謂二之庣一、量米則庣內方一尺、容二六斗四升一、量レ粟則庣內外皆滿、唯庣不二受容一、故師古曰、不滿之處、鄭氏曰、過二九釐五毫一、此之謂也、庣闌二釜之外一、故庣積長一尺零零六七、一厚六釐七一、廣尺者、四合得數、却就二斛積一除レ之、則斛積一千五百九十二寸九七九九有奇、以レ此歸二釜積一、則得二六斗二升七合有奇一、是一斛粟所レ得米數也、以二米法一五六二五一、歸二粟斛積一、則得二十斗零一升九合五勺一、是米十斗・粟一斛、其數有二不同一也、大抵伍減レ二爲二米法一、三加レ二爲二粟法一、古制爲レ爾、庣字書無二明解一、以二事理一求レ之、非二此不一レ通、周禮不レ言レ庣者、專以二米法一言レ之、且失二脫字句一、亦不レ可レ知、王莽斛既廢二釜・豆一、則庣無レ所レ用、只存二古制一耳、漢量以二粟斛一爲二米斛一、故抽二去庣一不レ用、直以二一千六百二十寸一爲二一斛積一、又以二六歸一爲二粟法一、以上解二漢量一 按二說文一曰、垗畔也、爲二四時界一祭二其中一、蓋庣垗通用、茂卿經業爲レ家、而餘力亦及二於茲一、誠吾輩所レ畏也、然以レ非二其所一レ長、裁酌彷彿、猶隔二薄紗一、故過二九釐五毫一之故、無レ所二着落一、乃曰、米粟其數不レ同也、大抵五減レ二爲二米法一、三加レ二爲二粟法一、其言茫然不レ白、即使二米粟之法、粗略如一レ是、何用爭二釐毫於徑厚一、周以二一釜一定二米法一、素非レ求二外斛之必十斗一、漢以二外斛一爲二米法一、始不レ干二涉一釜之受容一也、茂卿一レ之、宜矣不二相合一、蓋米粟法、古制與二秦漢一不レ同、禮記喪大記曰、莫二一溢米一、鄭君曰、二十兩曰レ溢、於二米粟之法一、一溢爲二米一升二十四分升之一一、此以二米率六二五一、求二之二十兩

之粟也、解見下、又據此率算儀禮米禾之數、皆與量法合、因知六因則秦漢之法、六二五因則周之法、茂卿困于過九釐五毫無原由、遂以庣厚六釐七一、隅斜九釐五毫立說、失於精細、其一薄板爲界、其積之差、非所論也、然布算之際、不得無定限、只當取整數、爭毫釐之厚薄、恐非古制之意、試以米率六二五、歸一釜積千寸、則得一千六百寸、是周一釜米之原粟也、以此減斛積千六百二十寸有奇、餘二十寸有奇、是爲庣積、假以庣厚爲五釐、以求其積、則得二十寸零一分、正與餘寸合、可見庣厚即五釐、而過九釐五毫、亦無它故、欲減外六分之得積千寸也、減外六分、即六二五因、歸因異術已、周取升法方尺深尺之內、外圜乃具孚甲之耗率而已、秦漢法宗質直、而尚欲存古制、故用其外斛爲十斗也

粟米

書曰、五百里甸服、百里賦納總、二百里納銍、三百里納秸服、四百里粟、五百里米

儀禮聘禮曰、米三十車、車秉有五籔、禾三十車、車三秅、記曰、十斗曰斛、十六斗曰籔、十籔曰秉（秉有五籔）二百四十斗、（禾數百二十秉曰䄷）四秉曰筥、十筥曰稯、十稯曰秅、秅四百秉、注曰、禾稾幷刈也

說文曰、䄷百二十斤也、稻重一䄷、爲粟二十斗、禾黍重一䄷、爲粟十六斗太半斗、又曰、粟重一䄷、爲十六斗太半斗、舂爲十斗曰糲、又曰、粟二十斗、爲米十斗曰毇、爲米〔六〕（六當作九）斗太半斗曰粲

【考】虞夏以來、貢賦之法、有米有粟、有銍有總、米粟之法、所由來久矣、儀禮又有陳禾米

之文、可見、周亦有米禾之貢、禾蓋曰秠半稾也、有司採定率、以均其賦、說文所載、卽其遺法歟、而同是一秙、或爲二十斗、或爲十六斗者何、此據肥瘠凶豐爲率也、一秙粟二十斗、則就豐熟精實者立率、如衡石嘉量乃用之、示非禾穀至于此、不足以爲陰陽順理、人力無闕也、假如時氣少乖、土壤不腴、粟重雖同、秕穅稍多、止可比豐熟者十六七斗、王政寬優、其斂法以此爲定準、故說文於稻言其正量、餘皆以斂法言之、蓋米粟法、則爲納米者設之、禾法、則爲納粟者設之、覇政取之盡錙銖、故秦漢以六因率之、比古法增二分弱、二十兩爲溢、爲米一升二十四分升之一、求米之法、以精粟率一個二分、歸二十兩、得精粟一升六合六勺六撮有奇、因之米率六二五、得米一升零四勺一撮六六有奇、四勺以下二十四之、則得一升、故曰二十四分升之一、此斂賦之率、一秙之粟、當十斗米、則秦漢祿法、以十斗爲石之由耶、魏晉以來、石斛同用、遂爲量名、故孔氏賈氏、皆謂百二十斤爲石、則一斗十二斤、此亦淪習俗不之察也、後世秙斛雖通名、米一合實重一兩七八銖、十斗不過重七八十斤、通名則可、言重則不可、衡法、粟一合爲兩、田豐熟精實率十六兩爲斤、斤卽十六合、三十斤爲鈞、鈞卽四斗八升、四鈞爲秙、秙卽一斛九斗二升、說文曰、二十斗者、取成數易記、而其衰法皆用歸除之古率、間有不合者、字誤也、九章算法、粟率五十、糲二十、稗二十七、糳二十四、侍御二十一、是乃秦漢以後之法、以此論古量、不得無乖戾也

粟米率		衰法
量率	百九二十個	量率、即一秳粟一斛九斗二升是也、凡求二米量一之法、以二量率一乘二粟重一得レ數、以二米率一除レ之、則得二米數一、若其粟不レ精者、先以二精粟率一除レ之、又除二之米率一、若粟數不レ滿レ秳者、直依二兩數一施術、不三復用二量率一
精粟率	一個二分	粗粟一秳、以二量率一乘レ之、得レ數、以二精粟率一除レ之、得二精粟十六斗一、是減二外二分於原數一、爲二精粟一也、○説文日、十六斗太半斗者、以二一秳一爲二二十斗一故也
米率	一個六分	粟十六斗、以二米率一除レ之、得二米十斗一曰レ糲、是減二外六分於粟數一也、○説文日、十六斗太半斗、爲二米十斗一、今以二二十斗之率一求レ之、得二十斗零四升一、蓋記二成數一也、猶三六升以上、通爲二太半斗一
糳率	一個一分	米十二斗、以二糳率一除レ之、得二米十斗零九合一、曰レ糳、是減二外一分於原米一者也、○説文日、米十斗舂爲二九斗一、曰レ糳今據二二十斗之率一、以二米十斗零四升一求レ之、得二九斗四升强一、共記二成數一耳
毇率	一個二分	米十二斗、以二毇率一除レ之、得二米十斗一曰レ毇、是減二外二分於原米一者也、○説文日、粟二十斗、爲二米十斗一、曰レ毇、今以二二十斗之率一求レ之、得二十斗零四升一、亦擧二成數一也
粲率	一個三分	米十二斗、以二粲率一除レ之、得二九斗二升有奇一曰レ粲、是減二外三分於原數一也、○説文日、六斗太半斗、今以二二十斗之率一求レ之、得二九斗六升有奇一、曰二六斗一者字誤也、粲則待御也、漢刑有二白粲一、擇レ米使正白一

禾數諸書無二明解一、韻會小補曰、禾數百二十斤爲レ秅、二秅爲レ秉、冉子與二之粟五秉一、爲二禾十筥一也、是禾米混同、固無レ可レ憑、然禾數百二十斤爲二秅八字一、必是古言、唯斤當レ作レ秉、不レ爾數字卒爲二贅文一、刈禾盈レ手謂二之秉一、穫レ秅一把一、其粟率一斤、（古秤一兩、當二今三錢三分三釐一、一斤、當二今五十三錢三分三釐一）故百二十秉亦曰レ秅、猶下以二粟一秅一得二米十斗一、通曰上レ秅、當以レ此算二禾車任載之數一、名名皆與二量法一合、乃知三經文必有二脫句一、竊補レ之曰、十庾曰レ秉、秉有二五庾二百四十斗一、禾數百二十秉曰レ秅、四秉曰レ筥、如レ此則禾數、米數之異明晰

禾法		量法	
禾數百二十秉爲レ秅有年及肥墝所レ獲、量衡皆以レ此爲レ準	平年及中地所レ獲、斂賦之法、以レ此爲レ準	一車載二三秅一、故各三レ之得二量法一	米十斗、重率八十斤、二百四十斗、即爲二十六秅一、禾一秉重率二十六兩有奇、三秅即爲二十六秅有奇一、是聘禮車任之率也
四分秉之一、其粟重四兩、號甲 即一邑之數	爲二粟三合三勺一、重三兩八銖	三甲其粟一升 重十兩	禾數秉以下無レ所レ用、假設二此數一詳二量法之起由一
盈レ手曰レ秉、其粟重十六兩、即一丘之數	爲二粟一升三合三勺三一	三秉其粟四升、謂二之豆一即一邑之數	粟一升三合有奇、重十三兩有奇、倍レ之爲二秉重一、秉合二稾實一言也
四秉曰レ筥、其粟重六十四兩 即一甸之數、比二總田一成一	爲二粟五升三合三一	三筥其粟一斗六升、謂二之區一即一丘之數	四區則釜 即一甸之數

十萬曰稷、其粟重四十斤、即十句之數、比總田一終	爲粟五斗三升三合三	三稷其粟一斛六斗、謂之鍛	四鍛則鐘　即比一終
十稷曰秅、其粟重四百斤、即百句之數、比總田一同	爲粟五斛三斗三升三合	三秅其粟十六斛、謂之秉	粟十六斛　即一車併載禾秉之所獲、故以秉爲名

尺度

隋書律歷志曰、今略諸代尺度一十五等、幷異同之說如左、一周尺、漢志王莽時銅斛尺、後漢建武銅尺、晉泰始十年荀勗律尺、爲晉前尺祖冲之所傳銅尺、今以此尺爲本、以校諸代尺云、二晉田父玉尺・梁法尺・三梁表尺・四漢官尺・五魏尺・六晉後尺・實比晉前尺、一尺六分二釐、七後魏前尺・八中尺・九後尺、實比晉、一尺二寸八分一釐、即開皇官尺及後周市尺、後周市尺比玉尺一尺九分三釐、開皇官尺、即鐵尺一尺二寸、按、此三尺短長少異是皆展轉訛替所致此後魏初、及東西分國後、周末用玉尺之前、雜用此等尺、甄鸞算術云、周朝市尺、(得)得當作長於二字玉尺九分三釐、或傳、梁時有誌公道人、作此尺寄入周朝云、與多鬢老翁・周太祖・及隋高祖、各自以爲謂已、周朝人間行用、及開皇初、著令以爲官尺、十東後魏尺、十一蔡邕銅籥尺、後周玉尺、實比晉前尺一尺一寸五分八釐、十二宋氏尺、實比晉前尺一尺六分四釐、錢樂之渾天儀尺・後周鐵尺、開皇初、調鐘律尺及平陳後、調鐘律水尺、此宋代人間所用尺、傳入齊陳以制樂律、與晉後尺・及梁時俗尺・劉曜渾天儀尺、略相依近、當由人間恒用、增損訛替之所致也、周建德六年、平齊後、即以此同律

度量頒於天下、其後宣帝時、牛弘等議曰、竊惟權衡度量、經邦懋軌、誠須詳求、故實考校得衷、謹尋今之鐵尺、是太祖遺、尙書故蘇綽所造、當時檢勘、用爲前周之尺、驗其短長、與宋尺符同、漢志云、黃金方寸、其重一斤、今鑄金校檢、鐵尺爲近、依文據理、符會處多、至於玉尺、累黍以廣爲長、累既有剩、實復不滿、尋訪古今、恐不可用、其晉梁尺量、過爲短小、臣等詳校前經、斟量時事、謂用鐵尺、於理爲便、未及詳定、高祖受終、牛弘・辛彥之等、久議不決、既平陳、上以江東樂爲善、曰、此華夏舊聲、雖隨俗改變、大體猶是古法、祖孝孫云、平陳後、廢周玉尺律、便用此鐵尺律、以一尺二寸、即爲市尺、十三開皇十年、萬寶常所造、律呂水尺、實比晉前尺一尺一寸（一寸二字衍）八分六釐、今大樂庫、及內、出銅律一部、（按、此銅律、蓋唐志所謂、隋用黃鐘一宮、惟與七鐘應、其五鐘不應者）是萬寶常所造

【考】一尺一寸八分六釐、乃一尺八分六釐之誤、何者高祖開皇九年、平陳天下爲一、此云開皇十年所造律呂水尺、而上文明言、後周鐵尺、開皇初調鐘律尺、及平陳後調鐘律水尺略相依近、假令訛長一寸有奇、何以得爲依近乎、故今截然以一寸爲衍、此尺即唐尺所自本、吾邦學士所宜精覈也

十四雜尺、趙劉曜渾天儀土圭尺、實比晉前尺一尺五分、十五梁俗尺、實比晉前尺一尺七分一釐

唐書禮樂志云、唐興即用隋樂、武德九年、始詔太常少卿祖孝孫。協律郞竇璡等定樂、初隋用黃鐘一宮、惟擊七鐘、其五鐘設而不擊、謂之啞鐘、唐協律郞張文收、乃依古斷竹、爲十二律、高祖命與孝孫吹調五鐘、叩之而應、由是十二鐘皆用

通典曰、大唐貞觀中、張文收鑄銅斛秤尺升合、咸得其數、詔以其副藏於樂署、至武延秀爲大常卿（唐志云、武后時獻之）以爲奇玩、以律與古玉斗升合獻焉、開元十七年、將考宗廟樂、有司請出之、勅惟以銅律付太常、而亡其九管、今正聲有銅律三百五十六・銅斛二・銅秤二・銅瓶十四、斛左右耳與臂皆正方、積十而登以至於斛、銘云、大唐貞觀十年、歲次玄枵、月旅應鐘、依新令累黍尺、定律校龠、成茲嘉量、與古玉斗相符、同律度量衡、協律郎張文收奉勅脩定、秤盤銘云、大唐貞觀秤、同律度量衡、匣上有朱漆題秤尺二字、尺亡其跡尚存、以今常用度量校之、尺當六之五、量衡皆當三之一（玉海云、景祐三年十月、丁度等言、奉詔校四等尺、古之制尺、非特累黍、必求古雅之器、以參校之、臣以爲古物有分寸、明著史籍、唯有錢法、今司天監景表尺、和峴所謂西京銅望臬者、洛都舊物也、五代不聞測景、此即唐尺、今以貨布・錯刀・貨泉・大泉等校之、則景表尺長六分有奇、略合宋氏周隋尺）通典論東晉以後曰、歷宋・齊・梁・陳、皆因而不改、其度量三升、當今一升、秤則三兩、當今一兩、尺則一尺二寸、當今一尺、又云、隋制前代三升、當今一升、隋志曰、梁陳依古稱、齊以古稱一斤八兩爲一斤、周玉稱四兩、當古稱四兩半、開皇以古稱三斤爲一斤、大業中依復古稱

【考】通典所云隋制、指大業之制也、隋亦有三而當一之制、故廣并言前代以別之、又前代之衡法、有不同如隋志所載、然皆其行用未久而改之、故通典就其長久而行用尤廣者、總論此也

唐書食貨志曰、武德四年、鑄開元通寶、徑八分（按、隋市尺之八分、當今七分七釐弱、而開元錢存於今者、多當今八分微弱、又或有滿八分者、然則唐初尺既長於隋尺耶、將國初所鑄者少、貞觀以後所鑄者多、而存於今者、皆是所後鑄耶、以此考之、錢法唯可見其大較、不足以深爲據依矣）

【考】物茂卿謂、後周玉尺、即唐尺所自本（蔡元定亦謂、唐量與玉斗相符、即此尺衡）是拘於貞觀斛銘云、與古玉斗相

符、唐志云、古玉尺古玉斗、同藏于大樂署、未及詳校諸說耳、竊按、禮樂志云、唐興即用隋樂、通典云、前代一尺二寸、當今一尺、又梁公注管子云、古之石、準今之三斗三升三合、（梁公未精數尺度、乃以漢斛・唐斛爲一律、故言之相牟）玉海云、西京銅望臬者、洛都舊物也、此即唐尺、以漢錢校之、則景表尺長六分有奇、以此數事證之、唐亦承隋制不改也、又據隋志云、平陳後調鐘律水尺、今大樂庫及內出銅律一部、萬寶常所造、則唐初所用之樂律、即此萬寶常所調者、而謂文收之律、十二鐘皆應、隋之律、唯與七鐘應、則其短長之差、不過毫釐也、乃文收依此律尺、以同度量衡、是唐小尺與水尺、其差亦甚微、故丁度等亦謂、略合宋氏周（即言鐵尺）隋之尺、且衡亦不因玉稱八分加一之法、而因開皇以三爲一之制、然則唐律度量衡、皆稟開皇之制、以潤澤之也、是張文收所云古玉斗、周武所得古玉斗、元二物耳、故今斷以水尺、爲唐尺所據、慊堂松崎先生云、往者吾見法隆寺所藏古牙尺、是即唐大尺、六典云、中尚書令、每年二月二日、進鏤牙尺、及采書紫檀尺、所謂鏤牙尺、即此物也、（玉海引之）（李泌傳云、請以二月朔、爲中和節、因賜大臣戚里尺、謂之裁度、又白居易、有謝賜尺表上）以校今尺、今尺長二分、後會督工官某君、因奉命修補東大寺秘庫、（東大寺、天平中勅所建、其木尺、蓋當時使臣所齎來）制使臨開其寶櫃、櫃中有唐鑑大小數十員・描花紫檀尺長尺有半者一枚、即此所謂采畫尺也、此尺亦弱今尺二分、是唐尺存於今、確然可證者、（二種尺圖、詳先生所著尺準考）乃其摸尺傳三親見之、以此求周尺、當今七寸五分一釐九毫九絲、其法以一個二分、除九寸八分、得八寸一分六釐六毫、即唐小尺也、又以晉前尺一尺八分六釐除此、（唐小尺、比晉前尺之數、無可考、但其長與水尺切近、故就其切近者求之也）得七五一九九、

通典曰、大唐貞觀中、張文收鑄銅斛秤尺升合、咸得其數、詔以其副藏於樂署、至武延秀爲大常卿、（唐志云、武后時獻之）以爲奇玩、以律與古玉斗升合獻焉、開元十七年、將考宗廟樂、有司請出之、勑惟以銅律付太常、而亡其九管、今正聲有銅律三百五十六・銅斛二・銅秤二・銅甁十四、斛左右耳與臂皆正方、積十而登以至於斛、銘云、大唐貞觀十年、歲次玄枵、月旅應鍾、依新令累黍尺、定律校龠、成茲嘉量、與古玉斗相符、同律度量衡、協律郎張文收奉勑脩定、秤盤銘云、大唐貞觀秤、同律度量衡、匣上有朱漆題秤尺二字、尺亡其跡尚存、以今常用度量校之、尺當六之五、量衡皆當三之一（玉海云、景祐三年十月、丁度等言、奉詔校四等尺、古之制尺、非特累黍、必求古雅之器、以參校之、臣以爲古物有分寸、明著史籍、唯有錢法、今司天監景表尺、和峴所謂西京銅望臬者、洛都舊物也、五代不聞澗景、此即唐尺、今以貨布・錯刀・貨泉・大泉等校之、則景表尺長六分有奇、略合宋氏周隋尺）通典論東晉以後曰、歷宋・齊・梁・陳、皆因而不改、其度量三升、當今一升、秤則三兩、當今一兩、尺則一尺二寸、當今一尺、又云、隋制前代三升、當今一升、隋志曰、梁陳依古稱、齊以古稱一斤八兩爲一斤、周玉稱四兩、當古稱四兩半、開皇以古稱三斤爲一斤、大業中依復古稱

【考】通典所云隋制、指大業之制也、隋亦有三而當一之制、故廣幷言前代以別之、又前代之衡法、有不同如隋志所載、然皆其行用未久而改之、故通典就其長久而行用尤廣者、總論此也

唐書食貨志曰、武德四年、鑄開元通寶、徑八分（按、隋市尺之八分、當今七分七釐弱、而開元錢存於今者、多當今八分微弱、又或有滿八分者、然則唐初尺既長於隋尺耶、將國初所鑄者少、貞觀以後所鑄者多、而存於今者、皆是所後鑄耶、以此考之、錢法唯可見其大較、不足以深爲據依矣）

【考】物茂卿謂、後周玉尺、即唐尺所自本、（蔡元定亦謂、唐量與玉斗相符、即此尺爾）是拘於貞觀斛銘云、與古玉斗相

符、唐志云、古玉尺古玉斗、同藏于大樂署、未及詳校諸說耳、竊按、禮樂志云、唐興即用隋樂、通典云、前代一尺二寸、當今一尺、又梁公注管子云、古之石、準今之三斗三升三合、（梁公未詳、蓋尺度、乃以漢斛・唐斛爲律、故言之耳）玉海云、西京銅望臬者、洛都舊物也、此即唐尺、以漢錢校之、則景表尺長六分有奇、以此數事證之、唐亦承隋制不改也、又據隋志云、平陳後調鐘律水尺、今大樂庫及內出銅律一部、萬寶常所造、則唐初所用之樂律、即此萬寶常所調者、而謂文收之律、十二鐘皆應、隋之律、唯與七鐘應、則其短長之差、不過毫釐也、乃文收依此律尺、以同度量衡、是唐小尺與水尺、其差亦甚微、故丁度等亦謂、略合宋氏周（即言鐵尺）隋之尺、且衡亦不因玉稱八分加一之法、而因開皇以三爲一之制、然則唐律度量衡、皆稟開皇之制、以潤澤之也、是張文收所云古玉斗、周武所得古玉斗、元二物耳、故今斷以水尺、爲唐尺所據、懷堂松崎先生云、往者吾見法隆寺所藏古牙尺、是即唐大尺、六典云、中尚書令、每年二月二日、進鏤牙尺、及采書紫檀尺、所謂鏤牙尺、即此物也、（玉海引李泌傳云、請以二月朔爲中和節、因賜大臣戚里尺、謂之裁度、又白居易有謝賜尺表）以校今尺、今尺長二分、後會督工官某君、因奉命修補東大寺秘庫、（東大寺、天平中勅所建、其木尺、蓋當時使臣所齎來）制使臨開其寶櫃、櫃中有唐鑑大小數十員・描花紫檀尺長尺有半者一枚、即此所謂采畫尺也、此尺亦弱今尺二分、是唐尺存於今、確然可證者、（二種尺圖、詳先生所著尺準考）乃其摸尺僅三親見之、以此求周尺、當今七寸五分一釐九毫九絲、其法以一個二分、除九寸八分、得八寸一分六釐六毫、即唐小尺也、又以晉前尺一尺八分六釐除此、（唐小尺、比晉前尺之數無可考、但其長與水尺切近、故就其切近者求之也）得七五一九九、

即周尺也、按宋王復齋鐘鼎款識、及沈氏祿田考等、載古尺圖、而短長各不同、長者當今七寸六分強、短者當今七寸五分弱、蓋鄉搨模刻不精之所致也、且其尺高若訥據隋志所造、以漢錢按定者、不若唐尺之皆前尺未亡時、造之精覈也

蔡邕云、夏以十三月為正、十寸為尺、商以十二月為正、九寸為尺、商以十一月為正、八寸為尺、皇淸經解引錢氏考古錄云、夫殷之尺、非遂得夏之九寸也、蓋九寸則不足、即八寸九分二厘七毫、周之尺、非止得夏八寸也、蓋八寸而有餘、即八寸三分二厘、何則夏之百分、殷以為百一十二分、周以為百二十分、通其率、則九十之為五十六、與六十也

通鑑外紀云、夏禹以十寸為尺、殷・湯以十二寸為尺、周武以八寸為尺、明鄭王世子朱氏云、今木匠所謂曲尺、蓋自魯般家傳以至於唐、唐人謂之大尺、蓋此尺即殷湯尺也、去二寸即夏禹之尺、夏禹之尺去二寸即周武王之尺

【考】三代以降至西漢、無尺度異同之說、至蔡氏始言夏・殷・周之尺、而後好奇之徒、仍以為口實、展轉誣罔、以逞意所欲、竊詳其邪論之所由生、皆因王制之步法不明、步法明則三代不改尺之理、秋毫無可疑也、若人知王制之謬說、以留意經傳史籍、妍媸自灼然、故不復辭費云

古今尺量比數

周尺一尺當今七寸五分一釐九毫、○唐小尺當今八寸一分六釐六毫、大尺當九寸八分、○周一升、當今一合零二撮四九、○漢一升、當今一合零六撮二七、律呂新書謂、漢量與周量同非、考工記鄭注云、方尺積千寸於今粟米法、少二升八十一分升之二 ○唐小量一升、當今一合三勺六撮零七、大量一升、當四合零八撮、漢升法、雖不本於嘉量、其斛積十以為制、後世皆因焉、然茂卿謂、後魏依漢粟斛為尺法、此則隋唐大量之淵源、甚哉其無考、漢積十以為量法、則六斗四升之斛、無所復用、魏王何因得傳二尺二寸斛、蓋大尺大量之起、皆出欲省略以便於事、豈有深奧之由乎 ○古一步當今六尺零一分二釐、○周一步、當今四尺九寸六分三釐、○秦漢一步、當今四尺五寸一分六釐、○唐一步、當今四尺九寸、○今一步、當周七尺九寸七分八釐、○古三百步、即路程一里當今五町有奇、百里當十四里、又當西海路十里 ○周一

畝、當今六十八步有奇、百畝、當六千八百步有奇、(即二町二段六畝二十步)一井、當六萬一千五百步、(廿町四段)○秦漢一畝、當今四畝十五步、一頃當四町五段、(今三十步爲畝、畝十爲段、段十爲町○藤田考云、大畝始於漢、見桓寬鹽鐵論、何學士云、意秦但行於西陲、漢乃徧於天下也)

秦昭襄王予楚粟五萬石、(粟重五萬秭、爲九萬六千斛、爲糯五萬斛、當今五千百二十四斛、以三五歸之、一萬四千六百四十苞)漢志云、一夫治田百畝、歲收畝一石半、爲粟百五十石、(粟百五十石、爲二百八十八斛、當今二十九斛五斗、即今田歲收步四合有奇)史記云、畝鍾田百畝、則爲粟六百四十斛、(當今六十五斛即六斗、今田歲收步合有奇九)通此二率、百畝歲收粟四百六十四斛(當今四十七斛九斗五升)方百里則四千百七十六萬斛(當今四百廿七萬九千九百八十斛、爲糯二百二十二萬九千百五十斛)此稅四百十七萬六千斛(今糯米二十二萬二千九百斛、以三五歸之、六十三萬六千九百苞)是周大國歲入之大略也、(偉按、百畝之收、百五十石、則今下戶三四家產也、古任之一家、而耕耨能無闕何也、由五家相保、培養糞種、更迭相助也、是以古之衆庶、能力相助、今之衆庶、財力相凌、此所以古之比屋可封、而今之覬覦讒欺、管子曰、倉廩實而知禮節、衣食足而知榮辱、此言非獨可於今、雖古昔亦然、子曰、小人貧斯約、富斯驕、約斯盜、驕斯亂、禮者因人之情、而爲之節文、以爲民坊者也、故聖人之制富貴也、使民富不足以驕、貧不至於約、貴不慊於上、故亂益亡、意是頒田之法、乃聖人節富貴之原)

田制泝源考 終

天保九年戊戌十一月新鐫

松　左　堂　藏

經地解義

下坂踛著

經地解義卷之上

下坂　躂　著

周禮軍賦總論并王坼軍賦論

○昔周ノ世、兵革ヲ以テ天下ヲ定メ、天下既ニ定マリ、周公旦成王ノ爲ニ攝政シテ、周國一代ノ典禮ヲ定メラルヽ、凡ソ天下ヲ治ムルハ、民ヨリ先ナルハナク、民ヲ治ムルハ、田地ヲ制スルヨリ急ナルハナシ、故ニ司馬ノ官ヲ建テ、六軍ノ人數ヲ設ケ、田地ノ制ニ就テ軍賦ヲ定ム、土地一里四方ヲ井トナシ、十井ヲ通トナシ、十通ヲ成トナス、十里四方ノ地ナリ、又十成ヲ終トナシ、十終ヲ同トナス、百里四方ノ地ナリ、又十同ヲ封トナシ、十封ヲ畿トナス、千里四方ノ地ナリ、皆是ヨリ田租ヲ出シ、軍賦ヲイダス定ナリ

○凡ソ天子ノ畿內、四方千里ヅヽニシテ、提封百萬井アリテ、定出スル賦ハ六十四萬井ニシテ、戎馬四萬匹、兵車一萬乘ヲ出ス、故ニ天子ヲバ萬乘ノ主ト云、然レドモ此ハ邦國疆域ノ實數ニシテ、正羨ノ卒ヲ通ジテ云

○天子ニ萬乘トイヒ、諸侯ニ千乘トイヒ、大夫ニ百乘トイヘルハ、大略ヲ以テ云ナリ、天子ノ六郷、

九等ノ田地、六遂・公邑・都鄙トハ、皆各不同ナリ、又諸侯ノ國中ハ、野外ノ制ト同ジカラズ、故ニ大率ハ右ノ如クナレドモ、巨細ハ同ジカラズ

賦法ヲ以テイヘバ、萬乘・千乘・百乘ト云、軍法ヲ以テイヘバ、三軍・二軍・一軍ト云

○鄭註載師云、「定受田三百萬家」ト、コレ六百萬夫ノ地ニテ、肥磽ノ不同アルニヨリテ、實ハ三百萬畝トスルナリ、サレバ周禮ニ云、家二百畝・家三百畝ナド見エタルハ、司徒ノ田ヲ民ニ授クル時モ、民ノコレヲ受ルニモ、皆百畝ノツモリテナリ、孟子ニハ、「家皆私ニ百畝ニ」ト云ハ、ソノ定數ヲイフ、周禮ニ、上中下ノ別ヲ云ハ、詳カニソノ制ヲ述ルモノナリ

上中下トハ、不易・一易・再易ノ地ヲ云ナリ、不易トハ、地所ヨロシクシテ、年々不易ニ耕作スル上田ナリ、一易トハ、一年越ニ作リテ、一年越ニ休ム中田ナリ、再易トハ、二年越ニ作リテ、二年越ニ休ム下田ナリ、此以下ニモ三易・四易・五易トイヒ、三年・四年・五年越ニ作ル下々田アリ、此ヲ萊ノ地ト云○本朝ニモ其國其土ニヨリテ、三等ノ別ヲナス、上ヨリ中ハ二等減ジ、中ヨリ下モ又二等減ズ、凡ソ上田ノ地、一反三百歩ヨリ取ル禾三石ナレバ、中田一反歩二石四斗ナリ、下田ハ一石九斗二升ナリ、或ハ下々田アリ、又土ニヨリテ定ヲナス、周禮ノ三等トハ實同ジカラズ

六　鄉

ト云軍ハ、一萬二千五百人ニテ、鄉ノ家ゴトニ一人ヲ出ス定ナリ、此ヲ以テ軍旅ヲ起スナリ、因ツ

テ田役トナシ追胥トナシテ、貢賦ヲ供セシムルナリ

自比積至郷之圖

五家本朝ニ比スレバ、百五十石ニアタル、比ノ長ヲ比長ト云、下士ナリ、軍ニ伍長ト云

五家爲比

五比爲閭、廿五家、軍ニ兩司馬ト云、長ヲ閭胥ト云、中士ナリ、本朝ニ比スレバ、高七百五十石ニアタル

四閭之一

四閭爲族、百家、軍ニ卒長ト云、長ヲ族師ト云、上士ナリ、本朝ニ比スレバ、高三千石ニアタル

四閭之一

五族爲黨

五黨爲州、二千五百家、軍ニ師帥ト云、長ヲ州長ト云、中大夫ナリ、本朝ニ比スレバ、高七萬五千石ニアタル

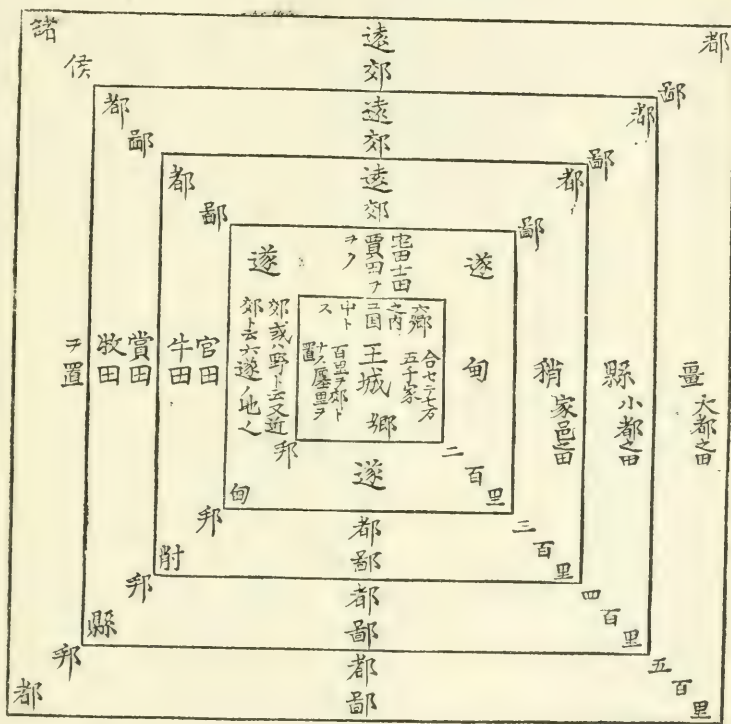
五州之一

五州爲郷、一萬二千五百家、軍ニ軍將ト云、長ヲ郷大夫ト云、卿ナリ、本朝ニ比スレバ、高三十七萬五千石ニアタル

一黨五百家、長ヲ黨正ト云、下大夫ナリ、軍ニ旅師ト云、本朝ニ比スレバ、一萬五千石ニアタル

五州之二

王畿千里之圖

諸侯
都鄙
都鄙
都鄙
遠郊
遠郊
遠郊
都鄙
都鄙
都鄙
宮田賈田ヲ國中ト云ノ
六鄉之內合セテ七万五千家
王城
郷
百里ヲ郊トス
郊ハ又近郊ト云
遂
甸
遂
甸
遂
郊或ハ野ト云又近郊
遂ト云六遂ノ地之
邦
稍
家邑田
縣
小都之田
畺
大都之田
官田
牛田
賞田
牧田
ヲ置
邦
削
邦
縣
邦
都
二百里
三百里
四百里
五百里

廛里以下九等之田

○凡ソ國中百里ノ內ニ廛里ヲ置、場圃ヲ園地ニ置、宅田・士田・賈田ヲ近郊ニ置、官田・牛田・賞田・牧田ヲ遠郊都鄙ノ地ニオキ、此ヲ名ヅケテ九等ノ田ト云

廛トハ、市中ノ空地ニシテ肆ナキ所ナリ、宅田トハ、民ノ住居スル所ナリ、コレヲバ澤山造リテ多ニ備フルナリ、士田トハ、士大夫ノ子ナド受得テ、耕作スル田地ナリ、賈田トハ、吏ノ財ヲ賣者ニ與フル田地ナリ、官田トハ、公家ニテ耕ス田地ナリ、牛田トハ、公家ノ牛ヲ養フ田地ナリ、賞田トハ、下ヘ賞賜スル時ノ入用トナス田地ナリ、牧田トハ、六畜ヲ豢養スル田地ナリ、場圃トハ、圃ハ菓ヲ樹ユル場所ニシテ、季秋ニ至リ不用ニナルユヘ、武備ノ稽古等ヲ講ズル場ニスルナリ、是ヲ場圃ト云、詩ニ、「九月築ニ場圃ニ」トイヘル即是ナリ

○九等ニ三アリ、左氏ノ說ニ、山林ノ地ハ九夫ヲ度トナシ、九度ヲ一井ノ地ニ當ツ、藪澤ノ地ハ九夫ヲ鳩トナシ、八鳩ニシテ一井ニアタリ、京陵ノ地ハ九夫ヲ弁トナシ、七弁ニシテ一井ニアタリ、淳鹵ノ地ハ九夫ヲ表トナシ、六表ニシテ一井ニアタリ、疆潦ノ地ハ九夫ヲ數トナシ、五數ニシテ一井ニアタリ、偃豬ノ地ハ九夫ヲ規トナシ、四規ニシテ一井ニアタリ、原防ノ地ハ九夫ヲ町トナシ、三町ニシテ一井ニアタリ、顯皐ノ地ハ九夫ヲ牧トナシ、二牧ニシテ一井ニアタリ、衍沃ノ地ハ九夫ヲ井トナス　賦法四十五ニシテ、內山川坑岸ノ地ヲ除ケバ三十六井ナリ、千里ノ畿百萬井ニシテ、

山川坑岸ヲ除ケバ三十六萬井ニシテ、定出ノ賦ハ六十四萬井、長轂萬乘ナリ。是左氏ノ九等ナリ、周禮ノ九等、大司徒・遂人・大司馬トモニ三等アリ、等ゴトニ分テ三トナス、故ニ是ヲ九等トス、書ノ九等ハ亦コトナリ、禹貢ノ註ニ、一井ニシテ上田ハ九夫ノ稅ヲ出ス、上ノ中ハ八夫ノ稅ヲイダス、上ノ下ハ七夫ヲ出ス、中ノ上ハ六夫ヲ出ス、中ノ中ハ五夫ヲ出ス、中ノ下ハ四夫ヲ出ス、下ノ上ハ三夫ヲ出ス、下ノ中ハ二夫ヲ出ス、下ノ下ハ一夫ヲイダス、是ヲ九等ト云、是モマタ廛里以下ノ九等トハ自別ナリ

六　遂

○王城外ノ二百里ヲ遂ト云、遂人ト云職アリテコレヲ掌ドル、大凡ハ六鄕トヲナシ、五家ヲ一組ニシテ鄰トナシ、五鄰（二十五家）ヲ里トナシ、四里（百家）ヲ鄼トナシ、五鄼（五百家）ヲ鄙トナシ、五鄙（二千五百家）ヲ縣トナシ、五縣（一萬二千五百家）ヲ遂トナス、如レ此六ツ造リ置、時々人民ヲ計リ稽、コレニ田野ヲ授ケテ、稼穡セシムルナリ

遂內ノ鄰・里・鄼・鄙・縣・遂ハ、郊內ノ比・閭・族・黨・州・鄕トヲナシ、タヾ其名ノ變ズル而已、六遂ノ軍、追・胥・徒役ヲ起スモ、マタ鄕ト異ナルコトナシ

○邦甸ノ內ニ六遂七萬五千家ヲ置、其餘地ニ公邑ヲオク、此ヲ甸ト云、マタ州トモ名ヅク、司馬法ニ、二百里ヲ州ト云ト是ナリ、一遂ノ內五縣・二十五鄙・百二十五鄼、五百里ニ千五百鄰、里宰下士ヨリ以上、其官併セテ六百五十六、六遂ノ官合セテ三千九百三十六アリ

○甸ハ十二同ノ地ナリ、一同九萬夫ヅツニシテ、十二同合セテ百八萬夫ノ地ナリ

○甸・稍・縣・都合セテ九十六同ニシテ、八百六十四萬夫ノ地、城郭・宮室ハ至テ少ク、塗・巷等モ又三分ノ一ノ六ヨリ狹シ、十八分ノ十三ヲ以テ見レバ、餘地六百二十四萬夫ノ地ナリ、上田・中田・下田ノ六家ヲ通ジテ十三夫ヲ受ケ、定マリ田地ヲ受ルモノ二百八十八萬ナリ

○六郷ノ民、上地ハ家ゴトニ百畝、中地ハ家ゴトニ二百畝、下地ハ家ゴトニ三百畝、上中下ヲ相通ジテ三夫六百畝ノ割合ナリ

六遂ノ民ハ、上地家ゴトニ田二百畝・萊五十畝・中地ハ田百畝・萊百畝・下地ハ田百畝・萊二百畝、相通ジテ三夫六百五十畝ノ割ナリ

自ニ鄰積ニ至レ遂之圖

五家爲レ鄰

一家
仝
仝
仝
仝

五鄰爲レ里、廿五家、軍兩トイヒ、亦兩司馬トモ云、其長下士

大凡鄕ト遂トハ同ジ、只爵ハ一等ヲクダシ、上士ヲ以テ中士トナスノミ

四里爲レ酇、百家、軍ニ卒トイヒ、其長中士、戎車一乘ヲ出ス、其田百畝アリ

五酇爲レ鄙、軍ニ旅トイヒ、其長上士・馬廿疋・戎車五乘ヲ出ス

五鄙爲レ縣、軍ニ師トイヒ其長下大夫・馬百疋・車廿五乘ヲ出ス

五縣爲レ遂、軍ニ軍トイヒ、其長中大夫・馬五百疋・車百廿五乘ヲイダス、其田百廿五萬畝アリ

○凡ソ六鄕六遂ヲ置ハ天子ニ限ルナリ、故ニ天子ハ六軍ヲ出ス、定法ニシテ鄕ノ六軍ヲ正トナシ、遂ノ六軍ヲ副トナス、正足ラザレバ副ヨリコレヲ足ス定ナリ、小國ニテハ一鄕一遂、中國ニテハ二鄕二遂、大國ニテハ三鄕三遂、諸侯ハ遂ノ地ヲ以テ鄕大夫士ヲ食ヒ、天子ハ都鄙ノ地ヲ以テ公卿大夫士ヲ食フ、此天子諸侯ノ差別ナリ

○司馬法ノ文ヲ案ズルニ、諸侯ハ郷遂ノ地ヲハカリ、民ヨリ車・甲・馬・牛ヲ出サシム、一組七十五人ノ卒ニ車一乘ヲイダス、此ウチ甲士三人・馬四匹・牛十二頭ヲモイダスナリ

○春秋ノ時、丘甲ヲ作レルコトアリ、コレハ長轂ニ馬・牛・甲・兵・戈・楯ノ類ハ、皆一甸ノ民ニ掛ル、郷遂ニ用ユル車・馬・甲・兵ノ類ハ、皆國家ノ掛リニシテ、一郷ヨリ一軍ヲ出ス、即一家ヨリ一人ヲイダス定ナリ

都鄙

○王城ノ外四方百里ヲ國中トナシ、大司徒掌ル、ソノ外二百里ノ地、六遂或ハ野マタ四郊トイヒ、大司空掌ルナリ、三百里ヨリ五百里ニ至ルマデヲ、都鄙遠郊ノ地トイヒ、又大司空ツカサドルナリ、其定法ハ郷遂ト同ジカラズシテ、其法モマタ大司空ノ所レ掌ナリ、サテ此ノ土地ニ就テ、一井（九夫）ヲ下士ノ采地トナス、邑（四井三十六夫）ヲ中士ノ采地トナス、丘（四邑十六井百四十四夫）ヲ上士ノ采地トナス、甸（四丘六十四井四百七十六夫）ヲ公邑ノ田トナシ、下大夫食メリ、稍（四甸百三十六井二千三百四夫）ヲ家邑ノ田トナシ、中大夫食メリ、縣（四稍五百四十四井九千二百十六夫）ヲ小都ノ田トナシ、三孤六郷食メリ、都（四縣二千百七十六井三萬六千八百六十四夫）ヲ大都ノ田トナシ、三公食メリ、皆是ヨリ貢賦セシムルナリ

○右井・邑・丘・甸・稍・縣・都ノ地ハ、ミナ公卿大夫士ノ采地ナレドモ、其政令ハ天子ノ吏ヨリ掌司ス、故ニソノ國都ヲ治ムル冢宰ニテ、コレヲ掌司スル故ニ、都大夫アリ、都則アリ、祭祀ハ宗伯掌司スル

故ニ、都宗人アリ、家宗人アリ、軍旅田役ノ事ハ司馬掌司スル故ニ、都司馬アリ、家司馬アリ、刑罰禁令ノ如キハ、司寇掌司スル故ニ、都士・家士・方士アリ、稅斂ノ事ハ司空掌司スル故ニ、載師・縣師・稍人アリ、然レドモ諸侯ノ國ハ狹小ナレドモ、天子ノ吏與カラズ

○家削ノ地ト云アリ、大夫ト王子弟ノ尤遠キ者ヲ封ズル所ニシテ、此ヲ削ト名ヅクルハ、縣都ヨリ削小ナルガ故ナリ、邦縣ノ地ト云アリテ、卿ト王子弟ノ疏ナル者ヲ封ズル所ニシテ、縣ト名ヅクルハ、上ニ縣ルト云義ナリ、邦都ノ地ト云アリテ、三公ト王子弟ノ親シキ者ヲ封ズル所ニシテ、都ト名ヅクルハ、邑都アルガ故ナリ

○四方十里ノ地ヲ成ト云、成ノ中一甸八里四方ノ地ヨリ田稅ヲ出シ、四邊一里四方三十六箇ノ地ハ、洫ヲ治ムル定ナリ、司馬法ニ二法アリ、一ニハ一甸八里四方ノ地ヨリ、長轂一乘ヲ出スト云、一ニハ一成十里四方ノ地ヨリ、長轂一乘ヲ出スト云、要スルニ甸ノ法ハ、實ニ稅ヲイダス數ヨリイヒ、成ノ法ハ、通ジテ溝洫ヲ治ムルヨリ云、故ニ自ラ二種トナス、コノ二法其實ハ一ナリ

○夫ト云名義、モト人ヨリ起レドモ、全ク田制ノ上ヨリイヘバ、即地ヲ升テイフナリ、司馬法ノ文ニ、「六尺爲レ歩、歩百爲レ畝、畝百爲レ夫」ト、地ヲサシテ夫トイフナリ、「五家爲レ比」ノ家ノ字ハ、自カラ人ノ家ヲサシテ云而已

四處公邑

○凡ソ六遂ノ田ハ甸ニ在リ、公邑ハ六遂ノ餘地ニシテ、天子ヨリ大夫ニ命ジテ治メシムルナリ、故ニ餘地ヲ亦公邑ト云、遂ノ公邑ハ九同五十成アリ、是十八分ノ五ヲ去リ、アマリ六十一萬七千五百夫アリ、六家ニテ十三夫ノ田地ヲ受ケ、通ジテ二十八萬五千家ヲ受ク、稍・縣・畺ミナ餘地アリ、稍地ノ公邑ハ十六同・六成・二十五井アリ、十八分ニシテ五ヲ去リ、百四萬四千六十二夫半アリ、六家・十三夫前法ノ如ク、通ジテ四十八萬千八百七十五家ヲ受ク、縣地ノ公邑二十二同、七十五成アリ、十八分ノ五ヲサリ、十六同・四十成・百五十井・百四十七萬八千七百五十夫、マタ前法ノ如クニシテ、六十八萬二千五百家ヲウク、畺地ノ公邑ハ二十七同・十八分ノ五ヲ去リ、十九同・五十成・百七十五萬五千夫アリ、又前法ノゴトクニシテ、八十一萬家ヲ受ク、四處ノ公邑共ニ合セテ二百二十五萬九千三百七十五家アリ、但畿内ノ間田ハ即公邑ニシテ、畿外ノ間田ハ附庸ニアラズ

餘夫圭田

○孟子ニ、卿以下ニハ必圭田五十畝ヲ授ケ、餘夫ハ二十五畝ヲ受クルノ文アリ、古卿ヨリ以下士ニ至ルマデ、五十畝ノ圭田アルハ、祭祀等ニ備供スル爲ノ田地ナリ、圭トハ、潔ノ義ナリ、井田ノ民公田ヲ養フ者ハ百畝ヅツヲ受ケ、圭田ハ百畝ノ半ナリ、餘夫トハ、一家ノ内一人百畝ヲ受クルノ外、其餘ノ老少餘力アル者ニハ、二十五畝ヅツヲ授ク、又圭田ノ半ナリ、是ヲ餘夫ト云、且圭田ヨリハ征賦ヲ出サズ

餘夫ニ授クル五十畝ノ田地モ、上中下ノ等アリ、一夫百畝ヅツニテ、上中下ノ地ニヨリテ、萊ヲ授クルノ不同アルト同ジ、上地ハ田二十五畝・萊十二畝半ヲ授ケ、中地ハ田二十五畝ニシテ、萊モ又同ジ、下地ハ田二十五畝ニシテ、萊五十畝ヲ授ク、如レ此三等アリ

○按ズルニ、圭田孟子王制ニ云ノミ、周禮ニハ圭田ナシ、但載師ノ士田、鄭司農ノ説、士大夫ノ子ナド受得テ耕ス所ナリト、杜子春ノ説、士ノ字ハ即仕ノ字ニテ、仕田ナリ、仕者モ亦田ヲ受ケ耕スアリ、孟子ノ所レ謂圭田是ナリト、二家ノ説異ナレドモ、圭田ニアツルハ是等而已ナラン

溝洫之制

○遂人ト云職アリ、邦ノ田野ヲ掌ドリテ差配ス、凡田地ハ夫ト夫トノ間ニ、遂ト云小溝アリ、廣・深トモニ二尺ナリ、故ニ曰ク、「夫間有レ遂」ト、遂ノ上ニ徑アリテ、廣サ牛馬ノ往來スル程ナリ、又遂ヲ隔テ十夫一ト幷ビニ連ナリテ、別ニ一溝ヲ置キ、遂ノ水ヲバ此ヘ流シ入ル、廣・深トモニ遂ヲ倍シテ四尺ナリ、故ニ曰、「十夫有レ溝」ト、溝ノ上ニ畛アリテ、大車ヲ通行スル程ナリ、又百夫ハ十夫ト十夫トノ間ニ溝ヲ隔テ、一ト圍ニテ洫ヲ置キ、溝ノ水ヲ流シ入ル、廣サ深サ八尺ナリ、故曰、「百夫有レ洫」ト、洫上ニ涂アリテ、乘車ヲ通ズル程ナリ、又千夫ハ百夫ト百夫トノ間ニ右ノ洫ヲ置テ、千夫一ト圍ニテ澮ヲ置キ、洫ノ水ヲコヽニ灑グ、廣サ一丈六尺、深サ一丈四尺ナリ、故曰、「千夫有レ澮」ト、澮上ニ道アリ、二軌ノ車ヲ通行ス、又萬夫ハ千夫ノ十澮ヲ横ニウケ、竪ニ川ヲ置キ、澮ノ水ヲコヽニ入ル、故曰、「萬夫有レ川」

ト、川上ニ路アリ、車三軌ヲ駢ベ通ズル大路ニシテ、是ヨリ京畿マデ達スルナリ、一夫百畝ヨリ百萬夫萬畝ニ至ルマデ、三十三里餘四方ナリ

按ズルニ、萬夫ハ十澮ナリ、鄭氏ノ說ニ「九澮而川周ニ其外ニ焉」ト、孔穎達モコレニ從フ、恐クハ是ニアラズ

遂人溝洫之圖

遂 廣深各二尺

東

夫間有レ遂、遂上有レ徑、可レ容二牛馬一

北

此一夫百畝中容二百畛一也、以下圖中難上レ書二百畛一、但以二十畛一例レ之

十畝
廿畝
卅畝
四十畝
五十畝
六十畝
七十畝
八十畝
九十畝
百畝

南

十夫北二一溝一、故曰二十夫有一レ溝

溝 廣深各四尺

畛 廣深各二尺

十畛　二十畛　三十畛　四十畛　五十畛　六十畛　七十畛　八十畛　九十畛　百畛

每溝一夫百畝、合
十遂
百遂
南

千夫之澮皆入二于此一、而南行、故曰、萬夫有レ川、川上有レ路、可下以容二三軌之車一、以達中于畿上

川

洫　洫　洫　洫　洫　洫　洫　洫　洫　洫

餘空百夫萬畝、合百洫

一川承二十澮一、澮承二十洫一、洫承二十溝一、溝承二十遂一

可下以容二乘車一軌一
百夫共二一洫一、故曰、百夫有レ洫、洫上有レ涂、

洫　洫　洫　洫　洫　洫　洫　洫　洫　洫

千夫共二一澮一、故曰二千夫有一レ澮、澮上有レ道、可レ容二二軌一

南

井田之制

○小司徒ト云フ職アリテ、國ノ教法・禁令等ヲ掌リテ、土地ヲ見、井ヲ畫シテ、民ニコレヲ授ク、凡ソ九家ヲ一ト圍ニシテ井字ナシ、九百畝アリ、故ニ「九夫爲井」ト云、井ヲ四倍シテ邑トナス、二里四方ナリ、中士ノ采地ニシテ、是ヨリ馬一匹・卒二十五人ヲ出ス、邑ヲ四倍シテ丘トナス、四里四方ナリ、元士ノ采地ニシテ、馬四匹・車一乘・卒百人ヲ出ス、邱ヲ四倍シテ甸トナス、八里四方ナリ、コレ公邑ノ田下大夫ノ采地ニシテ、車四乘・卒四百人ヲ出ス、甸ヲ四倍シテ縣トナス、十六里四方ナリ、コレ家邑ノ田中大夫ノ采地ニシテ、車十六乘・卒千六百人ヲ出ス、縣ヲ四倍シテ都トナス、三十二里四方ナリ、六鄕小都ノ田ニシテ、車六十四乘・卒六千四百人ヲ出スナリ、孟子ノ仁政ハ必經界ヨリ始マル、故ニ經界正シカラザレバ、井地均シカラズトハ、此井田ヲ云、コノ井田ハ匠人ノ掌ル所ニシテ、井間ニ溝アリ、成間ニ洫アリ、同間ニ澮アリ、遂人ノ掌ル所ノ夫間ニ遂アリト云ハ、溝洫ノ法ニテ、鄕遂ノ制ハ分別ナリ

○匠人ノ溝洫ヲ造ルハ、遂人ノ溝洫トハ相違ナリ、耜ノ廣サ五寸アリ、二耜一耦ニシテ、一耦ノ代廣サ一尺深サ一尺ナリ、此ヲ甽ト云、田首ハコレニ倍シテ、廣深トモニ二尺ナリ、此ヲ遂ト云、九家ヲ一ト圍トナシ、井ト井トノ間、廣・深トモニ四尺ナリ、コレヲ溝ト云、積デ十里四方トナル、此ヲ成トナス、成ト成トノ間、廣・深トモニ八尺ナリ、是ヲ洫ト云、積デ百里四方トナル、コレヲ同トナス、同

ト同トノ問、廣サ二尋深サ二仞ナリ、コレヲ澮ト云

○凡ソ一夫ノ田ツクル所ハ百畝ナリ、三夫一ト連リニシテ一屋トナス、一井ノ內三屋ニシテ九夫ナレバ三々相具リテ賦ヲイダシ、トモ〴〵ニ溝ヲ治ム、十里一成ノ內、一甸ノ積六十四井・八里四方ニテ田租ヲ出シ、四方緣邊ノ一里四方ヅツノ六十四井ニテ、洫ヲ治ムルナリ、四方百里ヲ同ニシテ、一同ノ內、四都ノ積六十四井・四方八十里。四千九十六井。三萬六千八百六十四家ニテ田稅ヲ出シ、四邊ノ十里四方。三十六成。二千三百四井。二萬七百三十六家洫ヲ治メ、三千六百井。三萬二千四百家澮ヲ治ムルノ法ナリ

以二南畝一圖レ之

孟子曰、方里而井、井九百畝、是也

是即方十里、一井之田也、

○合百井、三百遂、十溝。

一洫・合九百夫、九萬畝

包咸曰、十井出₌車一乘₋、乘七十五人、百井車十乘、合七百五十人、千井百乘、卿大夫之田、合七千五百人、萬井千乘諸侯之國、合₌三軍₋七萬五千人

洫

方十里

井 井 井 井 井 井 井 井 井 井

南

十成共二一澮一、百成九萬夫、千井爲一終、萬井爲一同

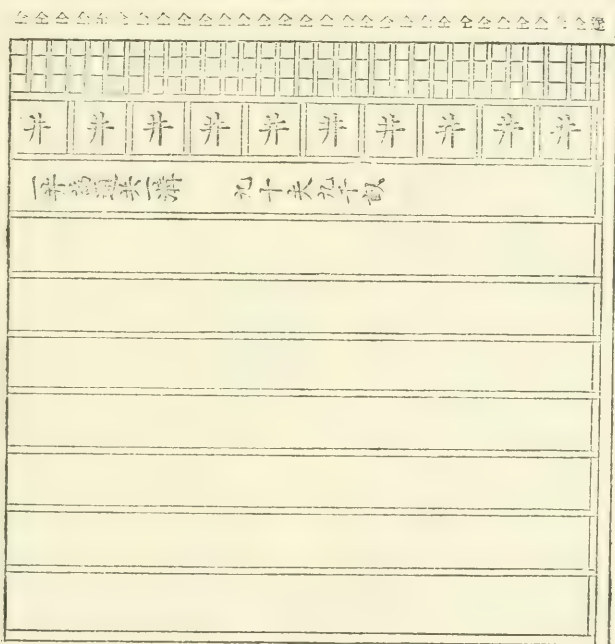
川

澮　澮　澮　澮　澮　澮　澮　澮　澮　澮

一成

方里

每空皆百井一成之地百空今万井方百里九百万畝之地即為一同之田井田之制備于一同

西

南

授田三等

○小司徒ノ職ニテ、比法ヲ六鄕中ニ頒チ、土地ヲ平均シテ、ソノ人民ノ老少强弱ヲ計リ考ヒ、人數ノ多寡ヲ調ベ、上中下三等ニ田ヲサヅク、上地ハ一家ニテ、七人ノ當テニシテ、役用スル者三人ナリ、中地ハ一家ニテ、六人役用スル者、二家ニテ五人ヲ出ス、一家ヨリ一人半ノ定ナリ、下地ハ一家ニテ、五人役用スル者二人ナリ

○一家ニテ男女七人以上ナレバ、上地ノ田ヲ授ク、養フ所ノ者多キ故ナリ、一家ニテ男女五人以下ニハ、下地ノ田ヲ授ク、養フ所ノ者寡キ故ナリ、但上中下三等ニ就テ。七人。六人。五人ト率ヲ定ムルハ、凡ソ夫アレバ必婦アリテ、始メテ一家ヲナス、二人ヨリ十人ニ至ルマデヲ九等トナシ、平均ニシテ七人。六人。五人ハ、其內ノ役用スベキ定ナリ

授田次第之圖

上地	中地	下地
一家七人	一家六人	一家五人
可任者三人	可任者二家五人	可任者二人
夫一廛・田百畝・萊五十畝・餘夫亦如レ之○田百畝・萊五十畝、較ニ六鄕一獨多レ廛・域・邑之居、五畝之宅、樹レ之以レ桑者也	夫一廛・田百畝・萊百畝、餘夫亦如レ之○即一易之地、家二百畝	夫一廛・田百畝・萊二百畝、餘夫亦如レ之○即再易之地、家三百畝

税法輕重之等

○凡ソ畿内ノ地、國宅ニハ征税ナシ、園廛ハ二十分ノ一ヲ取リ、近郊六遂ノ地ハ十分ノ一ヲ取リ、都鄙遠郊ノ地ハ二十分ノ三ヲ取リ、甸・稍・縣・都ノ地ハ皆十分ノ二ニ過ギズ、漆林ノ征ニハ二十分ノ五ヲ取ル定ナリ、孟子ノ野九之一而助、國中ハ什一ニシテ賦セシメントハ、即六遂ノ地ハ十分ノ一ヲ取ト同ジ、九ノ一ハ井田九區ノ内、一ノ公田ヲ取ルナリ、畢竟ハ九區ノ内ノ公田一ヲ取リテ、即十分一ヲトルノ割リニ當ルナリ、九分ノ一ヲ取ルニ非ザルナリ

○鄭司農ノ說ニ、遂人造ル所ハ溝洫ノ法トナス。即夏ノ代ノ貢法ニシテ、郷遂公邑ニハ是ヲ用ユ、匠人ノ造ル所ハ井田ノ法トナス、即殷ノ代ノ助法ニシテ、都鄙ニハ是ヲ用ユ、但溝洫ト井田トノ異ナルハ、遂人ニハ夫間ニ遂アリ、十夫ニ溝アリ、百夫ニ洫アリ、千夫ニ澮アリ、萬夫ニ川アリ、四方三十三里少半里九ニシテ、四方一同ノ積九澮ニシテ、川其外ヲ周ルトイヘバ、百里ノ内九九八十一澮ニシテ、井田ハ一同タヾ一澮ノミ、遂人匠人ノ稠稀此ノ如シ、一ノ相違ナリ、匠人井田ノ法ハ、畎ハ縱、遂ハ横、溝ハ縱、洫ハ横、澮ハ縱、川ハ横ニシテ、ソノ一夫ト一夫トノ間縱ナルハ、一夫一夫ノ界ヲ分ツノミ、遂ナル者ナシ、遂ハ溝ニソヽギ入、溝ハ洫ニソヽギ入、洫ハ澮ニソヽギ入、澮ハ川ニ灑ギ入ル、大略一成ノ圖ヲ擧テ、一同モ推テ知ラルベキナリ、且遂人ノ遂ハ、南畝ヲモテハカレバ、遂ハ縱ニシテ溝ハ横ナリ、匠人田首ノ遂ハ横ニシテ溝ハ縱ナリ、自餘ノ洫・澮・川モ皆同ジク縱横ノ異同アリ、是二ツノ相違ナリ、又遂人ノ九澮ニシテ川ヲ周ラスハ、人力ニテ造ルノ川ナリ、又匠人ノ百里ニ澮ヲ掘テ、水ヲ川ニソヽギ入ルヽノ川ハ、自然ノ大川ナリ、コレ三ツノ相違ナリ、又溝洫ノ法ハ、一夫ニ就テ十分一ノ税ヲ取リ、井田ノ法ハ、一井九百畝ノ内ヨリ、公田一區ノ税ヲ取リテ、民ヨリハ一々ニ取ラヌ法ナリ、コレ四ツノ相違ナリト云、宋ノ人鄭夾漈是說ヲ非トシテ、匠人遂人ノ制同ジト云、陳祥道禮書モコノ說ニ從フ、獨リ朱子ノ說ニ、周ニ井田ノ制アリ、溝洫ノ法アリ、溝洫ハ十ノ數ヲ用ヒ、井田ハ四ノ數ヲ用ユト云、此說甚ヨシ、昔滕國ノ君文公、孟子

ニ國ヲ治ムル政事ノ仕方ヲ問ハレケレバ、孟子ノ對ヒ云レケルニハ、夏后氏禹王ノ天下ヲ治メラルニハ、制ヲ定メテ一夫五十畝ニシテ貢シ、殷人ハ一夫七十畝ニシテ助シ、周人ハ一夫百畝ニシテ徹ス、其實ハ皆十分一ニ取ル法ナリ云々ト云、マタ文公井田ヲ問ハレケレバ、孟子云、野ハ九ノ一ニシテ助シ、國中ハ什ノ一ニ取箇ヲナシテ自ラ賦セシメン、死徙モ一鄕ヲ出ルコトナク、一鄕ノ田井ヲ同ジクシ、出入トモニ相友トシ、守防非常ニモ相助ケ合、疾病等ニモ相扶持シケレバ、百姓トモ皆親ミ睦マシ、又四方一里ニシテ井ヲナス、井ハ九百畝、其中央ヲ公田ト定メ、四邊ノ八家ニテ、皆百畝ヲ自分ノ田地トシテ、同ジク公田ヲバ養ヒ耕ヤシ、公田ノ事畢リテ私田ヲ治ム云々、又詩ニ、ワガ公田ニ雨降リテ、ソノ序デニ我ガ田地ニモ降リカヽレリト云ヘリ、惟助法ノ制ノミ公田アリトナス、此ノ詩ノ詞ニ由リテ見レバ、周ニモ助法ノ制アリト云、又魯ノ哀公年饑エテ、入用不足シケレバ如何シテ宜シカラント、孔門ノ有若ニ問ハレケル、有若イヒケルニハ、左スレバ徹法ヲ行ナハザルヤト云、哀公ニハ十分二ノ取箇ヲナスサヘ不足ニ思フニ、徹法ノ十分一ヲ如何ニシテ行ナハレンヤト云々、春秋魯ノ宣公ノ代ニ、畝ヨリ税ヲ取ルコトアリ、傳ニ非禮ナリト謗レリ、コレハ井田ニ就テ貢法ノ如ク、民ヨリ一々ニ取リ上ゲタルナリ、周禮ノ載師職、及ビ司馬法ノ文ヲ以テ論ズレバ、周ノ制ニ、畿內ハ夏ノ貢法ヲ用ユ、夫ヨリ税ヲ取リテ公田ナシ、詩。春秋。論。孟ヲ以テ論ズレバ、周ノ制、邦國ニハ殷ノ助法ヲ用ユ、公田ヲ制シテ一夫ノ税ヲ貢セズ、鄕遂及ビ公邑。都里・比閭

等ノ吏、旦夕ニ公務ト民事トノ用多ク、私田ヲバ治ムル隙ナケレバ、コレニハ貢法ヲモチユ、又邦國ニ助法ヲ用ユルハ、諸侯一國ノ政事ヲ專一ニスレバ、ソノ貪暴ノ心ヨリ起リテ定制ナケレバ、税ヲ取リ上ゲルコト藝（マヽ）リナシ、故ニ地ニヨリ輕重ハアレドモ、通率ニシテ凡テ十分一ノ税ヲトル定制トス

軍制

○凡ソ軍ヲ制スル、天子ハ六軍トイヒテ、天子ニ六郷六遂アリ、郷ヨリ六軍ヲ出シ、遂ヨリモ六軍ヲイダス、合シテ十二軍ノ制アリ、然ルニ獨リ六軍トイヘルハ、先王民力ヲバ盡サヌ仕方ナリ、且六郷ヲ正軍ト定メ、六遂ヲ副卒トナス、諸侯大國ニテハ三郷。三軍、三遂。三軍。次國ハ二郷。二軍、二遂。二軍、小國ハ一郷。一軍、一遂。一軍、ミナ郷ヲ正トナシ、遂ヲ副トナスノ分チアリ

○尙書泰誓ノ文ニ、「時厥明、王乃大巡二六師一」トイヒ、又詩大雅常武ノ篇ニ、「整二我六師一」トイヒ、棫樸ノ篇ニ、「周王于邁、六師及レ之」トイヒ。小雅瞻彼洛矣ノ篇ニ、「以起二六師一」トイヘリ、六師ハ即六軍ナリ、對文ニハ、二千五百人ヲ師トイヒ、一萬二千五百人ヲ軍ト云、散文ニハ、師トイヒ軍ト云、總テ通用ス

○凡ソ一萬二千五百人ヲ軍トナシ、二千五百人ヲ師トナシ、五百人ヲ旅トナシ、百人ヲ卒トナシ、二十五人ヲ兩トナシ、五人ヲ伍トナス、天子ノ六軍合セテ七萬五千人、郷遂ヨリ出ス所ノ十二軍合セテ十五萬人ナリ、是ニ由リテ三軍ノ數推テ知ラルヽナリ

車之卒伍

○縣師ト云職アリ、邦國都鄙ヨリ稍甸郊里ノ地ニ至ルマデヲ掌ドリ、夫家人民オヨビ田ト萊トノ數マデヲ辨ジ、軍旅ノ用意ヲナシ置クナリ、其法ヲ司馬ヨリ受テ、衆庶ト馬牛車輦トヲ起シ、其車人ノ卒伍ヲ會シ、旗鼓兵器等ヲ備具シテ至ルナリ

司馬ハ軍ヲ掌ドル職ナレドモ、其命令ヲ天下ニ直行スルコトノナラヌ法ナレバ、必縣師關節アリテ、其職ニテ用意ヲナシ、人數ヲ集メテ司馬ニ引ワタシ、然ル上ニテ司馬是ヲ用ユルナリ

○春秋宣公十二年ノ傳ニ、君ノ戎ヲ分ケテ二廣トナシ、廣ニ三卒アリト云、卒ハ偏ノ兩ナリ、司馬法ニ、二十五乘ヲ偏トナスト、又百二十五乘ヲ伍トナスト云

○一郷中ノ戸數一萬二千五百家ナリ、三郷合セテ三萬七千五百家ナリ、徒役ヲ起スコト、一家ヨリ一人ヲ出スニ過ギズ、故ニ一郷ノ戸數ヲ盡シテ、一軍ノ數ニ實ツ、司馬法ニ、兵車一乘ニ甲士三人、歩卒七十二人ナリ、合セテ七十五人ナレバ、一卒ニ餘ル人ハ後車ニ置キ、後卒モ又五十人ヲ以テ、二十五人ニ合セテ一車ノ士卒トナセバ、餘ル所五十人、マタ後車ニ在リ、凡ソ三卒ニシテ車四乘、三旅ニシテ車二十乘、三師ニシテ車百乘、三軍ニシテ車五百乘ナリ、コレニ由レバ、六軍ニハ車千乘ナリ、

此車人ノ兩ヲ參ニシテ、相聯糾スルノ法ナリ

車ノ人數凡テ七十五人ヲ定トス、周官ニ、萬人ノ卒伍ノ會集ストイヒ、再度ニ車人ノ卒伍ヲ會集ス

ト云、皆卒伍ヲ以テ云者ハ、軍法ハ伍ニ始マリテ卒ニナル故ナリ、伍ヨリ兩ニ至ルマデ、一甲士是ヲ統領ス、故ニ毎車甲士三人ヅツナリ、サスレバ一乘ハ兩ヲ三ツニスルノ數ニシテ、伍五廿五人ヲ兩トナス、三兩ナレバ七十五人ナリ、四乘ハ卒ヲ三ツニスルノ數ナリ、四兩ヲ卒トスレバ、百人ニテ三卒三百人ナリ、百乘ハ三師ヲ三ツニスルノ數ナリ、五旅ヲ師トナシテ五千五百人ナレバ、三師七千五百人ナリ、五百乘ハ軍ヲ三ツニスルノ數、三萬七千五百人ナリ、千乘ハ軍ヲ六ツニスルノ數ニシテ、七萬五千人ナリ

辨可任

○郷大夫ノ職ニテ、歳々時々ヲ以テ、其支配スル所ノ夫家ノ人數多少ヲ調ベ任用ス、國中六郷ノ地ハ七尺ヨリ六十マデ、六遂ノ野ハ、六尺ヨリ六十五マデヲバ皆征シテ、任用ヲナス定法ナリ

○任用ノ征ニ歳ヲイワズシテ、七尺・六尺ト云ハ、歳實ツレドモ、身ノ丈及バザレバ病者トナス、所レ謂痤短侏儒ノ類ナリ、此等ノ人ハ許シテ征セズ

○古ノ兵法ト役法トハ同ジカラズ、兵法ハ外ヨリ内ニ及ブ定ニテ、邦國ヨリ軍ヲ出シ、已ムコトヲ得ズシテ遂ヨリモ出スナリ、マタ已ムコトヲ得ザレバ、郷ヨリモ出スナリ、役法ハ内ヨリ始メテ外ニ至ルナリ、コレハ先王ノ内外ヲ平均ニスル意ナリ、又國中ノ貴者、或ハ賢者ノ類ハ、皆許シテ役セズ、又年八十ノ者アレバ、子一人政ニ従ガハズ、九十ノ者アレバ、其一家政ニ從ガハズ、癈疾アリテ常人ニ

異ナル者アレバ、一家ノ内ニテ一人政ニ従ガハズ、父母ノ喪アレバ、三年ノ間政ニ従ガハズ、齊衰大功ノ喪アレバ、三箇月政ニ従ガハズ、家ヨリ諸侯ニ徙ラントスル者アレバ、是マタ三月政ニ従ガハズ、又諸侯ヨリ家ニ徙ル者アレバ、朞マデ（一周年）政ニ従ガハズ、政ニ従ガハズトハ、役仕ヲ許サルヽナリ

○均人ト云職アリ、歳ノ豐凶ニヨリテ、民ノ任用ヲ考ルコトアリ、豐年ナレバ、十日ノ内ニ三日任用ス、十分ノ三ナリ、中年ナレバ二日任用ス、十ノ二ナリ、年不熟ニシテ凶荒ナレバ、一日任用スル而已ナリ

○凡ソ徒役ヲ起スコト小司徒ノ職ニテ、此法ヲ書ルシテ六郷ノ内ヘ頒ツ、大率徒役ハ一家ヨリ一人ヅツ出ス定ナリ、其餘羨卒トシ副卒ニ用ユ、又或ハ用意トモナス定法ナリ

經地解義卷之上終

經地解義卷之下

軍將

○尙書甘誓ノ篇ニ、「召二六卿一」トイヒ、「六事之人」ト云文アリ、天子ノ軍ヲ出ス、都ベテ六軍ニシテ、一軍ゴトニ一將アリ、皆卿ヲ命ジテ將帥トナス、故ニ六卿ト云、卽六將ナリ、サテ六軍ノ人衆各事アリ、故ニ軍吏ヨリ以下士卒ニ至ルマデヲ、六事ノ人ト云、又六軍ヲ總ベテ掌ドル者ヲ太司馬ト云、書胤征ノ篇ニ、惟仲康四海ノ君トナリテヨリ、胤侯ヲ命ジテ六師ヲ掌ドラシメ、太司馬トナスト云ヘル文アリ、卽是ナリ

○凡ソ政官ノ屬ニハ、太司馬卿一人・小司馬中大夫二人、軍司馬下大夫四人、輿司馬上士八人、行司馬中士十六人・旅下士三十二人・府六人・史十六人・胥三十二人、徒三百二十人有、合テ四百三十一人也

○凡ソ吉・凶・賓・軍・嘉ノ五禮ハ、天下ニ通達セル大禮ナリ、就レ中軍禮ハ太司馬ノ官ニテ掌ドル、是ヲ司馬法ト號ス、モシ一國中ニ師田ノ事アレバ、縣師ノ官ニテ、其法令ヲ司馬ヨリ受ケ、人數ヲ會集シテ軍ヲ起サシム、軍司馬・輿司馬・行司馬ノ官アレドモ、コレハ平生建置カズ、事アル節ニアタリテ設クルナリ

○凡ソ軍ヲ制スルハ、軍將必卿ヲ用ユ、師ノ帥ニハ皆中大夫ヲ用ユ、旅ノ帥ニハ下大夫ヲ用ユ、卒ノ長ハ皆上士、兩司馬ハ皆中士、伍ニハ皆一長アリ

○古ノ官ニ常名アリ、異名アリ、比ノ長・閭ノ胥・族ノ師・黨ノ正・州ノ長・鄕ノ大夫ハ皆常名ナリ、軍陣ノ事ニテイヘバ、軍ノ將・師ノ帥・旅ノ師・卒ノ長・兩ノ司馬・伍ノ長ト云ハ、皆異名ナリ

○凡ソ六軍ノ將ハ皆卿ヲ命ズレドモ、就レ中一卿主タル者アリ、コレ司馬ナリ、餘ノ五卿ハ、ミナ司寇司空ト、六鄕ノ鄕大夫トノ內ヨリ、擇ンデ命ズルナリ

○先王ノ兵制ニハ、五人ヨリ以上ハ、必命士一人ヲ用ヒテ長トナス、二千五百人ニ至レバ中大夫ヲ用ユ、故ニ一軍ノ間ニハ、卿一人・中大夫五人・下大夫二十五人・上士百二十五人・中士五百人・下士二千五百人ナリ、士大夫ノ多キカクノ如シ、故ニ各自愛シテ能ク勤メ、軍機ヲ誤マルコト寡ナキノ道理ナリ

○凡ソ六軍ノ人、各兵粮ノ用意アリ、居ルニハ積倉アリ、行ニハ裹糧アリト云、裹糧ハ即ツヽム所ノ兵粮ナリ、左レドモコレハ公家ヨリ給シ賜ワルニハアラズ、皆自ラ用意ヲナスト見ユ

調發臨レ敵不レ同制

○尙書ノ序ニ、武王ノ戎車三百兩、虎賁三百人トアリ、孔安國ノ說ニ、兵車ハ百夫ノ長ノ乘ル所ニシテ、一車ヲ一兩トイヒ、一車ニハ步卒七十二人ナレバ、三百兩ノ人數、合セテ二萬千六百人ナリ

一乘ニ就テ七十二人ト云ハ、歩卒ナリ、甲士三人ヲ加ヘテ七十五人ナレバ、二萬二千五百人ナリ、
二萬千六百人ト云ハ、甲士ヲ除ク數ニシテ略言ナリ

○司馬法ニ一甸ノ數六十四井アリテ、五百七十六夫ナリ、右ノ内ヨリ長轂一乘ニ甲士三人、歩卒七十二人ヲ出ス定ナレドモ、敵ニ臨ンデ對陣スル時ハ、六鄕ノ軍法ニ從フテ、五人ヲ伍トナシ、五伍ヲ兩トナシ、四兩ヲ卒トナシ、五卒ヲ旅トナシ、五旅ヲ師トナシ、五師ヲ軍トナス、又禮記坊記ノ正義ニハ、諸侯ヨリ出ス車ハ、一成十里四方ノ地トイヘドモ、車一乘ニ甲士三人、歩卒七十二人ナリ、敵ト對陣スル時ハ、鄕法ノ如ク五人ヲ伍トナスト云々、牧誓ノ戎車三百兩ト云ハ、軍ヲ出ス時ノ法ナリ、又千夫ノ長・百夫ノ長ト云ハ、敵ト對陣スル時ノ數ヲ云ナリ

邦國鄕遂之軍

○凡ソ軍ヲ制スルニ、大國ハ三軍ヲイダシ、次國ハ二軍ヲ出シ、小國ハ一軍ヲ出スナリ
大國次國ト云ハ、皆命數ニテ云、故ニ命數同ジケレバ、軍數モ亦同ジ、上公ノ國ヲ大國トナシ、侯伯ヲ次國トナシ、子男ヲ小國トナス、故ニ春秋傳臧宣叔ノ辭ニ、次國ノ上卿ハ大國ノ中ニ當リ、中ハ大國ノ下ニ當リ、下ハ大國ノ上大夫ニアタル、小國ノ上卿ハ大國ノ下卿ニ當リ、中ハ大國ノ上大夫ニ當リ、下ハ大國ノ下大夫ニ當ルト云ヘリ、古ノ制如レ此

○穀梁傳ニ、古天子ハ六師、諸侯ハ一軍ト云、司馬法ニ、一萬二千五百人ヲ軍トナス、王者ハ六軍、

大國ハ三軍、次國ハ二軍、小國ハ一軍ニシテ、將帥ニハ必卿ヲ命ズト云、二千五百人ヲ師トナス、故ニ六師ノ數都テ一萬五千人ナリ、三軍ナレバ三萬七千五百人ナリ、諸侯ノ制、天子ヨリ踰ユルハ非禮ナリ

○大國三軍ナレバ三萬七千五百人ニシテ、車五百乘ヲ出ス法ナリ、次國二軍ナレバ、二萬五千人ニシテ、車三百三十三乘ヲイダスナレバ、餘リ廿五人ナリ、小國一軍ナレバ、一萬二千五百人ニシテ、車百六十六乘ニシテ、餘リ六十二人ナリ

○一封ノ地ヨリ車千乘ヲ出ス法ナレバ、十同ノ地ハ即千乘ノ地ニシテ、戎馬四千匹・牛一萬二千頭・甲士三人・歩卒七萬二千人ナリ、士卒ノ數ヲ合セテ六軍トナスベシ、然レドモ大國三軍ニ過ギズ、天子ハ六鄕六軍ヲ法ヒニ用ユルナリ

○禮記ニ「制國千乘」トイヒ、論語ニ、「道千乘之國」ト云、縱令其國ノ賦千乘ノ多キアレドモ、軍ニハ三軍ヨリ以上ヲ出スコトノナラヌ法ナレバ、三鄕ヨリ三軍五百ヲ出スナリ、千乘ト云ハ、國境ノ數ナリ

○學者周禮司徒ノ邦國封疆ノ義ニ於テ、武成分土ノ等、及ビ孟子分祿ノ法ト符合セザルヲ以テ周禮ヲ非トシ、即周公作ル所ノ制ニアラズトナシ、强ヒテ說ヲ立ツ者ハ、皆イマダ深ク討セザルノ誤リナリ、書費誓ノ文ニ、魯人三郊三遂ト云アリ、又左傳ニ、「成國不過半天子之國」ト云、諸侯ノ大

ナル者トイヘドモ、三軍ニテ可ナルナリ、大國ハ三軍ノ法ニテ、三郊三遂ヨリ出スハ、オノヅカラ周制ニ副フナリ、武王ノ戎車三百兩・虎賁三千人トイヒ、又御事・司徒・司馬・司空ト云ハ、大國三軍ニシテ、三卿三師ナリ、戎車百二十五乘ナレバ、又自カラ商ノ制ナリ、商・周諸侯ノ軍制同ジクシテ、獨リ分土ノ義安ンゾ相違アラン、九州七千里ト云ハ、周公旦武王ヲ助ケテ、滅伐スルコト五十國ニシテ、七十一箇國ヲ建テリ、故ニ分土ノ制遷カニ商ニ過グルナリ、大者ハ二十四倍ニシテ、小ハ猶三倍ナリ、ソノ大ノ七千里ナル宜ナルナリ、古ノ國ヲ制スル、一國ニシテ軍アリ賦アリ、天子ノ六軍、諸侯ノ三軍・二軍・一軍トイフハ、皆此軍數ニテ、一國ノ郊ヨリイヅル者ナリ、天子ハ萬乘、諸侯ハ千乘ト云ハ即賦ニテ、全ク國ヨリ出ヅル者ナリ、軍ヨリイヘバ、百里四方ニシテ三軍ノ備アリ、七十里四方ニシテ二軍ノ備アリ、五十里四方ニテ一軍ノ備アリ、賦ヨリイヘバ、千里四方ハ萬乘ノ地ナリ、二百十里四方ハ千乘ノ地ナリ、軍賦ヲ通ジテイヘバ、千里四方ヨリハ兵車一萬九百乘ヲ出スナリ、コレヲ推シテ見ルニ、二百里四方ハ五十里四方ヲ四合スル者ナレバ、五十里四方一軍ヲ出シ、五十里四方ヲ一遂トナシ、合セテ兵車二百五十乘ナリ、五十里四方ノ一ツヨリ定出ノ賦五十乘ヲ出スユヘ、軍ト賦トヲ合セテ三百乘ナレバ男ノ國ナリ、又七十里四方ニテ二軍ノ備アレバ、七十里ニテ二遂ヲ具フ、大凡一同ノ數ニ當リ、合セテ兵車五百乘ナリ、一同ヲ加ヘテ定出ノ賦百乘ナレバ、軍賦合セテ六百乘ナリ、即伯ノ國トナス、百里ニシテ三軍ノ備ヲナシ、又百里ニテ三遂ノ備アレバ、

合セテ兵車七百五十乘ナリ、此ヘ二同半ノ地ヲ加入シテ、定出賦二百五十乘ナレバ、軍賦合セテ千乘ナリ。即公ノ國トナス、伯二同ナレバ、百四十一里四方ナリ、公四同半ナレバ二百一十一里四方ナリ、子ハ下モ男ト同ジク、侯ハ上ミ公ト同ジ、所謂「分土惟三」ト云義ナリ、此外ハ即附庸ナリ、山川ナリ、土田ナリ

邦國境內之軍

○漢書、二里四方ノ地ヲ井トナス、四邑ヲ丘トナスト云、詳カニ前ニ出ヅ、故略 丘ハ十六井ニシテ、戎馬一匹。牛三頭ヲ出ス、一甸六十四井ニシテ、戎馬四匹。兵車一乘。牛十二頭。甲士三人。步卒七十二人アリテ干戈ヲ備具ス、是ヲ乘馬ノ法ト云

○論語千乘ノ國ヲ治ムルト云章ノ注疏ニ、何氏馬融ノ說ヲ引用シテ云、六尺ヲ步トナシ、步百ヲ畝トナシ、畝百ヲ夫トナシ、夫三ヲ屋トナシ、屋三ヲ井トナシ、井十ヲ通トナシ、通十ヲ成トナス、コレ百里四方ノ地ニシテ、革車一乘ヲ出スナリ、サレバ千乘ノ賦ハ、ソノ地千成ニシテ、三百十六里餘ノ四方ナリ、是等ノ大國ハ公侯ノ封地ニシテ、其以下ノ領サレヌ國ナリト云、又包咸ノ說ニ、千乘ノ國ハ百里ノ地ニシテ、古井田一井ハ一里四方ナリ、十井十里四方ヨリ車一乘ヲ出ス、故ニ千乘ハ百里四方ノ國ナリト云、馬融ノ說ハ周禮ニ依リ、包咸ノ說ハ孟子王制等ニ依ル、二說甚不同ナリ、皇氏疏ニモ、二說ヲ存シ人ニ釆擇セシム、孔穎達ノ說ニ、千成ノ地ハ四方三百十六里畸ナリ、サテ

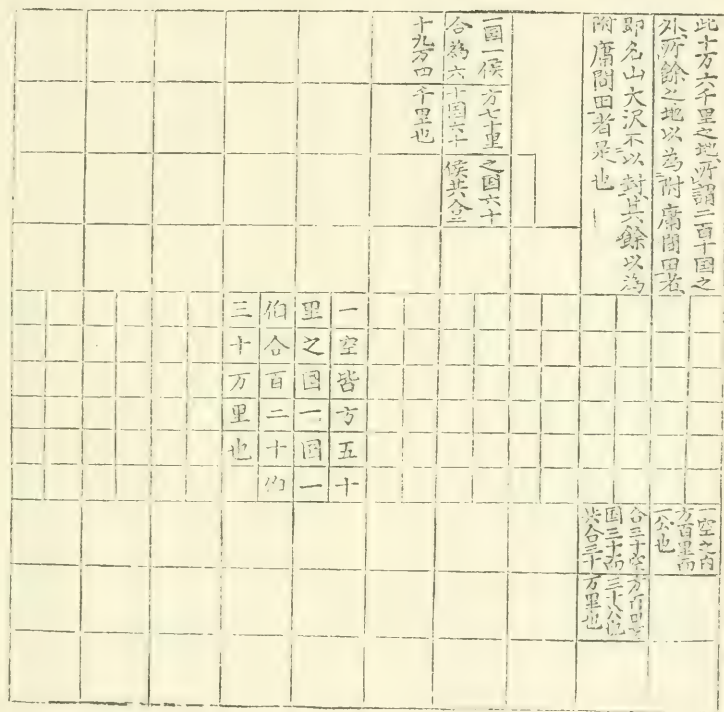
百里四方ノ地一ツハ、即十里四方ノ地百ナリ、三百里四方ナレバ、三々九ニシテ百里四方ノ地九ツ、一里四方ノ地九百ニシテ、車九百乘ヲ出スナリ、千乘ナレバ、百乘百里四方ノ一不足ナリ、因テ百里四方ノ地ヲ六分ニ破リ、毎分廣サ十六里、長サ百里トナル、引接シテ、長サ六百里、廣サ十六里ナリ、コレヲ半ニシテ、長サ各三百里ヅツナリ、三百里西南兩邊ヲ坤ナヘハ、即三百十六里四方ナリ、然レドモ西南ノ角未ダ十六里四方不足ナリ、十六里四方ノ地ハ、一里四方ノ者二百五十六ニシテ、百里ヲ六ツニ分ケ、其内一里四方四百餘ルナレバ、又此内ヨリ二百五十里ヲ以テ、角ノ缺タル所ヲ補フ時ハ、猶方一里ノ者百四十餘ルナリ、又コレヲ分ケテ三百十六里ノ兩邊ヲ補ナハバ、毎邊半里不足トナル、故ニ三百十六里畸ト云ナリ

○凡ソ諸ノ公爵ノ封國ハ、五百里四方ナリ、侯爵ノ國ハ四百里四方ナリ、伯爵ノ國ハ三百里四方ナリ、子爵ノ國ハ二百里四方ナリ、男爵ノ國ハ百里四方ナリ、千乘ノ國三百十六里餘ナレバ、伯子男三百里以下ニテハ、國スルコトナラヌ故ニ、公侯ノ封トイヒ、大國ト云、坊記ニ、國ヲ制スル千乘ニ過ズトイヒ、明堂位ニ周公ヲバ曲阜ト云、土地ノ七百里四方ヲ以封ジ、車千乘アリト云、馬說ハ周禮大司徒ノ文、諸公ノ地ハ五十里、諸侯ハ四百里以下ナリトイヘル文ニ從ヒ、包說ハ王制ノ凡ソ四海ノ内ヲ九州トナシ、州ゴトニ四方千里ニシテ、內百里ノ國二十、七十里ノ國六十、五十里ノ國百二十ヲ設ケ、都テ二百十箇國アリトイフ、文又孟子ノ天子ノ地ヲ制スル方千里、公侯ハ皆方百里、伯ハ七十里、子

男ハ五十里ト云文ニ從フナリ

○漢書ノ志ニ、封三百十六里ニシテ提封十萬井、定出ノ賦ハ六萬四千井ニシテ、馬四千匹•車千乘ヲ出ス、諸侯ノ大國ニテ、是ヲ千乘ノ國ト云ト云

○凡ソ大國ハ三卿ニシテ、皆天子ニ命ゼラル、次國ハ三卿ニシテ、二卿ハ天子ニ命ゼラレ、一卿ハ其君ニ命ゼラル、小國ハ二卿ニシテ、一卿天子ニ命ゼラレ、一卿ハ其君ニ命ゼラル

九州之內二百十國之一

此十方六千里之地、所謂二百十国之外、所餘之地以為附庸間田者、即名山大沢不以封、其餘以為附庸間田者是也

一国一侯方七十里之国六十合為六十国、六十侯共合十九万四千里也

一空皆方五十里之国一国一伯合百二十伯三十万里也

一空之内方百里而一公也

合三十空方百里之国三十而三十公也共合三十万里也

王制開方之圖

方十里　方百里

闊十里、長百里、而爲二田九十萬畝一
長闊共百里、而爲二田九百萬畝一
含方內方十里者百

方百里　一州方千里

闊百里、長千里、而爲二田九億萬畝一
長闊共千里、而爲二田九千億畝一
含方內方百里者百

九州

一州方千里

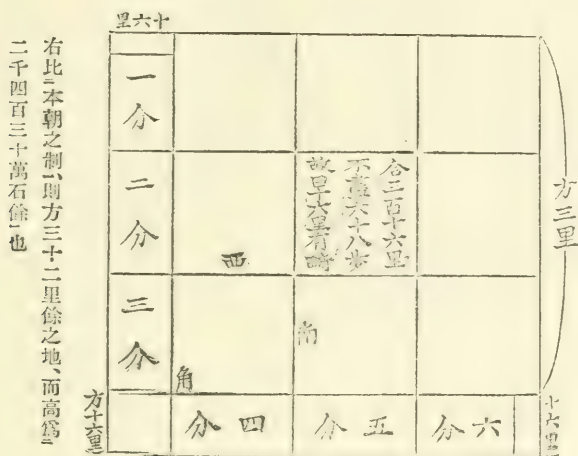
州方千里者九

含空內九而爲九州合方三千里而爲田八萬千億畝

周禮之說　馬融之說　王制之說　包咸之說

千乘國之圖

十六里
一分
二分
三分
四分
五分
六分
西
南
角
合三百十六里不盡六十八步故曰六里有畸
方三里
十六里一
方十六里

右比二本朝之制一、則方三十・二里餘之地、而高爲二二千四百三十萬石餘一也

方百里

萬井九百萬畝九萬家、此則諸侯之國、而出二三軍七萬五千人・革千乘一也〇今以二此里一比二本朝之制一、則十里十五丁四方之地、而高有二二百七十萬石一也

邦國卿大夫家軍制

○坊記ニ、家富メルトモ、其賦ハ百乘ニ過ギズト云ハ、諸侯ノ卿ノ采地ヲ云。孟子ノ百乘ノ家ト云モ、大國ノ卿ノ采邑アリテ、車百乘ヲ出ス者ヲ云、齊國ノ崔氏。衛國ノ甯氏、晉國ノ六卿等、皆百乘ホドノ臣ナリ

○漢書ノ志ニ、一同四方百里ニシテ、提封一萬井アリ、山川。城邑。街路等ヲ除キ去リ三千六百井ナリ、定出ノ賦六千四百井ニシテ、戎馬四百匹ヲ出ス、コレ卿大夫采地アルノ大ナル者、百乘ノ家ヲ云ト云

魯齊晉軍制

○春秋成公初年ノ春、丘甲ヲ作レリ、周禮ヲ引テ云ルハ、一丘十六井ニシテ、戎馬一匹。牛三頭ヲ出ス、丘ヲ四倍シテ甸トナス、六十四井ニシテ、長轂一乘。馬四匹。牛十二頭。甲士三人。步卒七十二人ヲ出ス、然ルヲ今魯國ニテ、一丘十六井ノ地ヨリ、一甸六十四井ノ賦ノ甲賦ヲ出サシムルハ、重斂ナリトテ譏ルナリ

○司馬法ニテ一成百里四方ノ地ヨリ、革車一乘。甲士十人。徒二十人ヲ出シ、十同ヲ終トナシ、千井ノ地ニシテ、革車十乘。甲士百人。徒二百人ヲ出シ、十終ヲ同トナシ、萬井ノ地ニシテ、車百乘。甲士千人。徒二千人ヲ出スト云ノ法ハ、右ノ車一乘。甲士三人。步卒七十二人ヲ出スト云ト同ジカラザル者ハ、司馬法ハ、公卿大夫畿內采地ノ制ニシテ、一乘三人。七十二人ノ法ハ、小司徒畿內都鄙ノ地ヲ非

ジテ出スノ定法ト見エタリ

○右ノ丘甲ヲ作レルハ、モト齊國ヲ伐ントセシヨリ起レルナリ、此前年楚ノ國ニ人數ノ加勢ヲ賴ミケレドモ、楚國ヨリ出シクレザル故、却テ懼レテ格外ノ人數ヲ命ジテ、丘甲ヲ作レルナリ、魯ハ從來ノ大國ニテ、甲兵固ヨリ多シ、僖公ノ代ノ頌ニ、公ノ車千乘ト云ヒ、昭公ノ代人數調ベノ時革車千乘アリト云、如レ此甲兵ハ固ヨリ敵國ヲ拒ギ戰フニ足レルニ、又重斂セシカバ譏レルナリ

○丘甲杜注ニテハ、百石ヨリ四百石ノ賦ヲ出シ、千石ヨリ四千石ノ賦ヲ出ス積リナリ、恐クハコノ理ナシ、故ニ顧炎武補正萬斯大學・春秋隨筆・沈彤補註倶ニコレヲ疑フ、萬氏說ニ、「古者車戰之法、甲士三人、一居レ左以主レ射、一居レ右以主ニ擊刺一、一居レ中以御レ車、間有ニ四人共乘者一、則謂ニ之駟乘一見ニ文十一年傳一魯畏ニ齊彊一、車增ニ一甲一、皆爲ニ駟乘一、因使ミ一丘出ニ一甲一、故曰レ作ニ丘甲一、其步卒之增、則在ニ襄十一年作ニ三軍一時上也」ト云テ、說理ニ於テ合スルニ似タリ以上魯國之制

○管子中匡篇ノ文ニ、昔聖王ノ民ヲ治ムル法制ハ一國ヲ三分ニシテ、鄙ヲ五ツニ分ツ、其制ハ一國ヲ二十一鄕トナシ、商工ノ鄕六・士農ノ鄕十五・公帥十一鄕・高子帥五鄕・國子帥五鄕ナリ、五家ヲ一組ニシテ是ヲ軌トナシ、一軌ニ就テ一長ヲ置ク、十軌ヲ里トナシ、五十家ナリ、一里ニ一司アリ、四里ヲ連トナス、二百家ナリ、一連ニ一長アリ、十連ヲ鄕トナス、二千家ナリ、一鄕一良人アリ、五鄕ニシテ一萬家一帥アリ、又鄙ヲ五ツニ分ツトハ、五家ヲ一組ニシテ軌トナシ、軌ニ長アリ、六軌ヲ

邑トナス、三十家ナリ、又司アリ、十邑ヲ率トナシ、三百家ナリ、又長アリ、十率ヲ郷トナス、三千家ナリ、又良人アリ、三郷ヲ屬トナス、九千家ナリ、又帥アリ、齊國如レ此ニシテ治メタリ、是マタ三代ノ制ト異ナリ 以上齊國之制

○晉ノ曲沃ト云所ノ莊伯、始メテ一軍ヲ以テ晉國侯トナリ、獻公ノ十六年ニ、又始メテ二軍ヲ作リ、公上軍ノ大將トナレリ、太子ノ申生下軍ノ大將トナレリ、其後十五年ニ州兵ヲ作レリ、五黨ヲ州トナシ、一州二千五百家ナリ、大凡一家ヨリ五人ヲ出ス法ニシテ、一萬二千五百人ナレバ、自カラ古制ト合ス、文公被廬ト云地ニテ、人數調ベノ時ニ春秋ニ蒐ストアリ三軍ヲ作レリ、凡テ二軍ナレバ上軍ヲ尊トビ、三軍ナレバ中軍ヲ尊ブナリ、城濮ノ合戰ニ、車七百乘五萬二千五百人アリ、其後マタ三行ヲ作リテ狄ヲ禦ゲリ、於レ是三軍三行合セテ六軍ナリ、タヾ天子ノ六軍ト云名ヲ避ケテ、軍トナシ行トナス、又其後清原ト云所ノ人數調ベニ五軍ヲ作レリ、然レドモ文公三行ヲ增シ設ケタルノ僣ナルヲ知リテ、悉ク廢シテ、新タニ上下二軍ト新軍トヲ置ケリ、安革ノ合戰ノ時、始メテ六軍ヲ作ル、其僣スルノ甚シキ禮義ノ廢レルヤ、悲シムベキナリ 以上晉國之制

井田溝洫名義

○凡ソ田制ノ義ニ於ケル、百畝ヲ夫トナスト云、夫トハ、一家々一夫一人前ノ田ヲ受ル人ヨリ名ヅク、夫三ヲ屋トナス、屋トハ、三夫ノ遂一同ニ畎水ヲ承クル故、其形象屋霤ノ簷ニ滴ル如シ、故ニ屋ト名

ヅク、屋三ヲ井トナス、井トハ、疆界ノ分別アリテ、井字ノ形ヲナス、故ニ名ヅク、井十ヲ通トナス、通トハ、十井ノ溝流レ下リテ洫ニ通ジ、入ル故ニ名ヅク、通十ヲ成トナス、成トハ、縱橫十里ノ田地百井ニ盈チテ、初メテ井田ノ制一箇成就ス、故ニ名ヅク、所謂「井田之制備ニ一成ニ」トハ即コノ義ナリ、十成ヲ終トナス、終トハ、洫百溝ノ水ヲイレテ、百里ヲ行キ澮ニ入ル、井田水道ノ長キ、此ニテ終ルナリ、故ニ名ヅク、十終ヲ同トナス、同トハ、一澮ニシテ、上ハ洫溝遂畎ノ水ヲ受ケテ川ニ通達ス、一遂。一溝。一洫ノ水畎ニ、遂ニ洫ニ澮ニ入ラザル者ナシ、是ヲ同ト名ヅク、禹ノ水ヲ治メシニ、畎澮ヲ濬メ川ニ入ラシム、故ニ水地中ニ流レ行ク、ソノ大小ノ水形三ツノ者ノミ、故ニ字ヲ制スルニソノ形ヲ取ル、一水ヲ〈トナス、畎ナリ、二〈ヲ从トナス、澮ナリ、衆从ヲ川トナス、心力ヲ溝洫ノ間ニ盡サルヽニ當リテ、天下ノ水廣狹深淺アラザレバ、水ヲ通流シ難ク、萬世農業ノ安キヲ爲シ難シト慮リヲナシ、是ヨリ川ヲ掘リ澮ヲ作リ、又增シテ洫ヲナシ、溝ヲナシテ、遂ニ百畝中ノ畎ヲ受ケシム、コヽニ於テ一旦雨降リ水集マレドモ、大ヨリ小ニ通ジ、小ヨリ大ニ注グ、崇朝ナラズシテ忽チ大川ニ達シ入ル、コレハ天下ノ水ヲ留メ蓄ヘズ、遂ゲ去ラシムルノ義ヲ以テ遂ト名ヅク、即交リ暢ブルノ意ナリ、溝トハ、冓ナリ、字ニ縱橫ノ形象アリ、故ニ名ヅク、洫トハ、制字ニテ會意ノ字ナリ、字水ニ从ヒ、血ニ从フ、洫ノ水溝ノ水ヲ承ク、血派シテ通流スル義ナリ、故ニ名ヅク、澮ハ會ナリ、衆水ヲ會集シテ川ニ達シ、水ノ性情ヲ盡シテ、天下ニ汎濫ノ害ナカラシムルノ義ナリ、故ニ名ヅクル然リ（程瑤田說）

古尺 幷本朝田制

○周ノ制三百歩ヲ以テ一里トナス、卽穀梁宣十五年ノ傳、大戴禮。孔子家語等ニ見エタリ、唐ハ三百六十歩ヲ一里ト定ム、李翶ガ平賦ノ書ニ見エタリ、宋モ亦唐ト同ジト、文獻通考ニ見ユ、元ハ二百四十歩ヲ以テ一里トナスト、陶宗儀輟耕錄ニ見ユ、明モ亦宋ト同ジ、洪武正韻ニ見エタリ、今ノ清國ハ三百六十歩ヲ一里ト定ム、古尺ヨリ六十歩多キナリ

○本朝ニテ定ムル所ノ歩一ナラズ、舊令、五尺ヲ以テ一歩トナス、延喜式ニハ、六尺ヲ歩トナス、今俗ニ云田舍歩ト云是ナリ、石壇等ニ之ヲ用ユ、又六尺三寸ヲ以テ一歩トナストアリ。此ヲ京歩ト云、田地等ニ用ユ、又六尺五寸ヲ一歩トナス。是ヲ路程屋室等ニノミ用ユルナリ。今ハ又六尺三寸ナリ

○昔豐臣氏、正親町帝ノ勅令ヲ蒙リテ、天下ノ地所ニヨリ、檢地ヲナシテ高下ヲ定メタリ、其法ハ五六ノ數ヲ以テ土地ヲ改メ、各國ノ高ト反別トヲ相增ス、是ヲ太閤檢ト云ナリ、三百歩ヲ以テ一反トナシ、二百歩ヲ大歩ト名ヅケ、百歩ヲ小歩ト名ヅケ、五十歩ヲ半歩トナス、當今用ユル法ハ六尺四方ヲ一歩トナシ、三十歩ヲ一畝トナシ、十畝ヲ一反トナシ、十反ヲ一町トナス 一反三百歩 一町三千歩

本朝古制ハ右ト同ジカラズ、長サ三十步。廣サ十二步ニシテ、三百六十步ノ地ヲ一反トナシ、十反三十六百歩ヲ一町トナス、後世ニハ是ヲ用ヒズ

○案ズルニ、周ノ一尺ハ、本朝今用ユル曲尺ニテ、七寸五分弱ニ當ルト見エタリ、或ハ六寸八分一

薹ニ當ルトイヒ、又七寸二分ニ當ルト云説モアリ。孰レカ一定ヲナシ難シ。今姑ク近古ノ説ヲ得タレバ、コレニ從フ而已

舉尺半推而可レ知

此ハ原ト宋ノ秦熺ガ、鐘鼎款識冊ニ載スルヲ摹寫セシ所ノ圖ナリ、周尺ハ漢志劉歆ノ銅尺、後漢建武ノ時ノ銅尺、晉ノ前尺ト幷ビニ同ジト云、宋ノ時高若訥隋志ニ依リテ、十五等ノ尺ヲ定ム、第一ヲ周尺トナス、即是ナリ、委シクハ蔡氏律呂新書中ニ詳カナリ、是圖スル所ノ周尺ハ、至極古ニ近キナリト云

○律呂新書ニ尺ヲ論ジテ、梁ノ武帝ノ鐘律緯ヲ引テ云　祖沖之ノ傳フル銅尺アリ、其銘ノ內ニハ、晉ノ泰始十年ニ、中書監荀勗古器ヲ考定シテ、今尺ト校シケレバ、四分半長シト云、凡テ古法ニ七品アリ、一ニハ姑洗ノ玉律、二ニハ小呂ノ玉律、三ニハ西京ノ銅望臬、四ニハ金錯望臬、五ニハ銅斛、六ニハ古錢、七ニハ建武銅尺ナリ、姑洗ハ微强、西京望臬ハ微弱、其餘ハ此尺ト同ジト云、此尺トハ荀

晶ノ新尺ヲ云、杜夔ノ尺ヲ今尺ト云トナリ

○本朝ノ田制、彼邦ニ比スレバ異同アリ、亦其國土ノ肥磽豐瘠ニヨリテ、上中下ノ等ヲ建テ、其稅ヲ取ルモマタ等アリテ、一定ヲナシ難シ、凡ベテ什分ノ一二ヨリ六七ニモ至ルアリ、サレドモ什分ノ五ヲ取ルヲ古法正制トナス、コレヲ五公五民ノ法ト云、又二十貫百石ノ法、或ハ十町百石ノ法ナド云フ類アリ

○凡ソ上中下ノ等ヲ定ムル、土相ノ不同アリト雖、今姑ラク一法ヲ建テヽイヘバ、上田ト定ムル田ノ一反三百歩ヨリ刈取ル穀三石ナリ、藁ヲ去リ米トナシテ、一石六斗トナル、(所レ謂一升毛五合摺ノ法) 又コレヲ折チ半ニシテ、七斗五升ヲ上入トナシ、七斗五升ヲ食養トナサシム、(一石五斗ヲ十五ノ盛ト云、盛トハ、物ヲ器ニ盛ルノ義ニシテ、石ト高トノ本トナスヲ以テ、盛リト云ヨシナリ) 是即什分ノ五ヲ取ルナリ、(五公ナリ、又五ツ物成ナリ) 又七斗五升ノ内ヨリ、二分ヲ去リテ六斗ヅツナリ、(千減二割引ナリ) 上入六斗・食養六斗ニシテ、一反ヨリ收ムル米實ハ一石二斗ナリ、(此ヲ十二ノ盛ト云) 四公六民ニ分テバ、又實ハ上入二石四斗ナリ、即四分ヲ稅トナシ、六分ヲ食養トナス、サスレバ五公五民、實ハ四公六民ナリ、(此四ツ物成ニアタル) 永錢二十貫文ヲ以テ穀百石ノ直トナス定ナレバ、此ヲ二十貫百石ノ法ト云、昔貫數ヲ以テ高ヲ定メ貫高ト名ヅクルアリ、亦此割合ヨリ出ヅルナラン

	周制	本朝制
一歩	六尺 今清ノ制五尺為レ歩、二百四十歩ヲ為二一畝一	六尺
一畝	百歩 今清ノ三百七十五尺ニ當ル 本朝ノ三畝十歩ニアタル	三十歩
一反	此制ナシ	三百歩 十畝之田
一町	此制ナシ	三千歩 十反之田 路程ニ用ユルハ六尺ヲ為レ間、六十間ヲ町トナス、此トコトナリ
收穀	一畝之田二石四斗	不二一定一、今姑用二一反上田收穀九斗之法一中七斗下五斗
折為半米	一畝之田一石二斗	一反之田四斗五升 用法右ノ如シ
一夫田	百畝 土地ノ上中下ニヨリテ必シモ一定ナラズ 詳ラカニ前條ニイダス	六反 此内三反ハハタナリ
一夫之一歲食	三石六斗	此制ソノ詳ラカナルヿ未レ聞
夫役	不一定 詳ラカニ前條ニイダス	一家七口出一人 大凡コノ割ナレ𪜈、必シモ不二一定一

周制比本朝

鍾	今六斗八升零々五撮餘
鬴	今六升八合有奇
區	今一升七合有奇
升	今一合零六撮有奇
尺	今七寸五分弱
里	今三町七分五釐 即二百廿五間

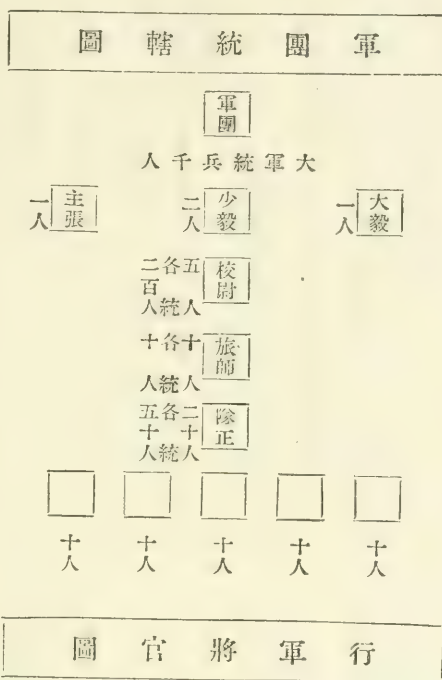
豆	今四合二勺五撮有奇

周制比本朝制　據周禮

一乘	今三千石
十乘	今三萬石
百乘	今三十萬石
千乘	今三百萬石
萬乘	今三千萬石

本朝軍制大略

○古三代ノ時ヨリ、井田ノ法ニ就テ軍賦ヲ制スレドモ、其後歴代ノ沿革損益各異同アリ、唐ノ太宗ノ貞觀年中ニ、諸州ノ府ヲ改メテ、總テ折衝府ト云、毎府ニ折衝都尉一人・左右果毅都尉各一人・別將一人・長史一人・兵曹一人・校尉六人ヅツアリテ是ヲ掌ドル、府ヲ上中下ノ三等ニ分チ、軍兵千二百人ヲ統ルヲ上府トナシ、千人ヲ中府トナシ、八百人ヲ下府トナス、マタ都ニ近キ所ヲ赤府ト云、畿府ト云、一府ノ人數十人ヨリ積上ゲテ、十人ヲ火トイヒ、五火ヲ一隊トナス、三百人ヲ一團ト云、我ガ本朝ノ制モ略唐ト同ジ、五人ヲ伍トナシ、十人ヲ火トナシ、五火ヲ一隊トナス、隊正一人ヅツアリ是ヲ掌ル、二隊ヲ旅トナシ、旅師一人ヅツアリテ是ヲ掌ル、二旅ヲ校トナシ、校尉一人ヅツアリテ是ヲツカサド

ル、是上ヲ團トナシ、團毅アリ、人數ノ品ニヨリテ三等アリ、五百人以下ノ團ニハ毅一人アリ、六百人以下ニハ大毅一人、少毅二人アリ、コレヲ軍團ト云、諸國ノ郡ゴトニ、人數五百人以上千人マデノ備具ヲ設ケ、常ニ京師ニ置キテ王城ヲ宿衞ス、又邊防ノ事アレバ邊ヲ戍ル、即衞士・防人ナド云ハ是也

○凡ソ兵士ハ、一人ゴトニ弓一張・弦袋一口・副弦二條・征矢五十隻・胡簶一具・太刀一口・刀子一枚等ヲ備具ス、一火十人組ゴトニ紺布幕一口ヲ備具ス、一隊五十人組ゴトニ火鑽一具・熟艾一斤・手鋸一具ヲ備

具ス、弓馬ニ便ナル者ヲ騎兵隊トナシ、餘ヲ歩兵隊トナス、上番ノ次第ハ、兵士京師ニ宿衛スルコト一年、又邊防トシテ戍卒ニ出ルコト三年ニシテ、郷ニカヘレバ衛士ハ一年、防人ハ三年、各ソノ國內ノ番ヲ免ルス、校尉以下皆同ジ、都テ二十人以上ノ兵ヲ發スルニハ、關アル國ハ契ヲ用ヒ、他國ハ敕符ヲ用ユルナリ

右ノ軍監ハ軍目付ナリ、軍曹ハ與力ナリ、錄事ハ留役ナリ、皆佐官ナラン、令義解ニ、軍曹ハ大主典、錄事ハ少主典ナリト云ト云

經地解義卷之下終

譬稲性辨

山田文静著

頒辟稻性辨序

縣令大原公所轄、信州高井・水內二郡、凡七萬石、而揆以其屬吏來莅焉、玆地山水淸淑、民樸而俗淳、五穀蕃而爭訟簡、其中治所西南數里、民俗最淳、勤于稼穡、厚于禮讓、藹然有近古之風焉、揆稱異之、以爲里中豈有仁人歟、何其美如是也、一日閱舊治簿書、則云、東江部邨、有莊左衞門者、天明八年、義倉令下、卽出穀百斛、納之官廥、以備凶饉、縣令河尻公以聞、賜銀五鈑、以褒揚之、文化四年、以穀賤傷農、令富民貯糴、令下日、獻金二百兩、以報升平德澤、縣令恩田公以聞、又賜銀五鈑、其行誼多足稱者、於是拍案歎曰、是吾所謂仁人者非邪、因事詢察、果溫雅慈祥篤學之人也、今也年老謝家事、自號松齋、而彊勉益弗懈、博涉經史、尤以躬行實踐爲先、所著有辟稻性辨、偶得而讀之、其說以穀子辟人性、以耕耨培漑、喩涵養克治之功、犂然皆原於聖賢之意、而懇到剴切、雖耘夫蕘子、亦可以感起而趨於善、嗚呼此所以薰陶一鄕、而致風俗之美也歟、且記其狀、併以奉上、大原公報曰、擧一善而衆善勸者、縣務之要也、河尻・恩田二君、實知人之賢令、而松齋亦可謂德不孤者、況是書、言近而旨遠、其脩己以淑諸人、旣有明徵、非空言也、惜其傳未廣耳、宜鋟梓以頒部下、使夫民皆知性命倫彝之義、相與趨於善、孝弟而力穡、守儉而畏法、則我

亦可三以無二瘝官之憂一矣、揆謹奉レ命、亟付二之剞劂一、以頒二部下一、因叙二其事於卷首一、俾下讀者知二縣令之美意一、而勿中敢忽上焉。

文政十一年五月

大冢揆謹撰

譬稻性辨

信濃逸人　松齋　山田文靜　述

上古ノ神聖天命ヲ受ケ、聰明睿知ヲ以テ上ミ天道ヲ奉ジ、下モ民情ヲ察シ、其正中ヲ執テ萬代不易ノ常道ヲ制作シ、下民ヲ協和シ、萬邦ヲ安寧ニ治メ玉ヒシ其典刑、後世聖人紹述シ玉ヒ、百世天下人民ノ儀則トハナシ玉ヘルナリ、然レバ其レヨリ後ノ人ハ、縦ヘ上智タリトモ、聖人ノ右ニ出ルコト能ハザレバ、己レガ智ヲ捨テ、專ラ聖人ノ教ニ順ヒ、孝悌忠信ヲ以テ本主トナシ、道ヲ學ンデ其德ヲ成シ、己レヲ脩メ人ヲ安ンズルトキハ、上下和合シ、自ラ天道ニ協フ可シ、若シ之ヲ舍テ人々自然ノ天道ヲ求メ、各々固有ノ性命ニ復ヘランドセバ、猶耒耜ヲ廢テ稼穡ヲ談ジ、衣服ヲ脱ギテ禮義ヲ講ハントスルガ如シ、其窮マリ田疇ハ蕪穢シテ山野ノ如ク、人民ハ直情ニシテ鳥獸ノ如クナラン、是孔子ノ性ト天道トヲ以テ、門弟子ニ語玉ハザル所以ナリ、善イ哉、宋ノ歐陽子ガ謂ヘル、「聖人之教ㇾ人、性非ㇾ所ㇾ先」トハ知言ト云フ可シ、爰ニ予ガ信中ノ村居ハ、四面遙ニ水田ニ連リ、春夏ノ交ダ居ナガラ田畯紅女ノ歌謡ヲ聞キ、偶々門ヲ出レバ稼穡ノ艱難ヲ視ル、一日風ト逍遙シテ野物ヲ觀省シ、老農ノ秋收スルニ遇ヒ、

其稼穡ヲ間談スルヲ聞キ、中心闇ニ適スル所アリ、乃チ欣然トシテ書室ニ歸リ、其默識スル儘ヲ漫リニ書キ錄スコト左ノ如シ

老農予ニ語テ曰ク、稼穡ハ卑賤ノ事業ナレド、辱ナクモ神ミ代ノ昔シ、天照太神ノ御教ニ因リテ初マレリト、或ル博士ノ話シニテ聞ケリ、何ニ知ラヌ我輩ナレド、身ニ取リテ、有リ難キコトニ思ヒ、壯年ヨリ惰ラズ、稼穡ノ道ニ力ラヲ盡シ、朝タニハ日ノ出ニ先キ立チ、夕ベニハ日影ゲニ後レ、壟畝ノ間ダニ月日ヲ送リ、偏ヘニ禾稼ノ生長スルヲ樂ムデ、耒耜槍刈ノ勞レモ忘レ、蔬食敝衣ニ身ハ窶レドモ、心ノ中チニ煩ヒナク、力行ハ衣食スル者ノ常ナリト、幼稚ノ時ヨリ先人ノ敎ニ聞キナレテ、習ヒ得タル此業ナレバ、今老イタリトモ事トモセズ、豐年飢饉ハ天ニ在レバ、奈何トモ爲可カラズ、唯憂フルハ夏日禾稼ヲ害スル蕪穢ニシテ、樂ミハ更ニ春生。夏長。秋收。冬藏ノ間ダニアリ、是ゾ我身ノ天命ナラント思フナリ、又穀種ハ播種サヘスレバ、天地ノ德ニテ芽ヲ萌ザシ、地上ニ生出デ其苗ノ質ヲ成スト雖ドモ、山野ノ草木ト違ヒ、其生ヒ出デタルマヽニテ、人ノ力ヲ假ラザレバ、縱ヘ美田ニ嘉種ヲ種タリトモ、土膏ハ衆草ニ吮取ラレ、禾苗ハ蕪穢ニ纏繞シ、其天地ヨリ受ケタル所ノ性ヲ成シ盡シテ、己レト良穀子トハ、成リ得ヌ者ナリ、故ニ稼穡スルニハ先ヅ地利ヲ察カニシ、穀種ヲ擇ミ、田疇ヲ耕ヘシ、糞草ヲ和シ、天ノ時ニ因（シタガ）ヒ種子ヲ下シ、其苗ノ叢生スルヲ待チ、時節ヲ考ヘ、苗ノ素性ニ由リ、或ヒハ撰リテ抄キ棄テ、或ヒハ植テ培壅シ、或ヒハ苗ヲ盡ク拔キ採リ、他ノ田ヘ分チ栽エ、耘耨。

培壅・灌澆・沃含、其辛苦擧テ數フ可カラズ、然レドモ專トスル所ハ、唯耘耨ノ一事ニ在リテ、衆草蕪ノ薙ヒヲダニ芟夷スルトキハ、禾稼能ク茂ゲリ、穀子モ能ク實ノリ、秋收モ豐ニシテ、力耕ノ功モ顯レ、天地ノ德ミモ明カニ知ラル可キナリ、サレバトテ衆草モ亦一概ニ惡ム可キニ非ラズ、各々其所ヲ得セシムルトキハ、秣草トナリ、糞草トナリ、夫レ〳〵ノ功用ヲナス者ナレバ、天地間ニ絕エテ棄ツ可キ物ハ有ルマジキナリト、鎌艾研ナガラ話說セリ、予熟々ト聞キテ、竊ニ意會スル所アリ、卽チ徐上海名光啓明末人ガ農政全書ニ因リ、一種ノ種稻法ヲ演テ、假リニ性命ニ譬喩シテ曰ク、爰ニ一種ノ稻種子アリ、戯レニ其中チ一粒ヲ撮テ殼ヲ去リ糲ヲ分割、細ヤカニ其裏面ヲ察ルニ、稃莖ノ離レ際ヨリ、陰々トシテ禾苗トナル可キ象ノ見レタリ、是乃チ稻ノ心ニシテ、天命コレニ因テ下ダル者ナリ、サテ種子ト爲ス可キ稻子ヲ水ニ浸シ、生氣ノ催スルヲ待チ、水ヨリ揚ゲ露ヲ滴テ丶、コレヲ水田ニ種ニ、稻子ノ人力ニ因テ地ニ墜ツルハ、乃チ稻ノ天命ナリ、其稻子地ニ入リ、陰氣ニ感ジ萌芽ヲナシ、陽氣ニ感ジテ地上ニ發生シタルハ、乃チ稻ノ性ナリ、陰陽風雨人力糞汁ニ感ジ、己レト長ビ揚ラントスルハ、乃チ稻ノ情ナリ、去レバ命ハ天ヨリ下ダル者ナレバ、皆ナ善ナリト雖ドモ、性ハ命ヲ受タル所ノ種子ト、墜タル所ノ土地トニ因テ、發生スル者ナレバ、猶ホ木國乳柑モ、我ガ科野ニ種レバ枸橘トナルガ如ク、奈何トモ爲可カラザル者ナリ、サレバ萬物各々其生レ得タル所ノ性ハ、變易ス可カラズト雖ドモ、然レドモ亦人力ヲ盡シ、各々其道ヲ以テ養ヒ育ダツルトキハ、其性ノ近キ所ニ循ヒ、善不善ノ移

ラザルコトナシ、是亦物ノ情ナリ、故ニ既ニ生ルヽノ後ハ、稲ハ稲ノ方ヲ以テ培壅シ、人ハ人ノ道ヲ以テ教化シ、各々其受テ生レタル所ノ性命ヲ遂ゲ盡サシム可キ者ナリ、易曰、「各正ニ性命一、保ニ合大和一」トハ、是ヲ謂フナリ、サテ稲苗ノ長ルニ隨ヒ、時節ヲ考ヘ苗田ヨリ盡ク拔キ取リ、コレヲ移シテ他ノ水田ヘ栽エルナリ、其時青々ト叢生タル苗ノ莖ヲトラヘ、土ノ中ヨリ根ヲ引キ拔カルヽガ、豈ニ苗ノ情ナランヤ、去レドモ件セザレバ稲トナラズ、是乃チ習ニ因テ性ヲ移シ、道ニ由テ情ヲ節ニスルノ始メナリ、其レヨリ拔キ取シ秧ヲ移シ、他ノ水田ヘ分チ栽ルニ、地ニ寒暖肥磽アリ、水ニ甘冽鹹苦アリ、秧ニ剛柔長短アリ、去レドモ均シク秧ニシテ、栽エ渡シタル所ハ、何ヅ處マデモ青々蒼々トシテ、アマリノ違ヒハ見エヌナリ、論語ニ、「性相近也」トノ玉ヘルハ、カヽル謂ハレナリ、又右ノ如ク秧ヲ他ノ水田ヘ栽エルニ、其田、土腴水甘ク、天ノ時ニ從ヒ、深ク耕ヘシ疾ク耰ヒ、糞澆宜キニ協ヒ、晝夜水利ニ心ヲ用ヒ、勉メテ人力ヲ盡ストキハ、莠草蕃蕪ノ憂ヒナク、稲禾能ク茂リ、秋收ニ至リ其稲ノ天ヨリ受タル所ノ十分ノ嘉穀ト成ルナリ、縱ヘ天ニ不測ノ風雨アリ、地ニ沃壌磽确アリ、歳ニ豐年饑饉アリトモ、務メテ人力ヲ盡ストキハ、地モ亦地力ヲ盡シ、他ノ水田ヨリ良キ穀米トハナル可キナリ、是春秋傳所レ謂「譬如下農夫是穮是蓘上、雖レ有ニ饑饉一必有中豐年上」ト謂フ者ニシテ、乃易傳、所レ謂、「盡レ性以至ニ於命一」ト謂フ者ナリ、然惰農ハ耒耜耘耨モ鹵莽ニシテ、禾苗ハ莠草ニ纏繞セラレテ、長揚スルコト能ハズ、假令秋ニ至リテ幽カナル穗ヲ出ストモ、其稲子ハ他ノ人力ヲ盡セシ田ノ秕ニモ劣ル可シ、

是所謂其性ヲ鹵莽ニスレバ、欲惡ノ孽ヒ性ト爲ルト云フ者ナリ、蓋シ天ノ陰晴風雨ハ皆ナ同ジケレドモ、勉メテ人力ヲ盡スト、怠リテ自然ニ任ズルトノ差ヒニテ、秋成ニ至リテハ、穀ノ多寡、米ノ美惡其相ヒ去ルコト豈ニ啻霄壤ノミナランヤ、是道ニ順ヒ情ヲ節ニシ、人力ヲ盡スト、怠リテ固有ニ委セ、情ノユク自然ニスルトノ差ヒナリ、「習相遠也」トノ玉ヘルハ、カヽル所以ナリ、サテ此ノ如ク既ニ穀米トナリテハ、天地ノ德、神聖ノ智、良農ノ力ト雖ドモ、美穀ヲ惡穀トナシ、惡穀ヲ美穀ト爲ンコトハ能ハザル所ナリ、況ンヤ稻禾ハ枯ルヽトモ、䅥稗トナラズ、稊稗ハ榮フルトモ、稻禾トナラズ、是「上知與下愚不移」トノ玉ヒシ所以ナリ、孟子曰、「性善也」トハ、苗ノ初メテ生出タル所ヲ謂フナリ、荀子曰、「性惡也」トハ、苗ノ生ヒ出デタル自然ニシテ、人力ヲ假ラザルトキハ、稻米トナラザルヲ警ムルナリ、凡ソ天地ノ間ダ苟クモ生アル者ハ、物ニ觸レテ感ズルコト無コト能ハズ、其感ズル事有テ動ク者ハ皆情ナリ、情又欲ニ牽ルヽトキハ、移ラザルコトヲ得ズ、蓋シ欲ナル者ハ、視ル所習フ所ノ物ニ因ツテ、能ク遷變スル者ナレバ、君子ハ心ヲ盡シテ、其コレニ示ス所以ノ物ヲ撒ム、物トハ何ゾ、稼穡ノ人力、人道ノ禮義ナリ、夫レ人ハ禮義有ヲ以テ萬物之靈トス、子曰、「天地之性、人爲貴」ト、然ルニ人ノ命トスルモノ稻米ニ過ギタルハ無シ、其他ノ百穀及ビ草木鳥獸ニ至ルマデ、皆ナ夫レ〳〵ノ方アリテ、人ノ養ヒヲ受ク可キモノハ、各々其方ヲ以テ養ヒ育ダツルトキハ、悉ク皆ナ稻ノ良稻ト爲ルニ異トナルコトナシ、然ルヲ況ンヤ人ニ於テヲヤ、故ニ君子ハ心ヲ既シテ、其大ナル者ヲ務メ、小人

ハ力ヲ盡シテ、其小ナルモノヲ務ム、君子小人其務ムルトコロ、同ジカラズト雖ドモ、然レドモ各々心力ヲ盡シテ、其道ヲ善クスルニ至リテハ、何ノ異トナルコトカ有ラン、尙書曰、「若二農服レ田、力レ穡乃亦有レ秋、惰農自安、不レ昏二作勞一、不レ服二田畝一、越其罔レ有二黍稷一」、蓋シ此說ハ假リニ一種ノ稻ヲ以テ億兆ノ民性ニ譬喩シタル者ナレバ、其大槩ヲ言フノミ、必ズシモ人ノ性、稻ノ性ト同ジキモノナリト言フニハアラズ、奈何トナレバ、稻ハ一粒ノ種子ヲ種キテ、幾百粒ノ稻子ヲ成ストモ、其形象氣味盡ク同ジカラザルコトナシ、然ルニ人ハ一夫婦ニテ、幾人ノ子ヲ生トモ、其形象容貌間々髣髴タルハ有リトモ、一人トシテ全ク同ジキハナシ、況ンヤ賢者ノ子必ズシモ賢ナルニアラズ、愚者ノ子必ズシモ愚ナルニ非ズ、貴賤貧富剛柔壽夭ニ至ルマデ、皆ナ其生ルヽノ初メ、天地父母ヨリ受タル所ニシテ自然ノ性命ナレバ、猶草木ノ多種アリテ、夫レ〳〵ニ花咲キ實ナリ、艶色氣味ノ同ジカラザルガ如ク、如何トモ爲可カラザル者ナリ、然リト雖ドモ亦タ草木ニモ其々ノ方(ミチ)アリテ、分栽・移植・扦插・接換・澆灌・培壅、各々其養ヒヲ得ルトキハ、榮花茂實他ノ自然ナル者ト、日ヲ同フシテ語ル可カラズ、況ンヤ人ハ萬物之靈、道ニ順フトキハ、天ノ祥ヒヲ受ケ、道ニ逆フトキハ天ノ殃ヒヲ受ク、其ノ吉凶禍福ノ變易スルコト掌ヲ反ヘスガ如シ、所レ謂「天命靡レ常」ナリ、故ニ貴賤上下各々其ノ道ニ順ヒ、其ノ天分ヲ守リ、其事業ヲ務メズンバアル可カラズ、若シ直情ニシテ、道ニ由ラザルトキハ鳥獸ニ異ナルコトナシ、是ノ故ニ上古ノ神聖天命ヲ受ケ、聰明睿知ヲ以テ上ミ天道ヲ奉ジ、下モ民情ヲ察シ、其正中ヲ執テ、

萬代不易ノ常道ヲ制作シ、下民ヲ協和シ、邦國ヲ安寧ニ治メ玉ヒシ其典刑、後昆百世ニ浸潤シ、孝悌忠信、禮義廉恥ノ大概ハ、普ク世間ノ人ニ在レバ、尋常ノ人ハ學文トテ別ニセズトモ、各々其生レ得タル所ノ事業ニ、自カラ天祿ノ有ルコトヲ知テ、夫レ〳〵ノ務ム可キ道ニ怠ラズ、君上ヲ畏レ敬マヒ、法度ヲ謹シミ、忠孝ヲ勵ゲミ、父子兄弟夫婦ヲ始メトシ、親族郷黨ニ睦シク、己レガ下モタル者ヲ子ノ如ク矜ミ、身分ヲ守リ、財用ヲ節ニシ、平常ノ無事ナルヲ樂トナシ、若シ奇禍アラバ、必ズ奇禍ノ先兆ナルコトヲ覺リ、身ヲ謙遜シテ人ヲ愛敬シ、義ヲ先ニシ、利ヲ後ニシ、人ニ代リテ事ヲ作トモ、己レガ事ト二心ナク、我意ヲ棄テ、周ク聞見ニ隨ヒ、博ク善キ人ノ行狀ヲ羨ミ慕ハヾ、道ニ協ヘル人ト云フ可シ、是乃チ學文スルノ本根ニシテ、論語所レ謂、「雖レ曰レ未レ學、吾必謂ニ之學一矣」ト云フ者ナリ、若シ博ク學ンデ身ヲ約スルコト能ハズ、今日ノ禮義ヲ忽ガセニシテ、言行眼下ニ違フコト有ラバ、假令才學世ニ勝レタリトモ、剪テ插タル瓶花ノ如ク、其美觀ナルモ、本根ナケレバ久シカラズシテ凋瘁スルヲ、天命トハ謂フ可カラズ、蓋シ學文スルハ、古ヘノ道ヲタヅネテ今ノ務メヲ知リ、禮義ヲ明カニシテ人情ニ達シ、己レヲ脩メテ以テ安ンゼンガ為ナレバ、何ゾ其才能ニ矜リ、聲譽ヲ求ムルコトヲ為ン、尚書曰、「有ニ其善一喪ニ厥善一、矜ニ其能一、喪ニ厥功一」トアリ、然レバ餘力アリテ學文ニ志ンニハ、先ヅ己レヲ謙遜シテ、假リニモ自滿倨傲ノ意ヲ生ゼズ、志シヲ厚クシ、身ヲ約ヤカニシ、博ク學ンデ其德ヲ成シ、天職ヲ務メテ以テ其天祿ニ報ユ可シ、凡ソ人ハ身ニ貴賤上下ノ等差アレドモ、心ニ尊卑ノ

階級ナキ者ナレバ、志シハ道ニ由リテ奈イカニモ高クシ、身ハ分ヲ守リテ、分ヨリモ卑キクシ、己レガ意ヲ棄テヽ、忠恕ヲ以テ心トナシ、日々其面テヲ洗フガ如ク自ラ新タニシテ、少間モ禮義ニ離レザルコト、大路ニ循テ行ガ如ク、力ラヲ仁ニ用ヒテ、面モ面テニ見アラハサズ、造次顚沛ノ間ヒダト雖ドモ、中心是レニ違フコト無キトキハ、自ヅカラ天道ニ協フ可シ、此ノ如クニシテ窮達通塞ノ有ルハ天命ナリ、猶ホ農ノ水旱ニ由リテ其業ノ易ヘザルガ如ク、君子ハ身ニ通達ノ事有ルトモ、心ニ矜ルコト無ク、又窮塞ノ事有ルトモ、心ニ傷タムコトナク、死ヲ守テ道ヲ善クシ、窮達通塞ノ交ダニ在リテ毫モ疑ヲ生ゼズ、志シヲ改メズ、道ヲ樂ムデ憂ヒヲ忘レ、坦然トシテ天命ノ有ルコトヲ知ルヲ、有道ノ君子トハ謂フ可キナリ、子曰「不レ知レ命、無三以爲二君子一也、不レ知レ禮、無二以立一也、不レ知レ言、無三以知二人也一」若シ言ヲ知ラザルトキハ、學ブト雖ドモ、玉帛鐘鼓、言語文字ニ適莫セラレ、古今和漢懸隔シテ、天下ニ人アルコトヲ知ラズ、殆ンド無用ノ長物トナリ、彼ノ老農ニ笑ハ所レン

譬稻性辨畢

經典穀名考

山田文靜著

經典穀名考序

穀之有五種也、猶人之有五倫也、古謂之父者、今亦謂之父、彼謂之子者、此亦謂之子、載其名、設其教、無往不可行、穀之有名、何獨不然、而古所謂黍、非今所謂黍也、彼所謂稷、非此所謂稷也、夫以不可一日無者、其見於六籍焉、不可通於我之今日、則經典亦無用之物耳、而可置而不考乎、山田太古之不能已於穀名之攷、其以此歟、蓋彼堯禹湯武之所經理、皆係西北高燥之地、而晉梁以還、治本草學者、所見書於東南一隅、詩書所叙、宜與齟齬、而唐宋箋疏、左支右吾、是穀名所以不明、而不容不考者矣、至我邦、古稱瑞穗之國、不唯稻粱之美於萬國也、七道物産、皆併水陸、五穀皆宜、先王爲政、毎重民食、參取漢法、課種諸品、布則千耆澤淪海宇、雖中或罹亂離、而未至如彼之分裂甚且久也、則驗今之實、以證古之名、不當有甚不明者、不明者、不考之罪也、太古居信濃萬山中、家世力穡、時還讀書、非求名於世者、其甚於世、[illegible]之不能已也、蓋其所往復論難、雖大都宿儒、莫之能定也、於是博捜沈思、以著一家言、排異同、正謬誤、皆鑿々有據云、自考證之學興、世之四體不動、明經自許者、僅對訓詁、校補文、以萬里外千百年前、痛痒不相關之事、而爭其銖兩毫釐、刊而行之、競衒博洽、如太倉之粟、陳々相因、

非レ不レ盛也、而紅腐不レ可レ食、未レ有レ如下此考之切二於今一、而補二乎古一、彼此並可レ用者上也、太古今茲詣二伊勢太廟一、迂路入レ京、齎レ此示レ余、余常謂、大丈夫不レ能レ爲二天下不レ可レ無レ此之人一、猶當レ著二天下不レ可レ無レ此之書一、今於二此著一乎見レ之、烏得レ不三樂而序二之也

文政己丑之秋

山陽外史頼襄子成父序

序

今之天地、則古之天地、其所レ生之物、何獨古今之有、根二柢於地下一者、莫三飮食一、蠢二動於地上一者、莫レ不二飮食一、是天地之自然也、其自然而飮、自然而食者、其體亦自然而有レ文、作爲而飮、作爲而食者、其體亦作爲而有レ文、故萬物之中、衣服而火食、存二彝倫一者、唯人耳、是其所三以爲二靈也、雖レ然亦考二之於經典一、上古穴居而野處、茹レ毛飮レ血、莫レ有二耕織割亨、人倫之道一、由レ是觀レ之、其爲レ靈也、亦非二獨天地之自然一也、蓋庖廚。庖犧氏之所レ創、農穡、神農氏之所レ敎、黃帝堯舜垂二衣裳一而天下治、禹稷躬稼而有二天下一、洪範八政之所レ叙、周禮司徒之所レ掌、虞書曰、食哉惟時、夫食與レ時、則惟民之本、民惟邦之本、故稼穡與二人道一同二其政一、史漢八書十志之所レ載、百世則レ之者、以二死生治亂之所レ繫、祭祀禮

食之所主、聖人重之也、蓋自三代以下、聖人之德澤、浹潤在人、君子知其遠大者、而務禮義、小人知其近小者、而務稼穡、所謂君子學道則愛人、小人學道則易使、是之謂也、夫農之於稼穡也、因天之時、就地之利、學之在從於父兄而力穡、教之在先於子弟而躬稼、如惰農自安、不服田畝、則雖年豐、亦無有秋、是故經典指稼穡、以喩禮義者、不可勝數、是比其近小者、所以興夫遠大者也、況古天子親耕南郊、以共齊盛、苟食土之毛者、誰不辨其名矣、若不能辨、則以爲無甚也、然迷於後世、有其名物不確然者、因考之於史書、其謬已萌於秦漢統一之閒、遂發六朝偏安之時、蓋聞古諸夏之地、唯有江北、其土高燥、而平原多矣、五穀皆陸種、雖有稻田之名、但是澤土卑濕耳、絕無有水田、又江南、古荊蠻之地、其土下濕、而川源衆矣、民習於水田、而不知陸種之利、司馬晉渡江之後、中國爲胡人之有、南北隔絕、不通數百年、宜哉、六朝之人、不辨中國之穀種、徒因其所聞、爲臆測之解、是其所以誤也、後人不察、沿襲爲種種之說、於是古今分析、眞僞紛亂、竟至於無所適從矣、嗚呼聖人之所以使民重五教者、惟在食與喪祭、然其所其養之五穀六米、名物不正、則鬼神不可享、人民不可食、祭祀之禮、比興之義、不啻爲虛設耳、若明明禹稷之績、萬世永賴之功、殆致不可解者、何也、大氐後世學者、一求之於訓詁、不意詢於觸覺之義、農夫者、固不讀書、則不知古有之名、故雖如是世間日用之物、載在經典、則千歲無明識者、豈不悲哉、靜也山野小人、躬親不揣、憂之久矣、偶得明徐光啓農政全書而讀之、始得

穀名之正一矣、可ニ以折ニ中諸家之說一、不ニ亦悅一乎、於レ是取ニ穀部二卷一而校正、將レ公ニ於世一、顧其書爲ニ農家者流一、恐後人卑視、幷ニ其正者一廢レ焉、因質ニ之於老農一、考ニ之於經典一、新撰ニ上下二卷一、合刻名曰ニ經典穀名考一、庶後學者有レ取、而識ニ今之五穀、則爲ニ古之五穀一、則夫明々禹稷之績、萬世永賴之功、煥然復明ニ於世一矣、至レ如ニ品類種蓺一、則九州猶殊ニ其宜一、況於ニ萬國一乎、故聖人之以ニ五穀一總ニ百穀一、猶下以ニ五教一統中百行上、若府々焉、由ニ農書之說一、則殆爲ニ老農一所レ笑、今不レ刪レ之者、唯欲レ使下新學、辨ニ彼邦古今時勢之異、南北土地之不レ同、而知中我東方風土之美、稼穡之饒、遠出上ニ於彼邦之右一耳、至ニ於夫遠大者一、則載在ニ經典一、其所レ指之物、已明、則其所レ喩之義、何不レ明之有、靜也小人尙何言哉

文政十年丁亥十月

信濃　山田文靜太古氏識

經典穀名考目錄

卷之上

百穀　五穀　六穀

無八穀之名之辨　三農　九穀

黍　秬　秠
穄　稷　稗
稊
卷之下
稻　秔　火耕水耨之辨
粱　糜　芑
飯粱考　菽　荏菽之辨
瓜瓞之辨　麥　苽
附明徐光啓農政全書穀部二卷

經典穀名考目錄畢

經典穀名考卷之上

日本 信濃　山田莊左衛門文靜著

百穀

百穀、廣謂草實之可播種者也

證據

經典、曰百穀者、謂其種類之無疆也、百猶百官百姓百祿百福等之百、非算數之百也

正謬

揚泉物理論曰、三穀各二十種、爲六十種、蔬菓各二十種、共爲百穀、是謬矣、凡五穀之種類甚多、假雖百老農、不能究其數、而況於操觚乎、揚泉以九九、求滿百之數、是其所以誤也、且蔬菓之屬非穀種、三穀之名、古無有、注云粱者黍稷之總名者、不合於經典、麥者、五穀之一種、聖人之所重、而注文闕之、其疎漏如此、何足論乎

五　穀

五穀、謂二黍・稷・稻・菽・麥之五種一也

證　據

蓋五穀之字、始出二於論語孟子一、而無二其目一、則穀名不レ可二得而知一矣、因按二周禮一、天官疾醫、五穀之下亦無二其目一、特司馬政官之職曰、職方氏掌二天下之圖一、以掌二天下之地一、辨二其邦國都鄙・四夷・八蠻・七閩・九貉・五戎・六狄之人民與二其財用一、九穀六畜之數要、周知二其利害一、乃辨二九州之國一、使二同貫利一、東南曰二揚州一、其穀宜レ稻、正南曰二荊州一、其穀宜レ稻、河南曰二豫州一、其穀宜二五種一、正東曰二青州一、其穀宜二稻麥一、河東曰二兗州一、其穀宜二四種一、正西曰二雍州一、其穀宜二黍稷一、東北曰二幽州一、其穀宜二三種一、河內曰二冀州一、其穀宜二黍稷一、西北曰二幷州一、其穀宜二五種一、鄭玄注曰、五種黍稷菽麥稻也、賈公彥疏曰、但此九州不レ言二麻與一レ菽及レ苽、鄭必知レ取レ菽者、蓋以二當時目驗一而知、故添爲二五種一也、意九州之穀、不レ言二麻苽一者、以二其非二五穀一也、其不レ言レ菽者、九州非レ無レ菽、菽以レ無二地而不一レ宜也、小宛之詩曰、中原有レ菽、庶民采レ之、毛傳曰、力采者得レ之、鄭箋云、菽生二原中一、非レ有レ主也、今民間之諺、云二豆者惰農糧一、亦非二虛語一也、又漢太常趙岐、爲二孟子章句一曰、五穀謂二稻・黍・稷・麥・菽一也、按趙與レ鄭同時之人、而其注二五穀一亦如レ是、則漢時猶以二職方氏之五種一、爲二五穀之通稱一者、斷然無レ疑矣、穀名之次序、趙鄭不レ同、各有レ所レ見、而爲二位置一耳、何一定之有、故今考二之於經典一、且取二農政全書之次序一、以二黍・稷・稻・菽・

麥之五種一、爲二五穀之正名一

古者、曰二黍稷一、曰二稻粱一、曰二菽麥一、或曰二麥禾一、其重皆在二下字一、又曰二黍稷稻粱一、則粱爲二之最一、而黍稻粱之三種者、皆取二其黏一、稷特取レ不レ黏者所三以爲二穀之主一也

日本書紀、神代上曰、以二粟稗麥豆一、爲二陸田種子一、以レ稻爲二水田種子一

正謬

周禮天官疾醫曰、五穀養二其病一、鄭玄注曰、五穀麻黍稷麥豆也、賈公彥疏曰、此依二月令五方之穀一、考二諸職方氏之五種一、獨除レ稻而收レ麻者也、蓋曰二五種一、曰二五穀一、其物何別、但在三樹藝與二收穫一、而異二其名一耳、然鄭玄、注二職方氏一、則曰二五種黍稷菽麥稻也一、注二疾醫一、則曰二五穀麻黍稷麥豆也一、何爲於二一書之注一、而爲二兩岐之說一、使二後人迷惑一乎、淺學如レ予者、所レ不レ解也、按、禮記月令曰、先薦二寢廟一之穀有二四種一、所レ謂麥黍穀稻、是也（穀謂レ稷也）考二諸周禮一、與二職方氏之穀名一符合、然又至下以二麥菽稷麻黍一、配二於四時中央一、曰中天子食上レ之、則與下周禮王之饋食六穀上不レ合、且麻與レ菽之不レ可二飯食一也、古今和漢、何異之有、孔穎達正義曰、鄭目錄云、月令者、本呂氏春秋、十二月紀之首章也、其中官名時事、多不レ合二周法一、鄭玄已知二其不一レ合二周法一、而又至レ注二疾醫之五穀一、則依二月令五方之穀一、除レ稻而收レ麻、於レ是與二職方氏之五種一、其注分而爲二兩岐一、是予之所二以爲一レ不レ解也、夫麻之爲レ物也、於二樹藝一爲レ重、而其用專在二爲レ枲爲レ布、以制二衣裳一、詩曰、東門之池、可二以漚一レ麻、又曰、不レ績二其麻一、市也婆娑、周禮天官、典枲掌

布縷紵之麻草之物、須衣服授之、禮記內則曰、女子執麻枲以共衣服、可幷見、蓋執麻者、非爲收其子、然亦麻子非不可食、但非可充饑者也、故在禮食而用麻子者、唯周禮朝事之籩實、儀禮徹祭之籩實、用蕡耳、（蕡麻子也）其他或壓油可以和羹又點燈、其餘則可以爲糞種化田土、周禮司徒之職曰、草人掌土化之法、其曰糞種者有九種、所謂牛羊麋鹿貆狐豕蕡犬也、其中八種皆獸類、而獨以麻子爲糞種者、古者所以不爲五穀也、徐光啓農政全書、穀部不收麻者、可謂知事實矣

按農書以獸類爲糞種、則多資其骨、而用其汁也

六穀

六穀、謂黍・稷・稻・粱・麥・苽之六米也

證據

周禮、天官膳夫、凡王之饋食用六穀、鄭司農曰、六穀稌・黍・稷・粱・麥・苽、鄭玄曰、稌稻也、苽彫胡也、春官小宗伯、辨六齍之名物與其用、使六宮之人共奉之、鄭玄曰、齍讀爲粢、六粢謂六穀、黍・稷・稻・粱・麥・苽、按、二鄭共依天官食醫而注之者也、食醫曰、凡會膳食之宜、牛宜稌、羊宜黍、豕宜稷、犬宜粱、鴈宜麥、魚宜苽、凡君子之食、恒放焉、蓋粱稷之別種、苽蔣草之實、杜甫詩所謂、秋菰成黑米、精鑿傳白粲者、是也、古曰六穀、謂祭祀饋食之共米也、大小麥、小麥之三種、

不レ可レ爲レ米、故於二九穀之中一、而除二此三種一、以爲二六穀一者也

無八穀之名之辨

八穀之名、古無レ有、南梁陶弘景注二本草一始曰、詩曰、黍稷稻粱、禾麻菽麥、此八穀也、又明李時珍著二本草綱目一、序二其穀部一曰、周官有二五穀六穀九穀之名一、詩人有二八穀百穀之詠一、其曰二五穀六穀九穀百穀一者、聞レ命矣、至レ謂二詩有二八穀之詠一、則三百篇無レ所レ見、惟豳風七月之篇、有二黍稷重穋、禾麻菽麥之句一、恐弘景、錯二誦重穋一、爲二稻粱一者也、時珍不レ察、以祖述者、誤之甚也

三農

三農、謂二平地農・山農・澤農一也

證據

周禮天官、三農生二九穀一、鄭司農曰、三農平地・山・澤也、又地官角人、掌下以レ時徵二齒角・凡骨物於山澤之農一、以富中邦賦之政令上、又羽人、掌下以レ時徵二羽翮之政、于二山澤之農一、以當中邦賦之政令上、又掌葛、掌下以レ時徵二絺綌之材、于二山農一、凡葛征、徵二草貢之材、于二澤農一、以當中邦賦之政令上、以レ此見司農之說爲レ得矣、蓋農者、首出二庶物一之名也、非二特謂一レ納二禾稼一也、故考工記曰、飭レ力以長二地財一、謂二之農夫一、治二絲麻一以成レ之、謂二之婦功一

正謬

鄭玄曰、三農、原隰及平地、是以農唯爲納禾稼之名也、蓋原隰五地之一也、非以爲二地也、大司徒之職曰、辨其山林・川澤・丘陵・墳衍・原隰之名物、凡天下之土地、不出於此五地之外、而除山林川澤、則丘陵墳衍原隰之三地、假使有小異、亦均之、其平地之屬也、豈外平地而別有原隰者乎、

鄭玄、改司農之說、而反自謬也

九穀

九穀、謂黍・稷・稻・粱・麥・苽・大小菽・小麥之九種也

證據

周禮天官、大宰以九職任萬民、一曰、三農生九穀、又地官、閭師以耕事貢九穀、又倉人掌粟入之藏、辨九穀之物、以待邦用、鄭玄曰、九穀盡藏焉、以粟爲主、又廩人掌九穀之數、以待國之匪頒・賙賜・稍食、蓋九穀者、合五穀於六穀、除其重複、更加小菽小麥、以爲九種者也

正謬

鄭司農、注周禮天官、大宰之九穀曰、九穀黍・稷・秫・稻・麻・大小豆・大小麥、鄭玄曰、九穀無秫大麥、而有粱苽、其以麻爲穀種之謬者、已於五穀之下、審辨之矣、按、古有粱之名、而無秫之名、秦漢

已來、稱レ秫者、則古之粱、而其稱レ粱者、反非二古之粱一也、鄭司農九穀之注、不レ曰レ粱、而曰レ秫者、用二當時之稱一也、鄭玄曰レ無レ秫者、於二其名一則誠然、然而舍レ秫別求レ粱、則可レ謂レ正二其名一而誤二其實一矣、又苽六穀之一種、九穀何闕レ之乎、鄭玄曰レ有レ苽者、可レ謂レ得矣、雖レ然亦至レ曰三九穀無二大麥一、則爲レ難レ從焉、夫民之於レ食也、古今和漢、假使無二小麥一、不レ可三一日無二大麥一、董仲舒有レ言、春秋、它穀不レ書、至二於麥禾不一レ成、則書レ之、以レ此見、聖人於二五穀一、最重二麥與一レ禾也、康成其謂二之何一哉、雖二大儒之言一、吾不レ信也

黍

黍總名、有レ黏、有レ不レ黏、古者、以二黏者一、爲二五穀之一一、故經典稱レ黍者、皆其黏者也、和名木美(キビ)

證據

周頌豐年之詩曰、豐年多レ黍多レ稌、下句曰、爲レ酒爲レ醴、古者、以二穀之黏者一爲レ酒、則曰レ黍曰レ稌、共其黏者也、儀禮特牲饋食禮曰、佐食摶レ黍授レ祝、祝授レ尸、尸受以二菹豆一、執以親嘏二主人一、主人左執レ角、再拜稽首、受復レ位、詩懷レ之、(鄭注曰詩猶レ承也)實二于左袂一、挂二于季指一、少牢饋食禮、亦有二此語一、但文少異耳、按、字書、摶圜也、謂二以レ手挽聚、而圜一レ之也、然則此曰レ摶レ黍者、黏黍也、故曰下摶レ之懷レ之實二于袂一、掛中于指上也、猶二此方之强飯一矣、其不レ用二稻粱一者、所三以爲二特牲少牢一也、周禮天官籩人曰、羞籩

之實、糗餌粉餈、鄭玄注曰、餌餈、皆稻米黍米之所レ爲也、合蒸曰レ餌、餅レ之曰レ餈、是亦用二黍之黏者一也、論語曰、丈人止二子路一宿、殺レ雞爲レ黍而食レ之、是不レ曰レ炊、而曰レ爲、則其黏者可レ知矣、曲禮曰、黍曰二薌合一、孔穎達疏曰、黏者曰レ黍、既軟而相合、又香、故曰二薌合一也、曲禮又曰、飯レ黍毋レ以レ箸、是亦黍之黏故也、又家語、有三以レ黍雪レ桃之事一、謂下以二黍之黏一拭中桃之毛上也、許愼說文曰、黍禾之屬、而黏者也、羅願爾雅翼曰、楚人以二菰葉一包レ黍、炊而食レ之、謂二之角黍一、又可レ爲レ酒、關東人謂二之黃米酒一、農政全書、玄扈先生曰、古所レ謂黍、今亦稱レ黍、或稱二黃米一、是也、日本書紀、五穀有レ稗而無レ黍

正謬

後世有二黍貴稷賤之說一、其謬昉二於鄭玄一、成二於孔穎達一、周頌良耜之詩曰、或二來瞻女一、讀載二筐及筥一、讀其饟伊黍、讀鄭箋曰、豐年之時、雖二賤者一猶食レ黍、孔疏曰、少牢特牲、大夫士之祭、禮食有レ黍、明黍是貴也、玉藻云、子卯稷食菜羹、爲二忌日一貶而用レ稷、是爲レ賤也、賤者當レ食レ稷耳、故云下豐年之時、雖二賤者一猶食上レ黍、今按、詩之所レ云、有下婦女載二筐筥一來、而省中視其耘耨上、在レ野之人望レ之、欣羨以爲、其所レ載之物、多伊黍矣、故下句曰、其笠伊糾、其鎛斯趙、是其意喜之以也、黍是黏者、指二餌餈之屬一、曰二伊黍一、未二的知一之辭、鄭箋豐年已下、孔疏、少牢已下、共不レ與二於詩之義一、無用之說也、且於二黍稷一謂二貴賤一、則大謬二後生一、不レ可レ不レ辨也、蓋彼邦諸夏之地、無二水田一、故以レ稷爲二百穀之主一、爲二公民之常食一也、黍以二其黏一爲レ美、故用レ之、猶三此方之用二稬米一、雖レ不レ爲二常食一、而亦貴賤無レ不レ食レ之、

惟於稻粱之二種、則貴者食之耳、賤者不得食之也、故漢書、稱文景之治曰、守閭閻者食粱肉、然則豐年之時、雖賤者猶食者、可以粱而言焉、不可以黍而言焉、又儀禮少牢饋食之禮、黍稷共有、而黍之用異者、唯以其黏也、其無稻粱者、所以爲小牢也、又禮記、玉藻、曰子卯稷食菜羹者、謂爲忌日貶粱肉、而止食稷與菜也、故曲禮曰、年穀不登、大夫不食粱、古者重粱如此、然穎達、不解禮儀摶黍之義、錯讀玉藻之文、公然於黍稷、而言貴賤、可歎哉、若其說是、則后稷社稷、謂之何、不知、穎達亦以穄爲稷與、又朱晦庵詩集傳、曰苗似蘆高丈餘、穗・黑色・實圓重者、是高粱也、非黍也、朱子之時、亦南北隔絕、故其解如此、又謂其黏者爲秫、不黏者爲黍者、宋蘇頌、圖經本草之謬也、嚴粲詩緝引之、後世紛然、所以難辨也

秬

秬、黍之別名、謂黑黍也、其穀黑班、其米深黃而黏、爲黍中之佳種矣、和名、久呂木美、俗云宇豆良

秠

秠亦黍之別名、謂白黍也、其穀白澤、其米淡黃而黏、其味亞黑黍者、農家多種白黍、和名、之呂木美

證據

大雅生民之詩曰、誕降嘉種、維秬維秠、維穈維芑・恒之秬秠、是穫是畝、恒之穈芑、是任是負、以歸肇祀、按、生民之詩一篇、曰后稷者四、而無一曰黍稷者、其謂黍稷、則必以苗名異名、所謂禾役黄茂者、稷也、秬秠者、黍也、穈芑者、粱也、粱、稷之黏者、均之不過黍稷之二種也、其不曰黍稷者、蓋避於后稷之稷也、又黍之佳者、不出於黑白二種之外、爾雅、已曰秬黑黍、禮記、又有白黍、然則此二種者、是古今常有之物、所以曰恒之秬秠也、又魯頌閟宮之詩曰、有稷有黍、有稻有秬、下曰秬者、即黑黍、則上曰黍者、即白黍可知矣

正謬

毛萇詩傳曰、天降嘉種、秬・黑黍・秠・一稃二米、朱晦庵集傳曰、降是種於民也、秬秠言穫畝、穈芑言任負、互文耳、今按、毛傳曰天降者、似不然矣、朱子改之者、是矣、然亦民字、照于下章、則似無應矣、說文曰、降下也、所謂誕降嘉種者、后稷下種於田也、謂之嘉種者、以黍粱之黏也、毛傳、全依爾雅也、爾雅曰、秬・黑黍・秠・一稃二米、郭璞注曰、此亦黑黍、但中米異耳、漢和帝時、任城生黑黍、或三四實、實二米、得黍三斛八斗是、今質之老農、黍中無有如此者云矣、羅願爾雅翼、亦極辨無一稃二米之黍、然則和漢無此種明矣、恐爾雅之謬矣、且任城之黑黍、漢書不載焉、他無所見、假使漢時有之、猶禾之同穎、麥之兩岐、是希世之物矣、非必有其種而

然上也、既言レ恒レ之、豈可下以二希世之物一而言上レ恒レ之乎、又秬秠之實、則易二零落一、故曰二是穫是畝一、糜芑則不レ然、禾而收、故曰二是任是負一、非二止互レ文耳一也

穄

穄、黍之別種、而不レ黏者也、不レ黏之黍者、不レ宜レ人、故祭祀不レ用、經典無レ名、謂二之穄一者、蓋漢已後之名也、和名、宇留木美（ウルキビ）

證據

經典無レ穄、唯孟子、曰二夫貉五穀不レ生、惟黍生一レ之者、則穄也、故後漢書烏桓傳曰、其土地宜レ穄、烏桓則古貉之地、春秋所レ謂山戎是也、然則穄〔呼レ穄爲レ稷者、本草家之誤也〕者、五穀之外、而山戎之所レ食也、南梁陶弘景本草註曰、稷米、食レ之不レ宜レ人、言レ發二宿痾一、唐孟詵曰、稷、在二穀中一而最爲二下苗一、宋蘇頌曰、稷米、出レ粟處皆能種レ之、而今人不二甚珍一レ焉、惟祠事用レ之、農家惟以備二他穀之不一レ熟、則爲二糧耳一、宋寇宗奭曰、稷米今謂二之穄米一、取以供二祭祀一、然發二故疾一、今質二之老農一、皆云、不レ黏之黍、最爲二下穀一、而種レ之無レ時、是故、開墾及磽确之地、或水旱之跡、時節後而無二他可一レ種之穀、則希有二種レ之者一、種則其得レ穀大多、然其味其性不レ宜レ人、故窮民而猶憚レ食レ之、老農之言如レ是、穄字、始見二於呂氏春秋一

正謬

呂氏春秋孝行覽曰、飯之美者、陽山之穄、南海之秬、此等之言、徒記レ所二傳聞一、以共二博覽一者也、非下正二事實一而記者上也、後世南北之時、梁陶弘景注二本草一、黍下曰、穄米與二黍米一相似、稷下曰、黍與レ稷相似、唐蘇恭本草曰、漢氾勝之種殖書、有レ黍不レ言レ稷、本草、有レ稷不レ載レ穄、穄卽稷也、近世明李時珍、著二本草綱目一曰、古有レ粱而無レ粟、可レ知二粱卽粟一也、今考二其所下謂、穄米與二黍米一相似者信然、豈唯米之似耳乎、苗葉穗實無レ有レ異矣、唯穄者不レ黏而不レ堪レ食耳、其謂二黍與レ稷相似一者、以レ穄爲レ稷之故也、是其謬之所二繇生一也、氾勝之書、不レ言レ稷者、漢時專呼レ稷以レ粟之故也、本草、不レ載レ穄者、穄字、古無レ之故也、謂二古有レ粱而無下粟者、不レ讀レ詩之誤也、夫稷也者、在レ古則百穀之主、樹藝之本、而粟則稷之實也、故五穀去レ稷則百穀失レ所レ據、猶二五教違レ孝、則百行亡下所レ賴、蓋以三其爲二本主一也、雖レ然、亦江南火耕水耨、固不レ識三稷之爲二何物一、誤以二山戎之所レ食物一、爲二民食喪祭之本主一、子曰、是可レ忍也、孰不レ可レ忍也、農政全書、穄、卽黍之別種也、今人以二音近一、誤レ穄爲レ稷、又曰、南人承二北音一、呼レ稷爲レ穄、謂其米可レ供レ祭也、是可三以砭二南人之病一矣、特怪本草家、已知下穄米食レ之不レ宜レ人、發中宿痾上、而又曰下用二祠事一、供中祭祀上者、是何言乎、其言之不レ通也、夫穄者、窮民而猶食爲レ難、而況於二君子一乎、況於二鬼神一乎、若以二如レ此之物一、爲二郊祀宗廟之齋盛一、則鬼神不レ可レ享焉、不敬之至、無レ甚レ於レ是矣、可レ歎哉

稷

稷大名、粟、稷之實也、種レ粟而草生曰レ苗、苗之秀而實曰レ禾、收穫亦曰レ禾、禾者、稾實相連之名也、禾而去レ稾曰レ粟、又曰レ穀、穀而去レ殼曰レ米、又曰レ粒、曰レ食、而米亦謂ニ之粟一、粟者、穀米之通稱也、米而未レ舂曰レ疏、或曰レ糲、舂レ糲曰レ鑿、再鑿曰レ粺、祭祀謂ニ之粢一、又曰ニ明粢一、君賜ニ粟於臣一曰レ祿、臣受ニ粟於君一曰レ食、食祿亦謂ニ之穀一、其總名曰レ稷、蓋稷百穀之主、種藝之本、故古者、農官亦謂ニ之稷一、祭ニ穀之神一亦謂ニ之稷一、配ニ諸后土之神一曰ニ社稷一、後世唯以ニ曰レ禾曰レ穀曰ト粟、爲ニ總稱一、和名、阿波(アハ)

證據

稷大名、粟、稷之實也、黍離之詩曰、彼黍離離、彼稷之實、是也

種粟而草生曰レ苗、碩鼠之詩卒章曰、碩鼠碩鼠、無レ食ニ我苗一、而首章次章、曰ニ黍與ト麥、白駒之詩曰、皎皎白駒、食ニ我場苗一、論語曰、苗而不レ秀者有矣夫、秀而不レ實者有矣夫、大學曰、莫レ知ニ其苗之碩一、凡單曰レ苗者、稷之苗也、仲虺之誥曰、若ニ苗之有ト莠、若ニ粟之有ト秕、是也

苗之秀而實曰レ禾、(苗而不レ秀者謂ニ之稂一、秀而不レ實者、謂ニ之莠一、方俗呼ニ稂志良加一、呼ニ莠加左保一、則大田之詩所レ謂稂莠、是也、又下泉之詩、謂ニ苞稂一者、萩之屬、而與ニ稂莠之稂一大異、後世呼レ稻爲レ禾者、始見ニ于吳志一)甫田之詩曰、禾易長レ畝、終善且有、生民之詩曰、禾役穟穟、(役、說文作レ穎、)又黍離詩中、曰レ黍曰レ稷、而小序、曰ニ故宗廟宮室、盡爲ニ禾黍一、則禾之爲レ稷也、明矣、尙書曰、天乃雨反レ風、禾則盡起、是稷之在レ田、曰レ禾也

收穫亦曰レ禾、禾者、稾實相連之名也、伐檀之詩曰、不レ稼不レ穡、胡取ニ禾三百廛一兮、春秋莊公二十八

年、經曰、大無麥禾、臧孫辰、告糴于齊、尚書序曰、唐叔得禾、異畝同穎、獻諸天子、非粟之穗、則無有此異也 儀禮聘禮曰、門外米禾、皆二十車、鄭玄注曰、禾、稾實幷刈者也

不而去稾曰粟、又曰穀、春秋僖公十三年、左氏傳曰、冬、晉荐饑、杜預曰、麥禾皆不熟 使乞糴于秦、秦於是乎、輸粟于晉、自雍及絳相繼、命之曰汎舟之役、按、麥禾不熟則乞糴、而輸之以粟、則禾之爲粟無疑也、小宛之詩曰、交交桑扈、率場啄粟、又曰、握粟出卜、自何能穀、穀、謂食祿也、 禹貢曰、四百里粟、武成曰、發鉅橋之粟、大賚于四海、及漢時甘泉太倉之粟、皆謂稷之實也、又月令曰、孟秋之月、農乃登穀、天子嘗新、先薦寢廟、是單曰穀者、乃粟也

穀而去稃曰米、又曰粒、曰食、而米亦謂之粟、粟者、穀米之通稱也、禹貢曰、五百里米、周禮司徒、舍人掌米粟之出入、及晏子之脫粟食、公孫弘之脫粟飯、共謂米粟也、又虞書曰、烝民乃粒、萬邦作乂、是謂米爲粒也、論語曰、食不厭精、是呼米曰食也、又曰、雖有粟、吾得而食諸、是指米而曰粟也、然則粟、穀米之通稱也、

米而未舂曰疏、或作糲 又曰糲、論語曰、飯疏食飮水、曲肱而枕之、又曰、雖疏食菜羹瓜、祭必齊如也、春秋、哀公十三年、左氏傳曰、粱則無矣、麤則有之、史記太史公自序注、傳瓚曰、五斗粟三斗米爲糲、正義曰、脫粟也、是皆謂米粟之未舂者也、〔按、白粹之稗、白粟曰舂、舂之米曰糲、白糲曰毇、毇之米曰糳、白糳曰粺、粺、粹之米曰精、古有文獻之曰精、凡經典曰精者、其義蓋取于此也〕

舂糲曰毇、一作鑿 春秋桓公二年、左氏傳曰、粢食不鑿、昭其儉也、左傳、曰不鑿者、謂共疏也、集解、曰不精鑿、恐不然

再鬵曰レ粺、召旻之詩曰、彼疏斯粺、胡不二自替一、（毛傳、曰二精粺一是、鄭箋曰二粺九一非、）論語曰、食不レ厭レ精、是也

・祭祀謂二之粢一、又曰二明粢一、（粢、或作二盞齊、說文、作二齋粢一、）爾雅曰、粢稷、注、舍人曰、稷粟也、左氏傳、粢食不レ鑿、（按、曰レ粢、謂レ共レ米也、曰レ食、謂二熟而薦一レ之也、）陸德明釋文曰、粢音咨、稷也、食音嗣、餠也、故郊特牲曰、共二粢盛一、所二以報レ本反一レ始也、（謂レ共レ米也）祭二黍稷一加レ肺、（謂二熟而薦一レ之也）祭齋加二明水一也、（齊、粢）周禮秋官、司烜氏掌下以二夫遂一取二明火於一日、以レ鑒取二明水於一月、以共二祭祀之明盞一也、（盞、粢、）明燭共二明水上、儀禮士虞禮、作二明齊一、甫田之詩、作二齊明一、曲禮曰、稷曰二明粢一、實二諸簠一共二於神一、曰二粢盛一、泰誓曰、犧牲粢盛、春秋桓公六年、左氏傳曰、絜粢豐盛、又周禮、謂二六穀一曰二六盞一、而單曰レ粢、又曰二明粢一者、乃謂二米粟一也

君賜二粟於臣一曰レ祿、臣受二粟於君一曰レ食、周禮天官大宰以二八柄一詔レ王馭二群臣一、其二曰祿、故論語曰、祿之共二公室一五世矣、又曰、子張學レ干レ祿、說命曰、惟賢非レ后不レ食、論語曰、事レ君敬二其事一、而後二其食一、又曰、君子謀レ道、不レ謀レ食、耕也餒在二其中一矣、學也祿在二其中一矣

此章舊解不レ合二於詩書一、共是俗儒之見也、謹按、謀レ道者、謂レ用二力於仁一也、不レ謀レ食者、謂レ不二枉道而事一レ人也、下二句譬レ耕而喩レ學也、蓋謂三士之學也、猶二農之耕一也、餒餧古通、於僞反、音委、孫愐謂曰飯也、故食餒祿之三字、皆是指レ粟之言也、猶下盤庚曰上若二農服一レ田、力レ穡、乃亦有一レ秋矣、食祿亦謂二之穀一、論語曰、三年學、不レ至二於穀一、不レ易レ得也已、又曰、邦有レ道穀、邦無レ道穀、恥也、甫田之詩曰、以介二稷黍一、以穀二我子女一、是謂二食祿一曰レ穀也

其總名曰レ稷、蓋稷百穀之主、種蓺之本、故古者農官亦謂二之稷一、祭二穀之神一亦謂二之稷一、配二諸后土之神一曰二社稷一、虞書曰、帝曰、棄、黎民阻レ饑、汝后稷播二時百穀一、周禮司徒、倉人掌二粟入之藏一、鄭玄曰、九穀盡藏レ焉、以レ粟爲レ主、春秋昭公二十九年、左氏傳、蔡墨曰、共工氏有レ子、曰二句龍一、爲二后土一、后土爲レ社、稷田正也、有烈山氏之子曰レ柱、爲レ稷、自レ夏以上祀レ之、周棄亦爲レ稷、自レ商以來祀レ之、郊特牲曰、社所二以神一レ地之道也、天子大社、必受二霜露風雨一、以達二天地之氣一也、孝經曰、昔者、周公、郊二祀后稷一以配レ天、又曰、保二其社稷一、而和二其民人一、蓋諸侯之孝也、故天子謂二之郊一、諸侯謂二之社稷一

蓋古者天子親耕二於南郊一、以共二齊盛一、諸侯耕二於東郊一、亦以共二齊盛一、祭統 是以聖王先成レ民、而後致二力於神一、民者、謂〔養レ神者、謂二レ人也、〔成儀是力一也〕 故奉レ盛以告曰、絜齋豐盛、謂二其三時不一レ害、而民和年豐一也、故務二其三時一、脩二其五教一、親二其九族一、以致二其禋祀一、春秋桓公六年、左氏傳、之時、春夏秋、禋絜敬 子曰、務二民之義一、敬二鬼神一而遠レ之、論語第六 是故君子勤レ禮、小人盡レ力、勤レ禮莫レ如レ致レ敬、盡レ力莫レ如レ致レ篤、敬在レ養レ神、篤在レ守レ業、春秋成公十三年、左氏傳 故貴賤上下、各明二其所一レ務、而行レ之篤敬、則皇天后土保佑、民和年豐、而天下平

正謬

夫稷之爲レ物也、在二昔諸夏之地一、則爲二百穀之主、樹蓺之本一、是故、秦漢已上者、雖二王侯貴人一、皆以レ稷稷則粟也 爲二常食一、況於二庶民一乎、故於二其名物一、亦貴賤上下、目驗而識レ之矣、可レ見漢儒於二黍稷一而未レ下レ注也、雖二後世一、北方則猶然矣

農政全書、華亭陳子龍曰、今北多黍稷、南僅稌稻、乖備種之義矣、又玄扈先生曰、北方之可爲水
田者少、可爲旱田者多、北人之未解種旱田也、（旱田則稻田也、無非水田、謂其地卿門、而下濕者、）是近明末、崇禎間之事也、
可以想象上世北土之形勢矣、玄扈又曰、及五胡之亂、中原生齒凘耗、從晉室而東徙者、謂之僑
人、久則安其土、而樂其生、西北民散、而東南利興、非細故也、考之於晉書、西晉永嘉之後、華轂
頻蒙塵、歷代之帝業、終失其土、於是、東晉始都於建康、夏夷易地、南北隔絶、不通數百年、南
朝之君臣、不能視唐虞之舊域、何暇訪其種藝、宜哉南人之不辨北種也、至南梁陶弘景、始注
本草曰、稷米、人亦不識、書記多云、黍與稷相似、於是始以穄爲稷、以粟別爲一種之穀、分
粟之種類、以爲古之粱、自是爾後、唐宋元明之說本草者、一依弘景、而不省其他、其曰、稷穄也、
黍之不黏者、甚者、至於指蘆穄以爲稷、所謂南人承北音、呼稷爲穄者也、其謬本出於本草
家不主經典、則雖固不足尤、然其說一出、而後說經典者亦輒因本草之謬、復不省農書之說、
有遺惑於後世、不可不察焉、趙宋刑昺爾雅疏曰、粢也稷也粟也、正是一物、而本草、稷米在下
品、別有粟米在中品、又似二物、故先儒甚疑焉、刑昺已知粢稷粟之爲一物、然又引本草者、其
意猶有所不決也、抑趙宋自開闢、而北邊終不統一、徽宗北狩之後、南北更不通猶六朝、是故朱
晦庵詩集傳曰、稷亦穀也、一名穄、似黍而小、或曰粟也、嗚呼、大儒如朱子、而猶不驗於地與物、
則其疑如是、況不及朱子乎、其究學士、而猶至於指蘆穄、以爲黍爲稷、可歎哉、穄之不可

㆒爲㆑稷者、已於㆓穄之條下㆒辨㆑之、其曰㆓蘆穄㆒者、乃高粱也、又有㆓蜀黍蜀秫荻粱木稷之諸名㆒、而其爲㆑物也、非㆑稷亦非㆑黍、別一種之下品、而尤宜㆓磽确之地㆒、其莖稈如㆑杖、高丈餘、似㆓蘆荻㆒而豐脆、穗大而如㆑帚、實圓而似㆑椒、有㆓赤黑二種㆒、雖㆓窮民㆒非㆘可㆓常食㆒者㆖、如今謂㆓之五穀㆒、則殆爲㆓農夫㆒所㆑笑、蜀黍、和名毛呂古志木美（モロコシキミ）夫稷之爲㆑物也、在㆓昔諸夏之地㆒、則爲㆓百穀之主、樹蓺之本㆒、故其名稱殊多矣、他穀者、假㆓稷之名稱㆒、而呼者亦不㆑尠焉、是後世所㆓以稱呼之混殽㆒也、蓋秦漢已來、南方之秔稉入㆓於中國㆒、爲㆓王侯貴人之食㆒、於㆑是疑㆓黍稷、始失㆓其顏㆒、終不㆑能㆑上㆓王侯之堂㆒、下爲㆓民間之食主㆒、況南方偏安之代、則公民無㆑食㆑稷者㆒、是其所以失㆓名實㆒也、大學曰、食而不㆑知㆓其味㆒、而況於㆑不㆑食乎

稗

稗一種之穀、而水陸無㆑別、其種類亦多矣、利用次㆓粟麥㆒者、和名、比衣（ヒエ）

稗國史、神代紀所㆑載、五穀之一種也

稊

稊似㆑稗之穢草、趙岐注㆓孟子㆒、曰㆓荑稗之草㆒、郭璞注㆓爾雅㆒、曰㆓蕛似㆑稗、布㆑地生穢草㆒者、是也、諸書稗與㆓稊稗㆒、混爲㆓一物㆒、故今辨㆑焉、和名、俗云㆓保比衣（ホヒエ）㆒

經典穀名考卷之上終

經典穀名考卷之下

稻

稻大名、黏者曰稌、古者以黏者爲主、故曰稻曰稌、皆其黏者也、蓋諸夏之地、高原乾燥、絕無水田、僅有稻田之名、而徒是謂澤土之卑濕也、故其稱稻者亦至少、唯共祭祀禮食耳、且其黏者、雖美非可常食之物、又其不黏者、味麤而非君子之食、是故祭祀不用、經典無名、其稱稻者、皆陸稻之黏者也、和名、乎加保、又曰乎加保乃毛知以禰

證據

史記夏本紀曰、令益予衆庶、稻可種卑濕、周禮、地官、司徒之職曰、稻人、掌稼下地、澤草所生、種之芒種、小雅白華之詩曰、滮池北流、浸彼稻田、是乃漢書、所謂內史稻田也、(古單曰田、謂稷之田也、故種稻曰稻田、猶後世種麥曰麥田、種豆曰豆田、非水田之謂也、)其曰浸、亦漢書所謂灌浸、而非水耨也、照之漢志、則自可知矣、且古以穀之黏者、爲酒、故內則、有稻醴黍醴粱醴、而無稷醴、蓋曰稻曰稌、本是一物、謂其黏者也、豳風七月之詩、曰、十月穫稻、爲此春酒、周頌豐年之詩曰、豐年多黍多稌、爲酒爲醴、曲禮曰、稻曰嘉蔬、(嘉、嘉其黏也、蔬與疏同、粢食不鑿、故謂之嘉蔬、)爾雅曰、稌稻、許愼說文曰、沛國謂稻爲稬、(稬、南方水稻之黏者、)稴、

稲之不レ黏者、（即謂二陸稲之不レ黏者一、然此名他無レ所レ見）秔、稲之屬也、（秔、南方水稲之不レ黏者、即雖レ不レ黏、而其美優二於陸稲之黏者一、故謂二稲之屬一也）周禮、天官、冢宰之職曰、羞籩之實、糗餌、粉餈、鄭玄注云、稲米黍米所レ爲、合蒸曰レ餌、餅レ之曰レ餈、說文曰、餈、稲餅也、其是斥二黏者一、謂二之稲一也、然而古之稲者、澤土下濕之所レ種、非二水田之稲一、故以二其黏者一爲レ主、猶且不レ及二穛粟之類一、是故儀禮、公食大夫之禮、以レ稲爲二粱之下一、而況於二其不レ黏者一乎、經典無レ稱レ爲之也、論語曰、食二夫稲一、衣二夫錦一、夫者、夫二於再期大祥之祭一也、稍與レ錦者、其祭祀之所レ用、而非下平常所二服食一之物上也、然則其稲亦黏者也、夫稲者、本水穀、故大禹令レ種二之卑濕一、蓋北方之無二水田一、聖人之智非レ不レ至焉、地氣之使レ然也、古有レ言曰、橘踰レ淮而北爲レ枳、何特於レ稲容レ疑乎

正謬

周禮稲人、諸家之解、一是一非、其難レ爲二定準一、因攷二之地利一、私爲二之解一、如レ左、周禮曰、稲人掌レ稼二下地一（下地、卑濕、水草所レ生、而不レ可レ種二黍稷菽麥一之地、鄭玄、謂下以二水澤之地一種レ穀也上者、誤矣、）以レ瀦畜レ水、（謂レ作レ瀦以鍾二卑濕之水於二一處一也、）以レ防止レ水、（種二稲卑濕一、故防二客水一）以レ溝蕩レ水、以レ遂均レ水、以レ列舍レ水、以レ澮寫レ水、以レ涉揚二其芟一作レ田

溝・遂・列・澮皆以去レ水也、非二以貯一レ水也、鄭司農云、以レ列舍レ水者、非二一道以去一レ水也、以二其水寫一故、得下行二其田中一、舉中其芟鉤上也者、是矣、鄭玄、畜二流水一田首受レ水、田尾去レ水等之說、是後世南方水田之法也、以レ是釋二北方古之稲田一者、誤矣

凡稼レ澤、夏以レ水殄レ草而芟荑

澤則謂卑濕也、非衆水所鍾之澤也、將稼下地、則前年夏、貯雨水以死草、秋冬水涸、至春作溝遂列澮、以泄瀉餘水、刈舁所死之腐草、以爲田矣、如是則後世所謂漫散種者可知矣、鄭玄注、是矣、鄭司農以茇爲不下麥、云是刈其禾、於下種麥者、雖水田、亦極良地之事也、以是釋茇蔆者、泥芒種之字之故也、

澤草所生、種之芒種、（澤草、濕草也、芒種謂稻也、鄭司農、以芒種爲稻麥二種者、誤矣）旱暵共其雩斂

旱年則利於下濕、雨多則害於稻田、鄭玄、謂稻急水者也、是知稻之好水、而不知水之害稻田者也

喪事共其葦事、（萑、濕草、以共曰共葦事、稻田之地勢、庶可知也、）又按、史書所載戰國秦漢、有鑿溝渠以行船溉田之事、然唯注塡閼之水、溉舄鹵之地、以爲沃野耳、非爲水田也、故其歌曰、涇水一石、其泥數斗、且溉且糞、長我禾黍、（禾謂稷、即粟也、）蓋古之所謂稻、皆澤土卑濕之所種、而非水田之稻也、西漢之時而猶然、故氾勝之曰、種稻區不欲大、（區種、陸田之事也、）又月令謂之秫稻、內則、謂之陸稻、是皆對南方之秔之言、而秦漢已來之稱也、又鄭司農、注周禮云、稌秔也、羅願爾雅翼曰、稻米如霜者、朱晦庵詩集傳曰、稻即今南方所食稻米、水生而色白者也、是皆南方之水稻、而非經典所謂稻也、羅願又以穀芒之有無（稻之刺曰芒、麥之刺曰穬）爲辨秔稉之明驗、以解周禮之芒種者、不智之甚也、顏師古漢書東方朔傳、注曰、稻有芒之穀總稱也、秔其不黏者、可謂卓見矣

秔

秔南方所種、水田之稻也、其黏者謂稬、（稬、或作糯、俗作穤、其同、）不黏者謂秔、（秔或作粳、俗作稉、其同、）秔稉南方之方言、楚謂乳穀、謂虎於菟、其種固與稻無別、唯水種、則其差出於百穀之上、雖然北方諸夏之地、則自古無水田、故以稷爲百穀之主、爲公民之常食、謹惟我邦、神明扶持、海內之稻田、皆水種、以稻爲百穀之主、爲公民之常食、其他百穀雖無所闕、亦以給稻之不及耳、故與經典所謂稷、其用不同、而反與稷同其用者、蓋以其所生之地、自有水陸之別也、秔和名、伊禰、稉和名、毛知伊禰

證據

經典無秔、秔字始見西漢之書矣、又說文曰、沛國謂稻爲稬、（北方之稻、以黏者爲主、故單曰稻、卽其黏者也、）秔稻之屬也（南方之秔、以不黏者爲主、故單曰秔、則不黏者也、是以[illegible]秔稻之屬也、）抑江南、則古夷蠻之地、春秋已來、雖通於中國、各自爲國、戰爭攻伐、無歲而止矣、何有以其資糧、轉輸諸他國之理乎、秦漢已前、北方無秔米者、斷然明矣、由是觀、則秔米之入於中國也、恐秦漢統一之後矣、然自江南至京師、山河數千里、漕路多梗、風波覆溺、運米之至、十亡七八、故有用斗錢運斗米之語也、其漕運轉輸之難、歷史所載、詳矣、是故北方此物至少、雖後世唯富貴者食之耳、貧賤者絕不得食秔米也、而況於數千歲之古乎、經典所謂稻者、是澤土卑濕之所種、而非南方水田之秔者、的然明矣

正謬

古諸夏之地、無水稻、故租稅之法、秩祿之制、及民食軍糧、漕運轉輸、盡皆以粟爲總制、故粟之名稱殊多矣、他穀別無禾苗穀米之稱、其呼之、則必借粟之名稱、配其名而呼之也、猶此方呼稻米、則單謂之米、呼粟、則謂之粟米、蓋秦漢已來、南方之秔稉、始入於京師、而中國固其物無、則其名無、故因南方之方言、而呼之爲秔爲稉耳、其他無有別稱也、是故自江南至京師、漕運轉輸之間、有槩稱之粟米、猶曰穀米、然直指其物、則謂之秔、又曰秔米也、讀歷史者、不可不察焉、又說文曰、稻一秙、爲粟二十斗、禾黍一秙、爲粟十六斗大半斗、是爲釋其事實、假稷在穀之名、而記之者也、非黍稻在穀之通稱、此等皆東漢已後之言也、小雅黃鳥之詩首章曰、無啄我粟、次章曰、無啄我粱、卒章曰、無啄我黍、可以見古名之正矣、魏晉已來、愈下愈謬、北魏賈思勰、著齊民要術、以言稼穡之事、其於黍稷也、名物精覈可從矣、然而又於稻、則猶南人之於黍稷、大有不然者也、意此時南北不通、故互於其所不目驗之物、則大有謬矣、不可不察焉、自是爾後、趙宋羅願、著爾雅翼、曰古者不以粟爲穀之名、但米之有孚殼者、皆稱粟、今質諸詩書、其誤不辨而明矣、非唯是爾、以秫爲黍、以穄爲稷、以粟爲粱、以小麥爲秬秠之秠、以秔爲稻粱之稻之類、其誤不暇舉而辨焉、按、羅亦南人、不知北方也、是故不辨南北土地之形勢、則不可以讀古書也、又明徐光啓、農政全書、抄出齊民要術者多矣、其以秔爲古之稻、以稉爲秫稻、（月令秫稻、則陸稻也、）以古之稻爲旱稻之屬、是皆要術之誤也、又趙宋之時、取古

城之稻種、而散之於民間、（出于國朝會要）明徐獻忠曰、往時宋眞宗、因兩浙之旱荒、命於福建、取占城稻三萬斛、散之民、即今之旱稻也、蓋兩浙之間、自古水田多矣、且占稻者非佳穀、而遠取之於占城者、以其熟之早也、故稱之早稻、後世稱之旱稻者、恐早旱二字、相似之誤矣、（自古稻有早晩、占稻早出其上）方今僻地之民、希有種占稻於水田者、無不成熟矣、因問之於老農、謂占稻不宜食、偶有種之者、唯取其熟早而續食耳、且占稻者、不擇瘠鹵、種之水田、則堪其濕冷、種之高仰、則堪其燥熱、（地雖高、而仰則下濕、）由之觀、則江南舊澤國、故雖種之陸田、而理當成熟、彼曰高原種之如種麥者、豈其然乎、雖不視彼土、而吾不信也、彼北之不敢、亦宜哉、又全書中、玄扈先生之所見甚高、（先生不知何人、）是以於要術之旱稻、大爲疑矣、然未察賈氏之誤、故不能辨要術之所謂旱稻、則爲古之所謂稻粱之稻、惜哉、夫稻者本水穀、故諸夏之地、雖無水田、聖人猶使民種稻於卑濕、然則謂稻種有水陸之別者、非通論也

附火耕水耨之辨

史記平準書、載武帝詔曰、江南火耕水耨、漢書亦有此語、其應劭注云、燒草下水種稻、草與稻並生、高七八寸、因悉芟去、復下水灌之、草死獨稻長、所謂火耕水耨也、今驗之水田、所謂火耕者、謂去水乾田而耕之也、水耨者、謂放水植秧而耨之也、蓋史遷足跡徧天下、文章貫古今

僅以二四言一、說二盡江南萬頃水田之形勢一矣、應劭北人、不レ知二南方之形勢一、誤二火耕一、爲二火田一、且其水耨之解、萬一無二此理一也、又晉書杜預疏中、引二此語一、雖下依レ舊以二火耕一爲中火田上、而元凱業已爲二鎭南一、熟知二江南之風土一、故其言曰、此事唯可レ施下於新田草萊、與二百姓居一相離絕者上耳、蓋火田者、由地開墾之事、火耕者、水田平常之業、火田火耕、不レ可レ不二辨別一焉、又田獵之火田者、與二開墾之火田一、大異矣

粱

粱稷之別種而黏者也、古者謂二之粱一、又曰二黃粱一曰二青粱一、秦漢已來、謂二之秫一、又曰二秫粟一、本是一物、而古今異二其名一耳、古之粱、則今之秫、而黍稷中之最美者也、和名、毛知阿波（モチアハ）

穈芑

詩曰、維穈維芑、爾雅曰、穈赤苗、芑白苗、按穈芑者、粱之苗名也、粱之苗色、不レ出二於赤白二色之外一、謂二之嘉種一者、以二其黏一也、非三外レ粱而別有二穈芑一也、且苗帶二赤色一者、其穀黑而米黃、在二秫粟之中一、殊爲二之上種一

證據

氾勝之曰、粱是秫粟也、按、氾勝之、西漢人、爲二輕車使者一、敎二田三輔一者、漢書藝文志、載二氾勝之

十八篇、而其書亡失不傳、散見於諸書者、其言多不謬也、又按、粱之名、西漢之時已不明、故氾勝之爲此解者也、至漢季、則粱之名益不明、雖然鄭司農周禮九穀之注、牧秫者、可謂得其實矣、又趙岐孟子章句曰、膏粱、細粱如膏者、是可謂得其名實之正矣、謂之細粱者、以別於時俗之所謂粱也、近者、明李時珍、著本草綱目、雖守其舊株、分粱秫以爲二條、而亦於秫之下、曰秫即粱米、粟米之黏者、反可謂之可矣

正謬

經典、有粱而無秫、秫字、始見於爾雅・考工記・禮記、爾雅曰、衆秫、而穀名曰衆者、經典無所見、按、衆粱、古音有通、恐衆秫者、粱秫之誤、亦不可知焉、考工記曰、鍾氏、染羽以朱湛丹秫、按、丹秫、則秫粟之屬、而赤者也、唯取於染羽耳、禮記內則、有稻黍粱秫之語、而經典常稱黍稷稻粱、未見粱秫並稱者、恐傳者之誤矣、蓋秦漢已來、秫之名顯、而粱之名隱矣、猶粟之名盛、而稷之名衰矣、故至漢季、則人不知粱之爲何物、雖學士猶疑之、舍秫而別求古之粱、是其解所以不明也、按、許愼說文、解秫字曰、稷之黏者也、解粱字曰、米名也、而鴇羽之詩、曰不能蓺稻粱、則不啻米之名也、又鄭司農周禮九穀之注、牧秫者、從當時之稱也、鄭玄改之、曰無秫而有粱者、正其名、反謬其實也、東晉郭璞注爾雅、於衆秫則曰、黏粟也、於赤苗白苗則曰、今之赤白粱粟、皆好穀也、是則漢季已來、人不知粱、舍秫而別求粱者也、南粱陶弘景注本

莫、分粟之種類、以牙頭色異者、當古之粱、反以秫粟、爲非古之粱、自是爾後、諸家之解粱者、皆以粟中大穗長毛、其米黃白靑者爲粱、今質之老農、其米有黃白靑者、粟之常也、大穗長毛者、亦粟也、其謂秫者、亦粟也、然粟中除秫、則其他如大穗長毛、假使少有優劣、均之則皆粟也、非可比稻者、由之見、則後世穿鑿粟之種類、以爲粱者、徒論其優劣耳、非古之所謂粱也、謹按、稻粱並稱者、經典之常語、況在儀禮、則粱爲稻之上、（稻次粱者、於稻之條下已辨之矣、）其所以登粱爲禮食之最上者、粱則秫粟、以在古諸夏之地、則百穀之中、無及於粱之美者也、後世所謂大穗長毛者、則粟中之上種也、恐古祭祀禮食所用之稷、當謂此等之粟、其非粱者斷然明矣、若從後世之說、則大禹后稷、爲不知秫之美也、其誣聖人、不亦已甚乎、今擇於衆說、而舍多取寡者、爲之也

飯粱考

儀禮、公食大夫之禮曰、宰夫授公飯粱、公設之于湆西、（湆音泣、鄭玄曰、羮汁也、）賓北面辭、坐遷之、今試以秫粟、如常使炊之、皆黏合不可食、因意往有開炊秔米（此土謂之稻米、）以爲貴人之飯法矣、又試以其法使炊之、恰似炊秔米之飯矣、以是見、今炊秔米以爲貴人之飯法、恐是古炊飯粱之遺法歟、亦不可知焉

菽

菽、荚穀之總名、古者謂二之菽一、後世謂二之豆一、藿、菽之少也、其種類甚多、而大豆爲二之長一、故單曰レ菽曰レ豆、則皆大豆也、和名、萬米(マメ)

證據

說文曰、尗豆也、藿、尗之少也、荅、小尗也

正謬

菽大名、藿、菽之未レ熟也、古者不三以レ豆爲二穀之名一、小宛之詩曰、中原有レ菽、庶民采レ之。毛傳云、菽藿也、白駒之詩曰、皎皎白駒、食二我場藿一、毛傳云、藿猶レ苗也、儀禮曰、牛藿、鄭玄注云、藿豆葉、共是一偏之說也、不レ可三以爲二定訓一矣、說文、謂二藿尗之少也一者、可レ謂レ得二其解一矣、豳風七月之詩曰、亨二葵及菽一者、是謂レ藿也、而謂二之菽一者、以二其大名一也、又如二藜藿之羹一、舊解皆以レ藿爲二豆葉一、今驗レ之、豆葉有レ毛不レ可レ食、意藜藿之藿、謂下衆豆之少、而荚實可二幷食一者上也、故其苗葉亦謂二之藿一

附荏菽之辨

生民之詩曰、荏菽旆旆、毛傳依二爾雅一、云二荏菽戎菽也一者、恐謬矣、鄭箋云、大豆也、朱晦庵集傳依レ之、共是矣、而亦荏字爲二贅瘤一、因攷二之時物一、荏菽自是二物、荏則荏草、苗葉似レ蘇、而與レ蘇異、其

實可壓油點燈者、菽則大豆也、荏菽同時茂盛、故曰荏菽旆旆、蓋此句與下麻麥幪幪之句隔對、麻可爲枲制衣者、麥則大麥也、麻麥亦同時茂盛、故曰麻麥幪幪、明何楷著詩經世本古義、始辨荏菽非一物、而其說未盡、因今審辨焉

附瓜瓞之辨

大雅緜之詩曰、緜緜瓜瓞、民之初生、自土沮漆、毛傳云、緜緜不絶貌、瓜紹也、瓞瓝也、鄭箋云、瓜之本實、繼先歲之瓜必小、狀似瓝、故謂之瓞、其是因爾雅也、而其解不明、孔疏更屬蛇足、有害於詩之義、不可從焉、謹按、緜緜瓜瓞之一句、此詩一篇之綱領、緜緜謂蔓延茂盛也、瓜瓞一物、謂瓜之蔓也、蓋此詩比瓜之蔓延茂盛、初自生一莖、而與周之邦國盛大、初自土沮漆也、因考之、爾雅曰、瓝九葉、郭璞云、今江東有草、五葉共叢生一莖、俗因名爲五葉、即此類也、是未審其物、強爲之解者也、爾雅又曰、瓞瓝、其紹瓞、郭璞云、俗呼瓝瓜爲瓞、紹者、瓜蔓緒亦著子、但小如瓝、是反依詩箋、而少變文者也、然不協於其實、則難爲據、蓋九葉之不可解也、久矣、今考之典籍、古有九糾通用、恐九葉則糾葉也矣、凡瓜苗之蔓生、其莖必有節、而出枝葉花實、其節又別出一鬚、糾結棚木、以上於棚、而蔓延茂盛者也、所謂九葉也者、此葉根之鬚、而瓝則其出鬚之節也矣、又所謂瓞瓝、其紹瓞者、瓞則瓜瓞、而謂瓜之蔓也、已曰瓞瓝、則

瓝亦瓜之蔓也、曰瓞、自是一物、唯因莖與節、而異其名耳、紹續也、謂瓜之莖節紹續、而蔓延茂盛也、非謂瓜實之大小也、且瓝與紹、則不與於詩之義、雖然爾雅、注家所據、故謬辨之耳、蓋緜之詩、及生民之詩、共曰瓜瓞者、不過謂瓜之蔓延茂盛也、其蔓延者不絕、茂盛者多實、不辨而明矣、諸家之解、皆以瓞瓜爲瓜實之大小、故其說梗澀而不通也

麥

麥總名、古者小麥謂之來、大麥謂之牟、又謂之麰麥、而單曰麥、則古今皆大麥也、和名、牟岐

證據

周頌思文之詩曰、貽我來牟、毛傳云、牟麥也、廣雅曰、麳小麥、麰大麥、朱晦庵集傳由之、趙岐孟子注曰、麰麥大麥也、愚按、曰牟曰麰麥、曰大麥、共對麳麥小麥之稱也

正謬

詩之來牟、鄭玄以爲一物、云赤烏以牟麥來、說文及爾雅翼從焉、其說果是、則可謂來字錯畓、且詩之所言、則后稷之功也、箋之所言、則武王之事也、其誤不辨而明矣
又有曰穬麥、卽謂大麥也、穬麥刺、大麥去稾、而猶有刺、故曰穬麥、對稞麥之稱也、又稞麥、大麥之別種、而天性脫殼者、靑稞出於靑州者、說文曰、稞無皮殼、是也、春麥、春種而與宿

麥一同時熟者、宿麥、對二春麥一之稱、卽謂二秋種之大小麥一也

菰

菰、水草之實、蔣、菰之草名也、刈レ蔣曰レ芻、乾レ芻曰レ茭、芻茭以食二牛馬一者也、蔣之秀而實曰二彫胡一、其米謂二之菰一、和名、古毛、俗云二末古毛一

證據

說文曰、蔣菰蔣也、芻刈草也、茭乾芻也、菰彫菰、一名蔣、白駒之詩曰、生芻一束、其人如レ玉、板之詩曰、先民有レ言、詢二于芻蕘一、尙書費誓曰、峙二乃芻茭一、孔傳云、積二芻茭一供二軍牛馬一、周禮天官食醫曰、魚宜レ菰、菰則春官小宗伯、所レ謂六齍之一也、蔣草有レ結レ實、有レ不レ結、爾雅曰、齧彫蓬、薦黍蓬、孫炎注曰、彫蓬卽米茭也、黍蓬卽茭之不レ結レ實者、惟堪レ爲レ薦、此方所レ生者、多不レ結レ實也、故曰レ薦、薦和名、古毛

文政十年丁亥十月

男莊左衞門文濟校刊

經典穀名考卷之下終

附農政全書穀部目錄

卷之上

穀名攷　黍　穄　稷

稻　粱　粱秫

蜀秫　稗

卷之下

大豆　小豆（アヅキ）　菉豆（ヤヘナリ／エンドウ）

赤豆（アカ天デヨク）　胡豆（ソラマメ／アチラマメ）　豌豆（ノラマメ）

豇豆（サヽゲ／フヂノミサヽゲ）　藊豆（クネマメ）　刀豆（ナタマメ）

黎豆（ハツシヨウ／カラスマメ）　大麥　小麥

雀麥（ムギクサ）　蕎麥　胡麻

附農政全書穀部目錄畢

農政全書卷之二十五

特進光祿大夫太子太保禮部尙書兼文淵閣大學士贈少保謚文定上海徐光啓纂輯
欽差總理糧儲提督軍務巡撫應天等處地方都察院右僉都御史東陽張國維鑒定
直隸松江府知府穀城方岳貢同鑒

樹藝

穀部上

王禎百穀序曰、嘗謂上古之時、人食鳥獸血肉以爲食、至神農氏作、始嘗草別穀、而後生民粒食賴焉、物理論曰、百穀者、三穀各二十種、爲六十種、蔬菓各二十種、共爲百穀、（穀總名、百猶百官百姓之百、言物之多也）注云、梁者、黍稷之總名、稻者、溉種之總名、菽者、衆豆之總名、三穀各二十種爲六十、蔬菓之類、所以助穀之不及也、夫蔬熟、平時可以助食、儉歲可以救飢、其菓實、熟則可食、乾則可脯、豐歉皆可充飢、古人所謂木奴千無凶年、非虛語也、雖曰種各有二十、殆難枚擧、今故總爲編錄、其陂澤之產、園野之材、與夫雜物品類、上以助百穀之闕、下以補諸物之遺、條列而詳其之、庶幾覽者擇取而備用焉（夫蔬以下謂全書自廿七卷至卅卷之樹藝也）

穀名攷、五谷、禾・麻（可換麻以稲）粟・麥・豆也、周禮註、又以麻・黍・稷・麥・豆爲五穀、六谷者、穀黍・稷・稲、梁・麥・菰、八谷者、黍・稷・稲・梁・禾・麻・菽・麥、九谷者、穀黍・稷・秫・稲・麻・大小豆・大小麥、鄭玄註、又云、九穀無秫大麥、而有梁菰、（云八穀者、妄說九穀麻秫宜無不可無大麥）

黍（黍無一稃二米者、秠宜當白黍）爾雅曰、秬・黑黍、秠・一稃二米

郭璞曰、秠、亦黑黍也、說文曰、黍、可爲酒、從禾入水爲意、氾勝之曰、黍著也、當著而生、著後乃成也、雜陰陽書曰、黍生于榆、六十日秀、秀後六十日成、王禎曰、詩云、維秬維秠・秬・黑黍也、又曰、秬鬯一卣、此言黍之爲酒、尙矣、今有赤黍、米黃而黏、可蒸食、白黍釀酒、亞於糯秫、又北地遠處、惟、黍可生、其莖穗低小、可以釀酒、又可作饘粥、黏滑而甘、此黍之有補于艱食之地也、凡祭祀以之爲上盛、貴其色味之美也、廣志、有赤黍・（今有下、赤黍當作黑黍、說文曰、黍禾屬而黏者也、）白黍・黃黍・大黑黍・牛黍・燕頷・馬革・驢皮・稲尾・濕屯・黃田・堰云・鶩鴿之名

齊民要術種黍法曰、凡黍穄田、新開荒爲上、大豆底爲次、穀底爲下、地必欲熟、（再轉乃佳、若春夏耕者、下種後、再勞爲良、）一畝用子四升、（彼邦田法、升法歷代不同、又與此邦大異）三月上旬種者爲上時、四月上旬爲中時、五月上旬爲下時、夏種黍穄、與植穀同時、非夏者、大率以椹赤爲候、燥濕候黃場、種訖不曳撻、常記、十月十一月十二月凍樹日、種之萬不失一

凍樹者、凝霜封著木條也、假令月三日凍樹、還以月三日種黍、他皆倣此、十月凍樹、宜早

黍、十一月凍樹、宜中黍、十二月凍樹、宜晩黍、若從十月至正月、皆凍樹者、早晩黍、悉宜也

苗生隴平、卽宜耙勞、鋤三遍乃止、鋒而不耩（苗晩耩、卽多折也）刈穄欲早、刈黍欲晩、（穄晩多零落、黍早、米不成、諺曰穄靑喉、黍折頭）皆卽濕踐之、久積則浥鬱、操踐多兜牟、穄踐訖、卽蒸而裛之、（不蒸者、難春米碎、至春又土臭、蒸則易春米堅、香氣經夏不歇）黍宜曬之令燥、（濕聚則鬱）凡黍粘者薄收、穄味美者、亦收薄難春、孝經援神契曰、黑墳宜黍麥、尙書考靈曜云、夏火星昏中、可以種黍、氾勝之書曰、先夏至二十日、此時有雨、彊土可種黍、一畝三升、黍心未生、雨灌其心、心傷無實、凡種黍覆土鋤治、皆如禾法、欲疎於禾、（疎〔註疎者下、齊氏要術、有下氾氏曰欲疎於禾一其義未聞之十一字上〕黍雖科而米黃、又多減及空、令穊雖不科、而米白且均、熟不減、更勝疎者、）崔氏曰、四月蠶入簇、時雨降、可種黍禾、夏至先後、各二日可種黍、蟲食李者、黍貴也

稷、爾雅曰、粢、稷也

禮記、祭宗廟、稷曰明粢、南人承北音、呼稷爲穄、謂其米可供祭也、陶弘景曰、稷與黍相似、許愼曰、稷五谷之長、田正也、此乃官名、非谷號、先儒、又以稷爲粟類也、賈思勰曰、穀者總名、非止爲粟也、然今人專以稷爲穀、望俗名之耳、郭璞曰、今江東呼粟爲粢、孫炎曰、稷、粟也、雜陰陽書曰、稷生于棗或楊、九十日秀、秀後六十日成、春秋說題曰、粟之爲言續也、粟五變、一變而以陽生爲苗、二變而禾秀爲禾、三變而粲然爲之粟、四變入臼、米出甲、五變而蒸飯可食、宋均注云、陽以一立爲法、故粟積大一分、穗長一尺、文以七列、精以五立、西者金所

立、米者陽精、故西字米而爲粟、廣志曰、有赤粟白莖、有黑格雀粟、有張公斑、有含黃、有蒼背稷、有雪白粟、亦名白粟、又有白藍下・竹頭青・白逯麥擢。石精・狗蹯之名種云、賈思勰曰、〔日朱間脫有字〕朱穀・高居・黃・劉猪獬・道愍黃・唔穀黃・雀懊黃・續命黃・百日糧、有起婦黃・辱稻糧・奴子場・音加支穀・焦金黃・鷂鳴・合履。今一名麥爭場、此十四種、早熟耐旱、免蟲、聒谷黃・辱稻糧・二種味美、今墮車。下馬看。白羣羊・懸蛇。赤尾龍・虎黃・雀民泰・馬洩韁・劉猪赤・李谷黃・河摩糧・東海黃・石騍歲・青莖青。黑好黃。陌南木・隈隄黃・宋冀癡・指張黃・兎肱青。惠日黃・寫風赤。一睍黃・山鹺頓黨黃・此二十四種。穗皆有毛、耐風、免雀暴、一睍黃一種易舂、寶珠黃・俗得白・張鄰黃・白鹺谷。鉤干黃。張蟻白。耿虎黃・都奴赤。茄蘆黃・熏猪赤。魏爽黃・白莖青・竹根青。調母粱・磊碨黃・劉沙白・惛延黃・赤粱穀。靈忽黃・獺尾青。續得黃・得客青・孫延黃・猪矢青・煙熏黃。樂婢青。平壽黃・鹿橛白・鹺折作・黃穇穇。阿居黃・赤巴粱・鹿蹄黃・鉞狗倉・可憐黃・米谷鹿・橛青。阿返、此三十八種中、租大穀。白鹺穀・調母粱。三種味美。擇谷青・阿居黃・猪矢青・有三種味惡・黃穇穇・樂婢青。二種易舂、竹葉青・石柳門・竹根青、一名胡谷・水黑穀・忽泥青・衝天棒・雉子青。鵰脚穀・鴈頭青。攬堆黃・青子規、此十種晩熟耐蟲、災則盡矣、玄扈先生曰、古所謂黍、今亦稱黍、或稱黃米、稌則黍之別種也、今人以音近誤稌爲稷、古所謂稷、通稱爲穀、或稱粟、粱與秫、則稷之別種也、今人亦槩稱爲穀、物之廣生而利用者、

皆以其公名名之、如古今皆稱稷爲穀也、晋人稱蔓菁爲菜、呉人稱棗爲菓、稱陵苕爲草、洛陽稱牡丹爲花、又曰、穄之苗葉莖穗與黍不異、經典初不及穄、後世農書、輙以黍穄並稱、故穄者、黍之別種也、郭璞注、爾雅虋赤粱粟、芑白粱粟、皆好穀也、言粱又言粟言穀、故粱者、稷之別種也、廣志曰、秫黏粟、說文曰、秫稷之黏者、故秫亦稷之別種也、凡黏穀皆可爲酒、秠黍黏、故古人以爲酒秫者、黏稷、亦可爲酒〔此說古今之確論、惜哉以粱秫爲二物者、從後世之誤也〕

齊民要術種稷法曰、凡穀、成熟有早晚、苗稈有高下、收實有多少、質性有强弱、米味有美惡、粒實有息耗〔早熟者、苗短而收多、晩熟者、苗長而收少、强苗者短、黃穀之屬是也、弱苗者長、青白黑者是也、收少者美而耗、收多者惡而息也〕地勢有良薄〔良田宜種晩、薄田宜種早、良田非獨宜晩、早亦無害、薄地宜早、晩必不成實也〕山澤有異宜〔山田種强苗、以避風霜、澤田種弱苗、以求華實也〕順天時量地利、則用力少而成功多、任情返道、勞而無獲〔入泉伐木、登山求魚、手必虛、迎風散水、逆坂走丸、其勢難〕凡穀田、菉豆・小豆底爲上、麻黍・胡麻次之、蕪菁・大豆爲下、良地一畝用子五升、薄地三升、穀田必須歲易、二月三月種者爲植禾、四月五月種者爲穉禾、二月上旬、及麻菩〔麻菩楊他所無所見、頃聞寒地春生曰柳草者、其花頗美、恐是矣〕楊生種者爲上時、三月上旬、及淸明節、桃始華爲中時、四月上旬、及棗葉生、桑花落爲下時、歲道宜晩者、五月六月初亦得、凡春種欲深、宜曳重撻、夏種欲淺、直置自生

春風冷生遲、不曳撻則根虛、雖生輙死、夏氣熱而生速、曳撻遇雨、必堅垎其澤、澤多者、或亦不須撻、必欲撻者、宜須待白背、濕撻令地堅硬故也

凡種レ穀雨後爲レ佳、遇二小雨一宜二接レ濕種一、遇二大雨一待二薉生一

小雨不レ接レ濕、無二以生二禾苗一、大雨不レ待二白背一、濕輾則令二苗瘦一、薉若盛者、先鋤一遍、然後納レ種、乃佳也

春若遇レ旱、秋耕之地、得レ仰レ壟待レ雨、夏若仰レ壟、匪二直盪汰不一レ生、兼與二草薉一俱出、凡田欲二早晚相

雜、有レ閏之歲、節氣近レ後宜二晚田一、然大率欲レ早、早田倍二多於晚一

早田淨而易レ治、晚者蕪薉難レ出、其收多少、從二歲所一レ宜、非レ關二早晚一、然早穀皮薄、米實而多、晚

穀皮厚、米少而虛也、（北方地寒、故不レ宜二晚穀一）

凡五穀唯小鋤爲レ良、（小鋤者、非二直省一レ功、穀亦倍勝、大鋤者、草根繁茂、用レ功多而收益少）良田率一尺留二一科一

劉章耕田曰、深耕穊種、立レ苗欲レ疏、非二其類一者、鋤而去レ之、諺云、迴レ車倒レ馬、擲レ衣不レ下、皆

十石而收、玄扈先生曰、言二初則迴一レ車倒レ馬、後則擲レ衣不レ下、所レ謂其生欲レ疎、其熟欲二相扶一也

氾勝之書曰、燒黍稷則害瓠、（史記曰、陰陽之家、拘而多レ忌、正可レ知二棲禁一、不レ可三委曲從二之、諺曰、以レ時及レ澤、爲二上策一也）

尙書考靈曜曰、春鳥星昏中、以種レ稷、（鳥朱鳥、鶉火也）秋虛星昏中以收斂（虛玄枵也）

稻、爾雅曰、稌稻（古曰レ稻者、陸稻之粘者也、此條古今南北雜出見者、宜二分別一）

郭璞注曰、沛國、今呼レ稻爲レ稌、郭義恭廣志云、有二虎掌稻・紫芒稻・赤芒稻一白米、（白米恐米白誤）南方

有二蟬鳴稻一、七月熟、有二蓋下白稻一、正月種、五月穫、穫其莖根復生、九月復熟、靑芋稻、六月熟、累

子稻・白漢稻七月熟、此三稻、大而且長、稉有二烏稉・黑穬・靑函・白夏之名一、說文曰、穬稻紫莖不

黏者、稉稻屬、周處風土記曰、穬稻紫莖、穛稻之青穗、米皆青白也、字林曰、秜劝稻、今年死、來年自生曰秜、案、今世有黃稻・黃陸稻・青稗稻・豫章青稻・尾紫稻・青杖稻・飛青稻・赤甲稻・烏陵稻・大香稻・小香稻・白地稻・孤灰稻、一年再熟・有秫稻、秫稻米、一名糯米、俗云亂米非也、有九格秫・雉木秫・大黃秫・常秫・馬身秫・長江秫・惠成秫・黃滿秫・方滿秫・虎皮秫・會稽秫、皆米也、楊泉物理論曰、稻者、溉種之總名、李時珍曰、稻有水旱二種、南方土下塗泥多、宜水稻、北方地平、唯澤土、宜旱稻、古者唯下種、成畦、故祭祀謂之嘉蔬、今皆拔秧、栽插矣、其種近百、其穀之禿芒長短、大細與米之赤白・紫烏・堅鬆・香否、亦百不同也、雜陰陽書曰、稻生于柳、或楊、八十日秀、秀後七十日成、黃省曾理生玉鏡曰、稻之粒、其白如霜、其性如水、說文謂之稴、沛國、謂之稉、以黏者謂之糯、亦謂之秫、以不黏者謂之秔、亦謂之稉、故氾勝之云、三月而種秔、四月而種秫、然皆謂之稻、魯論之食夫稻、稉也〔稉糯同字、秔稉亦同字、秫非稻〕月令之秫稻、糯也、糯無芒、稉有芒、稉之小者、謂之秈、秈之熟也早、故曰早稻、稉之熟也晚、故曰晚稻、京口大稻謂之稉、小稻謂之秈、其粒細長而白、味甘而香、九月而熟、是謂稻之上品、曰箭子、其粒大而芒紅、皮赤、五月而種、九月而熟、謂之紅蓮、其粒尖、色紅而性硬、四月而種、七月熟、曰古城稻、是惟高仰之所種、松江謂之赤米、乃穀之下品、其粒長而色斑、五月而種、九月而熟、松江謂之勝紅蓮、性硬而皮莖俱白、謂之穲種稻、其粒大色白、稃軟而有芒、謂之雪裏揀、其粒白、無芒而

稃矮、五月而種、九月而熟、謂二之師姑秔一、湖州錄云、言二其無一レ芒也、四明謂二之矮白一レ、其粒赤而稃
芒白、五月初而種、八月而熟、謂二之早白稻一、松江謂二之小白一、四明謂二之細白一、九月而熟、謂二之晚
白一、又謂二蘆花白一、松江謂二之大白一レ、其三月而種、六月而熟、謂二之麥爭場一レ、其再蒔而晚熟者、謂二之
烏口稻一、在二松江一、色黑而能二水與一下寒、又謂二之冷水結一、是爲二稻之下品一レ、其粒白而大、四月而種、八
月而熟、謂二之中秋稻一、在二松江一、八月望而熟者、謂二之早中秋一、又謂二之閃西風一レ、其粒白而穀紫、五月
而種、九月而熟、謂二之紫芒稻一、其秀最易、謂二之下馬看一、又謂二之三朝齊一、湖州錄云、言二其齊熟一
也、其在二松江一、粒小而性柔、有二紅芒・白芒之等一、七月而熟、曰二香秔一、其粒小色斑、以二三五十粒一、入二他
米數升一、炊レ之芬芳馨美者、謂二之香子一、又謂二之香䆉一レ、其粒長而釀レ酒倍多者、謂二之金釵糯一、其色白
而性軟、五月而種、十月而熟、曰二羊脂糯一レ、其芒長而穀多白斑、五月而種、九月而熟、謂二之胭脂
糯一、太平謂二之硃砂糯一レ、其白斑五月而種、十月而熟、謂二之虎皮糯一、太平又云二厚稃紅一レ、黑斑而芒、其
粒最長、白稃而有レ芒、四月而種、七月而熟、謂二之趕陳糯一、太平謂二之趕不着一、亦謂二之秈糯一レ、其粒
大而色白、四月而種、九月而熟、謂二之矮糯一レ、其稃黄而大、亦已熟而稃微青、布宜二良田一、四月而種、
九月而熟、謂二之青稈糯一レ、其粒大而色白、芒長而熟最早、其色易レ變、而釀レ酒最佳、謂二之蘆黄糯一、湖
州謂之泥裏變一、言二其不下待二日之曬一上也、レ其粒圓白而稃黄、大暑可レ刈、其色難レ變、不レ宜レ於二釀酒一、
謂二之秋風糯一、可二以代レ粳而輸下租、又謂二之瞞官糯一、松江謂二之冷粒糯一レ、其不レ耐二風水一、四月而種、

八月而熟、謂之小娘糯、譬閨女然也、其在湖州、色烏而香者、謂之烏香糯、其稈挺而什者、謂之鐵粳糯、芒如馬鬃、而色赤者、謂之赤馬鬃糯、其粒小而色白、四月而種、六月而熟、謂之六十日稻、又遲者、謂之八十日稻、又遲者、謂之百日赤、而毘陵小稻之種、亦有六十日秈・八十日秈・百日秈之品、而皆自占城來、寔賴水旱而成實、作飯則差硬、宋氏使占城、珍寶易之、以給於民者、在太平、六十日秈、謂之拖犂歸、有赤紅秈、有百日秈、俱白稃而無芒、或七月或八月而熟、其味白淡而紅甘、在閩、無芒而粒細、有六十日可穫者、有百日可穫者、皆曰占城稻、其已刈而根復發苗、再實者、謂之再熟稻、亦謂之再撩、其在湖州、一穗而三百餘粒者、謂之三穗子、周官曰、稻人、掌稼下地、以瀦蓄水、以防止水、以溝蕩水、以遂均水、以列舍水、以澮寫水、以涉揚其芟作田、凡稼澤、夏以水殄草、而芟夷之、澤草所生、種之芒種、玄扈先生曰、稻田用水、隨地隨時、不拘一法、括之以兩言、曰、蓄與洩而已、周禮稻人職曰、以瀦蓄水、以防止水、皆言蓄也、禹之陂九澤、亦蓄也、以澮寫水、言洩也、禹之決九川、亦洩也、以溝蕩水、以遂均水、以列舍水者、上源所蓄、釃諸田間也、禹盡力溝洫、暨稷播、奏庶艱食、則用水之效也、亢倉子曰、得時之稻、莖葆長稠、穗如馬尾、失時之稻、纖莖而不滋、厚糠而菑死、又曰、樹肥無使扶疏、樹磽不欲專生而獨居、肥而扶疏則多秕、磽而專居則多死、孝經援神契曰、汙泉宜稻

崔寔曰、種レ稻美田欲レ稀

氾勝之書曰、種レ稻、春凍解、耕反ニ其土一種レ稻、區不レ欲レ大、大則水深淺不レ適、冬至後一百一十日、可レ種レ稻、稻地美、用レ種畝四升、始種レ稻欲レ濕、濕者缺ニ其塍一、令ニ水道相直一、夏至後大熱、令ニ水道錯一

齊民要術種稻法曰、稻無レ所レ緣、唯歲易爲レ良、選レ地欲レ近ニ上流一地無ニ良薄一、水淸則稻美也、〔水淸則稻美者、謂ニ河水一而言、〕玄扈先生曰、水田之處、不レ在ニ水原一、則在ニ水委一、原欲レ近レ泉、委欲レ近レ渚、非レ泉非レ渚、則於ニ溪澗江河、長流不レ竭之處一

三月種者爲ニ上時一、四月上旬爲ニ中時一、中旬爲ニ下時一、先放レ水十日、後曳ニ陸軸一十遍、〔遍數唯多爲レ良〕地既熟、淘ニ淨種子一、〔浮者不レ去、秋則生レ秕、玄扈先生曰、凡種子皆宜レ淘ニ去浮者一、穀浮者秕、果浮者油也〕漬經ニ三宿一、漉出內ニ草篅一〔判竹、圓以盛レ穀〕〔判竹謂、當レ作ニ編草一〕中裛レ之、復經ニ三宿一芽生長二分、一畝三升擲、三日之中、令ニ人驅レ鳥、稻苗長七八寸、陳草復起、以レ鎌侵レ水芟レ之、草悉膿死、稻苗漸長復須レ薅、薅訖決ニ去水一、曝レ根令レ堅、量ニ時水旱一而溉レ之、將レ熟又去レ水、霜降穫レ之、北土高原、本無ニ陂澤一、隨逐ニ隈曲一而田者、二月氷解地乾、燒而耕レ之、仍即下レ水、十日塊既散液、持ニ木斫一平レ之、納レ種如ニ前法一、既生七八寸、拔而栽レ之、〔既非ニ歲易一、草稗俱生、芟亦不レ死、故須ニ栽而薅一レ之〕溉・灌・收・刈、一如ニ前法一、畦畤大小無レ定、須レ量ニ地宜一、取レ水均而已、藏レ稻必須レ用レ箄、〔此既水穀、窖埋、得ニ地氣一則爛敗也〕若於ニ久居一者、亦如ニ劁麥法一、舂レ稻必須ニ冬時一、積レ日燥曝、一夜置ニ霜露中一、即舂、〔若冬舂不レ乾、即米靑、赤脉起、不レ經レ霜、不ニ燥曝一則米碎、〕秫稻法、一切同

王禎稻論曰、稻之爲言、藉也、稻舍水盛其德也、稻太陰精、含水漸洳、乃能化也、淮南子曰、江水肥而宜稻、南方下土塗泥、皆宜水種、治稻者、蓄陂塘以瀦之、置隄閘以止之、又有作爲畦埂、耕耙既熟、放水匀停、擲種於內、候苗生五六寸、拔而秧之、今江南皆用此法、苗高七八寸則耘之、（爪耘、耙耘、具農器譜）耘畢放水熇之、欲秀復用水浸之、苗既長茂復事薅拔、以去根莠、農家收穫尤當及時、江南上雨下水、收稻必用喬扦筅架、乃不遺失、（喬扦、筅架具農器譜）蓋刈早則米青而不堅、刈晩則零落而損收、又恐爲風雨損壞、此九月築場、十月納稼工夫、次第不可失也、大抵稻・穀之美種、江淮以南、直徹海外、皆宜此稼、（嘗聞獨陰不生、獨陽不生、稻者不得卑濕則不能盡其生、可謂之太陰乎、王氏之所論非確論也）

玄扈先生曰、今人用穀種、畝一斗以上、密種而少糞、難耘而薄收也、但揷蒔早者、用種須少、揷蒔遲者、用種宜稍多、吾鄉人、多種吉貝、芒種以前、甚無暇、夏至前方揷蒔、亦有過夏至者、用種不得不多

亦有小暑後揷蒔、而用種如常、則先種麻・燈心・藨草之屬、田底極肥故也

齊民要術、種旱稻法曰、旱稻用下田、白土勝黑土、非言、下田勝高原、但、下停水者、不得禾・豆・麥、四種稻雖澇亦收、所謂彼此俱獲、不失地利故也、下田種者、用功多、高原種者、與禾同等也（禾當作黍稷二字而讀）凡下田停水處、燥則堅垎（乾也）濕則汙泥、難治而易荒、磽确而殺種

玄扈先生曰、旱稻有粳有糯、有遲有早、每畝須糞二十餘石、亦懼大旱、可灌之、又曰旱稻

稻也、最須水、宜用區種畦種兩法

其春耕者、殺種尤甚、故宜正六月暵之以擬穬麥、麥時水澇、不得納種者、九月中、復一轉、至春種稻、萬不失一、（春耕者、十不收五、蓋誤人耳、）凡種下田、不問秋夏、候水盡地白背時速耕、杷勞頻煩令熟、（過燥則堅、過雨則泥、所以宜速耕、）二月半、種稻爲上時、三月爲中時、四月初及半爲下時、漬種如法、裛令開口、耬耩稀種之、（稀種者、省種而生科、又勝擲者、）即再通勞、（若歲寒、早種慮時晚、即不漬種、恐芽焦也、）其土黑、堅強之地、種未生前、遇旱者、欲得牛羊及人踐履之、（乾亦可）濕則不用一迹入、稻既生、猶欲令人踐壠背、（踐者、茂而多實）苗長三寸、杷勞而鋤之、鋤唯欲速、（稻苗性弱、不能扇草、故宜數鋤之、）每經一雨、輙欲杷勞、苗高尺許則鋒、大雨無所作、（所作下、脫二小雨之二字、）宜冒雨薅之、科大如穊者、五六月中霖雨時、拔而栽之

栽法欲淺、令其根鬚四散則茲茂、深而直下者、聚而不科、其苗長者亦可拔去葉端數寸、勿傷其心也、（拔字不適）

又七月不復任栽

七月百草成、時晚故也、玄扈先生曰、水稻秧長、亦用此法、南土立秋後十日尚可栽、北土不然、

其高田種者、不求極良、唯須廢地、（過良則苗折、廢地則無草、）亦秋耕杷勞令熟、至春黃場納種、（不宜濕下、）餘法悉與下田同矣

王禎旱稻論曰、今閩中有得占城稻種、高仰處、皆宜種之、謂之旱占、其米粒大而且甘、爲旱稻種甚佳、北方水源頗少、陸地沾濕處、宜種此稻

玄扈先生曰、賈氏齊民要術、著旱稻種法頗詳、則中土舊有之、乃遠取諸占城者、何也、賈故高陽太守、豈幽燕之地、自昔有之、爾時南北隔絕、無從得耶、抑北魏時有之、後絕其種耶、既或昔有今無、何妨昔無今有、眞宗、從占城、移之江浙、江翊從建安、移之中州、稍一展轉、便令方內足食、則執言土地不宜、使人息意移植者、必不可也、今北土、種者甚多、畿內種推平峪、山東推沂州、不嘗占城粳稻矣、〔米大者非古稻、別是一種、出于眞臘國者、亦可水種、自古所有之稻種、固水陸無別〕

丘濬曰、地土高下燥濕不同、而同於生物、生物之性雖同、而所生之物、則有宜不宜焉、土性雖有宜不宜、人力亦有至不至、人力之至、亦或可以回天、況地乎、宋太宗、詔江南之民種諸穀、江北之民種秔稻、眞宗取占城稻種、散諸民間、是亦大易裁成、輔相以左右民之一事、今世江南之民、皆雜蒔諸穀、江北民亦兼種秔稻、昔之秔稻、惟秋一收、今又有早禾焉、二帝之功、利及民遠矣、後之有志於勸民者、宜倣宋主此意、通行南北、俾民兼種諸穀、有司考課書其勸相之數、其地昔無而今有、有成效者、加以官賞

玄扈先生曰、仲深先生所云、南北宜兼種諸穀、考課有司、欲令昔無而今有者、至哉言也、居

上者人有此心、民安得盡死哉、王禎有言、悠悠之論、率以風土不宜爲說、按、農桑輯要云、雖託之風土、種藝不謹者有之、種藝雖謹、不得其法者有之、余謂、風土不宜、或百中間有一二、其他美種、不能彼此相通者、正坐懶慢耳、凡民既難慮始、仍多坐井之見、士大夫、又鄙不屑談、則先生之論將千百載爲空言耶、且展轉溝壑者、何罪焉、余故深排風土之論、且多方購得諸種、即手自樹藝、試有成效、乃廣播之、倘有俯同斯志者、盍共圖焉、凡種不過一二年、人享其利、即亦不煩勸相耳〔字書無勸字、恐勸字誤〕

徐獻忠曰、居山中往往旱荒、乞得旱稻種、吳石岐・大麥家、糯紫黑色、而粳者白、往時宋眞宗、因兩浙旱荒、命於福建取占城稻三萬斛散之、仍以種法下轉運司示民、即今之旱稻也〔占稻乃早稻、米小而早熟、水陸同種〕初止散於兩浙、今北方高仰處、類有之者、因宋時有江翱者、建安人、爲汝州魯山令、邑多苦旱、乃從建安取旱稻種〔旱稻高仰可種、高原不可種者〕耐旱而繁實、且可久蓄、高原種之、歲歲足食、種法大率如種麥、治地畢、豫浸一宿、然後打潭〔打潭、打窪之謂〕下子、用稻草灰和水澆之、每鋤草一次、澆糞水一次、至于三即秀矣

粱、爾雅曰、虋赤苗、芑白苗

郭璞註曰、粱也、谷之良者曰粱、陶弘景曰、粱即粟類、惟其芽頭色異、爲分別耳、廣志曰、有解粱・貝粱・遼東赤粱、蘇恭曰、粱雖粟類、細論則別、黄粱出蜀漢・閩浙間、穗大、毛長、穀米俱

鹿、人號ニ竹根黃一、白粱、穀鹿扁長、不レ似ニ粟圓一也、靑粱殼穗、有レ毛而粒微靑、早熟而收薄、止堪

作レ餳耳、王禎曰、赤白粱、其禾・莖・葉・似レ粟、粒差大、其穗帶ニ毛芒一、牛馬皆不レ食、與レ粟同時熟

粱〔粱、乃稷粟也、諸家分ニ粟之種類一、而稱レ粱者、非ニ古之粱一也〕秫〔此曰ニ粱秫一者、則是古之粱也〕爾雅曰、衆秫也

犍爲舍人曰、是伯夷叔齊所レ食、首陽草也、廣志曰、秫・黏粟、有レ赤、有レ白者、有ニ胡秫一、早熟及

レ麥、說文曰、秫、稷之黏者、案、今世有ニ黃粱穀秫・桑根秫・穗天培秫一也

蜀秫〔即蜀黍、又有ニ不粘者一〕

玄扈先生曰、蜀秫、古無レ有也、後世或從ニ他方一得レ種、其黏者近レ秫、故借レ名爲レ秫、今人但指レ此

爲レ秫、而不レ知レ有ニ粱秫之秫一、誤矣、別有ニ一種玉米一、或稱ニ玉麥一、或稱ニ玉蜀秫一、蓋亦從ニ他方一得

レ種、其曰ニ米麥蜀秫一、皆借レ名之也

齊民要術〔要術作ニ粱秫一、並欲ニ薄地而稀一〕種ニ粱秫一法曰、種レ秫、欲ニ薄地而稀一、一畝用レ子三升半、〔地良多ニ雉尾一、苗穊穗不レ成〕種與レ植レ稷

同レ時、〔晩者全不レ收也〕燥濕之宜、杷勞之法、一同ニ稷苗一、收刈欲レ晩、〔性不ニ零落一、早刈損レ實〕

又種ニ蜀秫一法曰、春月種宜レ用ニ下土一、莖高丈餘、穗大如レ帚、其粒黑如レ漆、如ニ蛤眼一、熟時收刈成レ束、

攢而立レ之、其子作レ米可レ食、餘及ニ牛馬一、又可レ濟レ荒、其莖可レ作ニ洗帚一、稭稈可ニ以織レ箔、編レ席、夾

レ籬、供レ爨、無レ有ニ棄者一、亦濟世之一穀、農家不レ可レ闕也

玄扈先生曰、北方地、不レ宜ニ麥禾一者、乃種レ此、尤宜ニ下地一、立秋後五日雖ニ水潦至一丈深一不レ能レ壞

之、但立秋前、水至即壞、故北土築ㇾ堤二三尺、以禦二暴水一、但求二堤防一數日、即客水大至、亦無ㇾ害也
又曰、秦中鹼地、則種薥秫一、下地種二薥秫一、特宜ㇾ早、須二清明前後耩一

附　稗

稗、爾雅曰、稊・〔稊似ㇾ稗之草、而非ㇾ稗也〕苵

按、稗、禾之卑者、最能亂ㇾ苗、其莖葉相似、釋曰、稊、一名苵、似二稗之穢草一、布二生於地一、而稗則生二下澤中一、故古詩曰、蒲稗相因依、羅願、爾雅翼曰、稊與ㇾ稗二物也、皆有ㇾ米、而細小、故、莊子曰、道在二稊稗一言、比二於穀一則微細、而不精、道亦在焉、又曰、若稊米之在二大倉一、亦言ㇾ小也、玄扈先生曰、稗〔稗亦水陸同種〕亦有二多種一、水曰ㇾ稗、旱曰ㇾ稊、水旱、皆有稙、有ㇾ穉

玄扈先生疏曰、稗多ㇾ收能二水旱一、可ㇾ救ㇾ儉、孟子言、五穀不ㇾ熟、不ㇾ如二荑稗一、〔荑稗、乃稊也〕淮南所ㇾ謂、小利者皆以ㇾ此、且稗稈一畝、可ㇾ當二稻稈二畝一、其價亦當二米一石一、宜下擇二嘉種一于二下田一藝上ㇾ之、歲歲無ㇾ絕、倘遇二災年一、便得二廣植一、勝二于流移捃拾一、不二其遠一矣

又曰、北土、最下地、極苦ㇾ澇、土人多種二薥秫一、數歲而一收、因ㇾ之困敝、余教ㇾ之、多蒔ㇾ麥、當不ㇾ懼ㇾ澇、澇必於二伏秋間一、弗ㇾ及ㇾ麥也、澇後能疏ㇾ水、及ㇾ秋而涸、則蒔二秋麥一、不ㇾ能ㇾ疏ㇾ水、及ㇾ冬而涸、則蒔二春麥一、近ㇾ河近ㇾ海、可ㇾ引ㇾ潮者、即旱後、又引二秋潮一灌ㇾ之、令二沙淤地澤一、亦隨ㇾ時、蒔二春秋麥一、此法、可ㇾ令二十歲九稔一、若收ㇾ麥後、隨ㇾ意種二雜糧一、則聽二命於水旱一、可也、凡春麥、皆宜下

雜旱稗、構之、刈麥後長稗、即歲再熟矣、既能水旱、又下地不遇異常客水必收、亦十歲可致七八稔也

又曰、下田種稗、遇水澇、不滅頂不壞、滅頂不踰時不壞、春種者、先秋而熟、可不及于澇、或夏澇、及秋而水退、或夏旱、秋初得雨、速種之、秋末亦收、故宜歲歲留種、待焉

氾勝之書曰、稗既堪水旱、種無不熟之時、又特滋茂盛易生、蕪穢良田、畝得二三十斛、宜種之備凶年、稗中有米、熟擣取米、炊食之、不減粱米、又可釀作酒

酒甚美釀、尤踰黍秫、魏武、使典農種之、頃收二千斛、斛得米三四斗、大儉可磨食也、若値豐年、可飯牛馬猪羊、（日本紀、五穀、不收黍、而收稗）

羅願、爾雅翼曰、草之似穀、可以養人者甚多、博物志稱、篩草實、生海洲上、食之如大麥、從七月熟、民斂至冬乃訖、或曰、禹餘糧、言、禹治水、棄其餘糧、化而爲此、本草稱東廧、（子虛賦云、東廧、張揖曰、實可食）生河西、苗似蓬、子似葵、可爲飯、河西人語曰、貸我東廧、償爾田粱、又芮米、可爲飯、生水田中、苗子、似小麥而小、四月熟、久食不飢、爾雅所謂、皇、守田者也、又有蒯草、子亦堪食、如秔米、又蓬草子、作飯無異秔米、儉年食之、此皆五穀之外、可以接糧者、故附著之（以下不訓點者、非穀種也）

玄扈先生疏曰、荒儉之歲、於春夏月、人多采掇木萠草葉、聊足充飢、獨三冬春首、最爲窮苦、所恃木皮草根實耳、余所經嘗者、木皮、獨榆可食、枯木葉、獨槐可食、且嘉味、在下地則燕蓄、鐵荸薺、皆

甘可食、在水中、則藕・菰米・在山間、則黃精・山茨菇・蕨・苧・薯・荳之屬尤衆、草實則野稗・黃□・蓬蒿・蒼耳、皆穀類也、又南北山中、橡實甚多可淘粉食、能厚腸胃、令人肥健不飢、凡此諸物幷救荒本草所載、擇其勝者、於荒山大澤曠野、皆宜預種之以備飢年

農政全書卷之二十五終

文政十年梓刊

寶善堂藏

農政全書卷之二十六

特進光祿大夫太子太保禮部尚書兼文淵閣大學士贈少保謚文定上海徐光啓纂輯
欽差總理糧儲提督軍務巡撫應天等處地方都察院右僉都御史東陽張國維鑒定
直隸松江府知府穀城方岳貢同鑒

樹藝

穀部下

大豆、爾雅曰、戎菽（戎菽、非㆓大豆㆒）謂㆓之荏菽㆒
孫炎注曰、戎菽、大菽也、廣雅曰、大豆、菽也、有㆓黃落豆㆒、有㆓御豆㆒、其豆角長、有㆓場豆㆒、葉可㆑食、有㆑青有㆓黃者㆒、今世大豆、有㆓黑白二種、及長稍牛踐之名㆒、又有㆓黑高麗豆・鷰豆・豍豆㆒、大豆類也、豆角曰㆑莢、葉曰㆑藿、莖曰㆑萁、寇宗奭曰、有㆓綠・褐・黑。三種㆒、呂覽春秋曰、得㆑時之豆、長莖短足、其莢二七爲㆑族。多枝數節、大菽則圓、小菽則團、先㆑時者、必長蔓、浮葉疏節、小莢不㆑實、後㆑時者必短莖疏節、本虛不㆑實、雜陰陽書曰、大豆生㆓于槐㆒、九十日秀、秀後七十日熟

崔寔曰、正月可種䜴豆、（䜴豆葉豆也、藊豆中之尤早者、故曰正月可種、關東謂之隱元、我鄕謂之雪割、因其下種之早也、集韻曰、〓或作藊者、近是、廣雅曰、䜴豆豌豆也者、共以其早誤也）二月可種大豆、又曰、二月昏參夕、杏花盛、桑椹赤、可種大豆、謂之上時、四月時雨降、可種大小豆、

美田欲稀、薄田欲稠

孝經援神契曰、赤土宜豆也

齊民要術曰、春種大豆、次植穀之後、二月中旬爲上時、（一畝用子八升）三月上旬爲中時、（一畝用子一斗）四月上旬爲下時、（一畝用子一斗二升）歲宜晚者、五六月亦得、然稍晚、稍加種子、地不求熟、（秋鋒之地即摘種、地過熟者、苗茂而實少）收刈欲晚、（此不零落、刈早損實）必須耬下、（種欲深、故豆性強、苗深則及澤）鋒耩各一鋤、不過再、葉落盡然後刈、（葉不盡則難治）刈訖則速耕、（大豆性溫、秋不耕則無澤）種茭者、用麥底、一畝用子三升、先漫散訖犁細、淺晦而勞之、（旱則萁堅、葉落稀則苗莖不高、深則土厚不生）若澤多者、先深耕訖、逆𡉏擲豆、然後勞之、（澤少則否、爲其浥鬱不生）九月中、候近地葉有黃落者、速刈之、（葉少不黃、必浥鬱、刈不速、逢風則葉落盡、遇雨則爛不成）

汜勝之曰、大豆保歲而易得、古之所以備凶年也、謹計家口數種大豆、率人五畝、此田之本也、三月楡莢時有雨、高田可種大豆、土和無塊、畝五升、土不和則益之、種大豆夏至後二十日、尙可種、戴甲而生、不用深耕、大豆須均而稀、豆花憎見日、見日則黃爛而根焦也、穫豆之法、莢黑而莖蒼、輒收無疑、其實將落、反失之、故曰、豆熟於場、（於場二字重複）於場穫豆、即青莢在上、黑莢在下、又區種大豆法、坎方深各六寸、相去二尺、一畝得千六百八十坎、其坎成、取美糞一升、合坎中

土攪和、以內坎中、臨種沃之、坎三升水、坎內豆三粒覆土、土勿厚、以掌抑之、令種與土相親。玄扈先生曰、凡種宜然、故用足踐、用砘也

一畝用種一升、用糞十六石八斗、豆生五六葉鋤之、旱者溉之、坎三升水、丁夫一人、可治五畝、至秋收一畝十六石、種之上土、纔令蔽豆耳

王禎曰、大豆當及時鋤治、上土使之葉蔽其根、庶不畏旱、大豆之黑者、食而充飢、可備凶年、豐年可供牛馬料食、黃豆可作豆腐、可作醬料、白豆粥飯、皆可拌食、白黑黃三豆、色異而而用別、皆濟世之穀也

種大豆、鋤成行壠、舂穴下種、早者二月種、四月可食、名曰梅豆、皆三四月種、地不宜肥、有草則刪去、種黑豆、三四月間種、其豆亦可作醬及馬料

兪貞木種樹書曰、種諸豆及麻、若不及時去草、必爲草所蠹耗、雖結實亦不多、諺云、麻耘地、豆耘花、麻須初生時耘、豆雖開花亦可耘

小豆（形如小豆而色萊者、別謂之萊豆）廣雅曰小豆荅也、（賈思勰曰、小豆有萊赤白三種、豍豆・豌豆・豇豆・䝁豆・留豆、亦其類也、小豆花曰腐婢、雜陰陽書曰、小豆生於李、六十日秀、秀後六十日成）

齊民要術曰、種小豆、大率用麥底、然恐小晚、有地者、常須兼留去歲穀下以擬之、夏至後十日種者、爲上時、（一畝用子八升）初伏斷手爲中時、（一畝用子一斗）中伏斷手爲下時、（一畝用子一斗二升）中伏以後則晚矣、熟耕耬下以爲良、澤多者耬耩、漫擲而勞之、如種麻法、（未生白背、勞之極佳）漫擲、犂畤次之、稿種爲下、鋒而不耩、

鋤不過再、葉落盡則刈之、（葉未盡者、難治而易濕也）豆角三靑兩黃、拔而倒豎籠、從之生者均熟、不畏嚴霜、從本至末、全無秕減、乃勝刈者、牛力若少得、待春耕亦得稿種、凡大小豆、生既布葉、皆得用鐵齒鎘楱、縱橫杷而勞之

氾勝之曰、小豆不保歲（歲下脫三而字）難得、椹黑時、注雨種、畝一升、豆生布葉鋤之、生五六葉又鋤之、大豆小豆、不可盡治也、古所不盡治者、豆生布葉、豆有膏、盡治之則傷膏、傷則不成、而民盡治、故其收耗折也、故曰豆不可盡治養、美田畝可十石、以薄田尙可畝取五石、諺曰、與他作豆田、斯言良美可惜也

菉豆

菉豆、本作綠、以其色名也、粒大（粒大而色鮮綠者、是靑大豆也）而色鮮者、爲官綠、皮薄粉多、粒細而色深者、爲油綠、皮厚粉少、早種者呼爲摘綠、遲種呼爲拔綠、以水浸濕、生白芽、爲菜中佳品、

王禎農桑通訣曰、北方惟用菉豆最多、農家種之亦廣、人俱作豆粥豆飯、或作餌爲炙、或磨而爲粉、或作麪材、其味甘而不熱、頗解藥毒、乃濟世之良穀也、南方間種之

兪貞木種樹書曰、種菉豆地宜瘦、四月種六月收、子再種八月又收、中作粉、豆芽菜、棟菉豆、水浸二宿、候漲、以新水淘控乾、用蘆席灑濕襯地、摻豆於上、以濕草薦覆之、其芽自長、大豆芽同此

赤豆

小而色赤、〔粒小而色赤者、非二赤豆一而赤小豆也、蓋聞赤豆米赤、故有二大赤豆之名一、其屬又有二黑者白者一云〕心之穀也、或云、共工氏有二不才子一、以二冬至一死爲二疫鬼一、而畏二赤豆一、故於二是日一、作レ粥以厭レ之

齊民要術曰、大赤豆、三月種、六月旋摘、遲者四月種亦可、宜二稀稠得一レ所、太密不レ實、〔玄扈先生曰、有二種、米赤最能殺レ草〕

蠶豆

王禎謂、其蠶時始熟、故名、李時珍曰、莢狀如レ蠶、亦通、張騫使二外國一、得二胡豆種一歸、卽此、南土多種レ之、蜀人收二其子一、以備二荒歉一、〔此條呼二胡豆一爲二蠶豆一者、由二本草綱目之謬一矣、蓋胡豆戎菽之一名、其莢大而向レ天者、是也、又蠶豆、豌豆之一名、其莢熟則似二老蠶一者、是也〕

王禎農書曰、蠶豆、百谷之中最爲二先登一、蒸煮皆可レ便レ食、是用接二新代一レ飯充レ飽、今山西人用レ豆多麥少、磨レ麪可下作二餅餌一而食上

玄扈先生曰、蠶豆種二花田中一、冬天不レ拔二花秸一、用以拒レ霜、至二清明後一拔レ之

又曰、蠶豆八月初種、臈月宜二厚壅一レ之、此種極救二農家之急一、且蝗所レ不レ食

豌豆

遼志、作二回鶻國豆一、唐史作二畢豆一、崔寔作二蹕豆一、卽靑斑豆也、田野間不中、往往有レ之、俗名小寒者、是也

務本新書曰、豌豆二三月種、諸豆之中、豌豆最爲レ耐レ陳、又收多熟早、如近二城郭一、摘二豆角一賣、先可レ鏟レ物、舊時莊農往往獻二送此豆一、以爲二嘗新一、蓋一歲之中、貴二其先一也、又熟時、少有二人馬傷踐一以此校レ之、甚宜二多種一（在二田野間一、小粒而青斑者、野草而不レ可レ食者也、二三誤、當レ作二八九一）

玄扈先生曰、豌豆與二蠶豆二（是呼二胡豆一、爲二蠶豆一者也）各種蠶豆之利、倍二于豌一十一、其耐レ陳則一也

豇豆

一名降䝤、莢必雙生、紅色居レ多、故名、李時珍曰、開レ花結レ莢、必兩兩並垂、有二習坎之義一、其子微曲、如二腎形一所謂豆爲二腎穀一、宜二以レ此當一レ之

穀雨後種、六月收レ子、收來便種、再生、八月又收レ子、一年兩熟

藊豆

古名二蛾眉一、俗名二沿籬一、有二黑白二種一、黑者名二鳴豆一、（鳴恐鵲之誤、其下當レ塡二種類有三字一、不レ然則義不レ通、）其莢狀凡十餘色、嫩時可レ充二蔬食茶料一、老則收レ子煑食、白者食入藥品

清明日下レ種、以レ灰蓋レ之、不レ宜二土覆一、芽長分栽、搭レ棚引上

玄扈先生曰、以レ口向レ上種、粒々出、若扁種十不レ出レ一、蓋豆瓣重項土不レ起、故爛耳

刀豆、（酉陽雜俎云、樂浪有二挾劍豆一、即此、三月下レ種蔓生）

清明時鋤レ地作レ穴、毎レ穴下二種一粒一、以レ灰蓋レ之、只用レ水澆、待二芽出一則澆以二糞水一、蔓長搭レ棚引上

黎豆

古名貍豆、又名ニ虎豆一、其子有レ點、如ニ虎貍之斑一、故名、爾雅所謂攝虎櫐（虎櫐非ニ菜種一、出ニ于釋木一）三月下レ種蔓生、江南多炒食レ之

麥、廣雅曰、麳小麥、麰大麥

廣志曰、虜水麥、其實大、麥形有レ縫、稅麥似ニ大麥一、出ニ凉州一、旋麥三月種、八月熟、出ニ西方一、赤小麥赤而肥、出ニ鄭縣一、語曰、湖猪肉、鄭稀熟、山提小麥、至粘弱、以ニ貢御一、有ニ半夏小麥一、有ニ禿芒大麥一、有ニ黑積麥一、陶隱居本草云、大麥爲ニ五穀一、長即今稞麥也、一名麰麥、似ニ穬麥一、唯無レ皮耳、穬麥此、是今馬食者、然則大穬二麥、種別名異、而世人以爲ニ一物一、謬矣、按、世有ニ落麥者一、禿芒是也、又有ニ春種之穬麥一也、（稻刺曰レ芒、麥刺曰レ穬、大麥有レ刺、故曰ニ穬麥一、無レ刺曰ニ稞麥一、雀麥野草、而非ニ穀種一）

玄扈先生曰、今人皆指レ穬爲ニ大麥一、又有ニ雀麥一、即燕麥也、穗細長子亦小、去レ皮作レ麵、可レ救レ飢、一蕎麥、一作ニ莜麥一、又作ニ烏麥一、烈日曝令レ開レ口、去レ皮取レ米、作レ飯蒸ニ食之一、鄭玄曰、麥者、接レ絕續レ乏之穀、尤宜レ種レ之

許愼曰麥芒穀、秋種厚埋、故謂ニ之麥一、麥金王而生、火王而死、蘇頌曰、大小麥、秋種冬長、春秀夏熟、具ニ四時之氣一、爲ニ五穀之一一、雜陰陽書曰、大麥生ニ于杏一、二百日秀、秀後五十日成、蟲食レ杏、麥價貴

尙書大傳曰、秋昏虛星中可ニ以種一レ麥、（虛、北方玄武之宿、八月昏中見ニ于南方一）

崔寔曰、凡種大小麥、得白露節、可種薄田、秋分種中田、後十日種美田、惟穬早晚（早晚無常者、惟小麥耳）無常、正月可種蒋麥、（蒋當作春、）盡二月止

氾勝之書曰、凡田有六道、麥爲首種、種麥得時、無不善、夏至後七十日、可種宿麥、早種則蟲而有節、晚種則穗小而少實、當種麥、若天旱無雨澤、則薄漬麥種、以酢漿幷蠶矢、夜半漬向晨速投之、令與白露俱下、酢漿令麥耐旱、蠶矢令麥忍寒、麥生黄色、傷于太稠、稠者鋤而稀之、秋鋤以棘柴耬之、以壅麥根、故諺曰、子欲富、黄金覆、黄金覆者、謂秋鋤麥、曳柴壅麥根也、至春凍解、棘柴曳之、突絕其乾葉、須麥生復鋤之、到榆莢時注雨止、候土白背、復鋤如此、則收必倍、冬雨雪止、以物輾藺麥上、掩其雪、勿令從風飛去、後雪復如此、則麥耐旱多實、春凍解耕如上、種旋麥、麥生根茂盛、莽鋤如宿麥、（玄扈先生曰、春無注雨、冬無雪、並宜車水灌之、）區種麥法、凡種一畝、用子二升、覆土厚二寸、以足踐之、令種土相親、麥生根成、鋤區間秋草、緣以棘柴律土、壅麥根、秋旱則以桑落曉澆之、秋雨澤適勿澆之、麥凍解棘柴律之、突絕去其枯葉、區間草生鋤之、大男大女治十畝、至五月收、區一畝得百石以上、十畝得千石以上

玄扈先生曰、北土多苦春旱、區種者尤便灌水、今作畦種法其便宜倍勝區也

齊民要術曰、大小麥、皆須五月六月暵地不暵地而種、其收倍薄、崔寔曰、五月一日當（當、要術作蓄、）麥田也

種大小麥先時、逐犂⿰禾奄種者佳（再倍省種子而科大、逐犂墎之亦得、然不如作⿰禾奄耐旱、）其山田及剛強之地、則耬下之、（其種子、宜加五省于下田、凡）耬種者、匪直土淺易生、然于鋒鋤亦便、穬麥非良地、則不須種、（薄地徒勞種、而必不收、凡種穬麥、高下田皆得用、但必須良熟耳、高田借擬禾、豆自可專用下田也、）八月中戊、社前種者爲上時、（擲者、畝用子二升半）下戊前爲中時、（用子三升）八月末、九月初、爲下時、（用子三升半、或四升）小麥宜下田、（歌曰、高田種小麥、稴穇不成穗、男兒在他鄉、那得不憔悴、玄扈先生曰、北方有水處即高地種之亦可灌也、南土下地、種之又畏濕）八月上戊社前爲上時、（擲者、用子一升半）中戊前爲中時、（用子二升）下戊前爲下時、（用子二升半）正月二月、勞而鋤之、三月四月、鋒而更鋤、（鋤麥倍收、皮薄麪多、而鋒勞、各得再遍爲良也）令立秋前治訖、（立秋後則蟲生）蒿艾簞盛之良、（以蒿艾閉窖、埋之亦佳、窖麥法、必須日曝令乾、及熱埋之、）多種久居供食者、宜作劁麥、倒刈薄布、順風放火、火既着、即以掃箒撲滅、仍打之、（如此者、夏蟲不生、然惟中下作麥飯及麪用耳）

士農必用曰、古農語云、彭祖壽年八百、不可忘了植穡植麥、又云、社後種麥爭回耬、又云、社後種麥爭回牛、言奪時之急、如此之甚也、（玄扈先生曰、蟲早、麥田亦早、麥田早、秋田亦早、桑須趲趁梅前、俾免致雨損）

韓氏直說曰、五六月麥熟、帶青收一半、合熟收一半、若過熟則拋費、每日至晚、即便載麥上場堆積、用苫繳覆、以防雨作、（苫須於雨前農隙時備下）如般載不及、即於地內苫積、天晴乘夜載上場、即攤一二車、薄則易乾、碾過一遍、翻過又一遍、起稭下場、揚子收起、雖未淨、直待所收麥都碾盡、然後將未淨稭稈再碾、如此可一日一場、比至麥收盡、已碾訖三之二、農家忙併無似蠶麥、古語云、收麥如救火、（玄扈先生曰、梅天雨更多故）若少遲慢、一值陰雨、即爲災傷、遷延過時、秋苗亦誤鋤治、

兪貞木種樹書曰、麥苗盛時、須使人縱牧於其間、令稍實則其收倍多、麥屬陽、〔稻者、夏生而秋枯、麥者、秋生而夏枯、兪氏以水陸言陰陽者、誤矣、〔三〕〕故宜乾原、稻屬陰、故宜水澤、〔諺云、冬無雪麥不結、玄扈先生曰、雪可必乎、秋冬宜灌水、令保澤可也〕小麥不過冬、大麥不過年、種麥之法、土欲細、溝欲深、耙欲輕、撒欲勻

王禎農書曰、麥種初收時、旋打旋揚、與蠶沙相和、辟蟲傷資地力、苗又耐旱、凡種須用耬犂下之、又用砘車碾過、日種數畝、蓋成壟、易于鋤治、又有漫種一法、農人左手挾器、盛種、右手握而勻擲于地、既遍則用耙勞覆之、又頗省力、此北方種麥之法、南方惟用撮種、故用種不多、然糞而鋤之、人工既到、所收亦厚、北方芟麥、用釤綽腰籠、一人日可收麥數畝、南方收麥、鐮刈手莚、所種麥少故也、若力省而功倍、當以北方為法

種大麥、早稻收割畢、將田鋤成行壟、令四畔溝洫通水、下種以灰糞蓋之、諺云、無灰不種麥、須灰糞均調為上、〔玄扈先生曰、大麥最能藏久、可以多積〕種小麥、須揀去雀麥草子、簸去秕粒在、九十月種、種法與大麥同、若大遲、恐寒鴉至被食之、則稀出少收

齊民要術曰、種青稞麥、〔治打時稍難、惟伏日用碌碡碾〕右每十畝用種八斗、與大麥同時熟、好收四十石、石八九斗麪、堪作麨及餅飩甚美、磨總蓋無麩、〔鋤一遍佳、不鋤亦得〕

齊民要術曰、種瞿麥、〔瞿麥、雀麥之誤、一名燕麥、田間之穢草、而非穀種、此方無收之者〕以伏為時、〔一名地麪、良地一畝、用子五升、薄田三四升〕畝收十石、渾蒸曝

乾、舂去皮、米全不碎、炊作飧甚滑、細磨下絹簁、作餅亦滑美、然爲性多穢、一種此物、數年不絕、耘鋤之功、更益劬勞

齊民要術曰、種蕎麥五月耕、經三十五日、草爛得轉、并種耕三遍、立秋前後皆十日內種之、假如耕地三遍、即三重著子、下兩重子黑、上一重子白、皆白汁滿似如醲、即須收刈之、但、對稍(稍下脫相字)苔鋪之、其白者日漸盡變爲黑、如此乃爲得所、若得上頭總黑、半已下子盡落矣

王禎農書曰、蕎麥立秋前後漫撒種、即以灰糞蓋之、稠密則結實多、稀則結實少、若種遲、恐花經霜不結子

蕎麥、赤莖烏粒、種之則、易爲工力、收之則不妨農時、晩熟故也、霜降收、則其子粒焦落、乃用推鐮穫之、(推鐮、見農器圖譜)北方、山後諸郡多種、治去皮殼、磨而爲麪、焦作煎餅、配蒜而食、或作湯餅、謂之河漏、滑細如粉、亞于麪麥、風俗所尙、供爲常食、然、中土南方農家亦種、但晩收磨食、搜作併餌、以補麪食、飽而有力、實農家居冬之日饌也

四時類要曰、曬大小麥、今年收者、於六月掃庭除、候地毒熱、衆手出麥薄攤、取蒼耳碎剉拌曬之、至未時及熱收可以二年不蛀、若有陳、亦須依此法更曬、須在立秋前、秋後則已有蟲生、又藏麥、三伏日曬極乾、帶熱收、先以稻草灰鋪缸底、復以灰蓋之、不蛀

玄扈先生曰、耕種麥地、俱須晴天、若雨中耕種、令土堅垎、麥不易長、明年秋種、亦不易長、

南方種大小麥、最忌水濕、每人一日、只令鋤六分、要極細、作壠如龜背、小麥早種、每畝種七升、晩種九升、早種、種一斗、晩種一斗二升、麥溝口種之蠶豆、豆亦忌水畏寒、臘月宜用灰糞蓋之、冬月宜清理麥溝、令深直瀉水、即春雨、易洩、不浸麥根、理溝時、一人先運鋤、將溝中土把鏨鬆細、一人隨後持鍬、鍬土勻布畦上、溝泥既肥、麥根益深矣、

胡麻、廣雅曰、胡麻、一名藤弘

即俗名脂麻也、作芝麻者非、一名巨勝、以其角巨如方勝也、一名方莖、以莖名、一名狗虱〔狗虱、別一種〕以形名、脂麻名油麻、以其多油也、葉名青蘘、莖名麻藍、亦作麻秸、中國止有大麻、自漢使張騫于大宛、得其種、故名胡麻、所以別于大麻也、有遲早二種、黑白赤三色、俗傳胡麻、須夫婦同種、即茂盛、久服之、可以休糧、賈思勰曰、俗人呼為烏麻者非也、今世有白胡麻・八稜胡麻、白者油多、本草註云、角作八稜者為巨勝、四稜者為胡麻、皆以烏者良、白者劣

崔寔曰、二月三月四月五月、時雨降、可種之

齊民要術曰、胡麻宜白地種、二三月為上時、四月上旬為中時、五月上旬為下時、（月半前種者、實多而〔而成下有二闕文一成、月半後種者、少子而多秕也）種欲截雨脚、（若不緣濕、則不生）一畝用子二升、漫種者、先以耬耩、然後散子、空曳勞、（勞上加人、則土厚不生、）耬耩者、炒沙令燥中和半之、（不和沙下不均、壠種若荒、得用鋒耩）鋤不過三遍、刈束欲小、（束大則難燥、打手復不勝、）以五六為一叢、斜倚之、（不爾則風吹倒損收也）候口開、乘車詣田斗藪、（倒豎以小杖微打之）還叢之、三日一打、四五遍乃盡耳、（若乘濕横積、蒸熱速

乾、雖レ日ニ鬱裛一、無ニ風吹虧損之慮一、浥者、不レ中レ爲ニ種子一、然于レ油無レ損也

王禎農書曰、〔麻上脱ニ胡之字一〕麻、胡地所レ出者、皆肥大、其紋鵲、其色紫黒、取レ油亦多、可ニ以煎烹一可ニ以燃點一、又可ニ以爲レ飯

四時類要曰、種ニ胡麻一、每科相去一尺爲レ法

李時珍曰、按、服食家、有下種ニ青蘘一法上、云、秋間取ニ胡麻子ニ種ニ畦中一、如ニ生菜之法一、候ニ苗出ニ采食、滑美如レ葵

玄扈先生曰、胡麻油査、可レ壅レ田

農政全書卷之二十六終

文政十年校刊

寳善堂藏

田園地方紀原

朝川善庵著

佐藤一齋與著者書柬

田園十考巻上

地方紀原

江戸　朝川鼎五鼎父述

代々考

上宮聖徳法王帝説ニ云天皇布施聖王物播磨國揖保郡佐勢地五十萬代聖王即以此為法隆寺地也今在播磨田三百餘町者

聖徳太子傳暦ニ引本願縁起ニ云子孫従類二百七十三人為寺永奴婢没官所領田園十八萬六千八百九十代定寺永財畢河内國弓削鞍作祖父間衣摺蛇草足代御立葦原等八箇所地都集并二萬八千六百四十代摂津國於勢摸江鵜田熊凝

田園紀原序

經濟界租稅、民政之要也、豈可不盡心哉、唐虞夏商、記錄簡略、不能悉其制、自周以來、歷代沿革、成書具在、可得而詳也、世之治亂恒於斯、國之興廢亦恒於斯、我邦中古、田畝租稅之制、令格裁存、猶可考已、自政歸將門、武弁執事、文史掃地、加之、群雄割據、制度不一、誰能究其詳、而信其確哉、所賴私簿雜錄耳、亦唯蠹蝕失眞、帝虎傳誤、在今而參伍稽之、推究定之、能取信於後世、自非博學高識不能也、今國家政由舊、田園一事、亦復因近古、少損益之、故原中古、而後近古可知矣、詳近古、而後今可言矣、然則不知古者、非眞知今者也、吾善庵先生、授經之餘、探討此事、雖邦人雜記、亦無不涉獵、語及田園者、裒蒐骨簡、又以一時望、交徧四方、古寺舊社所傳、蠹簡零簿、近覽而遠鈔、以資考證者不少、於是定作田園紀原、終能使夫不詳者詳、不確者確矣、義一自蚤歲、用力算學、因幷攷究田園、近著算學地方大成一篇、災梓公世、今得先生斯書、以審古今所沿革、其於田園、豈不更詳而確哉、因慫慂令嗣、以謀不朽、嗚呼斯書之出、凡官親民者、幸由此以識古而行今、則其於盛代之治、將有所稗益焉

天保九年戊戌冬十月

門人　官銀局司　秋田義一謹撰

田園地方紀原卷上

江戸　朝川鼎五鼎父述

○代之考

上宮聖德法王帝說云、天皇布二施聖王一物、播磨國揖保郡佐勢地五十萬代、聖王即以レ此爲二法隆寺地一也今在二播磨一田三百餘町者

聖德太子傳曆引二本願緣起一云、子孫從類二百七十三人、爲二寺永奴婢一、沒二官所領田園十八萬六千八百九十代一定二寺永財一畢、河內國弓削鞍作祖父間衣摺地艸足代御立葦原等八箇所地、都集十二萬八千六百十代、攝津國於勢摸江鵄田熊凝等散地、都集五萬八千二百五十代、居宅三箇所、幷資財等、悉計納二寺分一

萬葉集に　　坂上郎女

しかとあらぬいほしろをたをかりみたり田廬にをれはみやこおもほゆ

年山紀聞云、御釋云、五百代小田とは、凡田は方六尺を以て一歩とし、三十六歩を一畝とし、十畝を一段とし、十段を一町とす、七十二歩を積て一代とし、五代を一段とす、然れば一代は二畝

なり、日本紀には、頃の字をしろと訓ぜり、唐には百畝を頃とすれば、本朝とはかはれり、又云、一所に五百代あらば、計るに十町なれば、小田とはいふべからず、五百はかならず數を限りていふにはあらず、五百重山などいふ如く、たゞ多きをいふ詞なれば、山田の一代ばかりなるか、棚のやうに段々にいくらともなくあれば、しかともなき小田の一代づゝ五百ばかりもあるをいふなるべし

新撰姓氏錄云、輕我孫 治田連同氏彥坐命之後、四世孫白髮王初彥坐命未賜阿彌古姓、成務天皇御代賜輕地三十千代、是負輕我孫姓之由也

河内國石河郡形浦山碑に

飛鳥淨原大朝廷大辨
官直大貳釆女竹良卿
所請造墓所形浦山地
四十代他人莫上毀木
犯穢傍地也
己丑年十二月廿五日

好古小錄云、碑石長二尺許、濶一尺許、今移立春日村妙見寺中、采女 日本紀云、天武天皇卽位十三年十一月、采女臣賜姓朝臣、按、姓ヲ賜ハリシハ、卽チ竹良卿也 竹良 日本紀竹羅ニ作リ、又筑良筑羅ニ作ル 形浦山 石河郡春日村ニアリ、卽チ采女氏ノ古地也、土人誤テカタヒラ山ト云 四十代 方五尺爲一歩、四十代ハ二百歩 己丑年 持統天皇卽位三年己丑

鼎案ずるに、以上の二條は田地に拘はらず、地坪の上にて云へるなり

令集解云、古記云、慶雲三年九月十日格云、准令田租一段、租稻二束二把 以方五尺爲歩、歩之內得米一升 一町租稻廿二束、令前租法、熟田百代租稻三束 以方六尺爲歩、歩之內得米一升 一町租稻一十五束

政事要略云、檢舊說、令前租法、熟田五十代租稻一束五把、以大方六尺爲歩、歩內得米一升 此大升也 二百五十歩爲五十代

拾芥抄注云、三百六十歩爲一段、積七十二歩爲十代、百四十歩 鼎案、當作百四十四步 爲廿代、二百六十歩 當作二百十六歩 爲卅代、二百八十歩 當作二百八十八歩 爲四十代、五十代爲一段、式云、代頭也

後成恩寺關白兼良公令抄云、俗謂二段曰百代、謂一段曰五十代、三百六十歩也、一段租五十束故也 一廿五代爲段中、十代謂七十二歩、五百代謂一町也、一町租五百束、故爲五百代 町租五百束、所謂上田也、式曰、公田穫稻上田五百束、中田四百束、下田三百束、下々田百五十束

律原發揮云、古者以方六尺爲一歩、七歩二分爲一代、五代爲一畝 計三十六歩 十畝爲一段 計三百六十歩 十段爲一町 計三千六百歩 璋按、古有代名、今無此名、當以六步爲一代、○稱十代者二畝也、五十代者一段

也、五百代者一町也

鼎按ずるに、三十六歩を一畝とする事は古になきなり、畝積りは太閤檢地以後の事故、三百歩一段の割合にて、三十歩を一畝とするを始とす、三百六十歩一段のころは畝の名なし、委しき事は下文にみゆ

白石遺稿(二問田歩)云、上世ニ田ヲ量ルニハ代ヲ以テス、(苗代ナド云、即古語ナリ)歩段町ナド云事ハナカリシナリ、孝徳、大化ノ初ニ至リテ田ヲ量ルニ、歩段町トイフ事ハ始ル、コレヨリ後ハ大化ノ制ニヨリテ田ヲ量ル也、右後人ニ及デ、大化ノ制ヲ以テ上世ノ田ヲ量リシ、釋ニ云ヘル「三百六十歩爲二一段積一、七十二歩爲二十代一、百四十四歩爲二二十代一、二百十六歩爲二三十代一、二百八十八歩爲二四十代一、五十代爲二一段一也右ハ並皆十代ヲ以テ積シ法也、一代ハイカホド、云事見ヘズ、然ルニ古キ文書共ニ田四千六百九十二代、田一百四十七代ナド云フ事アリ、是等ハ凡一代ハイカホド、イフ事明ラカナラザレバ、解スベカラズ、然者右ノ釋ノ如キ一代ノ數ハ分明ナラズ、(古人ノ樸略、多クカクノ如シ)即今一代ノ數ヲシルサンニハ、イカヾ可レ有レ之歟、案ズルニ、田令云、「凡田長三十歩、廣十二歩爲レ段、十段爲レ町」、此例ニヨラバ、「凡田長四丈三尺、廣六尺爲レ代」トシルスベキ歟、コレハ田ヲ量ルニ代ヲ以テセシ世ニハ、未ダ歩段町ナンド云事ハ有ザル故也、但又凡田長サ七歩一尺二寸、廣サ一歩爲レ代トシルスベク歟、コレハ後世ノ法ニヨリテ云ナリ

右二條イカヾ又凡步ハ方六尺ヲ爲レ步トモミヘ候ヘバ、凡田方幾尺爲レ代ナドヽモ可レ有レ之歟、但田令ニ、「長三十步、廣十二步爲レ段」ト有レ之候ヘバ、田ヲ量ル事必シモ縱横方正ナルベキニモアラズ候歟

右又如何、御父子樣ニテ得ト御講究之上、御報待入存候、急ギ候事ニテハ無ニ御座一候、二三四五日中ニテ可レ然候、又右ノ一代ト申事四方幾丈尺寸タルベク候歟、此方ニ開平法ヲ存候算術者無レ之候、一笑（右ハ先生何人ニ問ハレシト云事ヲ詳ニセズ、今見ルニ隨テコレヲ錄ス、癸巳二月廿六日）

鼎案ずるに、白石遺稿に、大化の制より以前に步段町を以て田を量る事なし、たゞ幾代とのみ唱へしといふは、樸略の代左もあるべし、拾芥抄の釋に、七十二步を爲ニ十代一としるせるも、其頃六尺爲レ步の積りありたるとていへるにはあらず、大化の制を古の代にあてゝ積りしにて、古の十代の田は後世の七十二步なりといふ意なり、政事要略に、「二百五十步爲ニ五十代一」とあるも、同じ書法と知るべし、但し政事要略に、二百五十步を五十代とすれば、十代は五十步也、拾芥抄の釋に、七十二步を十代とすると大に異同ある樣なれども、實は大尺小尺の差別にして、一段三百六十步の上にては同じ事なり、政事要略に、右の勘算も致しあれ共誤字多く、且算法も古今の差ひ有て入組、容易に會得し難し、予は算術に疎なれば、門人秋田十七郎に託し推算せしめ、政事要略の原文を擧げ、今案を附して後考に備ふ

政事要略五十三云

勘田租束積事

右被右辨官宣偁、慶雲三年九月廿日格云、取令前束擬令內把、令條段租其實猶益、宜田一町十五束令輸者、未知令前束令內把、格爭各其積幾、損益之數何而可會、又令與熟後熟前者、擬舊說令前租法、熟田五十代租稻一束五把、以大方六尺為步、內得米一升此大升也二百五十步為五十代、慶雲三年格云、准令以大方五尺為步、步內得米一升此升稱減大升三百六十步為段者、今按五十代與令段步積一同、即所得米其數亦同、然則段內得米三百六十升、實此大二百五十升也、因步多少積增減、是以准量令前束與令內把、非无增減、計算其積、令內十四把三分之二、當令前一束、稱量一同、其令有新古、惟格新之前、古之後也

弘仁十三年十一月五日、明法博士額田國造今足

私按件勘文、田步數稻束把米升法、難得其意、仍勘算術以注左、田一段廣六步以六尺為步長六十步、幷積三百六十步也

令舊說二百五十步者

廣五步以一尺二寸為尺、則當六尺亦為步、長五十步以上法可知

量廣五步、以長五十步乘得二百五十步、更量步五尺、以一尺二寸乘得六尺、為正步是知五步則六步也以一

段廣六步乘得卅六尺、以所長三百六十尺乘得萬二千九百六十尺、以一步卅六尺乘得三百六十步也

一說置一尺二寸、尺數加二寸四分、（置一尺二寸目所加之數）幷得一尺四寸四分、置一步方卅五尺、以一尺四寸四分乘得卅六尺、以三百六十步（一段之步也）乘得萬二千九百六十尺、以段法三百六十步除知一、更置今田三百六十步、以昔田二百五十步除、得一步二百五十分之百十、卽通分子得三百六十步也

升法

置十合升米三百六十升、以十二合升米二百五十升除、得一升二百五十升之百十、卽通分內子得三百六十升也、置二百五十升、更置一升二合、加二合四勺、幷得一升四合四勺、乘止積得三百六十升也

束法

置廿二束、以十五束除得十四把不盡、十與法十五求等數得五、以五除法得三、除不盡得二、然則一束所當、十四把三分把之二也

以上政事要略

置令前一步方六尺、以令內一步方五尺除之、得一步二分、（卽令前一步方者、當令內一步二分）自乘之得積一步四

分四厘、（即令前積一步者當ニ令內積一步四分四厘、名ニ增率ー）

置ニ令前ノ一段積二百五十步、乘ニ增率ー得ニ積三百六十步、爲ニ令內段步ー

置ニ令前ノ五十代、乘ニ增率ヲ得ニ令內ノ七十二代ー

置ニ令前ノ段租十五把ー乘ニ增率ヲ得ニ令內ノ段租二十一把六分ー

令前租法

長五十步

廣五步 積二百五十步

以ニ六尺ー爲レ步
廣五步
長五十步
此積二百五十步

一步稻二把（即大把也）一段稻五百把、此束數五十束、（即大束也、一段ニ得ル稻也）一束ノ稻ヲ舂テ得ル米五升也、（即大升也）故ニ五十束ノ稻ヲ舂テ得ル米二石五斗也、（即大升也）一步ノ米一升ニ當ル、（即大升也）

令內租法

長六十步

廣六步 積三百六十步

以ニ五尺ー爲レ步
廣六步
長六十步
此積三百六十步爲ニ一段ー

一步稻二把、（即小把也）一段稻七百二十把、此束數七十二束、（即小束也、一段ニ得ル稻也）一束ノ稻ヲ舂テ得ル米五升、（即小升也、此升斛ノ減大升ノ）故ニ七十二束ノ稻ヲ舂テ得ル米三石六斗、（即小升也）一步ノ米一升ニ當ル、（即小升也）

置ニ令前ノ段租一束五把ヲ、以ニ令內ノ段租二束二把ー除レ之、得ニ十四把三分把之二ヲ、令前ノ一束ハ、即當ルニ令

內ノ一束四把六分六厘餘ニ

以上今按

又案ずるに、拾芥抄の注に、式ニ云代ハ頭なりの五字分明ならず、本文に一段頭・一町頭の字あれども、代と頭と一様に解したらんには、文義も通ぜず、予延喜式を反覆檢考するに、代頭也といふ語絶てなし、予が考へには、式は或の字、頭は頃の字の誤にやと思はる、いづれも字形近似ゆへ、書損ずることもあるべし、代も頃も皆シロと訓し、田地を指す文字ゆへ、代頃也と或人の說を舉て釋せしにやあらん、仁德紀に、墾田四萬餘頃(シロ)、孝德紀に兼幷數萬頃(シロ)田など、皆シロと訓す、此外にも頃をシロと訓せしこと諸書に多し、古へ代をシロと訓する義、今に在りては知るべからずといへども、屋敷座敷のシキと同義にて、今も物のへだてをシキリといふ是なり、後世の町も段も皆田地のシキリの上にていふと、名は異にして義は同じ、萬葉集に山代(ヤマシロ)、今作ニ山城一苗代、日本紀に、草代(クサシロ)、延喜式に倉代(クラシロ)、庭訓往來に、桑代(クワシロ)など、いづれも地面をさしていふ、俗に場所といふが如し、又轉じて日本紀に物代(モノシロ)、延喜式に禮代(アヤシロ)、其外樋代(ヒシロ)・舟代(フナシロ)・土代(ツチシロ)・壁代(カベシロ)の代は、直に物を指していへり

又案ずるに、輶軒小錄ニ云、播州宍粟(シソウ)ノ人中村生話(シ)に、宍粟邊山(シソウヘン)「ヨセノ村ニハ今ノ一町一段ト云フツモリナク、一代ト云コト有テ、其廣狹同ジカラズト云フ、所ニテモ知ラズ」とありて、播州に限

らず、邊僻の地には今も代の名存在せる國もあるにや、予土佐國蠹簡集を閲するに、弘安より慶長迄の田地古證文に、代を書載たる數十通あり、四國にては一段以下の小割に代を用ゆる事、大・半・小の如くせしと思はる、しかし一代の地は何程といふ事、古文書數目の字に傳寫の誤ありて、算勘も合ひかね、分明には知りがたけれど、幸に二通それとも思はるれば、こゝに擧ぐ

土佐國幡多郡上山鄕御地撿高目錄

本田貳百六拾貳町三反廿七代

惣田數合參百八拾四町九段四拾代四分勺內

出田百廿貳町六反拾三代四分勺

案、本田出田の高を合せて惣田數と可ㇾ成筈なれども、數目の字誤多く、勘算合し難し、下同じ

右　內

上田拾八町七反廿七代勺　　上出八町五反廿八代四分勺
中田四拾五町四反十七代壹分勺　　中出廿四町七反卅代三分勺
下田九拾五町三反卅五代壹分　　下出五拾九町五反二代五分勺
上屋敷壹町九反四拾壹代壹分　　上屋出三反四十代二分勺
中屋敷六町四反廿九代二分　　中屋出二町五反四十六代四分勺
下屋敷拾六町四反卅九代二分勺　　下屋出五町八反八代五分
上畠五町四反十七代四分　　上畠出四十七代壹分
中畠五町六反十四代二分勺　　中畠出二町八反卅七代四分

下畠四拾一町四反四十六代壹分勺　　下畠出十七町六反廿三分勺
荒三十町七反五代四分勺
外切畑拾八町五反十三代二分勺
已上
本田拾貳町八反拾九代壹分
合拾五町五段卅三代勺內　　大用村
出田八町七反十三代五分勺　　上山岡元給
右　內
上田七反四十二代　　上出二反廿三代
中田壹町五反廿壹代二分　　中出六反五代二分勺
下田五町五反十六代五分　　下出壹町六反十六代五分
中屋敷二反廿代　　下屋出十六代
下屋敷九反卅代四分　　下畠出二反二代四分
下畠二町二反廿二代二分
荒壹町五反十六代
外切畑四反四十七代二分
慶長三年七月九日算用　　本田貳百七拾五町壹反卅六代六分
都合三百九拾五町三段勺　山三右　花押

荒三拾壹町壹反四代二分　　出田百廿五町三反廿七代四分

此內　　山三右　花押

外切畑拾九町十代四分勺

慶長二年

正木右兵衛　花押

國澤右近　花押

松田七左衛門　花押

横山二右衛門　花押

黑岩治部　花押

右幡多郡上山大莊監中屋市左衛門藏ノ、今按スルニ、山三右ハ則山內三郎右衛門監ス二田苑ヲ一、故此書加フ二印證ヲ一云フ

沽渡行宗名永地田畠子事

合二反十代　山地支

一所流田一反十代　　一所居內前廿五代

一ミヲフヤ十代　　一ミ名ロ十代　同ヲク五代

右件仍田畠等山地者ハ、同主馬允重代相傳名相互要用有ニ、銅錢三貫五[虫]文代ノニ、福井孫次郎殿處ヱ永代限沽渡ヲ

所實也、但限有所御朱公事無₂懈怠₁可₂辨進₁候之若又致₂此地₁凌₂亂妨₁候者爲₂向却不敎子₁候者也、

仍爲₂後日₁沙汰沽渡狀如ㇾ件

康安元年十二月十八日

行宗馬允 花押

右行宗彥八所ㇾ藏

前の文書數目の字誤寫多く、算勘合かぬれど、たゞ外切畑拾八町五段十三代二分勺、同四段七代二分の二口にて、拾八町九段六拾代四分勺なるを結びて、外切畑拾九町十代四分勺といへる一條と、後の文書に一反六拾代を結びて、合二反十代とあるにてみれば、五十代を以て壹段とする事分明なり、左すれば土佐の國に用ゆる代は、古の代とかはることとなし、播州の代はいかなるにや

〇町段畝步ノ考附間竿尺寸ノ考

雜令云、凡度ㇾ地、五尺爲ㇾ步、三百步爲ㇾ里

令集解引₂和銅六年二月十九日格₁云、其度ㇾ地、以₂六尺₁爲ㇾ步

孝德紀云、大化二年春正月、凡田長三十步、廣十二步爲ㇾ段、十段爲ㇾ町、段租稻二束二把、町租稻二十二束

又云、白雉三年春正月、班田既訖、凡田長三十步爲ㇾ段、十段爲ㇾ町段ノ租稻一束半、町ノ租稻十五束

田令云、凡田長卅歩、廣十二歩爲段、十段爲町（義解云、謂段地獲稻五十束、束稻舂得米五升也、卽於町者、須得五百束也）段租稻（義解云、謂田賦爲租也）二束二把、町租稻廿二束

拾芥抄云、凡田以方六尺爲一歩、卅六歩爲一段頭、一段爲一町頭、十段爲一町積、令抄云、雜令云、度地、五尺爲歩、三百歩、爲里、物記云、令五尺爲歩、格六尺爲歩、卽依格文可加一尺者、愚按、司馬法、六尺爲歩、今令五尺爲歩、蓋本朝一尺以周一尺二寸爲尺、故曰五尺、又曰六尺、皆無相違□制度通云、古ヘ五尺ヲ一歩トシ、今ハ六尺ヲ一歩トスルノ異同アリ、然レドモ古ヘ土地ニテ五尺ト云ハ、卽今ノ六尺ナリ、總別古ヘハ度量衡トモニ大小ノ二樣アリテ、田地米穀ヲ量ルニ、大升長尺ヲ用ヱ、土地ノ廣サヲ積ルニハ、一尺ノ尺ヲ用ヒテ一尺トス、是ヲ大尺ト云フ、一尺ノ內ニテ二寸ヅヽノブレバ、一歩ニテハ六尺ナリ、然レバ古ヘハ五尺爲歩ト云モ、今ニテハ六尺一間ナリ、令ノ文ヲ詳ニスベシ　又云、一歩一段ノ積リ、拾芥抄ニ載スルトコロ、令ノ文ト異ナルコトナシ、其內令ニハ、五尺四方ヲ歩ト云、拾芥ニハ、六尺ヲ歩トスルノ別アレドモ、今ハ長尺ヲ以テ積リタル者ニテ、是又カハルコトナシ

本朝度制略考云、本朝古ノ大尺、唐制ニ承タルト云事、其明證ナシト雖ドモ、法令萬緒十ニ八九ハ唐ニ承タル事、律令以下ニテ見ツベク、且後成恩寺關白、（令抄）及貝原篤信、（和爾雅）中村迪齋、（三器攷略）中根元珪、（律原發揮）荻生徂來、（度量考）伊藤原藏、（制度通）等ノ一公五儒モ、齊シク唐制ニ承タリト云フ、中ニ就テ徂來ハ吾稟ニ唐

制、國史可證ト記シ、淡海公作令、明云五尺爲步、三百步爲里、此其承唐制者也」ト記シテ徵證ヲ擧タリ、如此ナレバ蓋唐ニ承タルノ說ニ從テ可ナリ、但案ズルニ、唐ニハ大尺玉尺アリテ、玉尺一尺二寸ヲ以テ大尺トシ、而シテ大尺ヲ常用尺トシ、玉尺ハ只鐘律ヲ調ヘ、晷景ヲ測リ、湯藥ヲ合セ、及冠冕ノ制ニノミ之ヲ用ユルコト、異邦ノ書ニ見エタリ、本朝令ノ時ニハ、大尺ト小尺ト有テ、小尺一尺二寸ヲ以テ大尺トシ、小尺ヲ常用尺トシ、大尺ハ只地ヲ度ルノミ、之ヲ用ユルコト雜令ニ見エタリ、然バ令ト唐ト用ユル所ノ制同ジカラズ、若令ノ大尺ハ即是唐ノ大尺、令ノ小尺ハ即是唐ノ玉尺トイハバ、器物ノ類唐ニテ一尺ト稱スルハ、令ニテ一尺二寸ト云ニ合ヒ、令ニテ一尺ト稱スルハ、唐ニテ八寸三分三厘三毫强ト云ニ當ルベシ、夫如此ナラバ何ゾ唐制ニ承タルト云ハン、五儒皆唐ハ大尺ヲ常用尺トシ、令ハ小尺ヲ常用尺トスル事ヲ記得セズ、其所說疎ナリ、田令集解ヲ案ズルニ、「古記云々一作間田十長卅步、廣十二步爲段、卽段積三百六十步、更數段積爲二百五十步、重複、改爲二百步、又雜令云、度地以五尺爲步、又和銅六年二月十九日格、其度地、以六尺爲步者、未知(用イ)令格之赴、幷段(步イ)積等改易之儀、請其分釋无使疑惑也、(ナシイ)幡云令以五尺爲步者、是高麗法、(用イ)田爲度地令便、而尺作長大、以三百五十步爲段者、亦是高麗術即以高麗五尺准今尺大六尺相當、故格云、以六尺爲步者、則是令五尺內積步、改名六尺積步耳、其於地无所損益也、然則時人念令云五尺、格云六尺、即依格文可加一尺者、此不然、准令云五尺者、此今大六尺耳」トアリ、案ズルニ、五尺ヲ一步トスルハ、

即是唐ノ制ナレバ、高麗モ亦五尺ヲ一歩トスルトテモ、本朝ハ唐ニ承タリトモ云フコトヲ得ベシ、然レドモ地ヲ度ルニ便ナルガ爲ニ、度地尺ノミヲ長大ニスル事ハ、唐制ニハ無キ事ニシテ、令ノ時ハ然リ、蓋是高麗ニ承タルナルベシ、本朝孝德ノ比ヨリ、萬事皆唐制ニ摸ストイヘドモ、其以前ハ然ラズ、神功皇后ノ三韓ヲ服セラレシヨリ、數世ノ間三韓頻ニ貢調ス、蓋孝德ヨリ以前、高麗ニ承テ度地尺ヲ制シ、和銅六年マデ之ヲ用ヒタル歟、是即令ノ大尺ナリ、其常用尺ハ孝德以前ニ用ユル所、何ナル尺ト云フコト知ベカラズ、孝德ノ比ヨリ用ユル所常用尺ハ唐制ニ承テ、唐ノ常用尺ナルベシ、是即唐ノ大尺ニシテ、令ノ小尺ナリ、其和銅六年二月十九日ノ格ニ、六尺ヲ以テ一歩ト爲ス事、第一段ニ引タル物記ノ如クナレバ、一歩ノ大サヲ改メラレシニシテ、尺ハ故ノ如シ、田令集解ノ古記ノ說ノ如クナレバ、尺ヲ改メラレタルニテ、一歩ノ大サハ故ノ如シ、此兩說ヲ折衷セントスルニ、此格文今存セル類聚三代格六卷ノ中ニ無シ、但日本紀ヲ考フルニ、「和銅六年二月甲午朔壬子、始製ニ度量調庸義倉等類五條ノ事語具ニ別格ニ」トアリ、又「同四月戊申頒ニ下新格、幷權衡度量於天下諸國ニ」ト見エタリ、一歩ノ大サヲ改メラレタルノミニシテ、尺ヲ改メラレズバ、製度量ト云ベカラズ、況又四月ニ度量ヲ天下ニ頒下スベカラズ、是此時尺ヲ改メラレタルガ故ト見エタリ、其改メラレタル所ヲ察スルニ、此時マデ度地尺ニ用ヒラレシ高麗尺ヲ止テ、是マデノ小尺ヲ大尺トシ、其大尺ノ六分尺ノ五ヲ以テ、初メテ小尺ヲ造リ、而シテ其大尺ヲ度地以下ノ常用尺トシ、小尺ハ只晷景ヲ測リ、湯藥ヲ合スニノミ、之ヲ用ユル

事延喜雜式ニ載タルガ如クナルベシ、故ニ令ニ五尺ト云ト、格ニ六尺ト云ト、名ハ異ニシテ實ハ同ジク、一步一段一町等ノ地ニ至リテ、損益スル所ナキ事、古記論ゼルガ如クナルベシ、然レバ和銅六年ニ至リテ、大尺ハ唐ノ大尺ニ同ジク、小尺ハ唐ノ玉尺ニ同ジク、而シテ大尺ヲ以テ常用尺トシ、小尺ヲバ晷景湯藥等ニノミ用ユル事、全ク唐制ニ承タルト見エタリ、是ヲ相承テ延喜ニ至レバ、式ノ大小尺ハ唐ノ大小尺ニ承タルトイフベシ、以前論ズルガ如クナレバ、令ノ大尺ハ高麗ノ制ニ承テ、地ヲ度ルニノミ之ヲ用ヒ、和銅六年ヨリ是ヲ大尺ト名ヅケ、猶常用尺トシ地ヲ度ルニモ亦之ヲ用ユ、卽是今ノ曲尺ナレバ、當時ニ至ルマデ常用尺トシ、地ヲ度ルニモ是ヲ用ユ、和銅六年ヨリ以後ノ小尺ハ、唐ノ制ニ承テ晷景ヲ測リ、湯藥ヲ合スニノミ之ヲ用ユ、此尺イツノ世ニ止ラレタルニヤ、今ハ無シ、

鼎案ずるに、小尺は今工匠用ゆる所の曲尺ゆへ、曲尺の一尺二寸は今の呉服尺にて、卽大尺の一尺也、さすれば大尺の五尺は、小尺の六尺にして、令と格と地の廣狹に於ては損益なき子細は、集解に、古記を引て云るが如くなるべし、かく尺に大小の二樣あるは、唐の制にして、本朝もそれを承て二樣に制すといへども、大小ともに尺に少しづゝの不同ありて、彼と此と一樣ならざるは、所傳の異なるなり、いづれを是とし、いづれを非とせん、但諸儒の唐に承たりと記せるは、尺に大小二樣ある事を指して、尺の分寸迄をいふにはあらず、唐六典に、「凡天下之田、五尺爲レ步、二百有四十步爲レ畝、百畝爲レ頃、和名抄、引二唐令一云、諸田廣一步、長二百四十步爲レ畝、畝百爲レ頃」といひ、又「度以二北方秬黍中者一黍之廣一爲レ分、十分爲レ寸、十寸爲

尺一尺二寸爲二大尺一、十尺爲レ丈云云、凡積二秬黍一爲二度量權衡一者調二鍾律一、測二晷景一、合二湯藥一、及冠冕之制則用レ之、内外官司悉用二大者一」とあれば、鍾律・晷景・冠冕に小尺を用ひ、大尺をば内外官司の常用尺とし、又地を度るも大尺を用ゐる事、本朝の令に、「度レ地五尺爲レ歩」と同じきゆへ、度制略考に、五尺を一歩とするは、即是唐の制なれば、高麗も亦五尺を一歩とするとても、本朝は唐に承たりとも云ことを得べし、然れども地を度るに便なるが爲に、度地尺のみを長大にする事は、唐制には無き事にして、蓋是高麗に承たるなるべし、孝德より以前、高麗に承て度地尺を制し、和銅六年まで之を用ひたるが、是即令の大尺なりといへど、唐とても尺を五尺に制するは、何の爲なるぞや、地を度るのみならず、總じて便用の爲なるべければ、これを以て高麗法と限りていへるはいかゞあるべき

制度通云、本朝ノ古ヘ、歩數ハ唐ニ準ジテ、五尺ヲ一坪トス、一段ハ三百六十坪ナリ、一町ハ十段ニテ三千六百坪ナリ、町ハ唐ノ頃ニ準ジ、段ハ唐ノ畝ニ準ジテ廣狹アリ、今ハ三千坪ヲ町トシ、三百坪ヲ段トス、又段ヲワリテ一トセト云フコトハ、何レノ比ヨリ始ルコトヲ知ラズ、又云、唐ノ歩畝頃本朝ノ歩段町ニ準ズ、田地ニ段ト云コト、漢土ノ積リ見當ラズ、然レドモ一シキリヲ段ト云コトハ、後世マデモ多ク見ヘタリ、田地ニ町ト云コト遂ニ見當ラズ、左傳魯襄公二十五年ニ曰「町二原防一」ト、杜氏ノ集解ニ云、「堤防間地、不レ得三方正如二井田一、則爲二小頃町一」ト、賈逵曰、「原防之地、九夫爲レ町、三町而當二

一井ニ也」ト、コノ說據本ヅク所ナキニヨリテ、先儒モ取用ヒラレズ、然レドモ町ヲ以テ田地ヲハカルコト是ニアラハル、本朝町段ノ名モ是ヨリ出ルナルベシ、字彙ニ町ノ字ヲ解シテ云、田區畔埒ナリト、田地ノシキリヲ云フ、又段ノ字ト相通用スト見ヘタリ、又段ノ字今ハ反ノ字ヲ用ユ、是ハ段ノ字、草字反ニ似タルユヘニ、訛傳シテカクノ如シ

鼎案ずるに、一段は一シキリといふ義なるべし、唐書に、「朱仁軌誨ニ子弟ニ云、終身讓レ畔、不レ失ニ一段ニ」明律に「移レ坵換レ段」など、いづれも田地の上にていへるなれど、三百六十歩を一段と積りたるは、本朝の創制にて、唐土に例なし、畝も日本風土記殘編に、「假粟幾丸幾畝幾字、田幾閘田幾毛幾文」などあれば、古く云へる事の樣なれど、三十歩を一畝とするは、天正年中太閤檢地以來の積りにて、それより以前はなき事也

地方落穗集云、人皇四十五代聖武帝の勅によりて、行基泰澄吉備公田畑を分て、六尺四方を一歩とし、三百六十歩長三十歩横十二歩を一反とし、十反を一町とするなり、上の土地一反に生ずる米拾二合の桝を以て三石六斗京桝ニ直シ四石二升と云へり、中下の土は國により鄉に隨ひて土の品々あれば、是を略す

田園類說云、壹間は六尺四方、壹反は三百六十歩、拾反を壹町とする事往古の定なり、中古より三百歩を壹反とし、其後大・半・小といふこと起り、今の石高になりて、三十歩を壹畝とし、十歩を壹反とする事、一統の通法となりたる也

和漢三才圖會ニ云、中古方六尺五寸爲レ歩、其三十歩爲レ畝、其十畝爲レ段、天正中復用ニ六尺法ニ、其三十歩爲レ畝、十畝爲レ段、十段爲レ町、今從レ之

律原發揮ニ云、本邦以ニ方六尺三寸ニ（以ニ曲尺ニ算レ之）爲ニ一歩ニ、三十歩爲ニ一畝ニ、十畝爲ニ一段ニ、（計三百歩）十段爲ニ一町ニ、（計三千歩）

續農家貫行ニ云、往古は田壹反三百六十歩なり、此田の出來稻一歩壹升毛の積り、籾三石六斗あり、舂米にして壹石八斗となる、一年三百六十日なれば、一日に五合に當る、是一人の食分の地なる故に、人の賞祿を一反の命といふ、又云、往昔は一反三百六十歩なり、俗に是を太閤檢地といふは非なり、天正以前の水帳に一反三百歩とあるあり、今越後國下條水原等の村は、一段三百六十歩とあり、此外にもありや、三百歩にはいつの頃よりなりたるや

讀史餘論ニ云、此人（太閤秀吉を云）天下の田を丈量するに、古法を變じて三百歩を以て一段とす、古の說に三百六十歩を以て一段とする事、一歩を以て一夫一日の食として、一年の食分に充といふ、然るをかく約られては、一年のほど六十日の食を失へり、夫に當代六尺の繩を用ひられしかば、古の三百歩の中にして二歩半を失へり、民いかでか窮せざらん、されど此法再び古に復せん事、井田一たび變じて復し難きが如くなるべし、思ふに此人の丈量せられしは、昔の如くに或は一國一郡一庄をあたへんには、六十六州の地猶足らざるを思ひて、かくは計られしにや

白石遺稿ニ（問田歩）云、天正中太閤天下の田地へ繩を入られし時、世の人申候者、上古以來一段の田を三百

六十歩に定められ候事は、一歩を以て一日の食にあて、一年の食料とせられし所に、此度關白殿の三百歩を以て一段と定められ候得ば、一天下の人民、凡一年の食料六十日分を減じ申候、いかにも是にて末のよきこと可レ有レ之歟と申たる由にて、其事を歌に作りうたひ候者、近き頃まで殘り候と申候き、右按ずるに、前說は非と申すべく候、其故は古法方六尺を一歩として三百六十歩なり、太閤の法は方六尺五寸を以て一歩として三百歩なり、當時の法は方六尺を一歩として三百歩なり、右の樣に候得者、一天下の人民六十日分の食料を減じ候と申は、當時の繩の事にて候歟、太閤の時歩數をば減じ候共、繩をば五寸づつのべられ候き、是又朝三暮四の術に出候といへども、今の如くに六十歩までの減じはなき積りにて候、是に依て奉レ問

古法方六尺爲二一歩一、三百六十歩爲二一段一、近法方六尺五寸爲二一歩一、三百歩爲二一段一、右の差引いか程の減になり候歟、今法方六尺爲二一歩一、三百歩爲二一段一、近法と今法とは、又いか程の減になり候歟

鼎案ずるに、大化以後大尺にて、六尺を以て一歩とする事は、天下一統の制度なれども、鎌倉以來武家の世となりて、國に守護職、庄園に地頭ありてより、古の制度は日にまし失せ月まして亡び、ましてや戰國封建の世に及びては、我領國は己が心々に取扱ひ、一定せる事なければ、いつとなく六尺五寸、又は六尺三寸を一歩とする所も、國により鄕によりて土地の歩廣なるままに、私に古制の樣に申傳へし事も有て、一定せざるは亂れし世の常なれば、左もありぬべし、太閤天下一統せられ

しより、一歩を六尺三寸とし、三十歩を一畝とし、十畝を一段とし、十段を一町とする事にはなりし、此人微賤より起りて、累世名家の舊諸侯を壓倒し、遂に天下一統の功業を立られし所以は、全く賞の重きを行て人心を得るにあり、後日天下平治の世になりても、勢の至る所今更に賞を吝せんも本意なく、さればとて心のまゝに一國一郡一庄を功臣寵人にあたへんには、六十餘州の地も足らざる事を思ひて、天正の比天下を檢地し、かくは定められしにて、世に是を太閤檢地とも、又天正の石直しともいふ

日本紀通證云、中古之制、方六尺五寸爲一歩、卽一間也、天正中復用六尺、蓋準古五尺

退私錄云、太閤の時の繩は六尺五寸也、其後六尺繩になる、是は稻葉濃州の致されしといふ

安齋隨筆後集云、田地一反三百六十坪は、一年三百六十日の民の食なり、太閤秀吉一坪を六尺に定め、稻葉美濃守五尺八寸に定むといふ、又云、京間一間は六尺三寸、あひの間六尺、田舍間五尺八寸也

律原發揮云、本邦以曲尺六尺五寸爲一歩、俗稱一間、路程用之、又以六尺三寸爲一歩、俗稱京間、毎兩席二間設一間一箇、其濶四寸、折半之配

一間、則得二寸、以減六尺五寸、餘六尺三寸爲二席一間之法、算田積用之　　又以六尺爲一歩、俗稱田舍間

瓊矛拾遺云、紫宸殿・淸涼殿等七尺間也、此凡伸中指以十爲間、臣下之屋作、凡伸中指以九爲間、故以六尺三寸爲疊間

成形圖說云、或曰く、文祿よりの歩法六尺三寸一歩は、是畦を除て究めしなり、或は六尺五寸には畦を

加へて究む、是近來の事なり、田を人家にくらべ見るに、田の畦は家の敷居の如し、文祿の歩法六尺三寸方は疊二帖の定尺なり、これを家の間に積るに、六尺三寸は柱の中間毎に當る、其柱横六敷の家は六寸角、八敷の家は八寸角にて、家の長四角方の所に、柱の幅に敷居を入て、其間に横三尺一寸五分、縱六尺三寸尺の疊を敷て、廣からず狹からず合る賦りなり、然らば小き畦をこめて打には、六尺五寸裕なく打ち、大きなる畦を加て打には、其心得もあるべき事なり、又檢竿の長さ六尺五寸もあり、六尺三寸もあるを以て見れば、是畦を除きて究むる法なるべし

地方答問書云、家作等の間積りには、六尺三寸又は六尺五寸も用ひ候、田畑の歩積りにも、中古天正中以前の頃迄は、六尺五寸を用ひ候と申傳へ候、文祿年中の頃秀吉公の命にて、諸國檢地の時、六尺三寸を用ひ候と申傳へ候得共、右何れも書記し候儀も無之事故難信用候、慶長元和の頃よりの檢地竿は、一丈二尺二分を用ひ來り候、一間を六尺一分と定め、一間に一分づゝの餘計を加へ來り候儀、前々よりの格例に候、今以て公儀の檢地御條目に、一丈二尺二寸竿を以て檢地可仕旨書載有之候事

鼎案ずるに、此答問書は享保年中德廟の御代地方功者とありて、御代官より御勘定吟味役迄昇進せし辻六郎左衛門の筆記せる書なり、當時地方の事に付、諸向よりの問合せに答、又は自分見聞せる事共を、前後の次第もなく記したる覺書の稿本にて、書名もなきを子孫たる者取集め、假に地方要集、

又は地方集要など外題し置けるを、何者か私に地方答問書と名付たる也、されば答問書は原本の本名にあらざる故、今こゝに地方要集とか、集要とかいふべきなれども、世人答問書なる事を知らず、別書と心得違すべければ、姑く世稱に隨て答問書といふ、下同じ

三器攷略附録云、中葉以來、以曲尺六尺五寸爲歩、此歩法未審其所始、或謂昔者量地之竿、長一丈三尺、併二歩計之、人立提竿中間、兩端迭昂低、遞點地以進行、首尾接續以度之、蓋取其簡捷也、今考之、人立提竿在腰間、去地可二尺五寸、乃以二尺五寸爲勾、地歩六尺爲股、而依術求之其弦適得六尺五寸、故制竿、兩頭各六尺五寸、通長該十三尺、後人誤用此竿、就地面度之、竟以六尺五寸爲歩、而丈三之竿、迄今尚未之改耳○元和以降、新田法、六尺五寸爲歩、三十歩爲畝、十畝爲段、十段爲一町、此書合攷、並用此法、近歳又撿地、用六尺之竿、他如舊法、以其未久故、此不取之

田園類説云、三器攷略に、中葉以來六尺五寸を歩とすといへるは、上方筋には古撿の村とて、六尺五寸竿、又六尺三寸竿の場所と申傳へたる所あるを以て、かくいへども、其村々の撿地帳は勿論、其外何にも記したる事はなし、畢竟地面の歩廣なる故に、申傳へたると見へたり、是によりて憶たる事ともせず、或説を擧て土地を量るには、六尺壹間の積りなれども、量地はかゆく樣に、竿をば壹丈三尺にして、其中を提て兩端を地へ付け、印を付て見るに、地より拳まで大概二尺五

寸計りと見て、六尺五寸を弦とし、二尺五寸を鈎として、算法によりて股を出せば、地面六尺のものの二つなるを以て、捗行の爲に壹丈三尺竿を制したるを以て、後の人誤て六尺五寸壹間の所もあると思へるとは、左もあるべき事也、信州飯山に住せし人に知れるものあり、そのかみ城主に仕へ、撿地又は地改杯に度々出し事あり、間竿の尻を兩手にて持、我胸に竿の尻を當て、竿先を地へ付て印を付け、二間四間六間とかぞへさせぬる由、これも右の説に同じく、壹丈三尺を弦とし、地より胸まで四尺五寸計りと見て、是を鈎として股を出せば、地面壹丈二尺二分內となれば、手廻しのため壹丈三尺竿を用ひしと見へたり、又元和以降新田の法六尺五寸を歩とすといふ事、聞傳へ記すと見へたり、是は開發以前新田を割渡す時の事を心得違ひて、かくいへるなるべし、最初の割渡しには、其節役人の心々にて用ひし事なり、享保年中南北武藏野・上總國千町野新田など、最初の割渡しには、いづれも六尺五寸竿を以て渡し置き、開發なりて本撿地の節は、御定めの通り六尺壹分竿を以て撿地極る事也

地方細論集云、田園類説に、新田見立の節六尺五寸の積りを以て、大積りの撿地いたし置き、本撿地高入の節は、御定めの六尺を用ゆとあるは無之事也、總じて廻撿地の時は、六尺間水縄、或は貳間貳分の竿を以て、百間に付何寸と繪圖面に反別を付け積るなり、然る時は如何樣に致し、六尺五寸の繪圖面に直し可申哉、然る上は六尺間の積りにて、內二割を以て堤敷・道代・溝代・畔代の

分、大積り百町と出候はゞ、貳拾町除の八拾町と可レ記事也、撿地の節審に改むべし、又云、田園類説に、壹丈三尺の竿は捗行の爲めとあり、左あるまじき事か、古工匠の法に、上方間六尺五寸、江戸關東間六尺、田舍間六尺三寸、右を考るに、田園類説は心得違なるべし、然れども引付を以て用ひ來れば、誤りにもなる間敷、身體を鈎股弦に用ひて、大方六尺間可レ成趣は的中なし、古檢一反三百六十歩ある故に、六尺五寸間と云なるべし、旣に中國石州邇摩郡一圓に六尺五寸間と云、檢見の時は其心得にて苅るなり、六尺間竿にて坪刈樣に候ては、六十坪の損あるゆへなり、六尺の古法考る時は。六尺五寸と云法は無レ之事なり、然ども六尺五寸と心得候村々は、古檢三百六十坪の積りを以ての心得なり、然る上は六尺五寸を用ひ可レ然也、又云、六尺五寸間一間と見る時は、尺坪四十二坪二合五勺なり、六尺間と見る時は三十六坪なり、差引右坪六坪二合五勺六尺五寸間の方多し、是を一反三百六十坪へ懸け、又一坪の法三十六坪を以て割る時は六十二坪五勺、いづれにしても算用不レ合なり、一反三百六十坪は、六尺五寸より出候法にては無レ之

鼎案ずるに、三器攷畧に、丈三の竿を鈎股弦に積りたるは、附會と云べし、田園類説に、信州飯山の人も、鈎股弦の法を用ひし由にて引證すれども、これは私領方一種の法にして、天下に通用すべきにあらず、當今にても國持家には樣々の仕法ありて、前々家格を以て取計ひ、一樣無レ之事は封建の世の常にして、引證しがたし、又按ずるに、六尺五寸一分の尺坪は四十二坪二分五

厘なれば、一反三百歩の積りにて、此尺坪一萬二千六百七十坪となる、又六尺四方一分なれば、此尺坪三十六坪にて、一反三百六十歩に積りて、尺坪一萬二千九百六十坪となる故、一反の上にて尺坪二百八十五坪反歩にて、七歩九厘餘古の方過となる、依レ之地方細論集に、一段三百六十坪は、六尺五寸より出し法にてはなしといへる也

地方初心集云、昔は六尺五寸棹にて、三百六十歩を一反と定む、近代は三百歩を一反とす、棹も段々短くなり、六尺三寸、或は六尺二寸、六尺と棹にも段々ありと見へたり、棹の違ひ六尺五寸を六尺に直せば、一畝廿二歩の違ひあり、又六尺五寸を六尺三寸に直せば、一反十九歩になる、六尺三寸を六尺竿に直せば、一反一畝となるなり

鼎案ずるに、以上の諸説書入ありて、いづれを是と定めがたけれども、予を以て見るに、六尺五寸一歩を以て中古天正以前の制といへるも、天正以前天下一統の制にてはあるまじけれど、土地の歩廣なるは士民ともに利あり、故餘地あるまゝに古の様に申ならし、多くは里程を量る六尺五寸の間竿をおしあてがひ、六尺五寸一歩などいひ傳へしなり、長曾我部元親の百箇條に

一尺杖の事、城普請其外何によらず、本間六尺五寸たるべき事、付田地は可レ為二格別一事

とあるなどにて知るべし、是とても亂れし世の習ひにて、一定せる事にはあらじ、太閤一統の世に及びて、天下の檢地せられ、古の三百六拾歩一段を、三百歩一段と定めしを、天下の人民一年

の食料六十日分を減ぜしとて、人々嘆き其事を歌に作りうたひし由なれば、其頃民心の動揺せしこと思ひやらる、且六尺五寸壹分を六尺壹分とせられんには、一段の上にて五十二坪八勺三の減あり、（六尺四方の尺坪は三拾六坪、六尺五寸四方の尺坪は四拾二坪二分五厘ゆへに、壹歩に付六尺五寸四方の方六坪二分五厘多し、此尺坪三百歩の上にて千八百七拾五坪也、是を六尺四方歩に直し、五十二坪八勺三となる）すでに一段にて六十歩の減ある上に、又五十二坪餘も餘歩打出さんに、天下の民いかでか窮せざらん、元來士民の私にもせよ、一概にかく改正せば、民情に戻り指支ゆる事あるべし、地方答問書に、文祿年中の頃、秀吉公の命にて諸國撿地の時、六尺三寸の竿を用ひ候と申傳へ候とあるは、尤の樣に思はる、又書記し候儀も無レ之故難ニ信用一候といふは非也、予嘗て勢州の友人細木某に、太閤撿地の事を問合せしに、勢州南北とも、文祿三年六月十七日御朱印にて、撿地役は羽柴下總守・服部采女・稻葉兵庫・岡本下野守・一柳右近大夫・朽木河内守・新庄東國の七人にて、間竿は六尺二寸の由なれど、いづれの撿地帳奥書にも間竿を書載たるは見當らずと答へられし、しかし勢州とても廣き事なれば、いづれにか間竿のある撿地帳の存在せざることはあるまじと思ひ、彼是と問合せしに、一友人の許より大和國式上郡三谷村にて見當りしとて寄示さる、大和國文祿四年太閤改撿地有レ之、式上郡三谷村も同年八月十八日小堀新介撿地にて、奥書に云

六尺三寸竿を以て五間六十間、三百歩一反定申候

ことあり、又其後勢州須ヶ瀨村渡邊六兵衞が家に、所傳の太閤の撿地條目を書寫して贈らる、原本

拙筆にして、古く損すれば難₂讀₁、文義分り乖る所もあれど、其儘に寫すと云

就₂伊勢國御撿地₁相定條々

一田畑屋敷六尺三寸棹を以、五間に六十間三百歩を壹反に可₂致₁撿地₁事

一上田壹石五斗、中田壹石三斗、下田壹石壹斗、下々見計可₂相定₁事

一上畑壹石貳斗、中畑壹石、下畑八斗、下々見計可₂相定₁事

一屋敷方壹石貳斗たるべき事

一山畑野畑川田多先斗代官屆け、其上見計代可₂相定₁事

一山手錢鹽濱小物成の事、先指出申付、其上見計年貢可₂相定₁事

一在々の上中下、幷井懸り麥田日損水損、念を入見分、斗代可₂相定₁事

一村切榜示を立、入組無₂之樣に可₂相定₁、今迄榜示相紛候は、隣鄕の上使申談、新榜示界可₂相定₁事

一升は京升に相定、則撿地爲₂奉行₁在樣に京升を相調可₂遣、前の升を悉集可₂取上₁事

一撿地面百姓にもうつさせ請狀申付、以₂來斗代違棹違箏無₁之樣に可₂申付₁候、則撿地爲₂奉行₁、其在々の長面に仕可渡□□

一如₂御法度₁自賄に可₂仕候、但さうじ薪ぬかわら、地下人に尤可₂被₂召遣₁之事

一給人百姓にたのまれ禮儀禮物を取、私曲の族有₂之ば、互聞付次第遂₂糺明₁、さほ打のもの不₂相

届ニに付而は可レ加ニ成敗一、主人相紛付而は、無ニ用捨一在様に可レ令ニ言上一事

右之條々相守、下々迄此一書を遣、さほ打に可ニ申付一也

文祿三年六月十七日

御朱印

羽柴下總守どの

服部采女どの

稲葉兵庫どの

岡本下野守どの

一柳右近大夫どの

朽木河内守どの

新庄東國どの

右六兵衛は由緒ある舊家にて、先祖渡邊筑後守男四郎左衛門尉、北畠家より永祿・天正の頃木造左衛門尉の目付として須ヶ瀬村へ移住し、其後兩家に分れ、太閤撿地の時兄を仁右衛門、弟を四郎兵衛といひ、同村の庄屋を勤め、撿地にあづかりし由、其頃仁右衛門の筆記せる古き書きものゝ内に

一太閤樣御撿地、文祿三年甲午年一柳左近殿御打被レ成候、仁右衛門地方は御宿を仕、大繩に請申候

古來撿地六尺坪にて

一長六拾間横六間　此步三百六十坪壹反也

其後撿地六尺五寸坪にて撿地有

太閤樣御撿地六尺三寸坪也

一長六拾間横五間　此步三百坪壹反也

是六尺坪は三百三拾步七分五厘に成る、然れば元壹反にて廿九步貳步五厘づゝ出也

此三通にて太閤撿地の六尺三寸竿、三百步壹段なる事知るべし、明良洪範云、高木仁右衛門入道宗夢秀賴に答曰、往古より日本の田畠六間六十間を一反と定め置れしを、長束大藏と云算勘人を愛し、渠が奸智を用ひ五間六十間に竿を縮めて、日本の檢地を改めらる　文祿の檢地は即天正の石直しにて、同時なるべければ、其頃よりして世もようやく治平におもむきし故、をひをひに田地へ繩を入れ、亂世の弊風を改められしにて、世にいふ石見撿地大久保石見守長安也　備前撿地伊奈備前守忠次也　など、いづれも慶長年中に行はれて、遂に今の六尺壹步にはなりし、橋窓自語云、今時の田園の檢地は伊奈檢地といひて、慶長十五年六月十三日死去せし伊奈備前守忠次の檢地なり、忠次は佐藤某の僕從にて、小童より田園のことに委かりしといへり、備前守の量土以前は大久保石見守が檢地なり、是を石見檢地といふ、これより以前は文祿元年秀吉公の時の檢地なり、此時より六尺三寸の法の出來しと聞傳へたり、今時の新檢地といふは、一段三百坪なり、古檢地には一段三百六拾坪なり　答問書に、慶長。元和の頃よりの撿地竿は、壹丈二尺貳分を用ひ來り候とあるにて知るべし、後稻葉美濃守正則執政の時に及で、天下一統の制度になり、御條目に書載る事とはなりし、故に退私錄には、稻葉濃州の致されしといへるならん、然るを安齋隨筆後集に、稻葉美濃守五尺八寸に定むとあるは、今世

に田舎間を六尺共、五尺八寸共いへるなどにまがひて、心得違ひせしにや、すべて田舎間は六尺二間の家の間に、四寸角の柱ある積り故、疊間を五尺八寸とす、五尺八寸は柱を除きての積り、六尺は柱を加へての積りゆへ、六尺も五尺八寸も、六尺二間の家の間の上にては長短なし、但し今世にいふ京間は六尺五寸、中間は六尺三寸なるを、瓊矛拾遺に、以六尺三寸爲疊間といへるは、これも京間六尺五寸二間の家の間の上にて、柱間二寸除きていへるにて、律原發揮・安齋隨筆後集に、京間を六尺三寸にするも、田舎間を五尺八寸といふの類なるべし、されば上方筋の家作は、京間六尺五寸を壹間とし、關東方は田舎間六尺を壹間とする故、夫に準じて疊に六尺三寸・五尺八寸の不同あるなり

田園類說云、地方答問書に、中古天正年中以前頃迄は、六尺五寸を用ひ候と申傳といふは、古檢の場所はいづれ地面の廣さを疑ひて、工匠家作の間竿を押あてがひに云傳ふることもあるべし、扨檢地竿壹丈二尺二分にて、壹間六尺壹分と定めたるわけは、元祿年中飛驒國檢地の節御條目にも、竿の儀六尺壹間の積り二間竿たるべし、但し壹間に壹歩宛加へ來る條、長壹丈二尺二分竿を以て可打、勿論壹反は可爲三百坪旨有之上は、六尺一間と云は古來よりの御定めにて、壹分づゝ加へ來ると見へたり。予少時知れる老人のいへるは、往古には五尺壹歩六尺壹歩と云ことあるを以て、六尺壹歩の間竿を以て檢地するといふを、いつとなく歩の字を何寸何分の分の字に誤りて、今六尺壹分通法

となれりと云へり、左もあるべき事なり、然れども六尺壹歩とする事通法になりて、檢地帳奥書にも六尺壹分の間竿を以て、壹反三百歩の積り御檢地相極と書來れり、或役人の奥書は六尺壹歩と書て渡せし檢地帳もあると、大和國にて聞し事あり、右の如く六尺壹間といふは古今の通法なるに、其所の申傳へにて、六尺五寸竿古撿の場、六尺三寸竿古檢の所といふを、今更糺明すべきにもあらざれば、其村の傳のまゝにして取箇をも積りて然るべし、美濃の國の堤間數の竿は、古來よりの引付とて、六尺五寸を壹間とす、今更改むべきにもあらず

鼎案ずるに、六尺壹歩は慶長以來天下一統の定制なれども、古檢の村とて、六尺五寸竿の場所など申傳へのみにて、其村の檢地帳を始め、聢と書載たる記錄もなく、たとへあるとても、當時の制度にあらざれば、執用ひにはならざれ共、（太閤檢地の地所には、六尺三寸竿の事を書載たる檢地帳あるなり）上知私領の差別なく、前々の仕來りの通りに被二成置一ば、いづれ村にても當時檢地する時は、必ず打出し餘分有ゆへ、六尺繩を法として、歩廣なるを見ず聞ず、申傳へのまゝにし强て改出し、聚斂の御沙汰なきは、御當代民を愛する莫大の御仁政ならずや、但し當時の間竿六尺に壹分づゝの有餘を加へ、二間竿にして壹丈二尺二寸とする事御規定となれり、何故に壹分の有餘を加へることにや、いかさま田園類說に引ける老人の說の如く、五尺壹歩の名より、いつの頃より歟心得違して誤れるなるべし、又或役人の奥書は、六尺壹歩と書て渡せし檢地帳もあると、大和國にて聞

しなどゝ珍敷事の様にいへど、今は天下一統に検地帳奥書に、六尺壹歩と書て渡す事にて、是等は心附べき事なるに、御代官も手代も疑ひもなく書來れるは、如何なるゆへやらん

又案ずるに、美濃國堤の間竿は古來よりの引付にて、六尺五寸を壹間とする由、いかなる故にやらん、審らかならず、寛政三年辛亥秋の洪水の節、美濃國川々國法御尋に付、御郡代鈴木門三郎被二申上一候、濃州村々御普請國法書の内にも、國法通りにて間竿は六尺五寸壹間を相用ゆとあれば、正徳三年上知御料所に不二相成一以前、井上遠江守領分の頃より仕來る事、引付の法と見へたり、但し六尺五寸は盛り込にて、竿目はやはり御定法通り、六尺壹分に制し分廣なるよし、これもいつの頃よりかくなりしや知る人なし

田園地方紀原卷上 終

田園地方紀原卷下

貫并貫高之考

田園類說ニ云鎌倉將軍家の末、京都將軍家の初より、田地に貫といふ事始りて、知行領知など直に此貫高を用ひて、東國西國四國一統行はれし事也、其後關東にて永高といふ事始りしが、世上にて此貫高と一つ事と思ふは誤なり

鼎案ずるに、鎌倉將軍家以來領知の入高を、其土地の米價の貴賤にあて、貢米の多少を量り錢納にせしより、いつとなく所領の貫を以て唱ふる事にはなりし、然る故に後世の永高にまがひて、混じおぼへたる人あるは誤なり、永樂錢は後小松院の應永以後此地に流行し、貫は其以前よりの稱ゆへ、一樣にはいひがたし、されど永高も錢納の上の名なれば、永樂錢渡りてよりの永高を、又貫高といひしこともあるべし、故に永樂錢渡りてより以後は、貫高にも二樣ある也

太平記ニ云、相模守近國ノ大庄八箇所自筆ニ補任ヲ書テ、靑砥左衛門ニゾ給ヒケル、左衛門補任ヲ啓キ見テ、大ニ驚キテ、是ハ今何事ニ三萬貫ニ及ブ大庄給ハリ候ヤラント問フ

古證文ニ云

奉レ寄二進世良田山長樂寺一

上野國世良田郷後閑三木内作人子善後家在家壹宇、田五段畠二町八反毎年年貢合拾貫文間事

右所者代々相傳當知行無二相違一地也、而且爲二祈禱一、且爲二亡者菩提一、長樂寺所レ奉二寄進一也、子々孫々敢不レ可レ有二子細一、若至二于違亂煩之輩一者、永可レ爲二不孝之仁一、仍寄進之狀如レ件

延久三年辛亥卯月十日

散位源義政花押

又云

上野國新田世良田長樂寺二、永代奉二寄進一畠事

合壹町捌段 一年得分十二貫文所

右件畠者、上野國新田庄小角田村内御堂前有レ之、件畠者長樂寺二依レ有二其志一立二四至堺一、元亨三年癸亥十月十七日寺ノ御使二打渡シ畢、如レ此奉二寄進一上者、於二此地一不レ可レ致二一塵煩一、若子子孫々於レ致二違亂煩一者、滿義跡職一分不レ可二知行一、仍爲二後代龜鏡一、寄進之狀如レ件

元亨三年癸亥十月十七日

源滿義在判

愚案ずるに、滿義は世良田彌次郎也、上一通の年號延久は、延慶の誤寫なるべし、古證文此二

通の外に、滿義より長樂寺への田畠寄進狀三通を書し、都合五通あり、いづれも貫高を裁すれども、煩を省て二通を引證す

北條系圖ニ相模入道高時之下云、領地二十八萬七千貫

又大夫入道慧性之下云、領地十八萬五千貫

鼎案するに、貫高の事東鑑に見へず、又其頃の古文書共に見當りしことなければ、いづれもこれより後の稱なるべし、本文に引證する三書によりて考るに、北條時宗時代より漸く始りて、高時の頃には天下一般に行はれし樣に思はる、太平記にいふ三萬貫の地、後世の十貫百石にて量るに三十萬石也、半減にしても十五萬石なれば、左程の賞を一時に賜はんこと、疑ふべきに似たり、故に貫考に、永樂錢未ㇾ渡以前本邦に通用する錢、一錢は一錢に用ゆる故に、錢賤しく諸物貴し、應永の末永樂錢渡て後は、夫迄通用したる錢に較すれば、永樂は新渡の上品なる錢なる故に、永一錢は所により、三四五錢にあてて通用したる事にて、米價も右に隨て、たとへば古錢一貫文に米一石五斗を買たるも、永樂にては二百五十文前後に買ふ如くなりたり、故に永樂錢未ㇾ渡已前得ニ何貫ニと云ふ地は、錢多く米少し、永樂通用の後何貫と云ふ地は、米多く錢少しとありて、後世永樂錢通行以後の貫高の割合を以て、一樣に論じがたきことをいへど、此考恐らくは非ならん、永一錢を所により三四五錢にあてゝ通用したる事もありつれど、それは民間私の取引相場にて、公法に用ゆる事にてはなし、公法は永樂錢同樣、一錢を一錢に通用せしなり、慶長以後永積りの貫高の公法を以て、慶長以前の貫を例すべからず、されば永樂錢渡未渡の前後にて、貫に貴賤あるは民間の事故、

これを以て公法の貫高を論ずるは、如何あるべきや、殊に知行の貫高は糧高にして、民間賣買の米價の貫と混同すべからざるをや

猶後條に諸書を引て、貫に出入不同ありて、古今一様ならざることを擧て併せ考へば、思ひ半に過ぎん

又案ずるに、此時代前後の米價を考ふるに、百錬抄に、「後堀河天皇安貞二年六月廿四日、以錢一貫文可被直米一石之由、被下宣旨、又寛喜二年六月廿四日甲申、定米價斛錢一貫文」とあり、尤其年は五穀不登して米價騰貴せしゆへ、かく定められしならんかなれども、法曹至要鈔に、「建久四年十二月廿九日宣旨云、應錢貨出擧以米辨償利事、右得記錄所今月二十三日勘狀偁、錢直法、任去年八月六日宣旨狀、一貫文別以米一斛爲正物」とあれば、これによりて其頃の米價を考へ合せなば、大概は推知すべし

夏山雜談云、永祿ノ頃、參河國ハ百石ハ百貫ニ當リシニヤ、三河國住人鈴木八右衛門ト云フ人ニ、十貫ノ地ヲ賜ハリシハ十石ニ當ルナリ、委シクハ深溝家日記ニ見ヘタリ

俗說贅辨續編云、中古地方の知行を計るに、百貫千貫といふ數目あり、今も仙臺には其數名ありといふ、此數西國にて明に知る人なし、武家系圖相摸入道平高時の下に曰く、「領地二十八萬七千貫、當代知行百四十三萬五千石」是田五段を一貫としたるものなり、又或人奥の人に聞たるとて語りけるは、古永樂錢十文に米四合八勺をうる故に、百文は四升八合、一貫は四斗八升、百貫は四十八石に當る、然ば知行百貫といふは、今の知行百石と同じ、後世家によりて知行を藏米にて遣はすに、四つ

八分の免ならしとて、米四十八石を知行百石と名付て遣はすは此の古法なり、今案ずるに、我友人古證を以て決シテ之曰、右兩說皆非なり、土佐國幡多郡中村鄉不破村八幡宮寶藏に、一條家の古文書あり、曰

於ニ本鄉中村一　八幡へ新御寄進田之事

中之前田 一所	壹貫	有間之內	光任小作 彌五郎
ヘシラ松 一ゝ	壹貫分目黑之內		泉（虫）（虫）
大ホトケ 一ゝ	七百五十分		藏橋分
ミツノ下 一ゝ	二百五十分		六石分

合て參貫分歟

永祿二年己未三月吉日　　康政㊞

右の文書を案ずるに、田千步を一貫とす、今の三段三畝十步也、是錢千文を一貫とするが如し、然れば百貫は田十萬步、今の法にして三十三町三段三畝十步、知行三百三十三石三斗三升三合とすべし、恐くは奧にて申すも、如レ此ならん歟

行餘隨筆ニ云、足利ノ世ニ祿二貫ヲ云フコトアリ、田千步ヲ一貫トシ、是ヲ積リアゲテ、百貫ハ田十萬

歩、今ノ法ニアツレバ三十三町三段三畝十歩ナリ、千貫ノ祿ナレバ三千三百三十石餘ノ所ヲ領セルヨシ伊澤某辨解セリ、鼎案ずるに、これ前文に所レ引の俗說贅辨續編を指して云なるべし、俗說贅辨續編は土佐の谷重遠の著述にて、井澤長秀は俗說辨の作者ゆへ、書名の似たるより誤り混ぜしにや關東ニテ苗百把ヲ百目ト云諺アリ、是ヲ考レバ千石ハ千貫ノ事ナルベシ

甲斐名勝志ニ云、中古貫高と云ふあり、此事委しく知れがたかりしに、一とせ上野廣俊信濃に行けるに、伊奈郡北小河内村の村木何某が家に傳ふ所の、古き算書に見へけるよし語りければ、今こゝに擧る也、其書ニ曰、天正年中毛利氏檢地までは、一歩を一文、一畝を三十文、一段を三百文、一町を三貫文と云、下略 信濃國上田の邊には、今に貫高を用ゆる所も有と云

鼎案ずるに、此說によれば、一貫は一石、十貫は十石、百貫は百石、千貫は千石、萬貫は萬石相當也

又案ずるに、一貫一石相當の說は如何あるべきや、信用し難し、前條に引ける百鍊鈔・法曹至要鈔などに、米壹石を錢壹貫文にあてしは、賣買米の定價にて、知行の上に云ひしとは思はれず、古の貫高も後世の村高と同じ事にして、たとへば知行壹貫文の地より出る米壹石ありといへども、此壹石は租高にて、米に摺しにはあらず、若五合摺の割合を以ていはゞ、壹貫貳石相當になるべき事にぞ、尚後條と併せ考ふべし

又案ずるに、俗說贅辨續編に、友人の古文書を引て、田千歩を壹貫とすといふ說は、心得がたき

ことなり、古文書に、田地の反別を記しおかざれば、據る所なきに、何を證としてかく云へるにや、壹貫分七百五十分、二百五十分合て三貫分歟とある、分の字を步の字にして見し樣に思はるれど、左解したらんには、壹貫步三貫步とせんか、不成語といふべし、土佐國蠹簡集に、此古文書を載せて云、今案數百年前稱ニ釆地之數一皆謂ニ何貫一、諸說紛々、後世天下不レ知ニ其正義一、此文書、田畝千步爲ニ一貫一也明矣、蓋取ニ錢千文之緣一乎とあり、分を步となして解する事、俗說贅辨續編に同じ　ましで三百六十步を壹反とする制もあれば、反別を以て二段三十步といふべき事なるに、たゞ一概に七百五十步と反の名を省く理もあるまじ、いづれこの古文書を以て、田千步を壹貫とするの證にはなしがたきなり、此分の字は分錢の事にて、壹貫文分、七百五十文分、二百五十文分、合て三貫文分かといふべきを、文の字を略し歟とあるは、米價に時の相場ありて、貴賤一樣ならざる故、大積りを擧ていひしなるべし

又案ずるに、夏山雜談の說は傳聞の誤りならん歟、後條に引きし、古證文の鈴木八右衞門へ賜はりし神祖の御書と同物ならんには、大なる異同といふべし、深溝家日記には、如何委しく記し有レ之事にや

菅利家卿語話云、前田藏人殿は二千貫の御家、今程の五千石計の御知行の由、殿樣も前田利家卿を云豐後守も村井豐後をいふ御申候事

鼎案ずるに、この說によれば、壹貫は貳石餘、十貫は貳十石餘、百貫は二百石餘、千貫は二千石

餘、萬貫は二萬石餘相當なり

又案ずるに、予信州飯田の人に知れるありて、其村の水帳の事を尋ね問ひしに、後日抄錄して贈り越しぬ、攷證のために左に擧ぐ

伊賀良庄錢納高

一千三百廿九貫七百六拾八文　城下東郷

内　千六十九貫三百九十三文　島田村中
　　貳百六十貫三百七十五文　毛賀村上

一三百三拾四貫三拾三文　城下西郷

内　貳百五十貫百七十七文　長照村下
　　八十三貫八百五十六文　一色村中

一三百三拾八貫三百八拾文　駄科村下

一百七拾貫五百七拾六文　下殿岡下

一三百四拾四貫八拾貳文　伐林下

一六拾貫五百廿七文　時又上

一四百八拾五貫九百五拾九文　川路上

内　百三拾四貫百廿文　上分
　　三百五十一貫八百三十九文　下分

一七拾四貫五百拾三文　下瀬上

一六百六拾五貫三拾五文　伊豆木上

一貳百六拾三貫九百貳拾六文　立石上

一貳百拾四貫三百八拾貳文　駒場上

一貳拾九貫五百九拾八文　晝神上

一五百拾壹貫六百拾八文　山本下

一貳百八拾五貫八拾八文　中關上

一三百壹貫六百廿文　竹佐下

一百六拾五貫文　羽入野下

一百三拾壹貫文　大瀨木下

一貳百四拾八貫五百文　北方中

一六百五拾六貫九百文　山村中

一五拾九貫四百文　上殿岡下

一四百八拾貳貫四百八拾三文　中村中

一三百三貫百貳文　久米上

内 貳百五十八貫五百廿四文　平分
　 四十五貫五百七十八文　光明寺分

一貳百拾八貫五拾壹文　三日市場下

總〆七千六百七拾四貫五百五拾壹文

天正十五丁亥年九月　日　常葉六左衛門

上二中一九下一八

松尾領村高

一六百石三斗貳升四合貳勺　佐竹下

一三百廿九石九斗八合貳勺　羽入野下

一貳百六拾貳石九升　大瀨木下

一四百九拾七石壹升九合　北方中

一千三百拾三石八斗六升三勺　山村中

一百五拾九石八斗九升六合　一色中

一百拾八石八斗貳升壹合三勺　上殿岡下

一九百六拾四石九斗六升五合　中村中

一五百拾七石壹斗五升六合八勺　久米上

一九拾壹石壹斗五升六合八勺　光明寺上

一四百三拾六石壹斗三合　三日市場下
一四百七拾六石九升六合六勺　長照中
一貳千三拾壹石八斗四升八合　島田中
一六百九石四升九合五勺　駄科下
一五百貳拾石七斗四升九合五勺　毛賀上
一三百七石五升五合　下殿岡下
一六百廿石六斗八升三合貳勺　桐林下
一百三拾三石壹斗五升九合五勺　時又上
一貳百六拾八石貳斗四升　上川路上
一七百三石六斗七升八合　下川路上
一百四拾九石二斗七合　下瀨上
一千三百三拾石七斗　伊豆木上
松尾高〆壹萬貳千四百四拾壹石九斗四升六合三勺
天正十九辛卯年九月
御水帳　京極修理太夫樣御檢地

御竿奉行　淺井九兵衛
筧井小右衛門

案ずるに、天正の石直しは天正十八年よりなれば、此水帳に天正十九年とあるにて、其以前の貫高を京極修理太夫高知飯田領知の頃、撿地して石直しせし事知るべし、此貫高石高の相當錢壹貫文に付

竹佐下	壹石九斗九升餘
羽生野下	貳石五升餘
大瀨木下	貳石餘
北方中	壹石九斗九升餘
山村中	貳石餘
一色中	壹石九斗餘
上殿岡下	貳石餘
中村中	壹石九斗九升餘
久米上半分	貳石餘
光明寺上	貳石
三日市場下	壹石九斗九升餘

壹石九斗餘	長照中
壹石九斗餘	島田中
壹石七斗九升餘	駄科下
貳石餘	毛賀上
壹石八斗餘	下殿岡下
壹石八斗餘	桐林上
貳石壹斗九升餘	時又上
貳石	上川路上
貳石餘	下川路上
貳石餘	下瀨上
貳石	伊豆木上

立石・駒場・晝神・山本下・中關上

右の五箇村石高なし

これにて考るに、此邊は壹貫貳石の石直しなりしや、此石高は則村高ゆへ、古の貫高も籾高にていへる事明らかなり

兵家師鑑ニ云、古ハシラズ、信玄公家ニテ拾貫ト云フハ、四十石ノコナリ、三十貫ハ是四千二百二十俵ノコナリ

雞山先生筆記ニ云、享保元年七月、甲州屋五兵衛に甲州俵の事承り候處、三斗六升俵也、古より左樣に候やと尋候得ば、甲州升と申候は、京升三升入なり、信玄公の御朱印御座候升屋、今に居申候、右甲州升にて一斗二升入申候、左候得者小升にしては三斗六升也、唯今貫の事不ㇾ申候哉と相尋候得ば、今は貫と申事は不ㇾ申候、然共古百貫の跡は四百石と申候、右横田勘左衛門に借り寫ㇾ之

鼎案ずるに、この說によれば、壹貫は四石、拾貫は四拾石、百貫は四百石、千貫は四千石、萬貫は四萬石相當なり

相州鎌倉松岡東慶寺御朱印に

寄進　松岡

相模國小坂郡鎌倉內

八拾六貫六拾文　二階堂

貳拾貫八拾文　十二所內

六貫貳百四拾文　極樂寺內

右如ニ先規ㇾ令ニ寄附ㇾ訖、彌守ニ此旨ㇾ可ㇾ有ニ相續ㇾ者也、仍如ㇾ件

天正十九年辛卯十一月

常典雜史云、松岡の御朱印御代々右之趣也、御朱印高百拾貳貫三百八拾文なれども、此納得收納悪しく、五百石程にも當るべし

鼎案ずるに、この說によれば、壹貫は四石四斗四升九合、拾貫は四拾四石四斗九升、百貫は四百四拾四石九斗、千貫は四千四百四拾九石、萬貫は四萬四千四百九拾石相當なり

武家評林云、傳曰、供御料ニ相州入道一跡ヲ被レ成事、諸國ノ所領凡ソ二十八萬七千貫餘也、私曰、當代知行ニシテ、百四十三萬五千石古供御料所十萬貫ニハ不レ足、此彼領地引合テ五十萬貫ニ餘レリ、當代知行ニシテ、二百五十萬石神武ヨリ以來未ダカヽル例ナシ、大夫入道ノ一跡、諸國諸領凡ソ十八萬五千餘貫也、當代知行ニシテ、九十二萬五千石兵部卿親王ヘ被レ進、又大佛奥州ノ一跡、諸國ニ在所八十四箇所、納米七萬七千餘貫也、當代知行ニシテ、三十七萬五千石准后御方御領地也、凡ソ此領地ニテハ一萬五千人扶助シナン

蠻宗制禁錄云、信長卿守留岸に於、江州甲賀に三百貫文千五百石に當る知行所を賜はる、又云、信長卿元龜二年小谷亂入の序に、叡山を可ニ燒拂一とて、九月十二日山門に押寄て亂妨し、翌十三日所々へ火を付て攻討事夥し、さしも金銀を鏤たる伽藍。佛宇。神社。樓閣一宇も不レ殘燒亡し、三千の衆徒殺害せられけり、此時より比叡山は昔の如くならざりける、是迄は寺領十萬餘貫凡五十万石に當ると言へり

國學忘貝云、數度脅談ニハ、鈐錄ヲ引テ相違ナリト書リ、本朝今ノ制三百坪ヲ以テ一反トシ、三千坪

ヲ以テ一町トス、水帳ノ石高所々ニヨツテ不同アリトイヘドモ、大抵一反ヲ一石五斗、或ハ一石六斗、一石三斗トス、然レバ百坪ノ高大略五斗ナリ、所レ謂十貫ハ一萬坪ナリ、乘ニ五斗ニ得ニ五十石ハ、コレヲ以テ思ヘバ、千貫ハ五千石、百貫ハ五百石、十貫ハ五十石ナルカト見ヘタリ

鼎案ずるに、この說によれば、壹貫は五石、十貫は五十石、百貫は五百石、千貫は五千石、萬貫は五萬石相當なり

故諺記ニ云、大名の身上を幾萬石、平士の身上を幾十石幾百石といふ事は、古法にあらず、大形信長・秀吉の時分より起る、古の領地の書物を見るに、何郡何鄕何村にて、幾十町幾百町抔とありて、石高はなし、武士の知行を幾十貫幾百貫といふ、當時百姓の言葉に殘りてあり、一坪に苗一把種る事にて、百坪には百把種る、是を百目といふ、千坪に千把種る、是を一貫目といふ、此積にて大抵十貫目は百石、百貫目は千石に當れども、上中下の違ひによりて一定せず

鹽尻ニ云、熱田古證文の中に、慶長三年八月の證文狀に、十貫文の米二十三石六斗と記せり、此等を以て古へ分錢石直しの法を知るべきかも、但し是は尾張にての法也、諸州の石直し所々不レ同もの多し、予が先祖三州大濱村にて五十貫文の地を拜せし、此米は五百石也、然れば尾州よりは石直し少き歟、或は時代によりて又異なるにや

又云、伊勢兩宮造營御遷宮料秋米三萬石、是天正十年三月十一日、平信長森蘭丸を奉行として兩宮修

造の時、永樂錢三千貫文を下行せらる、三千貫文は當時三萬石に當る、此例を以て今三萬石下行すとす

鼎案ずるに、信長永樂錢を下行せしは、美錢を擇ばれしまでにて、其頃は永樂も鐚同樣に、一錢は一錢の通用ゆへ、後世の永勘定の割合にあらずと知るべし、鹽尻に、春日井郡豐場村萬松山常安寺、後花園院永享中、明谷義元禪師開基、後柏原院大永四年甲申、當邑領主溝口富之助某といふ者、亡父藏田居士の爲に本尊を安ぜり、此像は肥後河尻にあり、傳へ云、毘首羯摩天所ㇾ彫也、釋迦・阿難・迦葉三體なり、溝口氏永樂一百貫文を捨て買得たりとあるなど、美錢を撰びしまでにて、一錢は一錢の通用なれど、當時永樂錢を尊びし事を推知すべし

北越軍談ニ云、傳に曰く、本庄は今の村上の地なり、元龜の初め越前守繁長輝虎の勘氣を請け、當所を去て庄内へ移さる、慶長三年三月景勝會津へ得替(マヽ)、舊地二萬貫（今の二十萬石）羽柴秀治拜領あり、越前北の庄より春日山の城へ移る、古丹羽長秀の與力村上次郎頼勝、其頃は周防守と號し、六千四百貫の分限にて、加州能美郡を領せしが、秀吉公秀治の後見として本庄の城を給はり、二千六百貫の加増あり、是より地名を改め村上と呼來れり

草廬雜談ニ云、知行ヲ貫ヲ以テ稱スルコト、諸書ニテ考フレドモ知ガタカリシニ、今仙臺ノ人萬石以下ヲバ貫ヲ以テ稱ス、十貫ヲ百石トス、是ニテ能知レタリ、誠ニ知ラザルコトハ、衆人ニ問尋ヌベキコ

トナリ

貫考ニ云、天明六年午ノ夏仙臺ニ遊ビシ時ニ、前澤ト云所ニテ、農夫ノ所持シタル仙臺家中ノ分限帳ヲ買求メシガ、其中ニ萬石以上以下トモニ、何貫又何石トシ、貫ト石ト入交リニ祿高ヲ記シタリ、中ニ片倉小十郎ガ知行千七百貫文餘トアリシヲ、何石ニ當ルト問ヒケレバ、一萬七千石餘ノヨシ答ヘタリキ、其外領中所々ニ貫石ノ相當ヲ尋ネ見ルニ、皆十貫百石ノ積リナリ、是ヲ以テ考レバ、雜談ノ說、臆說ニアラズ

房總志料ニ云、里見氏九世、永樂錢ニテ采地割有シト、永錢壹貫文ハ高拾石ニ充ル

鼎按ずるに、この說によれば、壹貫は十石、十貫は百石、百貫は千石、千貫は萬石、萬貫は十萬石相當なり

又按ずるに、以上の諸說一貫一石相當より、十石までの不同ありて一様ならず、いづれを定說となしがたけれども、永樂錢未渡以前と、已渡以後との時世を以て、國の遠近土の肥瘦等を考へ合せなば、大積りは推知すべし、但し續和漢名數に「永樂錢貫數、畿內近國稱スル百貫ト者、充ニ千石之地ニ」とありて、鹽尻に、伊勢兩宮修造の時下行せる永樂錢三千貫文は、當時三萬石に當る由をいへば、此貫は永樂錢にて計るといへども、其頃中國の米價過不及平均せし定數ならん歟、又奧州の十貫百石は邊鄙の地運漕も艱難ゆへ、中國の米價と一様に論じがたきはづなれども、家中知行

割は中國米價の割を以て、十貫百石として渡されしものなるにや、恐らくは仙臺の十貫百石は、後世の制度なるべし、下條に引く夏山雜談玉露叢に載するは、一貫二十石相當なり、倘諸國石代の條々併せ考ふべし

古證文ニ云

一三石五斗五升　此外一石は寄進
一二石八斗七升　四郎右衛門居內 此外ハ藏入
一三石五斗八升者　四郎右衛門分
以上拾石者、此代二拾貫文
右之分依有□□、酒井雅樂助方爲ニ奏者一所レ令ニ扶助一也、永不レ可ニ相違一之狀如レ件
永祿八年乙丑十一月廿七日
鈴木八右衛門殿

鼎按ずるに、この說によれば、壹貫は五斗、拾貫は五石、百貫は五十石、千貫は五百石、萬貫は五千石相當なり

夏山雜談ニ云、陸奧ナドハ昔ハ十貫ヲ以テ百石ニ充ツ、今世ハ五貫ヲ以テ百石ニ充ツルナリ、嘽樂麿往年高野山ニ數月アリシコトアリ、此時ニ彼山ニ成就院ト云寺アリ、此等ヘ伊達中納言卿ノ時ヨリ、

十二貫ノ地ヲ寄進セラルト聞シ故、委シク尋ネシニ、十二貫ノ米高凡九十六石ニテ、四ツ物成ニシテ二百四十石ニ當ルナリ、是則五貫ヲ百石ニ充ルナリ

玉露叢ニ云、近年仙臺の知行五貫文を他家の百石とす

鼎按ずるに、この說によれば、壹貫は二十石、十貫は二百石、百貫は二千石、千貫は二萬石、萬貫は二十萬石相當なり

北條五代記ニ云、其頃（氏康の頃を云）永樂五十貫百貫と名付田地の跡は、今五千石一萬石ありとかや

鼎按ずるに、この說によれば、壹貫は百石、十貫は千石、百貫は萬石、千貫は十萬石、萬貫は百萬石相當なり

國學忘貝ニ云、予ガ家ニ永祿三庚申年、當國多度郡天霧山城主香川彈正忠之景ヨリ賴レテ加勢セシコトアリ、其謝禮狀今ニ所持ス、其略文ニ云ク、「今度從ニ阿州ニ到テ當國ニ亂入之刻、別而御入魂之儀候間、所知之內多度郡葛原庄鴨請錢拾三貫文令ニ合力ニ候」トノ書ナリ、如何ナル算合カ家記ニモ分リガタシ、右村々當時ハ其高合テ凡二千五百石ニ近シ

鼎案ずるに、この說によれば、壹貫は百九十三石餘、十貫は千九百三十石餘、百貫は萬九千三百石餘、千貫は十九萬三千石餘、萬貫は百九十三萬石餘相當なり

又案ずるに、この說餘りの相違にて、予が考へには及びがたし、必ず所以あるべき事にぞ、猶他

日の考證に備へんがために書記しおきぬ

鹽尻云、或人問、中世以來、武家采地、永樂錢幾貫と云、凡一貫は秋米幾石に當れる、曰、代々所々によりて不同有レ之、是を分錢の法といふ、たとへば毛利元就、楊井隱岐守へ下せし感狀に、分錢八貫之地、楊井隱岐守於二南黍內一、爲二給地一被レ遣候、全可レ爲二知行一者也、弘治三年十二月廿五日、吉川左京等五人連判なり、分錢天正の石直しに、東國は一貫九石、西國は一貫八石といふ、但し天文の頃は、三州邊の分錢一貫十石なりしや、予が先祖天野賢景、天文十九年三州大濱にて五十貫文の采地を拜領す、然るに其納得は五百石の地なり、其後東海道の分錢五貫百石の石直しなり、甲州邊は石直し尤少し、一貫四五石の時ありしとぞ

夏山雜談云、永樂錢知行ノ事、畿內近國ハ百貫ヲ千石ニ充ツ、遠國ハ百貫ヲ八百石・七百石・六百石・五百石ニアテタル所モアリ、畿內近國其外廣邑ハ、運送タヤスキ故ニ米ノ價賤シ、遠國僻地ハ、運送艱難ニシテ價ヤヤ貴シ、是故ニ國々價ヒ同ジカラズ

續和漢名數云、本邦都鄙采地永樂錢貫數○畿內近國稱二百貫一者、充二千石之地一、關東遠國、百貫有下當二八百石一者上、有下當二七百石一、或當二六百石一者上、蓋采地近二京都及廣邑一、則運送容易、而穀價貴、故錢數漸多矣、采地在二僻遠一、則運送艱難、而穀價賤、故錢數漸少矣、如二奧州一、古者以二十貫一充二百石一、今世以二五貫一充二百石一、五十貫充二千石一、是近世河渠漸開、而舟楫之利、以濟二不通一之故也

鼎案ずるに、夏山雜談は續和漢名數によりていひたる樣にもあれど、米價貴賤のわけを論ずるに至りては相反せり、今日を以て考ふるに、續和漢名數の說尤の樣に思はる、すべて米價は都會の地と邊鄙と、運送のよき所とあしきとにては、十倍の相違もあり、すでに治平の今日すらかくの如し、まして亂れし世の融通あしき頃は、各別の不同あるも其はづの事也、其上土地の肥瘦によりて、米に上中下もあれば、迚も一同せることはなかるべし、されど伊勢兩宮修造料永樂錢三千貫は、當時三萬石相當の由、これは公法にて、當時中國米價平均の相場なるべければこれに準じ、國々にも其土地の遠近肥瘦によりて、知行など充行に用ゆる大積りの高は、いづれの所にも自然と定りたる相場ありしならんなれど、今日にありては知れがたき事故、强て一定せぬをよしとす

鹽尻ニ云、古へ文武官人の馬料といひしは、又米にあらず錢なり、文官一位五十貫文、二位三十貫文、等以下初位二貫五百文に至る、又武官は從三位二十五貫文、從四位五貫文より八位二貫五百文に至る、蓋後世分錢石直しの法の由つて出る所かと覺へ侍る、古へは武士に地を賜はるを、馬の飼料と稱するを以て考ふべし、太平記に、靑砥左衞門が事を云ふに、三萬貫に及ぶ大庄なんといへるは分錢の法は鎌倉將軍の時より有レ之と見へたり

鼎案ずるに、貫稱の起りを論ずる事、一理あるに似たれども、馬飼料は官より直に錢を以て給はり、田地にあづかりしことにてはなし、されば田地の米高を量り錢納にせし後世の貫高と、一樣

にはいひがたき歟

田園類說ニ云、貫といふは、軍役を田地の坪數へかけて割付しより起りて、六千坪宛にて軍役一騎の積り、是を六貫一疋といふ、たとへば所領三百貫を領する者は、五十騎の軍役と定めたるものにして、知行領知などにも此貫數を用ゆ、此節より往古の三百六十歩一段を、三百歩一反に變ぜしなるべし、今時の積りにては二町歩計りにて、一騎の軍役勤まるべきとに非ずと雖も、昔の兵農分れず、武士土着の時のことは、當時の算用に引合がたし、大抵十貫は百石、百貫は千石に當れども、上中下によりて一定せずと云事は、坪に籾一升積りにして、一貫の地十石、十貫の地百石、百貫の地千石に當る積りなれども、其田地に上中下の品あるを以て、其積りの通りには一定せざる也、元年貢の積りには非ず、軍役を田地の坪數へかけし故也、今も國々に百刈千刈と云傳ふるも、大概百刈は一反、千刈は一町の事をいへども、既に今の檢地も石高に改むる上は、民間に用ゆるのみ也、然れども是又古へ貫高時代の詞殘りて云傳ふると見へたり、扨世上に貫高永高一樣に思へども、一事には非ず、貫は田地千貫の事也、錢の數をも、百を百文、千を一貫文といふゆへに、相紛れて誤れり、貫高は既に鎌倉將軍家の末より名目あり、永樂錢は夫より百年も後に異國より渡りし物にして、貫は田地の坪數、永は錢數なれば、旁以て一事に非ずと知るべし

鼎案ずるに、此說は全く鈐錄により、鈐錄は故諺記によりて云へるなり、苗千把を一貫目といふ

より田地の坪へ割付け、六千坪にて軍役一騎を勤るを、六貫一疋といふ由にて、三百歩一段となりし起本の様にいへど、三百歩一反は天正の頃より天下の定制になりて、夫より以前は三百六十歩一段なれば、此割付けも合ひがたし、殊に苗千把を一貫目といふは、稲束の目方なれば、何貫文と文の字を加ふる理もあるまじ、いづれ貫は錢納より出し名目にて軍役の積りにはあらず、又百刈千刈といふは、上古稲何萬千何百何十束といひし頃の遺言なり、安齋隨筆後集に、勢州土人云、稲一束といふは、一把を十二合せて一束とす、（十二把なり）一把といふは、手によくつかみて、三つかみを把といふ、一束は三十六つかみ也、田一段にて勢州の邊三十束刈といふとあり、又或覺書に、信州水内（ミナ）郡權堂（ゴンド）村・間御所（アヒノゴショ）村・荒木村・千馱村・栗田村、右五箇村往古より稲四十束を一段に極め高何石此刈何十束と書出し候を、右四十束を以て割反別と成、其段別を以て割、平均石盛となるなり、合毛差加へ右當り合にて差引割也

右五箇村

高五百八十九石四斗七升三合

此刈一萬九千六百四十九束一分

此段別四十九町一段二畝八步二五（但四十束刈を以て一反と極む）

とあるなど、古制の今に髣髴と存するにて、延喜主税式に、凡公田獲稲上田五百束、中田四百束、

下田三百束、下々田一百五十束といふ、中田下田の束數に符合せり、延喜式は一町の束數をいふ　これも國々にて不同ありて、一定はせざりけれど、撈海一得に云ふ、齊東野人の語も、格物の一助となる事多し、三越・奥羽・北邊の國にて、田産を數ふるに何箇かりといふ、富民の産をいふに、幾千刈幾万刈と稱す、其高は定かに知りたるものなし、先年越後北鄙の老農の一奴に問ふに、曰、田四百坪を一反と云ふ、是を百かりとして、男一人にて五百かりのあてに作らしむ、（田五反なり）百かりより籾二三石を得る（上中下田にて不同あり）と　これにていくかりといふ事知たり、決して貫高より出し稱にはあらず

大半小之考

地方答問書云、世上にて太閤検地と申し、文祿年中頃には、田畑反歩を大歩小歩半歩と記候、水帳有レ之、大歩は二百歩、小歩は百歩、半歩は百五十歩の事に候、三百歩此時も一反にて候、太閤検地の竿長さは一間を六尺三寸に極候て、一丈二尺六寸にて候事

四民格致重寶記云、太閤検は一反三百六十歩と云傳へたり、然れども天正年中の水帳を見しに、三百歩也、其水帳には畝と云はなく、壹領大歩・小歩・半歩・八十歩・九十歩などと有レ之、大は二百歩、小は百歩、半は百五十歩を云へり、今世間人毎に云へるは、太閤検は三百六十歩ゆへ、今検に合せ候に貳割よけいありといへり、右之通天正の縄三百歩に候へばよけいは無レ之、若くは其時代左候へば、今間に直しては一反三百五十二歩にあたりて、一割七歩餘のよけいなり

田園類說云、大半小は田地一反三百歩を三つに分けし小名歟、今の石高より以前に行はれし事也、然るに其後地改として地廣なる儘に、往古の三百六十歩に取合、大半小を付し所もあり

田園類說云、世上に太閤檢地は、三百六十歩一反と云傳ふる事は誤り也、すでに大半小も三百歩一反なる事分明なり、越後國蒲原郡の內新發田檢地は、三百六拾歩壹段にて、反別を大步・半步・小步と用ひ來り、大は貳百四十歩、半は百八拾歩、小は百貳拾歩といふ、予其所に至らざれば、委しき事は論じがたしといへども、是はわけありての事なり、檢地も多く承應の頃なれば、其時地改せしに、歩廣なる故に、往古の三百六拾歩を取合せ、反別付直せしものと思はる、さるによりて糫納の時の如く、米取になりても、やはり取米の辻を直に其村の高にせしも、歩廣なる故なるべし

或覺書云

天正十九年

檢地奉行寺田右京

下野國足利郡羽田村之內

一中田五段半四拾貳步

一下田三段大拾壹步

田合九反小三步

田園類說云、位反別ありて、高石盛はなし、此時代は關東にては、永高專ばら行はれし事なるに、如此中下の位もあり、一反三百步の積りにて、惣成檢地帳もあれば、永高は年貢辻を永樂錢に積りて、

今の根取といふものゝ如くなる事と知るべし

地方細論集云ニ、田園類説の説不分明なり、一反三百六拾歩の積りにして

一中田五段半（百八十歩）四拾貳歩

一下田三段大（二百四十歩）十一歩（是は二十一歩の誤なるべし）

合田九段小三歩

此歩八段四百八拾三歩也、内三百六十歩一段取、又小歩百二十歩取、殘り三歩也、然る上は此節も三百六十歩一歩一段の割合なり

鼎按ずるに、天正の石直しは、天正十八年よりなれば、此水帳に天正十九年とあるにて、太閤検地の水帳なる事知るべし、共頃より古の三百六十歩一段を三百歩にせしは、前條に云へる通りなれば、此大半小の積りも、三百歩一反にて云ひし事必定なり、然るを地方細論集に、强て古の三百六十歩に附會せんとて、十一歩を二十一歩の誤りとして算合するは、如何あるべき、一反三百歩の積りにして

一中田五段半四拾貳歩

半ば百五拾歩也、此反別五反と百九拾貳歩也

一下田三段大拾一歩

大は貳百步也、此反別三反と貳百拾壹步也

半四拾貳步・大拾壹步合せて、此步四百三步と成、內三百步一反を除き、殘り百三步なれば、

田合九反小三步

小三步と成

かく勘定合ふものを、何とて十一步を廿一步の誤字とし附會せるとなれば、定めし新發田の三百六十步一反に、大半小の積りある泥みて云へるならん歟、溝口家に新發田を領地に下されしは、天正石直し以後慶長三年の由なれど、越後はかねて上杉景勝舊領なるを、直に溝口家へ給はりしゆへ、其頃改めて地改め檢地もなかりし、それゆへ三百六十步一段にて、大半小の積りも其割合なりし、もと大半小は一反の小割にして、官よりたてし制度にてもなく、たゞ民間に取扱ひし稱なれども、三百六十步に足らざる地を積るに都合よき故、民間の申ならはしに隨ひ、水帳にも書入るゝ事になりて、石直し以後三百步一反は、天下一統の制度故、三百步の割合に二百步を大步とし、百五十步を半步とし、百步を小步とし、其頃の檢地帳にも書加へしなり、されど大半小に、三百六十步の地と、三百步と所々にて割合相違ある故に、三十步を一畝とするの制度立て、大半小の稱は用ひ給はぬ事とはなりしにあらん、今は六尺繩にて三十步を一畝とし、三百步を一反とし、三千步を一町とするを、天下一定の法と仕給へども、又民間に古法の存せるを、事なければ

申傳のまゝになしおかれ、今更地改めし檢地帳を、書改めずして事濟むは、國家民を愛する寛大の政といふべし

又案ずるに、大半小はもと三百六十歩一反の小割なるを、三百歩一反へも通用せしを、田園類說に、大半小は三百歩一反の時の名目にして、承應檢地の頃歩廣なるは、往古の三百六十歩に取合せ、反別を付直せしとあるは、本末の取違ひにて、誤といふべし、予足利時代の田地古文書に、大半小を書載たるを數十通見たり、いづれも三百六十歩反也、其内水戸の高倉逸齋より寄示されし、常陸國鹿島郡鹿島神社大宮司に傳來の古文書には、大半小の割合にて書載せあり、後證の爲に左に全文を擧ぐ

大賀村檢注取帳副日記

六十歩と云は、足數六十也　　小と云は、二六十歩也

半と云は、三六十歩也　　大と云は、四六十歩也

三百歩と云は、五六十歩也　　一段と云は、六十歩也

凡一段と云は頭六杖　　一杖と云は、六十歩也

一反に五斗四升也　　此内四斗を宮方へ沙汰す

一斗四升當方へ納也

三百歩には四斗五升　此内三斗三升三合宮方へ沙汰す
一斗一升七合當方へ納也
大には三斗六升　此内二斗六升六合の内宮方へ沙汰す
九升三合の中當方へ納也
半には二斗七升　此内二斗宮方へ沙汰す
七升當方へ納也
小には二斗八升　此内一斗三升三合宮方へ沙汰す
四升七合當方へ納也
六十歩には八九升　此内六升六合の中宮方へ沙汰す
二升□合の中當方へ納也

一斗代と云は、反に一斗三升也、是は宮方へ六升五合、當方へ六升五合同分の納也

一都合と云は、宮方の百姓も讀田一反には五斗四升沙汰す、此内一斗四升當方へ納むるを勘定して、大賀の籾を宮方へ沙汰あるべきを、當方へとゞめ置を加徵米と云也

右依讀田宮方へ都合の籾を沙汰して後
五斗は別料、九月五日小七月兩度の分禰宜に請取する也

六斗、五日小七月の駄餉料、百姓十人して請取也
三斗堰料とて、百姓等請取也
一斗は倉糀として、百姓等請取也
二石四斗供料三人分百八斗事也
合三石九斗、役所へ下行す、餘分は名主筆祝に給也
元德二年庚午十一月十八日日記を寫畢
應永四年丁丑十二月八日書寫之
同十一年甲申十一月廿五日書改

大賀村撿注雜志料事
錢一貫二百五十文　田米二斗八合之中
籾三斗三升三合　大豆三升
此外水くりやよみあひの酒肴の代あり
又帳紙二帖あり
一雜志をはい分する次第　宮方へのけ
錢八百文　白米一斗三升

籾二斗二升　　大豆二升

此外水くりや細に在レ之、又帳紙一帖

文和三年十二月廿五日、元弘日記寫レ之

一地頭方へ雜志はい分事

錢四百五十文　　白米七升八合之中

籾一斗二升三合　　大豆一升

此外水くりや細々物並帳紙一帖あり

又云、錢三百文、白米四升七合、籾七升五合、大豆一升、紙一帖、名主方へ請取なり

錢百五十文　白米二升三合、籾三升六合、定使とらする也

但池代は反大の分、百三十三文は元德二年庚午年より留レ之、然間一貫百十六文納に、是を已前の如く日記兩方へ配分する者也

元弘元年辛未十一月十八日ノ記ヲ、貞和五年己丑十一月十七日當十九年寫レ之、又文和三年甲午十一月十七日、自ニ元弘元年一至ニ于今一、當二十四年寫レ之畢、維時應永四年丁丑十二月八日、當四十四年此日錄ヲ見、書畢

元德二年辛午年ヨリ應永四年丁丑十二月八日ニ至マデ六十九年、池代八反ガ分百三十三文留レ之畢

右件検注トケテ後、宮方ヘ都合ノ沙汰シテ所ゝ殘

五斗ハ別供料　六斗神事米

一斗ハ倉祝　二石四斗供料

合三石九斗役所ヘ下行スルナリ、餘今ハ名主筆祝ニ給也

一堰料一石八斗、此内一石五斗宮方ヨリ下行ス

三斗當方ヨリ下行ス

是ヲ宮方ノヲトナ、五斗請取

大賀ノヲトナ、一石三斗請取也

名主方ヘ正月五日禮節ニ罷越畢（三月三日、五月五日、節供ニ料足三百文ヅ、）

十人ノヲトナノ外ハ、禰宜ノソナヘアリ

又修正曰、アツカルモノモ、ソナヘヨキサケヘイチ一勺出也

但三月三日、五月五日ノ節供、ヲトナ共令ニ難澁ニ了

この古文書に、元徳二年（庚午）とあれば、足利以前鎌倉將軍家の末故、大半小はいと古くより申傳へし事と思ひしに、此頃又弘安八年十月十一日の豐後國田代注進狀案と、元暦元年の田地古證文に、大半小を書載せあるを見及べり、今元暦元年の古證文二通を左に出して古を存す

著者自筆

賣進　薗田宰

合伍畝少者

在塩小路南朱雀東角二段大

八条坊門北防城西ゝ面南一段

同次一段大

右薗田者大江氏外之代ゝ相傳私領也尓依有

直要用所賣進七條之法下御分實也仍

注進如件

建仁元年八月八日　大江氏

源頼基

且成外題所ゝ称也

御座御作手状章早ゝの、頭條ゝ也

下知返子ノ上過散在田地木下ゝ寻仍他

素鐘余反作ハゝ日所ゝ寻仍侍ゝ也

悉ゝ留ゝ

七月廿八日

元暦元年　祝能

永幷永高之考

草廬雜談云ニ、中古治亂記ニ、應永十年癸未八月二日大風、堂社佛閣民屋悉ク顚倒シケル、二日未刻ヨリ翌三日巳刻迄彩シク吹ク、其風前代未聞ナリ、三日申下刻、相州三崎浦へ敎書案ズルニ、三崎今ハ世人豆州トイフ、イカヾ考フヘシ唐船一艘漂着ス、倭漢合運ニ、應永十年八月三日唐船來ルトアリ、大風ノコト無レ之時ニ鎌倉ノ公方足利左兵衛督滿兼卿尊氏三男左馬頭基氏ノ孫ナリ下知アリテ、印東次郎左衛門尉貞次・梶原能登守景宗・三浦備前守義高ヲ奉行トシテ被レ遂ニ詮議一ケルニ、惡風ニ放タレ、着岸仕ル由ヲ申ス、船中ノ雜物ヲ點檢スルニ、唐朝ノ永樂錢數百貫文ヲ積乘タリ、應永十年ハ、明ノ二世太宗永樂九年ニ當ル、永樂錢ハ永樂九年ニ鑄ルトアリ、此所追テ可レ攷ナリ依テ此船ヲ抑留シ、使者ヲ京都へ上セ、前將軍義滿入道道義、新將軍義持ノ方へ巨細被レ告ケルニ、唐船關東へ着岸スル上ハ、偏ニ滿兼ノ德分タルベシト被レ仰下一ケレバ、船中ノ財寶不レ殘抑留シ、唐人ニハ可ニ歸唐一旨被ニ申渡一、歸唐ノ日數ヲ積テ其餘分ヲ考テ、粮米味噌鹽薪等、其外色々與ヘテ歸船サセラレタリ、本朝寳貨通用事略ニ慶長十四年ニ、上總ノ大瀧浦ヘ黒船ツキシト、關東ヘハ漂船多シト見ヘタリ其後滿兼評定アリテ、若干ノ永樂錢徒ニ弊スベキニ非ズ、關東ニ於テ此錢ヲ以テ可ニ賣買一旨、頓テ法ヲ定メ被レ用レ之、然ルニ遙ニ年ヲ經テ、天文十九年ノ頃ハ、東國ノ諸民永樂錢ニ鐚ト云フ惡錢ヲ取雜テ、同直段ニ用レ之、故ニ賣買ノ輩所々ノ市町ニ於テ、彼惡錢ヲ撰ビ論ジ、爭鬪出來タリ、此頃關東ハ永樂錢ヲ貴テ、京錢ヲ都テ鐚ト云フト見ヘタリ、近キ頃令條記ヲ見レバ、慶長十一年七月二十三日ノ令ニ云、下總國佐倉ヨリ東ニ於テ、シカミ錢トリヤリ仕ルベカラズ、ワレ錢、カケ錢・新惡錢撰不レ可レ申候ト、是ニテ見レバ、關東ニテ此頃ヒソカニ惡錢ヲ鑄ナルベシ、又寛永二年八月廿七日ノ令ニ云、大カケ・ワレ錢・カタナシ・コロ錢・新惡錢・鉛錢・此六錢ノ外撰ブベカラズ、若シ撰ブモ、又六錢ノ押テ使フ者アラバ、共面ニ火印ヲ押スベキ事トアレバ、惡錢色々アル事明カナリ、然レバ關東ニテハ京錢及ビ六錢等、都テ惡錢ト云フト見

ヘタリ、京錢トハ西土ヨリ渡リタル歷代ノ錢ヲイフナリ、本朝寶貨通用事略ニ、明ノ太宗ノ時鹿苑院公方義滿ヘ送リシヲ、永樂錢我邦ヘ來ル始トス 天正ノ始北條左京大夫氏康關八州ヲ討從ヘテ、諸士悉ク彼下知ヲ守ル、故ニ家臣山角信濃守定信。笠原越前守康朝等、其外奉行頭人ヲ招集メ評定セラレシハ、夫鳥目ニ品々替リアレドモ、永樂錢ニハ不レ如歟、自レ今以後關東ニテハ、永樂ノ一錢ヲ用ヒ、他錢ヲ不レ用ヤウニスベシト思フナリ、一ニハ錢ノ善惡日ヲ同シテ不レ可レ論、二ニハ民ノ諍論ヲ止ンガ爲、三ニハ賣買ノ隙ヲ弊サンガ爲也、面々如何思フト相議セラル、皆尤ト同ジヌ、依レ之辻々町々郡庄鄉村里中ニ、右ノ趣ヲ高札ニ定テ、永樂一色ヲ用ユ、此故ニ近國ノ者鐚ノ內ヨリ、永樂ヲ撰出シ鐚ヲ除去シカバ、自ラ鐚ハ廢リ、上方ヘ上リテ、永樂ノ一錢計リ關東ニ留リヌ、此時ヨリ鐚ヲ名付テ京錢ト云フ、其後天正十八年七月十七日、北條家滅シテ關八州ハ德川殿領シ給フ、慶長九年正月ヨリ永樂錢ヲ用ユトイヘドモ、一向鐚ヲ可レ棄ニアラズトテ、鐚四錢ヲ以テ永樂一錢ノ代リトシテ遣フ、サレドモ其錢ノ善惡ヲ撰デムツカリシカバ、同十一年十二月八日、大久保相摸守忠隣。本多佐渡守正信ニ仰セテ、永樂錢ヲ停止シテ、鐚ノ一錢計リヲ可レ用旨、武州江戶日本橋ニ高札ヲ被レ建ケレバ、是ヨリ永ク永樂錢廢レリ、此時永樂錢ヲ止メラルヽニヨリテ、此後ハ諸錢トヒトシクツカフト見ヘタリ 凡永樂錢ハ天正十九年ニ秀テ鐚ニ勝リ、五十七年ノ歷數ヲ經テ鐚又秀リト、案ズルニ、四家合考ニ云、慶長十九年永樂錢ヲ止テ京錢ヲ用ユ、此時神祖駿府ニオワシマシテ、一夕城ヲ拔ル夢見給ヒ、サメテ夢ヲ本多佐渡守ニ告ゲ給フ、佐渡守云、患フベキ所ニ非ズ、シロ相換ルコト甚易シ、コノ換ノ字ニテ考フレバ、前ノ拔ノ字ハ、換ノ字ノ誤リナルベシ 京錢ヲ用ヒテ

永樂ニカヘヨ、神祖其言ニ隨ヒ給ヒテ此ノ如シ、俗ニ錢ヲ代物ト云フ、代ヲシロト訓ズル故ナリ

鼎按ずるに、この說によれば、永樂錢の我邦に渡來せしは應永十年の由、されど應永十年は明の太宗永樂元年にして、永樂錢を鑄しは永樂九年なれば、應永十年の八月漂船の持渡るべき樣なし、其上應永十五年（永樂六年に當る）の五月、源義滿入道道義薨じ、同十七年（永樂八年に當る）の七月、鎌倉の足利滿兼卒す、いづれも永樂九年錢を鑄しより以前にて、時代相違の事多く、傳聞の誤りもあるべければ、一概に信用しがたけれど、足利義政明の禮部官に書を贈りて、「永樂年間多給ニ銅錢一、近無ニ此擧一、故公庫索然、何以利レ民」といへるにて、其頃永樂錢の渡來せし事は知りぬべし、又慶長九年同十一年の兩度の令を引けるも、予が聞く所と年月に異同あれば、左に令文を擧て、他日の考證に備ふ

定

一永樂壹貫文者、鐚四貫文宛の積りたるべし、但向後永樂錢は一切あつかふべからず、金銀鐚錢を以て可ニ取引一事

一金子壹兩は、鐚錢四貫文可ニ取引一事

一鐚錢猥つかふべからず、但なまり錢・大われ・かたなし・新錢・へいら錢・此五錢、此外は無ニ異儀一可ニ取引一事

右之條々、若於₌相背₋者、可₋爲₌曲事₋者也、仍如₋件

慶長十三戊申十二月八日

備前
對馬
大炊

定

一大かけ　一われ錢　一かたなし
一ころ錢　一新惡錢　一なまり錢

右六錢の外は御藏へも納候間、不₋可₋撰₋之、金壹歩に壹貫文の賣買たるべき也、若彼六錢の外を撰候者、幷押てつかふ者有₋之ば、糺明の上其面に火印を可₋押者也、仍定所如₋件

元和二年丙辰年五月十七日

田園類說云、永は永樂錢の事なり、今時の了簡にては、日本の澤山なる錢を差置て、何を以て永樂錢を貴む事不審に思へども、往古天武天皇の御代、銀錢・銅錢始まりてより、世々鑄錢司の官ありて、錢を鑄る事國史に見へたり、然るに中古より國衰亂におち入戰伐繁多にして錢を鑄る事なく、異國へ金を渡して買來らしめ、又は使を遣はし求めて國用を足す、其内明の永樂通寶すぐれたりとて、關東にては是を上品の錢として、年貢には此錢を元に定め、外の錢四文と永樂錢壹文と同樣に通用す

る事なり、今は右永樂錢を永と計り唱へ、金の異名となし、勘定の一つとなりたり、異國への書翰は、善隣國寶記に見へたり

鼎案ずるに、天武帝の朝より歷代鑄錢の事ありしかど、村上帝の天德二年に乾元大寶を鑄られしより後は、王政日にまし衰微し、國家擾亂するまゝに、鑄錢の沙汰もなく、國用乏しく、士民ともに多くは外國の錢を交へて通用せしに、今法曹至要鈔に、「建久四年七月四日の宣旨云、「應ニ自今以後永從停ニ止宋朝錢貨一事右左大臣宣奉レ勅」の事もありけれど、これ錢を鑄られずしてたゞ停止せしのみ故、融通あしく指支ゆる事もありしや、北條時宗執政の頃、金を元に遣して銅錢を買求めし事などあり（元史に至元十四年丁丑日本遣ニ商人一持レ金來易ニ銅錢一許レ之と、至元十四年は後宇多帝の建治三年に當る）天德二年より三百七十七年にして、後醍醐帝の建武元年に至り、乾坤通寶を鑄られしなれど、天下一統に流布するまでもなく、又爭亂の世となりて其事半ばにしてやみぬれば、其後はたゞ外國の錢を以て專ら國用に宛て、足利一代錢を鑄るの事なく、義政明の禮部官へ三度まで書を贈り、官庫空虛せるよしにて錢を請れしなど、（其書翰三通とも善隣國寶記に載す）其頃の時勢思ひやる

又建武式目追加に

定

一セイセンノキ京錢ウチラメヲノソク其外ノトタウ（渡唐）錢エイラク（永樂）コウフ（洪武）セントク（宣德）ワレ錢（但ワレトヲラサル錢）以

下トリ合テ百文ニ三十二錢ケリヤウ三分一可レ在レ之於ニ向後一トウワタスヘキ事

一アク錢賣買ノ儀、一切可ニ停止一事

右條々堅被ニ制止一訖、若背ニ此旨一族アラバ、權門勢家ノヒクワンヲイワス、於ニ其身一者處ニ嚴科一

至ニ私宅一者闕所ニオコナワルベキ由、所レ被ニ仰下一也、仍下知如レ件

永正五八七　　沙彌信祐

近江守三善朝臣貞運

一撰錢事、近年令ニ超ニ過先規一之條、爲レ世爲レ人可レ不レ誡、所詮於ニ古今渡唐錢一者、悉以可ニ取ニ用之一、

次惡錢賣買儀停止事被レ定ニ御法一、被レ打ニ高札於洛中一訖、可レ令レ在之由被ニ仰出一也、仍□□

永正五八月七日　　信祐

貞運

城州大山崎名主沙汰人中

一攝州同前右京兆ヱ遣レ之

一堺北庄名主沙汰人中

一山門使節御中

一青蓮院御門跡廳務御房

一興福寺衆徒御中
一山門三院衆御中
一大内左京大夫
一右京兆代

一撰錢事、近年令超過先規條被定御法、被打高札於洛中之上者、守彼札、於于古今渡唐錢可取之趣堅可被相觸洛中被官人同分國中所々之由、所被仰下也、仍執達如件

永正五年八月七日　沙彌　近江守

商賣輩以下撰錢事　明德九　十

一近年恣撰錢之段、太不可然、所詮於日本新錢料足者堅可撰之、至根本渡唐錢（永樂洪武宣德）等者、向後可取渡之（但如百條之錢可相交）若有違背之族者、速可被處嚴科矣

松田丹後守
長秀

とあれば、永樂錢に限らず、都て古今の渡唐錢を根本として通用せし、されば今日に至りても、かわり錢とて寛永小錢のうちに、宋明の錢多く混雜して存在するにて、當時天下一般に行はれし事知るべし、其内永樂錢はわけて銅性もよく、又數多く渡りしゆへ、遂に後は公用にも用ゆる事

になりしにや、天正の頃は天正通寳を鑄られしかど、天正十年に平信長より伊勢兩宮造營料に下行せしは、永樂錢にてありし、殊に關東にては天文の末、北條氏康號令を下し他錢を用ひず、公私とも一統に永樂錢を通用し、田畑の年貢も皆此錢にて納めし事なれど、其頃は永樂一錢も鐚同樣一錢の通用なりし故、永積りといふ事はなきなり、乍去永樂はもと外國の錢にて限りあるものなれば、後世可繼の道にあらざる故、神祖御入國後慶長十三年に、鐚錢も捨べき理なきを以て、永樂・鐚の二錢相交へて通用すべきよし令せらる、されど錢に美惡あれば、撰錢の諍ひ又々出來んことを慮りて、永樂壹貫文に鐚四貫文づゝの積りたるべしと定めらる、是も上方筋は初より永樂・鐚とも通行せしかど、よきを貴び惡しきを賤るは人情の常にて、永樂一錢を鐚三四五錢に充てし、民間に自然に相場ありしにやあらん、（近代和泉考に云く、元祿十六癸未正月銀代通寳願人伊勢道喜願書或問に、永樂泉六厘通用の旨を載たり）それ等を見當に、かく號令をせられしにて、杜撰せるにはあらじ、これよりして小判金兩は永樂壹貫文、鐚にして四貫文といふ事、天下一統の制となりて、關東に專ぱら行はれし所以なり、其後田方は米納になりし故、今は畑方にのみ永の名存する事とはなりぬ

又案ずるに、世に今川の永四貫小判金、（重さ四匁五分）永貳貫小判金（重さ二匁二分）といへるを傳ふ、若し此金貨に今川氏の物なりせば、其頃より金壹兩は永四貫文の定價あるに似たり、予先年好事家の珍藏せるを見しが、全く其頃の物とは思はれず、後人の僞造にやと疑ひしに、其後金銀圖錄を閲せしに、

此金を載せて云く、舊說に、今川氏駿河に於て此金を造り、一枚を以て永樂錢四貫文に當つと、今川氏の家法は知るべからずといへども、慶長の定を以て推考れば、永四貫文を以て金壹兩に當べきにあらず、又金壹兩重さ四匁餘に製すべき理なく、且今川の時金作りし事を聞ず、此金蓋し後人の僞作ならんと、然れば此金もとより證とするに足らず、いづれにも金壹兩永四貫文の定制は、慶長以來の事と知るべし

田園類說云、永高は貫高とは別にして、石高以前關東諸國にて、年貢辻を永樂錢に積りて、知行領知などに直に此永高を用ゆ、今も東海道筋、又は鎌倉などに永高の所ありといへども、何れも古來の儘なるはなし、今一統石高の世となりて、永高時代のわけ分明ならずと知るべし

地方答問書云、熱田太神宮神領と覺書云々

一太閤秀吉公の御世壹朱印願候處、田中兵部大輔より御書給、于今所持仕候寫

當知行分之事

百七貫貳拾文　八屋鄉內
六拾八貫百四拾文　須賀鄉內
百三拾貳貫七拾貳文　熱田內
百貫四百七拾八文　闕

都合四百八貫文

右之趣任

御朱印の旨所務等之儀、如二先々一可レ被二仰付一候、中納言樣御座次第御事相調、重而可レ遣レ之候、如レ件

天正十八年九月十日　　田中兵部大輔在判

熱田社人中參

田園類說云、此外寺領・社領などの古書物を見しに、何れも何白何拾貫文とありて、永の字なし、貫高なるや、永高なるや、今にては分り難し、然れども關東の諸國東海道筋永高の遺法のある所は、すべて永高あるべし、此書付も貫高歟、永高歟、分明ならずといへども、三州には今以て永高の遺法あり、尾州は隣國の事なれば、永高なるべき歟、扨永高といふは、田も畑も永樂錢に積りて、知行領知など直に此貫數を用ゆ、今の根取といふものゝごとし、是に依て永高時代の檢地帳にも反別あり、大・半・小といふ小割もあり、（愚案するに、此說は前文大・半・小の條に引く野州足利郡羽田村の水帳によりていへるなり、此水帳に位反別ありて高石盛なければ、永高なるや石高なるや、其實は知るべからず、然るを强て永高の檢地帳とするは、一概の說といふべし）又上中下の位もあるは、永高とて別に檢地せしことにてはなし、然るに後世地面の貫と錢數の貫と紛れて、一つ事に思ふ故合點ゆかず、永高は即今の反取の如く、田一反に永何程、畑一反に永何程と、其地面の位に隨ひて永盛を付

て、都合何百何拾貫文と、一村の永高を極むるなり、此故に永高は其土地の位に隨ひて、壹貫文の地廣きもあり、狹きもありて定數なし、是を永別・永盛などゝいふ、其所々貫代の定法ありて、假令關東の田方壹貫文は籾五石取、畑方は直に錢にて取る事也、尤此時代は專ら籾遣ひにて籾納なり、其後米納になりて、今は米にて二石五斗代といふもの、關東畑永一統の通法となりたれども、元は諸國貫代の內の一つ也、此故に今尙諸國引付の貫代ありて、奥州の半石代、甲州の大切・小切の類、皆是永積り遺法なり

鼎按ずるに、地方答問書に載する熱田神領の文書は、永積りにてはあるまじ、甕尻に、尾州寺社領證印年月とある條下に、この熱田知行の貫高をも出し、又同じ天正十八年九月に、田中兵部大輔より下せし寺社領の高を記せし寺社も多く見ゆ、いづれも一時の事にして、貫高なれども永にてはなし、尾州の太閤檢地は文祿元年の由なれば、甕尻に、秀吉檢地(文祿元年)尾張國五十七萬一千七百卅七石とあり 天正十八年より文祿元年まで其間わづか一年故、文祿元年の石直しまで、田中兵部大輔よりしばらくかりの文書を渡し置しにや、此熱田の文書と同樣に、國府宮へも七十貫文云々、中納言殿御座次第御書相認可ㇾ進とあるを以て知るべし、文祿以後慶長六年辛丑の二月に至り、伊奈備前守忠次又尾張を檢地せしかど、永積りの法たゝざる以前の事也、永積りは前にもいふごとく、天文の末北條氏康關東に下知し、他錢を用ひず、公私共永樂錢を通用せしかど、其頃は永樂錢一

錢は一錢の通用なりし、慶長十三年に至り鐚錢をも交せて通用する事になりて、永樂一貫文は鐚四貫文と定められしより、永積りといふことは出來ぬ、されば慶長年中伊奈備前守檢地帳には永盛もありて、關東諸國・東海道筋など、一統に田畑とも永納とせり、尤夫より以前も、關東にては錢納と唱へし事もあるべけれど、其頃は公法にて永樂錢を納るのみなれば、一錢は一錢の通用故、鎌倉將軍家以來の貫高とかはる事なし、慶長以後より同じ錢納の上に、貫高との差別ある樣になりたるを、永高は石高以前の稱と一概に心得しは、誤といふべし

又按ずるに、慶長以來關東諸國・東海道筋押一統に、田畑とも永納とすといへども、鐚納も地によりてはありしなり、左れど割合は金壹兩に付、鐚四貫文の積りなるべし、予が聞及びしは、遠州磐田郡見附宿幷原郡下長尾村など、今に鐚納の名殘れり

永定め

遠江磐田郡
見附宿

一高七百七拾壹石貳斗九升九合

此譯

高百四拾七石三斗九合　　石方

此取米三拾石壹斗壹升六合　　高免貳ッ四厘四毛內

高六百貳拾三石九斗六升　　代方

此取鐚四百九拾九貫百六拾八文　　高鐚八百文

永百貫百六拾壹文　但五石代　遠江國榛原郡

一高五百貳拾石八斗五合　　下長尾村

此譯

高四拾四石五斗九升五合　　石方

内高拾三石壹斗貳升　　前々川欠川成山崩泥入引

殘高三拾壹石四斗七升五合　　毛附

此取米五石九斗壹升五合

一高四百七拾六石貳斗壹升　　代方

内高三拾石七斗貳升貳合三勺　　前々川欠山崩荒地泥入引

殘高四百四拾五石四斗八升七合七勺　　毛附

此取鐚貳百貳拾六貫四百五拾壹文

此文面にて、當時永納の地も、鐚納の所もありし事を推知すべし、其割合は下の條に見ゆ

或覺書ニ云、遠州榛原郡永高の事、検地は三百坪壹反、田畑ともに上中下の石盛を以て、餘國并分米を付け高になる、其高壹石村により永三百七拾文・三百六拾文・三百五拾文・貳百文、是を永盛とい

ふ、但右永盛は田畑上中下の差別なく同位にて候、假令ば永盛三百七十文と定候村は、畑方も上中下の構なく、押なべ三百七拾文にて候、右の三百七十文を其村の撿地高合せ懸候得ば、其村の永高になる、其永高壹貫文を五石替にして、高になるを役高と申候て、諸懸り物を割懸け取立申候、又元來の撿地の高を納所高と申候て、年貢は納所高にて納申候、但田方は幾つ何分、畑方は永高壹貫文に錢何貫文取と致し取付申候、免狀にも納所高を用ひ書置候得者、御勘定所へ郷帳差出等迄も、役高に直し記し上げ申候、然る所近來紛敷故、免狀をも直に役高に直し、村方へ遣申候由

田園類說云、是は永高の場所を石高の撿地に改たれ共、故ありて此邊又永高にせし所と見へたり、然れども古來の永高にもあらず、田畑永盛に上中下の差別のなき譯は、其檢地高壹石といふには、反別の不同ある故に、永盛は無差別の筈也、此永高は田方を幾つ何分と歷附する故に、畑方にも永何程此取とせんために、割合を以て永高を增して付し所と見へたり

地方細論集云、或覺書及田園類說の說不分明なり、其所にて譯不レ聞時は難レ分也

鼎按ずるに、天正石直し以後、慶長年中伊奈備前守再檢地帳には永盛を割付しを、其後田方は米納になりたれど、此邊は〻はり永納にせし故、永盛を除かざりしにや、又其後此邊も一同米納になりてより、永は名のみゆへ、田畑上中下の無二差別一三百七十文の村は、すべて三百七十文とせし譯は、田園類說に云へるが如くなるべし

或覺書云、同國豐田郡周智郡三州八名郡代方、假令ば上畑壹反に付永百四十文、中畑一反に付永百二十文、下畑一反に付永百文など上中下の差別有之、田方も同前に用ひ、元來の檢地高は用ひ不申、右之通村々にて永盛は違ひ候得共、永高の譯は大方如此候、但五石替高になり候儀は、何年以前誰時分より五石替になり候と申候儀不相知、慶長年中伊奈備前守檢地帳に永盛記し有之候、其時分より五石高になり候哉、村々にても覺へ候者無之候

田園類說云、是又前條の通石高に改りても、譯ありて永高を用ひし所と見へたり、元來の檢地高をば不用して、永盛の上畑百四十文、中畑百二十文などを反別へかけて、都合したる永高へ、五石代を以て高を出して用ゆると也、上畑一反永何程、中畑一反永何程と上中下の差別あるは、何れも一反に付ての事なる故に、其地面の位に隨て永盛の高下あるはづなり、田方も同前に用ゆるとは、永高を用ゆるまでの事にて、取箇は永高積りの仕形にあらず、元來の永積りといふは、壹貫文の田畑なれば籾五石取、二貫文に拾石と極めし者也、然るに前條幷に此領の田方は、壹貫文を高五石にして、此高幾つ何分と厘附して取故に、古來の仕形にあらずと知るべし、扨代方といふは、永盛・永別と同じ詞也

地方細論集云、或覺書及田園類說の說不分明也、相考に、何れも的當の品々、左之通

石盛三分五厘

一畑高壹石　　此反別貳反七畝拾七步

此取永三百七拾文　　畑高平均にしての取箇

此籾壹石八斗五升　　但永壹貫文に五石替

此米九斗二升五合　　但五合摺にして、則村高也

此取米四斗六升貳合五勺　　五分取也

此代永三百七拾文也　　但永壹貫文に付、壹石貳斗五升替

分米三斗五升

一畑壹反　　石盛三つ半に當

此取永百四拾文　　但永壹貫文に五石替

此籾七斗

此米三斗五升　　但五合摺にして、則村高也

此取米壹斗七升五合　　五分取也

此代永百四拾文　　但永壹貫文に付、壹石貳斗五升替

石盛三つ五分

一畑壹石　　反別貳反八畝十七步半

此取永三百六拾文　但永壹貫文に五石替
　此籾壹石八斗
　　此米九斗　但五合摺にして、則村高也
　　　此取米四斗五升　五分取也
　　　　此代永三百六拾文　但永壹貫文に付、壹石貳斗五升替
　此外何れも同様なる故略レ之
鼎案ずるに、遠三州の內永高の場外はしらず、予が聞く所を以ていはゞ、遠州周智郡にありといへども、今は公用に用ゆる事なし、たゞ前々仕來りにて、鄉帳には村高の肩書に、永高何拾何貫文、但五石代とあり、假令ば
永五拾貳貫三百五拾文　但五石代
一高貳千六百拾七石五斗　周智郡何村
とかく認差出す、尤郡寄等には不レ認事の由、荒地帳など振合は
　下田六畝步
高七斗九升四合五勺
永百五十八文五分
高四斗五合
永九十文

上畑七畝拾七歩
高壹石六斗五升六合
永三百三十壹文二分

中畑壹反八畝拾貳歩
高七石壹斗五合
永壹貫四百貳拾壹文

楮三百五拾束五把半
高壹斗四升五合
永貳拾九文

漆六束貳把

と田方は永より高、高より反別、畑方は高より永、永より反別を書く事仕來りの由、かく田畑ともに反別、並に上中下の位付もあるにて、永盛の事大方推知すべき也

或覺書ニ云、古來壹貫文を五石に極むるを見るに、今以て鎌倉中には永高あり、鎌倉の永高と申は、古來の永高にて可レ有レ之候、今東海道筋の永高の所多く有レ之候得共、鎌倉風と違ひ、是は其以後の永高なるべし、鎌倉の永高壹貫文といふは、壹貫文の所を千坪の積りと申傳ふ、こゝを以て見る時は、五石替と極る起り、浮役永高に結物は定納物故、石盛大概十五といふは、中より上の場所故、上田の位に見て壹貫文に十五を懸け、三を以て割れば五石と結る、然れば鎌倉永高の積りを以て、古來五石と極めたるなるべし

田園類說ニ云、鎌倉の永高は永壹貫文を五石に極る元にして、千坪の貫より起りたりといふは附會の說なり、五石に極る元は、關東永高の法壹貫文は籾五石の定法也、米納になりて貳石五斗代に直せし物にて、何の入組たる穿鑿もなき事なり、尤東海道筋の永高は、前條之通一旦石高に檢地も改りしかども、譯ありて又永盛を付直せしものなれば、古來の永高にてはなし、鎌倉の永高には、未だ石高の檢地はなき故、古來の永高の樣に見ゆれども、鎌倉の割付に畑方何百何拾文、此取何程 下に三ッ取、又は四ッ取などゝあるからは、古來の永高にてはなく、これも永盛を付直したるㇳ見へたり、又鎌倉の永高は壹貫文の所を千坪と申傳ふるとは、前條に辨ずる通り、貫高永高一ッㇳ思ひ誤れる也、既に今鎌倉の村鑑に、延寶二寅年成瀨五左衛門御代官所の節、永百文を一斗八升七合の積りを以て石高を付しとあり、又一斗八升八合にて付しもあり、壹貫文の地千坪ならば、直に永高に寄て反別をも付べきなれども、地面の廣狹不同あるを以て付がたき故也、勿論浮役小物成の定納、永壹貫文を五石に結ぶ場所、野にても山にても、場所毎にひとしからず、又海川漁獵の定納、其漁獵の多少を以て石高を積りて、其場所廣狹の差別なし、永高に坪數の定なき事、是にても知るべし、且上の場石盛大概十五と見て積るなどゝいふ事、是又無稽の說也

地方細論集ニ云、或覺書及田園類說の說難ニ信用一、左之通石高二石五斗替の法出しも、元は籾納の事にて、五石替ㇳ用ゆる時は、假令ば

上畑壹反步　　石盛拾
分籾貳石　　是を半減にす、分米則石盛也
此分米壹石　　村高拾の石盛也
此取米五斗　　五つ取
此籾壹石　　但五合摺にして
此永貳百文　　但五石代
上畑壹町步　　石盛拾
分米拾石　　村高也
此取五石　　五つ取
此籾拾石　　但五合摺にして
此永貳貫文　　但五石代
右割合厘取より生る事也、則關東貳石五斗の起り、籾にして五石替の起り、左之通
一高百石　三つ成にして拾五石　金六兩
一高百石　三つ半成にして拾七石　金七兩
一高百石　四つ成にして貳拾石　金八兩

一高百石　　四つ成にして貳拾貳石五斗　　　　金九兩

一高百石　　五つ成にして二拾五石　　　　金拾兩

右關東田畑六分違〃貳石五斗替の厘付なり、扨籾納の時は五石替也、此法を以て永取執行ふ時は、物成多少有レ之地成共、厘付等過不足無レ之、其所の盛衰を考へ、見込之取箇付候時は、田畑の分右の心得を以て可レ附事也

鼎按ずるに、田園類說に、五石代は古來關東永高の法、壹貫文は籾五石の處、米納になりて貳石五斗代に直せし由にて、細論集に、田園類說の說難二信用一とあれども、籾にて五石、米にして貳石五斗といふに於ては同じ事也、是皆意を以ていふ迄にて、碇としたる所見あるにはあらず、元來五石代は分米の上にていふ事にして、籾高にてはなし、神祖御入國慶長の頃は天下一統し、先は治平の姿にはありつれど、諸侯方軍用の備へ專一とせし時節故、自國の米を他へ廻し、賣拂樣の事は少なく、大概は國限り取引すれば融通あしく、殊に金銀貴く、民間にては籾遣ひせし所もありし由なれば米價賤しく、金壹兩に五石替相當の相場故、關東にては永壹貫文五石替と、田畑とも錢納の高を御定ありしなり。夫より猷廟御治世の頃に至りては、治平なるまゝに遂に海路も開け、諸侯方廻米高多く、米價いつとなく貴くなりし故、五石代御定直段も半減になり、二石五斗代と御定ありし、憲廟元祿の頃は又半減になり、壹石二斗五升代と被二仰出一、是

れ其頃の相場にて、經濟錄云、國初より寛永の時までは、天下の米價甚賤かりしかども、士民さのみ困窮せず、世の風俗質素にて奢侈なることなく、他物の價も賤しかりし故なり、憲廟の世元祿年中迄は米價尚賤くて、東都米價金壹兩に石二三斗より五六斗迄なり、〇昆陽漫錄云、勢州の人覺書に、慶安四年勢州にて金拾兩に米四十二三俵（四斗入）承應二年の春金拾兩に米四十俵、秋四十六七俵、同三年の秋金拾兩に米三十八九俵、冬四十三俵とあれば、是にて其頃の諸國米價推知すべし今日御用ひある所の御定直段なれば、相場にあらざると明らかなり、猶諸國石代甲州小切の條見合すべし

地方落穗集云、古來永壹貫文を高五石に極る事を考ふるに、今以て相州鎌倉中永高ある地坪千坪を以て、永壹貫文に當ると申傳候也、是れを以て見る時は、永壹貫文五石替に極ると見へたり、右千坪を田方三にて除き、三反三畝三歩と成る、是九歩九分九厘なり是へ拾五の盛を乘じ高五石となる是一坪壹升毛五合摺五分取にして、根取は斗五升、十五盛五つ成の端也

鼎按ずるに、相州鎌倉郡の永別は無反別也、永壹貫文千坪といふも、申傳へのみにて證とすべき事なし、久保田十左衛門御代官所の節、御勘定所より御尋ありし故、村方相糺し、寶曆三年午九月永別五百文に付、反別一反歩の由被申上ハ其以後跡支配御代官へ申送りになり、今は右の積りにて取扱ふ事也、尤鎌倉郡は定免にて、畑多く田少き故、破免することもなく、古來より檢地せし事もなければ、定めて永壹貫文の地に、不同ありて一定せざるべし、村鑑割付は左の如し延寶二寅年、曾根五左衛門御代官の節、永別古高に積、檢地帳なし

永別高四百七拾壹貫四百拾文の內社寺領入會鎌倉の內

一高六拾三石三斗八升　　相摸國鎌倉郡大町村

内貳石壹斗貳升九合　無地高

此永別三拾貳貫七百文餘　永百文に壹斗八升七合

割付は

一高六拾三石三斗八升　大町村

内高貳石壹斗貳升九合　無地高

此永別三拾貳貫七百五拾五文

内

高拾七石壹斗貳升七合

田方九貫百五拾九文

高四拾四石壹斗貳升四合

畑方貳拾三貫五百九拾六文

此譯

高拾七石壹斗貳升七合

反永九貫百五拾九文

此取米拾壹石四斗五升六合　永別百文に付壹斗貳升五合五勺內

高三石壹斗壹升七合

上畑壹貫六百六拾七文

此取永六百六拾七文壹分　右同斷三拾九文

高四石五斗七升貳合

下畑貳貫四百四拾五文

此取永九百五拾三文六分　右同斷三拾九文

高三拾六石四斗三升五合

棟別永拾九貫四百八拾四文

此取永七貫七百九拾三文六分　右同斷四拾文

取合　米拾七石四斗五升六合　永九貫三百九拾七文三分

村高之考

田園類說云、村高は往昔は戶數といふて、家數を以て何百何十戶と唱ふ、貫高になりて何百何拾貫と唱ふ、關東永高にても何百何拾貫文と唱ふ、後世にては貫高永高相紛る事多し、石高になりては何百何拾石と唱ふ、卽年貢の納辻なれども、今米取になり候故、高と取箇と別りし事也、世上にて此村高を往古より有來事と思ふは、誤りなりと知るべし

地方細論集ニ云、家數を以て高と唱ふ事は、五拾戸を一里と云事なるべし、家には大家小家も可レ有事也、然れば高に可レ結樣なし、又曰、石高になりては籾高なれども、今は米取故に、高と取箇と分りしなりとあり、紛敷事は有間敷ぞ、今村高は米高也、委敷は次の箇條に記す

鼎按ずるに、本文に云へるが如く、古は村高といふ事なく、たゞ戸數に積りし、孝德紀ニ云、「自雉三年造ルニ戸籍一凡五十戸爲チレ里、毎レ里長一人、凡戸主皆以ニ家長ノナ爲レ之、凡戸皆五家相保、一人爲チシレ長、以相檢察トスレ」五家相保、一人爲レ長の遺風、今甲州に組代と唱て存せりとありて、五十戸を一里とすれども、家に大戸小戸ありて一樣ならざれば、一戸の高を稻四拾束、米にして貳石と極め、假令ば太政大臣の封戸三千戸は六千石とするの類、必しも同高の百姓家數三千戸あるにもあらじ、左すれば家の大小に不レ拘して一戸の高を極め、たとへ一戸にて稻何百束を出す大戸ありといへども、稻四拾束を一戸の分とし、三千戸に積りしなり、又里數を積るには、大戸小戸を論ぜず、五十戸を一里と定め、其餘り戸數五十軒に及ぶは別に一里をたつ、若五十軒に足らざるは、外の里へ割入るゝ事にぞ、故に一里の上にては、田畑の高毎里不同ありて、一定せざるべけれども、封戸の高は定りありて、出入なしと知るべし

鈴錄ニ云、大名ノ身上ヲ幾十萬石ト云ヒ、平士ノ身上ヲ幾千石幾百石ト云事古法ニアラズ、大形信長秀吉ノ時ヨリ起ルト知タリ、古ノ領地ノ書物ヲ見ルニ、何郡何鄕何村ニテ幾十町幾百町抔ト有テ、石

高ハナシ、武士ノ知行ヲ幾拾貫幾百貫ト云モ、當時モ百姓ノ詞ニ殘リテアリ、田一坪ニ苗一把種ルヿニテ、百坪ニハ百把種、是ヲ百目ト云、千坪ニ千把種、是ヲ一貫目ト云、此積リニテ大抵十貫ハ百石、百貫ハ千石ニ當レモ、上中下田ニヨリテ一定セズ、是古法也、扨俸祿ヲ石高ニテ定メタルヿ、其起リ浪人衆ヨリ出タリ、浪人衆ト云ハ、本領ヲ離レテ他國ニ仕ル者ヲ云、當時無祿人ヲ云類ニハアラズ、甲州ノ浪人名ハ無理之助ノ類是也、古ハ本領安堵ヲ士ノ本意トスルナラハシナルユヘ、其國ヲ切取手ニ入テ後ニ、本領安堵サスベキト云事ニテ、當分廩米ヲ與フ、是ヨリシテ士ノ祿ニ石高ヲ以テ定ルヿ起リ、信長秀吉ノ時分ニ至テハ、日本國中ノ士皆本領ヲ離レテ、家々ヘ散亂シタル故、一面ニ石高ニ成タルナリ、當時モ古キ家ニハ、新參者ニハ廩米ヲ與ヘ、家ノ譜第ニナリテ、知行所ヲ與フルコトアルモ此遺風也、且又四ッ物成、三ッ五分物成抔ト云ヿハ、元來百石ト云ハ籾百石ナリ、米ノ四十石アルモアリ、三十五石アルモアリ、四斗俵・三斗五升俵抔ト云ヿ出來セリ、古ハ皆籾納ナリ、武家ニ兵糧ヲ貯ヘ置ハ、皆籾ニテ貯ヘ置ヿ古法ナリ、故ニ東照宮御筆ノ物、御旗本ノ家ニ所持シタルニ、誰々ニ籾幾俵ヅヽト書給ヘルガ多キナリ

鼎按ずるに、古へ稻の束は量目を以ていふ事にて、三代實錄に、出羽の國元慶二年、夷虜所ニ燒盗一穀類三十二萬五百一束六把八分六毛、糒七百五十斛と見えたり、束の量目何程といふ事は、拾芥抄に、「十釐爲レ毫、十毫爲レ分、十分爲レ把、十把爲レ束」とあり、これ一把壹匁の積り故、鈴錄にい

ふ百把を百目とするに符合すといへども、拾芥抄は、穫取たる稻束の上にて云ひて、苗にはあらず、田壹坪に苗を種る多少は、一村の內にても上中下の位によりて違ふものなり、まして東西南北の國國一樣ならぬはいふまでもなし、予これを老農に聞く

上田壹反步	種子籾三升より五升	壹坪積上々地數二十七八より三十株上地三十より四十株
中田壹反步	同六七升餘	同　七八十より百株
下田壹反步	同八九升より壹斗餘	同　百より同二十株
下々田壹反步	同壹斗二三升より同七八升	同　百二十より同五六十株

かく株數に不同あり、尤上中下田によりて一定せざる由いへど、上下にては彼是四五倍の出入あれば、一坪一把の積りも一概の說にして信用し難し、又石高は浪人衆より起るといふ說も附會なり、委細は下の石高の條に論ず、又三つ五分物成、四つ物成は、籾を摺て米となして、籾百石にて米四十石、或は三十五石ある故かくいふ由、これは甚だしき誤なり、すべて百石の地より出る租稅百石は出ず、或は四十石、或は三十五石出るによりて、四十石出るは四つ物成とし、三十五石出るは三つ五分物成といふ、勿論稻の出來形により不同あれども、今籾を米に摺れば、上籾は百石に六十石餘、中は六十石、下は五十石、下々は四十五石あるなり、五十石以下は極々不作の稻としるべし、今五合摺御定法故、若鈴錄の如くいはゞ、五つ物成といはん歟、不通の說也

田園類說云、今の村高は文祿・慶長の頃より始りし事也、然るに世上の人多くは往古より有來る事と思へるは誤也、惣て其時代の移り替りたる事を辨へざれば、本も末も一つになりて分明ならず、先往古には田地長三十歩、横十二歩を段とし、三百六十歩一段とす、是に上中下の位ありて稻の束數を定め、其田地の品もいろ〳〵ありて、年貢の高も定りあり、村の高をば戸數とて、家數を用ひて何十何百戸などゝ稱し、田地は何町何段と稱す、鎌倉將軍家の頃よりして古法を廢り、夫よりして京都將軍家時代には、軍役より貫高起り、田地千坪を一貫として、知行領知などに此貫を用ひ、其頃より古の三百六十歩一段を三百歩に變じ、其後東國にては、年貢辻を永樂錢を以て積りて永高起る、然れども永高は田地の坪數に拘はらず、今の根取帳といふものゝ如し、其時節は最早古法も失せて、地頭四分百姓六分、又は地頭三分一百姓三分二、又地頭三分二百姓三分一といふ收納の法行はれし處に、文祿・慶長の頃より檢地改りて、地面の上中下を以て其年貢の石數を定む、是を村高として、百石は直に籾百石の積りなり、今の世籾遣ひといふ事なき故、籾納といふ事不審に思へども、古は民間に金銀の通用なく、籾遣ひとて諸物の賣買にも、錢に籾を取交ぜて遣ふことなり、此故に年貢も籾納なり、然るに慶長以來金錢の通用自由になりて、籾遣ひ止し故、隨て籾納も米に摺せて取るによりて、籾摺の穿鑿より厘付起りて、畢竟村高は噂物の樣に成りたる也

鼎按ずるに、永高は田地の坪數に拘はらず、今の根取といふものゝ如しとあるは、根取を田地の

坪數に拘はらずとするに似たり、根取を如何心得しにや、又村高は籾納にして、米納になりては噂のみといふの誤りは、下の地方細論集に論ぜる如し

地方細論集云、古法は籾納成故に、村高は籾高と可ㇾ知と品々有ㇾ之、土免と云は、一反三百歩、一畝三十歩の事也、上田一反は三百坪なり、此石盛一石五斗、是は籾三石有ㇾ之を、米にして五合摺の積りを以て一石五斗也、此一石五斗共田の土免なり、誠に土一升實一升といふ事此意也、是は宜事いふなり、是を分米共、又は十五の盛共、村高共成品也、前箇條毎に村高は籾也と有ㇾ之は誤り也、村高は米也、則四公六民の法を以て、五分五分の取箇根元、左に記す

分米壹石五斗

一上田壹反歩　長三十間 横十二間　石盛十五

此歩數三百坪

此籾三石　但壹坪に付籾壹升

此米壹石五斗　但五合摺にして是則村高也

右を變じて根取の起り

籾三石

内

一籾壹斗　　壹反の種籾也

一同七升五合　　壹反に人足三十人懸、一人に付籾貳合五勺づゝ扶持米、是は不足に候得共、畑物半々に給候積、其外は雜穀交食す、故如レ此

一同四斗貳升五合　　壹反に肥代永二百文より貳百五拾文まで大積りを以て如レ此

小以籾六斗

殘籾貳石四斗

此米壹石貳斗

内

米六斗　　公納根取五分

米六斗　　百姓作徳

是は壹坪に付籾貳合に當る、依レ之古來は貳合毛までは御取箇は不レ付事の謂は是也、これを分米壹石五斗の内にて三斗引て、殘り壹石貳斗を五分五分に取付也、然るに當時は一坪に籾壹升有レ之候得ば、七斗五升の取付にて、壹石五斗を五分五分に取付候故、五分五分の取違ひなるべし、一坪にて籾二合諸入用に引候故に一坪八合に成、一反歩にて籾二石四斗也、米にして壹石貳斗なり、五分の取箇にして米六斗公納なり、則四公六民共、又は五分五分ともいふなり

又

分米壹石　村高也

一上畑壹反歩　　石盛十

此取五斗　　定法高五ッ取

此永貳百文　　定法永壹貫文に貳石五斗替

此永を物成結に結時は壹石貳斗五升也、知行渡或は郷帳の表里付などに用ひ、地方にては壹石貳斗五升にて懸る代りに、八を用法にして割也

是は一と置、十二半に割時は、八と成故也

此米二斗五升也

是を永何程にても八にて割、永百貫文は米百貳拾五石と位を見、是へ田方の米を加へ、村惣高にて割れば高免也、郷藏敷道代押堀川欠山崩抔の引高を除き、殘高を用法にして取米を割を、毛附免といふ也

集義外書云、今の俗粟の字をあやまれり、俗に畠に作るあわの字は粱也、粟の字はもみの事也、米となしてはこそね易く、虫に成て捨り多きゆへに、古へはもみにて納め、萬の貢貫ももみにてせし也

鼎按ずるに、本草綱目に、「李時珍云、周禮、九穀六穀之名、有レ粱無レ粟、可レ知矣、自レ漢以後、始以テ二

大而毛長者ニ爲レ粱、細短者爲レ粟、今則通呼爲レ粟、而粱之名隱矣」とあれば、古に云ふ粟は穀實の事にて、後世にいふあわは粱也、以後粱の細にして毛短き者を粟とせしなり、粱粟相混じ、倶にあわとする事にはなりぬ、本邦の古へも此誤りを襲ひて、粱粟ともにあわと訓ず、（江談抄に、近世以レ粟爲レ粱とあり）又粟に穀實の義あるを以て、遂に粱を粟と同義と誤り、省て籾に作り、穀實の稱とせしなるべし、續日本紀又日本風土記殘編にも籾の字あれば、古く書傳ふる故、所謂和字ならんか、いづれ粱の字より出し字なる事は疑ひなし（再按ずるに、續字彙補に、籾女梨切、音尼、見ニ金鏡一とあれば、和字とばかりも云難し、或人の云は、兵家茶話に、丹波桑田郡籾井城主籾井下野守ありて、籾井にきいと假名つけり、キの音あるにやと、後、但馬の澤山儀十郎に問へば、籾井下野守は元來山名家の旗下にして、彼藩にてはぬかいと呼來れりと云ふ、）和名抄に、上野國管十四、田三萬九百三十四町百四十四歩、正公各三十萬束、本穎八十八萬四千束、雜穎二十八萬四千束といひ、或は又國に寄り本稻雜稻ともあれば、公税を穎にても納めし事にて、古へとても一概に籾納とばかりはいひがたし、左れば續日本紀に、「養老三年六月癸酉制、穀之爲レ物、經レ年不レ腐、自今以後、税及雜稻、必爲レ穀而收レ之」とあり、此自今以後といへるにて、其以後の事知るべき也、此制ありてより後とても、必皆籾納といふにもあるまじ、當用の分は米納なるべし、其後王政衰微し、鑄錢の沙汰なく、國用乏しかりければ、民間にては錢貨の外に籾を取交ぜ交易せし事にぞありける、すでに慶長の始、長曾我部元親の百箇條に

一大工。鋸引•檜物師•鍛冶•銀屋•研塗師•紺揆•革細工•瓦師•檜皮師•壁塗•畳指•具足細工等、右諸

職人賃、一日に上手者京升籾七升、中者京升籾五升、下手者京升籾三升、職人上中下の事者、其奉行可ニ相尋ー事、付舟番匠之賃者、京升籾可レ爲ニ壹斗ー事

とあるにて、其頃民間は籾遣ひなる事知るべし、さればとて都會の地迄も一同かくありしにもあらじ、是等は意を以て見るべき事にこそ

石高之考

安齋隨筆後集ニ云、武士の領所、鎌倉の代には幾町塲はるといふ、今は幾石といふ也、然るに盛衰記四十一屋島合戰の條に、太胡小橋太と云者海を潜て、松浦五郎が舟に乘て軍の下知するを、其足を捕て海中へ引入首を取たるを、後に世靜て賴朝其功を賞して、千餘石の勸賞を給はりたる由見へたり、此千餘石何れの國にてといふ事も見へず、只千餘石とあれば、國部を給はりたるにあらず、米穀を千餘石給はりしなるべし、石は斛の事也、鎌倉の代には、何れの國何といふ所にて幾町賜はるといふ、室町家の代又同じ、信長秀吉より何萬石何百石と云なり、米三十五斛を百石とす

鼎按ずるに、斛の事は孫子算經に、「十斗爲レ斛」とあれども、石の名は韓非子に「王因ニ收吏璽至ー自ニ三百石ー以上皆效レ之子レ之」（戰國策にも此文を載す）と見ゆるのみにて、量目何程と云事詳ならず、石と斛と同用する譯は、圭齋錄に、大學衍義補曰、「呂祖謙作ニ大事記ー於下始皇平ニ六國ー之初上書曰、一ニ衡石丈尺ー、而其解題ハ、則曰商君爲レ政、平ニ斗甬權衡丈尺ー、意フニ其所レ書之石ハ、非ニ鈞石之石ニー也、後世以レ斛爲スレ石、其

始此歟、胤按、書五子之歌、關石和鈞、注、百二十斤爲石、三十斤爲鈞、鈞與石、五權之最重者也、正字通、十斗曰石、周書關石注、若今之斛也、蓋石者本權衡之名、及秦漢之際、轉爲斗斛之名、有碩石千石之稱、亦或作碩、或作柘、豈當時以所容之重、遂名其量耶、後世徒知爲斗角之名、而不知其本爲權名、とあり、本邦も是等によりてや、十斗を石とす、東齋隨筆に、斛は十斗也、又石を直に斛の音に讀ことは、延久の頃穀倉院の斛を造らるゝに始る歟（穀倉院の斛の事は、大日本史に「後三條天皇欲審量制、命新作器、使藏人頭藤原資仲督之、帝自抽簾截竹爲之準、及成資仲等率藏人出納小舍人、量殿沙試之、而取穀倉院米量之、後世遵用、謂之宣旨升、又造方櫃容二斛、以石爲錘、衡其輕重、器傳在穀倉院」といへり）とあれども、すでに延喜主税式に、「凡志摩國公廨料、用尾張國綠海郡正稅穀給、守三百日五十石、史生七十五石」といひ、又續日本紀に、石斛通用して用ひし事每々見當れば、其以前より石を斛と同用せし樣に思はる、されど延喜式に云へるも、今の役料として廩米を賜はるが如く、公廨料の內より正米にて、何石と給する事にして、田地にあづかるにはあらず、盛衰記も正米千餘石を以て、勸賞に賜はりしにて、後世知行の石高にてはなし、いづれ石高は天正十八年石直し前後よりの稱にして、古にはなきことなり、又當今百石の高に三拾五石廩米を賜はる事は、御料所物成平均せし時、三つ五分物成に當りし故に、かく御定めありし由申傳ふ、いつの時代の事なりしや詳ならず（友人中井昌元四つ物成・三つ五分物成の根元を考へて曰、知行百石と云は、籾百石の事也、米に摺りて凡六十石を得る、之を三割にして三ケ二四拾石を地頭取、三ケ一二拾石を百姓取、こゝに於て地頭四斗俵百俵を收納する、是を四つ物成といふ、關東筋など薄地多の所は、籾皮厚くして摺出し六拾石に至らず、凡五十二三石を得る、是を三割にして三ケ二三拾石を地頭取、三ケ一十七石五斗を百姓取、こゝに於て三斗五升俵百俵を收納する、是を三つ五分物成といふ、或は又田地は上中の位にて、六十石の摺出しはあれども、土地一

作田多なる所などは、百姓助成の爲に取箇三つ五分物成などにする事大法也

家忠日記ニ云、天正の初めまでは知行何貫とありしを、同十八年御家人へ采地を賜はるに、何萬石誰々と見ゆ、是全く石になりし始めなるにや

成形圖說ニ云、天正十六年、豐臣太閤より吾先侯薩摩侯をいふに攝津の内一萬石を被充行等の知行目錄あり、されば天正の中間よりいと早く田地に石附せし事也

鼎按ずるに、天正の石直しは、予が聞及びしは十八年よりの由、尤其以前より石直の漸はありもしつらんなれど、天下へ一統號令ありしは、十八年よりなるべし、故に前に所引の信州松尾領伊賀良庄の京極修理大夫檢地石直しも十九年なり、されど尾州熱田神領の御朱印は十八年九月、相州鎌倉松岡東慶寺の御朱印は十九年十一月なれども、皆貫高を以て云へるにて、廣き天下の事故一時に石直しせしにもあらず、尾張國の檢地は文祿元年の由鹽尻に見へ、伊勢國は文祿三年、大和國は文祿四年なる事は、間竿の條に見ゆるなどにて、天正十八年より文祿四年頃迄、逐々諸國石直しせる事と知るべし、又神祖駿州久能の御寶藏へ納め被置候由にて、御遺狀百箇條と云書を世に傳ふ、眞僞の程は難計といへども、其内に

一郡國公私自他所領の高は、文祿元年大河内淺野が御割付之通令記錄、禁裏之惣政所へ注進す、林野山川皆高之内也、應所領公用軍役可申付事先前檢地三百六十坪の所、此時より三百坪に大河内金兵衛淺野彈正の兩人改め直すとあれば

文祿元年に禁裏へ奏聞を遂げ、三百坪壹段天下の定制となし、此時より天下一統に石高とはなりし事にそ

又按ずるに、信長記云、天正九年四月六日、若州逸見駿河病死す、此家の所領八千斛なりしかども、可相繼實子もなければ、三千石武田孫八郎、五千石溝口竹に被下、此溝口は受領して、伯耆守とぞ申せし云々とあるなどは、後世よりの追書にて、其頃石を以て稱せしにはあらず

諸國石代之考

地方一様記云

貳拾貫百石

一關東高百石之物成貳石五斗替

此永貳拾六貫六百六拾六文六分六厘六毛餘

辨解云、是百石之物成米貳拾□石永拾貫文と云を立て、上方關東諸國同様になる譯を積りしもの也、此段田米貳拾五石を壹斗五升替にして、拾六貫六百六拾六文六分六厘六毛、畑永合せ貳拾六貫六百六拾六文六分六厘六毛也

一上三分一銀　但四十八匁替

此永右同斷

辨解云、是高百石、此取五拾石、三つ割二つ分田米三十三石三斗三升三合三勺を、貳石五斗替にして拾三貫三百三十三文三分三厘三毛三分一、畑米拾六石六斗六升六合六勺六才と、三分一直段壹石貳斗五升替にして、此永拾三貫三百三拾三文三分三厘三毛、合貳拾六貫六百六十六文六分六厘六毛關東同數也

十七貫百石

一關東下野宇都宮三石替

此永右同斷

辨解云、是高百石、此取米二十五石永十貫文、田米二十五石を二石五斗替にして、十貫文、畑永十貫文三石替にして、此米三十石、是を六分違を懸たる直段也、一石八斗替にして、此永十六貫六百六十六文六分六厘六毛關東同數也

十六貫百石

一奥州會津白河長沼三石二斗替

此永右同斷

十貫百石

一同仙臺五石替

此永石同斷

七貫百石

一同福島七石替

此永右同斷

辨解云、是何れも宇都宮の辨解同斷にて、關東高百石、此取米二十五石永十貫文と定めたる算用にて同數になる也

八貫百石

一出羽米澤田畑米取、投免六石替、半金納

辨解云、是は田畑なげ免にて、田も畑も正米に積り、半分は金納にする也、田も畑も正米に積るを以て、田高五十石の五つ取正米二十石、畑方永十貫文引付の直段六石替を乘じて、此米六十石と二十石と合八十石なげ免なる故、内四十石田米とし、四十石を畑として、是に定法の六分を懸て二十四石となる、右の田米四十石を加へ合六十四石、是を田畑取米の正味とす、内半分三十二石、關東正米直段一石五斗替にして、此永二十一貫三百三十三匁三分三厘三毛、半分三十二石六斗替にして金納、此永五貫三百三十三文三分三厘三毛、合二十六貫六百六十六文六分六厘六毛、

諸國一樣同數に成る也

右如レ此國々所々に色々の法ありといへども、上方關東に對して毛頭の相違なく、依レ之一様記と云也

辨解云、前に段々解する通り、國々所々直段の違ひ、關東二石五斗替と、上方三分一直段とを元として、六分違ひ五分違ひといふを立て算用すれば、何れも同數になるなれば、元來諸國ともに同様の積りに當るを以て一様記と名付しとなり、今案ずるに、田と畑との違ひは往古よりあるべき事なれども、上方を五分違ひとし、關東六分違ひと云事はあるまじき也、土地は其國々所々によりて差別あるべき事なれども、田方よければ、畑方もよかるべし、然る時は何方も田畑の違ひは同様なるべし、東鑑には、五分違ひとし、當時鄉帳五箇年平均の厘附は、古來より壹石貳斗五升替を用ひ來るなれば、五分違ひとして其理近かるべし、今又上方關東諸國を五分違ひとして、此書面の通り組立る時は、是又同數になるべし、然る時は畢竟其理の付様にて、何の定りたる事にはあらず、前にいふを以て解する通り一様記と號するは、諸國同様といふを以て名付しなれども、國々所々のかわりある事、何ぞ一様に成るべきや、物は夫々の品ありて、違ひのあるを以て相分つものなれば、一様なるもあり、一様ならざるもあり、然るを何も角も一様に心得たるは差支の本也、元來一様にてなきものを、ひたすら一様にすり合せては、あしかるべし

田園類說云、按ずるに此諸國石代當時も引付の所々多く有レ之、貫代とも云、年久しき儀にて、其始知

れ難しといへども、關東の諸國永高時代の遺法なるべし、しかし古來は何國も糓遣ひにて糓納なれば、此石代も此一倍の糓數なるべし、糓納止みて米納になりし故、米の積り半減したると見へたり、如何となれば、關東貳石五斗代の永を高五石とする事は、則糓五石にして直に年貢の糓數なれば也、今は貳石五斗代、關東畑永の通法となりたり、鼎按するに、五石代は米納の積りにして、貳石五斗代は米納になりしよりの名目といへる説は誤なる事、首卷に委しく論ぜり、併考へべし上方三分一直段は、今は其年何ひにて極る、奥州白川・會津。長沼、三石貳斗替といふ石代の内、白河領分は今は三石七升貳合替になる、其譯或覺書に、奥州白河・長沼。森山。會津。石川領筋、半石直段三石貳斗替に候處、其以後白川領は三石七斗貳合替に成候儀、長鐚四貫文に日を加へ候勘定を以て、壹貫文に四分利を加へ候積りにて、三石貳斗の内にて、壹斗貳升八合引の三石七升貳合替に直すとあり、是前方は調百錢の勘定の百九六錢になりし故、今は石代直段三石七升貳合替に成たると云、覺書に出羽米澤田畑共免半金納といふは、田も畑も米取にして、惣取米に半分六石替の石代を以て、金納にする事なり

鼎按ずるに、一様記に、上方三分一銀納、關東。奥州石代の異同を擧て、諸國一様なる理を算合して說示すといへども、其實は無理なる事故、牽强附會多し、元來一様ならざるものを一様にするの誤りは、辨解に云へる如くなるべし、一様記は元祿二年に、木内八九郞。堀江重太夫・永澤淺右衛門の三人同撰して、加藤與左衛門の許へ贈りし書にして、辨解は谷鎗右衛門本教の一様記を

注解せる也

或覺書云、貫代の事所々にて違ふ、甲州川內領（一本郡內領に作る）の貫代は、壹石四斗四升に當る故記し置と云々

又云、甲州大切小切の事、信玄公の時代より始り、取米三分二、大切三分一、小切は拾壹俵半替、此米四石壹斗四升也

地方要法云、甲州大切小切の次第、小切の直段壹兩に四石壹斗四升替、これは古來よりの定めなり。假令ば物成百石可レ納所なれば、三分一の分右の直段を以て金納に仕り、（但御領私領とも如レ此）殘三分二の內三分一は、大切直段を以て金納、右大切直段は甲州國中、又は河內廻り、其年の米賣買相場に、武州山根邊直段考合相極む、但國中直段を大切と申傳へ候、右殘り三分二の內鄕入と殘置なり

田園類說云、甲州大切小切の事取米三分一、小切此定石代永壹貫文に拾壹俵壹斗八升、但三斗六升入右小切引殘三分二の內、三分一大切、但御張紙直段金納、相殘る米は米納也、此內御張紙直段と云は後の事にして、大切小切拾壹俵半替の引付、永高時代の遺法なるべし

地方根元記云、小切壹貫文は拾壹俵半、四石壹斗四升に當る、今は拾壹俵半といふ事は失せて、四石壹斗四升替と唱る也、大切小切と唱へず、小切大切といふ、小切は九月取立、大切は十月御張紙の直段書付出候節、割付觸るゝ也、田園類說に、大切小切拾壹俵半、昔の引付は永高時代の遺法なるべしとあり、大切右引付を以て可レ出樣なし、元大切と名付石代に成し事は、甲州梨子・葡萄・柿・木綿・

果實・多葉粉・藍の盛なる國故の見込の取箇故に石盛高し、田方の米は不足なる故に、虚米石代にて取立候故、御張紙の直段にて代金を取立る、上方抔にも右の類多き事也、實米は田方にある米の事也、殊に田畑とも米取成故に虚米多し、皆畑村御張紙直段を以て米金納なり、只今にても右振合を見込に増す事あるは、せひ虚米取立様有レ之間敷儀也、其時は伺はず、石代或は引付の石代直段を以て可レ取立レ事也

鼎按ずるに、甲州小切四石壹斗四升替は前々引付にて、全く信玄時代より納め來りし法の、其まゝ今日に存在せるなり、神祖御在世慶長元和の頃、米價金壹兩に付(永にて壹貫文、鐚にて四貫文)、五石替は、關東諸國・東海道筋過不及平均の相場にて、甲州邊は石直し尤少し、壹貫四五石の時もありしとぞとあれば、甲州の米價も關東諸國・東海道筋と格別の出入はなき事知るべし、殊に天正石直し以前、信玄領國の頃は四戰の地故、他國へ廻米等の事なく、たゞ自國限りの通用なれば米價も賤しく、五石以上の相場にてありしを、信玄軍用の爲め領國取米の内三分一を小切と名付、壹兩に付四石壹斗四升替の高直段に極め取上げられし、其頃は過怠金のごとく心得て、百姓共迷惑せし事にぞあらん、貫の條に載する兵家師鑑、無山先生筆記等の說、何れも壹貫四石相當にて、小切と大概符合すれば、家中小祿の者軍用の爲に、信玄のかく定められしなるべし、其後甲州一國、神祖御旗下に属せし時、何事も前々仕來りの法を御用ひ、別段御改正なし、甲州金・甲州升など一國限り通用御免なされ、

又西河内領三十箇村餘、今日迄も隨納とて、小切の外は（小切は百姓の勝手によき當、時節にはせぬ事なり）大切直段になりとも、米納になりとも、時によりて勝手よき樣、隨意に上納するなどの類、他國に例なき事多し、殊に小切は當時御定の五石代よりは高直段故、愈以て仕來りのまゝに被二指置一候也、寛永の頃に及びては、海路も開け、運漕も逐々自由なるに隨ひ、米價も貴く、五石代半減になり、貮石五斗代と御定めありしも、元祿の頃には、又半減壹石貮斗五升代とまでなりたれども、甲州は前々引付の通りにて上納いたし來りし故、信玄時代は過怠同樣の高直段も、今日に至りては雜穀同樣の安直段にて、民の利となる事とはなりぬ

又按ずるに、大切は他國の畑永と、さしてかわりたる事はなし、たゞ他國の畑永は御定直段ありて、大切は國中の相場考合せて、上納するの異同あるまで也、されど國中の相場も、兎角不同ありて一定せざりしより、後世御張紙直段金納となりしなるべし、一體甲州は山國故、畑がちなるは勿論なれども、梨子・葡萄・栗・柿・多葉粉・蠶等多きを見込し取箇故、石盛高しといへる根元記の說は、如何あるべきにや、信用しがたし、甲州貮拾四萬石高の內、梨子・葡萄・栗・柿・多葉粉等の出る地は、壹萬石にも滿ざる由なれば、それを見込に國中惣體の石盛を高くすべき理もなし、甲州は山國にて勾配高く、水の懸引自由故、田稻を穫取れば、水を落して麥田とし、畑麥を刈入るれば、水をせきて稻田とする事にて、土人是を麥田といふ、麥田は大概石盛貮拾位なれば、石盛

高さは此取なるべしと、彼地を兼て知れる人の物語りせし

田園地方紀原卷下 終

濟時七策

朝川善庵著

濟時七策

善庵　淺川鼎　著

私養父浪人醫朝川順得儀、儒者にて罷在候節、紀州樣御用達町人に備前屋喜兵衛と申す者、每度講席へも罷出候處、或日同人順得へ申聞候は、當時儒者と申す者を見受候に、文字を以て今日を生活いたし候迄にて經濟の志なく、よしや志ありても自分の功名を念に懸け候故、浪人の身分にて迚も御國益に相成候ほどの御奉公は出來間敷候、夫よりは醫に隱れ修業いたし候て、在上の御方へも御出入申上、其節に相成自分の功名を棄て心付候儀申上候はゞ、萬一の御奉公も出來可ㇾ申歟、又御用ひに不㆓相成㆒迄も、治療の上にて人の急を救ひ危きを扶け候はゞ、御仁政の萬一を御奉公申上候筋にも可㆓相當㆒哉の由申聞候に付、右の言葉に感激仕り、夫より諸國遊歷修業いたし候上江戸へ罷歸り醫業相立、備前屋喜兵衛申聞候言葉を生涯相守り、名を消し功を滅し候を念とし、御國益と申す迄は無ㇾ之も、世の中への奉公は數度仕候事に御座候、然る所私儀は實父片山東造も儒者にて御座候故、右家業致㆓相續㆒可ㇾ然旨同苗申付、尙又申付候は、其方儀不才にて迚も仕出し候事は有ㇾ之間敷候得共、儒者に罷成候上は篤實精勤いたし、諸生を教諭し英才を養育し、乍ㇾ不ㇾ及もゆく〳〵は國家の御用にも可㆓相立㆒人物を仕

立候樣心懸け候はゞ、太平の御恩澤を蒙り、今日を安樂に讀書仕候申分けの萬一にも可ㇾ罷成ㇾ條急度可ㇾ心得ㇾ旨くれ〲申付候へ共、生來短才未熟の儀故、無ㇾ油斷ㇾ出精は仕候得共、人の師たるほどの道德無ㇾ之、中々以て英材を教育仕候御奉公も仕りかね、同苗遺命存出し毎度汗背仕候事に御座候、乍ㇾ去同苗申聞候儀も候得者、不才ながらも朝夕心掛け候上より、當時の御政務に付心付候儀、見及候事ども一二御座候間、後條に書記し奉ㇾ入ㇾ御覽ㇾ候、古へ田舍人の芹の羹を喰ひ、田舍心に此上なき美味とぞんじ、貴人にはかく味ある羹を被ㇾ爲ㇾ知まじ、御教へ申上候はゞ、御賞味も候はんと御勸め申上候得ば、貴人にもさぞかしと思召し、早速御取よせ有ㇾ之候得ば、得も知れぬ味にて一口さへも被ㇾ召上ㇾ候事なりかね候由、私如き短智之申上候儀は、御賢相樣方の長思遠慮被ㇾ爲ㇾ在候上よりは、芹の羹とも御覽可ㇾ被ㇾ遊候半に候得共、於ㇾ私は親共の遺命を相守り、太平の御德澤を蒙り候御仁恩の萬一を奉ㇾ報度心底にて、數年心懸け候より心付候儀申上候得ば、微忠のほど御憐察被ㇾ遊御覽も被ㇾ成下ㇾ候はば、平生の志願相遂難ㇾ有仕合に奉ㇾ存候、尤も當時御仁政行渡り難ㇾ有事のみに候處、其儀は不ㇾ申上ㇾ、たゞ〳〵御政道の弊を相記し候段は、誠以て無ㇾ勿體ㇾ儀にて奉ㇾ恐入ㇾ候

御仕置の事

一　追放と申す事は古來より有ㇾ之候刑に候得共、今の如く罪人の行先を糺にせず追放いたし候事は決

して無レ之候、これは全く亂世の比一國々々の領主のする事にて、吾國さへ惡人なければ他國には如何樣なるもの有レ之候とも、高見の見物とやら申す政道の仕方の餘風にて、當時の如く天下一統太平なる御代に行ふべき御法とは不レ奉レ存候、これも大名方の一國二國を治る上にて、吾國さへよく治り候得ば、他の領分は兎も角もなどいへる當座間に合ひの政道ならば左も可レ有レ之候得共、天下一統御政治被レ遊上にては、日本國中に一人たりとも惡人有レ之は即ち天下の御耻辱に御座候、殊に又御政治の妨にも相成候、すべてかやうの刑に處せられ候ほどの惡人なれば、いづれ心懸けあしきものにて、心を改め善に立歸り候は百中の一にて、却て惡事增長いたし候もの多く、たとへ心を改め候半にも御府內の地をはなれ、外にたよるべき因緣の者も無レ之、指當り足を留むべき地なく道路に迷ふ事なれば、あしきとは知りつゝも御構の地へ立歸り、兼々懇意にいたし候惡友に近より、名を改め店借いたし候より外無レ之、扨何ぞ家業相始度ぞんじ候得共本手銀無レ之、殊に是迄身を放埒惰弱に持崩し、今更急に窮屈に身を治め、骨折家業も出來兼候故、無レ據一度に大利を得んと山事を巧み候歟、博奕を致し候歟、いづれ不レ宜事を工夫仕候樣相成候、是全く以て生路なく不レ得レ止事より起り候事にて、實は不愍の儀に御座候、殊に重追放の如きは住居すべき地もなき位の事故、如何なる正直ものといへども、見ず知らぬ遠國他國へ罷越し生活すべき樣の手懸りなき故、居ながら飢渴に及び候よりは、命にはかへられぬとぞんじ、御法を破り候と知りつゝも御構の地へ立戾り、親戚朋友の合力にあづかり、渡世家業相始候事に御座候、

尤町役人など右のもの面體もよく知り覺へ、其內には兼て心易く交り申候ものも可ㇾ有ㇾ之候得共、吾町にさへ住居不ㇾ致候得ば、後日如何樣の事出來候とも懸り合にならざる儀、殊に名も改め店借し、前文の通り行先にこまりての事無理ならざる儀と相察し、其まゝ見のがしにいたし申候、夫も當人心さへ改り善事に趣き候樣なれば宜敷候得共、元來惡人の事故、十人が十人、百人が百人迄は我こそは幾度入牢し、遠島に處せらるべきをよき樣にいひ廻し追放になり候など、公事巧者を鼻にかけ口へも出し、六ヶ敷公事有ㇾ之候得ば尻推し、又は金公事證文買取り、世にいふ公事師などいふを家業にし、世のもてあましものとなる、左なき迄も善に立歸るは至て少なし、これ全く罪人の行先を憾にせざるより起る事なり、又罪人も追放を反て入墨重敲などよりは輕き事の樣に心得て、罪の程を御裁許以前に預め推計りて罪を犯し申候、尤廣き江戶の事なれば、是迄の居町位に住居不ㇾ致候とも、江戶住さへ指支無ㇾ之候はゞ、入墨せられ生涯の片輪になり、人交り致し難き樣相成候半よりは、指當り身にとりて勝手宜敷故、輕き入墨を恐れ、重き追放を好み候樣相成候は、人情左も可ㇾ有ㇾ之儀と奉ㇾ存候、恒の產なければ恒の心なき小民の事故、兎角御政道も恒の產を御立て被ㇾ成候儀肝要に御座候處、當時の追放の如く足を留るの地なく、道路に迷ふ樣なる御仕置被ㇾ仰付ㇾ候は、恐ながら歷代御仁政の御趣意に於て如何可ㇾ有ㇾ之哉と奉ㇾ存候

一　入墨は唐土にては黥刑と申候て、死刑につゞき重き仕置に御座候、其わけは身體髮膚は父母より

受たるものにて子のものにあらず、太切に毀傷せぬやうにと可ニ心懸一處に入墨いたされ、生涯の片輪ものとなり、又一旦入墨に逢ふ時は、再度もとの人になるべき樣なく、たとへ心を改め人ラ敷相成度候ても、舊惡の印有レ之ものと心ある人は迚も交を結び不レ申、夫故こゝろならずも又々重て心易くせし惡友と交り候より外致方なし、惡友に交り候得ば、善事に趣候事は思もよらず、段々と惡事增長し、遂には死罪に處せられ候樣相成候、これ全く人間に可ニ立歸一樣なき御仕法故に御座候、かく一生惡人の燒印を押し片輪とし候よりは、心さへ改り候はゞ萬物の靈たる同じ人の事故、其罪も消失せ人交りの出來候樣被ニ成遣一候はゞ、幾箇の御仁政に可ニ相成一儀と奉レ存候、身體髮膚は父母のもの故、子たるものは太切に保護仕り、一生を無事に相果候は孝子たるものゝ本意故、御政道も右孝子の本意相立候樣被ニ成遣一候はゞ、御法は御法、孝心は孝心にて双方とも相立可レ申候、左候はゞ其罪を惡て其人を惡まぬと申す古語にも相叶ひ、乍レ恐歷代御仁惠の御趣意にも御叶候半哉と奉レ存候、右申上候通り追放の刑は、御先代より御立被レ置候御仕置にて、あしきと申には無レ之候得共、全く以て亂世の仕來りを其まゝ御用ひ有レ之候事故、天下一統太平の今日に相成候ては、いづれにも罪人者行先を碇と御糺し被レ置候樣仕度ものに御座候、入墨も唐土にては面部に致し候て、惡人の印をつけ生涯の片輪とし、人交りいたしかね候樣にわざと恥辱をあたへ候刑故、死罪に次ぎ候重き仕置にて、中々以て當時の如き輕き刑には無レ之候、又唐土には徒刑と申す刑有レ之候、これは輕き罪人の遠島追放などに可ニ相成一を、或は一年

或は二年三年五年と年限を極め牢に入置、城普請、溝さらへ、川浚へ、或は米をつかせ、或は薪をわらせ、或は細工仕事などさせる事にて、古來より男女とも罪の輕重に隨ひ召使ふ事に御座候、當時佐渡の金掘人足などの類即ち徒刑に御座候得共、これは必死の刑にて生路無レ之、死罪も同樣に候得ば、右の外にも遠島・追放・入墨など被二仰付一候節、其者の罪の輕重に隨ひ年限を定め、徒刑に被二仰付一候はゞ生路も有レ之、惡心を翻へし候甲斐も御座候て、歷代の御仁政の御趣意にも相叶ひ可レ申哉と奉レ存候間、何卒御當代も徒刑の一法御たて被レ遊、右徒刑の罪人を支配いたし候ほどの相應の者に支配被二仰付一、又其下に同心體のものを相立て、罪人共被二召使一候節、右同心每朝罪人共を牢より出し、普請場へつれゆき終日働かせ、夕方に相成連れ歸り、又牢に入る、其間指圖下知は勿論始終つき添取締りいたし、罪人共者出精不出精を見糺し、相應の賞罰も可レ有レ之事に候、右罪人共被二召使一候節は、壹人に付壹人扶持づゝも御手當米被二下置一、尤右扶持米公儀へ御預り被レ置、罪人の年限相滿て御赦免被二仰付一候頃に相成候て、右御扶持米を金に替、家業元手銀に被二下置一候はゞ、路頭に迷ふ樣なる儀も無レ之、たとへ生得の惡人たりとも、元來人の事故御仁惠の御德を心肝に銘し、各別難レ有可レ奉レ存候得ば、自然と心入も違ひ、人柄も相直候樣可二相成一歟に奉レ存候

白銀之事

一　先年下金商賣いたし候もの、白銀鑄つぶし細工銀に相用ひ御仕置被二仰付一候事御座候、金銀は大

切の國貨にて鑄つぶし候得ば、重き御咎可㆑蒙儀は利に走り候愚昧の者といへども相辨可㆑申處、右樣の致㆓不屆㆒は、必ず各別の利分有㆑之候半かと心付候故、經濟に事馴れ候友人と申合得と考究仕候處、尤白銀は國貨の事故委敷儀は不㆓相知㆒候得共、銀銅調合四分六分の割合の由承及候、銀四分に候哉、六分に候哉其儀不分明故、先銀四分銅六分として勘定仕候得者、白銀壹枚に付正銀目方拾七匁二分有㆑之、通用は四拾三匁に候得共、當時民間通用銀相場賤しく、金壹兩に六十四匁五分より六拾五匁替ゆへ、白銀壹枚四拾三匁は四拾匁內外之通用に御座候、又銀座にて當時賣出し候細工銀は性合惡く、其上廿或廿五位に候得者、白銀の銀とは出入格別の相違も御座候故、惡しき事と知りつゝも利に走り候商人の事なれば、內々白銀を鑄つぶし候樣相成候は必然の勢に候、右樣奸商の功事出來致し候儀其まゝに被㆓指置㆒候は、行々御政道の妨にも相成不㆑可㆑然儀と乍㆑恐奉㆑存候、右の奸計相防候には、當時白銀通用を民間に御制禁あり度事に候、乍㆑去御先代よりの御法制を御當代に相成歪く御廢却被㆑爲㆑在候も、是又如何可㆑有㆑之哉恐多き儀故、たゞ白銀を當時の黃金同樣在上の御方のみの通用とし、拜領或は獻上等の御法制は是迄の通りにて、只民間私の通用は御制禁被㆓仰付㆒候はゞ、御先代の御法制御廢却被㆑成候にも不㆓相當㆒、且銀通用は民間の便利にも不㆑宜故、前文申上候通り銀相場賤しく、兩に六拾四五匁にも取引いたし候事に御座候へば、彼是上下の便利にも可㆓相成㆒哉と奉㆑存候、夫故天下通用の白銀高黃金同樣幾枚と員數御定被㆑置、これを拜領獻上等御定式等に是迄の通り御用ひ、民間に通用いたし候分不㆑殘

御引上げ被ㇾ遊、南鐐銀は甚便利よく、當時專はら上下共通用いたし候事故、白銀御定め員數の外、御上にて一々御鑄つぶし、南鐐銀に御吹替被ㇾ仰付ㇾ候はゞ、御上にも御益被ㇾ爲ㇾ在候上に、下々の者共も迷惑仕間敷候、御益に相成候割合は、白銀壹枚通用四拾三匁實は前文申上候通り、兩に六十四匁五分より六十五匁位に民間の相場は仕候得共、四十三匁御定法故、右の積を以て勘定仕候事に御座候に候得共、銀四分銅六分の調合故、正銀目方拾七匁二分有ㇾ之候、南鐐銀壹片通用七匁五分、正銀目方は二匁七分五厘に候得ば、白銀壹枚にて南鐐銀六片此通用四十五匁御吹替被ㇾ遊候ても正銀目方七分相殘候上、金三分は四拾五匁、白銀壹枚は四十三匁故、指引銀二匁の御益に相成候、此割合にて當時天下通用の銀大積り百萬枚御鑄つぶし、南鐐銀に御吹替被ㇾ仰付ㇾ候はゞ、正銀目方壹匁二分五厘と、通用銀三千九百九貫八十七匁五分、爲ㇾ金六萬五千百五十壹兩壹分貳朱と、通用銀五匁正銅目方二萬五千八百貫之御益有ㇾ之候、くだ〳〵敷候得共委細割合下文の通に御座候

白銀壹枚　此通用銀四拾三匁

　內　正銀十七匁三分　正銅貳拾五匁八分　　但　銀四分銅六分の割合

吹替

南鐐銀六片　此通用銀四拾五匁　　但南鐐一片　通用七匁五分　正銀二匁七分五厘

此正銀拾六匁五分

殘り　正銀七分　通用銀二匁

右殘りの分、御益に相成申候

白銀百枚　此通用銀四貫三百匁

内　正銀壹貫七百貳拾目　正銅貳貫五百八拾目

吹替

南鐐銀六百貳拾五片　此通用四貫六百八拾七匁五分

此正銀壹貫七百拾八匁七分五厘

殘り　正銀壹匁二分五厘　通用銀三百八十七匁五分

爲金六兩壹分二朱と五匁

右殘りの分御益に相成申候

白銀萬枚　此通用銀四百三拾貫目

内　正銀百七十貳貫目　正銅貳百九拾八貫目

吹替

南鐐銀六萬貳千五百四拾五片　此通用銀六拾九貫八拾七匁五分

此正銀百七拾壹貫九百九拾八匁七分五厘

殘り　正銀壹匁貳分五厘　通用銀三拾九貫八拾七匁五分

爲金六百五拾壹兩壹分貳朱と銀五匁

右殘りの分御益に相成申候

白銀百萬枚　此通用銀四萬三千貫目

內　正銀壹萬七千貳百貫目
　　正銅貳萬五千八百貫目

吹替

南鐐銀六百貳拾五萬四千五百四拾五片　此通用銀四萬六千九百七貫八十七匁五分

此正銀壹萬七千百九拾九貫九百九拾八匁七分五厘

殘り　正銀壹匁貳分五厘
　　　通用銀三千九百九貫八十七匁五分

爲金六萬五千百五拾壹兩壹分貳朱と銀五匁

右殘りの分、御益に相成申候

右壹枚より百萬枚迄積り上げ入二御覽一候得共、これは大見積りにて、關東は金通用多く銀通用少なく候得共、京大坂並に中國・西國はすべて銀通用故、員數莫大の儀中々以て百萬枚など申す事は有レ之間敷候、尤國貨の儀私式の員數可二相辨一筋無レ之候間、大積りを申上候事に御座候、乍レ去右白銀御用として御上へ一概に御引上被二仰付一候はゞ、銀相場も一概に引上げ、わけもなく騷き立候樣可二相成一歟、左樣節は下々に損得いたし候もの出來、迷惑可レ仕者必定故、たゞ何となく大坂・長崎、其外中國・西國筋、御代官所等御年貢上納金を一同銀納、諸入用は南鐐にて御渡有レ之候樣四五年も被二仰付一候はゞ、

自然と民間通用銀相減じ逐々銀相場引上げ、御定法の如く銀壹枚は四十三匁通用の相場に取引いたし候樣可ニ相成一者必定に御座候、其節右平均の所御見合、天下に一統號令被ニ仰出一、民間に自然に相立候四十三匁相場を以て、民間に有レ之候白銀を南鐐に御引替被レ遣、以來白銀は民間通用御制禁の由被ニ仰付一候はゞ、下々の者も難儀不レ仕、御上にも御損失なき樣、上下の利便にも可ニ相成一儀と奉レ存候

一　慶長御入國の節、永壹貫文錢にて四貫文を、小判金壹兩に可ニ通用一由被ニ仰出一候御制札を相考候得ば、其比は金壹兩に錢四貫文の取引平均の相場と相見申候、然處近年錢相場賤しく兩に錢七貫文ほどに下落いたし、國初とはすでに倍の相違にも相成候わけは、南鐐銀通用被ニ仰付一てより一概に錢相場下落、南鐐銀便利よく逐々行渡候に付、ます〳〵錢相場引下げ候事に御座候、右譯けは賣買を相除き、其外は諸武家方をはじめ諸浪人醫師・寺院等に至るまで、いづれも日用小買物は金銀を以て錢に兩替いたし、當用を辨じ候ほどのものも南鐐無レ之以前は、壹分金を以て錢に兩替いたし候故、小家とても每家に金壹步づゝの錢を所持いたし候得共、南鐐銀出來以後は二朱兩替し、右遣ひきり候上又貳朱兩替し、壹步の金を兩度に致ニ兩替一候樣相成候得ば、每家に二朱づゝの錢ならでは所持いたさず、殘り二朱の錢は兩替屋に有レ之候故、錢多く融通あしく、自然と相場下落いたし申候、前文申上候如く、白銀を南鐐に御吹替被ニ仰付一候はゞ、天下に南鐐銀多く通用いたし候に隨がひ、錢相場ます〳〵引下げ、諸買物類高直に可ニ相成一歟の弊も御座候樣なれども、すべて商賈の外は日用の品大小となく買入れ今

日を相辨じ候事故、諸式高直に相成候ても、錢相場賤しき方利便に御座候、且諸式價賤しくても錢相場貴く候ては、何の益に相成候事も無之、諸式貴く錢相場賤しきと同樣の理故、少も指支候儀には有之間敷歟に奉存候

運上之事

一　近來三橋會所相立て、十組町人共より冥加金を指出し、是迄三橋通行工商の類橋錢を出し候事相止み、三橋普請公儀より不被仰付、十組町人共冥加の懸替修覆致し候樣相成、一應は町人共寄持なる御奉公申上候樣相聞候得共、實は町人共の利にして、武家方の爲には不可然儀と奉存候、一體町人共儀太平の御恩澤を以て今日を安樂に渡世仕候儀に候へば、たとへ身上を傾け候ても國恩の萬一を可奉報は勿論に候得共、もとより利に走り候者共故、右樣心懸け宜敷者計も無之、右冥加金さし出し年々積置候金子、三橋懸替修覆諸入用は勿論、會所雜費莫大の事に可有之候へば、右相願候に付夫々町人へ願人より申談じ取極候節も、其内には内々不承知申出し候ものも有之、一致不致事など其頃專はら風聞仕候、乍然御上への御奉公筋と有之候上は、强て申張候事も致し兼ね、枉て其意に隨ひ一同相願候樣相成候へども、實は不承知の者過半有之候樣承及候、然所右相願ひ願の通り被仰付候後、會所定式入用の外にも臨時出金いたし候事も有之候上、右の儀に付内々集會評議等いたし候得ば、今日に相成候ては冥加の爲さし出候金子と、諸雜費と半々の入用相懸り莫大の金高に相成候、左候はゞ右金高を

是迄實買いたし候利分の內にて、冥加の爲めと申ながら律義に指出しは致間敷、殊に組合相立候上は、代物元方も相極り申合せ行屆候事ゆへ、內々は諸代物に右入用金高を割懸け候樣相成候由、縱令ば縮緬羽二重樣の反物の上にて、一反一疋に付一厘哉壹分の價貴く相成候迚も、買入候もの方にては一向に目立不レ申、たとひ此以前買入候節よりは一厘一分も價貴き樣心付候ても、買入候日に相成候ては、瑣細の事故頓着も不レ致、且地合の善惡尺寸の長短など不同も有レ之候半かなどゝぞんじ、誰彼も細吟味は不レ致者に御座候、よしや細吟味いたし候ても、右價ならでは難二賣渡一由申聞候得ば、なくては不レ叶日用の品故、不レ得二止事一買入候事に御座候、反物にかぎらず、諸式右の通故、是迄橋錢を出さず致二通行一候武家方、又は一年に一度か二度ならでは三橋を渡り不レ申者に至るまで、日々橋錢を出し候貌に相成、町人共方には少しの損失なく、却て武家方にて三橋懸替修覆等の御奉公相勤候に相當り申候、これは三橋に不レ限、すべて諸運上共右の振合にて、和漢古今共諸賣物より運上差出候樣相成候へば、諸式價引上げ、果ては武家方の困窮に相成候は必然の勢に御座候、其故は諸品共運上無レ之內は、諸商內株も私の株故　家數は取極り有レ之候ても、賣出し候品は其者其者の元方仕入れ働次第故、同じ品に貴きも賤しきも有レ之一定無レ之故、自然と町人どもせり合ひ直易賣出し候へば、買入候者方の利益に相成候、運上指出し候上は組合も確と取極り、申合等も行屆、天下一統の相場相立て諸式高直に相成候、左候得ばとて日用の品は貴くも賤しくも、家內相應入用丈けは買入候事故、兎角今日の御政治は諸

色高直に不₂相成₁候樣被₂成遣₁度事に候、一體運上はなくても、世の中の指支に不₂相成₁品より取上げ候事にて、全く游食末業の者を禁じ、本業に歸候樣いたし候政道に御座候得ば、運上指出し不₂指支₁品は各別、十組など日用の品商內いたし候者は、右樣の儀御免被₂仰付₁候はゞ武家方の利益に相成、御仁政の御趣意に相叶可ㇾ申哉と乍ㇾ恐奉ㇾ存候

小普請御旗本方之事

一 私儀幼き時或老人の物語りには、國初御藏米年々蟲喰鼠喰等になりて夥敷御損失有ㇾ之、且手數も相懸り候故、小身御旗本方に至る迄不ㇾ殘知行所を被ㇾ下候はゞ、御損失も有ㇾ之間敷由共懸り役人より被₂申上₁候處、神祖の上意には少給の者へ地所百姓をあたへたりとも、家來少き事故政事可₂行屆₁樣なし、且彼等も一度に米多く受取て倉廩もなき者共は、蟲喰鼠喰等彌多かるべし、其上一度に米の多きを見ば、おのづと費用もありて却て困窮の基となるもの也、損と闕敷は上たる人の役なりと上意被ㇾ遊候よし、右神祖の難ㇾ有上意の趣を以て、當時の振合相考へ候處、寄合御旗本方は大身にも被ㇾ爲ㇾ在候事故、譜代の家來多く、家事取締り經濟操合等十分に無ㇾ之迄も、先は行屆候貌に候得共、小普請千石以下の御方に至りては、譜代の家來少なく一兩人に不ㇾ過位、甚しきは一人もなく、たゞ世にいふ渡り奉公用人を召抱へ、家事經濟取營候事に御座候、右渡り用人と申候者は、彼に是に相勤世事に行渡り、公邊向の事など心得居り、一たんの用には相立、主人も如何にも重寶におもひ候得共、實は人

品よろしからず、此屋敷相勤候内も外に宜敷奉公口有レ之候得ば、主人を取替候など輕薄の行ひのみ多く、もとより實意の奉公いたし候ものは無レ之、夫故主家經濟操合せに事よせ、金銀出納の間に於て私欲の働き致し、主家の困窮はかへり見ず、甚しきに至りては主人を申勸め、町人を欺き金子借入、果ては金主をたをし、主家の融通を指支へさせ、又は領分の百姓をしひたげ、先納の上にも先納申付、三年五年分も取立、村方は勿論、村中に少々も身元宜敷もの有レ之候へば、用金爲レ出候など惡計仕盡し、百姓の膏血を絞り上げ候上、尚又百姓共を欺き、鄕印を以て御貸附金を二重三重に借入、返納の期月に至り候へば、鄕印の事故御代官よりは村方へ濟方嚴敷被二申付一、遂に村方の迷惑困窮に及び候の類、これを村方衰微の基とし、逐々荒地彌增し、ゆく／＼は退轉にも可レ及樣子每度關東方には有レ之。見請候事も御座候、夫も主家御上への御奉公筋入用歟、又は身上立直しの爲めならば不レ得レ止事に候得ども、もとより忠勤の爲め致し候事に無レ之故、別に節儉等致し候にも不レ及、主人は年まし奢侈增長し、無用の費多しといへども、君を諫め費を省き候樣の取計もせず、たゞ金銀出納の間において、上を欺き下を僞り、私欲を働き、其身浪人致し候ても指支不レ申樣手操出來の比、品よく暇取、私欲の金子を以て身分片付け、主家へは借財を殘し置候など、これより主家は必至と困窮し術計盡果候上、仕送り用人といふ者を抱入れ身上を取賄ひ、今日をやう／＼相送り候仕合にて、具足壹領指替の大小刀もたくはへざる樣相成、文武は心懸けなく、士風地を拂ひ、町人にさへおとり候不人柄の有樣、畢竟

は貧窮より起り候とは乍レ申、根元は僅なる知行をあてとし、過分の奢侈致し候より士風を失ひ候事に御座候、尤自分知行所の大切なる事は人々相心得居候半なれども、困窮の上より知行所荒廢の基に相成候も無二頓着一樣成行申候、前文申上候通り、神祖難レ有上意の趣を以て、當時御旗本方千石以下の分は、一同御藏米にて御切米取同樣御藏米御渡被レ遊候はゞ、定まりある祿に相成候より、知行をあてに致し過分の奢心生ずる樣の事なく、自然と節儉に可二相成一歟、乍レ去知行と御藏米とは同高にても、收納高は相違有レ之、知行取は是迄家內幕方も、藏前取とは格別不同も候半が故、御定法三ッ五分物成の處を、四ッ物成或は四ッ五分物成の割合にて、以來御俵米御渡被レ遊候樣あり度候、左候はゞ地所を荒廢に及ばせ、百姓を困窮させる患なく、又過分の借財も出來間敷哉に奉レ存候、尤是迄藏前取、御旗本方、御家人衆といへども、何れも藏前に借財は有レ之候得共、藏宿にて大概の割合を以て高相應用立候事故、格外の借財には相成不レ申候、兎角小身の者へ知行充行候得ば、家來も人少にて政治不行屆、其上困窮の基に相成候故、千石以下の分地所一々御上へ御引上げ、御代官支配被二仰付一、御藏米にて御渡被レ遊可レ然哉、尤四ッ物成四ッ五分物成に被二成遣一候ても、地所の事故有餘は可レ有レ之候得ば、其餘金を以文武修行御世話諸入用、又出精致し候者へ御褒美等被二下置一候御手當に被二仰付一候はゞ、自然と文武共出精いたし、士風も改り候樣可二相成一か、大意は如レ斯候得共、其時に臨ての御所置は、御賢相樣方可レ然御工夫も被レ爲レ在候儀と奉レ存候

一　前條申上候如く、小普請御旗本方御家人衆不人柄の風儀に相成候は、平生御奉公なく、尸位素餐し、衣食住に指支へざるより、世の中はいつもかく可ㇾ有ㇾ之ものと心得、君恩の難ㇾ有も不ㇾ辨、文武の心懸なく、安閑無事に日を送り、所業無ㇾ之故、自然と淫酒に耽り、奢靡の心生じ、遂に困窮に及び、士風を失ひ候樣成行申候、何卒文武稽古、何事も御上より御世話被ㇾ爲ㇾ在候はゞ、士風を引立候樣可ㇾ相成ㇾ候、尤文武と申す内、此は別て士風を引立候ものゆへ、小普請支配御方の宅へ稽古場相立、弓馬刀鎗等相應の師を招き、一同專ぱら修業いたし候樣被ㇾ仰付、尙又會讀講義等も御世話被ㇾ爲ㇾ在、道の大意も心得候樣相成候はゞ、風儀も立直り可ㇾ申候、當時小普請の人々四戶に散在し、頭衆の世話行屆不ㇾ申候、假令ば頭は小石川に被ㇾ居候に、組は芝にも本所にも居り候間、組下の人物人柄も知れかね、よしや知れ候ても治め敎ゆべき仕法なく、相組の者も四方へ散在いたし候得ば、逢對日の外出會不ㇾ致、相支配相組の身持何程の不法の儀承及候とも、改め糺し異見等相加へ可ㇾ申樣無ㇾ之、世話燒衆も頭同樣遠方にはなれ被ㇾ居候へば、見廻り等の世話行屆かね、事なき內は何事も見ず聞ず知らぬ顏して相過により、不身持增長し、遂には手もつけられぬ樣成行申候、右取締方は江戶を十二に割り、小石川の小普請はすべて小石川住宅の小普請頭の支配とし、本所の小普請はすべて本所住宅の小普請頭の支配とし、是迄の組頭・世話役・組支配も引替、其最寄〳〵の頭の組下に付屬し、尙又組の內を十人か二十人位づゝ組合をたて、其內に才智あるものを撰みて異見役とし、世話燒衆と申合せ、組中の取締い

たし、日夜油斷なく文武出精修行いたし候樣被レ成遣レ候はゞ、自然と人柄相直り可レ申候、尤諸稽古勤方出精の人々へは、其年の御役金御免有レ之か、又は御褒美被二下置一、いよ／＼無二油斷一相勤候においては、逐々出役等も被二仰付一、又不出精の者は是又相應の御咎有レ之候はゞ、是迄の面目一變し、士風立直り、御用に相立候人物も出來可レ申候得ば、兎角今日の御政道は、かねて神祖の損と開敷は上たる人の役なりと、上意有レ之難レ有御趣意に相叶候樣あり度儀と奉レ存候

御貸附金之事

一　近年御貸附始りてより士民とも致二衰微一候事無二此上一樣被レ存候、其故は利分を出し金借りて、融通に相成候は工商に限り候事にて、士民の如き定まりある身上にては、利分を出し候得ば夫丈けの穴を埋め候事難レ成候、左候へば一時の凌ぎのみにて永久の策とは不レ被レ存候、此末今日の振合に候はゞ、二三十年の後は關東筋に退轉の村方過半可レ有レ之かと推察仕候、依レ之一二見及候儀後條に書記奉レ入二御覽一候

一　近年武家方必至と困窮し、御貸附金かり入身上向操合すといへども、其實は返辨の心當てもなく、たゞ一時の凌ぎの爲めゆへ、返濟の期月至り候得ば、此御代官よりかり入れ候は、又外の御代官にてかり替返納いたし、たゞ／＼御貸附金を彼に取これに納め融通いたし、其年々を相おくり候事に御座候、夫も返納の融通のみにいたし候へば宜けれど、其度毎に最初かり入高よりは少しも多くかり入、

利金の分も後のかゝり金にて間を合せ、其上にも手に餘し當座を凌ぎ候工夫故、其知行高の多少に不ㇾ拘、多くかゝり入候を手柄の樣におもひ、永久の考へもとよりなければ、逐々金高かさみ、返辨の心當なきゆへ、苦しさのまゝ種々謀計を以て一ッ地所を諸方の御代官、又は名目金等へ二重にも三重にも書入候樣相成候、一體御貸附金は利易にて町人の金子かゝり入候よりは、經濟の爲めにも可二相成一やの御趣意に可ㇾ有ㇾ之かの處、右樣無理なる手段いたし候へば、夫々へ手を入れ事首尾いたす樣に取繕候に付、口入人を以て種々申談じ、事出來候上はいか程の禮金可ㇾ致間、骨折働きくれ可ㇾ申などはじめに禮金高を定め、又其筋の役人とても廉直のもの計もなきゆへ、右口入人と申合せ、內々は禮金など申受る族も多く有ㇾ之樣承及候事も候得ば、今日に相成候ては甚しき高利の金子に相當り、御趣意を失ひ候事のみに御座候、元來御貸附金借用いたし候も、身上不如意より事起り候へば、借用の上は儉約いたし、右借財を常祿の內にて償ひ候樣なれば宜しけれど、左はなく一年の暮方雜費入用高は是迄の通りにて、もとより定まりある祿の外に貨財生ずべき理なきゆへ、御貸附金を御貸附金にて操合せ融通致し候樣に相成候今日の振合に候はゞ、武家方逐々借金高かさみ、遂には返納不二相成一樣なり行候半は必定の勢と奉ㇾ存候、左樣相成候節はたとへ公儀の御威光を以て御取立有ㇾ之候とも、なきものは上納致かね候半歟、さればとて其身上御潰し御取立あらんには、御仁政の御趣意にも難二相叶一、又其まゝ被二指宥一候はゞ、逐々右樣の振合に相成、御上をも恐怖不ㇾ仕樣に罷成候半かと乍ㇾ恐歎息仕候事に御座候

一　武家方困窮の上より、右申上候如く御貸附金を二重三重に借入候に付ては、百姓共其度毎に印形仕候筈の處、不納の節は百姓共より不二相納一しては不レ叶儀故、百姓共承知不レ仕も有レ之候、左候ては指支に相成候故、當座凌ぎに百姓共の謀判いたしかり入、扨返納の期月に相成候ても上納無レ之時は、御代官より百姓ども呼出し有レ之、百姓共其時に至り初めて承知驚入候得ども、謀判は重き事故其地頭を罪に落し候事も仕兼、乍二迷惑一又々村方引請に相成候事も毎度御座候樣承及申候、乍レ去百姓共も二重三重の事故可レ成丈はのがれ度、御代官は勿論地頭役人へもいろ／＼と相願候など、彼是江戸逗留も長く罷成候へば、村入用も相懸候故、遂には不レ得二止事一村方割合上納いたし候か、又は借替村方引請に相成候か、いづれ百姓の難儀と罷成候、されば御貸附金はじまりてより、私領方百姓年まし困窮いたし候もの多く、ゆく／＼は退轉にも及可レ申勢にて、如何にも嘆敷奉レ存候

一　私領村方御貸附金不納の節、御代官より呼出し候ても返納心當て無レ之故、江戸へ罷出て手鎖宿預けに相成候を難儀に存じ、幾度賃飛脚指立候ても不二罷出一も毎度有レ之、左候節は御代官手代彼村方へ罷越取立申候、此儀も兼て村方心得候事故、村役人どもかげを隱し取合不レ申候樣いたし候事も御座候、さればとて手代も其まゝ空敷歸られもせず、近村に忍び居り、村方のもの油斷いたし立歸り候節、不意に召捕へ濟方嚴敷申付候抔、畢竟せつなさのまゝ右樣の不屆の振舞も致し候事と推量られて、不便の儀に被レ奉レ存候

一　御貸附金宿場助成金など村々へ貸附て利を取候事、利を出しても借入れ候得ば、指當り都合よき樣なれど、當座の凌ぎのみにてゆく〳〵は困窮の基に相成候、前文申上候如く、工商の類は利易の金を操廻し候て、利の生るゝ所も可レ有レ之候得ども、百姓は元來田畠計りのものにて定まりたる身上ゆへ、一年取樣は取れ候も、二年分を一度に取候事ならねば、利を生ずる理なく、利を出せば夫だけの餘計を御年貢の外に上納せる貌にて、ます〳〵困窮いたし候事に御座候、又田方は檢見も有レ之、先づ出來方に應じ御年貢を上納すれども、畑年貢は一郡一國に聞ゆる程の凶年損亡にあらざれば、御代官も指免じかね、出來方の惡敷位は如何樣にても上納不レ致しては不二相成一樣なる振合故、嚴敷被二申付一候得ば、百姓も無レ據借財などいたし、先は上納し、其年の難はのがるといへども、天運の事故、若も打續き出來方あしき事御座候節は、迚も難二行立一とぞんじ、遂にはにげ作りいたし、田畠荒廢に相成候、たま〳〵御代官中に永代の利を謀り被二申立一も有レ之といへども、御勘定所にて其時のがれの下知のみ多く、よしや年貢を少し計り免じたりとも、百姓の爲に相成ほどの事なき故、年々荒地彌增し年貢を納め兼おひ〳〵未進多し、さればとて其時に御代官より被二申立一候得ば、不念にも相成候故、御代官より自分金を以て取替上納し、公儀前は濟し置くといへども、去年も今年も同樣ゆへ、おひ〳〵金高かさみ、其內御代官場所替被二仰付一候節、御代官も取替金損失可レ致わけなき事故、御貸附金宿場助成金などを世話いたし、村方に借入させ、自分取替金は引上げ、村方へ借金殘し置候樣相成候、右借金

の上に利も出てます〳〵困窮し、兎角不納がちゆへ、其懸りの御代官より嚴敷責むるといへども納めず、又呼出せども出でず、無㆓詮方㆒賃錢拂の飛脚を二三度四五度も遣し呼出す、尤右飛脚賃も村方より指出候事にて、百姓共何の心當てなけれど、度々の呼出ゆへ無㆓是非㆒罷出候得ば、御代官より手鎖申付、郷宿に預け嚴敷濟方被㆓申付㆒、其上江戸逗留中郷宿物入も多く難儀故、又々村方へ飛脚指立其段申遣候得ば、窮村の事手段もとより無ㇾ之、農具など賣拂少しなりとも上納し、殘金は日延相願候て歸村いたし候へ共、もとより上納の手當なき事故、遂に一村不ㇾ殘逃散り、足手のたゝぬ老人のみ棄置き田畑は一面の茅立に相成候など、關東には毎度有ㇾ之見及候事も御座候て、嘆息仕候

荒地之事

一　近年關東筋公私共荒地彌增候儀、大要は百姓ども村方出入自由故、人別帳は表向き計にて自在に他國致し候故に御座候、一體百姓は土着の者故、兎角住所をはなれざる樣あり度候、然る所近年は二年三年他國いたし候もの有ㇾ之ても、村方人別帳には仔細無ㇾ之、甚しきに至りては江戸に居借りし、江戸の人別にも二重に名前を載せ、又逃げ作の百姓など初めより行方不ㇾ知相成候儀、小百姓たりとも一家の退轉は重き事故、先は親類又は組合にて引受、一兩年は御年貢上納いたし候へども、元より逃げ作致し候ほどの割合あしき田地故、いつ迄も引受かね、遂に村役人より欠落の由御代官へ訴出候節、御代官も右百姓に親類なければ、村方惣作申付け、欠落人行衛を六月尋ね、其後帳外被㆓申付㆒格別の

穿鑿もなし、是全く江戸田舍とも人別の取調不行屆よりかく不ㇾ取締に相成候事と奉ㇾ存候、依て見及候事一二後條に書記し奉ㇾ入二御覽一候

一　田畠御年貢とも、當時御勘定所の御趣意少も取增し候を專務とし、上納高前年より減じ候ては不二相濟一儀に罷成居、永一文二文の不足もやかましく被ㇾ申振合故、御代官もたゞ〳〵年々取增候を御奉公の樣被ㇾ存、上邊御首尾合にも拘り候事と心得候より、定免の地は年季切上げと稱し、逐々免上げになり、檢見の地は色取故、出來方宜敷場所を見立かり出し、夫を總反別に懸け候故、當時色取の檢見と申候は、田の上中下に不ㇾ拘、名主組頭など田場を見て、此田は五合毛又は四合毛と目利し、たとへば上田何反歩五合毛、耕地の字ナ田主の名を記し、番付建札をして帳面を仕立指出し、御代官檢見の節右帳面建札を引合せ、豐凶を見て出來方の上中下三段を所々にて刈り、百姓內見五合と有し所にて、壹坪二合あれば刈出し七合とし、內二合は農具代肥し代等に引き、又干減を二合引き、殘り三合を幾坪も刈りたると平均して、刈出何合と定め、總反別に懸け、內見籾と合せて其年の御取箇を極むる事なり、然る處近來は農具肥代等の二合も、干減の分二合も相止みて、たゞよき出來の稻を刈り、有丈け強く可ㇾ取事になり、御代官もたゞよき場所を刈らんとのみ被ㇾ致、善惡平均の沙汰は止み、丈夫に多く見ゆる所を刈り、大凡の出來方を心得して、不ㇾ殘檢見濟して後に、前二十年ほどの御取箇を見合せ、其村にて米何程と大概を極め、坪刈の員數多きは減じ、能樣に合せ掛置く、是もとより善惡を平均せず、よき出來の稻を刈取ゆへ、坪刈り的當に不二相成一候、尤年の豐凶、耕地の出來形の不同も見るといへども、一日に四五村も七八村も其餘も檢見いたし候故、一々記憶すべき樣もなく、實は疊の上の算用に御座候年々取增納高は多く相成候得共、もとより別に新田開發いたし候にもなく、舊來持傳へし田地のまゝ故、餘計相納候へば夫丈けの村方はいたみとなり、ゆく〳〵は困窮に及び申候、尤百姓方にも繩延びの地所も有ㇾ之候半哉なれ共、いづれの村にてもいづれの百姓にも、一同に有餘御座候筋も無ㇾ之故、繩延びの田地所持いたし候か、田地持高多き百姓は彼是埋合せ候手操も出來上納不二指支一候得共、打詰の地所又は小百姓は右樣の操合もなりかね候得ば、迷惑難儀仕候事に御座候、此儀は御代官

にも心付候仁可レ有レ之候半かに候得共、一同の事勘辨も致兼、若又勘辨いたし候得ば納高減じ、御勘定所首尾合にもあづかり候事故、知らぬ顏にて押付け、村方にても迷惑はいたしながら、坪刈の上は無ニ致方一と覺期いたし致ニ上納一候へ共、實は無理なる仕向け故、自然と百姓共田地をあてにせざる心生じ、其身は村方にありながら江戶へ商内見せ出し候か、土地相應の產物を江戶へ仕送り商內株をこしらへ、又小百姓は其最寄海道宿場へ商內いたし取續き候樣罷成候、夫故近來いづれの宿場も逐々繁昌いたし候得共、田地に力を用ひ候もの日にまし年にまし相減じ、今日に相成候ては田地に金子を付相讓り度と申す者有レ之候ても、貰ひ受け候者無レ之など關東には每々御座候て見及び申候、畢竟田地は利少なく商內は利多く、其上商內の方は如何程心配有レ之候ても、稼ぎ次第にて夫丈けの利益も見へ、田畠へ暑寒風雨の厭ひなく鋤鍬をとり、耕作いたし候程の骨折は無ニ御座一候、一體關東の土風は惰氣勝故骨惜みいたし候心より、さし當り商內の方は耕作より骨折もなく、且都合宜敷故、末に走り本業を棄て候樣相成申候、殊に江戶といふ大都會近く候得ば、小百姓などは江戶に出て、渡奉公又は日雇稼ぎ等いたし候ても、村方に罷在候ほどの骨折業は無レ之、其上田舍にては糧テ飯喰來り候も、米の飯を喰ひ魚菜等も手輕く買調へ、其日稼ぎの家業故錢廻りはよく、豐凶水旱の苦勞なく、稼ぎさへすれば利益も有レ之、如何にも住居いたしよき樣心得、江戶者に罷成候もの日まし月まし多く有レ之候に付ても、村方は逐々衰微し、手餘し荒地增長いたし候事に御座候

一　私儀若年の頃西國・中國・九州の諸國遊歷いたし、地性土風を得と見分仕候處、關東に比し候得ば土地肥饒に候上、耕作に力を用ひ候事各別に御座候、一體關東は瘦地の上に土風とは申しながら、百姓共懶惰不性故、作方もやりはなしにて農業に身を入れ候もの無ㇾ之候得ば、いよ〳〵出來形劣り、ます〳〵困窮仕候、其内上野・下野・常陸・下總などは別て地性土風不ㇾ宜、困窮の上人情を失ひ、產蓐の上にて子をまびき候ほどの仕合、實以て淺間敷儀に御座候、夫故前條申上候如く、こざかしき者は本を捨て末業に走り、小商内又は渡奉公・日雇稼に出候を働者の樣心得、村方は年々人少に罷成り、殘り候者は老人、病身又は壯年にても愚鈍惰弱なる者計りにて、銘々の持作すら屆兼候へば、起返し等の儀いさゝか心懸候もの無ㇾ之、平生の家居もやう〳〵雨を凌ぎ候迄にて、戸障子さへもなき仕合目もあてられ不ㇾ申候、又少も身元宜敷者は關東一般の風俗にて、伊勢參宮・金比羅參り、或は京見物・六和廻りなど申し、神佛信仰に事よせ、遊山の爲め罷越候事仕癖の樣に罷成、其風推移り今日に相成候ては、困窮の者といへども同類申合せ無盡を組立、右懸金を以て道祉參りととなへ、黨を結び群をなして數十人打連れ、伊勢・金比羅へ一生の內二度か三度はぜひ可二罷越一筈の樣心得申候、尤神佛信仰の儀可ㇾ咎筋には無ㇾ之候得共、相應の制度はあり度事に御座候、其上右道祉參りの者共出立前十日ほどは旅支度に取懸り、歸村十日ほどは旅疲も有ㇾ之など前後二十日ほどは農業相休、旅中の往還三十日と積りても、壹人に付前後合せて五十日づゝ故、千人にては壹ヶ年に五萬日の力作相休候貌に罷成候、又壹

人の旅用三十日金壹兩と凡積り仕候ても、千人にては千兩に當り候へば、指當り千人にて壹ヶ年金千兩無益に他國に於て遣ひ棄候上、五萬日大積り百五十年の日數を相休申候、是又年々の事故積り上げ候はゞ、莫大の儀に可ㇾ有ㇾ之候、元來關東は土地不ㇾ宜候處、又右樣風俗の弊も御座候故、西國筋に作劣候事必然の理に候、右等の處御勘考被ㇾ遊、可ㇾ然制度を御立被ㇾ遣候はゞ、是迄我儘に進退いたし來り候故、一たんは窮屈に行つまり候樣可ㇾ存候得共、國の爲め民の爲め、永久の處御仁政に可ㇾ相成ㇾ儀と乍ㇾ恐奉ㇾ存候

一　御貸附金にて荒地出來いたし候儀、前文御貸附の條に申上候通に御座候

人別之事

一　江戶町方人別年々御取調べは有ㇾ之候得共、御法のみにて家數を亂し候位の事故、家內の人數は家書出しのまゝを用ひ、細密の調べは無ㇾ之候得ば、人別外の人過半に御座候故、惡者の隱れ家も出來、罪犯の者御尋御座候節も容易に知れかね申候、人別さへ得と御調べ有ㇾ之候はゞ右樣の患もなく、御取締りの第一に可ㇾ罷成ㇾ儀と被ㇾ存ㇾ奉候

一　都下住居の者勝手に付他町へ引移候節は、舊住の町名主家守より引移候方の名主家守へ其由申達し、引渡候樣取極り居候はゞ、當人に公邊引あひ等有ㇾ之被ㇾ召出ㇾ候節、たとへ當人名前相改め候ても、穿鑿に不ㇾ及して住所早速相知れ、又遠國より尋參り候者も名主家守へ問答せ候得ば、行先相分り

路頭に迷ひ候樣の事なく、公私とも甚都合宜敷、且住所をくらまし候事いたしかね候より自然と人柄も心付け、風俗の爲めにも可ニ相成一、又人別の調べも行屆可ㇾ申儀と奉ㇾ存候

一　出家・山伏・虛無僧・願人・穢多・乞食等迄も各其支配御座候て取締りいたし候得共、浪人計り支配無ㇾ之、殊に武家屋敷地借の者は人別外故御上より御觸事有ㇾ之候ても申聞候者なく、地主も小普請又は小身の御家人衆にて、右等の世話も一々屆かね、天下一同の號令をさへ不ㇾ存罷在候事なども毎度有ㇾ之候、一體浪人は別て種類多く、諸侯方又は御籏本方に相勤、子細有ㇾ之浪人いたし候ものゝ外、儒者・醫者・書家・畫家・武藝・卜筮家・手習師・算術師等も御座候て私に帶刀いたし、貴人の御家にも立入仕候得共、一統したる事無ニ御座一候間、よき人物は少なく不人柄のものゝみにて、是迄山事を巧み惡事仕出し、騷動に及び候は多くは浪人より事起り申候、畢竟頭支配の取締り無ㇾ之故、自然と天下浪人と心得候て、憚る氣色なく我まゝに相成候、其內に小ざかしき者は御旗本方の仕送用人となり、知行の百姓を聚歛し、主人家をもとも潰れに及び候樣の惡計をなし、左なき迄も金子口入人公事の尻推などを家業とし、不義の金銀を貪り候など、今日の世の中に枚擧いたしかね候、又渡奉公を稼ぎ候者は、指當り主に有付奉公いたしながら、宜敷所もあらば身退けん覺期にて外奉公口を問合せ、少しも給扶持よき方へと心指し候より、自然と主人へは不實の奉公いたし、士風も輕薄に成行、其外去年迄日雇取候者も、今年は醫師となり、昨日迄魚菜商內いたし候者も、今日は手習師と姿をかへ候など、元より藝

術の熟不熟にも頓着なく門戶を張り候得ば、廣江戶の事故どうやら、こうやら、生活に相成候、たれかれも骨折なく飽食暖衣し、人にも尊敬いたされ候を幸とし、逐々家業替いたし候より、日にまし游民のみ多く、すでに都下に住居いたし候醫者計りも六萬人餘も有レ之由承及申候、尤醫師・手習師のみならず、文武・書畫家等も同樣にて、實に師たるべき人物は甚以て希少に御座候間、儒者は儒者、醫者は醫者、武藝家は武藝家、手習師は手習師と夫々組合をたて、右家業いたし候もの丶內其藝術に達し候を擇び、組合の取締りいたし、藝術の熟不熟も吟味をとげ、又無家業の浪人も同樣組合をたて、身持等も相互に心付あひ、奉公口有レ之節は頭支配より主人方へ指出し候樣になし、若仔細有レ之主人替いたし候も、一たん支配へ引請、其由承屆候上にて有付候樣取計候はゞ、身元糺しも行屆、其人物の善惡邪正も分明にて、御取締り宜敷可ニ罷成一かと奉レ存候得者、何卒浪人にも頭支配被ニ仰付一候樣あり度儀に奉レ存候

一　江戶中に奉公人肝煎と申す者を所々に何人と定め、他國より入込候者、並に江戶出生の者たりとも奉公稼致し度ぞんじ候はゞ、其最寄肝煎の方へ申込、肝煎より夫々奉公口有付候樣取計ひ、主人方へも右肝煎請印いたし、尤肝煎の方へは奉公人身寄の者より下請狀指出置、奉公人長病相煩候か、又は仔細有レ之難ニ召使一事候はゞ、主人方は肝煎へ引渡し候のみにて、肝煎より奉公人身寄の者へ引合ひいたし候樣あり度候、江戶出生のものは論なく候得共、他國より罷出候者はいづれ江戶住居の者を目

當に出府いたし候事故、其節たとへ身寄たりとも、私にかくまひ置世話いたし候儀難ニ相成一樣かねて被ニ仰渡置一、いよ／＼世話いたし不レ申しては難レ成筋に候はゞ、其由家守名主へ相屆候上、肝煎方の取持を以て奉公に有付候樣制度有レ之候はゞ下請たりとも容易になし難く、是迄所緣も無レ之亡命無賴の者を引入れ請印いたし奉公にさし出し、判錢と名付け禮金を貪り、右無賴者主人方欠落仕候へば、自分も同樣致ニ出奔一候か、又は給金返納不レ致候ても、主人方にて給金はわづかの事故、迚も公邊にいだし物入かゝり候樣の取計は致間敷と見くびり、困窮又は病氣等に事よせ、一向難澁の趣を申立、日延願ひに月數を重、遂には主人方へ損失相懸候樣の惡風俗も相止み候のみならず、一ツには他國より江戶の所緣なき亡命無賴の者入込候事成かね可レ申、二ツには他國には罪犯の者、江戶へ入込候節吟味いたしよく、三ツには奉公人病氣又は欠落いたし候節、人代り早速間に合可レ申、其故は右肝煎仲間何軒と極り、相互に相談いたし合せ、山の手邊に奉公人少なければ、下町の肝煎より取よせ、淺草本所へは山の手より操合せ、相應の人を指越候樣相成、給金のつき金など才覺いたしよく滯り申間敷候、四ツには奉公人江戶に奉公いたし候內は、何十年にても何方より何方へ奉公し、當時何方に罷居り候と相知れ、古主より右奉公人に用事有レ之候節肝煎へ申遣候へば、早速相知れ便利に可レ有レ之候、五ツには奉公人右の肝煎仲間に構はれ候はゞ、江戶の奉公難レ成候半故、自然と奉公太切に身持宜敷相務候樣になり、奉公人風俗も改り可レ申候

題七策後

世味嘗來記獨眞、此中甘苦有誰分
卅年咬菜緣何事、要爲君王薦野芹

善庵陳人　朝　川　鼎

濟時七策終

齋庭之穂

齋庭之穗

一　常平倉之儀ハ、穀物ヲ貯ヘテ窮年ヲ救フノ備ヘナレバ、無テ叶ハザル儀ナリ、此ハ早ク垂仁天皇二十七年ニ屯倉ノ沙汰アリ、續テ景行天皇五十七年ノ條ニ、冬十月「令二諸國一興二田部屯倉一」云云、又安閑天皇二年ノ條ニ、「五月丙午朔甲寅日、置二筑紫波屯倉、火國春日部屯倉、播磨國越部屯倉、牛鹿屯倉、備後國後城屯倉、多禰屯倉、來履屯倉、葉稚屯倉、河音屯倉、婀娜國膽殖屯倉、膽年部屯倉、阿波國春日部屯倉、紀伊國經湍屯倉、河邊屯倉、丹波國蘇斯岐屯倉、近江國葦浦屯倉、尾張國間敷屯倉、入鹿屯倉、上毛野國緑野屯倉、駿河國稚贄屯倉一」云云、最モ屯倉トハ官倉ノ意ニテ、貯穡備二窮年用一ナリ、猶漢ノ耿壽昌ノ常平倉・隋長孫平ノ義倉・宋朱熹ノ社倉ノ類ナリ、左レバ當時諸國ニ興ル屯倉論ハ、先ヅ秀吉公天正御檢地ヨリ、當時ヘ次第シテ米穀ノ割ヲ量リ、然シテ定メザレバ、不益ノ事而已多カルベシ、愚案、大坂御治世ノ折ハ、大略米一石ノ相場、大坂ニテ銀六十目ナレバ、總國トモ安穩ナリ、然ル處六十目ヨリ下リ候年ハ御買被レ遊、上リ候年ハ御賣被レ遊候由故、常々六十目ニテ居リ候トカ申候、於レ是國中平等ニテ穩ニ御座候由也、扨又五畿內邊ハ、平年米一石六十目前後ニ格外ニ不レ出、又一石ノ反別至テ少ク候得共、大坂ヘノ運送近候故、夫ニテ割ニ相當リ申候、又北國邊殊ニ越

後抔ハ、地相場平年米一石三十四五文目ニ御座候、其上一石ノ反別多分ニ御座候ハ、全ク大坂ヘ遠ク、廻船運送ノ雜費相掛リ候故之儀ニ御座候、此外遠國夫々此振合ニ御座候、何分作高多ク候トモ、大坂ニテ金ニ直シ候得バ、總國平均ニ相成候樣、天正御檢地ノ節、御高御定之儀ト相聞申候、其中關八州ハ格外ニ可レ有ニ御座一候也、猶大坂御治世ノ節者、總御高二千八百萬石ニテ、米ノ貢凡七百二十萬石計ニテ、畑ノ貢幷山海諸運上共、金納四百十九萬兩計ト相聞申候、於レ是千石高ノ人ハ米二百七十五石、銀九貫目位ガ平常ノ物成ニ御座候由、猶一萬石ニテハ米二萬七千五百石ト、銀九貫目計ニ可レ有レ之候、百萬石ニテハ米二十七萬五千石ト、銀九千貫目計ニ可レ有レ之候、就而大坂御藏入モ米二百二十萬石ト、金百二十萬兩計リト相聞ヘ申候

一　千五百五十萬石ノ地ハ農人扶食ノ料ニテ、御惠ミ之土地ナレバ、出精致シ候テ作致シ候時ハ、米麥粟稗打混ジテ、一人一石五六斗ニモ相當候故、貢七百二十萬石ノ外、四百萬石ノ農人得米ハ世上ヘ融通ニ相成、遊民迄モ其恩澤ヲ請候譯也、於レ是右之千五百萬石ノ地ハ、民ノ扶食ノ地ニテ、誠ニ大切ナル儀故、糧ニナルベキ物ノ外、誓テ作物不レ仕儀ニ可レ有レ之候ナリ

一　四百十九萬上納ノ畑ハ、萬ノ寶財湧出ノ土地ニテ、世界ノ自在ハ此畑地ガ根ナリ、廣キモ又限リナシ、最モ山林河池沼及海岸等モ其中ナリ、作物ハ雜穀野菜ヲ始メ、烟草・菜種・麻・綿・藍・紅花・染草ノ類、此外木ノ類ニテ作スルハ、蠟ノ木・紙ノ木・漆・桑ナリ、自然木ハ松杉ヲ始メ諸木ナリ、此ハ家建

家財諸道具ニ作ル用材ナリ、此外炭薪ノ類ヨリ竹木末々迄、一々數フルニ遑アラズ、先ヅ荒増ノ分斯ノ如シ、猶此畑地ハ農人銀融通ノ場所ニテ、一人ニ儲高凡年ニ一兩二朱計リト見積リテモ、四千百九十萬兩ノ高也、此外工商ノ二民今日ヲ經ルハ、皆此山畑ニ生ズル產物ニヨリテ也、但シ農人スラ斯ノ如ク、四千百九十萬兩モ金銀ノ融通ヲナス程ナレバ、商ハ幾許ノ金銀ヲ融通ナスナラン、其數無量ナルベシ

一　六十日一石相場麥三石相場ノ年ハ、前年前々年引殘リノ雜穀、凡十六萬六千六百六十四兩ニアタル程ノ物、何レニアルトモ不二目立一シテ、諸國ニ融通ナリテアル筈ナリ、此引殘リノ雜穀ハ、天正頃ニハ二ケ月ノ食糧ニモアルベシト推量スルノミナリ

一　大坂堂島米相場ノ要用ハ、先ヅ天正ノ頃常相場米一石銀六十目、麥三石銀六十目ノ年、譬ヘバ金四百十六萬六千六百六十四兩ヲ出シテ買候時ハ、忽七十目ニ相場引上リ申候、又千二百四十九萬九千九百九十二兩出セバ、九十目ニ引上リ申候、又千六百六十六萬六千六百五十六兩出セバ、百目引上リ申候、又二千〇八十三萬三千三百二十兩出セバ、百十目ニ引上申候、又二千五百萬兩出セバ、百二十目ニ引上申候、此時世界ニ糧盡買切リニ相成申候、將又右米一石六十目、麥三石六十目相場ノ砌リ、上ヨリ四百十六萬六千六百六十四石世界ヘ被レ下候時ハ、忽米一石ガ五十目ニ引下リ申候、又八百三十三萬三千三百二十八石被レ下候ハヾ、同四十目ニ引下リ申候、又千二百四十九萬九千九百九十二石被レ下

候時ハ、同三十目ニ引下リ申候、又千六百六十六萬六千六百五十六石被レ下時ハ、同二十目ニ引下リ申候、又二千〇八十三萬三千三百二十石被レ下候ハヾ、同十目ニ引下リ申候、又二千五百萬石被レ下候時ハ、米一石位ニ相成申候、右ハ大坂御治世ノ間ノ分限相調候事ニテ、當時ノ御振合ニハ齟齬可レ仕候、然レドモ其頃ノ金位ト、當時ノ金位トハ大相違ニテ、先ヅ往古ノ金二千五百萬兩ハ、當時ノ金七千五百萬兩相充不レ申候テハ當時之米相場相立不レ申候、此ハ恐怖ノ至リ、御勘考可レ被レ下候、左レバ當時ノ金ニテ二千五百萬兩分米買候處ガ、世界ノ米買切リニハ不二相成一、十ニシテ其ノ三分位ナラデ不レ被二買取一候ナリ、此時百五十目餘ノ相場ト相成候ノミニテ、世上ニ米ハ澤山ニ有レ之候故ニ、七千五百萬兩買候ハデハ、買切リニ相成不レ申候、猶其由ハ當時ノ金ニテ千五百萬兩買候ハヾ、忽米一石ガ百二十目ニ引上リ可レ申候、又三千萬兩買候ハヾ、同百八十目ニ引上リ可レ申候、又四百五十萬兩買候ハヾ、同二百四十目ニ引上可レ申候、又六千萬兩買候ハヾ、同三百目ニ引上リ可レ申候、又七千五百萬兩買候ハヾ、同三百六十目ニ引上リ可レ申候、此時百文ニ付凡二合五勺ト相成候上ハ、間モナク世界中ノ糧盡果申候、右ノ振合ニ御座候間、唯今遽ニ米相場引上リ申候ハヾ、買締候者有レ之候ト可レ被二思召一候、猶此由知ラシメンガ爲ニトテ、兼テ於二堂島一米相場被レ爲二立置一候由ニ御座候、但シ當時百五十萬兩買シメ候ハヾ、一斗方忽引上リ、是迄一石六十目ノ相場ナラバ、七十目ト相成申候、猶引上ゲノ分此例ヲ逐テ、如何程ト云買シメヲ知リ候也、此ハ三都ニ拘ラズ、何レノ國ニテモ百萬兩以上買シメ候時ハ、

其影忽チ堂島ヘ移リ申候、此儀ハ諸家役人トテモ、知ラデ不レ叶候事ト奉レ存候、扨又相場ノ上ルハ、斯ノ如ク人力ニテ上リ候得共、下ルハ天性ニテ、六十目ノ處五十目ト引下リ候年ハ、惣高ヨリ百五十萬兩ニ相當リ候、穀物餘分ニ稔リ候儀ニ御座候、猶下ルハ四十目三十目モ此割ニ御座候、然ル處三十目ヨリ下ヘハ何レニモ下ラズ候ハ、稔ルニ限リアルモノト相見エ申候、右十分ノ稔リ方ニテ、相場三十目ニ下リ候年ハ、四百五十萬兩ニ相當リ候、穀物餘分ニ稔リ候儀ニ有レ之候、乍レ併是式ニテハ惣國中之食糧一ヶ月ニ足リ不レ申候、於レ是此豐作十五年モ續不レ申候ハデハ、一年ノ糧ヲ貯ヘ候屯倉ハ出來間敷被レ存候、然レバ屯倉ノ論ハ難キ事ニテ、委曲ハ下ニ相認メ候ナリ、右一ヶ月ノ食糧ハ米六十目、麥兩ニ三石ノ相場ニテ、二口シメ六百二十萬兩ノ價ニ相當リ申候程ノ穀物ナラデハ、一ヶ月ノ凌相付不レ申候也、但其六百二十五萬兩ヲ銀ニ直シ、三十七萬五千貫目ニテ、三十日割レバ一日ノ分一萬二千五百貫目ト相成申候、此一萬二千五百貫目ヲ凡御人別ニ相充候時ハ、貴賤老幼押ナラシ、一人ノ食糧二分五厘ニ相當リ申候

一　諸國ヨリ平年大坂入津ノ廻米ハ、大方武家食糧ノ外ヲ相廻シ候儀ニテ、寺社領且農人得米ヲ相廻シ候儀ハ、數ニモ入申間敷程ノ事ト被レ存候、但米相場六十目ヨリ下落致シ候節ハ、農人扶食モ少々ハ相廻シ候儀也、扨武家食糧ノ殘米大坂ヘ入候ハ、凡三百萬石ト相聞ヘ申候、又此三百萬石ハ大方年賦返濟米、或ハ捨扶持米、或ハ前借引當米等ニテ、多分大坂町人ノ物ニ有レ之候、此中二三分通リハ無疵

ノ分ニテ、武家方ヘ金納ニ可ニ相成一哉抔申位ニ御座候、乍レ併諸家藏屋敷大坂ニ有レ之、其役人共町人物持用達共ヘ、兼々懇意ヲ相結ビ居候得バ、斯ノ如ク一先ヅ約束ノ米穀相渡シ、又々相應ニ融通相足シ、其主人々々ヘ勤功相立候儀ト申事ニ御座候、然レバ三百萬石ハ、六十目相場ノ節ハ三百萬兩ニ御座候得者、三千萬兩ノ一割ニテ、六千萬兩ノ五分ニ有レ之候、右ニテ相考候得バ、大坂ニテ當時諸家ヘ用達置候金高、凡六千萬兩程ト相見ヘ申候、扨其六千萬兩ト申ハ、全ク引當年々ノ殘金ニテ、皆證文面ノ金高ニ有レ之、實ノ金ハ唯千萬兩前後ニテ操リ廻シ候事ト被レ存候、右之通三百萬石、全ク大坂入津ノ節ハ、堂島米相場一石ガ六十目程ニテ、總國平均七分ノ作ニ御座候由ニ承リ傳ヘ候、又其三百萬石ノ外ニ、百五十萬石程大坂ヘ入津致候年ハ、米一石ニ付五十目ト相場引下リ、總國平均八分ノ作ニ御座候由、猶又此上百五十萬石同入津致候得バ、同四十目ト引下リ、總國平均九分ノ作ニ御座候由、猶又此上百五十萬石入津致候時ハ、同三十目ト引下リ、總國平均十分ノ滿作ニ御座候由ナリ、斯ノ如ク一石三十目ニモ下落致シ候上ハ、武家方迷惑ニテ、彼ノ四百五十萬石ヲ邪魔ニ被レ成、新株ノ酒屋ヲ御取上有レ之、遂ニ潰シ方被ニ仰付一候得共、元來自然ニ不レ叶候故歟、二三年過候後、又々彼新株ノ酒屋停止被ニ仰付一候向ニモ相及ビ候儀ハ、全ク目先キノ御凌、其日遁レノ御工夫ノ樣ニモ、其頃風聞有レ之候、其理イカントナレバ、先ヅ三都ハ繁花ニテ、人々ノ目ノ付候處ニハ候得共、總國ヘ平均シ候得バ、甚人少ニテ幾許モ食糧入リ不レ申候、其ハ四百五十萬石ハ、總國ニテ一ケ月ノ食糧ニ足リ不レ申候得共、

三都ニテハ大方一年近クノ食糧ニ相當リ申候、右ニ付總國不作ニテ幾許高直ノ相場ニ候トモ、三百萬石大坂ヘ入津無レ之候テハ、三都ノ食糧行屆不レ申候、其ワケハ京都ヘ凡四十萬石、江戸ヘ凡百五十萬石計リ廻米致シ候由ニ御座候、但シ此外江戸入津ノ米穀ハ、公儀御廻米諸家廻等定テ多分ノ事ニテ、我々式ノ曾テ不レ奉レ存次第ニ御座候、乍レ併出羽・奥州、其外東海運送ノ廻米凡六十萬石バカリ、關東凡四十萬石バカリ、諸國拂米五十萬石ト見レバ、大坂ヘ相廻ス百五十萬石ヲ合シテ、大方三百萬石トナレバ、武家方扶持取ノ分相除キ、江戸町人ノ食糧ハ此邊ニテ足ルベキカ、猶武家方ノ扶持ハ百萬石トモ云ベカラズ、大概江戸廻米ハ、總體四百萬石餘ノ由風說有レ之候、右ノ通リ大坂入津三百萬石ノ內京江戸ヘ相廻シ、殘リテ百十萬石ノ內五十萬石計、池田伊丹灘等ニテ酒ニ潰シ申候、最モ右酒造米ハ此外地米買入候ニ付、猶高多ニ相成申候、然レバ大坂ヘ相殘リノ分ハ、六十萬石ト相見ヘ申候、併テ六十萬石ニテハ、大坂ノ食糧ニハ二十萬石程モ不足ナレド、御藏拂ヲ始メ攝・河・泉・播ノ農人得米等、打混ジテ二十萬石ニモ至ランカ、猶京都モ四十萬石ニテハ不足ナリ、故ニ大津口ヨリ入ル處ノ江州米二十萬石、丹波國大和國ヨリモ少々ハ入ルベシ、此外切米十萬石餘也、猶御藏拂ヒ米等ヲ合セバ、凡八十萬石ニモ至ランカ、然レバ京都ノ食糧モ於レ是足ルベシ、此外諸國町人ノ扶持、幷ニ酒造等ニテ潰ス處ノ米ハ、何十萬石トモ云ベカラズ、此ハ皆其所々ノ近郷近在ノ農人得米ニテ事足ルベシ、故ニ武家拂米ハ至テ少キ由ナリ、右件々ノ如ク大坂入津ノ三百萬石ハ、三都町人扶助手當ノ元ニ立候儀故、米相

場ノ目當ハ此三百萬石ナル由ナリ、其農人ハ年々貢ヲ收メテ、殘リノ得米ハ我ガ扶食ノ料ナレバ、是ニハ高下ノ相場ハイラザル譯ナリ、然ルニ町人ハ金銀ノ利益ヲ以テ、凡テノ食物ヲ買調儀ナレバ、米不足ニテ相場ノ高下ヲ定ムルハ、彼三百萬石ノ過不足ニヨリテノ故也、於レ是米相場ハ此三百萬石ガ元立トナル故ニヤ、諸國トモ大坂ノ相場ヲ見合セテ、夫々國々ニオイテ高下ヲ定ムルハ、現在其證據ナルコト著明ナリ

一　金銀ヲ以テ世界ノ融通ヲナスハ、往來用途ノ辨理、且無祿ノ工商ヲ遣フノ用ニテ、有祿ノ者ノ金銀ヲ寶トシテ尊ムベキ儀ニハアラザルナリ、左レバ米ノ訓ヨネニテ、ヨネハ世ノ根ナリ、又稻ノ訓命ノ根ナレバ、世ニ命程大切ナルモノナシ、其命ノ根ハ稻ナリ、又天下ヲ治給フ世ノ根ハ則米ニテ、米(ヨネ)ハ世ノ根ナリ、其ハ世ノ根ト云フ、命ノ子ナル大切ノ米ハ王公大夫諸士ノ祿ニテ、萬々億々ノ命ヲ握ル勢ヒノ寶ヲ持給フ、カミ守(カミ)ナレバ、彼ノ八千戈ノ神ト、大己貴命ヲ崇メ奉ルハ此謂ニテ、外ハ事ヲ云フ儀ニハアラズ、但シ寶ハ田力(ダチカラ)ト云略ニシテ、其田力ハ米也、然レバ米ハ寶ノ最上ニテ、則寶ノ中ニテ米ハ總體ノ君也、金銀ハ其君ニ使ハルヽ奴ニテ、寶ノ使ニ世ノ中ヘアリク役也、今モ錢ヲオ足ト云ハ、米ノ使ト云義理ナリ、扨世ノ中ノ金錢ハ元皆上ノ御品ナリ、然ルニ工手間・商人交易ノ骨折ノ料ニ米ヲ賜ルハ勿論ナレド、其米モ各其年ノ食料ニ滿レバ、金銀ヲ米ノ價ニ割付テ、夫々渡シ方ニナリシガ初メニテ、追々金銀ノ辨理ガ世ノ融通トナリタルナリ、然レドモ金銀ガ下々ノ手ニ止ルト云ニハア

ラズ、年々上ヨリ米ヲ出シテ、其金銀ヲ引上給ヘバ、工商ノ徒ハ米金ニ遣ハレテ妻子ヲ扶助シ、其日其日ニ暮ス儀ナレバ、金銀ノ往來スルノミニシテ、少シモ宿ニ止ルト云譯ニハ決シテ至ラザルナリ、故ニ商工ハ世話敷シテ貧也、士農ハ豐カニシテ富ル、ハ、彼命ノ根ナル米ヲ押ヘルノ德アル故也、其ハ福神大己貴命ノ米俵ヲ踏ミ玉ヘル處ニテ、其由現然タルナリ、爰ヲ以テ考フルニ、往古砂金通用ノ折ハ勿論、近ク大坂御治世ノ折ニテモ、金銀ヲ數多貯フハ士農ニ限リテ、工商ニ富ルハ甚稀ナリ、其ハ米金等分ノ位ナレバ、何レニモ商人ノ富ル子細ハ曾テナキ筈ナリ、猶寛永ノ頃ノ武家ノ分限ヲ考フルニ、其頃日光御參續キ、御上洛且東福門院樣御入内、其外御普請、日光御造營ヲ始、諸神社佛閣御建替、幷御脩覆等、凡テ莫大ノ御入費、其數不レ可レ量奉レ存候、然レドモ御金ハ滿々テ、幾許御遣ヒ被レ遊候トモ、中々御遣ヒ拂ヒニ相成候儀ハ曾テ無レ之、益御金相增候儀ハ、如何ニモ廣大ナル御儀トハ乍レ申、餘リ希有ノ御儀ト奉レ存候、幷ニ諸大名御旗本、其以下組士與力ノ徒ニ至ル迄、中々當時ノ振合トハ事替リ、各立派ナル武士ノ備ヘニ有レ之候、其ハ先ヅ百石以上ノ士ニテ、馬ヲ持サル、稀ナル程ニ候得者、銘々武備ノ覺悟モ無、最嚴重ニ可レ有レ之ト自被二相量一候儀ニ御座候、左レバ其頃トテモ百石ハ百石。千石ハ千石ニテ、武家ノ分限ニ相替リ候儀ハ無レ之候得共、當時ニテハ千石ノ士ニテモ、馬ヲ持候ハ稀ニテ、其以下百石二百石ノ士、中々馬處ニテハ無レ之、年々次第ニ手薄ニ相成候儀ハ、如何ノ譯合ニ有レ之候哉、當時武家方總別手詰リ、取續方難儀ニ相成候ハ、一圓合點ノ參ラザル由人々耳語罷在候

事ニ御座候、愚案ニ、此儀ハ外ニ論ナシ、前文申上候通リ、金銀ノ位卑敷相成候故、武家計ニ不レ拘、農工ノ二民共往古トハ衰ヘ申候テ、當時盛ナルハ商ノミニ御座候、其子細ハ今ノ金三兩ハ、古ノ金一兩ニ相當リ申候、然共米一石ハ往古モ六十目、今モ六十目故、自然トハ相場二兩齟齬仕候ニ付、士農工トモ衰微仕候儀ニ御座候、其證據ハ只今差掛リ、米一石八十目ニ引上リ候ハヾ、寛永頃ノ侍ノ身代ト同樣ニ相成候、カヽレバ八十石ノ與力ハ、直ニ二百四十兩ノ收納ト相成候、故ニ大方當時ノ七八百石取リノ侍ノ暮方ト同樣ニ相當リ申候、於レ是馬一疋下人三四人召仕候共、事闕ギ不レ申候、又千石取ノ士ハ千二百兩餘ノ收納ト相成候故、御軍役ノ通リ屹ト五騎相備ヘ置候共、少シモ差支ハ無レ之候、夫ヨリ十萬石百萬石トモ相成候ハヾ、幾萬々ノ金高ニモ可二相成一哉、一々數フルニ遑アラズ候、譬ヘバ一間四方ニハ二疊敷ニ御座候得共、二間四方ハ八疊敷ト相成申候、猶其割ニテ倍々ト重リ候程疊數多相成候如ク、十萬石ト二十萬石トモ相成候ハヾ、限リナク廣大ニ可二相成一候、右ノ割合故、寛永頃ハ山ノ如ク御金可レ被レ爲レ在筋カト愚案仕候

一　金銀ノ員數ヲ追々相增候程、世上融通格別ニ宜敷相成、上下共一體豐ト可二相成一候樣、誰シモ相心得候儀ニ御座候得共、是ハ皆目先キノ考ヘ、其日遁レノ工風ニテ、實々心當ニ掛ケ候考ニハ曾テ無レ之候、扨又金銀ノ員數ハ、田畑ヨリ年々生ジ候穀高丈ニテ事足リ候儀ニ御座候、左レバ其御高幷ニ金銀ノ員數ハ、幾許有レ之候事哉、我々式ノ曾テ不レ奉レ存候儀ニ御座候、然レ共先ヅ其形ヲ取リ不レ申

候ハデハ、其次第申試ミ難ク候ニ付、姑ク爰ニ員數ヲ借リ設ケテ認メ候事故、實々ノ員數トハ定テ相違可レ仕候間、其段ハ御差計ヒ御覧可レ被レ下候、扨通用ノ金銀二千五百萬兩ノモノナラバ、千五百萬兩ハ農人ノ手ニ有レ之、千萬兩ハ武士ノ手ニ有レ之、五百萬兩ハ工商ノ手ニ有レ之、合シテ二千五百萬兩、斯ノ如ク夫々配當ニ相成有レ之候得者、總體ノ融通至極ノ辨利ニテ、天下ニ困窮ノモノハ曾テ無レ之候、其ハ先ヅ千五百萬兩ヲ農人總體ニ割付候ハヾ、人別ニ金一分二朱程ヅヽニ相當リ申候、右ハ餘リニ不足ノ樣ニモ相見候得共、決シテ左樣ナル次第ニテハ無レ之候、最モ農人ハ食糧ヲ買求メズ候共、人々ノ扶食ハ手ノモノニ有レ之、衣食住共ニ事足リ申候、於レ是彼ノ一分二朱ハ餘リ浮寶ニ有レ之候、又夏作秋作ノ物畑物ニテ、其上ヲ一分二朱ヅヽモ兩度上ゲ候得バ、年ニ金三分位ノ融通ニ相成候、右割付ハ金一分二朱ニ候得共、融通ハ金三分ニモ一兩ニモ相當リ可レ申候、扨其一分二朱モ年中農人ノ手ニアルト云ニハ非ズ、先ヅ農人ノ買調ヘ候品ハ、鍬鎌ノ類幷鹽肥シ等ニテ、彼ノ一分二朱ハ此辨用ト相成候儀ニ御座候、然レ共其費モ夏秋之作得ニテ、猶倍々ト相成取戻シ候故、千五百萬兩ノ金ハ永代農人總體ノ手ニ有レ之、年々融通致候儀ハ、環ノ端ナキ如クニ御座候、次千萬兩ハ武士總體ノ手ニ有レ之、其中六百萬兩ハ遊金ニテ、全ク軍用備金ニ有レ之候、殘リテ四百萬兩ハ工商ヘ相拂ヒ候、雜費通用金ニテ年年工商ヘ相下リ候也、然ルニ翌年收納ノ內四百萬石相拂ヒ候ニ付、彼ノ四百萬兩ハ又武士總體ヘ引上ゲ申候、斯ノ如ク四百萬兩ノ金士工商ノ間ヲ循環シテ、姑クモ止ル事ナシ、於レ是上下平等ノ融通至極ノ

辨用ニ有レ之候、斯在バ武家相續ノ安堵ノミナラズ、工商迄モ恩澤行渡リ、一統豐ノ良法ニテ、往昔神祖ノ御見通シハ、乍レ恐此邊ノ御儀ニモ可レ有レ之哉ニ、竊ニ神慮ヲ推量仕候儀ニ御座候、次ニ五百萬兩ハ工商ノ手ニ有レ之、先ヅ工ハ農商ヨリ物々ヲ買入、夫ヲ品ニ作リテ士農商ヘ相渡シ、工手間ヲ得テ衣食住安堵仕候ナリ、商ハ農工ノ作セシ品物ヲ買求メテ天下ニ商ヒ、其內ノ利ヲ得テ衣食住安堵仕候也、最モ工商ノ五百萬兩モ各手ニアルニアラズ、其五百萬兩ハ皆品物ニ相成有レ之候也、然レバ二千五百萬兩ノ內、六百萬兩ノミ軍用金ニテ、武士總體ノ手ニ止リ、殘リ千九百萬兩ハ士農工商ノ間ヲ循環シテ、何レニモ止ラズ天下ヲ徘徊スルノミナリ、故ニ上下ノ辨用悉クタリテ、天下ノ大寶ト云ベキナリ、斯アラバ四海安穩ニテ、萬民鼓腹之御制度ナレバ、皆萬歲樂ヲ唱ヘ申候ナリ、然ルニ締ルハ難ク、緩ムハ易キ世ノ習ヒニテ、慶長ノ末ヨリ元祿八年ノ頃迄、僅八十二三年ノ間ニ玩物年々ニ作リ出シ、且衣食住ノ驕奢月々ニ倍シテ、總體武士ノ手ニ有レ之候遊金六百萬兩ハ、日々ニ減少トナリ、凡此頃迄ニ大方商人ノ手ニ相渡リ候事ト相見ヘ候也、固ヨリ田畑ヨリ生ズル物々ハ年々同ジ事ニテ、武家方ヘ取上ル處ノ金銀ハ、例年四百萬兩前後ニ有レ之、然ルニ驕奢日ヲ追テ盛ンナレバ、其不足ノ分百姓ノ辨金ト相成、年々引續キ用金重々ニ絞リ上ラレ、終ニ百姓ノ手ニ有レ之候、千五百萬兩ハ大方領主地頭ヘ相廻リ、其領主地頭ヨリ商人ノ手ニ相渡リ候也、於レ是世界ノ金銀ハ多分町人ノ懷ニ納リテ、通用スル處僅ニ六七百萬兩ト見ヘタリ、就テハ世上融通甚差支、日々四海困窮ニ相及ビ候也、故ニ無レ據金銀ノ位

ヲ落シ員數ヲ增ス時ハ、通用ヨロシカラントノ儀ニテ、元祿八乙亥金銀共御吹替ニ相成候由也、然レドモ金銀ノ位卑敷相成候程、諸式高直ニ相成候儀ハ、理ノ當然ニ御座候、扨亦往古ハ武士ヨリ農工商ヘ金銀ヲ貸シ候儀ハ有レ之候トモ、農工商ヨリ武士ノ金銀ヲ借リ候儀ハ無レ之筋ニ御座候、勿論商人ハ諸品ヲ交易致シ候ノミニテ、金銀ナド貸付候力ハ曾テ無レ之、又金銀貸付ナド致候業ニハ無レ之筋ノ處、世ノ中驕奢增長致候ニ付、自然ト商人ノ手ニ夥シク金銀相聚リ候ニ付、イツシカ金銀ヲ貸附、其足物ヲトリ家業ニ致候、町人數多出來候ヨリ以來、猶々金銀ハ町人ヘ片迫リ候譯柄ト相成申候、此弊天下ノ煩ニテ、萬年ニモ取戻シハ相成間敷奉レ存候、猶元祿ノ頃ハ町人ヨリ諸家ヘ貸出シ、金凡千二三百萬兩ノ金高ニモ相至可レ申樣被レ存候、爰ヲ以テ相考候ニ千二三百萬兩町人貸付ノ利分年々百二三十萬兩ニテ、十年過候ハヾ千二三百萬兩ト相成、二十年過候ハヾ二千五六百萬兩ト相成、三十年過候ハヾ四千二三百萬兩ト相成、四十年過候ハヾ五千四五百萬兩ト相成申候、是ヘ元金ヲ加ヘ候得者四(カ)千萬兩程ノ金高、皆町人ノ物ニ有レ之候、斯ノ如ク元祿八年御吹替ヨリ元文元年迄、四十一二年ノ間ニ世界ノ金銀大方町人ヘ片迫リ、又々世上差支及ニ難澁一候、於レ是不レ得レ止元文元年又々金銀御吹替ニ相成、員數モ相增候由ニ御座候、然ル處其後同ク前件ノ譯柄ニテ町人ヘ片迫リ、其度々員數多分ト相成、偏ニ彼等ノ仕合ニノミ罷成候、右元文元年ヨリ三十七年ヲ經テ、安永二癸巳年南鐐銀御吹立ニ相成候、然ル處又々其例ニテ町人ヘ片迫リ候ニ付、安永二年ヨリ四十四五年ヲ經テ、文政ノ始メ二分金御吹立ニ相成、

夫ヨリ年々ノ樣ニ御金御吹立ノ御仕法相替リ候得共、右ノ例ニテ縮處皆町人ヘノ奉公ニ相成候ノミニテ、世上ノ惱ミ次第ニ相增、此上ノ不益ハアルベカラズ奉レ存候、右ノ譯合ニ候得バ、此上如何程金銀ノ員數御增被レ遊候共、決シテ世上ノ爲筋ニハ不ニ相成一皆町人ノ得益ト相成候儀故、此上御吹立ハ御無用ニ可レ被レ遊候樣愚案仕候、最モ金銀ノ位ヲ元ノ如ク御直シ被レ遊度儀ハ、諸人奉レ仰候次第ニハ御座候得共、唯今ノ金銀ニテ人氣モ治マリ有レ之候上ハ、御急ギニモ及間敷歟、猶米相場サヘ百八十日ニ引上リ候ハヾ、只今ノ金銀則慶長金ノ位ニ引戻リ候故、差當リ金銀ノ吹替ナドノ儀ニ御頓着ニハ及間敷候、猶當時ノ處ハ精々米相場ノ儀ヲ御穿鑿被レ遊候方、即今ノ御急用ト奉レ存候

一　三都町人ノ扶食ハ、武家四百萬石ノ拂米ニテ、年々凡四百萬兩ハ武家方ヘ引上リ、武家方雜費ノ用ニ相成候ハ、古來ヨリノ仕來リニ御座候、然レバ三都町人ハ畢竟武家方ノ得意場ニテ、實ハ武家ノ金箱ニ御座候、然ル處當時京江戶町人ヨリ諸家ヘ用達置候金高モ、定テ莫大ノ儀ニ可レ有レ之候得共、是ハ暫時差置、先ヅ大坂町人ヨリ諸家ヘ用達置候金高、凡六千萬兩モ可レ有レ之候ニ付、年々利足米三百萬石ハ大坂町人ヘ被ニ引取一申候、然ル上ハ町人ノ代物ニテ、町人共夫々配當致候次第ハ、先ヅ京都ヘ四十萬石、江戶ヘ百五十萬石、合シテ百九十萬石ナリ、殘リ百十萬石ノ內五十萬石ハ、池田伊丹灘等ヘ相拂酒ニ潰シ、引殘リ六十萬石ハ大坂市中ヘ相拂候、夫ニ付凶年ニハ〆賣致シ候テ、多人數ニ迷惑ヲカケ、或ハ年々六月土用前少々モ雲行惡シク候ハヾ、景氣揚ゲトカ申候テ、相場ヲ引上ゲ利ヲ貪ムサボ

リ、此外數ヘ難キ悪行自由自在ノ振舞等、不埒至極言語道斷ノ儀ニ御座候、是ト申候モ全クハ米ト云命ノ根ナリ、大切ノ寶ヲ町人ニ被レ握、三都ノ扶食武家方得意場ヲ被レ爲ニ押領一、武士ノ臺所ハ町人ノ臺所ト相變リ、當時町人ノ勢ヒニハ一言モ無レ之候、依レ之町人ノ手ニ付下ニ廻ラズ候ハデハ、武家方金銀ノ融通ニ相叶ラズ候ト申儀ハ、如何ニモ口惜シキ次第ニ御座候ナリ、右ノ通リ三百萬石ハ永代町人ノ擒ニテ、年々ノ收納ハ引當ノ外餘分ハ稀ニテ、大概ハ空身上ノヤリクリ臺所故、武士ノ町人ニ手ヲタレ腰カヾメテ、萬年ニ頭ノ上ル折ナシ、故ニ唯今御仕法ヲ不レ被レ立バ、武士ハ猶幾末トモ町人ノ奴タルベシ、斯ノ如ク武威相衰ヘ及ニ困窮一ニ候得バ、自然ト士風相降リ候テ、當時侍ノ腹ノ中ハ商人ガ入替リ、慾得ニ利ヲ爭フニ鏢ヲ削リ、或ハ計リ或ハ謀ラレ、七顚八倒ノ戰ヒハ實ニ苦々敷事ト云ベシ但シ其戰ヒニ賢キ士ガ、諸家用ヒラル、所ノ良將、故ニ見聞賄賂ニ心ヲ被レ奪、義モナク道モナキ商人士ガ流行ノ風俗也、扨又儉約トハ人々分限ニ過ギズトリ締リ候ガ儉約ニテ、是ヲニルガセニセザルハ御趣意ノ尊キ處ニテ、銘々ノ愼ノ肝要ノ所ニ御座候、然ル處甚儉約モ甚敷ニ至リテハ、吝嗇ノ如クニ相當リ、義ヲ鬪ギ物ヲ縮メ、或ハ下々ノ難澁ニ及ブ等ニ成行キ、只々箱詰メノ如ク窮屈ニナルノミニテ、少シモ益ニハ不ニ相成一候、諺ニ武士ハ不レ喰ト高楊枝トカ申ス如ク、一向少細ノ處ニ心ヲ寄セズ、大樣ナル士ノ風俗ニテ、猛クシテ優敷ガ士ラシク御座候、然ルニ此上十分ニ御縮メ被レ成候處ガ、何程ノ儀ニモ無レ之、唯人々ノ痛ミニ相成候而已ニ御座候、此外新田開發ノ御催シモ、五萬石八萬石ノ論ニ

テ、夫式ノ事ニテハ百分ノ一ノ御足リ合ニモ相成不レ申候、乍レ恐武家ノ御代ニ、カク迄武家ノ困窮ナサレ候儀ハ、謂レナキ御儀ト奉レ存候、何分武士ノ困窮ハ亂ヲ招クノ基ニテ、國家鎮護ノ大害ニ御座候得バ、早々寛永中ノ武士ノ元高ニ、米相場御引直シ被レ爲レ在度、乍レ恐奉レ存候

一　凶年ノ節米相場引上リ候ハヾ、諸人難澁ニ及ブベク候得共、平年五穀熟作ノ砌ハ、幾許米相場引上リ候共、渇命ニ及ビ候者ハコレナク候、其次第ハ天下人八分ハ百姓ニテ、其百姓ハ銘々扶食ヲ持候故買ヒ調フニ及バズ候、然レバ米相場高價ニテモ、百姓ニ差障リハ無レ之候、假令百姓ノ中不覺悟ノ者有レ之、一年ノ食不足ノ分モ、錢相場相上リ有レ之候ニ付、道中傳馬、幷ニ人足或ハ日雇ニ出候トモ、相應ノ稼ギニ相當リ候得バ、食糧ニ差支ハアルマジク候也、又作得米ヲ拂ヒ候者ハ、一石三兩ニモ相當リ候ニ付、總百姓ノ賑ヒ此上アルベカラズ被レ存候、扨其二分ヲ三分ニシテ、士工商凡等分ニモ相當ル可カ、其中士ハ祿取ナレバ此ノ外豐ナリ、工モ作料ヲ相上ゲ候得バ難澁ハ無レ之候、然レバ難澁ハ商ノミニ御座候、是ヲ仕方立ニヨリテハ、格外ノ難澁不ニ相成一候ナリ、右ノ通リ百八十日ノ相場ニ被二成下一候ハヾ、天下九分餘ノ助カリニ相成リ、難澁ハ一分ニ不レ足候程ノ儀ニ御座候、然ル處當時ノ如ク六十目相場ニ候得バ、天下九分餘ノ難澁ニテ、一分ニ不足ナル町人ノ歡ビニ御座候、斯ノ如ク天下推並テノ難澁ヲ、僅ノ町人ニ御替被レ下候儀ハ、如何ニモ歎ケ敷次第ニ奉レ存候間、是非々々大勢ノ者ノ助リ候樣、御工風奉レ仰候儀ニ御座候、乍レ併凶年トモ事替リ、米相場高ク相成候トモ、町人ノ手前ニ於テ幾

許ノ雜澁ニモ有レ之間敷被レ存候、子細ハ先ヅ六十目相場ノ砌百人暮シテ、商人ニテ一年ノ食糧ハ凡九貫目バカリ買入可レ申候、然ル處一石百八十目ト相成候得バ、十八貫目餘分ニ相成、夫レダケノ損毛ニ御座候、斯在バ米代一年ニハ幾ノ物ニ有レ之候、餘皆此割ニ御座候ナリ、就テハ五穀不レ殘引上リ候ニ付、諸品ノ內五穀ヲ以テ製シ候物バカリ、直段上ゲニ可ニ相成一候得共、其外ノ諸品ハ是迄通リノ相場ニ相居リ候ナリ、然ラザレバ折角相場百八十目ニ相成候詮ハ無レ之候間、諸品ヲ此儘ニ据へ置候仕方第一ノ儀ト奉レ存候、猶其仕分ケハ別紙ニ相認メ候也、吳々米ハ命ノ根ニテ、天下最第一ノ寶ニ御座候、然ルヲイツシカ此寶町人ノ手ニ相渡リ候故、町人ニ權ヲ握ラレ、當時町人ノ我儘ハ自由自在ノ振舞ニテ、多ク見聞スル處ニ御座候、故ニ金サヘアラバ、德不德ヲ論ゼズ、勝手儘ノ事共出來候、於レ是懷手シテ生涯ヲ相經リ候町人共澤山ニ有レ之候ハ、冥加怖敷次第ニ奉レ存候、何トゾ一日モ早ク町人ノ手ニ有レ之候寶ヲ、武家ノ手ヘ御戾被レ遊候ハヾ、町人ノ權ハ更ニ無レ之候樣相成、以後金銀ニテハ勝手儘ノ儀ハ相成間敷樣被レ存候、然レバ人氣古ニ立復リ、戶ザヽヌ御世ノ御制度御行渡リニテ、實ニ浦安ノ國ト申ベク候ナリ

一 前書ノ如ク武士ノ身代ヲ寬永頃ニ引戾シ候得バ、各以ノ外豐カト相ナルベク候、然レバ自然ニ物事相緩ミ可レ申候間、嚴シク儉約ヲ此時ニ用ヒ候ガ、天下ノ要道ニ御座候、然ルニ當時極窮ノ折カラ、嚴シキ儉ヲ用ヒ候得バ吝嗇ニ落入リ、總體ノ惱ミト相成候ノミニテ、世上ノ爲筋ニハ不ニ相成一候也、

但シ元祿ヨリ以前ハ世ニ有名ノ人モ數多ク有レ之候處、今ハ餘リニ聞及バズ候、此ハ全ク人ノ衰ヘタルニアラズ、士農トモ身代ノ衰ヘタルナリ。左レバ當時世間ノ世話シキハ、皆困窮ニ付テノ用ノミニシテ、公用且家業ノ用ハ右ニ對セバ、二三分ニ過ギザル程ナリ、此外公事出入ノ縺レ事モ、皆困窮ヨリ起ル處ノ禍ヒナリ、諺ニ貧ハ諸道ノ妨ト申如ク、カクモ世話シキ世ノ中ニ生レ出タル人々ナレバ、中中學問處ニテハナク、唯貧用ニセメラレテ生涯ヲ經ルナラヒトハナレリ、故ニ學問ニカヽワラズ、元祿以來何藝ノ衰ヘタルモ、前件ニ云フ各身代ノ衰ヘタル故ナリ、實ニ歎ケ敷儀ト云フベシ、今ヤ士農ノ身代古ニ復サバ、四海豐カトナルベシ、豐ハ急シカラザルノ謂ニテ、彼貧用ノ急シキヲ除キテ、公用業用ノ外ナシ、其公用業用ハ靜カニシテ穩ナレバ、是ヲ豐ト云フナリ、於レ是諸藝悉ク成就シテ、有名ノ人世ニ現ハルヽ事、彼ノ元祿ノ昔ニ劣ルベカラズ

一　當時ハ米金等分ノ古制年々ニ亂レテ、米價悉ク衰ヘタリ、於レ是雜穀ノ作方次第ニ減少シテ、中分ノ出來方ニテハ、一年ノ食糧ニ足ラザル程ナリ、故ニ常平倉ヲ設タリトモ貯ル品ナシ、然ルニ強テ貯ヘントスレバ、窮民餓死ニ及ブ者可レ有レ之筋也、夫ニ付或人云、百萬金ヲ出シテ穀物ヲ買求、諸國ノ常平倉ニ收メバ、一應ノ要用タルベキ由也トゾ、爰ニ聞人々皆尤ナリトイヘレド、黑闇ノ尤ニテ、物ヲシラヌ程恥ケ敷ハ無二御座一候、其ハ百萬兩ノ價ノ穀物ニテ、幾許ノ助ケトナルト思ヘル哉、總國人數ノ扶助四日位ノ凌ニテ、何ノ用ニモ立ザルナリ、其上只今故ナク百萬ノ穀物ヲ買入レル時ハ、忽米

相場ハ七升カラ引上リ、六十目ノ時ナラバ六十五六目ニハ是非可二相成一ナリ、然レバ六七升ガタノ高キ米ヲ、態々世界中ヘ出來秋迄長ノ間爲レ買候ハ、大イナル罪ニテ、能キト思フ事ガ却テ悪シキ事ニテ、不益ノ筋ナリ、此ハコノ一儀ノミナラズ、何事モ此類儘アル事ニテ、目先キノ即智ハ小人ノ活用ナレバ、君子是ヲ用ユルニハ、御思慮肝要ノ儀ト奉レ存候、爰ニ當時ハ桑・煙草・綿・紅花・藍其外染草ノ類ハ、作シテ多分ノ得益アレバ、何レモ皆是等ノ作ニ心ヲヨセテ、雜穀ノ作ヲ減少ナスナリ、故ニ一體食糧甚不足ニテ、危キ限リト云ベシ、然ルニ以來米價百八十目ニ上レバ、不二申付一トモ自然ト畑ヲ田ニナシ、或ハ藍綿等ヲ減少シテ、米ノ作次第ニ多分ト可二相成一儀ナリ、其ハ鏡ニカケテ見ル如クナリ、右ノ通リ米相場莫大ニ上リ候得バ、武家ノミナラズ、農家モ大利ヲ得候事ニテ、實ニ冥加怖敷次第ニ可レ奉レ存候ナリ、於レ是貢ノ外反別ニ、五升ヅヽ爲二冥加一上納仕候程ノ儀ハ、百姓方ヨリ願出可レ申候、此時常平倉ヲ諸國ニ設ケ遊バサレ、彼ノ冥加米ヲ積置、凶年ノ備ヘト被レ遊候得バ、理ノ當前ニテ萬年相續ノ要用ニ可レ有レ之ト奉レ存候、右常平倉ノ儀ハ、我國ニテ屯倉(ミヤケ)ト申候也、其屯倉ノ委曲ハ日本紀ニ載給フ處ノ如クナリ、故ニ愚昧ノ私式ニテモ、國道相學ビ候ニ付テハ、シラデ叶ハザル儀ニ付、少々覺悟致候次第、前條申試ミ候得共、如何ノ儀ニ候哉、定メテ相違ノ廉々モ多分可レ有レ之候、此儀ハ御推覧可レ被レ下候、夫レニ付甚嗚呼ガマシキ儀ニテ奉二恐入一候次第ニテ御座候得共、常平倉ノ儀ニ付、猶ホ御捌理筋ニモ可二相成一哉、聊心附候儀有レ之候間、一二ケ條左ニ申上奉リ候、此儀成不成ハ兎アレ

一通リ御聞取被ニ成下一候ハヾ、難レ有仕合ニ奉レ存候

一　常平倉ノ儀ハ吾國古名ノ如ク、以來ハ屯倉ト相唱ヘ申度奉レ存候、就テハ下皆屯倉ト相認メ申候、此段御承知可レ被レ下候、サレバ民家ニハ憶カナル師ト申スモノモ無レ之候故、五倫ノ道モ相廢リ、皆我儘ニ育チ申候、就テハ成人ノ後モ人氣穩カナラズ候間、以來ハ壹萬石ノ場所ニ三軒モ教道所ヲ建テ、幼年ノ者共ニ責テハ孝經ノ類、和論語等ノ手近キモノヲ爲レ讀、手習十露盤抔モ少々ハ爲レ習候ハヾ、成人ノ後アマリノ心得違ヒモ有レ之マジク奉レ存候、何卒太平ノ御代ノ御惠ミニハ、係ル賤シキ者共迄ニモ、神聖ノ道ヲ相辨ヘ候樣御世話有レ之候ハヾ、何寄ノ御積善ニ可ニ相成一哉、斯アラバ幼年ノ者ノミナラズ、一統道ヲ相ワキマヒ候上カラハ、自然ト屯倉モ永續相成候、於レ是倩此理ヲ相考ヘ候ニ、先ヅ御目見以上ノ方ニテ、百俵ヨリ二百俵迄ノ御人體ヲ、一萬石ニ御一人ヅヽヘ教道所ヲ御預ケ有レ之、猶御目見以下ノ御家人衆五十俵前後ノ御人體モ、一萬石ニ二人ヅヽ同教道所ヲ御預ケ有レ之候ハヾ、御目見以上以下打混ジテ、一萬石ニ御三人ヅヽニテ、凡三千石餘ニ一人ヅヽノ割ニ御座候、此方ノ御出役有レ之、或ハ五年或ハ八年在住ニテ、夫々御教道御坐候時ハ、人々驕奢ヲ相愼候ノミナラズ、村方大ニ取締リ、凡テ風俗古ニ立復リ、千代萬代ヲ祝シ奉リ候譯柄ニ御坐候、最モ此出役ノ方々モ五七年在住ノ間ニ、篤ト御收納向幷諸運上ノ次第、此外田畑ノ割合、或ハ作物ノ辨理、山林竹木ノ調ヘ方ヨリ、河海漁ノ委曲ニ至リ、夫々御會得ニ相成候上被ニ召歸一、以上ノ分ハ御勘定ヘ御轉役ニ相成、夫ヨリ御代

官御勤ニ相成、其後々ハ竟ニ御勘定奉行ニモ御昇進ニ可ニ相成一候、此ハ凡テ農家御取扱ノ御用向ニテ、
第一御收納ノ儀ニ付、萬事民情御承知ノ上ハ物事明ラカニテ、少シモ御勤筋ニ御差支ハ無レ之候、次ニ
御役前ニテ同斷ノ譯柄ニ御座候、然レバ以來御勘定御普請役ハ、敎道所出役在住ノ人々ヨリ出候儀ト
相成候ハヾ、一段御勘定所御取締リ御辨用ニ可ニ相成一ト奉レ存候、右敎道所ハ二千四百軒ニテ、御出役
方二千四百人ニ御座候、其中以上ノ分八百人以下ノ分千六百人ニ御座候、然レバ御料所ダケハ可ニ行
屆一樣被レ存候、最モ此御人數ノ御出役方、諸國ヘ御手分ケニ相成、夫々御在住有レ之候ハヾ、悉ク村々
取締リ候儀ハ勿論、萬一異變等有レ之候折ハ、直ニ御摸寄ノ御城、或ハ御奉行所御代官所等ヘ御詰合ニ
可ニ相成一候、然レバ非常ノ御防ギ御備ヘ御用辨ニ御座候ト奉レ存候、扨又土着ノ儀ハ先徹ノ高論モ有
レ之候儀ニハ御座候得共、秀吉公大坂御治世ノ折ヨリ、引續キ御當家ノ御制度ト相成、既ニ二百有餘年
ノ□例ニ候處、イカニ古制ノ土着辨利ニ有レ之候トモ、今遽ニ惣體ノ武士ヲ土着ニ致シ候儀ハ迚モ相成
マジク、之ハ無益ノ論ト奉レ存候、乍レ併御勘定所第一ノ御用筋ハ御收納向ニテ、凡テ農家ニ係リ候事
ノミニ候得バ、後々御勘定御普請役等ニ可ニ相成一御身體バカリハ、是非土着ニ相成候ハ、御用向ニ付
テノ儀故、理ノ當然ト奉レ存候、且又御多人數ノ中ニテ、僅カ二千四百人バカリ御人少ニ相成候トモ、
御當地御防御備御用辨ニ拘リ候程ノ儀モ有レ之間ジクヤニ愚案仕候、左レバ前件敎道所ハ、三千石ノ士
地ニ一ケ所ヅヽニテ、大方其隔リ廿二三丁ヨリ卅四五丁程ヅヽニモ可レ有レ之候ナリ、最モ國持諸侯領

内ノ邊ニ至リテハ、或ハ十里二十里其餘モ相隔リ候場所モ可レ有レ之候得共、關東筋ヨリ東海道・木曾街道・京大坂ノ近國、夫ヨリ山陰・山陽・四國・九州迄、北ハ北陸道ヨリ東ハ奥羽ニ至リ、凡テ二千四百ケ所ノ教道所經緯ニ連續致シ、人體ノ脉路ノ如ク環通致シ候儀故、何國何方ニ何等ノ儀有レ之候共、忽心ノ臓ニ相響キ候自然ノ妙用ニ候得バ、以來何等ノ御穿鑿ノ向モ御座候得バ、此筋ヘ御尋御座候時ハ、其次第巨細ニ相分リ可レ申候、幷ニ諸御奉行。御代官ノ非分ハ不レ及レ申、私領ノ非分等迄自ラ相知レ可レ申候、其中品ニヨリテハ密々可ニ申上一筋モ可レ有レ之候、然レバ自然ト私領ニ於テモ、取計向幷ニ格外ノ用金等相責リ、百姓迷惑ニ及ビ候筋モ、次第ニ薄ラギ可レ申候、於レ是諸國私領ノ百姓共モ皆々御蔭ヲ蒙リ、幾許相助リ可レ申哉、其歡ビ量リ知ル可ラズ奉レ存候、就テハ以來私領ヨリ公事出入等ヲ持出シ、上ノ御厄介ニ相成候儀モ追々薄ラギ可レ申貌ニテ、縮ル處上下ニテ無益ノ費不ニ相立一候樣相至可レ申候得バ、則國家ノ御益ニ御座候ナリ、扨又教道所ノ御構ヘハ、正面ニ五間ニ十間、高サ一丈八尺ノ土藏ヲ相建候也、此土藏ハ前件ノ屯倉ニ御座候、此外左ノ方ニ三間ニ八間ノ平家ヲ相建候、是ハ教道所ニテ、其奥ノ間ハ出役方住居ニ御座候、又右ノ方ニ二間半ニ八間ノ平屋ヲ相建候、是ハ客屋ニ御座候、夫ハ公儀御役人衆廻村ノ節、止宿ノ設ケニ御座候也、此傍ニ二間四方ノ牢屋ヲ相建候也、於レ是屯倉惣御構ヘノ地坪ハ、三百坪前後ニテ事足リ候事ト奉レ存候、愚案、反別ニ五升ヅヽノ御冥加米ヲ公儀御收納ニ相成候テハ、天然ニ不ニ相叶一バトテ、百姓共ノ物トシテ屯倉ヘ相納候ハバ、百姓共ノ怠リ

ニ可ニ相成一候間、此レハ公儀ノ物ニテモナク、百姓ノ物ニテモ無、唯浮寶ニ被ニ成置一候方、神慮ニモ可ニ相叶一哉、何分前件ノ如ク遽ニ米價百八十目ニ引上リ候得バ、乍レ恐是迄通リヨリ年々凡二百萬兩餘、過分ノ御收納高ニモ可ニ相成一歟、幷ニ諸家諸士此外寺社ノ徒ニ至ル迄、高ニ應ジ是迄通リヨリ三增倍ノ收納ニ相成候得バ、責テハ以來凶年ノ砌ニテモ、米價百八十目ヨリ高直ニハ不ニ相成一候樣ノ御取計ヒ、兼テ御設ノ樣、乍レ恐肝要ノ儀ト奉レ存候、夫ニ付反別五升ノ浮寶ハ三千石ノ地ニテ、年々二百石餘ニモ可ニ相至一歟、故ニ共二百石餘ヲ十五年積置候得バ、三千石餘ニ可ニ相成一候、猶三千石ノ村方ハ人別凡三千人ニモ可レ有レ之候間、三千石屯倉ノ貯有レ之候ハヾ、凡七八ケ月ノ扶食ハ可レ有レ之候也、斯ノ如ク二千四百軒ノ屯倉ハ同樣ニテ、御料所ノ分屯倉御貯穀ハ、此時ニ至リ七百廿萬石餘ニ相成可レ申候、但シイカナル凶年旋リ會候トモ、其年々夏作□作相混ジ候得バ、總國平均シ三分ノ作ヨリ不作致シ候儀ハ無レ之候、其ハ是迄凶年ノ次第ニテ、現然タル事ニ御座候、扨其三分トハ雜穀合シテ凡千二百萬石ニ御座候、然バ極々ノ凶年ニテモ、是ダケノ穀物ハ總國ニ有レ之候、故ニ此時諸國ノ屯倉ヲ御開キ御座候得バ、御料所ノ人數丈ハ定直段百八十目ニテ、平年ノ如クニ御座候也、然ドモ私領寺社領迄ニハ、迚モ御行屆ニハ不ニ相成一候間、私領寺社領ニテモ、兼テ屯倉相設候樣御沙汰被レ爲レ在度奉レ存候、次ニ是迄ハ公儀御役人衆廻村ノ砌リ、休泊ハ村々名主方ニテ相勤候儀ガ仕來リニ御座候、右布衣以上ノ方ニテハ猾吏、假令御代官手代、及ビ關八州廻役人ニテモ、休泊ノ節ハ村方大混雜ニテ前日

ヨリノ騷キニ御座候、然ドモ田舍ノ事ニテ、氣ニ入リ候程ノ料理モ出來間敷候得共、村方入用ハ莫大ノ儀ニ有レ之、其入用ハ皆高懸リニテ、總百姓ノ迷惑ト相成候間、以來ハ夫々教道所ニテ休泊御座候樣致度奉レ存候、然レバ村方ノ費ヘ相遁レ候ノミナラズ、村役人共不調法筋ノ心配モ無レ之、一統安堵可レ仕候付テハ、老テ妻子ニ離レ候難澁者ハ、一村ニ一人位ハ可レ有レ之候間、此者ヘ村中ヨリ合力米ヲ出シ、兼テ屯倉ノ番人ニ付置可レ申候、此者平日御門ノ開閉幷掃除等ヲ致シ、其閑暇ニハ教道所小使ヲ相勤候也、扨彼御役人方御休泊ニ御座候得バ、此下部勝手ノ用且湯ヲ立候程ニテ事タル可カ、猶布衣以上ノ方御休泊ニ候ハヾ、組頭共ノ中一兩人罷出、勝手ノ世話致シ候モ可ナリ、夫レニ付廻村御役人衆ヨリ、先番トシテ若黨仲間ノ類一人遣シ候モ可レ然儀ナリ、カクノ如ク質素ノ體ガ復古ノ御制度ト奉レ存候、猶教道所ノ儀ハ下々ヘ文學ヲ爲レ習、實道御教諭ノ御趣意ニ御座候故、出役師範ノ方ニテ、聊タリトモ金銀ノ謝儀相請候テハ、公儀ヨリ教道ノ筋ニ不二相當一候間、謝物決シテ相ウケ間敷儀ハ勿論ノ事ニ御座候、但シ野菜ノ類ニテ手作ノ品ハ、相ウケ候テモ苦シカラズ候ヤニモ被レ存候ナリ、夫レニ付出役人方以上ノ分ハ、百五十俵ヨリ前後、以下ノ分ハ五十俵ヨリ前後ニテ、二千四百人ノ總高凡二十萬俵程ニモ可レ有レ之候、是ヲ石ニ相直シ候得バ九萬六千石ト相成申候、扨ハ此九萬六千石モ此迄廻船イタシ、江戸表ニテ御渡シニ相成候入費、凡百石五兩ノ運賃ト見積候テモ、四千八百兩廻船入費相懸リ申候、然ルヲ彼出役先キ場所々々ニ於テ、御代官所ヨリ夫々御渡シ御座候得バ、運送ノ代四千八

百兩、則上ノ御益ト相成申候、於レ是彼四千八百兩ヲ出役方役料トシテ、二季ニ被レ下候樣仕度存候

一　御入國以來御當地度々ノ大火ニテ、上下ノ困窮夥敷儀ニ御座候、最モ其度々二萬ノ實財ヲ失フノミナラズ、大切ナル記錄等モ燒失イタシ、殘念無二此上一儀ニ奉レ存候、乍レ併是ヲ防グノ術何分六ケ敷儀ニ御座候得共、幸ニ當時御改革被二仰出一候折柄ニテ、萬一米金等分ノ古制ニ復シ候上ハ、思ノ外防方モ可レ有レ之候樣奉レ存候、夫ニ付大身ノ向ハ此上類燒有レ之候共、又々イカ樣ニモ振合ノ附方モ可レ有レ之候得共、小身ノ向々ニ至リ候テハ、此上ノ仕方ハ有レ之間敷被レ存候、故ニ先ヅ御家人ノ向々ノ火災難澁ヲ救ヒ、且ハ勝手向取續方辨用ニ相成候儀ヲ、急用ト仕度奉レ存候、扨ハ先年筒井紀伊守殿町奉行御勤役中、書林年行事共ヨリ相願、御免板ニ相成候愖作「火ノ用心仕方」ニ相認メ候如ク、尺角橫木組立造リノ建家ハ、火防ニ相成候ノミナラズ、第一火矢大筒ヲ防グノ建方ニテ、御軍用ニ至極ノ辨理ニ有レ之候、其上震雷ニ碎ケズ盜難ヲ除キ、此外辨理一々數ルニ遑アラズ候也、右橫木組立藏造リノ建家、三間梁リ高サ一丈八尺ニテ二階屋ニ出來候、周リ白壁ノ長屋ヲ淺草見付ヨリ柳原通リ筋違迄、夫ヨリ駿河臺・小石川・牛込・市ケ谷・四谷・赤坂ト御堀ノ內不レ殘連續仕候ハヾ、嘸見事ニテ目ヲ驚カス計リニ可レ有レ之候、最此藏造リ御長屋ハ、御抱御家人衆ヲ差置レ度奉レ存候、且與力御徒衆ハ四間ヅヽ、同心ノ向々ハ二間一小間ヅヽ、御渡シニ相成候ハヾ、多人數住居ニ可二相成一候、扨又御內郭ノ御堀周リモ同斷ニ御座候、是レハ御譜代御家人衆バカリニテ、席持以上ハ四間ニテ、以下ハ二間一小間ヅヽ、御渡ニ

相成候ハヾ、是又多人數ノ住居ト可二相成一候、斯在バ此上御嚴重ノ御構ヘト可二相成一候、其上外ノ火事內ヘ入ラズ、內ノ火事外ニ出ズ、凡テノ火事ハ此藏造リ御長屋ニテ相防候得バ、以來大火トハ不二相成一候樣被レ存候、殊ニハ御家人ノ衆中、カク御手近ニ住居有レ之候得バ、萬事ノ御都合ニモ可レ有レ之候、又彼ノ衆中ニ於モ、平日勤仕ノ勝手ヨリ御成御供ノ出入、且夜分廻狀ノ辨用等ニ至ル迄速ニ相足リ候也、此外御用辨ニ相成候事共、擧テ數ヘ難キ儀ニ御座候、扨又是迄ハ御家人衆拜領屋敷モ、中ニハ町屋ト軒續キニ相成候處モ有レ之候故、卑シキ風俗自ラ相移リ、尾籠ノ體ニモ相見ウケ、甚御外聞ノ至ト人々耳語罷在候處、以來御郭內ノ住居ト相定メ候上ハ、自然ト人柄能相成、風俗モ古ニ立復ル儀ハ、鏡ニカケテ見ル如クニ御座候、カクノ如ク御郭內住居ト相成候上ハ、是迄ノ拜領家舖ハ返上ニ可二相成一候、乍レ併席持且與力御徒ノ類ヘハ五十坪、其以下ハ三十坪バカリ下屋敷ヲ可レ被レ下候、猶右ノ衆中隱居ニテモ仕候得バ、彼下屋敷ヘ住居可レ仕候、故ニ此下屋敷ハ何レモ御府內端々ニテ可レ然樣奉レ存候、扨彼ノ橫木組立藏造リノ建家、三間四方高サ一丈八尺ノ二階建ニテ、凡百兩程ノ入費ニ御座候、然ル處四間渡シ、或ハ二間一小間渡シ等ヲ相マトメ候テ、一人ニ三間ヅヽ渡シノ見積リニ仕候處ガ、外御堀內御堀リノ周リニテ、凡一萬竈モ出來候樣ニモ奉レ存候、於レ是此入用ハ惣體ニテ百萬兩モ相掛リ可レ申候、次ニ諸國教道所二千四百軒ハ、橫木造リニモ及ブマジク候、是ハ通例ノ建家ニテ、屯倉バカリハ土藏ニ可レ仕候、右入用一軒ニ付百兩程ニテ事足リ候樣奉レ存候、故ニ惣體ノ教道所建方入

費凡四十八萬兩モ相掛リ可レ申候、扨此莫大ノ入費ノ出方ハ、先ヅ祿取リノ銘々是迄百石高ノ物成、年年凡三十兩前後ニ御座候處、如レ此米金等分ノ御制度相立候上ハ、百石高ニテ年々凡九十兩前後ノ收納ト相成申候、依レ之最初一遍バカリ爲ニ御冥加一、其高ヨリ金十兩位差上候處ガ、一向痛ニハ不二相成一、一統難レ有仕合ニ可レ奉レ存候、就テハ武家ノミナラズ、寺社領迄ニモ一割ノ金納被二仰付一候ハヾ、忽二百萬兩バカリ上金ニ可二相成一候ナリ、故ニ此二百萬兩ヲ以テ前件ノ入費ニ御使ヒ可レ被レ遊候也、此ハ理ノ當然ニテ、上金ノ銘々大慶可レ仕候ナリ、カクノ如ク二百萬兩ノ金高ニテハ、御普請料二口ニテ百四十八萬兩ノ御入費ヨリ、五十二萬兩過分ニ御座候得共、米金等分ノ相場ト相成候上ハ、工料且人足賃錢、其外種々ノ增等可レ有レ之候間、此五十二萬兩ハ其見込ニ入置可レ申候也

一 當七月中支配御奉行所へ進達仕候、愚作一蟻ノ念一ト申書中ニ相認メ候如ク、千石以下御旗本方ハ、多クハ譜代ノ家來ト申者モ無レ之候、於レ是當座凌ギニ渡リ用人、或ハ仕送リ用人トカ申候强慾不義ノ者ヲ被二相抱一候振合ニ相見申候、爰ニ其主人存生中ハマシモノニ候得共、死後幼年家督ト相成候ハヾ、彼用人家政向取亂シ、或ハ知行所百姓ヲ荒シ、散々ノ爲體ハ多ク聞及候處ニ御座候、此外惡事ハ一々申ツクシ難キ儀ニ御座候、故ニ此類三千石以上ニテ知行モヨリノ御旗本へ、御當人御番人迄御預ケニ相成候ハヾ、先ヅ彼ノ長屋へ被二引移一可レ申候、然レバ侍一人・中間一人。下女二人位ニテ用足リ候事ト被レ存候、猶知行所取締リ、且收納取扱ハ、御預リ三千石以上ノ方々家來へ被二申付一、其家來

取計候儀ニ於テハ、決シテ不正ノ筋ハ出來マジク候、是ハ譜代ノ者故、渡リ用人トハ同日ノ論ニハ無レ之候、斯ノ如ク十年以上モ御世話被レ成間ニ、先代ノ借財濟方ニ可ニ相成ニ儀ト奉レ存候、右ノ預金ハ御番人役御勤向用意金被レ致候ハヾ、何樣ノ御役被レ蒙レ仰候處ガ、一向差支無レ之候、將又幼年ヨリ文武稽古向ハ御預リノ主人師範タルベク候也、然ル上ハ御双方文武ノ磨合ニ相成、一入武門ノ繁昌ト奉レ存候、猶武士ハ相見互ニ、御懇ニ御世話御行屆ノ上御番人モ被レ成、夫ヨリ追々重キ御役ヘモ御進ミノ折柄、萬一元御預リノ御家ニ何カアラン砌リ、身ニ引カヘ御取持ナサレベキ儀ハ、武士ノ相見互ニ御座候、右御預リノ方迚、唯長屋ヲ用立ラレ候迄ニテ、別段費ハ相カヽルマジク被レ存候、右ノ仕法ニ候得バ、假令次男三男有レ之候得共、何レモ人柄能相育タレ、行々ハ御用ニ相立タレ候儀ハ、目出度御代ノ御守リト奉レ存候、何分此頃御取調有レ之、千石高ハ五千石以上、五百石以上ハ三千石以上、三百石以上ハ二千石以上ト次第ヲ相立テ、御預ケニ相成候ハヾ、夫々家政向行屆、文武ノ嗜ミ手厚ク出來、風俗古ヘニ立復リ、武士ノ武士タル道明ニ相成可レ申ト奉レ存候云云、扨右等ノ御旗本數百軒、并諸國敎道所出役御目見以上ノ分八百人、以下ノ分千六百人、此外御堀周リ御長屋ハ、引越シ候御家人凡一萬竈バカリニテ、返上ノ屋敷トハ、總體坪數幾許有レ之候哉廣大ナル儀ニテ、中々難レ量儀ニ御座候得共、大概推量ノ見積リ、凡二百萬坪餘モ可レ有レ之ヤ抔申程ニテ論ヲ立候ニ、先ヅ米金等分ノ相場ト相成候得バ、士農ハ最大益ト相成候儀ハ勿論ノ儀ニ御座候得共、工商ノ中取分ケ商ハ迷惑致シ候譯柄ニ御

座候、左レバ御當地町々ハ誠ニ家込ニテ、寸尺ノ地明モ無レ之候ニ付、小火モ自ラ大火ト相成候儀ニテ、此末共何分不安心ニ御座候、右度々ノ出火ニ付、火防ギノ用意萬端ニテ、以ノ外町人用モ相嵩ミ、町人共迷惑致難在候、就テハ地代店賃等自ラ相上リ候振合ニ御座候處、先頃引下ゲ被ニ仰付一少々相下ゲ申候得共、元來高金ヲサシ出シ買求メ候地所故、右金利ニ相當リ候儀ヲ所詮ト仕候ニ付、トテモ多分引下ゲニハ不ニ相成一候、然ル處地借リ店借リノ分モ、當地ノ地代ヨリ三ヶ一モ低ニ地代引下ゲニ相成候ハヾ、假令米價百八十目ニ引上リ候共、町村共ノアマリ迷惑ニハ不レ相成候樣被レ存候、右ニ付彼ノ二百萬坪ノ地所ヲ、町人共ヘ拜借被ニ仰付一候樣仕度奉レ存候、譬ヘバ神田於玉ケ池邊町並ニテ一坪三匁ノ處ニ候ハヾ、御地面ハ一坪一匁二三分ニ御貸可レ被レ下候、又藥研堀邊町並五匁ニ候ハヾ、一匁七八分ニモ御貸被レ下候樣仕度奉レ存候、斯ノ如其地位町並ヨリ大概三ヶ一近ク相下ゲ、御貸地ニ相成候ハヾ、我モ我モト御地所ヘ引越可レ申候、於レ是市中家込ノ處、餘程御地所ヘ引越シ候ニ付、澤山ニ明地出來申候、然レバ以來出火有レ之候共、大火トハ不ニ相成一儀ハ、必定ノ儀ニ有レ之候、猶火防ギノ儀ハ家作ヲ透シ、空地多ニ仕候ヨリ外ニ手段ハ有レ之マジク奉レ存候、殊ニハ御貸地惣地代凡二十四五萬兩ニモ相及ビ可レ申候間、其内十萬兩ハ惣體ノ御家人衆ヘ配當ニ相成候得バ、凡一俵ヲ十匁ヅヽト仕、百俵高ノ人ハ一貫目ト相成申候、就テハ十五俵一人半扶持ノ御小人衆ナドニテハ、百五十目ハ高ノ外ニ頂戴イタシ、殊ニ結構ナル御長屋ニ住居被ニ仰付一、以來共造作修覆致シ候等ノ憂ハ曾テ之ナク、

何程ノ安堵ニモ可レ有レ之哉、偏ニ御仁惠ノ程可レ奉ニ感服一候、此外大高ノ人々ハ猶以奉ニ恐入一候儀ニ付、以來御成御供ノ節、渇代ヲ被レ下候儀ハ無ニ冥加一儀ニ付、御斷可レ申候樣、彼ノ衆中ヨリ御願可ニ申出一譯合ニモ相至リ可レ申候、後十萬兩大奥女中方ノ御手當ニ可ニ相成一候、殘テ四五萬兩ハ御堀周リ御長屋、幷ニ諸國屯倉御修覆御手當ニ御殘シ置セラレ候得バ、永代ノ御備相立可レ申候、御貸地惣體一坪一匁均シニテ、年々ニ十二匁ニ御座候、然ルニ前文ノ仕方ニハ、所ニヨリテハ一匁七八分抔申儀有レ之候ハヽ、全ク一匁ヨリ過テハ、不レ殘町人用ニテ、役掛錢ハ町並ニ御出シ被レ下候得バ、惣別町人用減少ニ相成、縮處市中町人御助ケニ御座候、カヽラバ不レ被ニ仰付一候共、地主共無レ據地代ハ公儀並ニ相下ゲ可レ申候、然レバ町人共莫大ノ助リト相成候故、米金等分ノ相場ト相成候共、工商ノ輩格別難澁ハ不レ仕候也、殊ニハ武家方ニ懸ケ等ノ滯リハ無レ之樣相成、却而町人ハ仕合ノ向ニモ可ニ相及一候也、此外京大坂町人等助ケト相成候儀モ有レ之候得共、事繁多ニモ相成候ニ付、別紙ニ相認メ可レ申候、扨又幼年家督ニテ御預ケニ相成候御旗本方、幷ニ諸國屯倉出役方ハ、以上以下共其高ニ應ジ、百坪二百坪ニ拘ラズ、夫々兼テ地所御渡シ置カレ度奉レ存候、是モ前條ノ通リ御內端々ニテ可レ然候也、乍レ然右御人體何レモ御役被レ蒙レ仰候ハヾ、御城モヨリニテ屋敷替被ニ仰付一候儀ハ、勿論ノ儀ト奉レ存候、次ニ前件士着御銘々ノ家內、彼地在住五七年ノ間ニハ、糸採リ機織リノ業ハ勿論、馬飼秣刈ル等ノ儀ハ定テ可ニ申付一候、是ハ士着ノ所詮武門ノ要用ニ御座候也、右質素ノ古風ハ願ハシキ儀ニ奉レ存候、然レバ歸

府ノ上モヤハリ其風俗ニテ、此類入替リテ候事、十四五年ニモ至リ候ハヾ、在住ニ往カセラレザル家
柄迄モ、此風俗ニ推移リ、人氣古ニ立復リ、彌武門御繁昌ノ儀ト奉レ存候、次ニ小身御家人衆ノ家内ハ
勿論、當主々リ非番ノ節ハ、彼ノ内職トカ唱ヘ候テ、種々ノ手業ヲイタシ候儀ガ、ナラヒト相成候、
右何レモ職人ノ下ヲ働キ候事故、外聞ノ宜敷筈ハ無レ之候得共、其内下駄ノ鼻緒縫、或ハ提灯傘張リ等
ハ餘リノ下業ニテ、何トモ赤面ノ至リニ奉レ存候、於レ是士風相廢リ、手間トリ職人同様ノ人氣ニ落入
リ候儀ハ、イカニモ殘念至極ニ奉レ存候、然レドモ同ジ内職ノ中、武具ヲ製作イタシ候様仕度奉レ存候、
夫レニ村革具足ノ儀ハ古制ニテ、甚辨理宜キ品ニ有レ之、手間サヘ相懸ケ候ハヾ、勝レテ堅固ノ道具モ
出來候、但シ私門人ニ此製作致シ、自分所持ニ仕候者有レ之、常々見聞仕候處、甚手易キ儀ニテ格外手
ノ込ミ候儀モ無レ之候由ニ付、兼々習ヒ得度存罷在候儀ニ御座候、依レ之彼ノ牛ノ皮ヲ剝ギモノノ裏ニ
付、勝手次第ニ賣捌キ候ノバ停止被ニ仰付一度奉レ存候、右ノ牛皮乍レ恐公儀御買上ニテ、御家人衆ヘ甲
冑製作被ニ仰付一候ハヾ、質ハ至テ手輕ニ相上リ可レ申候、然ル上ハ旁ノ辨用ニ付、數輩頼込ミニ相成可
レ申候得バ、則チ御家人衆ノ潤ニ御座候、且又其家内ノ向々ヘハ、麻綿等ヲ澤山ニ御渡シニ相成、或ハ
糸ヲ採リ、或ハ機等ヲ爲レ織候テ御用品ニナシ被レ下、殘リノ分ハ着用ニモ仕、或ハ拂ニ出ス等ニテ
仕候ハヾ、勝手向取續キ方、格別豐ト可ニ相成一候、此ハ全ク御仁恵ノ御行屆ト奉レ存候、就テハ麻ヲ澤
山關東ニ相植、人々多ク麻ヲ着シ候様御世話被レ爲レ在度奉レ存候、最モ麻ハ古ノ服ニテ、莫大ノ辨理ニ

有レ之候、猶其委曲ハ去寅年支配御奉行所ヘ進達仕候、愚作「太平ノ船歌」ト相認置候故、爰ニハ略仕候、返々寛永頃ノ武士分限トハ、當時ハ三ケ一減少致シ罷在候ニ付、惣體ノ武士困窮ニ及ビ候儀ハ勿論ノ事ニ御座候、其上花美盛ンノ世ノ中ニテ、迚モ實意相行ハレズ候也、於レ是止ヲ得ズ無理無體ニ振合相立候テ、其日其日ヲ相過シ候ヨリ外無ニ御座一候樣ノ始末柄ニ御座候テハ、齋庭之穗トハ難レ申候、付テハ一萬金二萬金ノ運上、五萬石八萬石ノ開發、幷金銀山等ノ迂遠ノ御益ハ少慮ノ論ニテ、無用ノ沙汰ニ可レ有レ之候ト漸々心付候儀ニ御座候、猶米金等分ノ古制ニ復シ候ハヾ、惣體武士ノ得益、年々凡二千萬兩餘ニモ可二相及一ナリ、係ル大益ヲ目ノ前ニサシ置手ヲ空シクセンハ、神慮如何ト恐怖仕候也、扨題「齋庭之穗」ト相號ケ候所以ハ、神代ノ昔高皇産靈尊。大己貴命ノ改心ノ節、給ハリ候稻穗ノ古事ニテ、近ク申時ハ清淨ナルタベモノト申事ニ御座候、然ルニ驕奢增長ノ世ノ中ニテ、下々不淨ノ食物ハ神慮ニ不ニ相叶一候、故ニ天變地妖モ有レ之候半ト奉レ存候、猶米金等分ノ古制ニ復シ候上ハ、齋庭之穗ト可ニ相成一候、乍レ恐此趣意御取持相成候時ハ、四海困窮ノ憂ヒヲ除キ、御心配ノ靡々ハ科戸乃風乃、天八重雲乎吹拂布事乃如久之天、御代ノ長久ハ際リシルベカラズ奉ニ萬歲祝一候、故ニ「齋庭之穗」ト題シテ、天下太平ノ御祈禱ノ希フモノナラシ

天保十四年癸卯十月　日

齋庭之穗

終

宮崎幸麿
小西武治
校

大正五年二月十七日印刷
大正五年二月二十日發行

不許複製

日本經濟叢書　卷二十一　非賣品

編者　瀧本誠一

發行者　佐藤卯兵衛
東京市神田區駿河臺鈴木町拾六番地

印刷者　中田福三郎
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所　株式會社秀英舍第一工場
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所　東京神田區駿河臺鈴木町拾六番地　日本經濟叢書刊行會
電話本局三一八五番
振替口座東京二六八一〇番

理事　高木範之丞
佐藤卯兵衛

6. **HITŌSEI BEN,** *or parables on the nature of man and the nature of rice, namely an ethico-agronomical manual*

By **YAMADA BUNSEI**
(1770-1841)

7. **KEITEN KOKUMEI KŌ,** *or an essay on the various names of cereals appearing in Chinese Classics.*

By **YAMADA BUNSEI**
(1770-1841)

8. **DENYEN JIKATA KIGEN,** *or the origin and growth of systems of land taxation* About 1838

By **ASAKAWA ZEN-AN**
(1781-1849)

9. **SEIJI SHICHI SAKU,** *or seven policies of political reform, mainly economical, financial and monetary.*

By **ASAKAWA ZEN-AN**
(1781-1849)

10. **YUNIWA NO HO,** *or sundry essays on the corn granary, the rice ration of samurais, the price and trade of rice &c.* About 1843 (Presumably)

By **UMETSUJI KISEI**
(1798-1861)

CONTENTS

of the twenty-first volume

1. **DENSO KŌ,** *or an enquiry into systems of land taxation* About 1825

By **KURIBARA SHINJU** (1794-1870)

2. **HEIRI SAKU,** *or a policy of peaceful administration with instructions for rural officials &c.*

By **NIWA TSUTOMU** (1773-1841)

3. **YABUREYA NO TSUZUKURI BANASHI,** *or a talk on amending a broken house, i.e. three essays on the economics, politics and cameralistics of Daimiate households.* 1843 or 4.

By **SHINGŪ RYŌTEI** (1787-1854)

4. **DENSEI SOGEN KŌ,** *or an investigation on the origin of the "Spring-field" system of China* 1838

By **HIYOSHI IZŌ** (Not ascertainable)

5. **KEICHI KAIGI,** *or comments on military dues and systems of land taxation.*

By **SHIMOZAKA I.** (Not ascertainable)

BIBLIOTHECA
JAPONICA
ŒCONOMIÆ POLITICÆ

VOL. XXI

TŌKIŌ
NIHON KEIZAI SŌSHO
KANKŌKWAI

1916.